
らき すた 我が家に大集合! ?

十波 悠真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

らき すた 我が家に大集合！？

【Nコード】

N9069D

【作者名】

十波 悠真

【あらすじ】

笑って泣いて悩んで、また笑う。そんな日々を、ありがとう……。

第1話 蒼色を彩る者（前書き）

めっちゃ文章下手で話もぐだぐだですけど、意外にもこの小説がきっかけで牛乳帝国さんや冬雪穂さんを始め、らき すたの小説を書く人が多いみたいです（汗）

自分の初長編なんで読んでください！

感想には「泣いた」や「感動した」といったものが多数なんだろうという感じの小説です！

最後までお付き合いよろしくお願いします！

ちなみに合計アクセス100万超えです！！

おめでとう！

それと！！

らき すただけでなく、けいおんやクラナドなど、多くの人気アニメが登場するダークファンタジー小説、？僕はここにいる もよろしくお願いします！！

第1話 蒼色を彩る者

陵桜学園。

それは俺が通っている至って普通の進学高校だ。

何故この学校を選んだのかは家から一番近い。ただそれだけだ。

両親はちよつと訳ありでこの家にはおらず、今は俺だけの一人暮らしとなっている。そんななか一年、二年と俺は普通に高校生活を過ごしてきた。

何もトラブルなく三年生になった俺は受験のことを考えないといけない時期までくる。

だが春が終わりを告げようとした五月に“あいつら”はやってきた……。

ツンツン、ツンツン。

休み時間、教室の机で幸せに寝ていると誰かが俺の頬つぺたをやたらとつつく。

「う……ん……。もう少し……寝かせろよぉ……」

俺は寝返り逆方向に顔を持っていく。

しかしまた俺の頬つぺたをさっきと同じようにつついてきた。

ぶにぶに、ぶにぶに。

「だからあ……あと少しだけえ………」

だがそんなか弱い抗議ではどうすることもできず俺の頬つぺたは猛襲を受けた。

ツンツンツンツンツンぶにぶにぶにぶにぶに

「ああもう！何なんだよさっきから！！」

「ヤッホー」

机から顔を上げると青髪のロングでアホ毛がピーンと立っている女子生徒が間近にいた。

俺はその人をジーツと見つめる。

「なに？」

「何で小学生がここにいるんだ？」

「うっ！」

女の子は傷ついた様子で胸をおさえる。

「もー。私はちゃんとした高校生だってばー」

「あー悪い悪い。寝ぼけててわかんなかった。んじゃものついでに……」

俺は女の子の脳天にに軽いチョップを与えた。

「ていつ」

「いてっ」

ちよつと可愛らしい声が出てビックリしたが俺はちゃんと女の子と向き直る。

「さっき俺をいじった罰だ。んで？ えーっと……誰だっけ？」

見たことはあるけど名前が思い出せない…。

「むう…。名前知らないなんて酷いよー。私は泉こなたっていうの。君って桃原椿君だよな？」

泉…？

ああ、泉さんか…。

確かにそんな奴が出席番号の前らへんにいたな。

つうか俺の名前知ってるのが意外だ…。

軽い口調で話しかけてくる泉さんはグイッと顔を近づける。

「な、なに！？」

「桃原君さー、私のこと覚えてる？」

「え、いや…、名前は今知ったところだし…」

それに喋ったのも初めてじゃないのか…？

「そうじゃなくて入学式の時だよ」

「入学式？」

入学式つてもう二年前じゃないか。

そんな日のことなんていちいち覚えていられる訳がない。

答えは当然ノーとなる。

「わりいな、一欠片も覚えてない」

「そっか、覚えてないか…」

なにやらしんみりとした空気になる。

少し言い方キツかったかな…。

「じゃあしょうがないね。なら思い出してもらったために今日から君の家に泊まるよ」

なるほど。

確かにそうしてくれるとありがたい。

俺も覚えていないとはいえ泉さんに言われてから妙にモヤモヤしてきたからな。

「ああわかった」

「それじゃあ詳しくはまた後でねー」

「了解…ってちよい待てー！！」

俺はそそくさに帰ろうとする泉さんを制止させる。

つか何をどうしたら泊まる話になるんだよ！

「え？ ああ、行く時間はさきに言わないとダメだったかー。ごめんごめん」

「ちっがーうー！」

「あ、違うの？」

「違うに決まってるだろ！」

何で時間のことが正解だと思ってるんだよ！

「じゃあなに？」

「どうして泉さんが俺の家に泊まりに来るんだよ！」

本文を聞いて泉さんは腕を組みながら言う。

「どうしてと言われたら、そこに君がいるからだよ」

俺はまた泉さんの頭にチョップを繰り返す。

「いてっ！」

「見た目は高校生じゃないけどもう高校生なんだからわけわかんないこと言うな！」

「今さりげなく酷いことを言った…」

「だいたいそんな家出みたいなことしたら泉さんとこの母親とかに叱られるぞ」

「……っ」

泉さんがビクツとなる。

あれ？ 俺変なこと言ったか？

「そう…だね。お母さんが“いたら”怒られちゃうよね…」

いたら？ なんか表現が変じゃないか？

「………泉さん？」

ほんわりした笑顔が消えて泉さんの様子がおかしいことが心に引っ掛かる。

「私のお母さんね……、小さいころに死んじゃったんだ…」

「え？ なに言ってるんだ？ そんな冗談が」

ポロ…ポロ…。

「っ!？」

な、何故泣く!？

そして何故クラスみんなは俺を睨む!？

あ、まさかこいつのお母さんって……。

「お前の母さん…その……本当にいないのか…？」

俺はおそろおそろ聞いてみる。

「(コクツ……)」

泉さんの顔が頷く。

そ、そうだったのか……。じゃあ俺は聞いちゃいけないことを口走ってしまった…。

「ご、ごめんな泉さん…。俺…」

「気にしないでいいよ。私まだ二歳だったから顔は全然覚えてないし…」

だが俺にとったら母親の顔を覚えてないなんてそんなの関係ない。

俺は最初に泉さんを信用していなかったんだ…。

「ホントにごめん…」

俺はもう一度謝る。

端から見たら相当情けない姿のことだろう。

ほら、向こうで男子が笑ってるのが丸見えだ。

後であいつらぶっ飛ばしてやる。

「大丈夫…。でもやっぱりお母さんの話はしたくないな……」

「………そうだよな…」

「だから泊めて」

「………」

おいさっきの涙はどうした。

「別にやらしいことするわけじゃないし」

なに明るげに話てんだよ。

しかもやらしいことって女の子がそんなこと公共の場で軽々と言っ

ていいのか？

「お前な、そんなギャルゲーみたいに強引に迫っても無駄だぞ」

「え？」

「ん？どうかしたか？」

「今ギャルゲーって言わなかった？」

「っ！！」

「しししまった…！！」

「つい口が滑っちまった…！！」

「そっかそっかあゝ 桃原君ってソツチの人だったかゝ」

「こ、こいつのこの目…！！」

「なにか狙ってやがる…！！」

「私が言いたいことわかるよねー」

「泊めろってか…？」

「なんと私を泊めてくれるとな…？」

「言ってない！ 今のはお前の気持ちを代弁しただけだ！ それに
嬉しそうに聞くなよ！」

机をバンツと叩く。

「もー、そんなにギャルゲー言われるのが嫌なの？」

「それもあるけど今は違う話だ！」

「照れるな照れるな」

「照れてない！」

休み時間がもうすぐ終わることなど全く忘れて俺たちは言い争う。

「まあ言われたくなかったら私を泊めて」

「こ、こいつ…。」

このアホ毛もおかしいが性格はさらにおかしいだろ…。

「完全な脅しになってるじゃねえか…」

「それに入学式の約束は守らないとモテないよー」

「だから約束ってなんなんだよ…。」

泉さんの顔をもう一度見ても記憶の欠片は出てこなかった…。

第2話 空色を謳う者

「はあ…」

昼休み開始直後、似合わないため息を教室の端で出す。
だが気持ちは分かるはずだ。

あの小悪魔的な青髪のせいで今日ほどダルい気分になったことはない。

俺はだらんと机にもたれる。

するとそれを心配に思ったのか、さっきの泉さんとは違う優しい声が俺に向けられた。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

「ん？」

桜色の柔らかな髪から甘い匂いが目の前にくる。

あ、この人って確かこのクラスの委員長やってる…。

「あー…」

「どうかしたんですか？」

名前忘れたなんて言うのは失礼だよな…。

なんだったけな！。

黒井先生が号令をこの人に頼むとき聞いたことあるんだけど思い出せない…。

俺は咄嗟に出てくる名前を言った。

「なんでもないよ、長野さん」

「高良です」

「……………」

「……………」

や、やつちまつたー！

しかも惜しいなんてレベルじゃない…！

一文字も合っていないかった…！

「ごめんなさい」

とりあえず頭を下げる。

「あ、別に怒ってませんよ？ まだ一ヶ月しか経ってませんし名前を忘れるくらいなら」

「そ、そっか…」

助かった…。

もし泉さんならただじゃ済まないからな…。

俺は落ち着いて椅子に座り直す。

「えーっと…、それでなんだったつけ？」

「大したことじゃないんですけどがなにやら大きなため息をしていらしたので悩み事でもあるのかと思ひまして…」

へー…、この人よく見てるなー。

さすがは委員長といったところか。

俺は暢気に感心する。

しかしここで泉さんのことを発言するのはよろしくないな。ちょうどこの状況にピッタリのネタもあるしそれを使うか。

「いや、悩みじゃないけど昼飯どうしようかなあと思って」

「忘れたんですか？」

「ああ。今朝ちよつと忙しくて」

よしよし、これならなんとか誤魔化せるな。

しかしそこに泉さんが自分の席から声を出して割って入る。

「あれ、桃原君弁当忘れたならこっちくるー？（別訳：今のうちにフラグを立てて置きたいからこっちくる？）」

泉さんの誘いがこっちに届く。

泉さんの横には柊つかささんもいた。

そこで疑問が一つ。

なんで俺は柊つかささんの名前は覚えてるんだろ？

まあ偶然だと思うけど…。

「いや遠慮しとく（このままあいつの近くにいたら危ないしな）」
だいたいなんであいつが俺に絡んでくるんだ。

俺は平和に過ごしたいつつうのに。

「あのねーみんなー。実は桃原君ってギヤ」

「あー！！わかったわかった！一緒に食うから！！」

「もし悩みがあるなら私に言ってください。力になれると思います
ので」

そう言って長野さん…じゃなかった、高良さんは用事のために教室
を出ていった。

うーん…、その力が今必要なだけだなー。

「はい、桃原君の弁当」

「……………」

なんで俺の分があるんだろう…。

ま、いっか。

ここまできたら食うしかないし。

俺は一口サイズの唐揚げをパクつといただく。

「…ん？」

「どうしたの？」

「いや…、意外にも美味しかったから…」

外はかりかり中はジューシー。そして文句のつけようのない味付け。
ヤ、ヤバイ…。唐揚げ一つで惚れちまう…。

「ま、私はいつも家で料理してるからこれくらいは当然だよ」

そうか、母親がいないから泉さん自分で料理作るようになったのか。

しかしなんか似合わない…。

「でも桃原君もよかったね。今日からこの唐揚げをいっぱい食べれるんだから」

「え？こなちゃんなんで？」

「それはねー、桃原君と私が」

「ちよつ泉さん！！！！」

俺は禁句を言おうとする泉さんの口を慌てて塞ぐ。

「もががっ！」

そして誰にも聞こえないように小声で注意した。

「言っちゃダメだろうが！下手したら退学だよ！？」

「うー、でもこの溢れる気持ちを言いたいー！」

溢れる気持ちつてガキかあんたは。

「何を言いたいって？」

後ろから知らない声がした。

俺は振り返るとつり目でツインテールの女の子が近寄ってきた。

「あ、かがみじゃん」

かがみ…？

この人の名前かがみさんっていうのか。

なんかとても綺麗な人だな…。

「あれ、こなた。こっちは人は知り合い？」

かがみさんは俺の方を見たあと泉さんに聞く。

「この人は桃原椿君。同じクラスの友達だよ」

「あ、あなたが桃原君か。私は柊かがみ。つかさの双子で姉よ」

「あ、どうも」

なんか俺のこと知ってる風な言い方だな…。

しかしつかささんの姉ってのは納得いくところといかないところがある。

髪の色は同じだけど妹のつかささんはほんわりしてるけど姉のかがみさんはしっかりしてる印象がある。

「あ、ちなみにかがみは私のだから手は出さないでね」

「はっ！？」

わ、私の！？

それってどういう意味なんだ！？

「ちよつこらこなた！誤解を招くようなことをいうな！！」

「かがみさん…そんな趣味が…」

「違うわよ！ あいつが勝手に言ってるだけ！」

「へ、へー…」

けど今を見る限りだいたいかがみさんがどんな人かはわかった。
外見は綺麗だけど中身はかなり恐いってとこだな…。

「それよりこなた、あんたに話があるの。ここじゃ言えないから
屋上に来て」

「あ、うん」

「ほら桃原君も」

「えっ？ 俺も？」

な、なんでだ？ 初対面なのに何を言われるんだ？
ちよつ、とりあえずカフェオレも持ってかないと。
そしてなぜかつかささんも付き添うことに。

屋上は太陽の日差しを浴びて白いコンクリートが綺麗に光っていた。
風も優しくて過ごしやすい。

だがかがみさんはそれを一発の原爆でぶち壊した。

「こなた、あんた今日から桃原君の家に泊まるんでしょ」

「ぶーっ！！」

いきなりバレたことに俺はカフェオレを誰にもいない場所で吐いて
しまう。

「げほつごほつ！ か、かがみさん、いったいどこでそれを…」

「こなたのお父さんよ。さっきこなたの携帯に電話したらこなたが家に置いてるせいで代わりにお父さんが出たの。」

そしたら“柊さんもこなたを止めてくれ”って言われて事情を詳しく聞かせてもらったわ」

そ、そんなところから…。

つつか泉さんは俺に泊まることを言う前に朝にお父さんに言ったのか…。

なんてやつだ…。

「へー、こなちゃん桃原君家に泊まるんだー。 楽しそう」

つかさが俺の気持ちを知らずに笑顔になる。

「なんならつかさもくる？ 私が許可出すよ」

「ちよつ！ 家主を無視して許可出すなよ！」

泉さんが勝手に話を進めようとするのを慌てて止める。

「えっ泊まっつていいの？」

「ダメだつて言っ」

俺が最後まで言いかけた時に泉さんが俺の耳元で呟く。

「ギャルゲー」

「……っ！！」

こ、こいつ…！

人の弱点を盾にしやがるか…！

だがここで逆らったらクールだった俺のイメージは崩れ去りムッツリオタクという最悪な噂が学校中に広まってしまっ…！

「桃原君、私も泊まっつていい？」

つかさが改めて聞いてくる。

「…… あ、ああ」

俺は極細の声で返事をした。

「えっ？なんて？」

泉さんがニヤニヤしながら聞き返す。

「~~~~っ！！ もうわかったよ！ 好きなだけ泊まれよ！」

第3話 紫色を咲かす者

「わーい 早速お父さんに連絡しようっと」

つかさは嬉しそうに携帯に番号を打つ。

「ちよっ、つかさ！ あんたまでなに言ってるのよ！」

かがみさんは妹の間違った行動を止める。

「お姉ちゃんどうかしたの？」

「どうかしたのじゃない！ 私たちはまだ高校生なのよ！？ だから節度ある生活を送らないといけないって決まってるの！」

「でも桃原君の家に泊まっても節度ある生活するから大丈夫だよ」

「いやそういう問題じゃなくて……！」

かがみさんは長く付き合っているからつかささんの性格が分かるので説得を続けた。

しかしつかささんは親の許可も得て結局俺の家に泊まることになりかがみさんの説得は無意味なものとなった。

「どうしょ……」

かがみは授業中つかさのことをずっと考えていた。いったいいつからあんな不良になったのかしら……。前は私の後ろばかりついてきたのに……。

なのに急に男の子の家に泊まるだなんて…。

「……………はあ」

かがみは誰にも気付かれないうちに下に向けてため息をつく。

「正直言つと私だって一回でいいから男子の部屋に泊まってみたいとは思わよ……」

今まで見たことない世界。そして多分そこであなたたちは楽しそうに過ごすんだろうな…。

私も行ってみたい…。

けどそんなの素直に言えるわけないじゃない……。

「どうしたらいいんだ…」

俺は人生の岐路に立たされた気分だった。

今までゆったりと過ごしてきて最高の高校生活だったのに…。

あの二人をなんとかして平和を取り戻さないと…。

よし、五時間目が終わったらキツパリと言うしかない。

授業には集中せずに時計ばかりを見ていた。

あと十秒…。

五秒…四…三…二…一…零！

チャイムが鳴ると同時に俺は泉さんのところに行きそして、

「泉さん、ちよつと話が」

「桃原君!!」

「ん？」

名前を呼ばれて振り返ると教室のドアが勢いよく開く。

そしてかがみさんがづかづかと入ってきた。

「か、かがみさん？」

「ちよつと来て！」

すごい形相で俺の手を掴む。

「えっ、ちよつ俺も泉さんに大事な話が…！」

「いいから来る！」

「は、はい…！」

俺は引つ張られる形で教室から離れた。

「私も桃原君の家に泊まるから」

「……………」

今日の俺の運勢ってなんだっけ？

たしか一位で今日も平和に過ごせるって言ってたよな？

なのになんでこんな非日常なことが起こるんだ？

「ちよつと聞いているの？」

「……聞きたくなかった」

なんで悩みの種が増えるんだ…。

だいたいかかがみさんさっきまでつかさを止めようとしてたじゃないか…。

「いい？ 私はつかさの保護者として行くんだからね。別に泊まりたいだなんて少しも思っていないんだから」

こ、この人ツンデレか…。

「じゃあそういうことだから」

「あ、まだOKしてな」

バタンツ。

かがみさんは最後まで聞かずに屋上から姿を消した…。

六時間目、かがみはスッキリした状態で授業を受ける。

「よし、やっと集中できる」

かがみはシャーペンをノートに走らす途中でピタリと止まる。

「男の子の部屋ってどんな感じなんだろう…」

やっぱり散らかってたりするのかしら…。

見たことないからわからないわね…。

けど小説とかだったらベッドの下にはお約束の………ってなに考えてんのよ私ったら…！

かがみは一度、心を落ち着かせるためにため息をつく。

「はあ…」

でも不思議…。

男の子の家に泊まるだけでこんなにドキドキするなんて……。

別に桃原君のこと何にも思っていないのにな…。

顔も性格も一般的なのに…。

「ア……」

なんで俺はこんな目にあってるんだ…。

さっきまで希望が目の前にあったのに思わぬ裏切りによって跡形も

なく破壊されてしまったし…。

俺は元凶である泉さんをチラッと見る。

「〜」

なんかやけに上機嫌だな…。

すると泉さんは此方の視線に気づいて一つのメモを先生に気づかれないように俺に投げ渡す。

君もゲームやりたい？

「ゲ、ゲーム？」

まさかあいつ授業中にしてるのか…。

だからあんな機嫌がよかったのかよ。

けどあいつがするゲームってどんなに興味あるな。俺はノート
の端を破りメッセージを書きこんで泉さんに投げる。

やる

ただそれだけだったけど十分だろ。

泉さんは持っていたゲームを後ろの人に渡して俺にたどり着くよう
にお願いする。

後ろの席の人は了承して次々に回っていった。

「ほれ桃原」

横の席まできたゲームを受け取る。

俺はスイッチを入れて画面に注目した。

“ ようこそ！萌える学園祭に！”

「ぶーっ！？」

俺は思わず吹いてしまった。

「ん？桃原どうかしたか？」

数学の先生が声をかける。

「あ、いや、なんか風邪気味で頭がおかしくなっちゃって…」

「そうか。しんどかったら無理せずに保健室に行けよな」

「は、はい」

先生は黒板に向き直り式を書いていき生徒に説明をする。
しかし危なかった…。

見つかったら没収だからな…。

俺はまた画面を見てスタートを押す。

タイトルでどんなゲームかはわかった。

そして泉さんがどういう人間かも確信が持てた。

俺は適当にボタンを押すと選択肢が出てきた。

『巫女』 『幼なじみ』 『妹』 『姉』 『ツンデレ』 『体操服』 『猫耳』

『ドS』 『ドM』 『スク水』 『妻』 『眼鏡っ子』 『ドジッ子』

『ナース』 『ランダム』

種類は豊富だった。

こん中から決めるのか。

まあ選ぶとしたら無難にも『体操服』かな。

俺は ボタンを押して次々と先を進める。

女の子が現れて話をしていくのだが…、

「~~~~っ!？」

進むにつれて主人公と俺が選んだ体操服の子はどんどん口では言えないことをしだした。

俺はいきなりすることにバランスを崩して尻餅をつく。

「どうした桃原？ やっぱ風邪がキツいか？」

「はい…。 もういろんな意味で……」

第4話 策士

ピンポン。

家のインターホンがなって俺は玄関を開ける。

「桃原くん」

「きちまったか…」

着替えなどを取りに一度家に帰っていった泉さんたちが俺の家の前に集まっていた。

「おっす」

「こんにちはー」

かがみさんとかさは大きい荷物を持って挨拶をする。

「みんな制服のままで来たんだな」

「まあ着替えるのしんどいからねー。とりあえず中に入りたいな」

泉さんは急かすように言う。

「ああそうだな」

ドアを開けっ放しの状態にして三人を一先ずリビングへ案内する。

「へー、やっぱ広いわねー」

かがみさんはリビングを見渡して確認する。

「ねえねえ、桃原君！ 君の部屋ってどこ！」

泉さんは荷物を置いたらすぐに俺の部屋の入室許可をもらおうとする。

「教えない」

「「えーっ!？」」

泉さんとかさの声が綺麗にハモった。

「言ったら漁るだろ。だから」

「あのねー、実は桃原君ってかなりマニアックなオタ」

「二階上がって右に行ったら俺の部屋です!!」

俺は即答で答える

。

それは泉さんの声を打ち消すために出されたものだった。

「よし、じゃあつかさ一緒に行くー」

「あ、うん」

泉さんとかさははしゃいで階段を上がっていく。

俺の部屋のドアが開くと同時になぜか二人の歓喜の音がした。

そして足音は小さくなっていく。

「はあ……」

「どうかした？」

落胆した俺を覗いたかがみさんは心配の意思を示した。

「いや、べつに何も……」

「ふーん、そうなんだ。でも私から見たらなんか弱みでも握られてるように見えるんだけど」

「うっ……」

す、鋭い……

さすがかがみさんだ……

「ま、私には関係ないことだから聞かないであげる」

かがみさんは話を止めてリビングの全体を見回っていく。

けっこう気が利く人なんだな……

けどどうしょ……

泉さんのせいで俺の生活リズムが……

「……あれ？」

ってか何でこんな小さい奴にビクビクしてんだ俺は……?

よく考えたら別に知られても問題ないじゃないか。

かがみさんやつかさだっていい人だからきつとわかってくれるにちがいないかも。

「このテレビ大きくていいなー」

かがみさんはプラズマテレビをうらやましいそうに見ている

邪魔な泉さんは上にいるし、今しかチャンスはない。　思いきって
言ってみよう。

「あの、かがみさ　」

「そういえばさ」

かがみさんは俺の言葉に重ねて言う。

俺はとりあえずレディーファーストってことでかがみさんの話を優先させる。

「なに？」

「つかさはないとしてこなたなんだけど、桃原君の部屋いろいろ漁りまくってんじゃない？」

「あー…まあいいや」

泉さんに今さらなに見られてもしょうがないしな…。

でもできれば引き出しが二重板になってるのには気付いてほしくない…。

「もしかして見られて困るような物ないの？　男の子なのに？」

「いや、一応あるにはあるけど泉さんに発掘されてもいいかなーなんて…」

俺は適当に諦めながら言う。

「まあ恥ずかしいことじゃないしね。　男子は殆んど持ってるらしいし、あいつも変なゲームとか持ってるしね」

お、なんかいい感じに話が進んでないかつ！？

今ならオタク系とか萌え系にもかなり手を出してるとか言っても大丈夫だよなっ！？

「でもこなたみたいなオタク系は私ちよつとイタイわよねー」
ぐふうつ！！

なにか強烈なパンチが腹にきたような感覚が突然くる。

だ、だめだ…。

かがみさんが知ったら確実に引かれる…。

時期がくるまでかがみさんには知らせるわけにはいかない…。

「しかし……、ずいぶん長いこと俺の部屋にいるな……」
かれこれ一時間……。

二階からの物音は全くなく、不自然なくらいに静まり返っていた。
「それもそうね」

「ちよつと様子見てくるよ」

かがみさんを残して俺はリビングを出た。
ひんやりした廊下を歩いていき階段をゆっくり上がる。

ドアの前まで辿り着いたがいまだに無音だった。

「……？」

？

俺は不思議に感じながらもドアを開いた。

すると二人はすやすやと幸せそうな顔で寝ていた。

「はあ……。 何で人ん家来て寝れるんだよ……。 しかも俺のベッドで……」

図太い神経に驚かされた俺は呆れながらも泉さんとかささんの体を揺する。

「おい二人とも、なにやっ
」
言葉を失った。

なぜなら泉さんが俺の揺すりに反応して寝返りをしたら、履いてるスカートがヒラリとなって少しだけ泉さんの……ってこれ以上言えないよ！

心が興奮して熱くなる。

ヤ、ヤバイ……、鼻血出るかも……。

いや落ち着け自分。

落ち着けば大丈夫だ……。

あ、そういや泉さんって白か……じゃなくて！

「ふうー……」

大きな深呼吸を天井に向けて平常心を取り戻す。

そして俺はまたぐっすり寝ている二人を睨む。

「よし、いざ勝負」

何と勝負かは謎めいてるが、ぬっと手を伸ばして再び肩に触れようとする。

だが今度はつかさが動いた。

「う……んん……」

プニユツ

「~~~~っ!？」

バツと手を離す。

その反動で俺はドタドタと大きな音を立てながら後ろに下がった。

む、胸だよな……!？」

今の胸だよな!？」

小さかったけど完全に胸だよな!？」

騒音に気づいた泉さんとかささんがようやく目を覚ます。

「ふあ……、ありゃ……私ら眠ってたんだね……」

「ホントだ……ってあれ？ 桃原君いたんだ」

つかさはやはり知らないみたいだ。

「あ、ああ……、ついさっきな」

「なんか慌ててる？」

「い、いや、そそそれより部屋割りとか決めたいから下に来てくれ」

「動揺バレバレ。まあいいや」

俺の後に続いて泉さんとかささんが短い廊下を歩く。その時泉さんが小声で話しかけてきた。

「見事だったよ、二重板」

こ、こいつ探し当ててたのか…！

「そしてつかさの胸」

「ぶーっ!？」

そ、そんなとこまで見てたのか!？

じゃあこいつスカートもわざと…！

「まだまだ青いね」

「……………」

今、実感した。

一番恐ろしいのはこいつだと。

一騒ぎ終えたところで俺たちは部屋割りを決める。

「じゃあつかささんと泉さんは俺の部屋の隣でいい？」

「私はいいよー」

「それじゃあお姉ちゃんは？」

つかさは一人残っているかがみさんの行方を聞く。

「はっ！ まさか桃原君、かがみんと二人で…！」

「そんなわけないじゃない！」

「なんだ、違うのか」

俺は面白半分で言ってみる。

「桃原君、冗談は過ぎないようにね」

かがみさんが凄い形相でこっちを見る。

な、なんか軽い発言は殺人事件をおこしそつだな…。
たぶん俺が被害者となるだろう…。

「じ、冗談はさておきかがみさんは二階のもうひとつの部屋にしてみようよ。」

さすがに三人はキツいと思うし」

「よし、それじゃまず自分達の部屋に荷物置いてきましょ。それに制服のままじゃアレだし着替えもしないと」

「じゃあ俺はお茶でも淹れとくよ」

かがみさん達は楽しそうに二階に上がる。

そしてリビングで一人になったのを利用してため息を出す。

いろいろと苦労する分、今のうちにため息とかないとな…。

しかし、かがみさんと泉さんってどっかで会ったような気が……。思い過ごしか…？

「お待たせー」

三人が一斉に着替えを終える。

かがみさんもつかさんも一般的な動きやすい服だ。だが一人だけなんか違うのが気になる…。

「なぜ泉さんだけ体操服なんだ…？」

「えっ？だつて桃原君、体操服姿に萌えでしょ？」

「何を根拠にそんな…」

「ゲーム貸した時に体操服の女の子選んだじゃん」
「……………」

ししまった…！

あるときスイッチいれたまま渡したんだ…！

泉さんはからかうようにニヤニヤしながら顔を覗いてくる。

「ねえねえ、今の私萌える？」

キュンッ……。

いやいやキュンッてなんだよ！ 何であんなちびっこにときめいてんだ俺は！

「と、とにかくまともな服に着替えろ！」

俺は赤くなつた頬を隠すために怒鳴る。

「もーしょうがないな」

泉さんは勝つたような気分であた二階に上がった。

あいつといるとほんと疲れる…。

一瞬あんな姿にときめいてしまった俺も情けないな…。

それに無色だったこの家がいつの間にか蒼、空、紫の色が鮮やかに彩られた気がする……。

第5話 オーバー

「桃原君、できたわよー」

お笑いテレビを見ているとかがみさんは夕食ができたことを伝えにくる。

テーブルには四人分のカレーが置いてあった。

「今日はカレーか」

「うん、お姉ちゃんが作ったんだけど桃原君カレー大丈夫？」

「ああ、カレーは好きだよ」

「よかったあ。お姉ちゃん張り切ってたもんねー」

「ちよつつかさ！ 余計なこと言わない！」

「素直じゃないかがみ萌え」

「う、うるさい！ い、いいから早く食べるわよ！」

かがみさんはさつと席に着く。

俺たちも笑いながらそれぞれの場所に座った。

「それじゃいただきますーす」

みんなで手を合わせて号令をかける。

まずは一口サイズのジャガイモからパクツといった。

「ど、どう？」

「うん、美味しいよ。さすがかがみさんだね」

「べ、別に私一人で作ったわけじゃないわよ。」

いろいろアドバイスくれたから……」

「……………」

かがみさんってツンデレの鏡だな…。

でもそれを言ったら怒られそうだからあえて黙っておこう。

それからパクパクと食べ進めてあっという間にみんな完食した。お腹いっぱいになってちよつと休憩しているとこなたが、

「お風呂入ろ」

と、誰に言ってるか分からないことを言い出す。

ま、俺じゃないことはたしかだが。

「あ、桃原君、先入る？」

「いや、俺は後でいいや。だから先に入っちゃっていいよ」
するとかかがみさんは反論するかのように別の提案を出す。

「桃原君はできれば最初に入ってほしいな」

「え？　なんで？」

俺は疑問をかがみさんに聞く。

「だ、だって私たちが入ったお風呂に桃原君が入るのって恥ずかしいんだもん…」

「……………」

そ、そんな顔を赤くされるとこっちまで赤くなっちまうよ…。

「じ、じゃあそついうことならお言葉に甘えて」

俺は着替えを持って風呂場に向かう。

しかし後ろから忠告が。

「桃原君、風呂からあがるとき絶対汚れはとってよね」

「ハイハイ…」

なんか女の子ってよく分かんないな…。

午後十一時、風呂を終えた俺たちは俺の部屋で大人気のモンスターを狩るPSPゲームをしていた。
どこから持ってきたのか、泉さんは三つ持っていて、俺のを合わせて四つ、数はちょうどよかった。
かがみさんとつかさんは初心者のため、まずは火竜と雌火竜を狩りに行った。

「ぐはっ！ この火竜バカでかいからやりづらい！ 泉さんシビレ罨を！」

「いやー、実はここまで苦戦するとは思わなくて持ってきてないんだよね」

「ギャオオオツ！」

「うわあああんっ！」

「ああっ！ いつの間にかつかさが雌火竜に追われてる！」

「かがみさん閃光玉を使って！」

「わかったわ！ くらいなさい！ …… って間違えて捕獲玉投げちゃった」

「うおっ！ こっちは突撃まともにくらっちまって死んじしまった！」

「かがみ！ つかさを助けてて！ 桃原君が復活するまで私は火竜を相手にしてるから！」

「つかさ！ こっちに逃げて！」

「お姉ちゃんっ！」

「あ、二人ともそっちはダメ！」

「ギャオオツ！！」

「あ、危ない！！ 二人とも囲まれた！！」

「「きゃああああっ!!」」

「あー、負けちゃったねー」

画面にはクエスト失敗と表示されていた。

だがこなたはあまり悔しくなさそうだった。

まあ俺も楽しめたから悔しくはなかった。

「こなちゃん、ごめん…。私やられちゃった」

「別にいいよー。けっこう面白かったしね」

「しかし泉さん強いな。装備見てビックリしたよ」

普通じゃ手に入りにくい武器や防具が万全に揃っており金やクエストにいった数も異常だった。

それは壊れているんじゃないかと思うくらいだ。

まあゲーム好きらしいから本人はそれが普通だと思ってるらしいが…。

「ふああ…私そろそろ眠くなってきた…」
つかさが細い目をこする。

「そうね、もう遅いから寝ましょ」

「…………ふむ。こついつのを見るとみんながどんな生活してるかわかりやすいな。」

泉さんはやっぱり深夜に慣れてるみたいだから平気にいるけど、かがみさんやつかささんは少し目が重そうだ。

いつも規則正しくしてるってことだ。

俺はというと眠いはずがない。

深夜アニメは生で見てるからな。

「それじゃ部屋に行こっかな」

泉さんはスクツと立ち上がる。

「じゃあおやすみ桃原君ー」

「おやすみなさあい…」

「おやすみ」

「三人ともおやすみー」

三人は遅い足取りで部屋から退出する。

今日はなんか疲れたなあ…。

早速深夜アニメ鑑賞のために一階へ行くか。

俺の部屋にもテレビはあるけど、やっぱり見るなら大画面の方がいい。

「……………あ」

俺は静まりかえった部屋でふと思った。

「かがみさんたちがいたら堂々と深夜アニメ見れないじゃん…」

「起床ー、朝だぞー」

かがみさんの声が家中に散乱する。

だがそれには応じず俺は布団の中で幸せの一時を味わう。

「桃原君もおきろー」

「……………ん……………あと五分だけえ…」

「つかさみたいなこと言わない。ほらこなたが作った朝食が冷めちゃうじゃない」

かがみさんはゆさゆさと俺の体を動かす。

それを起こる気分をなくしていることに気づいてくれない…。

「わかった…起きるからそれは止めてくれ…」
布団から離れてパジャマから制服に着替える。
かがみさんは先に下に行ったようだ。

待たせるのも悪いので早めに事を終わらせて部屋のドアを開ける。
すると階段にはなぜかつかさか眠っていた。

「すー…すー…」

小さな寝息が僅かだが聞こえてくる。

いったいどうやったらこんなところで寝れんだよ…。

「つかささん、起きろ」

「…あと五分だけ…、ホントに…」

「……………」

ダメだ、完全に寝ぼけてる。

これはなんとかしないと…。

「つかささん、こんなところで寝たら危な」

ガシッ。

「温かい…」

がっしりと俺から離れないように抱きついてきた。

「なっ!?!」

じたばたと抵抗するが更につかさの力が強くなる。

「むにやむにや……、お日様逃げないで……」

どんな物体と間違えてんだよ!

つかこんな状況誰かに見られたら命が危ない!

「桃原君、早くし」

かがみさんが階段を覗いて俺たちを凝視した。

「……あ、あの…かがみさん…? こ、これは違っ」

ビタンビタンッ!!

問答無用に二発。

腫れた顔は一生トラウマになりそうなくらい痛かった……。

「ご、ごめんね桃原君、私てつきり桃原君が変態になったかと……」
へ、変態っ！？

「桃原君も災難だったね！。ぷぷっ」

「私は寝てたからよく分かんなかったよ」

「あとでじっくり教えてあげてね桃原君」

「とりあえずこの話題止めようよ……」

第6話 桜色を奏でる者

昼休み、泉さんとつかささん、かがみさん達と学食を一緒に一緒にさせてもらっていたのだが…。

「お姉ちゃん」

「……どうも」

桃色の髪を二つのリボンで結んだ小さい女の子と、緑髪のショートヘアでカッコイイ感じを漂わせる背の高い女の子が挨拶してきた。

「おお、ゆうちゃん達も学食？」

「うん、今日は少し寝坊しちゃってパン買い忘れたんだ」
「てへへ」と柔らかい笑顔を見せる。……この子可愛いな。

「……私も」

……お、この子はクールな雰囲気だな。

「ところでお姉ちゃん、この人は？」

「私達のクラスメートの桃原椿君だよ」

泉さんが軽く紹介すると

女の子二人はこっちを向く。

「小早川ゆたかです。こんななりですがよろしくお願いします！」

「…岩崎みなみです、…よろしくお願いします…」
「ぺこりとお辞儀する。」

「改めまして桃原椿です。よろしくお願いします…」
「…あれ？なんかつられて俺まで敬語になっちゃってる気が…」
「まあいっか。」

それにしてもこの二人は見れば見るほど対象的なあ。

「ねえ、小早川さん」

「はい、なんですか？」

「どういうきっかけで岩崎さんと仲良くなったの？」すると照れながら過去の出会いを話す。

「実は、受験の日にみなみちゃんがハンカチを貸してくれたんです。それで少し知り合いになって。」

そしたら同じクラスで話していくうちに仲良くなったんですよ。でもみなみちゃんホントはいい人なのに、クラスの人はそれにあんまり気付いてないみたいで……」

小早川さんが少し俯く。

「……大丈夫だよ、ゆたか。ゆたかが私のことを大切に思ってくれてるだけで十分だから……」

「みなみちゃん……」

「ゆたか……」

……なんか、あの二人の周りに花が咲いているように見えるのは気のせいだろうか……？

「ねえ、泉さん」

「なにー？」

「あの二人……」

「あー、気にしない気にしない」

……気になる。

「あつ、そういえばお姉ちゃんって今桃原君の家に泊まってるの？」

「ゆ、ゆたかちゃん、どこでそれを！？」

かがみさんが身を乗り出す。俺を含め泉さん達も、そして岩崎も驚いた。

「えっ？だって私とお姉ちゃん一緒に住んでた時、お姉ちゃん自分から言ってたけど……」

「こゝなゝたゝ！……！」

かがみさんは牙を泉さんに向ける。

「いや、秘密事は良くないって漫画で影響を……」

言い訳をする泉さんにつかさんと岩崎さんが乱入してくる。

「わかるなあそれ。私も漫画に影響受けて、ツイストサーブとか三刀流とか練習したことあるもん」

「…実は私も」

……………実は俺も。

そんな甘い足跡を一瞬でぶち壊す。

「そういう問題じゃないでしょ！全くあんだ達は〜！」

「…でもお姉ちゃんも手を合わせて錬金術〜ってやってた気が…」

「こ、こらつかさ〜！」

つかさんが思わぬ伏兵を連れ出して来て、かがみさんの顔を真っ赤にする。

……………しかし、

ツイストサーブとかなら

わかるけど錬金術って…。つかさんより現実から離れてるよな。

「へ〜、かがみも子供っぽいところあるんだね〜」当たり前のように泉さんがからかう。

「う、うるさい！！今はそんなことはどうでもいいから！

で、ゆたかちゃん、それがどうかしたの？」

ニッコリと作り笑顔で話題を無理矢理原点にもどす。

「あ、はい。実はお姉ちゃんがいなくなっただけで家事やらなんやらで忙しくて。それで大変で…」

「ジーーーーッ……………」

全員が泉さんを白い目で見る。

「えっ、なにその私のせいでゆたちゃんが苦労しているっていう目は」

「まんまあんたのせいだろうが」

一足先にかがみさんがツツコむ。

「い、いやさ、それもゆうちゃんが成長するために…」

「…それでゆたか、一時間目から元気がなかったんだね…」

岩崎さんが小早川さんを優しさに包む。

この二人はホントに仲いいなあ。

これが自然体の二人に俺は少々感動した。

「…むう、これじゃ私が悪者みたいじゃん」

「みたいじゃない！悪者なの！ゆたかちゃんにまで迷惑かけて！あんたはもう帰りなさい。これ以上ゆたかちゃんに心配かけないためにも…」

「いえ、違っんです！」

説得しようするかがみさんを、何故か小早川さんが止める。

「どういうこと？小早川さん」

俺はその行動の意図が読めず、真意を小早川さんに聞く。

「お姉ちゃんに戻ってきてほしいんじゃないかって…」

さっきまでの空気とは

がらんと変わった。

そして次の言葉に

全員が耳を疑う。

「私が桃原君の家に泊まります！」

……………。

「……ええええええええええっ！？」「」「」

今なんて言った！？

泊まる！？

いつ！？

誰が！？

何故！？

混乱する頭を処理しようとするが、完全にパニックに陥って理解不能の状態に。

「…ゆたか、それは…」

「そうよ、ゆたかちゃん」岩崎さんとかがみさんが止めにかかるが、
「大丈夫だよ、みなみちゃん。お姉ちゃんもいるし、家族からも許可は出てるし。それにみんなと早く仲良くなりたいんだ」

笑顔で岩崎さんと向き合う。

「……」

岩崎さんは何も言わず俯いた。それを見たかがみさんも黙って引く。「でも、ゆたかちゃんって体弱いんでしょ？」

風邪とか引いちゃったらどうするのぉ？」つかさんが盲点をつく。

「あー、そっか。ゆうちゃんそれがあつたかー」

泉さんが残念そうに腕を組む。

そうなのか…。小早川さんって病弱だったんだ…。

確かに端から見ると、か弱い感じが…。じゃない！

何を観察しているんだ俺は！！

それより今は小早川さんを何とかしないと！

これ以上増えたら俺の夢の高校生活が！

俺は岩崎さんに近づき助けを求める。

「岩崎さん、何とか止めてよ。このままじゃ小早川さんが…」

しかし、岩崎さんは俯いたままだ。

「岩崎…さん？」

もう一度声をかけると、何かを決心したのか、小早川さんに想いを伝える。

「…大丈夫、私も一緒に桃原君家に泊まるから。…風邪を引いても私がゆたかを護るから」

「い、岩崎さん！？」

「あ、それいいね、それならゆうちゃんも楽しく生活できるし」
いや泉さん止めてよ。

「うん、そうしよそうしよお」

「確かにそれならゆたかちゃんが風邪を引いても大丈夫ね」

「ーいや、ちよっと待ってよ、その姉妹…」

みんなを止める気持ちは

ありありなんだが、

この状況で泊まっちゃ駄目って言ったら、

俺は世界の敵となるような気が……。

「…よろしくお願いします」

一年二人が頭を下げ、

「「「いいよね？桃原君」「」」

同級生が脅しをかけるように声を揃える。
こうなったら出る言葉は一つ。

「いらっしやいませえ……」

、

第7話 緑色を降らす者

「断る」の選択肢すら表れなかった昼休みのせいで、五時間目が終わり休み時間、俺はブルーな気持ちに突入していた。

「どうしたの？ 桃原君」

泉さんがニヤニヤしながら様子を見てくる。

…絶対わざと聞いているな。それは確信に近かった。

「どうしたのじゃないよ。また悩みの種を埋めて…」

俺は疲れたように言っていると、泉さんは

「いいじゃんべつに

キャラ不足で困ってたしねー。妹に無口キャラ、色鮮やかですな。」

桃原君が羨ましい！」

そう言って泉さんは

自分の席に撤収。

ー見てる側は楽しいかも知れないけど、こっちは半端なくハラハラする。

なぜなら、前にも言ったように女子高生とお泊りしているのが先生達にバレたら、最悪退学になるか、街から追い出されるか…。

ホント勘弁してくれよ…。六時間目、現実を考えたくないため深い眠りについた。

「ねえ聞いた？桃原ってやつがこの学校の女子を家に連れ込んだって」

……えっ？

「マジー！？こりゃ退学じゃね？」

「まあしょうがないんじゃない？あいつが全部悪いんだし、自業自得だよ」

……おい、何だよこの声。

「早いとこ先生に伝えようぜー」

「そうだな。放送部にも全員に連絡するよう言っとこうぜ」

……ちよつと誰か止めるよ！

「全ては気付かなかった私の責任です」

「校長、まだ手はあります。あの者を退学にし、街から追放すれば大丈夫です」……嘘だろっ！？

「ホント私達も無駄な被害受けたねー」

「こなちゃんが一番一緒に長くいたからねえ」

……泉さん！？つかさん！？

「あんな奴もう二度と思い出したくないわね。」

……かがみさん！？

「あの人がいたせいで気分悪くなっちゃった」

「……大丈夫？ゆたか。」

……けど元凶はもういないから安心して」

……小早川さん！？岩崎さん！？

「桃原がいなくなつた記念に全員で乾杯しようぜ！」

……お前誰だっけ？……確か白石だったっけ？

「ほなそうしよかー！」

「……おおー！」「……」

……黒井先生、みんな……！待ってよ！ねえみんな……！待っ……！……。

ガバツ！

勢いよく顔を上げる。

そこにはさつきとは違う光景、授業中だった。

手を見るとかなり汗をかいていた。

額にも溜まり、体中熱く感じる。

…夢、か。我ながらベタな夢を見てしまった。

時間を見ると授業はもうすぐ終わりに近づいていた。あんまり寝てないのにこの汗、異常だな…。

とりあえず汗を拭きノートを開こうとすると、視界の端につかささんが映った。……よかった。いつも通りノートに可愛い犬を書いて黒井先生に怒られる姿。

そして仲間がやられた様を見て泉さんがゲームを隠す。

なんかホツとした。

みんなが消えていく不安の感覚が少しずつ和らいでいく……。

放課後、泉さんは荷物を取りに行く小早川さん達についていき、帰りはかがみさんとつかささんと一緒に帰った。

いろいろと話し、ゆっくり帰ったため遅めに家に着く。

「あつ、そういうえば食材が六人分なかったわね」

かがみさんが晩御飯の量を思い出す。

「じゃあ私買ってくるよお」

つかささんが買い出しに行こうとする。

「俺も行くよ」

「え、でも……」

「いいからいいから、荷物持ちが必要だろ？」

「……うん、じゃあお願い」

「かがみさん、留守番頼むね」

「わかったわ。こなた達にも伝えておくから。」

つかさ、迷惑かけないでよね」

「わかってるよお」

俺はかがみさんに家を任せ、つかささんと近くのスーパーに出掛けた。

「……とは言ったものの何を作るかによって材料は変わるよな……」

俺達はスーパーに並ぶ肉類の前で気付いた。

「そだね……」

二人して沈黙……。

しばらくして、つかさんは

「前はお姉ちゃんが作ったから今度は私が作るよ」と言い出す。

別に俺はいいんだけどなあ……。

「つかさんって料理得意なの？」

さすがに『できるの?』とは聞けなかった。

「そんな期待するほどじゃないよお。だってたまにお弁当とか作るくらいだも〜ん」

ちよつと顔を赤らめながら笑みをこぼす。

まあお弁当を作れるなら安心だな。

俺達はスーパーの中を回っていく。

「肉つじやが 肉つじやが〜」

つかさんは肉やらじゃがいもやらをかごに入れていく。
これはまさか……。

「つかささん、もしかして肉じゃが作るつもりなの？」

「正解！よくわかったねえ！」

…いや、あんだだけ呟いてたら誰でもわかつちゃうよ、とは言わないでおこう。

でも肉じゃがとは久しぶりだな。両親が海外に出てからずっと食べ
てなかったからなあ…。

少し辺りを回ってからレジに行く。

会計を済ませるため

つかささんがかがみさんから預かったお金を出そうとする。

なんか平和だなあ…と

和んでいたその時！！

ここで一般のドジッ娘を超越するつかささんのドジッぷりが爆裂する。

「……あれっ？お金が……出な……い。ちよっ……何かに引つ掛

かって……あつ、すいません、もうすぐでますから！……んしょ、ん

……やっとお札でた。次は五十六円……あれー？五十円がないよ

お……！十円玉……は……四枚しかない……！五円玉は……

お姉ちゃんと全部キーホルダーにして家に置いてたんだっ！……

なら一円玉一円玉……よいしょ……あつ、落ちた……！も……

……あう！？い、痛い……頭打ったあ……。あれ？さっきまであつ

た十円玉がないよ……！こうなったらもう一枚千円札を……はい

っ。……あつ、お釣りどうも……おつとつと……あつすみませんす

みません！靴を踏んじやつてすみません！

……ふう、さつさと袋につと……よいしょって……あ……

っ！袋に穴があ……」

……並じゃ真似出来ないイベントだな……

俺は華麗なダンスにいついつい見とれて何もできなかった。

騒ぎが過ぎ去り荷物を持ち、二人で家まで帰る。だが入る前に平生とは違うなにかを感じた。

ゆつくりドアを開きそこに待っていたのは……。

「お帰りなさい」

「……どうも」

小早川さんと岩崎さん。

もう来ていたのか。

俺はさっきの違和感に気がついた。

桜色と緑色が家に塗られていたことに………

つかさんとアシスタントをするかがみさんが料理を始める頃、俺はリビングで泉さんと格ゲーをすることに。

ソフトは結構前に買ったPS2のロボットアクション。

「へー、岩崎さんって高良さんの家の近くなんだ……くのっ!」

「……はい」

泉さんの横で見ている岩崎さんにゲームをしながら、ちよくちよく質問をした。

「そんなことより桃原君弱いね」ホレホレ、かかってきなさい」

……いわれなくてもっ!

勢いよく突撃しブンツとサーベルを振り下ろす。だがその一閃は空を斬り、敵機は回り込みこっちがズタズタにされる。

「あーっ!!」

こっちの機体がやられ、爆発する。

……おのれ。だがまだだ!

このゲームは機体がやられたら負けでなく、

千ポイントチームにあり、機体が壊れたらポイントが減るだけだった復活する。

空から舞い降りた機体を駆り、再度あの八つの翼を優雅に広げる機体に向かっていく。

『それでも、守りたい世界があるんだー!!』

……ま、まさか！

泉さんの使うキャラクターが台詞を言った後、自由の名を持つ機体が蒼く輝く。

……SEEDファクター解除しやがった!!

ただでさえ勝てないのに、さらにパワーアップをされたら勝てる確率は零に等しい。

ここは俺の仲間!!

『うわああああっ!!』

仲間瞬殺…。

蒼白い機体がこっちに来る!

「くそくそ!!こうなりやケクソだー!!」

意を決して迎え撃つその時!!

ピカーンッ!

くくくっ!!きたーっ!!

「なぬっ!?!」

こつちもSEEDファクターを解除し、泉さんが僅かに怯む。

『あんだなんかにー!!』

俺が使うキャラが台詞を決め、運命の名を持つ機体で一気に攻め掛かる!

勝った!

そう思った瞬間!

『止めるんだ、シン!!』

横から正義の名を持つ機体が俺を切り刻む。

「しまった!」

急いで泉さんを討とうとしたが手遅れ。

攻撃は回避されビームでドカーンッ……。

結果、完敗だった。

泉さんを倒すどころか一発しかダメージを与えられなかった。

「まだまだだね」

見下す泉さん。

……むかつく！

「もう一回！最後の勝負だ！」

「いいよ。あつ、みなみちゃんやってみない？」

代行として岩崎さんを繰り出そうとする。

「わ、私は……」

引き下がる岩崎さんに泉さんはいいからいいからと、コントローラを渡す。

「桃原君もみなみちゃんでもいいよね？」

「俺としては大歓迎だよ」だが、この台詞が大きな傷に繋がる……。岩崎さんにやり方を教えた後、泉さんが岩崎さんの耳元でなにかをアドバイスをする。

そして二分後……

「初心者に完敗……？」

何故だ……。

目の前の現実には平伏す俺。

すると泉さんが

こつちを見ながらニヤリと微笑む。

一瞬寒気立ち、やはりゲームの神には勝てないと悟った……。

✓

第8話 罌

俺の心に深い傷が刻まれた後、夕飯ができたとかがみさんから報告がきてゲームを止める。

かなり腹が減り、急いで椅子に座って料理を食べたいところだが…。

「桃原君…きつい…」

「そうだね…」

さすがに六人となればテーブルの一人一人の範囲はかなり限られてしまう。

椅子の間も全くといっていいほど存在しなかった。

「んー、じゃあ二階から折りたたみ式のテーブル持ってくるよ」

「じゃあ私も行く」…私も」

かがみさんと岩崎さんが協力をよこす。

断るのも悪い気がして、俺達三人でテーブルを降ろす。

だがそのテーブルは相当軽く、俺だけが持ち岩崎さんとかがみさんは何もできずに気まずい空気を運んだ……。

「というわけでいただきます！」

「……いただきます」「……」

泉さんの号令に続く。

席はくじ引きで決まった。テーブルに泉さん、つかささん、小早川さんが座り、リビングのテーブルには俺、かがみさん、岩崎さんとさっきの気まずい空気を運んだ組が座る。

……なんでこういうのってだいたいは望まないグループに含まれるんだろ……。とりあえず目の前にある一口サイズのじゃがいもをパクリッ。

……うん、美味しい！

「つかささん、かがみさん、この肉じゃが美味しいよ」

「ありがとう」

「私は切っただけなんだけどね」

つかさんは相変わらずほんわり笑顔なんだが、

かがみさんは少し申し訳なさそうに視線を下に落とす。

「かがみさんが切ったこの人参も美味しいよ」

すかさずフォローを入れる。

「あ、ありがとう」

僅かだが顔が柔らかい雰囲気になる。

よかった。さっきの空気とはまるで違う。

ナイス俺！

早いペースで食べ進め、あっという間に皿の上に盛られた肉じゃがは無くなった。

「じゃあ片付けは俺がしとくよ」

みんなが食べ終わった頃に食器をキッチンに持っていく。

「…私も手伝います」

なぜか岩崎も皿洗いすることになった。

俺達が皿洗いをしている時、リビングから盛り上がる声が聞こえる。たぶん夕飯前にした格ゲーだろう。

「…ごめんなさい」

急に岩崎が謝る。

「何が？」

「…あのゲーム」

岩崎さんもそれが聞こえたのか、リビングを指差す。

「…私が桃原君に勝っちゃったから」

ああ、そのことか。

なんだ…、岩崎さん俺を倒しちゃったこと気にしてたんだ。

小早川さんの言った通りいい人だなあ…。

「いいよ別に。俺が弱かったただけだしさ」

「…でも」

「いいのいいの。泉さんがどんなアドバイスを言ったかわからないけど、俺は諦めずにまずは岩崎さんを倒すことを目指すよ」

「…泉先輩は何も言っていないですけど…」

「……えっ？」

「…ただ自分の機体の特徴を教えられて、私なりにそれを活かしただけで…」

「…じゃあ俺が負けた原因は泉さんは関係なく、本当の実力で完敗した？」

「………」

「………」

「……なんか今のが人生で一番傷ついた。」

夜の11時。

格ゲーが終わり、もうそろそろ寝る時間なのだが大事なことを忘れていた。

「そういえば部屋割りはどうなるの？」

泉さんの言う通り、部屋割りが悩む。

空いてる部屋は一つあるんだけど、あそこは親父の大事な部屋だから入るのすら禁止されているのを数分前に気付いた。つまり今空き

があるのはリビングとかがみさんの部屋と一応俺の部屋。

だけど女の子をリビングで寝かせるのはなんか悪い気がするし、かがみさんの部屋は三人も寝られるほどベッドにスペースはないし、俺の部屋は論外だし……。皆で悩むこと十五分。

小早川さんが笑顔で

「私はリビングのソファで構いませんよ?」

と言いつたのだがそれは俺が許さない。

何故なら

俺は女の子に不自由な思いをさせるゴミ的存在と同じ価値になるからだ!

というわけで

俺がリビング、かがみさんは俺の部屋、小早川さんと岩崎さんはかがみさんの使っていた部屋になった。

「わ、私が桃原君の部屋!」

動揺するかがみさん。

「別に俺がいらないんだから問題はないと思うけど……」

「問題ありありよ!」

……どこに?

「じゃあお姉ちゃん、私が代わってあげるよお」

つかさんが嫌がるかがみさんに妹の思いやりを送信。

「つかさ、ありが……ってそっちのほうに嫌よ!こなたと一緒に寝たらいつまで起きることになるかわかんないじゃない!」

送信を拒否される。

「むー。じゃあ私が桃原君の部屋に寝るよ」

泉さんが前に出る。

「じゃあ私も」

つかさんが前に出る。

「私も桃原君の部屋で寝ます」

「……私も」

小早川さんと岩崎さんが前に出る。

…ん？ちよつとまで。この作戦はもしかして…。嫌な予感がして、俺は後ろからそつと見守ることにした。

「えっ？ちよつ、なによ、じ、じゃあ私も」

かがみさんが畏への一步を踏み出した。

「……あ、どうぞどうぞ」「……」

……案の定、四人が頭を下げ手をどうぞとジェスチャーする。

「へっ？」

流れで言い出したかがみさんはわけがわからないという顔でぽかんとしていた。

「じゃあかがみが桃原君の部屋で寝ることになったからみんな寝よ寝よ」

泉さんが撤収の合図を出し全員が二階へ上がる。

俺と古い手に引つ掛かったかがみさんを残して……。

「なによそれ……！！！！」「……ご愁傷様。」

夜の12時、かがみさんも二階に上がり、

俺もソファで寝ようかと思い、電気を消して寝転がるとドアが開く音がした。…何だろう？

ゆっくり立ち上がって、ドアの方向に目を向けると

「……泉さん？」

間違いない。そこにいたのは青い長髪の少女だ。

「どうしたの？」

しかし返事はない。

しばらくして泉さんはとんでもないことを言い出す。

「……今、私が君のことが好きって言ったらどうするっ。」

第9話 フラグ立ち

ええええええええつ!?

……これはなんのイベントだ!?

泉さんは冗談なのか?

それとも……。

普段から変なことばかり言ってるから意図がつかめない。
一時の沈黙がとても長く息が詰まりそうになる。

「……泉さん、えーと……」

何を言ったらいいかわからず、時間が過ぎていく。

やがて泉さんが

「……桃原君は私のこと好き？」

「……っ！」

そんなこと急に言われても……。

だいたい

「嫌い？」って聞かれたら嫌いじゃないと応えられるが、

「好き」って聞かれたら好きじゃないと完全否定してしまう。

自分の気持ちに正直になれば解決するだろ! って読者は思ってるんだろうけどそうしたら泉さんとの関係が壊れてしまう気がする。

それに泉さんを傷つけない。だけど……。

「……もったいないや」

「…………へっ？」

突然泉さんは俺の答えを諦めた。

「その様子じゃ私のこと……好きじゃないみたいだしね」

「泉さん、それは……」

「違うないよ。…だって…返事…返ってこないもん…」

背中をみせ涙ぐむ泉さん。この時、俺はとてつもなく重い罪悪感が沸き上がった。泉さんをこんな姿にしたのは間違いなく自分。

突き刺さる何かが心を折る。

戻らない時間。

消えてしまう関係。

失うことがこんなにも辛いなんて知らなかった。

失いたくない。

ただそう願った…。

「…泉さん」

「今までありがと。すごく短かったけど…楽しかったよ」

そう言つて泉さんはゆっくりリビングから去ろうとする。

「待って！泉さん！」

しかし泉さんは振り向かず歩いていく。

「泉さああああんっ！！！」

「なぐんてね」

……。

……。

「はいっ？」

さっきの澄んだ声とは裏腹に、くるりと振り返る泉さんは緊張感のかけらもない雰囲気を出す。

「いやー、なんかいい感じだったね。テレビのドラマみたいで私も少し緊張しちゃったよ！

桃原君もきつとわ・ざ・と・ノってくれたしね。なかなかノリがいいじゃない」

「……なんだ……冗談かわ

……、よかった。……でも……なんかからかわれた気分。

……だけど安心した。

もし、あれが本気ならどうしようかと…。
極度の緊張感から脱出して、俺は汗だくになる。
ベタな展開でも実際に遭遇してみると焦るもんだな…。

電気をつけて泉さんに牛乳をついであげる。

「はい、泉さん」

泉さんの前にコップをそつと置く。

「…これは私が小さいからって馬鹿にしてるの？」

テーブルにあごをつけながら皮肉そうに俺を睨む。

「い、いや、違うよ！ただ何となく牛乳好きかなって思っただけで
ホントだよ？」

「…まあいいけどね」

コップを両手にとりコクコクと飲み干す。

その姿を見て改めて思った。

「…小さい」

「む、なんか言った？」

「いえ何も！」

…危ない危ない。聞こえてたのか。
でもホントに小さいな。

とてもじゃないが高校生にはあまり見えない。

性格は別として…。こんな幼かったら電車とか映画とか得しそうだ
な。

「…ねえ桃原君」

「え、何も考えてないよ」

「それは聞いてない」

「あ、そ、そっか、で？」

「アニメでさ、主人公って殆どがへたれだと思わない？」

……いきなり女子高生がこの話題でいいのか？

「えーと、別にどうでもいいんだけど」

適当に答えると泉さんは目を細め睨みつける。

「はあ… 桃原君とは相性はいいと思ってたのにがっかりだよ」

「いやアニメは好きだけどさ、そこを突いたら面白くないじゃん。」

「むう…」

「それにそこを言うならヒロインにも問題あるんじゃない？」

「例えば？」

コップを置いてソファーに寝転ぶ泉さん。俺は椅子に座りながら話を続ける。ける。

「だってそんなへたれにめっちゃめっちゃ可愛い子とかがくつついちゃったりする方がおかしいじゃん。むしろム力つく」

「それはしょうがないよ。そうしないとゲームになんないしさ」

「でもなんか納得がいかないんだよなあ…」

「……もしかして懂れてる？」

「えゝ！？」

いきなりの弾丸に焦りを覚える。

「まあその気持ちはわかるよ。だってあんな可愛い子達に群がられたら幸せだろうしね」

……まさか泉さん…。

「…レズ？」

「あゝ、期待を裏切るようで悪いけど私そっちには興味ないんだよね。それにそういうのって実際あると気持ち悪い」

泉さんが嫌なものを食べたような目になる。

確かにそんなのがあつたら見てられないな。

もしそんな奴がいたら神だな、うん。

それから泉さんとはアニメの好きなキャラ、ストーリー、制服、MADなどについて朝まで語り合った。

「朝だぞ。起きろ」

二階から降りて来たかがみさんが目覚まし声を響かせる。

「桃原君おはよう。って起きてたんだ。でもなんか眠たそうね。」

「いや。まず寝てませんから。」

延々と続く泉さんとの話題に眠気はこなかったのだが、ここにきて一気にピークが押し寄せてくる。

一方泉さんは……。

「おはようかがみ」

…元気だな。

泉さんはテンション高めになっていた。

たぶん家ではいつも夜更かししてるんだろうなあ。

そのおかげで一日眠らなくても潰れない体を手に入れたのだろう。

「おはよう……」

「あ、おはようつかささん」

階段からつかささんが目を擦りながらリビングに入る。

相変わらずこの子は朝は苦手なんだな。

「みなさんおはようございます」

「…おはようございます」続いて小早川さんと岩崎さんがさっぱりした表情で

挨拶をする。

「二人ともおはよう」

なんか一晩寝たら俺はこの状況をおかしいとはもう思っただけだった。

「ふあゝあつ」

かがみさんが作った朝ご飯を食べる途中、俺は大きなあくびをした。
「ホントに眠たそうね。大丈夫なの？」

かがみさんが心配しながら卵焼きをパクリッ。

「大丈夫大丈夫…たぶん」

「気分悪かったら直ぐに言ってよね。あたしが看病してあげるから」

「…えっ!?」「…」

今…なんて…。

「まさかお姉ちゃん桃原君のことが!？」

「い、いや違うわよ!ただ世話になってるからそのお返しみたいなものの!」

「かがみ先輩が不純異性交遊を…」

「いやゆたかちゃん誤解してる!」

「…貴女という人は」

「みなみちゃんまで信じないで!」

多方面からの攻撃にことごとくツッコむかがみさん。

「かがみ私とは…遊んでたんだね…。さよなら!」

「ちよつ、こなた!違うつてば!」

「嘘つきっ!かがみの、かがみのばか!」

「わかったから!看病はしないから!だから変な展開を起こすな!」

…もともと看病なんていらないんですけど。

「じゃあ私が看病してあげるよ」

つかさんが笑顔で割り込む。「いやつかさん、看病いらないから」

「じゃあ私がするつてことで」

泉さんが勝手に即決。

「ちよつ、もともと私がするはずなんだけど!」

…もともとかかがみさんは何もしないはずなんだけど。

「あのー、私もお世話になってるので私でよければ…」

「…私もやってみたい」

五人がテーブルを挟んで言い争う。

これは止めないといかな。

「みんなストロップ、ストロップ。とりあえず学校に行かないと遅刻しちゃうから早く食べよ。その議題は歩きながらすればいいから」この言葉に素直に従いその場を逃れる。そしてチャッチャと準備を済まして家を出た。

しかし学校までもう少しのところで戦争勃発。

「だーからー！看病は私がするっていつてるでしょ！」

「それじゃかがみだけズルイじゃん」

「そうだよ。お姉ちゃんだけズルイよお」

「ここは看病された経験者の私が」

「ダメな方の経験じゃん。」

「これは譲れない」

「岩崎さんまでマジなんだな。」

しかしさつきから一つの問題が浮かび上がる。それは…………。

「…おい、なんだよありや」

「…たった一人の男に女子が群れているぜ」

「…どれが本命なのかな？」

「…もしかして全員遊びかもよ」

「…最低ね」

「…痛い、痛すぎる。」

周りの生徒達が目線を俺だけに向ける。

そうとも気付かない五人は延々と争った。

そして終末の時。

「このままじゃきりが無いわね」

「そだね」

「そうだな。いつそ桃原君に決めてもらうのはどう？」

「へっ？」

「それがいいですね」

「…では桃原先輩、選んで下さい」

「え、いや、そんな選ぶだなんて」

「ここで決めなきゃ男じゃないわよ!」

「そんなぁ……」

でも強いて言うなら……。

「迷うんなら私だよな」

……それは正直不安。

「私の方があなたよりしつかりしてるわよ」

……冷たくされそうで怖い。

「私も看病してみたいなぁ」

……絶対ドジ踏むから安心保証0%、入会したくありません。

「看病…させて下さい…」

……逆に看病しなきゃいけなくなるな。

「…どうでしょうか」

……沈黙の時間が続くでしょう。

こん中から選べって言われてもなぁ。

「誰にするの?」

「えーと…」

「もちろん私よね」

「うーんと…」

「ドキドキッ」

「その…」

「桃原先輩…」

「つまり…」

「………」

「…みんな…かな?」

……。……。

……。

……。

……。

「えええっ!?!」

「いやだつて決められないよ!」

「ここまでヘタレだとは…」

「……………もういいわ、早く校舎に入りましょ。桃原君だっていきなりで迷つただらうしね。ここは保留にしときましょ」

「かがみさん…」

「ほら早くしなきゃ遅刻よ」

「うんっ!」

みんなに続いて校舎に入ろうとしたら後ろから肩を掴まれた。

「ちよつと桃原、職員室まで来い」

「えっ」

ずっと近くにいた生徒指導の先生に捕まった。

……………まさかバレた?

第10話 黒色を轟かす者

「失礼しましたあ……」

今朝、俺は生徒指導の先生に捕まり職員室に連れていかれた。
内容はもちろん泉さん達のこと。

おそらくあの不自然の会話に疑問を持ったからだろう。
それでいろいろと一時間、質問を受けていたのだがここでバレたら
もちろん全員退学。街から追い出されるかもしれない。
なので機転を飛ばたかせ、彼女達のこととは旅行について話している
とごまかせた。

中には納得のいかないような目で睨む先生もいたが、見てみぬふり
をして張り詰めた空気から廊下の自然が奏でる風の元に帰ってきた
わけだ。

「……疲れた」

さすがに頭を働かせた後はだるい。
でもこれからは注意しないとなあ……。

そう思いながら教室に向かっていくと……、

「……おい、あいつ今朝の……」

「……例の女たらしだろ？」

「……マジム力つくよな」

「……男の敵だな」

「……最初は泉さんだけだったらしいけど今じゃかの有名な柊姉妹、
それに一年生にまで手を出しているらしいぜ」

「……最低。いつそ奴を男子校に転校させてやろうか」

などと危ない会話が空気を汚染していく。
こりゃマジでやばいな。

バレルのも時間の問題かもしれない。

みんなもこのことについてクラスメートとかに何か言われてるかも…。

急いで教室に向かいドアを開ける。
すると

「桃原君お疲れ」

「大丈夫だった？」

俺の席で泉さんはゲーム、つかささんはそれを見ていた。

「なんとかね。そっちこそ大丈夫だった？」

「大丈夫って…何が？」

「だからなんか言われなかった？」

「あゝ、それなら大丈夫！『桃原君とはどういう関係？』って聞かれたけどちゃんと『恋人同士です！！』って言ってあげたから！」
「えええええっ！？」

何言っちゃってるんだこの子は！？

「冗談だよ冗談。ホントにからかいがいがあるねえ」

ニヤニヤと勝ち誇った顔になる泉さん。

マジで叱ってやりたい…。

「でもこの調子じゃかがみやゆうちゃん達にも質問攻めされてそうだね」

「あー、たしかにそうだよな…。泉さん、皆にメールでお昼は屋上で食べよって送っというて。状況を把握しとかないと」

「わかった」

泉さんは携帯を取り出し皆にメールを送ろうとするが

「授業やでー、みんな席に…って、こおら泉！！なに携帯触つとんねん！！！」

「はうあっ！？いやこれには理由が…！」

しかし黒井先生は聞く耳を持たず

「没収！後で職員室に取りに來い……ってなんやこの内容は！？」
…内容？別に皆でお昼を食べるってだけじゃ…。

「『お昼に桃原君を食べるから屋上に来て』って…アホか…！！！」
「『『』はあああつ！？』『』『』」

ちよつ、泉さん打ち間違ひしてる！

『桃原君と』じゃなくて『桃原君を』になつてる…！！
これはまずい！

「桃原あ…ちよつと詳しいこと聞かなあかなあ…」これはまずい
！！

「後で職員室に來い…！！」
これはまずい…！！！！

「失礼しましたあ…」

最悪なデジャブが起きてしまった。

しかも + にまた放課後に皆を連れて来るように言われた…。

説教は昼休みまで続き渋谷屋上へと歩む。

長い階段を上りガチャリツとドアを開ける。そこに広がるのは昔の
俺が望んだものじゃない。

だけど……

「『『』お帰り』『』『』」

とても居心地が良かった

「しかしまずいことになったわね…」

「そだねえ…」

皆にさつき俺が聞かれたこと、放課後來るように言われたこと全て
を隠さずに話した。

さすがに脳天気にはいられないのを感じたのか、全員真剣に対策を考える。

「黒井先生が仲間になってくれたらいいんだけどなあ」

「それは無理なんじゃない？ギヤグは通じるけど仮にも教師だしね」

「……………」

結局なにも案は浮かばず昼休みは終わった。

陽は動き放課後、俺達は職員室に向かうはずだったのだが…。

「あの…先生？」

「ん？…なんや桃原？」

「…なんで俺の家に行くんですか？」

終わりのホームルームの後に、俺達は黒井先生に俺の家に住んでいる奴全員をこの教室に集合するように指示をし、みんなが集まるとなぜか職員室ではなく学校から出て俺の家に向かうと言い出したのだ。

「なぜってそらお前らの生活が気になるからや」

「いや職員室で話をするって教頭も言ってたような…」

「そない細かい事気にしたらあかん。それに教頭かて校長より位は下やから別にかまへん」

…へたすりゃ黒井先生が担任出来なくなるんじゃないや…………。

「それより次はどつちや？」

「ああ、次は右に曲がって真っ直ぐ行ってください。そしたら右側に桃原って表札がありあすから」

「おっしゃー！楽しみやなー！」

ルンルン気分で先に行く黒井先生。

もしかしたらこれは…。

「ねえ桃原君」

「ん？なに、かがみさん？」

「これって大丈夫なんじゃない？」

かがみさんもやはり俺と同じで黒井先生が本気で俺達を叱る様子がないと考えていたらしい。

「本当は黒井先生、私達が楽しそうにしてたから仲間に入れて欲しかったのかもね」

「泉さん…」

「でもさすがに泊まりはしないと思うけどね」

…まあ生徒と先生が一つ屋根の下で過ごしたらそれこそ退学だからな。

先生もそれくらいはわかっているだろう。

「おい、桃原！早く鍵を開けんかい！」

「あ、はいっ！！」

先生が玄関で立ち往生していたので急いで向かいドアを開けた。そこにはいつもと違う深緑が響いていた。

第11話 遠い過去

「ほお…これが桃原ん家かー。なかなかいいところに住んでるやないか」

「はあ…ありがとうございます。しかし先生…本当に俺達の生活が気になったからという理由だけで家にきたんですか？」

リビングのソファで寝転ぶ先生に俺はずっと心に抱いていた疑問をぶつけた。

「あー、やっぱりそこをつくか」

「そりやそうですよ。先生がこんなところに来てるのを誰かに知られたらまたなんて言われるか…。だからちゃんとした理由を…」

「ふう、心配性やな桃原も。わかった、理由教えたる」

「先生…」

ようやく本音を言ってくれるみたいで他のみんなも耳を傾ける。

「実はな…思いだしたんや」

……？

「何をですか？」

かがみさんが聞くと、黒井先生は寂しそうな顔を俯けながら話す。

「うちが高校の時も…こんなふうに友達の家によく泊まりに来たもんやで……。あの時のうちはめっちゃくちややったからなあ……。でも…楽しかった。みんなでゲームしたり夜中に話し合ったり……。ただそれが懐かしく思えただけや」

……そうだったんだ…。

先生にもこういうことがあったんだな。

いくら関西弁で恐いイメージがあっても、家でネットゲーばかりやってても、心が冷えることはあるんだ。なら、俺は……。

「黒井先生、今日は夕飯一緒に食べませんか？」

「桃原…」

「そうね、泊まっちゃうのはどうかと思うけどご飯くらいならね」

「柊…」

「まあ黒井先生みたいなお母さん役も必要だしね」

「泉……。くくったくお前らはなんちゅういい奴らやねんっ！よし決めた！今日は食いまくるでー！！」

黒井先生はソファに立ち手を上に飾す。

「じゃあ料理は私が作るねー」

「あ、じゃあ私も」

泉さんと小早川さんが手を挙げキッチンに向かう。

「おいこらー！酒が全然たらへんぞー！全部持ってこんかい！！」
夕食、先生は食べるとは逆に飲みまくっていた。

そのスピードは尋常ではなく、一気に家の全ての酒を空にしまったのだ。

「先生…そろそろ帰ったほうが…」

「ああ！？なんやてももちゃん！もう一回言ってみい！！」

「いや…一名様ご案内…」

…うつ。心とは裏腹の言葉が…！しかももちゃんってなんだよ…。

そしてこの酔っ払い具合にはテーブルと昨日同様の折りたたみ式テーブルでご飯を食べている一同全員が驚嘆していた。

「ちよつと桃原君！これやばくない！？」 泉さんが小声で指摘。

「それはわかってるけど止めようが…」

今の黒井先生を止めたら退学になりそうな雰囲気を纏っていた。

「ともかく今は…」

「桃原ー！！自販機でビール買ってこーいー！！」

「機嫌を損なわないようにビールを買ってくるよ…」

「あー、なら私も行くよ」

「いや別に泉さんは来なくても…」

「いいからいいから どうせ暇だしこの状況から開放されたいしね」
そう言っただけで泉さんはついてきて一緒に外に出る。

自販機といつてもすぐ近くにはない。なので多少歩く時間が長くなるのだが今はそれが嬉しかった。

早く戻っても黒井先生の教頭に対する愚痴を聞かされるだけだしな。

「黒井先生って初めて会った時はさ、もつと気が強くて過去をあまり振り返らないと思ってたけど違うんだね」

「そだねー」

「あ、初めて会ったで思ったんだけどさ、泉さんとかささんはどうやって知り合ったの？つかささんはアニメとかあんまり興味なさそうなのに」

泉さんに唐突に聞いてみる。

「あー、それはねえ…ある日つかさが外国人の悪い人に襲われそうになった時に、私が昔やってた格闘技をBボタン連打で倒して救ったのがきっかけ」 「え、泉さん格闘技やってたの！？」

「そだよー。こんななりでも結構やり手だから桃原君も気をつけてね」

泉さんは力こぶができるところにポンツと左手をおく。

……マジかよ。

しかし意外にも意外すぎるだろ。

まさか格闘技をやっていたとは…。

ということは格闘技やってたら精神も鍛えられるらしいけど全くの

嘘だな。

今の泉さん見てたら明らかにオタク道まっしぐらじゃん、というのは言わないでおくか。

「ん？……桃原君、あれ……」

「うん？」

泉さんが後ろを振り向いて近づいてくる影に指を指す。

「あのリボン……。たぶんあれは……」

「あ、いたいた。こなちゃん、桃原君……」

「やっぱりつかささんだ」つかささんがやんわり声を張り上げながら走ってきた。

「どしたのつかさ？」

泉さんが聞くとつかささんは息を整え落ち着く。

「あのね、こなちゃんにね、メロンソーダ買ってきてって言うのすつかり忘れてて、だから買ってこようかなって思ってた」

えへへと柔らかい笑顔を見せる。

「そっか、じゃあもう自販機見えてるけど一緒に行こっか」

「うんっ！」

三人で自販機まで歩きつかささんがお金を入れようとしますが……

「あっ……！」

つかささんが驚いたように声をあげる。

「どうしたの？」

ひよっこり覗いてみると……

「メロンソーダ……売ってない……」

俺達は黒井先生のビールを何本か買い、メロンソーダを諦めたつかさんは代わりにレモンソーダを買って行った。

「それにしても通り慣れた道でも夜になったら怖いねえ」

「そのうちつかさの後ろに人面犬の背後霊がついちやったりするかもよ……」

「えー！止めてよこなちゃん」

「あはは…、でも大丈夫だよ。俺もいるしつかささんを外国人から格闘技で救った泉さんもいるしね」

つかささんを安心させようと泉さんが助けてくれた時のことを思い出させてあげようと思ったのだが、

「えっ？外国人を格闘技でって…なんのこと？」

「へっ？いや…だって…、つかささんと泉さんが初めて会った時、襲われそうになったのを泉さんがBボタン連打でって…」

「あれは襲われたんじゃないよ」。外国人さんに道を聞かれた時にこなちゃんが…」

さっきの話しと全然違うじゃん！俺は慌てて泉さんを見てみると「フフンツ」勝ち誇ったような顔をしていた。

家に帰りリビングに入ると

「ぐおおおっ、んがっ…くか…」

黒井先生はソファで爆睡していた。

「おいおいマジかよ」

「どうする桃原君…」

このままほっといたら先生まで共犯になるんだろうな。ここは起すのが吉だろうけど…。

「くかー…くかー…むにゃむにゃ…」

あの寝顔を潰してしまったら大変なことが起こりそうだ…。

「しょうがない…。今日はこのままにしよう。明日先生には早く出てもらえば解決するしな」

みんなは頷き、それぞれ風呂に入りやることをしてから各部屋に入る。

俺はというとソファを占領されているので横に布団を準備し就寝した。

「桃原、桃原、早く起きろ！」

「え……」

「頼むから起きてくれ！」

「ん……」

「はよ起きんかい！」

急に布団を引つpegがされ俺は目が覚める。

「なんですか先生……こんな夜中に……」

「ちよいとな……とりあえずしゃきつとしてくれ。ほんまに」

いつもの雰囲気とは違うことを察知した俺は、黙って先生の声を聞く。

「大事な話があるんや。真剣に聞いてくれ……」

第12話 心の行方

「大事な話し…ですか？」

「せや、だからよく聞いてくれ」

黒井先生は一拍開けて口を開く。

「お前、今のこの家の生活をどう思う？」

「えっ？」

…どう思う？それはいったいどういうことだろう？

黒井先生の言葉の意味が理解できず俺は考え込んでしまう。

「あー…すまん、今の言い方は少し解りづらかったか。なら今の生活のままでいきたいと思うか？」

「まあ…はい」

その言葉に裏はなかった。俺は自分の気持ちに正直に質問に答えた。

「そか、でもな…それはいかんことやっちゅうのはわかるな？」

…たしかにそれはそうだ。

黒井先生の言う通り、健康な高校生男子が女子高生をたくさん家に連れて一緒に泊まっているなんて世間では認められるわけがない。

互いに節度ある関係ならまだ大丈夫なのかもしれないが俺達にはそんな関係はお構いなしにしている。

「一般的に考えて言うと、すぐに全員それぞれの場所に帰した方がええと思うんや。いずれみんなこの家から離れる。だったらバレてない今がベストや」

「はい……。でも俺は…」

「わかつとる…。お前の言いたいことはだいたい解つとるんや…」

黒井先生は俺の心を見透かしたように喋る。

「今の生活がお前にとって…めっちゃめっちゃ大事なんやろ？」

「……………」

「泉達とおるのが……あいつらとおる時間が今一番大切になつとるんやろ？そして、それを……失いたくないんやろ？」

「……はい」

俺は核心を突かれた。

最初からわかつていたことだ。

始まりがあれば終わりがあつてことぐらい。

泉さんが最初に泊まるつて言った時、俺はそんなのいつか終わるだらうと思つてたのに。

でも……いくらいけない事だと頭でわかつていても体がそれを否定する。

いつまでも俺の家にみんなの色が彩られるはずがない。

みんなの声が混ざり合うことも無い。

なのになんで……失いたくないつて思うんだろ……。

叶わない願いなのに、なんでみんなと一緒にいたいつて思うんだろうか……。

みんなが消えると思うと、なんでこんなやるせない気持ちになるんだろ……。

俺はいつのまにか俯き、拳をきつく握りしめていた。

「……なんで……、いつから俺はこんなふうになつたのかな……。入学した頃はのんびり過ごしたいつて……思つてたのに……」

「本当のお前が……楽しんどるんやろな……友達と過ごす今を……」

「……最初はそんなこと……」

「……それが……友達や」

布団の上に座っている俺を黒井先生は低くしゃがみそつと抱く……。

「最初は気まずくても話しをするうちに、同じ時間を歩くうちにみんなの色を知り、想いが紡ぎ、かけがえのないものになっていくんや……」

「……………」

「そしてそれは一生もんになる。うちもそつやから……」

……友達……か。

時間が経っていくにも関わらず俺は悩んでいたが、黒井先生は意外なことを言う。

「うちは別に今のままでいいと思うで」

「……え？」

「だって人生一回しかないんや。だから多少道を間違えてもええと思う」

「でも……それは！」

「大丈夫……絶対に大丈夫や……。うちがバツチリサポートしたる。だから自分の心に納得いくまであいづらをよろしく頼むわ」

黒井先生は笑いながら俺を安心させてくれた。

「ありがとう……ございます」

「かまへんかまへん、なんたつてうちの自慢の生徒やからな」

「……この人が先生で本当によかった……」

「ところで桃原、誰が本命や？」

「ぶっ！？」

「あの中におるんやろ？うちにだけこっそり教えてくれへんか？な？な？」

黒井先生はじわじわと俺から聞き出してくる。

「そそそそんなのいませんよ！」

しかし自分の生徒の言うことは信じようとはしなかった。

「嘘はつかんでええからはよ教える。泉か？柊姉妹か？それとも――」

年か？……まさかうちか！？」

「そんなまさかは存在するわけがない」

バキッ！

「いてっ！」

黒井先生の代名詞、ゲンコツが俺の頭に…。

「そないはつきり言わんでもわかつとるわ！！　ホンマに冗談が通じんやっちな」

おのれ関西人…。

いや神奈川出身だったっけ…。

「あ、そろそろうちは帰るわ。ここにおってもしゃーないし、朝早く出ても誰かに見られるかもしれへんしな」

「そうですか…」

そう言つて黒井先生は立ち上がり玄関に向かう。

「じゃあ桃原月曜日な。誰か決まったら教えるよ！せやないと成績表にガムつけて開かんようにするからな！あとこの話の内容は他の奴らに言つなよ！うちが今まで創ってきたイメージが壊れてまうから！約束やぞ！ええな！！」

それだけを言い残し黒井先生は俺の家から出ていった…。

「えっ、黒井先生もう出て行っちゃったんだあ」

朝、みんな目が覚め食パンを食べながらつかささんが残念そうにする。

「うん。いろいろ話したけど学校の先生達にはなんとか対処してく

れると思うよ」

「そつかあ、年上キャラがいなくなって寂しいね桃原君」

「キャラは関係ないし寂しくもないけどな……。あの人いきなり先生みたいなこと言い出したからびっくりしちゃったよ」

「いやまあ先生だからね。ところで桃原君、その話した内容は教えてくれないの？」

「たしかに気になる」

「…詳しく教えて下さい」

かがみさんに続いて他のみんなも身を乗り出す。

「ごめんね、話さないって約束しちゃったから」

「えーっ」

泉さんが残念そうに肩を落とす。

「それに……」

「それに？」

“成績表にガムつけて開かんようにするからな！”

「ガムをつけられるのは嫌だしな」

第13話 伝説の少女A

「金曜日ってだるゝい…」 泉さんが机にへばりつきながら金曜日にケチをつける。

「あはは…、でも後あと一時間で昼食だからがんばろうよお」

つかさんはそんな泉さんを見て元気づけようと笑顔。

「うー… なんかもう存在する全てがだるゝ…、動くのもだるいよ…。五月病で早退しますって黒井先生に言ってみよっかなあ…」

「五月病で休む奴っているのか？」

「それにこなちゃん、前にそれで無理矢理来させられたしねえ」
「やったことあるんだ…」

まあ俺もしたことあるけど。

そんなこんなで話していると、

「あ、メールだ」

つかさんがブーツブーツとマナーの音と同時に携帯を手取る。

「つかささん携帯持ってたんだ。使ってるところを全く見てなかったからないのかと思ってたよ」

「えへへ…。でもまだみんなみたいに上手に使えないんだー」

「そつか。あ、メアド教えてよ、俺も教えるから」

「うん！」

俺も携帯を手に取り、

つかささんのメアドを受信する。

そしてつかさんにメールを送った。

その様子を端から見ていた泉さんが

「そっいえばつかさって昔は自分でメアド送れなかったのにいつのまにかできるようになったんだ…」

残念そうになる。

「そりゃああんだけ使ってたらわかるよお」

「あかん！ドジッ娘はできへんことがあるから萌えるんやー！これじゃただのつかさだよー！」

泉さんが必死に嘆き吠えて崩れる。

「まあまあ泉さん。」

あ、泉さんもメアド教えてー」

「そんなんでも私の心は癒えないよ…」

…じゃあどうしろと？

「ま、別にいいけどねー、つかさには他の天然ボケとかがあるし」
立ち直り早っ！

開き直りながら泉さんは俺に赤外線で送信する。

「結局やるんだな…って、うおっ！？」

メアドを見た瞬間俺は凍りつく。

そのメアドとはローマ字で『眼鏡っ子激LOVE』と表示されていた。

授業が終わり放課後、俺と泉さんは漫画を買いに行き、なぜか他のみんなは泉さんが先に帰えるよう促す。

「…ねえ泉さん、なんでみんなを先に帰らしたの？みんなで来たらいいのに…」

「いいからいいから」

「……………」

俺は泉さんの返答に納得いかないまま本屋に入る。

その時、レジから光る眼球に俺達は気付かなかった。

ああああす！！！！」

「…そうだ！もつとアピールを続け大量に買わせるんだ！彼女ならあるだけ買ってくれる！」

店員達の熱い交渉が泉さんに寄ってばかり、更にその熱い店員達を越える一人の男がレジから覗く。

これは熱い…！

ここまでされたらさすがの泉さんでも…！

「あー、全部持つてるんでいいません」

「……なにーっ！？」「……」

あーあ、店員達泣いてるよ…。そりゃあんなに宣伝したのに他の店で買ったなんて言われたら傷つくよなあ。それにしても凄い。ここまで流れに乗ってる人は初めて見た。

人気コミック、DVDを全て手にしてるなんて！

泉こなた、彼女はホンモノだ…。

「うーんと……あつた！

じゃあこれくださいーい」

泉さんは一冊の本を手にしレジへ向かう。

「まぢで！？この店で買ってくれるの…！？ かああしこまりましたああー！！」

さつきとは打って変わり特急でレジ打ちをする。

「540円になりまーす」

店員は満面の笑みで迎える。

しかし……

「あ、12円足りない…」

「……マジかよおお！！」「……」

また泣き崩れちゃった。

可哀相に。

「桃原君12円貸してー」

「えっ？12円？」

すると店員は目を燃やし俺に食ってかかる。

「おいっ！12円ぐらい貸してやれよ！！てめーまさか12円持っていないとも言っくんじやないだろな！？持ってんなら少女Aにささと貸せ！つつかあげる！！やっちまえ！！」

やるよな！？やるよな！？やるよなあ！？ハイはっ！？ハイはっ！？ハイはああ！？」

「ハ、ハイ……」

そうして俺は泉さんに12円あげ本は売られた。

「ふ…ふふふ…ふふふふ……。いいいいやっつたあああ！！！！俺は勝ち組だああ！！」

大きく両手を掲げ吠える。たった一冊でそんな大袈裟な…。

「店長やりましたね！」

「伝説の少女Aが買ってくれましたよ！」

「やっと思標が達成されましたね！さすがです店長！！」

店員達が一人の男を胸上げる。

…あの人店員じゃなくて店長だったんだ…。どおりで必死なわけだ。胸上げが終わり四人が俺のところに来る。

「ありがとう…。君がいてくれたおかげだ」

一同が礼をし、頭を下げる。

「まあ…別にいいですけど…」

金はあなたが無理矢理出させたしね…。

「…お前」

店長は顔を上げ、涙目になる。

「お前はいいやつだ…。さっきはすまないな。伝説の少女Aを見るとつい…」

店長は申し訳なさそうに俯く。

「そのさっきから泉さんのことを伝説の少女Aって言ってますけど、それってなんなんですか？」

「伝説の少女A…、それは彼女が買ったものは全て売れるというジंकスがあるんだ。そしてその少女の噂は各地に広がり幻の存在とまで言われたほどに…。だから我々は伝説的な彼女に伝説の少女」

「A」の名をつけたのだ……つまり泉さんは有名人で、

それもここだけでなく各地に伝説は伝わっているってわけか。

「そして……我々は少女Aを知るきっかけができた……」

「は？」

「俺は今から、少女Aの家に行く!!」

、

第14話 虹色のオーラを纏う者

「ちょっとついてこないでくださいよー…」

店を出たあと、アニメ店長は店員にあとを頼み堂々と俺達の間に入ってきていた。

「何を言うー！せっかく少女Aを知るきっかけができたのにそれを見逃したら残した者達に言えはいんだー！それに、私は個人的に少女Aのことを知りたいんだ！」

「そのセリフ、どつかの口り親父が言ってるように聞こえるんですけど…」

「うるさいっ！それを言うなら貴様も少女Aに興味を持ってるくせに！」

…そんなわけないだろ。

「何を根拠にそんな…」

「貴様、大勢の女子高生と同じ屋根の下で暮らしているだろ」

「…なっ！？」

なんで店長が知っているんだ！？

俺は初対面のはずだ！

「な、なんであなたがそんなことを…！」

すると店長はいつも以上にまっすぐ目を見てくる。

「悪いが…少女Aを少し前に調べてみた。しかし彼女は家に帰ってはいないと聞いてな。俺の周りは友達の家にも遊びに行っただんじゃないかと甘く見ていたが俺は違う！この異変に違和感を抱き、徹底的に底を探索した。そしたら貴様の名前があがったというわけだ」

…つまりこれって…………。

「「ただのストーカーじゃん」」

俺と泉さんは的確にツツコんだ。

「バカ者！俺はただ少女の全てを見るためにやっていただけだ！」

「いやだから…」

「細かいことは気にするな！貴様が小さい男に見えるぞ！」

…そりゃあなたからすれば全員ちっさく見えるだろうな。

「ただいま…」

ようやく家に帰宅。

同時にパタパタと足音が近づいてくる。

「おかえりー…ってどちら様？」

つかさんが玄関で迎えてくれたが当然あっちに目がいくだろう。

「どうも！俺はどつかのアニメ店長をやっている兄沢命斗だ！お嬢さん、あなたのお名前は！？」

へえ…、この人って兄沢命斗っていうんだ。そういえば聞くの忘れてたな。

「ふえ？わ、わたし？えと、えと、ひ、柊つかさです」

つかさんもあまりの暑苦しさ困惑する。

「で、でも桃原君、こなちゃん、どうして店長さんが？」

それはごもつともな疑問です。

「あー、理由はあとで言うからさ、とりあえず皆をリビングに集め
といてよ」

泉さんがダルそうに指示をする。

「あ、今みなみちゃんとゆたかちゃんが買い物に行ってるよ。お姉
ちゃんはリビングでゲームしてる」

「買い物か…まあすぐに帰ってくるだろ」

俺達は店長をリビングに案内する。

ドアを開けるとかがみさんがシューティングゲームをしていた。

「かがみさんただいま」

「え？ ああおかえりなさ…って誰？」

かがみさんが振り向くと視点が店長にいく。

「え」と…」

「どうも！俺の名はアニメ店長、兄沢命斗！今日は伝説の少女Aを観察擦るためにやって来た！」

「はい？」

呆然とするかがみさん。

「というわけでよろしく！」

「はあ…柊かがみです。」漠然と店長を見るかがみさん。きつとなにがどうなっているのかわかんないんだろうな。

「うむ！……って、なにをしている！」

かがみさんに挨拶をしたあと店長はゲーム画面を見て激怒する。

「なぜ邪道のマシンガンを使う！真の実力で戦う時にはマグナムだろうが！」

「いや、そこは人それぞれなんじゃ…」

俺がフォローを入れようとする。

「ええい、貸せ！」

かがみさんからコントローラーを奪い、マグナムを装備する。その瞬間、

ドドドドドドッ！ドドドドドドッ！

敵に全弾命中し、退却していく。

「すこ…」

「嘘……あたしが苦戦していた敵をあっさりと…しかもマグナムで…」

そのテクニックに一同が驚嘆した。

一人を除いて…。

「…岩崎みなみです」

きょんとする顔からすると小早川さん達もおそらく理解できていないのだろう。

なぜ店長がここにいるのか。

「あー、みんな揃ったからなんで店長がここにいるのかを説明するね」

俺はゲームをしている二人をそのままにし、四人に事情を話した。

「………ってことはあの人は少女A、つまり伝説な存在になってるこなたの全てを知りたくてここにいてってこと？」

「まあそんな感じかな…」

「ふーん………で？」

「え？」

「な・ん・で・店長を止めなかったのかって聞いてんの!!」

かがみさんが拳をつくり怒りを見せる。

「いや、その、えと…向こうがこっちの状況を知ってたから…」

「だから!？」

「だから…しかたなく？」自分でもよくはわからないので疑問形にした。

「しかたなく？じゃないわよ!たくも、ホントはつきりしないわねー!」

返す言葉もなかった。

「…あの、とりあえず夕食にしませんか?もう7時ですし…」

小早川さんが苦笑いしながらお腹をさする。

「そだね。お姉ちゃんそうしょ」

「ふう…そうね。あの人にはそれから帰ってもらっわ」

全員が納得し俺達は夕食の準備に取りかかる。

気がつけばこの家に暑苦しい虹色が帯びていた……

,

第15話 雫の落ちるとき

「…う、う、うまあい！！伝説の少女Aは料理もできたのかああああー！！」

テーブルで店長は泉さんがつくったハンバーグをバクバクと食べ進める。

「うおおおおー！」

そんなことよりなぜ泉さんが夕食を担当したのかというと、実は店長がどうしても泉さんの手料理が食べさせると言い出して聞かないのだ。

「うおおおおー！」

その姿はまるで好きな女の子からおねだりをしているみたいだった。「うおおおおー！」

…だが感激のし過ぎでかなりの耳障りとなっている。ていうかうるさすぎ！

「わ、私…気分が…」

小早川さんの顔色が少し悪くなっていた。原因は明白だ。あの雑音だろう…。

「小早川さん、無理しないで上で横になつてなよ。リビングはうるさいだろうし…」

「…私、ついていきます」そして小早川さんは岩崎さんと二階に上がる。

「ふー…、腹もふくれたし今日は少女Aの手料理も食べたし満足だ。そろそろ帰るか」

全員が食べ終わり（小早川さんと岩崎さんは二階で休憩中）店長は

ようやく帰宅宣言。

早く帰ってくれよ…。

「というわけでお前！」

店長は俺を指差し

「俺を見送れ！」

「はい？」

いきなりなにを言いだすんだこの人は！？

「なんだ、理解力のないやつだな。俺を見送れって言ったんだ」

「いやだからなんで！？」

「なんでって…そりゃ俺が店長だからだ！」

いや意味不明な珍回答されても困るから。

「ともかく早くこい！」

「え、ちよっ…」

店長は俺の手を無理矢理引っ張り外に連れ出す。

時間は完全に夜。辺りは真っ暗で街灯が道を照らしている。そこを

俺は店長と歩いていて。だがしばらく経つと急に店長は足を止めた。

「…ん？どうしたんですか？」

「……………」

返答なし…か。

なんか俺、悪いことした？

「…桃原、ちよつといいか」

あ、反応した。

「はい、なんででしょうか？」

「お前、両親はどうした？」

…なんだ、冷静に話をするから黒井先生みたいなこと言ってくるか
と思つて緊張しちゃったよ。

「両親なら…海外っすよ。前に二人で外国に行っちゃったんですよ。」

あのときはほんとビックリ……」

「本当にか？」

「……えっ？」

「お前の両親は本当に海外なのか？」

「……なにを言っているんだ？」

「悪いが……少女Aのついでにお前のことも調べておいたんだ。なぜ毎日何人も女性を泊まらせてお前の両親は平気なのか不思議に思ってた。だが謎は簡単に解けちゃった。それは家にお前しかいないからだ。金の管理などは親戚に任せてあるみたいだがそこで俺はまた疑問を感じたんだ。」

親戚がいる、ならそこにお世話になればいい。だがそうしなかった。別に迷惑でもないのにお前は拒否した、……どうしてだ？一人暮らしの方が負担は倍以上なのに」

「………」

俺は質問には何も答えず

店長の話聞いた。

顔をしているのかよくはわからなかった。

「理解できないところがまだある。中2から一人暮らしを続けているみたいだがあまりにも長すぎる。親が子を四年も一人にさせるなんて考えにくい。ましてや大人でもないのに。だから俺はお前の両親の全てを調べ、そして知った」

「……なっ……！」

「……ちよつとまでよ……、まさかこの人……！」

俺の胸がだんだん苦しくなっていき息も荒々しくなっていた。

「お前の両親は海外になんかいいる？」

本当は昔にもう………亡くなっているんだろ？」

「……っ……！」

言葉が最後まで届いた瞬間、俺の記憶が鮮明に頭の中を駆け巡る。次々に思い出される映像、聞こえてくる過去の声、そして大きな手を繋いだ時のぬくもり……。

歩いてきた道のりの感覚全てが今、身体に伝わっていった。たった数秒が俺にとつてかなり永く感じさせる…。

「四年前だろ？ 両親が他界したのは……」
思わず俯く。

“飛行機墜落事故”

あの時、俺はショックで気を失ったらしく親戚から後で詳しく伝えられた。

親戚が言うのだから間違いないのだろうと俺は絶望した…。

ニユースなどで事故の様子が報道されるたびに涙が止まらなかったあの時…。

「これは俺の推測だが…親戚のどこにいなかった理由は、あの家から離れるのが耐えられなかったからだろ？ 向こうはこっちに来るって案も出たかもしれないがそれも我慢できなかった。なぜなら自分たちの思いでの場所を上書きされたくないから…」

「……………こくっ……」

俺は静かに頷く。

「…ったく、たいした精神力だぜ。あの後、お前はいつもと同じように学校に通っていたらしいではないか」

「…いつもと同じじゃないです…。家に帰ったら俺は…」

ドアを開けると聞こえてくるはずの『おかえり』の声。

でもあの日からはずっと…。

「……………そうだな、同じなわけないか。しかしな、やっぱりお前は凄いい」

「……？」

「だってお前は少女Aを泊めてやってるじゃねえか」…あ、そういえば泉さんも母親を…。

「それにあの一階の部屋…、入らせたくないのはあそこが一番思い出深いんだろ？」

一階の部屋…それは父の大事な部屋と言い続けてきた部屋のことだ。部屋割りもそこだけは外していた。

「…はい。それにあの部屋にはアルバムがあるんです。あと母さんがアルバムになにかしてて……。でも見るのが怖くて……。だからいつの間にか避けるようになってしまったんです」

「……そうか」

……。

俺たちは互いに目を背けた。微動だにしない俺たちに対し時間は次々に進んでいく。

「……ようやくわかったよ」

「へ？」

店長が満足気に話す。

「なんで今泊まっているあいつらを早く家に帰さないのか…。最初はへたれだからだと思ったが事実を知ればお前の気持ち少し変わったよ。楽しいもんな、やっぱり一人よりも……」

「はい…そうですね…」

そして俺は結局あの店まで連れていかれた。

「ただいまー」

任務を終えて帰宅すると

「……「おかえり」「……」

「え？」

五人揃って俺を待っていてくれたのだった。

「え、みんな…なんでここに？」

「なんでってあんたが遅いからでしょうが！」

かがみさんが怒鳴りながら指を突きつける。

「………そっ………かあ………」

待っていてくれたんだ…。涙が一筋頬に伝っていく。

「な、なんで泣くのよ!？」

「あゝあ、お姉ちゃん泣かしちゃったあ」

「さすががみ!迫力あるねえ!」

「でも泣かすのは酷いと思いますけど……」

「…悪魔」

「ちよつみなみちゃん!それは言い過ぎでしょ!」

ギヤーギヤー騒ぐ声を聞くと実感する。

いま俺は一人じゃないと……。

「ごめんごめん、ちよつと感動しちゃって」

それにあの『おかえり』がああ頃の母さんみたいに……

リビングに戻ると皆に両親のことを話した。

やっぱり知っておいた方がこの家で住むには必要とおもうしね。でもさすがにみんな表情が暗い。

「み、みんななに暗い顔してんのさ!ほらいつもみたいに笑い話にしてさー!」しかしさらに俯いてしまった。

「桃原君……」

泉さんが顔を上げてゆっくり口を開く。

「アルバム……一緒に見よ」

「え?」予想外のことに俺は驚く。

「桃原君の小さい頃の写真、見てみたい……。それに桃原君のお母さんが最後に残したアルバムを見ないと一生後悔しちゃうよ?」

「泉さん……、でも俺……泣いちゃうかもしれないし……」

女の子の前で泣くというのは少し惨めな気分になる。だけど泉さんは

「大丈夫……、私は桃原君の涙、わかるから……。だから見よ」

「泉さん……」

「……っ!あーもう!私も見るわよ!」

勢いよく立ち上がるかがみさん。

「ぐすつ…私も…」

泣きながらもつかささんがかがみさんに続く。

「私も一緒に」

「…私も」

小早川さん、岩崎さんがさらに続く。

「みんな…」

「ほら行くわよ。みんなで哀しみを分けることはできないけど支えあうことならできるから…」

かがみさん…

「ありがとう…」

俺は部屋からアルバムを持ってきた。

それをテーブルに置く。

「…開くよ」

こくりつ。

全員が頷きゆつくり開く。

「………あ………」

最初のページ、それは産まれたばかりの頃だった。

次は一歳の時、泣いてる写真だ。そこには母さんの字で『一歳おめでとつ』と書かれていた。

二歳、母さんに膝枕でぐっすり寝ている。横に父さんの字で『かわいい寝顔はいただき』とあった。

三歳、転んで頭から地面にいつちゃった時だ。ここには『痛いのとんでけ』と。

他にもたくさんさんの想いが積もった写真が挟まれていた。

「うつ…うつ…」

つかさんが泣き出し、小早川さんも涙が溜まっていた。

ピラピラめくつていくと幼稚園、跳び箱で高く飛びすぎて着地に失敗したこと、小学校に入学したときのこと、体育祭の玉入れで一個も入らなくて泣きじゃくったこと、サッカーで大活躍したこと、全ての足跡がそこにはあった気がした。

そして一枚一枚に手書きの文章。

俺は少し泣きそうになる。そしてアルバムは途中で途切れた…。

「終わった…」

「……あれ？最後のページ…」

泉さんが異変に気付く。

「ん？……カセットテープ？」

最後に古いカセットテープが挟まっていた。

俺は急いでレコーダーを用意してテープを入れる。

再生を押すと…

「椿…」

…！

「かあ…さ…ん？」

「大人になったら渡そうと思ったんだけどこれを聞いてるってことはあなたはもう大人……なのかしらね。椿の『ただいま』の声がもう少し聞きたかった……」

「……」

「たぶんアルバムを見たと思うけど忘れないでね。椿はいつも私たちと一緒にいたということ。そしてこのアルバムを見ても捨てないでずっと持っていてほしいの。たぶん…このアルバムが重みになるかもしれないけど苦しい時とかはまた見て思い出してね。椿が忘れない限り私たちは存在することができるから…。人は忘れられた時こそ死んでしまうの。だから……ね？」

…あと……本当はね、できればこのテープを聞いてほしくなかったの。

このテープは椿が二十歳になったらアルバムと一緒に渡すつもりな

んだけど、これを聞いてるその時……、椿はきつと親離れしてもうそばにいないから……。椿の音がすぐに聞けないから……」

「ぐすつ……ずずつ」

泉さん、かがみさん、岩崎さんも涙ぐむ。

「嫌なことがあつて耐えられなくなつても支えてくれる人を見つけなさい。その人がきつと一生に最高の宝物になるから。そして新たな宝物がきつと産まれるから。」

私たちにとつて椿が宝物だつたように……。だから……涙を流してもそばについてくれる人と一緒に歩いていきなさい。

私は……うつん、私たちはずっと想っているから。椿に春の桜が咲きますように……。」

「……」

「椿……おかえり……」

プツン……。

……母さん。

「うつ……ぐすつ……ぐすつ……ひつく……」

「ふ、ふええええええええん！」

「こんなの……こんな……ぐすつ……うつつ……」

「うわああああん！あああああああ！」

「……うつうつ」

……大丈夫だよ母さん。

だって……こんなにも泣いてくれる人があるんだから……。だから最後に一つだけ……。

「……母さん……父さん……」

……ただいま……」

,

第16話 ラッキー？それともアンラッキー？

土曜日の朝、俺達は掃除をしていた。

長いこと大掃除を一人でしょうとは思わなかったからホコリは至るところに蓄積されていた。

掃除の場所はまずそれぞれの寝ている場所ということで、他のみん
なは別の部屋をあたっている。俺の部屋は俺一人で十分だったんだ
が、かがみさんが世話になっているからということで一緒に掃除を
しているのだが…。

「ほんと汚いわねー、自分の部屋くらいは毎日しなさいよね」
さつきからダメ出しばかりで心はズタズタにされていた。

「あ、こんなところにポテチの食べかすこぼしてー」かがみさんは
掃除機をベッドの横に沿って吸っていく。

「ふう…、次は机の整理にかかりましょ」

「えっ」

マジで！？ あそこにはまだ泉さんに見つかったアレが！

「ちよつとまつてかがみさん！」

引き出しを開ける瞬間、かがみさんの手を掴みひき止める。

「えっ？なんで？早く済ましたほうがいいじゃない」

かがみさんは構わず強引に開けようとする。

「いや、ここはさ、俺がやっとくからさ！だからかがみさんは…え
と、えと、あ、ノリノリに踊っててよ！うん、それがいい！」

そう言っただけは開きかけた引き出しを戻す。

「はあ？なにいつてんの。ほら…早く…！」

無理矢理にでも開けたいらしい。ならば負けられない戦いがそこに

ある！

「別に…いいって…言ってるじゃん…って、おわっ！」

バキッ！ドターンッ！

大きな音と振動が響く。

「……………いつつ…大丈夫？かがみさん」

二人が張り合っていたら引き出しが壊れバランスを崩して二人とも倒れたみたいだ。

「うん、なんとか…って…」

「「えっ」」

俺達はかがみさんが上で体を預けるような体勢になっており少し服が乱れている。さらには吐息のかかる距離で俺達はただ見つめあった。

「あ、あの、かがみさん？」

「…へ？あ、ああ！ごめん！」

慌てて上からのくかがみさん。顔を真っ赤にしながらそっぽを向く。しかし…、

「な、な、な…」

「……………」

なにやらかがみさんは後ずさっている。あっちになんかあるのかなと見てみると…、

「あ！しまった…！」

そこにはかつて泉に見つかったアレがかがみさんの目に映る。

「ええと、その…、あー！そ、それってたしか友達が勝手に置いてったやつだ。まったくあいっふなんでこんなところ置くなー！」

あたかも自分のじゃないと主張するが、その声は今のかがみさんには届きはしなかった。

「イヤーっ！」

ドスッ！！

「ぐはっ…！」

普段ならかがみさんの右パンチがいつも頬にいくのだが、今回は蹴

りで俺のあそこに斜め下からヒッティング。
俺は痛みに耐えられずその場に倒れ込んだ。

「ぐががが……」

「え、あ、ちよつと桃原君！しつかりしてよ！ねえ桃原君！」

かがみさんは倒れた俺の体を激しく揺さぶる。うつうつ……、俺はちよつぴり涙目になった…。

家の掃除全てが終わり、俺達はリビングで今日は何をするか話していた。

「ごめんね桃原君……」

かがみさんが申し訳なさそうにする。

「だ、大丈夫だよあれぐらい……たぶん……」

曖昧な答えになるのは本音を言うとかかなり痛かったからだ。しかし男は耐えねばならない！

「まあ事故ってことでいいよ。かがみさんもわざとじわないみたいだしさ」

「うん……」

いまだ反省しているみたいだがとりあえずことはすんだ。

「ふと思っただけだよ……」

泉さんが唐突に話をする。

「これからみんなでお昼食にいかない？」

「外食……か。うん、いいかもね」

かがみさんが泉さんの意見に賛成し、他のみんなも了解する。

「でもどこにいくんですか？」

小早川さんが行き先を問う。

「うーん……確かにみんな好き嫌いがあるしなー……」

「じゃあ無難にもナクド（ナクドナルド）でいいんじゃない？」

「あー……かがみ自分から太る行為を……」

泉さんがかがみさんのお腹を見ながらにやける。

「い、いいのよ別に！明日から減量すればいいんだから！」

かがみさん……、

その考えがダイエットの

失敗例なんだよ……。

外を出かける準備をし、鍵をかけてまずナクドへ、
そして軽く済ませたあとに俺達はゲーセンに足を運んだ。

「うわー、ゲーセンなんてホント久しぶりだよ」

前に来たのはたしか中一のとき父さんと遊んで以来きてなかったかな……。

あの時は楽しかったな……。

「桃原君ー！あのカーレースやるー！」

泉さんが先にカーレースの椅子に入って準備する。

もちろん俺のYES、NOは聞いてこない。

だけどそんな無邪気さが俺の心を癒していた。

「うおっ！？結構難しいなこれ！」

道の複雑さ、マシンの高性能が俺の腕を鈍らせる。

しかし泉さんは……

「よっ、とっ、ほいっ」と

俺を置いて次々と先に走り抜ける。

結果、一周遅れで泉さんの圧勝。

「ふっふっふっ。まだまだ甘いね」

ニヤニヤしながら泉さんは俺の肩にポンツとたたく。

「ぐぬぬ…完敗だ…」

まさかここまでのゲーマーとは思わなかった。

もう対戦系はやめとこう…。

ふと周りを見るとあっちでつかささんとかがみさん、岩崎さん、小早川さんがクレーンゲームをしていた。

「あー…またダメか」

かがみさんがボタンから手を離す。

「なかなかうまくいかないねえ」

「どうしたの？」

何を取るうとしているのか聞いてみると

「私があぬいぐるみが欲しいなって言ったらかがみさんが取ってあげるって言うてくれたんだけどなかなか引つかからなくて…」

小早川さんが指を指す先にアライグマのぬいぐるみがあった。

なるほど…、あれはちよっときついな。しかし男ならやるべきことは一つ！

「よし！じゃあ俺が取ってあげるよ」

「へ？ でも…」

「いいからいいから。かがみさんの仇も取らないといけないしね」俺はお金を入れて横のボタンを押す。ゆっくりクレーンが動きターゲットのちょうど真ん中に来る。横のボタンを離しラストに縦のボタンを押す。クレーンがだんだんクマの真上に来る。まだだ…まだ押すわけには…。

そう思ったその時！

「あれー？ 柊じゃん」

「あ、ホントだ。おーい、柊ちゃん」

「ん？」

二人の女の子がこっちに近づいてくるのに目がいつてしまいのからクレーンが過ぎる。

「『あー！』」

俺とかがみさんと小早川さんが一斉に声をあげる。

「んあ？どしたの？」

八重歯の女の子が覗いてくると

「おお！アライグマキャッチしてんじゃん！」

「すごい」

「『へ？』」

見ると過ぎたクレーンの先に奥にあったアライグマが引っかかって
いた。

そしてそのままクレーンは戻ってきて取り出し口のところでぬいぐ
るみを落とす。

「『やったー！』」

なんという奇跡！あの二人に感謝しないとなあ。

俺はぬいぐるみを取り出し小早川さんに渡す。

「はい、小早川さん」

「わあ！ありがとうございます！」

小早川さんは笑顔で受けとる。

：くはあっ！可愛いなあ！

「あなたって上手なのねー」

おしとやかそうなイメージの女の子が微笑みかける。

「あ、あれはまぐれですよ。ところであなたたちは…？」

「ああ、ウチらは柊姉の親友で日下部みさおってんだ」

「私は峰岸あやの。よろしくね、えっと…」

「あ、俺は桃原、桃原椿って言います」

「桃原椿君か、よろしくね、椿君」

「『椿君！？』」

泉さん、かがみさん、日下部さんが揃って聞き返す。何でそんな驚
いてんだろ？俺にはよくわからなかった。

,

第17話 柊はウチのだってヴァッ！

「あ、あやの…今なんて…」

かがみさんが後退りながら聞く。

「へ？私、なんか変なこと言った？」

「だって…っ、っ、椿君…って…」

「うん。言っただけ？」

「あやのー！お前には彼氏がいるんだぞー！浮気なんて許さないんだからなー！」

日下部さんが子供みたいに騒ぎ立てる。

「ち、違うよみさちゃん！私浮気なんてしてないよー！」

「じゃあ何でいきなりの初対面のやつに名前で呼ぶんだよー！」

ブーブーと口を尖らせる。

「え？名前で呼んだらダメなの？」

「うゝゝゝっ！ともかくあやのは彼氏がいるんだからはダメだってウゝァー！」

彼氏がいるのと名前で呼ぶのは関係あるのか？

しかも最後のウゝァって何だろう…。

しばらくして峰岸さんが俺を桃原君と呼ぶように決まりその場は収まった。

しかしさすがにこれだけの女子高生に囲まれていてあんな騒ぎを立てたら、周りのお客さんは完璧に俺だけを見てくる。

「桃原君、ここにいたらちよつと目立つちゃうからどこか違う場所に…」

かがみさんもそれに気づき移動をしようとする。

「でもどこに…」

「えと、んと……あ、あそこは？」

すぐそのバッティングセンターを指す。

「よしあそこなら大丈夫か」

「みんなー。バッティングセンターやらない？」

かがみさんの呼びかけに

「いいよ」

「いいぜえ」

泉さんと日下部さんがハモる。

「「むむむ…！」」

二人の間に小さくて危ない火花が！火花が！！

「おいちびっこ！ちようどいい機会だから柊をかけて勝負しないか！？」

いきなり何を言い出すんだこの子は…。

「ちょ、なにをあんたは勝手に…！」

かがみさんが止めに入ろうとするが

「いいよ、受けてたつ！」

泉さんがあっさりOKを出す。

「へー、めんどくさがりのイメージがあつた泉さんだけど違ったんだ」

心底俺は驚いた。

「よーし、じゃあ勝負はバッティングセンターで二十球のうち多く当たった方が勝ちだかなー！」

「別になんでもいいけどねー」

余裕を見せる泉さん。

俺達はバッティングセンターに入る。

じゃんけんで先攻は泉さん、後攻は日下部となって勝負開始。

「フッフッフッ…、かがみは私がいたでいくよ」

泉さんは中に入り、俺達は外の椅子に座るが一人、日下部さんは立ったまま泉さんを見つめる。

「おいちびっこ！勝負は見てんだからやめとけ……って聞けよ！」
いずみさんは日下部の声を無視してコインを入れていく。

ん？もしかして泉さん……。

「本気なのかも…」

バットを構える泉さん。

マシンが動き始め異様な音が鳴り響く。

ウイイイイイン……ビュッ、カキーン！

「な！？」

一発目で球に当てる泉さん。だがそれを見て驚いているのは俺だけだった。

「ねえ、つかささん。なんでみんな驚いてないの？」「え？だつてこなちゃんならあれぐらいへっちゃらだよ。私は無理だけど…」
つかささんはえへへと苦笑いをする。

たしかに泉さんの運動能力は一日目の登校時に知ったけどバットを当てるのにそれはあんまり関係ないだろ。泉さんのスポーツ範囲に俺はただ驚嘆した。

カキーン！カキーン！カッキーン！！

しかしよく打つな…。

やがて球はこなくなり泉さんの打席は終了。

結果は二十球中十六球。オタクの女子高生がここまで打つとは思っていなかった。

泉さんがバットを置き出てくる。

「ふん、相変わらずやるじゃねえか。けど手加減はしないからなー！」

すれ違い様に日下部さんが泉さんに言う。

「まあ頑張ったまへー」

日下部さんが打席に立ちお金を入れる。

「ようし！こーい！」

ウィィィィィン……ビュッ、スカッ。

「……………」

「……………」

うわぁ…、こりやもう勝負ついちゃったかも。

「あはは、い、今のはまぐれまぐれ。ようし…！」

もう一度構えてマシンに集中する。

ビュッ、チッ！

お、かすった。

「へ！どうだちびっこ！」

前に飛んでいないのに喜ぶ日下部さん。

まあ当たったらいいんだからあれはカウントされるしな。

それから日下部さんは泉さんと同様バンバン打っていった。

そしてラストボール。

現在十五球がバットにヒットしている。

つまりこれを当てたら引き分け、そして外したら日下部さんの負けとなる。この状況はかなりのプレッシャーがくる。

「はぁ…はぁ…」

日下部さんは見切るのにけっこう体力を使い、少し息を切らし始めた。

「私は…」

バットを構えながら呟く。

「私は…柊の…」

ウィィィィィ…。

マシンが動き出す。

「昔からの親友なんだー！」

……………ビュッ、カーンッ！バキッ！

「……あ……」

球には当たったがそのあと日下部さんのバットがコイン入れに当たり傷がつく。

「あちゃ、やっちゃまった」

「いややつちまったじゃないよ。それに結局勝負はつかなかったしどうするの？」

二人に勝負の行方を聞くために見てみると

お互い睨み合いそして

「今回は引き分けにしたいてやるよ！」

「せいぜい腕を磨くことだね」

お互い手をさしのべ握手をする。

「なんか友情ができたみたいですね」

「…ホント」

小早川さんと岩崎さんが

羨ましそうにする。

俺からしたらこの二人の信頼関係の方が羨ましいんだけどな。

「やっぱりあの二人似てるのよね」

「かがみさん…」

「ホントにね」

峰岸さんも二人を笑顔で見守る。

かがみさんは握手を交わしたふたりに近づいていく。

「こなた…ありがとう。それから……日下部も、親友って言うてくれて……ありがとう……」

「ツンデレきたー！」

勢いよくかがみさんに抱きつく泉さん。

「終ー！」

それに続いて日下部さんも抱きついていく。

「ちょ…恥ずかしいじゃない…！」

顔を真っ赤にしながらほどこうとするかがみさん。

「あはは…」

この二人はほんとにかがみさんを大事に想っているんだな！。それにきつとかかがみさんもこの二人のことを……。

,

第18話 茶色を煌めかせる者

「…なんで日下部さんがついてきてるの？」

「だってちびっこが柊と住んでるのに私がかやの外ってどう考えてもおかしいじゃん！」

ゲーセンでのバトルを終えてそろそろ帰ろうかと話が進むと峰岸さんが

「どうしてみんな同じ方向から帰るの？」

と聞いてきてつかささんが一緒に住んでいることを日下部さんと峰岸さんにすっかり喋ってしまったのだ。

「桃原君ほんとにごめんね…」

「あー、別に気にしなくていいよつかささん。ドジッ娘にはもう慣れたから……」

「はうう……」

しょんぼりするつかささん。

「あ、いや、大丈夫だよ！日下部さんだって本気で泊まるわけが…！」

「じゃあ私は荷物取りにいくから後で柊は迎えに来てくれよなー！じゃあバイバイ」

そう言っただけで日下部さんがグループから離れていく。

「ないと思ってたのに…」

「ご、ごめんね桃原君。あいつ言い出したら聞かなくて。でもほんとはいい奴だから許してあげてね？」

「はあ…」

まいったなあ。また家に一人増えるのか……。

「内心嬉しいんじゃない？」

泉さんがニヤニヤしながらボソリと耳元で呟く。

「だ、誰がそんなの！」

しかし小早川さんが

「私は一人増えて嬉しいですよ？」

…小早川さん、他人事のように言わないで…

「…ドンマイ」

…岩崎さん、慰めの言葉が短すぎるよ…。

「じゃあ私はこれで…」

日下部さんが去った後、峰岸さんは自分の家に帰ることに。まあさすがに彼氏がいたら泊まるのは無理だろうな。

「ではさようなら…」

峰岸さんは背中を見せ歩き出す。

「峰岸さん！」

俺は振り返る峰岸さんに言葉を贈る。

「暇なとき遊びにおいでよ！かがみさんも日下部さんもみんなで待つてるから！」

この時、俺は自分がなんでこんなことを言うのかわからなかった。でも言わなきゃいけない気がした。

「え、でも…それじゃあ桃原君に迷惑が…」

峰岸さんは困ったような顔をする。

「大丈夫！俺は大丈夫だから！だから…いつかおいでよ！そのときはかがみさんと迎えに行くからさ！」

俺はかがみさんの方を見る。それに気づいたかがみさんはニコツと笑い峰岸さんに話しかける。

「峰岸ー！絶対来なさいよ！約束だからねー！」

手を振りながら笑顔で峰岸さんを見つめる。

「家に来たときお菓子一緒に作るうねえ！」

「わ、私も歓迎しますから！」

「…待っています」

つかささん、小早川さん、岩崎さんも同じく手を振る。

「みんな……」

峰岸さんはクスツと笑い、そして

「うん！近いうちに遊びにいくからー！みんなバイバーイ！！」

満面の笑みで返信してくれた。

夕方、俺たちは家に戻ってみんなでくつろぐとするが、かがみさんの携帯に迎えに来てくれと日下部さんからメールがきて、かがみさんと泉さんが駅へ向かった。

「でもなんでかがみさんとお姉ちゃんなの？」

小早川さんが疑問を浮かべる。

「なんかよくわかんないけど泉さんが行きたいって言うから止めなかったんだ。だから日下部さんとは言い争うことはないと思うよ」

「桃原君はこなちゃんのこと信じてるんだねえ」

つかささんが柔らかく言う。

まあ信じてるっていえばそうかもしれない。

それにかがみさんもいるしね。

とりあえずみんなテレビを見て、三人の帰りを待つことに。

しばらくすると…

「た、ただいまー！」

あ、かがみさんの声だ。

リビングのドアが開き、最初にかがみさんと泉さんが入ってくるが日下部さんというと…

「アハハハ！ハハハハハ！アハハハハハハハ！ヒーヒー！ウヒヤヒヤヒヤヒヤ！！」

なぜか大爆笑していた。

「こ、こなちゃんやつぱりすごい!!」

「アハハハ! お、お姉ちゃん面白いよお!!」

「…クスクスッ!」

「アハ! アハハハハハ! ちびっこそれで学校行けよ! 絶対ウケるって!! ウヒヒヒヒ!! アハハハハ!」

あまりの顔を目の当たりにした俺は笑いが治まるまで、新しく茶色が塗られていたことに気づかなかった。

第19話 お約束

しばらくしてようやく笑いが治まり俺たちは動く気力ほとんどを失っていた。

「ねえ、かがみー！一緒に風呂入るー」

泉さんは笑わせる側なので元気が有り余っている。

「ちょ、ちよつとまって…力入んない…」

かがみさんは床に倒れこんでいた。そしてかがみさんだけではなく俺たちも…。

「へ、へんだ。柊がちびつこなんかと入るわけないだろ」

「も、もううごけねえ…。笑いすぎた…」

「…こなちゃんのあの顔は反則だよ…。刑務所に入ってもあれがあればすぐ脱獄できるよね…」

「む！失礼な！私はまだ入らないんだけど！」

まだってことはいつか入るつもりなんだ…。

「そんなことよりかがみー、早く入るー」

泉さんが手を引っ張るかがみさんは全く動こうとしない。その姿はまさに親と子に見える。

「だから無理だつてば…。ていうかあんた一人で入りなさいよ」

「私はかがみと入りたいのに…、じゃあもれなく桃原君も付いてくるようセッティングするからさー」なに？その付属品みたいな扱いは。

「だからさー、入るー」

「だから言ってるでしょ。私は…」

「……………かがみさん、一緒に入ってあげたら？泉さんはかがみさんと一緒に入りたいたけなんだしさ」

断ろうとするかがみさんに一緒に入ることを薦める。

「でも……こなたと入ったらこいつ変なことする気が……」

⋮
?

「変なことって?」

そう聞くとかがみさんは顔を俯け赤い顔になりながらも呟く。

「胸を揉んだりとか……」

「ぶっ!!!」

む、
む、
胸！
？

かがみさんの胸を揉む！？

いくらオタクの泉さんでもそこまでは……。

「大丈夫だよかがみー。だから早くおいで」

リビングのドアで手をワキワキさせながらかみさんを待つ。

なにかする気満々って顔だけど信じるしかないか。

「…ほら、泉さんもああ言ってるんだしさ」

「うん」

やつと頷くかがみさん。

一件落着かと思いきや……

「ちよつとまてよちびっこ！」

日下部さんが平和を崩す。

「柊と入るのは私だぞー！」

日下部さんの乱入でまたもやかがみさんを求める戦いが始まるかというその時！

「アッププイ！」

泉さんが例の顔をする。

「さあ柊は返してもら……ぷくく……ウヒヤヒヤヒヤヒヤ！
ウケる！マジウケる！アハハハハハハ！」

あつという間に日下部軍が撃沈。一発の弓が大将のツボを射ち抜いた。

三十分後、全員の風呂が済んで夕食をいただいた。

担当は泉さんとかささんがしてくれて、味は言うまでもなく美味しかった。

そのあとに部屋割りを決めるのだがここで一騒ぎ起きた。

「絶対私が柊と一緒に寝るんだってウゝァー!!」

「かがみはうちのだ!」

かがみさんと誰が寝るのか二人はずっと言い争っている。

「まあまあ、二人とも冷静に話し合わないで…」

一応落ち着かせようとするが二人は全く無視。

痺れを切らしたかがみさんはある一つの案を出す。

「まず落ち着きなさいよ。これじゃちがあかないわ。私がいいことを思いついたからもうそれで文句は言わないってことでこの場は終了! いい!?」

「まあ柊が言うなら…」

日下部さんはしぶしぶ了承。泉さんも頷く。

「でもかがみさん、いいことってなに?」

「一番気になったところをかがみさんに聞くと」

「日下部とこなたは一緒に寝なさい」

「「えー!!」」「」

泉さんと日下部さんが反対の意思を示す。

「じゃあお姉ちゃんはどこで寝るの?」

「私はあんたの部屋で寝るわ。こなたがいなくなったからつかさ一人になってるし」

しかしこれに泉さんたちが反論する。

「そんなの納得いくかー!」

「そうだそうだー!!」

ブーイングを続ける。

でもそんなことをしても無駄のような気がする。

なぜなら…

「うるさい！！あんたたちは黙って従う！！どうせさっきの状態じや進展しないでしょ！！」

…かがみさんって顔は美人なのに言うこときついんだよね…。

こうして部屋割りは泉さんと日下部さんペア、かがみさんとつかさんペア、岩崎さんと小早川さんペアとなった。当然俺はベッドを懐かしく思い出しながらソファーで就寝。

「あ、そうそう。みんなに言うておきたいことがあるんだけど」

ここで泉さんがみんなにあるルールを発表する。

「これからはみんなのことを名前で呼ばない？」

「なんで？」

唐突な泉さんに聞いてみる。

「だってさー、私たちって同じ屋根の下で暮らしてるじゃん。せつかくだから名前で呼びあって生活するほうが仲良くなったみたいでいいじゃん」

うーん…、悪くはないんだけどな。でもそれじゃあ俺は……。

「ちびっこそれいいな！そうしようぜそうしようぜー！」

「いやでもさあ……」

「…私は賛成です」

……なんか小早川さんまで同意されたら反論しづらい…。

「じゃあ異論はないみたいだからさっそく桃原君！みんなを名前で呼んでみて！」

「い、今！？」

「当たり前じゃん、さあ早く！言わないと全員でいじめるからね！」

泉さんたちが全員で俺を………

ああ！そこは！そこはやめてくれ！

うるさい！奴隷は喋らずに黙ってなさい！

次はここを攻めるねえ。

うぐっ！つかさん…ちょ、やめ…！

えい！えい！

小早川さん……、道具の使い方間違ってる……！その太いのは殴るんじゃないかって入れる方……痛いっ！

…もつといきます

――岩崎さん痛いって！

――まだまだ続けるかな！

あうあっ！もう駄目だ……うくっ…う、うわああー！！

「ヘラヘラ…」

「ちよつと桃原君！大丈夫！？」

「へ？……ああ、うん、大丈夫大丈夫…」

いかん！我としたことがなんという妄想を！
とりあえず泉さんの名前…名前…。

「じ、じゃあいくよ…」

「はいよー」

……。

……。

「……………こなた」

「うおっ！ーびつくりしたあ！」

泉さん……いや、こなたは胸を押さえてなんだかホッとしていた。

「……………次は……私ですね」

小早川さんが顔をひきしめる。

「えと……えと………ゆ、ゆたか」

「あ……」

名前で呼んだ瞬間、ゆたかはその場で座り込む。

「だ、大丈夫？」

「す、すみません……男の子に名前で呼ばれたのは初めてで……顔を真っ赤にするゆたか……ん？」

初めてってことは俺しかゆたかつて呼んでいないのか……。

なんかそう考えると心が嬉しくなった。

「……………次は私」

……岩崎さんか。ちょっと気まずいけど頑張るしかない！

「……………み、み、みなみ！」

「……………（ポッ）」

ちよつと力強く言ったせいか、みなみは顔を背けて反対側を向く。

「最後は私だなー。さあ名前で呼んでみる！」

「みさお」

「ぶはっ！」

みさおはその場で倒れる。

「ちよつとまでー！なんか私ん時だけドキドキというかときめきが足りないんじゃないか！？」

「いや、そう言われても……なんでだろ？なんかみんなと違って日下部さんはみさおって簡単に言えるんだよなー」

「そんなあ……」

「ほらみさお、もう寝る時間よ」

かがみさんがみさおを上に乗れて行くとする。ん、まてよ……」
「はやっぱり……」

「……ほら、かがみが名前で呼んでくれたんだから元気出して」

「へ？」

一時の間があく。

「……今、桃原君……私のこと……」

「や、やっぱりさ！さんはないほうがいいかなって思ってたさ！」
笑いながら照れ隠しする。

「桃原君……ふふっ。……ありがとう」

かがみは笑顔でお礼を言う。

「べ、別にいいよそんなの！それに……」

俺は妹の方を向く。

「つかさも同じだったからね」

「え、わ、私も！？な、なんだか恥ずかしい……。じゃあ私も桃原君のこと……」

つかさは少し顔を赤らめ

両手を後ろに組んで

「ありがとう……椿君」

「……へ？」

「……さっきの……お返し」

「そういえば私たちも桃原君のことを名前で呼ばなきゃいけなかったわね」

「いや俺はべつに……」

「ダメよ桃原君！ルールなんだから！」
かがみさんが無理矢理押しきる。

「じゃあみんなでいくよ、せーの……」

「……」
椿君「……」

,

第20話 サバイバルゲーム

「うーん……よく寝た……」

気持ちのいい朝。

目が覚めた時はかなりだるいのに関わらず今日に限ってスッキリと体が軽い。

「……なんか雪でも降りそうだな」

などと冗談を言っただけでカーテンを開けても空はド晴れになっていた。
ということとは……、

「なにかいいことあるかも」

そう思いテレビをつけて日曜の占いをしてみると……

『獅子座のあなたはバリバリに運がいい日です！周りの人達からも優しくされ人生最大の晴れ日和となるでしょう！』

こういうのはあんまり信じないのだが自分のことを良い方向に言われた時だけ信じてしまうのは気のせいかな？

まあいい……。ともかく今日の俺は絶好調にちがいない！

すると玄関が開く音がした。

「椿君ー！サバイバルしよー！」

「……………」

今までのうかれっぷりをぶち壊すかのように泉さん……いや、こなたは不気味な笑顔をしていた。

嗚呼……雪は降らないのかなあ……。

冷静に落ち着き、もう一度外を見るといつかの店長とみさおがこっちに親指を立ててにっこり笑っていた……………。

「それで今日はどうしたの…」

すでに起きていたみんなと外にいた店長をリビングに集めサミットを始める。

「いやさ、実は私とみさおの勝負をつけるために今日対決することになったんだよ」

「……で？」

「それで何をするかちびつこと話し合っただんだけど案が浮かんでこねえんだなー。だから早朝に散歩しながら考えていたらアニメ店長って奴に会ってさ！対決方法を聞いてみたらサバイバルって言い出してよー！マジウケるよなー！」

「……で？」

「それで全員でサバイバルをやるうってわけだー！」店長が拳を握りしめながら熱演する。

「もちろんみんなOKって言うてるからあとは椿君だけだよ」

「というわけで…」

三人が手をワキワキしながら近づいて来る。

「え、な、何を…」

「強制参加ー！！」

こなたが俺に飛びつき、それに続いてみさおと店長が俺のパジャマを脱がす……ってそこは！そこは止めて！頼む！マジで！リアルにマジで！（ピー）が！（ピー）が見えるって！

「イヤアアーン……！！」

「くはー！ここの公園でけえなー！」

みさおが広場ではしゃぎまわる。

「早くやろ〜早くやろ〜！」

「ハイハイ、まず落ち着きなさいって。チーム分けがまだでしょう？」

かがみがみさおを宥める。今日はなんかついてないかも…。

「ごめんね椿君…」

「…え？」

気づくとかがみが俺の横にいた。

「なんか無理矢理やらしちゃって…」

かがみ……。

「…大丈夫だよ。それにたぶん俺はどこかでワクワクしてるかもしれないしね」

かがみに心配をかけさせないため柔らかく応じる。

今の言葉に偽りはない。

実は言うといけないさバイバルは嫌ではないのだった。

「そっか…よかった……。あとさ…私のことはさん付けで呼んでほしいな」

「なんで？」

「今までの椿君に呼ばれていたから…だから…」

顔を赤くさせながら下を向く。

ていうかそんなに恥ずかしがられたちゃこっちまで恥ずかしくなっちゃうんですけど…。

「…わかったよ。かがみさん」

「ありがとう…」

「まあこんな感じかな〜」

チーム分けが決まりそれぞれ分かれる。

こなたチームに俺、かがみさん、みなみちゃん（かがみさんだけで

なく、他の人も言いやすくちゃん、さんを付けた）となり、対するみさおチームにはつかさ、ゆたか、そして電話で呼んだあやのさん（下の名前で呼んであげてとかがみさんが命令）が助っ人として来る。ちなみに店長は大人なので審判の役割、

エアガン、ホルスター、望遠鏡、腕時計などは店長から送られる。

「では今からルールを説明する」

「なんかドキドキしちゃうね。みなみちゃんとは敵同士になっちゃったし…」

「大丈夫。ゆたかは絶対傷つけないから」

…花が見えてしまうのはなんでだろ？気のせいなのかな？

「ゴホンッ！では説明するぞ！まず勝敗の決め方は互いの大将を仕留めれば勝ちだ。そして体に弾が当たった者は脱落、つまりリタイアすることで公園の入り口で待つこと。もちろんリタイアのやつらは戦闘などに加勢をしてはいけない。制限時間は一時間半だけだ。勝敗、また時間がすぎたら笛を吹く。サバイバル開始時間は午前十時半！各自健闘を祈っているぞ！では解散！」

店長の号令と同時に各チームは十時半まで作戦会議をするため一番公園の端に移動する。

「さてと、まずはどうやって攻める？」

こなたが俺たちに聞いてくる。

「やっぱり罠とかを使うのがいいんじゃない？」

「でも数が少ないからいきなりリスクが高い策はやらない方がいいと思う」

「じゃあどうするの？」

「うーん…」

三人頭を悩ませていると

「…あの、二手に分かれたらどうでしょうか？」

みなみちゃんが手を挙げて意見を入れる。

「…確かにそれいいかも」かがみさん少し考えてながら呟く。

「でもさ、こんなにでかい公園なんだから2 - 2に分かれたら誰がどこにいるか分からなくなつて逆に不利じゃない？」

「あ、そつか…」

また振り出しに戻る。

しかしこなたが

「なら1 - 3は？」

「1 - 3でも同じじゃ…」

「1 - 3よ！」

かがみさんが立ち上がり俺を見下ろす。

「1 - 3なら3はフォーメーション組んで動けば問題ないし1は自由にてきて奇襲しやすいし、失敗してもこなたの運動神経なら逃げ切れるじゃない！」

…なるほど。確かにそれはいけるかもしれないな。

それに今日の俺はツイてるはずなんだ！

「よし、じゃあそれでいこう」

「うん…あ、もうすぐ十時半だよ」

腕時計を見ると残り五秒…四…三…二…一…

「ピイイイイイ！」

もう俺たちには周りの人に迷惑をかけないという人として当たり前
のことは頭の中のコマンドには存在しなかった……

第21話 消えたフリーマン

「こちらかがみ、前方左右以上なし」

「…こちらみなみ、後方左以上なし」

「こちら桃原、後方右以上なし。引き続き警戒を緩めるな。何かあったらすぐに知らせろ」

「了解」

サバイバル開始から五分、こなたをフリーマンとして相手を攪乱させる1-3のフォーメーションで遊具などに隠れながらゆっくり前に進んでいく。

フォーメーションはかがみさんを前に配置し、後方左にみなみちゃん、後方右に俺の三角形型の陣形で挑むことに。

「ふう…。でも案外見つからないものね」

かがみさんが拍子抜けしたように言う。

「まあ敵がどこにいるかわからないから当たり前だけどね」

「今ごろこなたはどこにいるのかな……」

「ちゃんと動いてくれてたらいいんだけど…」

「がさがさ……」

「…っ！」

ジャキッ。

みなみちゃんが突然左斜め前に銃を構える。

「どうしたのみなみちゃ…」

みなみちゃんはとつさに俺の口を塞ぐ。

「…伏せて。向こうに誰かいる」

「え？」

望遠鏡でみなみちゃんが指す方向を覗いてみると…

「あれは……つかさ？」

「え？ ホントにつかさなの？」

かがみさんが少し驚いたように聞いてくる。もう一度見ても黄色いリボンにシヨートヘア、間違いなくつかさだ。そしてその後ろには…。

「二人とも…つかさの後ろにみさおとゆたか、あとさらに後ろにあやのさんがいる」

「ダイヤモンド型ね。でもどうやって攻めるの？」

「……どうやったらいいんだろ…」

正直どう攻めたらいいのか全くわからなかった。
するとみなみちゃんが

「…大丈夫。私に策があるから」

そう言ってみなみちゃんは銃を持ち直し俺の隣に来る。

「…私が前に出てつかささんに銃を撃つからみなさんは気づかれな
いように後ろと左に分かれてください。そして空いている右に誘い
出して下さい」

「…ん？ なんで右に？」

「…最初にこなたさんが右へ向かっていったからもしかしたらいる
かもしれない。それを上手く利用して四方向から攻めます」

あ、なるほど。確かにこなたは右から探してくるって言うてたっけ。
みなみちゃんよく覚えてるな。

「とりあえず俺は後ろ、かがみさんは左に回り込むよ。合図はみな
みちゃんの一発目で分かれるってことでいいかな？」

「…はい」

「わかったわ」

「よし、じゃあみなみちゃん。頼むよ」

みなみちゃんはゆっくりと二丁拳銃を握りしめ引き金を引いた。
パンッ！パンッ！

「はうっ！？」

つかさの小さな声が届く。

よし、作戦開始だ。

俺たちは急いで回り込む。

走りながら横を見ると遠くでつかささんたちがみなみちゃんに向けて銃を応射している。

「じゃあ私はここで構えるわね」

かがみさんがその場に伏せる。

「うん、気をつけて」

「椿君もね！」

そして二人は別々になった。

パパパパンツ！

数秒後、近くで銃撃音が聞こえてきた。おそらくかがみさんが撃ち始めたのだろう。

「俺も急がないと……」

敵の後ろに回り込んでいくとようやくあやのさんが見える。つまり後ろ側に着いたってことだ。

俺は急いであやのさんに銃を向ける。

しかしいくらゴーグルをしているとはいえ、女の子に弾を当てるのは申し訳ないな……。それにみんな前に気を取られている。今なら近づけるかも……。

そう思っただけは右へ誘い出すのではなくあやのさんをリタイアさせる方を選んだ。

「気づくなよ……。そのまま……そのまま……」

辺りは銃撃音であやのさんは全く気付いていない。

「そのまま……そのまま……」

匍匐前進で前に進み、そして……

「あやのさん、動かないで……」

銃をあやのさんの背中に当てる。

「へ？うそ椿君？」

「パンツ。……あやのさんリタイア」

銃を撃たず口で言うとおやのさんは持っていた銃を手から落とす。

「残念…もう少しやっていたかったな」

「ごめんね…あやのさん」

「椿君は悪くないよ。やらなきゃやられるし、それに……」

「それに？」

「椿君、優しいから……」

「優しい？」

あやのさんは少し笑いながら話を続ける。

「だって…私を撃たないでくれたから」

そう言っておやのさんはゴーグルを外す。

「だから…椿君は優しいよ」

「なんか…そんなストレートに言われたら照れるな」

「ふふっ。じゃあそろそろ私行くね」

「あ、うん」

俺は銃を持ち直し銃撃のするほうへ向かおうとする。

「椿君！」

あやのさんが声をかける。

「こんなこと言うのも変かもしれないけど…頑張ってね！」

「ああ！もちろん！」

あやのさんをリタイアにして俺は後ろからみさお中心に撃つ。

だってゆたかとかつかさに当てたりしたらなんか男として最低中の最低だからな。

そして三人が右に逃げていった。

「かがみさん！みなみちゃん！」

「わかってる！」

俺たちは急いで追いかけた。

これで一応作戦成功。

しかし俺たちの行く末には……………。

「あれ？」

かがみさんが何かに気づき下を見る。

「どうしたのかがみさ……………」

がしっ。

「桃原君…これって…………」 かがみさんが震えながら俺にしがみつく。

「…まさか…うそだろ？」 俺たちが動揺する理由、

それはそこに落ちている銃にあった。

それを拾い改めて確かめる。

「や、やっぱりこれは…こなたの……………」

そっ…そこにはまぎれもなくこなたが持っていた銃だった……………

第22話 空色のご加護

「な、なんでこなたの銃がここにあるんだ…？」

みさお達にやられたのか？

だが銃声など聞こえてはこなかった。

ならこなたが落としたのか？いや、それこそあり得ん。手に持っていたのを落としたんだったら普通拾うだろ。ということとは…。

「たぶん…こなたはもう……」

「……………」

辺りを闇が覆ったように暗く感じてかがみさんは顔を俯ける。

「…ここで一旦作戦を練り直しましょう」

みなみちゃんが指示を送る。

確かにここは木が多く伏せていればそう簡単には見つからない場所だ。

俺たちは再度作戦を考え直すことに。

だがその瞬間！

パンッパンッ！

立て続けに二発弾が飛んでくる。

「…危ない！」

反射神経のいいみなみちゃんはいち早く気づき俺たちをかばう。

「くそっ！一体どこから！？」

「椿君！あつちよ！」

かがみさんが少し離れた大きな木に向けて銃を放つ。「バレるの早すぎだろ！それに数的には互角だがあつちは突撃覚悟で来ているし

…。どうすりゃ……」

打開策が見つからない俺にみなみちゃんが

「…私に任せて」

と前に出て応戦する。

「…私が正面からねじ伏せます。二人は援護を」

そう言い残し、みなみちゃんは身を縮めながら疾走する。

「よし！かがみさん！」

「ええ！わかつてる。こっちに注意を引き付けるんでしょ？」

俺たちはみさお達に応戦する。

しかし激しく飛び交う弾にみなみちゃんは苦戦する。

「うおおおお！絶対負けないかなー！」

大将のみさおが銃をみなみちゃんに連射しまくる。

あれじゃ近づけないな…。なら……。

「みなみちゃん！右斜め前に出て！」

俺はターゲットをみさおから別の奴にする。

疾風のように駆け抜けるみなみちゃんの行く先は…。

「こ、来ないで〜！」

つかさが俺に合わせた照準をみなみちゃんに向ける。

しかしここでつかさがドジをしてくれていた。

「あ、さっき弾だけ落としたんだった…」

つかささんの銃が弾切れと知り完全な無防備状態。

そして…。

「…動かないでください」

みなみちゃんの銃がつかさの背中に当てられる。

「…つかささん、討ち取りました」

「はうあ…」

つかさは緊張の糸が切れたのか、その場で座り込みゴーグルを外す。

「あゝあ、終わっちゃった…。けっこう楽しかったのになあ…。

でもみなみちゃんってすごいねえ」

「…いえ…そんな……。

…では私は続きがあるので」

みなみちゃんも赤くなりながらもみさおとゆたかの元へ行く。

「つかさ〜！」

「あ、お姉ちゃん！」

俺とかがみさんはつかさの側にくる。

「つかさ大丈夫？怪我とかしてない？」

かがみさんがおろおろしながらつかさの体を見て回る。

やっぱり優しいお姉さんなんだなあ。

「だ、大丈夫だよお姉ちゃん。そんなことより、早く行かないとみなみちゃんが…」

「あ、そうだった！行くわよ椿君！」

「あ、先に行つて。俺はつかさに聞きたいことあるから」

何を聞こうとしたのか、かがみさんは理解したらしく頷いて先に行く。その後ろ姿を確認したあと、俺はつかさにこなたを見なかったか聞いてみる。

「え？こなちゃん？私達は一回も見えてないけど…」

「やっぱり…」

これで確信した。こなたは別の誰かにやられたつてことが。まさか警察？

でもそれだつたらもつと積極的に止めに来るか…。

「こなちゃんがどうかしたの？」

考えていた俺の目の前につかさの顔が入り込む。

「へ？いや、別になんでもない……。あ、そろそろ俺も行かなきゃ」

弾を補充して体を反転させ前に進もうとすると

「あ、待つて椿君！」

つかさが後ろから呼び止める。

「あのね椿君…これ…」

少し体をもじもじしながらつかさは一つの小さなお守りを出す。そしてそれを俺の右手にそつと渡して瞳を閉じ、その手を優しく両手で握る。

「…これは？」

「椿君が…怪我をしないようにって」

つかさが顔を上げて笑顔で答える。

「へ？いや、その、えと、あ、ありがとう………」

ストレートに言われたせいで俺は思わず顔を真っ赤にする。それにさっきの笑顔…、あんな可愛い笑顔を顔の近くでされたら誰だって赤くなるだろう…。

ていうか言った方より言われた方が恥ずかしくなるってありかよ…。

「椿君…」

「ん？」

つかさが心配そうな顔をしながら言葉を届ける。

「ホントに怪我…しないでね？」

「…うん、大丈夫。なんたってつかさ様のご加護がついているんだから安心して」

「クスッ、もう椿君ってば」

そう…、あの超ドジっ娘のご加護がついているんだから……。

俺はこの時、かなりの不安が背にのしかかってくるように感じたのはなんでだろう？

俺は急いでみなみちゃん達と合流すべくアスレチック、小さな森を抜ける。

だがそこには……。

「こ、今度はみなみちゃんの………」

二丁拳銃が無惨に壊れていた。

まさかみなみちゃんが！？ 慌てて周りを見回すとさらに向こうで壁を盾にして撃ち合っているかがみさんがいた。

「かがみさん！」

「椿君遅いわよ！」

「ごめん、それよりみなみちゃんまで…みなみちゃんまでが知らない誰かにやられてる！」

冷静を失った俺に対しかがみさんは落ち着いて話す。

「あー、みなみちゃんならゆたかちゃんとお峙した時にどっちも撃てなくて結局みなみちゃんが銃を壊しちゃったのよ。それでゆたかちゃんも銃を捨ててお互い仲良く公園の入り口に行っちゃったわ。まあ気持ちは分からなくはないけどね」

「へ？そうなんだ……」

な、なんだ…、よかった。俺はてっきりやられたかと。

それにしてもあの二人はホントに仲がいいな。

たぶん銃を構えあっても……

「…ゆたか、私にはゆたかを撃てない…。だから撃つて」

「やだよお…グスツ、みなみちゃんを傷つけるなんてやだよお！」

「……ゆたかが撃たないと私が撃つことになる。だから…」

「違う！違う違う！！」

こんなの間違ってるよ！私は…私は…、みなみちゃんと戦いたくない！」

「…だけど」

「敵だから撃つとか…撃たなきゃ撃たれるとか…そんなの関係ない！！」

「………」

「私はただ……みなみちゃんと一緒にいたいから……」

「…ゆたか」

みたいな超ベタな展開になってたーなんてことは流石にないよな。

まあ今はみさおに集中するか。

「かがみさん…二手に分かれて突撃しよう。そうすればみさおは必ず混乱する。時間も余裕が無くなってきたしここらで一賭け勝負しよう」

「でも椿君が大将だからやられちゃったら負けちゃうじゃない！」

「大丈夫…運は今、俺に味方しているから」

俺はお守りを握りしめながら優しく微笑む。

「…わかったわよ」

ようやく了承を得て、みさおが次の弾を補充する一歩前を狙うことに。

パンパンパンパン…。あと二発…。

パンツ！

いまだ！

「かがみさん！」

「ええ！」

二人同時にダツシュ！

みさおは残り一発を必ず俺に当てるはずだ。だから俺のすることは…！

「おりゃー！」

俺は今までずっと持ち歩いてきたあなたの弾が入っていない銃をみさおに投げる。

いきなりのことにみさおは俺への照準を外してよける。だが避けた結果には……。

「終わりねみさお！」

パンツ！

かがみさんが銃を構えみさおに向けて撃ったその時！

パンツ！パンツ！

「痛っ！」

横から強烈な銃弾の軌跡がかがみさんの撃った弾の方に当てて軌道をずらし、それと同時にもう一発が持っている銃を撃ち当て、その

反動でかがみさんは銃を落とす。

「いったい何が!？」

「どこから撃つてきたの!？」

「ふへ？」

あまりの神業に驚いたが、

何者かわからない奴に攻撃をされ、俺は急いで軌跡の出どころを見
つける。

そこにいたのは……

第23話 n o t g r a v i t y

「だ、誰なんだ…あれは」

警察姿に眼鏡、どこかのコスプレお姉さん！？

…じゃあないよなあ。

けどマジで誰なんだ？

かがみさんの撃ち出された弾と持っていた銃を撃ち落とすなんて…。

「ハッローエブリワン！みんな盛り上がりつつあるねー！」

警察姿の年上がゆっくりと近づいてくる。

「あれは…成美さん！？」かがみさんが信じられないかのように目を見開く。

……だから誰？

見た目の姿とは逆に成美さんとやはらノーテンキな声を張り上げる。

「あ、あの…どうして成美さんが…？」

かがみさんが恐る恐る聞いてみる。

「いやー、実はパトロール中にこの公園でエアガンで遊んでる高校生がいるって聞いて注意するように頼まれたんだよねー！それで来てみたらこなたがいるから私も参加しちゃえ的な感じになったわけよ」

「いや参加しちゃって…」

ノリだけで生きてる人だな…。

「じゃあこなたがいなくなったのも成美さんの仕業だったんですか！？」

「そだよー」

「そうだったんだあ…」

かがみさんはスッキリしたように息を吐く。

「ところでみんな続きはやんないの？」

「やんないのって…成美さんは止めに来たんじゃ……」

「これぐらい別にいいんじゃない？私も小さい頃はやったやった」
成美さんは勝手に頷く。

「というわけで君には自己紹介がまだだったね。私は埼玉県警の交通安全課をやってる成美ゆい。

こう見えても銃は得意だから職場ではシャープシューターゆいちやんって異名がつけられてるから気を付けてね。ちなみにゆたかの姉だよ」

……へー。ゆたかにお姉さんいたんだ。でもなんか雰囲気とか全く似てないな。さっきの会話から察するに常にハイテンションで今を全力で生きていますみたいな感じだ。

交通安全課に全く関係ない異名もついちゃってるし。っていうかコスプレじゃなくて本物の警官なのか！

「ってことで君の名前は？」

「え？あ、俺は桃原椿っていいいます」

「あゝ！はいはい！君が椿君かゝ！おじさんからよく聞いてるよゝ！」

「おじさん？」

「いったい誰のことだろう。

「ああ、おじさんっていうのはこなたのお父さんのことだよゝ！前にゆたかからも電話あったし、ウチのゆたかがお世話になってるそうで」

「いえそんな…」

頭を下げられ俺もつられて頭を下げる。

「でもねー」

顔を上げた成美さんが笑顔で

「ウチのゆたかに手を出したら逮捕するよー？」

怒りのオーラが成美さんの後ろに漂う。

「は、はあ…」

「それじゃあ早く続きやろー！」

成美さんが銃を構える。

「え？やるって…マジでやるんですか？」

「当たり前じゃん！警官もいじめたくなるときがあるのだー」

照準を俺に合わせて放つ。

「うわっ！ちよっ…何で俺をー！？」

背中を向けて逃げる俺に成美さんは後ろから追いかけてくる。

「だってかがみちゃんはさっき銃に弾を当てたから戦闘不能。日下部さんは私が邪魔しなかったらかがみちゃんが撃つてたからもうリタイアになってるの。だから君を討つ！」

パパパパパパパパパパパパパパパパパパパパパパンツ！！

「そんなのありがよ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
！！！！」

ピイイイイイイ…。

公園に笛が鳴り響いた時、俺は霞む意識の中で確かなことがわかった。

つかさのお守りに意味はないことが……………。

「うっ…痛い…」

ゲームが終了し、ゆい姉さんの勝利という予想外の結果に終わった。入り口に帰り、かなり弾が当たったため動けない俺は成美さんの車でこなたと一緒に帰ることに。他のみんなは徒歩でゆっくりと帰る。しかし全然手加減してくれなかったな…。俺に銃を連射しまくったせいで身体中にチクチクと痛みが走る。

「大丈夫？椿君」

こなたがツンツン傷口に触れる。

「痛い痛いっ！あんまり触らないでよお……」

「いや、ごめんごめん。弱つてる椿君を見るといじめたくなつちやつて」

…どんなSだよ。

「ご、ごめんねー椿君。私がつい調子に乗っちゃって……」

成美さんが運転しながら謝る。

「いえ、もう過ぎたことですしいですよ。それより今は安全運転を……」

後ろを見ながらの運転は流石に警察でも危ないしね……。

「はいはい！了解！了解！」

ふう……。ともかく今は安静に……

「あ、追い越し……」

「は？」

「このやろー！！！」

ドビュッシー！！！！

いきなり成美さんは車を飛ばし、前の車に追いつく。しかしその振動が俺の身体に響く

「うわっ！ちよっ、成美さん！ストップストップ！」

痛いつて」

「ブツブツブツ……、この先の三連カーブで……」

駄目だ！全く聞こえてない！

「こなた！何とかしてくれ！」

「あゝ、悪いけどゆい姉さんって運転しでしたら止まんないんだよね」

[illegible]

成美さんはもう俺の家に向かうことを忘れ、どこに行くかもわからないまま車をぶっ飛ばし続けた。そして帰ってきた頃にはみんなはぐっすり眠っていた……………。

,

第24話 危ない人

「え？家に帰るの？」

月曜日の朝食にかがみさん、つかささん、みなみちゃんは明後日まで家に帰ると言う。

「うん。実は昨日私たちが早く帰ったあとに携帯で親に電話したの。それで…」

かがみさんは口ごもる。

だがだいたいの気持ちは読めた。

「そっか。うんわかったよ。親も心配してるだろうし今日明日は元気な顔を見せてあげなよ」

「…ありがとう」

「みなみちゃんもいなくなっちゃうんだ……。それじゃあこの家が少し寂しくなっちゃうね」

ゆたかが残念そうな顔をする。

「…大丈夫だよ、ゆたか。学校でまた逢えるから」

「……うん、そうだね。楽しみにしてるね」

ゆたかが笑顔で言う。

ふう……。それにしても二人の会話は見てるこっちが恥ずかしくなってくるのはなんでだろう…。

「それでかがみさんたちは学校が終わったらそのまま家に帰るの？」

「あゝ、私はそのつもりだけどつかさとみなみちゃんは？」

「私も明日はまっすぐ家に帰るよ」

「…私も」

「そっかあ……。じゃあ明日は俺とゆたか、みさおの四人になっちゃ

うね」

いきなり三人もいなくなるので俺は心細く感じた。

「でも柊がいなくなっちゃったら私がここにいる意味ないからやっぱり私も帰るねー」

……まあそうだよな。みさおの性格だったら目的がいなくなったらそりゃ帰るよな。

「じゃあ今日は三人だけだね。どうする椿君？これを機に私と一気にゆうちゃんの好感度上げちゃう？」

それとも夜中に……」

「しないしない！ゲームじゃないんだからそんなのするわけないだろ！」

「冗談だよ冗談」

こなたがいつもの緩い顔になる。

「さあみんな。そろそろ学校に行かないと遅刻するわよ」

かがみさんは鞆を持ち、先に玄関へ。

他のみんなもそれに続くが……。

「あれこなた？何してるの？早く行くぞ」

見るとこなたは携帯で電話をしていた。

「あ、うん。すぐに行くね」

パタパタと玄関で靴を履く。

その時のこなたの不審な笑みに俺は全く気づかなかった……………。

ゴクゴクゴクゴクツ。

「ぶはー！やっぱり頭の運動後の一杯は最高ですなー！」

帰宅中、こなたが缶ジュースを飲みながら幸せそうにする。

「あんたは別に脳を働かせてないでしょうが！」

なんだかこのやりとりもお馴染みになってきたなあ……。

「いやいや、今日のはかがみがいなくなつて寂しいから勉強になんて

集中できるわけが……」

「ば……！な、何言ってるのよ！」

「おやあ、かがみもしかして照れてるの？かがみの照れ屋さん」
「うるさい！」

顔を真っ赤にしてこなたから背ける。

「じゃあ私たちはこっちだから」

かがみさん、つかささん、みなみちゃんは反対方向に行く。

「うん、明後日楽しみにしてるから」

「行ってくるね」

「…行ってきます」

行ってきます…か。普通ならバイバイとかが正しいんだろうな……。三人の後ろ姿を見送ったあと、俺たちもいつもどおり帰る。

しかし普段いるはずのツツコミとドジッ娘、無口キャラがいなくなった。それだけでやるせない気持ちになっちゃうのは当たり前なのかな…。

あ、そういえばあと体育会系の奴がいたような…。

などと考えていると俺の家が見えた…が、その家の前に誰か立っている。

「あの人誰だろ？」

立ち止まり目を凝らすけど遠すぎて分かりにくい。まず俺の知り合いじゃないな。その人は見た目的に四十代くらいの青髪おじさんだ。なら誰の……。

「お、来たか」

向こうはこちらに気づき近づいてくる。

そして……

「こなた〜！ゆうちゃん〜！会いたかったぞ〜！」
ガシッ！

「はい？」

なんと周りを気にせず、いきなりこなたとゆたかに抱きついてくる。ま、まさかロリコン不審者か！？

「ちよっ、お父さんヒゲ痛いって！！」

「く、苦しいです……」

「へ？お父さん？」

じ、じゃあこのロリ親父がこなたのお父さん……！！！！？

「こなた……！ゆうちゃん……！」

う、うわあ……。端から見たら完全な犯罪だよ……。……。

「……というわけでさつきは取り乱してすまなかった」

「いや、どういうわけか全く分かりませんから。読者にもっと分かるように文字にしてくださいよ！」

いったん家に入りリビングで座りながら話す。

「むう、だから日々こなたとゆうちゃんのことを心配していたらなんと！こなたから今朝電話があつて『今日は椿君の家に来て』と言われ住所を教えてもらいここまで来たというわけだ」今朝……あの時の？

「じゃあこなたが電話してた相手って……」

「うちのお父さんだよ」

つまり元凶はこなたってわけか。

これは後でみっちりかがみさんにこなたをお仕置きをしてもらうか。俺がしたらなんかいろんな意味で危ないし……。

「というわけで飲もう！」

こなたのお父さんは立ち上がり、テーブルに俺の家にあつた父さんの自慢酒を出す。

ていうか勝手に出すなよ！そして一人だけ酒を飲み、ばか騒ぎが始まった。

「ぐー……ぐー……んが！……ぐー……」

「あーあ、完全に堕ちちゃってる……」

祭りは深夜まで続き途中でこなたとゆたかは風呂等を済ませ先に寝かせた。

だが俺は二人がこっそり抜け出すための人柱となって最後まで付き合わされるはめに……。

「なんか起こすのも悪いからこのままにしとくか」

俺はこなたのお父さんに薄い毛布をかけて二階に上がる。

「しんど……」

ウーロン茶の飲みすぎで体がだるくなる。

自分の部屋に入り久しぶりのベッドに倒れ込む。

しかし俺はすぐにベッドに異変があることに気づく。

「このベッド……なんかいいにおいがする……」

鼻をつけてにおいを嗅ぐ。何だろ、洗った後のおいとかそういうのじゃなくて……。

そういえばこのベッドってこなたが使ってたんだった。ってことはこのにおいは……。

「うわー！……どうしょー！……どうしょー！……なんかバリバリに目が復活しちゃった……！……」

ベッドの上で無茶苦茶に転がり回る。

さっきまでしんどかった体も元気ハツラツに動く。

「うう……。今夜は眠れないかも……」

そんなことを覚悟した時、廊下から知らない声が聞こえた。

「もう、そう君ったらよそのお宅であんな寝方して」

ん？何だろ……？

とても綺麗で澄んだ声が耳に届いてくる。

これは女の人の声だ。

でもこの家にいる人間じゃないのは確かだ。

すると最初から開いていた俺のドアから入ってきたのは…………。

「あら、こっちの部屋じゃなかったのね」

「なっ!？」

俺はその姿に声が出なかった。透けて見えることよりもあの背の低さ、青色の長い髪、そして垂れ目に緑色の瞳。その姿はまさに…………。

「こ、こなた？」

そう呟くと

「あら？もしかしてあなたは私の姿が見えちゃってる？」

違う。こなたじゃない。姿はこなたに似ているが雰囲気、声の質、そっくりだけどこなたとは異なる優しい瞳。

「それにしてもあの娘と私はやっぱり似てるのね……」

ま、まさか…………この人……。

「はじめまして、桃原椿君。私はそう君の元妻、そしてこなたの母親の泉かなたと申します」
その女性は優しく微笑んだ…………。

第25話 彼方から愛を

「こ、こ、こなたのお母さん!?」

そんなバカな!?だ、だって確か小さい時に…!

「ふふ、そう君に逢うためなら私はどこにでもいけるの……」
そつと俺の唇に人差し指をつける。

その行動に俺はドキツとする。

……はは、こりゃこなたのお父さんも惚れるわけだ…

俺はリビングに降りてお茶を取り出したまた二階に戻り部屋にいるか
なたさんに出す。

「どうぞ、かなたさん」

「あ、私幽霊だからお茶は……」

「…え?あ、すみません!」

確かに考えたら幽霊はお茶とか飲めないよな……。

というか幽霊を前にして

冷静でいられる自分に俺は驚いていた。

「あの日から……」

「?」

「あの日からいつも彼方からそう君達を見守っていたわ……」

…あの日ってのはたぶん亡くなった日からってことだろう。

でもまさか幽霊がホントに存在するとは思わなかった。実は基本的
に自分で見ないと信じないタイプなのだが、今こうして見るだけで

はなく、話していることを体験している俺に否定を組み立てることはできなかった。

「あの時そう君、たくさん泣いてて……見てられなかった」

「……そりやそうですよ。大切な人がいなくなる気持ちは言葉にできない程辛いですから……。でもその時、こなたは小さかったらしくてかなたさんのことを……」

俺は言葉を詰まらせる。

「……いいのよ。そう君が元気に明るく育ててくれたから」

そつと微笑みを渡す。

それが俺にはとても寂しそうに見えた。

「それにあなたと逢ってからなんだかあの娘、前より明るくなってると思うの。だからありがとう……」

「い、いえ俺は別に何も……!」

照れながら俺は頭をかく。

「でもこなたが来たあの日に、もし俺が追い出したらみんなを知ることかけがえなかった。だから今は泊めて良かったってと思います」

「そう……あなたはホントに優しいわね」

「え?」

優しい?

そういえばあやのさんも俺のことを優しいって言っていたな。

でもあれは当然のことだし……

「自分じゃわかってないと思うけどそれはあなたの長所だから大切にしたいわね」

この細く包む声を俺は知っている。なんだか母さんに似ていたからいつも子を想ってくれる母さんに……

「それにしても惜しいわね」

かなたさんは困ったように頬つぺたに手をつける。

「何がですか?」

「だって椿君ならあの娘と結婚してもいいかなって思ったんだけど

ど、他に女の子たくさんいるみたいだし、背は私に似て趣味とかはそう君に似てしまったからピンチなのよね」

「…………でも俺は……ただ優しいだけかもしれないし……」

俺は俯きながら自分を見つめる。ほとんどいいところのない自分を。

「ばかね……」

「え？」

「あなたは親のいない気持ちができるから…………だから私はできればあの娘と結ばれて欲しいんだけどそれはわがままね……」

「……………」

「大丈夫……。あなたは誰を選んでも幸せになれるわ」

なぜかかなたさんの一つ二つの言葉に重さがあるのを感じた…………

「じゃあ私はいくわね」

「え、でもこなたの顔を見なくていいんですか？」

「ええ、椿君と話せただけで楽しかったから」

「そう……ですか」

いまいち納得はできないがかなたさんが望まない以上しょうがないことだ。

俺は潔く引いた。

「じゃあさようなら」

かなたさんが部屋から出ようとする。

「あ、玄関まで見送りますよ」

この時俺は妙に気になった。かなたさんはいつもはどこにいるんだろうって。

まあ幽霊だから家か空なんだろうなあ……。

俺達は階段を降りて玄関へ向かう。しかしリビングから廊下に影が

現れた。

「ん？そうじろうさん？」そこには隣にいるかなたさんの夫がいた。
「あ……」

かなたさんは言葉を漏らす。

しかしそうじろうさんにはかなたさんの姿が見えない。その事実が
齒痒かった。しかし……、

「……なんだか、かなたがいる気がした」

「え？」

み、見えてる？

そうじろうさんにはかなたさんが見えてるのか？

その場にいた全員が動きを停止する。そしてそうじろうさんは目を
細める。

「でも、やっぱりいるわけないよな……」

「そうじろうさん……」

見えて……ないんだな。

「なんでだろうな……。なんでかなたの声が聞こえるのかな……。前ま
では割りきっていたのに……」

そうじろうさんが頬に一筋の涙を落とす。それはとても純粋な色を
していた。

俺達はリビングのソファへ腰をかける。

「俺は……かなたに何もしてやれなかった気がする」

「？」

「だって……いつも俺が振り回してゲーム屋や漫画屋、他にもかなた
の都合なんか無視して……」

「……」

一緒についてきたかなたさんは黙って聞いていた。

「なんでこんな不器用なんだろうな」

「でもかなたさんは……！」

「俺は！」

俺が言いかけようとするとそうじろうさんは大声を出して俺の声を制す。

「…俺は、かなたを幸せにしてやれなかったと思う…」

「っ！」

バキッ！

その言葉が出た瞬間、

俺はキレてそうじろうを殴った。

「痛っ…」

「幸せにできなかったなんて…そんなこと言うな…！」

「椿君…」

かなたさんが俺をなだめようとするが俺には全く聞こえてはこなかった。

「あんたが！あんたがそれを言っちゃったらかなたさんの最後の言葉はどうなるんだよ！！死ぬ間際に残した『幸せだったよ』って言った言葉を…あんたは嘘だっけ言うのかよ…！」

「……………」

「なんで…もつと…わかってあげないんだよ…！好きな人と一緒にいて幸せじゃないはずないだろうが…！不器用とか関係ない！」

かなたさんはあんたのことを心から大事な人と思っっているから一緒にいたんだろうが…！それを…！それを…！！

「椿君！」

かなたさんの声に俺は正気を戻す。

そして目の前にはそうじろうさんが頬を抑えながら倒れていた。

「あ……すみません…」

俺はソファーに座り直す。

「そう君……………」

「…そういえばさ」

「？」

偶然なのかそうじろっさんはかなたさんの正面に立つ。

「俺っていつも…バカやってたよな」

「ふふ、そうね」

そうじろっさんは見えても聞こえてもないのにそこになたさんがいると確信しているかのように話しかける。そしてそれをかなたさんは静かに聞く。

「アレ覚えてるか？プロポーズした時のこと」

「もちろん。あんなの忘れられることなんてできないもん」

「結婚してくれて公園で言おうとしたら子供が割り込んできて、そのあとの指輪も指に入らなくて人生一番の失敗だったよ…。でもかなたは笑ってくれて…」

今思えば…俺達って幸せだったんだな」

「うん！」

かなたさんに笑顔が戻る。

「俺さ…」

「何？」

「世界で一番、かなたを愛してる」

「私もそう君が一番大好き…」
チュツ。

かなたさんはそうじろっさんの側に行き、痛々しい頬とは逆の方にキッスをした。

「椿君…あなたのことは忘れないわ」

「かなたさん…」

「彼方からずっとあなた達の幸せを祈っているから…」

そう言った後になたさんは光に包まれた。

気がつけば俺はリビングのソファで毛布を纏いながら横になっていた。

「…なんで俺、ここに？」

なんだか頭がキーンとする。そして何か大事なことを忘れているような違和感を感じた。

「ふあああ…ッ！イテテッ！腰と手が！」

アクビをすると腰は痛むのはわかるが何故手が痛いのか謎だった。ふと隣を見てみると

「ぐう…ぐう…」

そうじろっさんが静かに寝ていた。何かいい夢でも見てるんだろうなあ…ってあれ？なんかそうじろっさんの頬に青い部分が…。

「どっかにぶつけたのかな？」

痛そうに思いながら俺は腹が空いて冷蔵庫を開けようとする。

しかし立ち上がった瞬間、目眩が襲う。

「なっ!?!」

誰かの声が聞こえてくる。聞いたことのない、でもどこか優しくて懐かしい声が……。

『 みんなが幸せでいられるように

』

この声を俺は知っている気がした……………

第26話 灰色を描く者に暁色を照らす者（前書き）

前書きします。パティの自己紹介で「マーティン」を「マーヒィン」と誤字をしてしまいましたことをお詫び申し上げます。

第26話 灰色を描く者に暁色を照らす者

朝食を食べた後にそうじろうさんは自分の家に帰った。俺達も急いで学校へ行く。

「おはようつかさ、高良さん」

教室に入るとつかささんと高良さんが目に映り挨拶をする。しかし、

「あ、おは……」

「……つかさ!?」「……」

つかさ達が挨拶を返す前に周りが視線を向ける。

「おい、桃原のヤローついに名前で呼んでやがるぜ」

「それほど親しい中になってんのかよ」

「あんなブサイクのどこがいいんだよ」

次々に俺向けの暖かく、また憎しみのこもった陰口が耳に届く。

そんな中に二人の一年生らしき人達が入ってくる。

「おはようっす先輩!」

「こなた久しぶりネ!」

一人は眼鏡をかけた赤い瞳の女の子。もう一人は蒼い瞳に金髪ショートヘア、あと喋り方から外国から来たのがわかる。

「ひよりにパティじゃん、久しぶり」。で、今日はどしたの?」

「いやー、実はネタがあんまり浮かばなくて……」

「今度の作品も期待してるからね」

「ううっ!先輩ひどいっす……。それで小早川さんから聞いたんすけど」

するとその子は周りに聞こえないようにこなたの耳元で話す。

……なんか嫌な予感。

「先輩って今男子の家でお泊まりしてるんすか？」

!!!!!! 予感的中!!!!!!

「あゝ、ゆうちゃんつい口が滑っちゃったんだね。それで？」

他人にバレたら本当はヤバい状態なのにこなたはいつものほんわり顔で話を聞く。

「私をその人の家に泊めてほしいっす!!」

「ダメ」

ここで俺が割り込む。さっきのやりとりで俺の読み通りきたから、ここはマニュアルに従い許可は出さないことに。

「え、この人誰っすか？」

女の子は俺を指さしこなたを見る。

「この人がひよりの言う『その人』、桃原 椿君だよ」

「あ、そうだったんすか！失敬失敬……。それで答えは!？」

「だからダメだってば!」

二回の同じ質問を斬り捨てる。

「なんでっすか!？」

「それが常識なの!」

「でも今だって桃原先輩は二人泊め…もがが!」

俺は慌てて女の子の口をふさぎ、小声で話す。

「皆に聞こえたらどうするの!？」

「別にいいじゃないっすか…って、もしかして桃原先輩はみんなにバレるのが怖いんすか？」

女の子がにたりと笑う。

「それがどう…ってまさか…!」

「フッフッフ…。そのまさかつすよ！私を泊めないと世界中のみんなに言いふらしてやるっす!」

なっ！やはりそうきたか！可愛い顔してなんてえげつないことをするんだ…！

「さあどうする!？」

「くっ……そお……!」

キンコーンカーンコーン。

いいタイミングで本鈴が鳴り教師が入ってくる。

「その一年」。早く教室に戻れ」

「ひよりん、今は退散ネ」

金髪の女の子は肩をポンツと置く。

「くっ、しかたがないっす。休み時間は来れないっすから放課後返事を待つてゐるっす!」

そう言い残し二人は去っていった。

しかしこれで放課後までに対策をとる時間があるってわけだ。
俺はゆっくり席に着くが…。

「おい聞いたか今の!？」

「放課後返事を待つてゐるってことは……何々!?告白!？」

「なんで奴ばっかり……!」

「下駄箱に菊の花でも置いてやろうか!？」

ジーーーーー……。みんなの視線
が集まる。

まあ言いたいことはわかるからそんなに見ないでくれ……。

昼休み、俺は教室にいたら何が起こるか分からないので隣のクラス
のかがみさん、みさお、あやのさんと一緒に食べる。

「そういやちびつこと関係は進んだのか？」

食事中にみさおがとんでもないことを言い出す!

「な、なんでそっちにいくんだよ!」

「なんとなくだよ、なんとなく。まあその様子じゃ進展なしみたい

「だけど」

「あ、当たり前だろ！」

しかし正直言うとあの夜何が起きたかいまいち覚えていない。なん
で俺がリビングで寝ていたのか……。

「椿君大丈夫？」

あやのさんが顔を覗いてくる。

「へ？あ、だ、大丈夫……かな？」

「なんで疑問文になるのよ」

かがみさん……

そこでツツコむのはやめてくれ……。

「やっぱり最後はミートボールだぜえ！」

みさおがミートボールを箸で挟みながら気を緩めた瞬間。
ポロリッ。

「……あ……」

時が止まったかのようにミートボール以外が静止した。

そして横の机で一人で食っているC組男子のメールの着ったが流れる。

ドナドナド～ナ～ド～ナ～

子牛をのせて～

ドナドナド～ナ～ド～ナ～……

携帯を取ってメールを確認する。

そしてミートボールをみさおが拾った。

「だ、大好物のミートボールがあ……」

可哀想に……。

これはさすがに同情する。

しかしかがみさんは、

「いつもの三秒ルールは？五秒以内なら菌がつかないんでしょ」とニヤニヤしながら言う。

「い、いや、それはその…場所を選ばしてほしいかも……」
かがみさんってけっこうSだな……。

そして放課後になりこなたが俺のところにくる。

「ん？どうしたの？」

「いや椿君はひよりをどうするのかなって思ってた」

「……こなたはどうしたいの？」

俺は質問を質問で返す。

「ん…私は泊めるに賛成かな」

「なんで？」

「だっていつぱいいいたほうが楽しいじゃん」

こなたは両手をバンザイする。

「……だよなあ」

本当のところ、俺は迷っていた。泊めていいのか否か。

けど今のこなたの笑顔を見て心を決めた。

「しょうがない。泊めてやるか」

広められても困るしね…。俺達は一年の教室に向かい知らせる。

「いやー、桃原先輩最高っす！まさか泊めていただけるとは！」

「やっぱり他の腐った男子共とは一味違うネ！」

「こうまでさしてもらってるんすから、一気に原稿を終わらせるっす！」

「ひよりんガンバレー！」

「でもまずは夕食っすよね。何が出るか楽しみっす！」

「きつとこんな〜に大きい伊勢えびネ！」

「いやいや！こんななかもよ！いやもつと大きいかも…」
「ちよつと待てー！！！」

帰宅中のヒートアップした二人の会話を止める。

「どうしたんすか？」

「いやどうしたんすかじゃなくて！なんで二人もいるんだ！？」

「えゝ。いいじゃないすか別に。一人や二人変わんないっすよ」

「いやだからって……」

「まあいいんじゃない？椿君。パティは一人暮らしだしたまにはさ」
こなたは簡単に泊めさせようとする。

「わ、私も泊めてあげたいな」

ゆたかもこなた側につき、四対一。負けは決まったな……。

「はあ……。わかったよ。もう好きにしてくれ」

「え？桃原先輩を好きにしていいいんすか？」

「日本でいう5Pネ！」

「いや違うから！」

それにその発言を女子が普通に言ったら危険な人って誤解されちゃうよ！？」

「そついや自己紹介がまだっすよね。私は田村ひよりっす」

「私はパトリシア・マーヒインデース！パティって呼んでくださーい！」

そして家には新しく灰色と暁色が存在していた……

,

第27話 不要の優しさ

「ワオ！こなたの料理はとってもオイシイネ！」

「普通の鍋なんだけどね。こっちもじゃんじゃん食べていいよ」
こなたはパティの皿に具を入れていく。

「もう感激しまくりネ！」

パティは幸せそうにパクパク食べる。

「そういえば二人にもあのルールを守ってもらうんですか？」
ゆたかがお肉を取りながら聞く。

「あー、どうしよう。別に俺は守らなくてもいいんだけどなあ」

「ルールってなんなんすか？」

田村さんは反対側の椅子から身を乗り出してくる。

「えーとね、俺の隣のクラスのみさおって奴が言い出したんだけど、
同じ屋根の下で泊まるんだったら仲良くなりたいたいってことでそれぞ
れ名前で呼んでるんだ。でも田村さんたちは…」

「それ面白そうっすね！私も名前で呼んでみたいっす！」

「私も賛成デース！」

二人は手を合わせながらキヤイキヤイ騒ぐ。

まあ俺としてはその姿が可愛く見えるんだなあ。

「じゃあ椿先輩でいいっすか！？」

「へ？先輩？うーん……、ま、いつか」

先輩ってついているのが気になるが一人一人違う呼び方というのも悪
くないかもな。

「なら私は椿でいいデスカ？」

「うん。俺はパティって呼ばしてもらっね」

「ハイ！よろしくネ椿！」

笑顔ではしゃぐパティ。

やっぱり国は違っても同じ人なんだなあ実感した。

「椿先輩！私は私は！？」

「え？じゃあひよりでいいかな？」

「くくく！バツチりす！」

親指を立ててビシツとグッドサイン。

この二人が来てなんだかまた賑やかになったような気がする。

食事を終えて、俺達はみんなでトランプのババ抜きをしていた。

一番抜けはひより、次にパティと続き残ったのは俺とこなたとゆたか。そして勝負は終盤戦になる。

「むむむ……これだ！」

俺はこなたから瞳を閉じてカードを引いた。

「にやり……」

こなたがにやつく。

恐る恐る見てみると

「ぐはっ！」

ババ来たり…。

次にこなたがゆたかのカードを引き、

「いやったー！」

こなたは見事に6を揃え3位になる。とうとう残り二人。実際やり始めると自分が最後になるわけがないと思っていたが、全くの予想外だ。まさか現実にあるなんて…。

しかし我に勝機はある！

なぜなら！

俺は持っているカードを

持ち直してババをわざとゆたかから取りやすくする。そして案の定

ゆたかはババを引いた。

「はうう！」

落ち込むゆたか。だがこのていどじゃあ終わらせない！俺のターンには秘策を使わせてもらうぜ！

ゆたかはババと7を裏表示でフィールドに出す。

普通ならどっちがババかわからないだろう。

だがここですべておきの魔法カード！

『観察眼！』

俺は片方に手を伸ばす。

その時にゆたかの顔をチラッと見ると笑顔になる。

もう片方のカードに手を近づけると、

「あ……」

ゆたかは小さく否定するかのように声を漏らし、顔はひきつっている。

なるほど、最初のカードがババか。そうとわかれば簡単だ。俺は後の方のカードに手を伸ばすが……、

「うう……」

……。

ゆたかが悲しそうな顔をする。

気まずい……。なんかここで俺が7を取ったらゆたかが泣きそうな気がした。

それに男ならこういった場面では女の子に勝たせるのが常識ってものだ。

俺はわざとババを引いた。

「あちゃー！ババかよ！ミスったな」

俺は適当に悔しがって見せる。

これならゆたかも笑顔になっていると思った。

しかし、現実とは全く違う方へと進む……。

ビュッ！

「うわ！」

突然ゆたかがカードを投げる。それに驚いた俺は慌ててゆたかの方を見ると、

「うつ…うつ…」

ゆたかは泣いていた…。

そして、

「椿君のバカー！」

ゆたかは二階に上がっていく。

ボタンと聞こえたドアを閉める音。

シーン……。静まるリビングに俺はただ呆然としていた。

「び、びつくりした」。小早川さん…じゃなくてゆたかどうしちゃったんすかね…」

ひよりはゆたかの投げたカードを拾う。そのカードは強く握りしめられていてくしゃくしゃになっていた。

「なんでゆたかはあんなに怒っていたんでショウ？」

「…たぶんゆうちゃん、手加減されるのが嫌だったんだよ。ゆうちゃん昔から身体が弱くて小さくし病気がちだったからいつもゲームとか

対等に勝負してくれないって泣いてた時があったんだ…。

でも椿君なら対等にやり合ってくれるって思ってたんじゃないかな

………」

「……………」

じゃあ俺はゆたかの信じてくれた想いを裏切っちゃったのか…。

………そうだな、手加減されて嬉しい奴なんていないよな。

ゆたかが怒って当たり前だよ…。

それに俺、演技下手だし…。

「でもゆうちゃんがあんなに怒るのは初めて見たよ」「じゃあ一筋縄ではいかないっすね…」

みんなが俯く。

だがこれは俺の責任だ。だから俺がなんとかしないと！

トランプを直した俺は二階に上がってゆたかのいる部屋にノックを

する。

「…ゆたか、入るよ」

返答なし。しかし俺はこのままではいけないと思い、ドアを開けて一歩、また一歩とゆたかに近づく。

ゆたかは布団に潜り込んで縮まっていた…。

「ゆたか…」

ゆたかの身体がビクツと動く。

「ゆたか、あの…」

「……今は……一人にさせてください………」

「……………」

今までのゆたかじゃなかった。いつもの可愛らしい雰囲気はどこにも感じられなかった…。

俺は今を泣いているゆたかに何を言っても届かないと思い部屋から出る。

この時、俺は何か重い不安と後悔がのしかかってくる感覚を感じた……………。

第28話 存在価値

トランプで手加減した俺に怒ったゆたかは翌日になっても俺達に姿を見せなかった。

「じゃあゆうちゃん、私達は学校に行ってくるから」

ドア越しにこなたがゆたかに声をかける。朝に話そうと思ったがきつかけが無くて、俺は仲直りできないまま学校に登校する。

そして昼休み、俺はみんなを屋上に呼んで家で起きたことを説明した。

「…じゃあ今日ゆたかが来てないのも…」

「ごめんみなみちゃん。俺のせいなんだ…」

あの時に俺がちゃんとしてれば…。

「でもそれじゃ私達も帰りづらいねえ…」

つかさは顔を悩ませる。

そう、今日はいかがみさんたちが帰ってくる日となっている。

だが今のゆたかの状態だったら、かがみさんたちが帰ってきてても…。

「答えなんてないんじゃないかしら…」

「え？」

ふとあやのさんの方を見る。あやのさんはにっこりと笑い、話を続ける。

「ゆたかちゃんの気持ちを理解できてない椿君には答えなんて存在しないんじゃないかな」

「理解……」

「そう、だからまずはちゃんと理解してあげないと一生こんな関係になっちゃうよ？」

「……………」

「…どうしたら一番いいのかしらね…」
かがみさんは小さく呟く。

「……うん」

何も案が浮かばないまま予鈴が鳴り、みんな各教室に戻る。

六時間目が終わり先生が来るまでの休み時間、俺は机でゆたかのことを考えていた。頭の中でゆたかと仲直りする方法を見つけようとするが全くない。それにまずゆたかは俺の話なんて聞きたくないんだろうなあ…。

ゆたかを泣かせたのは俺なのにその涙を止める手段を持っていない自分に腹が立った。

そんななか俺に声をかける人がいた。

「大丈夫ですか？」

ピンク色の髪に優しくそうな雰囲気をもつこのクラスの委員長、高良みゆきさんだ。

「あの…気分がすぐれないのでしたら保健室に…」

「大丈夫大丈夫…心配しないで」

そう言っただけ俺は机にもたれようとするが、

「前にも言いましたが悩み事なら相談にのりますよ？」

高良さんは笑顔で俺を気遣う。それはなんだか前のゆたかを思い出させるかのような笑顔だった。

今の俺は行き詰まっている。ならやはり周りの意見を聞くべきだろうと高良さんに今までの生活全てを打ち明け、昨日の出来事を話した……………。

「そうだったんですか……」

高良さんは少し目を細める。たぶんこんな俺を情けないと思ってるんだろぅな……

「それで？」

「え？」

「それで桃原君は昨日何も言わなかったんですか？」

「……ああ、あの状態で言ってもしょうがないかなって思ってたそれで……」

「なんでです！」

いきなり高良さんは机をバンツと叩く。

それに驚いた周りはこちらを注目する。

俺もあまりのギャップに目を見開く。

「あ、すみません、つい……」

「あ、いや……」

高良さんは改めて目をこっちに向ける。

「でもどうしてそこでちゃんと話し合わないんですか？小早川さんは今泣いているんですよ？それをあなたはほつとくことで小早川さんのためになると本気で思ってたんですか？」

「……………」

「小早川さんはあなたにとって何？赤の他人？ただの友達？」

「それは違う！」

俺ははつきりと否定する。

「俺にとってゆたかは……大事な人だ！」
すると高良さんは優しく微笑む。

「なら……もうやることは決まっていますね。どうせならその想いをガツンとぶつけてみてはどうでしょう」

俺は高良さんの言いたいことに気付いた。やること……！それは俺

の気持ちをゆたかに……！

「よし！ありがとう高良さん！」

俺は一言礼を言って終わりのホームルームをすっばかし、自宅に急いで帰った。

しかし……

二階のドアを開けるとそこには、

「な……？」

もぬけの殻となった布団に着替えた跡。それを見て俺はすぐに閃き慌てて家を飛び出す。

「まさか……！」

あの不安定な状態、さらに病弱な体質で外に出たら少し危険なのではないか！？立ちくらみなどでもし車にでも引かれたら……！

最悪な未来を予想して

俺は至るところ全てを探す。

だが、ゆたかの姿はどこにもなかった。

「いったいどこにいったんだよ……！」

辺りを見回すが映るのは関係ない人だけだった。

俺は探したところをもう一度探し回るがゆたかを見ることはできなかった。

これだけ探してもいないということはもしかしたら逆方向の橋の近くかもしれない！

俺は痛む足や疲労を感じさせないほどの集中力でゆたかを身体の世界まで探し続けた。

だんだん橋が見えてくる。それと同時に小さい人影が橋の上に映る。まさかあれは……。

期待と不安を抱いてそこに向かう。

橋の端まで来た俺は中央にいる紅い制服を纏い、綺麗な桜色の髪をした少女の元へ寄る。

「ゆたか……」

「……………」

ゆたかは俺の存在に気づきたくないのか、だんまりと遠くを眺めている。

「こんな空気がしばらく続き、やがてゆたかは口を開いた。
「……なんで椿君が……そこにいるの……」

第29話 君の春はまだ…

「……どうして椿君がそこにいるの……」

ゆたかはこっちを向きゆっくりと俺を見つめる。

「いなくなつてびっくりしたから……。さあ、早く帰ろ。かがみさんたちも帰ってきてるしこなたとかも心配してるよ」

しかしゆたかはその場を動かない。

「……私はみんなにとっていない存在なんです……」

「それは違う!!」

「違います!!」

ゆたかは激しく否定する。

「……だってそうじゃないですか!いつも私は身体が弱いせいでみんなに迷惑かけて!それでもみんなは笑顔でいてくれて……。こんなのもう……。私がない方がみんなは楽じゃないですか!!」

声が歪み、ゆたかは言葉が出せなくなるほど泣いていた。

「本当は……。本当は椿君だって私のこと目障りって思ってるんですよ!?!私のこと迷惑だって。そう思ってるんですよ!?!」

「……俺は、ゆたかと一緒にいて楽しかった……」

「絶対ウソ!!そんなの信じられません!!」

「だったら!……。ゆたかは俺といて楽しくなかったのかよ」

「……っ!!」

「ゆたか言つたよな……。俺たちが初めて逢つた時に。『みんなと早く仲良くなりたい』って。あの言葉は嘘だって言うのかよ……。」「ゆたかは顔を隠すように下を向く。

「俺はこんな形で、ゆたかとケンカしたまま終わりたくない……。み

んなでもつと笑っていたい……！」

声を張り上げゆたかに気持ちが伝わるようにまっすぐ見る。今、ゆたかが何を思っているかはわからない。でも……。

「椿君に……」

ゆたかは必死に抵抗の意思を見せる。

「私の気持ちがわかるんですか！」

ゆたかの目から大きい涙の滴が落ちていくのが瞳に映る。その涙の意味を俺は知っていた。

昔の友達にも似た状況があったから……。

毎日ドジばつかで、つねに周りを心配させる奴が……。

その時俺があの子に言った言葉は……、

「もつと俺を信用してくれよ……」

「っ!？」

ゆたかは涙を拭う。

しかし止まらない涙はゆたかの頬へと流れ落ちるばかりだった。

そして俺はここからは自分の本気の想いを伝えるために勇気を出す。

「俺さ……あんまりいいところないけどみんなに言われて気づいたんだ……。俺のいいところは『優しさ』だって……。だから俺ができることっていったらゆたかと優しく接することなんだよ……」

「……そうだね。椿君、優しいところあるからいいよね……。でも私には……」

「あるよ」

「え？」

ゆたかは小さな声で反応する。

「ゆたかにもあるよ、いいところ」

「そんな気休めは……よしてください」

顔をふいっと背き俺にか弱そうな後ろ姿を見せる。

「ゆたかのこと見てて、俺は羨ましいって思った」

ゆたかはピクリと揺れる。それを見た俺は話を続ける。

「いつも正直で素直で……誰にも真似できない思いやりを持って……。それになんかゆたかといったら

とても心が和んで、癒されて、嫌なことなんてどこかにいっちゃって悩みを忘れさしてくれる……。そんなゆたかの存在に、俺はずっと……憧れてた」

「……………」

「だから帰ってきて。俺にはゆたかが必要だから……」……………。長い沈黙が続く。しかし俺はできることはした。だからあとはゆたか次第だ。

俺は黙ってゆたかの返事を待つ。

そして天気はいつのまにか雨雲で覆われていて、ポツポツと雨が振り出す。

だがそんなものに気をとられずに俺はただゆたかの言葉を聞きたかった。

「……………なんで？」

雨の音を合図にゆたかは口を開いた。

「なんで椿君はこんな私に優しくしてくれるんですか？」

「……………ゆたかが俺にとって大事な人……だからかな？」

「……………そうですか」

ゆたかは微笑む。やっと今日初めてゆたかの笑った顔が見れた。

「……ありがとう」

足元をふらつかせながらこっちに近づく。

これでやっと……。

そう思った気の緩みと同時に、

「あ……」

ザパーンッ！

ゆたかの体がバランスを崩して橋から落ちる！

「ゆたか!？」

最初は何が起きたか理解しづらかったが、さっきまで側にいたゆた

かがいなくなつたのに気づき俺は慌てて橋から覗く。そこにはゆたかが水の中でもかく姿があつた。

泳げない！？いや、まさか気分でも悪くして泳ぐことができないのか！？

最悪の事態が起こり体に寒気が走る。

どうして気付いてやれなかつたんだ！

ゆたかの身体が一般より弱いのはわかつてたのに！

今日初めて笑ってくれて仲直りしたのに！

「くそっ！どうしたら……！」

雨のせいで川の流れは速く人を抱えて泳げることはできない。しかし考えているうちにゆたかの姿は遠くなっていく。その光景がもう二度と会えなくなるような嫌な気分にした。

「……………っ！！！！ああもう……！馬鹿か俺は……！」

今、何が大切かなんてわかりきつてるじゃないか……！！」

あの笑顔……、そしてそれをこなたたちにも見せてやりたい……！！

俺は邪魔な服を脱ぎ捨て、十メートル以上ある高さから川へと勢いよく飛び込んだ。

第30話 Canvas

「ゆ、ゆたか!!」

川に落ちたゆたかを救うため躊躇なく俺は飛び込む。

しかし、雨の影響もあり、ゆたかまでたどり着いたのはいいがゆたかを助けるまでの体力と技術は俺にはなかった。

俺はゆたかを抱きしめ必死に離さないようにした。

「くっ、この…うわっぶ…!」

なんとか息継ぎをするが激しい波に吞まれ水の中へと沈まされる。

このままじゃゆたかも危ない。

でもどうしたら…!

迷う俺に川の流れは容赦なく下流へと流していく。

「ゆ…たか!」

あまりの激しさに一瞬離されかけたがすぐに手を引っ張り、ケガをしないように俺の体でゆたかを包み込む形にする。

まずい…もう身体が…限…か…い…。

薄れかける意識、だがそんななかに声が聞こえてくる。

「椿君! ゆうちゃん!」

「…?」

外の空気に脱した俺は周りを見渡す。そこにはこなたたちがいた。

「椿君! ゆたかちゃん! 待ってて、今助けるから!」

かがみさん…?

「お姉ちゃん! これ使ったら!？」

つかさ…?

つかさは子供たちが遊んだと思われる太いロープを持ち出す。

「よっしゃあ！桃原これに捕まれー！」

みんなで握ったロープの端を黒井先生が俺たちに向けて投げる。

「くっ…！」

しかしそう簡単に取れるはずもなく失敗する。

「まだやぞみんな！」

黒井先生たちは走りながらまたロープを投げる。ここまでされて取れないなんて男じゃないだろ！！

「う、おおおおー！！」

スカッ。

「あ」

「「「あ」」」

「しもた！」

あと一步のところでロープを逃す。

「ま、まだだああああー！！」

体を捻らせ波に吞まれながらも手を伸ばす。

そして、

「や、やった…！」

俺の右手は太いロープを掴みとる。

だが、体力が限界に近い俺は力が入らずにいる。

これでは時間の問題だ。

ロープから手を離れた瞬間、誰かの手が俺の手に触れしっかりと握る。

「椿君！あともうちよつとだから頑張つて！」

「こなた…」

こなたが川へ入りロープを頼りにここまで来てくれた。

そしてこなたの右手にはロープ、そして左手には俺の手を掴みとる。そしてみんなはロープを引いて俺たちはなんとか岸に上がるが…、

「ゆたか！ゆたか！」

こなたたちが来る前からピクリとも動いていないゆたかに声をかける。

しかし返事はなく、目も閉じたままになっていた。

こなたは手を震わせながら言う。

「息してない……！」

「……な！？ウソ……っすよね……！？」

「ゆたか……」

ひよりが後ずさりながら信じられないような顔を見せる。それをパティが横で涙を流す。

「み、峰岸さんに日下部さん！救急車を呼んでください！」

「は、はい！」

「お、おう！」

高良さんはあやのさんとみさおに指示を出した。

「……ゆたか！ゆたか！」

みなみちゃんやゆたかの側に行き何度も声をかける。しかしゆたかはあの笑顔を見してはくれなかった。

「こなた！ゆたかちゃんが自分で息をするまで人工呼吸をして！」

「わかった！」

みんながゆたかを救おうとする。たった一人の少女にみんなが……。

なのに俺は……！

何もしてやれない自分に苛立つ。こんなに近くにいるのに無力な自分が嫌になりそうだった。

そして気がつけば俺は行動に出ていた。

「え！？」

「椿君！？」

こなたとかがみさんが驚く。

俺は頭を下げてゆたかと唇を重ね人工呼吸をしていた。

その様子にみんなが丸い目で凝視する。

だがもう恥ずかしいなんてそんなことは言ってられなかった。

ゆたかは憧れだから……。そばにいてほしいから！

心臓マッサージ、人工呼吸を繰り返して行く。

一つ一つの動作に想いを込めて……。

そしてついに、

「……ごほっ！ごほっ！」

ゆたかが水を吐き、

続いて意識も取り戻す。

「ゆたかちゃん！」

みんながゆたかの側へと近づく。

「お姉ちゃん……？みんな……？」

ゆたかはまだはつきりしないと思われる視界の人影を見て呟いた。

「……ゆたか」

みなみちゃんが手を握りながら泣く。

「みなみちゃん……」

ゆたかはみなみちゃんの方を向いたあとに俺を見る。それに気づいた俺は思わず目を背ける。

だけどゆたかは弱った手で俺の指先に触れ、疲れきった身体なのに無理をして笑顔をつくる。それが全てだった。

今まで望んだもの、それを見た俺はもう胸がいっぱいになった……。

「ゆたか……！」

泣きながら俺はゆたかに抱きつく。

「え？ちよっ、椿君……？」

ゆたかは多少戸惑う。

だけど今だけはゆたかを離したくなかった。

「ごめん……」

だけど、もう少しだけ……

このままでいさせて……」

俺はそうゆたかに呟きギュッと胸の中に包む。

一筋の涙がゆたかに落ちる。

「……うん」

こんなみつともない姿を見てゆたかはなんて思っかわからない。泣き虫って思っかもしれない。

でも今はただ嬉しかった。

言葉にできないくらいに…。

伝わってくるゆたかの鼓動、暖かいゆたかのぬくもり、それらは俺に安心感と安らぎを与えてくれた…。

第31話 曖昧3センチ

一度俺たちは家に帰り、ゆたかを安静にさせる。

「ゆたか大丈夫？」

パティとひよりと俺は自分の部屋でゆたかをベッドに寝かせ看病する。

「うん、もう大丈夫。それより二人共そろそろ家に帰らないとダメなんじゃ…」

「あと少しくらいなら大丈夫ですよ。それに今はゆたかが心配つすから」

ひよりが照れながら笑う。

「でもよかった…。ゆたかが無事でいてくれて」

「ゴメンね、椿君…」

ゆたかはしょんぼりする。

「まあ今はみんながいることを楽しむネ!!」

パティははしゃいで空気を和ます。

「そうだな…。だからゆたかも体力をもどして明日一緒に学校行こうな」

「うん！」

相変わらず可愛い笑顔だなあ…。そういやゆたか、いつのまにか敬語じゃなくなってる。その事に気づいた俺はゆたかとの距離が短くなった気がして嬉しかった。

このあとにパティとひよりは家に帰った。

俺はというとゆたかが眠くなるまでの話し相手となることに。

「ねえ椿君……」

「ん？」

「今さらだけど聞いても言い？」

「いいけど……なに？」

聞いてみるとゆたかは恥ずかしながら言う。

「……椿君の趣味ってなに？」

「趣味？」

「うん……」

ゆたかは赤らめながら布団で顔の半分を隠す。

「趣味か……。趣味かどうかはわからないけど漫画読んだりゲームしたりアニメ見たりサッカーしたりかな」

「椿君、サッカーするんだ」

「うん。だけど中2で辞めちゃったけどね。あの頃はいろいろあったから……」

いくら大好きなサッカーでもあんな辛いことが起きたら、やっぱり続けていく気になれなかったしな……。

キャプテンとかが副キャプテンの俺が抜けるって聞いて困ってたし、みんなも辞めるなって何度も止めにきたのを今も覚えてる。

あと、俺にとって最後の試合。崇皇杯準決勝で三人を抜いてのスルーパーパス。あれが決勝点になって俺はその時すでに大会のMVPに選ばれたらしい。

まあ今となってはもうでもいいんだけど……。

「……そっか……。でもアニメとかが好きってことはお姉ちゃんと気が合うかもしれないね」

「はは、でもこなたはゲームとかは化け物並みに強いからびっくりしたよ」

どんな手を使っても勝てないんだもんな。あの才能を俺にも分けてほしいよ……。

「そっいえばゆたかの趣味ってなんなの？家に一緒にいてもいまいちわからなくて」

「え、私!？」

不意をつかれたのか、おろおろしだす。

「ゴ、ゴメン。まさかそんなに困惑するとは思ってなくって」
とりあえず謝っておく。

「あ、うつん。別にいいよ。私の趣味はインターネットとかかな」
「へえー、インターネットかあ」

外見とは違うイメージだな。ゆたかの知らない部分を知ってちょっとお得な気分。

そうしてなんだかんだ話していたらだんだんゆたかが糸目になっていき、終いにはすやすやと眠りに落ちた。
笑った顔も可愛いけど寝顔もまた一段と…。

「おやすみ、ゆたか」

俺は音をたてないように静かに部屋を出た。
気がつけばもう俺も寝る時間だな。

さてさて、今日はどこで寝ようかな…。かがみさんたちが帰ってきたから空いてるのは…。

「リビングのソファーだけか……」

あゝあ、さらば、寝心地のよいベッドよ……。

そんなことを考えながらリビングのドアを開ける。

するとソファーで誰かが寝転んでいた。足だけじゃわからないので近づいて上から覗いて見る。

「あ、椿君」

そこにはこなたの姿があった。

「こんなところでなにしてんの？」

「それはこっちのセリフ。なんでこなたがここにいるの。そこは」
「応俺の寝場所なんだけど」

「えー。だって椿君、ゆうちゃんと一緒に寝るかと思っただよ…っ」と
こなたは起き上がり背伸びを一回する。

「何で俺と一緒に寝なきゃいけないんだよ」

「え、だってゆうちゃんのファーストキス奪ったじゃん」

「ぶっ！！！！あ、あれはただの人工呼吸だから！」

「でもゆうちゃんの唇を奪ったのに変わりはないよ」

そう言つてこなたはリビングから二階のゆたかの部屋へいった。

「全く人聞きの悪いことを……」

しかしよく考えたらそうだな。俺つてあの時、ゆたかの唇に……

…。

「うわあああ！なんか今になって恥ずかしくなってきたあああ！！！」

「何が？」

「ふおおっ！？」

いきなり後ろから声をかけられ裏声になってしまった。

「び、びっくりしたー。驚かさないでよかがみさんー」

そこには腕を組んだ無愛想な顔のかがみさんがいた。

なんか機嫌悪そうだな……

かがみさんはさっきの様子を見ていたらしい。

「ふーん。ゆたかちゃんとキスできてそんなに嬉しかったんだ」

ゴゴゴゴゴゴゴゴッ！！

なにやら地響きが聞こえてくるような、こないような。それにあれ

は人工呼吸なんだけど……

「えーっと……かがみさん？」

どうしてそんなにおこつてらっしゃるのか聞いてみようとするが、

「ふんだ！おやすみ椿君！」

かがみさんはツカヅカと部屋へ向かう。

かがみさん、なんでそんなに怒っているの……？

俺には全然理解できなかった。

第32話 おはらっきー！！

ある番組での出来事……。

「おはらっきー！！小神あきらです！」

「アシスタントの白石みのです」

その場にいた全員がいつも通りに進むと思われた…。

「今週も始まりましたらつきーちゃんねる！どうですか白石さん、そろそろ慣れてきて面白いことも言えるようになったんじゃないですか？」

「そりやもうバリバリですよ。さっきだって高級チョコレートを囓
まずに食べてきたから元氣モリモリっすよ！」

しかし、些細なことでは……。

「あはははは！さすが白石さん、バカの極みですねー！」

「そおつすよねー！」

[illegible]

脆く、また儚く……。

「ドルンッ！ドルンドルンッ！！」

「あはははは……は？」

崩れ去っていく。

「あたいのチョコレート食ったのお前だったか……白石」

「げ……！ああ、いや、あれは、そ、そのですね、えと……」

「グッバイ……二人とも……！」

ドルンドルンドルンドルンドルンッ……！

「わ、私も……！？」

「連帯責任だろ？」

「「ぎゃーっ……！」」

「ええか、テストまで約2週間ほどしかないんや。みんな家に帰ったら勉強するように。ってことで終わるか。高良、頼むわ」

「はい。起立、礼」

「「「さようなら」」」

ふう…。やっと今日の授業が終わった。

テストまで日にちはないし勉強しないとな。それにかがみさんとかがいるから効率よくできそうだ。

「椿君帰ろー」

こなたとつかさ、かがみさんにみさお、あやのさん、高良さんがドアで俺を待っていた。

「ああ、今行く」

普段持つて帰らない教科書を鞆に詰めてみんなのところへ。

下駄箱でゆたかたち四人も待つていてくれて、

女子10人に男子一人というこの世の男達顔負けのびっくりシチュエーションとなっていた。

「臭いよねー」

「あの臭さはないよねー」

「そうですね」

みんなでもうでもいい話を喋っているとこなたがあることに気づく。

「そういえば今日セバスチャン来てなかったね」

「セバスチャン!？」

そんな外国人ウチのクラスにいたっけ!?

「ほら、白石とかいう人だよ。こなちゃんはセバスチャンって呼んでるけど」

そうなんだ…。でもセバスチャンってまさかあのセバスチャンなのか?

いやしかしここでツツコンではいけない!

「そっぴや、来てなかったな」

俺はそこをあえてスルーした。

だけど本心はツツコミたかったな……。

「どうしたんだろうね」

ゆたかはクエスチョンマークを頭に浮かべる。

「どうせサボってんじゃねえの？ペロペロ」

みさおはアイスを舐めながら言う。

「あんたじゃないからそれはあり得ん」

「あやのー。柊がクーラー16より冷たいー」

「みさちゃんがないこと言うからでしょ」

あはは…。そういえばみさおはかがみのこと名前で呼ばないな。自分でルール作つといて忘れてるってどんだけ人生楽しく過ごしてるだろ。

「これはこれでネタになるっすねー!」

ひよりはこの様子を見てネタ帳に書きこむ。

大変だなあ…。

しかしよそ見をしていたせいでひよりはボコツとしたところにつまづく。

「ふおあつ!?!」

ひよりは胸と手から落ちていく。そう思っていたが、

「くうおのおおお!!」

クルツ。

「なんで!?!」

ひよりは手を守るようにして体を反転させて背中から落ちた。

「ぐふっ!」

衝撃をもろに受けて痛そうにする。

「え、絵描きにとって…利き腕は命……がはっ……」

たくましいな…。

「ひよりん!大丈夫デスカ!?!」

「パティ…アメリカに帰ったら…私の今までの勇姿をみんなに……」

…がくっ

「ひよりーん!」

……。

……。

「ところで本当に大丈夫デスか？」

パーティはさっきのバトルシーンのお約束みたいな空気を捨ててひよりに問いかける。

「あはは、まあなんとかね」

ひよりは背中をおさえながら言う。

「…つかまって」

みなみちゃんはひよりに手をさしのべる。

「いやー、ありがとうみなみちゃん」

それにつかまりひよりは立つ。

さて、話の主旨をもどすか。

「だけど白石って学校休むなんてあんまなかったよな」

「そうねえ…。まあ明日には来るでしょ」

かがみさんは適当に解決する。

「そうかな…」

「そうなの…って、あれはなにかしら？」

かがみさんは向こうから走ってくる二人の少年少女を指差す。

「なんだろ…。一人はどっかで見たような……………」

「た、助けてー！」

「あれ？セバスチャンじゃない？」

「ホントだ」

だけでもう一人は誰？

中学生らしき者とセバスチャン…じゃない、白石が物凄い形相でダツシュ。

一応声かけてみようかな。

「おーい、白石ー」

それに気づいた白石は、

「も、桃原ー！たた助けてー！」

「いや、助けてっていったいなにから…」

「俺の後ろー！！後ろー！！」

「後ろ？」

必死に訴えてくる白石に俺は二人の向こうに目を凝らす。
そこには、

「ドルンドルンドルーンッ！！待ちやがれー！」
姿からして明らかに暴走族！

…… だけどあいつらなんであんなのに追われてんだ？
俺たちの側まで来た二人は慌てながらお願いする。

「お願いします、私たちを匿って！」

女の子が俺の手を握りながら言う。

「え、えと……」

「お願いします！」

うるうるした瞳が俺を見つめる。

「とりあえずそこに隠れたら？あとは私たちがなんとかするから」
こなたは電信柱とゴミ箱を指す。

「あ、ありがとうございます！」

すると白石は電信柱に隠れようとするが、

「あんたはこっちでしょうがー！！」

「は、はいい！」

女の子が怒って結局白石はゴミ箱の陰……ではなく中へ入った。
そして不良の女の人は二人を見失って俺たちに尋ねてくる。

「あんたたち、こっちに走ってきた二人が何処へ行ったかわかるかい？」

「え、えと、二人ならあつちに……」

俺は偽りの道を教える。

「そうか、あんがとよ。ドルンドルーンッ！」

不良は誰も通っていない道をひたすら走り続けた。

「ありがとうございます」

女の子は改めて礼を言う。

「いや、ホント助かったよ。ありがとな桃原」

ゴミ箱から出てきた異様な臭いを纏う白石が現れる。

「別にいいけどさ。ところでお前なにをしてたの？」

「え、いや、それはだな……」

白石は口ごもる。

「……まあ言いたくないならいいけど。それじゃあな。明日はサボんなよ」

俺たちは帰ろうとする。

しかし、

「ちょっと待ってください！」

女の子が俺たちをひき止める。

「なに？」

……。

女の子は一息ついてから、

「誰でもいいから私をあなたの方の家で匿ってくれませんか！」

「……………は？」

第33話 朱色と雪色を誇る者達

「あ、あきらさん！？いつたいなに言い出すんですか！？アイドルが人の家になんか泊まったら…！」

白石が汗だくで女の子を止めようとする。

「うっさいわよ！あんたは白石なんだから黙ってりゃいいの！わかった！？」

「は、はい！すみません！」

おい弱いな白石！もつと抵抗してくれよ！じゃないとこのパターンは決まって…。

「事情はよくわかりませんが泊まるなら椿さんの家にしてはどうでしょう？私たちの中にも何人か一緒にいることですし」

高良さくん！なんて余計なことを！

「え、いいんですか？」

白石の時とは見違えるほどブリッとする。

さすがアイドル、相当猫を被っているな。

「じゃあお言葉に甘えちゃいましょうかな」

「え、俺に選択権はないの？」

「もちろん」

女の子は俺の腕を掴んで寄り添う。

「ハア…また悩みが増えるのか…」

「まあまあ桃原、別に二人ぐらいいいじゃないか」

「お前は泊めないぞ」

みゆきさんたちは家に帰り俺たちは二人を連れて我が家に行く。

「わああ！ここが椿君の家ですか〜！」

女の子はリビングやら風呂場やら走り回るが。

「きゃっ!？」

こてん。

はしゃぎすぎてつまづいてしまった。だがそれだけならいいのだが女の子が転けてしまった際にスカートからパンツがチラツと見える。

「し、白……」

「へ？きゃっやだ!？」

女の子は顔を赤くしながら隠す。なんか可愛いかも…。

「み、見ました？」

「え、えと、その…」

なんと答えたらいいのかわからずおどおどする。

「正直に言ってくれたら許しますよ 椿君は恩人さんですしね」

「あきら様！僕は正直者なので見ちゃいましたよ」

「死ね!！」

白石に強烈な回し蹴りが放たれる。

「そっぴや名前言ってなかったな。俺は桃原椿、一応陵桜学園の三年」

「あ、私は小神あきらといいます。今はアイドルの仕事をしてて、学校は私立真白学園中等部の三年生です」

ほお…。まだ中学生だったんだ。

こなたやゆたかの例があるし白石と一緒にいたから高校生かと思った。

「僕はあきらさんのアシスタントの白石…」

「お前はするな」

「そんなぁ……」

白石は涙目になるが別にお前のそんな姿を見ても同情するやつなどいないだろう。

「私は泉こなた、こう見えても高校三年生だよ」

「へえ……」

小神さんは目をぱちくりする。

絶対この人中学生だろうって思ってるんだろうなあ。

他のみんなも自己紹介を終えて小神さんに本題を話してもらった。

「……つまりセバスチャンが偉い人のチョコレートを手勝手に食べて、あの人が怒っちゃったってわけ？」

こなたは事の次第を確かめる。

「そのとおりです……」

「小神さん関係ないのに巻き添えくらっちゃってるじゃん」

「おっしゃるとおりです……」

「白石って最悪だよな」

「はい……」

言われ放題だな。

まあ全部当たっているからフォローはしないがこれからなにをするかだけ言っておくか。

「白石、とりあえずさ謝れば？」

「あやまる？」

白石は鼻水を垂らしながら聞いてくる。

「ああ、じゃないと小神さんにまでもっと迷惑がかかったちゃうよ？」

「もう実際かかってるけどね」

小神さんは誰にツツコンだかは言わない。

まあツツコミは置いという話を進めるか。

「謝ることです。その偉い人もわかってくれると思う」

白石はしばらく黙りこむ。たぶん勇気が出せないんだろう。俺もゆたかの時に同じ気持ちをしたから今の白石の想いがよくわかる。

だけど男なら答えはもう知っているはずだ。

「だけどやっぱり勇気がな〜…」

白石は頭を抱え込む。

「桃原は知らないだろ！？あのお方、ゴットウーザ様を！」

「ゴ、ゴットウーザ様？」

なんだその変な名前！？

芸名かなにかかな？

「そつだよ！あの竹刀がどれだけ痛いかな…」

白石は情けない顔をする。

しょうがねえなあ。

「俺も一緒に謝ってやるから、な？」

俺は白石の肩をポンと叩き、キッチンに行く。

「そついえば腹減ってんだろ？作れるもんなら作ってやるよ」

俺はできるだけ白石に元気になってもらおうとする。

「も、桃原あ〜。お前っていいやづだなあ〜」

がしっ。

白石は泣きじゃくりながら俺に抱きつく。

「ちょっ、離れろって！鼻水！鼻水がついてるってば！って聞けー

！！」

「じゃあ部屋割りを決めるか」

俺たちは夕食を食べたあとに二人の部屋割りする。ちなみに俺が

飯を作ると言ったが、料理は全くといっていいほどできないのをすっかり忘れていた。なのでみなみちゃんとみさおという異色なコンビがオムライスを作ってくれた。

「人数は椿君を合わせて九人。けっこう多いから難しいわね」
かがみさんは困った顔をする。

「誰か三人で寝ればいけそうじゃない？」

「それもそうね。じゃああなたとゆたかちゃん、あと小神さんが同じ部屋であとはつかさと私、みさおとみなみちゃん、椿君は白石とリビングでいい？」

「いいっていうかそれしかないから仕方がないか」

白石は飯を食い終わった後にぐーすか寝ちゃったからな…。

「じゃあ決まりね。明日に備えてみんな寝ましょ」
ぞろぞろと二階に上がっていく。

しかし小神さんだけ途中で止まり俺の方を向く。

「この家の暮らし、私は案外楽しいって思ってるかもしれませんが」
「え？」

そう言い残して駆け上がっていった。

楽しい……か。

「そりゃそうだろ……」

小神さんの言うことには俺も同感だ。

だってみんなと一緒にいるのは楽しいから。

俺の家は朱く、また雪色が付着していた……。

第34話 ゴットウーザ様！

「ふあああ」

なんか今日はよく寝れたな。なんでだろー…。

昨日白石のいびきのせいでストレス溜まったやつはどこにいったやつたのかななどと考えながらトイレに行く。

ふう、なんか今日は出るな！。

まれにかなり長い時つてあるのは俺だけかな、と思っていたそのとき！

ガチャリッ。

「へ？」

「…？」

……………。

「うあああつ！？」

「ご、ごめんなさい！」

みなみちゃん鍵がかかっていないドアを見て中には誰もいないと勘違いをしてしまった。

俺は急いで用を済ましてみなみちゃんに謝る。

「ごごごごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」

「…い、いえ、私もごめんなさい」

「今のは完全にごめんなさい！殴ってもかまわないからごめんなさい！」

「…こちらも、そ、その、ア、ア、アレを見てしまって、ほ、本当に、えと、ごめんなさい！」

「いや今のは全部俺が悪いからごめんなさい！ごめんなさい！ごめ

んなさい！ごめんな……」

「あんたたち何やってんの？」

「うわっ！？」

いきなりかがみさんが後ろから声をかけてくる。

「いやびつくりしすぎでしょ……。それで何で二人ともあんなに謝ってたの？」

「「え」「」

い、言えない……。みなみちゃんが俺のアレを見ちゃったなんて口が裂けても言えねー！

チラッとみなみちゃんの方を見ると顔が真っ赤になっていた。

そりゃそうか。そもそも見ても見られても最後は男が責められるんだもん……。

ぐすん、世の中不公平だなあ……。

そこにみなみちゃんは、

「……わ、私の前方不注意で椿君とぶつかって、そ、それでお互い謝っていたんです」

みなみちゃんは戸惑いながらさっき起こったウソの解釈をする。

それに対しかがみさんは、

「ふーん。ま、気をつけなさいよね。怪我なんかしたらもつたいないわよ」

疑うことなく、納得した顔でリビングにいった。

な、なんとかバレずにすんだ。みなみちゃんが機転を利かせてくれてホントに助かったよ。

「あ、ありがとうな、みなみちゃん」

「……い、いえ、今のは私も危なかったから……」

はあ……これも嵐の前兆なのかな。

「よお、桃原」

リビングにもどると白石が起きていた。

「おう白石、心の準備はいいか？」

このあとゴットウーザ様に会うので白石に覚悟ができたか聞いてみる。

「た、たぶん…」

たぶんってなんだよ…。

まあいつか。こいつがうじうじ言っても俺が無理矢理ゴットウーザ様のところに連れていくしな。

そのあとにみんなはリビングに続々集まっていき、

小神さん以外はみんなで学校へ行く。

ホームルーム…

「ほーい、席着けよー」

「そわそわそわそわ…」

2時間目…

「えー、つまり解の公式を使うと……」

「そわそわそわそわ…」

昼休み…

「こなちゃんこれおいしいねえ」

「そわそわそわそわ…」

終わりのホームルーム…

「ほな今日はこれで終わりや」

「起立、礼」

「そわそわそわそわ…」

放課後の下駄箱…

「貸借主忘却の法則は絶対あるってヴァ！」

「はいはい」

「そわそわそわそわ…」

「っていつまでそわそわしてんねーん！」

こなたがハリセンで白石をツッコミをいれる。

ま、こなたの言う通りだけど…。

「白石君もいい加減勇気を出さないとダメだよ」

つかさがうじうじする白石に指摘する。

「いや、それはわかってるけど…」

白石は顔色を悪くする。

きつと自然とマイナスに考えてしまっただろうな。

「あれ？校門の真ん中で誰か立ってる」

ゆたかが誰かいるのに気付いた。

「ん？あのバイクって…」

よく見ると昨日のバイクに似てる。そして乗っている人も。

「まさか…！」

白石は後ずさる。

「白石、よくもまあ逃げ回ってくれたね」

「や、やっぱり！」

白石の膝がガクガク震える。

「今日は絶対逃がさないよ…！」

ドルンッ！ドルンドルンッ！ブォーンッ！

校内にバイクにのったまま向かってくる。

「待ってください…！」

キキーツ！

バイクに急ブレーキがかかる。

俺が白石の前に立って手を広げたからだ。

「あんたは昨日の……」

「……も、桃原……」

「殴るなら、ちゃんと白石の話を聞いてからにしてください」
ゴットウーザ様を前にして俺は言う。

しかしゴットウーザ様は、

「あんたには関係ないはずだ。よそ者は引っ込んでな」
俺を無視して横に回り込もうとするが、

「お願いです！話をきいてやってください！」

俺はさらに前に立ちふさがる。

「なんだっていうんだい？あんたは」

「……俺はこいつの……友達ではありません。でも！」
「？」

「クラスメートが苦しんでいるのをほっとくなんて俺はできません
！……せめて白石の話を聞くだけでかまわないんです！お願いします
！話だけでも！」

俺は必死に頭を下げる。

「………わかったよ。話だけでも聞いてあげるよ……」

ゴットウーザ様はバイクから降りて竹刀を捨てる。

「あんたはバカみたいにお人好しだな。気に入ったよ」

「はは、それしか取り柄がありませんから」

ゴットウーザ様は俺と白石、そしてかがみさん達を中庭に連れていく。

「ちょっと待ってな。今あきらを呼んだから」

三十分後、

小神さんが走って来た。

「はあ…はあ…！」

「やっときたね」

ゴットウーザ様は来たばかりの小神さんと白石を正座させる。

「さあ白石、お前の覚悟を聞かせてもらおうか」

,

第35話 漢を見せます！

「さあ白石、お前の覚悟を聞かせてもらおうか」

「……っ」

白石の肩が震えてる。

「白石……」

小神さんは心配そうに見守る。

すると白石は立ち上がり二人を見て、

「ご……！」

ついに口を開いた。

「ごめんなさい……！」

白石はゴットウーザ様だけでなく小神さんにまで土下座で謝る。

「……！？」

意外の行動に小神とゴットウーザ様は驚いた。

「今思えば、情けないとホントに感じています……！わざとではないのですが、勝手にゴットウーザ様が楽しみにしていたチョコレートを食べ、僕は謝るところか怒られるのが怖くなって逃げてしまいました！終いには関係のないあきら様にまで多大な迷惑をかけてしまったってホントに！ホントに情けない……いや！アシスタントとして一人の人間として絶対にしてはいけないことと反省しています！」

「……」

ゴットウーザ様は真剣に黙って聞く。

その場にいた他のみんなも空気を讀んで白石を注目する。

「本当にすみませんでした……！！」

僕はクビになっても仕方がないと思っています！

ただであきら様はどうかクビにはしないでください！お願いします！！」

白石は何度も頭を下げる。小神さんに迷惑をかけてしまったケジメの謝罪と申請に、俺だけじゃなくみんなにも心に響かせた。

今、自分の心力を言葉にした白石にゴットウーザ様は何を思うのだろう…。

「バカね……」

小神さんがそつと呟く。そしてそんな白石を見て小神さんは同じく土下座で頭を下げた。

「ちよつと待つてください！！白石も、許してあげてください！」

「あ、あきら様！？」

「……………」

突然の行動に白石は不意を突かれる。

しかしゴットウーザ様はなおかつ口を出さない。

「それに……！白石をもし許さないのなら私は、アイドルを辞めます！」

「な、何を仰ってるんですかあきら様！？あきら様は……！」

「うつさい！あんたは黙ってる！」

「ひっ！？」

白石が止めにかかるうとしたが小神さんは強引に話を進めた。

「お願いしますゴットウーザ様！こいつじゃなきゃ『らっきーちゃんねる』を続けるなんてことは私にはできません！だから……！！」

「あきら……！！」

ビクッ！

小神さんが言いかけた時にゴットウーザ様は止めた。それに小神さんは体を震わせた。

ゴットウーザ様はゆっくりと立ち上がり竹刀をバイクのところから一本持ち出した。

そして……

「白石、お前これであたしの好きなところ打ち込め」

「……………えっ!?」「……………」

全員が耳を疑った。

その反応を無視してゴットウーザ様は竹刀を白石に渡して腕を組み無防備状態に。

「どうした、何を躊躇することがある」

「で、でも……」

白石は迷った表情をする。

「お前の覚悟はそんなものか、白石」

「……………っ!!」

「……ふう、もういい。」

お前はあきらと一緒にクビだ」

ゴットウーザ様は背中を見せバイクに向かう。

しかし、

「俺は……俺はもう決めたんだー!!」

白石はゴットウーザ様に向かって走りだし、竹刀を大きくふりかぶる。

パンッ!!

力強くふりおろした竹刀がゴットウーザ様の頭に直撃した。

「……………!!」

そしたらゴットウーザ様はゆらりと白石の方を向いて生涯見るか見ないかという発見率が低いほど希に見る顔をしていた。それはまさに不良の中の不良と言える顔なのかもしれない。

「……白石ー!! テメーなにホンマに当てとんじゃこらー!!!!」

「……えええええっ!!」

突然キレたゴットウーザ様に近くににいる白石だけでなく小神さんや俺たちもかなりビビる。

ていうかさつき打ち込めって言ってたよな……。

「お前が弱い女の頭に竹刀で叩いて無事で済むと思わないこつた……。つうわけで今すぐに死ねえええええ!!」

「えー!? えー!? 嘘マジですかっ!?!」

ゴットウーザ様は竹刀を拾って白石に向けて斬りかかる。

「ぎゃーっつっ！！」

「…………ポコ。」

「なんてね」

「へ？」

ゴットウーザ様は白石の頭に竹刀を軽く叩いて笑顔に戻る。それに対して俺は全く訳がわからなかった。

「やっぱりねー」

こなたはホンワカ笑顔で言う。

「どういうこと？」

つかさはこなたに聞くと、

「最初にあの人言ってたじゃん。セバスチャンの覚悟を聞くって。

その答えがあの後ろからの打ち込みだったんだよ。それで答えがわかって合格に達したから許してやるってこと」

「なるほど…」

しかしこなたはこういう類いのだったらすごいな。

さすがに並のオタク達とは違う。

「まあさっき向こうのちっこいのが言った通りだ。お前の覚悟がどれほどのもんか私に届いたよ」

「じゃあ…！」

「ああ、許してやるよ」

ゴットウーザ様はバイクに乗り込み、

「ほら、あんたたち。早く乗りな。今日はあたいのオゴリだよ」

白石と小神さんは顔を合わせて、

「やったー！！」

パンッ！

二人でハイタッチをする。

その時の光景が俺にはとても純粹に見えた…。

「じゃあ桃原君にみんな、ありがとうございました」

小神さんはバイクの後ろに乗って俺たちに一礼する。

「また遊びに来てもいいからな」

「サンキュー桃原」

「お前には言つてないんだが…」

「とりあえず皆さんと一緒に過ごした1日を私は絶対忘れません…。だから…皆さんも忘れないでくださいね！」

小神さんは笑顔で言う。

「うん、わすれないよ。じゃあ小神さん、元気でね。ついでに白石も」

俺はあとから白石を付け足す。

「それじゃいくよ。ドルンッ！ドルンドルンッ！」

ゴットウーザ様はバイクを走らせた。

だんだんとバイクの姿は小さくなっていく。

そして小神さんが手を振っているのに気づき俺たちも振り返す。

やがてバイクは一点の光となり見えなくなった。

「一つ気になったんだけどさー」

こなたはゴットウーザ様たちが見えなくなってから心に引っかかることを言う。

「ゴットウーザ様ってか弱い女？」

……………。
……………。

「そこはスルーしときゃいいのさー」

「そだねー」

第36話 着信拒否

あるK・Iさんの証言

「私、椿君が好きだよ」

K・Hさんの証言

「あんたというのは嫌いじゃないわよ……」

T・Hさんの証言

「椿君だ〜い好き」

Y・Kさんの証言

「お兄ちゃんって呼んでいいかな？」

M・Iさんの証言

「…大好き」

彼はいつたい誰を選ぶのだろうか……………。

パタンツ。

「てな感じはどうっすか？」

「いいわけあるかー！」

昼前にパティとひよりが遊びに来て、二人は二階の部屋に俺を呼んだ。

何かなと思ったら、

ひよりが昨日自分で描いた漫画を見せてくれたのだが、あまりに誰かの名前と同じだったのでおもしろい否定する。

「ええ」。せっかくドキドキの展開っぽく描いてみたんですけどやっぱりダメなんすか。椿先輩モテモテの状態なんすけどねえ……」

ひよりはがっかりする。

「いやまず俺の名前が出た時点でアウトだから」

「まあまあ、自分が漫画に出てくるってけっこう嬉しいことじゃないっすか」

そう言われても一人一人感じ方は違うだろうという一般常識を誰かこの人に言ってみてくれよ…。

「みんな、ご飯できたわよ」

下からかがみさんが昼食の準備ができた知らせる。

「あ、早くいいかないと」

俺はひよりとゆたか、こなた、パティと下に降りた。

「というわけでひよりの誕生日を祝ってかんぱーい！」

こなたがオレンジジュースを片手にひよりを祝う。

「かんぱーい！」

俺たちもそれに合わせてみんなと乾杯する。

「いやー、なんかすみません。私なんかのためにわざわざ…」

「いいってことネひよりん！パーティーはたくさんさんの友達としたほう楽しいヨー！」

パティはぐびぐび飲みながらひよりの肩に手を回す。

「ま、そういうことだから今日はひよりの好きなこととしていいよ」
ただしあっち系はパスだけど…。

「え！？マジッすか！？なんでもいいんすか！？」

「まあできる範囲内なんだけどさ、ここはおもいつき…痛っ!？」
みさおがチキンを食べながら喋っていたら舌を噛んだ。しかも本気で…。

あれは痛いだろうなあと思いつつ心の中ではみさおの馬鹿っぷりに笑わされていた。

「食べながら喋るからよ。自業自得」

かがみさんが呆れながら言う。

「ぐすん、あやのー! 柊がー!」

「今のはみさちゃんのせいだから認めようよ」

そう言っであやのさんはみさおの頭を撫でる。

「…それでひよりは何がしたいの？」

みなみちゃんはひよりに聞く。

「そうっすねー。やっぱり遊びにいきたいから椿君! 私、映画館が
いいっす! あの新しく出た『着信拒否』が見たいっす!」

着信拒否ってあのホラー映画か。なんか怖そうだけどいつか。

「映画館かあ。私賛成」

ホラーの映画だと知らないつかさは笑顔で自滅の道へ。

まあつかさが怖がるところをちょっと見てみたいからどういう系かは言わないでおこう。

「じゃあそうするか。みんな反対はないみたいだし」

それに俺もテレビでは見るけど映画館じゃああんまり見る機会なかったからちょうどいいしな。

こうして俺たちは昼食後に映画館へ行くことに。

「あ、言い忘れてたけど

当然私は椿君のおごりっすよね!」

「えっ…」

『ピリリリッピリリリッ……』

電話帳に登録していたアドレスを全て着信拒否をし、自分のアドレスを誰からもかかってこないように変更したはずの携帯が不気味に鳴り響く。少女は震えながらゆっくりあける。そこには、

『着信拒否不可能』

と表示されていた。

驚いた少女は携帯に目がいく。

その隙に後ろから少女の肩へ手が伸びてポンと叩く。そして振り向こうとする少女に一言……。

『メールを届けにきましたよ……』

そうしてこの世から少女は消えていった……。

『この時間の上映は終わりです。御観覧ありがとうございました。次の上映時間は』
アナウンスが流れ、暗くなっていた館内は電気がつけられて明るくなった。

そして俺の横には……。

「ふえええん！！怖かったよぉー！」

つかさが途中からずっと泣いていた。

大声で叫び、泣き、しがみつきで隣の俺は大変だった。今もだけど…。

「ほ、ほら、つかさ。もう終わったから大丈夫だよ」

「ぐすつ、ぐすつ。もう歩く力ないよぉ…」

ぺたんと館内の入り口のはしっこで座り込む。

「じゃあ喫茶店によりましょ。ほらつかさも頑張って」

「だって力がぁ…」

頭のリボンがしわつとなる。

そういえばまだホラーが苦手っぽい人がいたような。

俺はゆたかを見る。するとみなみちゃんと楽しそうに話していた。

「…余計な心配だったかな」

俺は視線をつかさにもどす。

あれではキリがないので少々恥ずかしいが俺はおもいきった行動に出た。

「ふわあっ!？」

つかさが驚いて俺を見る。いや、つかさだけではない。周りの一般人も目を見開く。

まあ当たり前と言えば当たり前だろう。

なんせ俺は今、つかさをおんぶしているのだから…。

「プハー。か、かなり疲れた」

そして恥ずかしかった。

俺たちは近くの喫茶店に入りひとまず休憩する。

「ご、ごめんね、椿君」　つかさは顔を赤くしながら謝る。

「ああ、別に過ぎちゃったことだし気にしてないよ」

それに前はお姫様抱っこしちゃったしね…。

俺はつかさが泊まりに来た次の日を思い出した。

「ん〜。ネタにはなつたつすけどなんか納得いかないんすよねー。」
ひよりが難しい顔をする。

「納得いかないって？」

こなたが聞いてみると、

「いやー、やっぱり今日は私の誕生日じゃないつか。だからつかさ先輩だけじゃなくて私にもしてほしいな〜なんて！」

「……つまりおんぶをしろと？」

「その通りっす！」

ひよりは親指を立てる。

はあと俺はため息をついてひよりに言う。

「家でできるだけ善処するよ……」

しかしみさおが、

「善処するって最初からやる気のないやつのだ台詞だよなー」
とボソツと言う。

なんでこういう時だけ鋭いんだお前は！

第37話 日常

「じゃあ私たちはこのまま帰るんで」

ひよりとパティは分かれ道を見て言う。せつかなら泊まっていけばと言いたところだが家でも祝ってくれるらしいので、俺たちは帰る二人を後ろから見送った。

するとひよりが遠くから、

「椿先輩！約束忘れないでくださいよー！」

ちっ、やっぱり覚えていたか。

約束とはひよりをおんぶか抱っこを今日するというのだが時間がなく、また今度になったのだ。

やがてひよりとパティの姿が見えなくなり俺たちも我が家へ帰るのだが、

「ん？あれってみゆきじゃない？」

かがみさんが前を指すとそこには高良さんが買い物袋を持って歩いていた。

「おーい、ゆきちゃん」

つかさが手を振りながら呼ぶとそれに気づいた高良さんはこっちに向かってきた。

「こんにちわ、皆さんお揃いでどこかお出かけですか？」

「いやさつき用を済まして今から帰るとこなのよ。みゆきは買い物？」

「はい。お母さんが少し忙しそうにしていたので代わりに私が」
高良さんは苦笑いする。

「へえー、やっぱり高良ってすげえんだなー。私なんか絶対めんどく

さいって言うか、今から勉強しようと思ったたのにつて嘘つくのにさ」

みさおが得意気にする。

まあ本人は笑い話にしてるけどリアルに考えたら親不孝者だよな…。

「そつか、じゃああんまり長話もあれだから」

「はい、では皆さんお気をつけて」

「また月曜日学校でねー！」

「ふう…今日はなんか疲れた」

家に帰ってきた直後に俺はソファーにダイブ。

柔らかい感触が俺の体を受け止めるのだが上から、

「うりゃー！」

「ぐはっ！」

こなたが俺の背中にのし掛かる。

「ちよっ、こなた！？」

突然の攻撃に俺は起き上がろうとしたが、

「とうー！」

「ぶへっ！」

みさおがさらに上からのし掛かり俺はソファーに埋まる。そんななかこなたが、

「さあ、つかさも早く！」

手をちよいちよいとしながらつかさを呼ぶ。

「ええー！？…でもお……」

「椿君がつかさが乗ることを望んでるって言ってるよ」

…いや、なに勝手に言っているんだ！俺はまだ何も言っていないし

そんなM行為を望んではないぞ!?

しかし心の反論は届かずにつかさはそつと乗る。

「うぐうつ!？」

三人が体を伸ばしながら乗ったのでこなたの殆んど無い胸が背中にあたる。

「なんか楽しそうね」

そう言ってかがみさんまでもが上に。

「ふおおっ!？」

しかもかなり重くなつて負担は俺だけじゃなく下から二番目のこなたにもくる。

「ちよっ、かがみ、ダイエットしてるの!？」

「う、うっさいわね!人が気にしてることを言わない!」

かがみさん…そんなに動かないで……。振動が、振動があ……。!

そしてさらにあの二人が動く。

「私も乗ってみたーい」

「…私も」

みなみちゃんがかがみさんの上に乗り一番上にはゆたかが股がる。

「…………っ!」

ズシツとくる重さに俺ははつきりと言葉が出なかった……。

「み…んな……た、タイム……タイ……ム……」

俺からしたらこの状態が永く続いていた気がした。

「肩と背中が痛い……」

真剣にヤバくなっていた俺を見てみんなは次々と上から降りたのだがダメージはきっちりが残った。

「ご、ごめんね椿君。はいこれ、コーヒー」

ゆたかが冷たいコーヒーをコップにいれてくる。

「ありがとう……」

ズズッと一口。

コーヒーの冷たさと独特の味が体の奥に染み渡る。

「つ、椿君！今日は椿君の大好きな唐揚げにしたから！」

こなたがエプロン姿で冷や汗をかきながら言う。

まあいいか。唐揚げなら元気出てきそうだし。

俺はゆっくり立ち上がってテーブルに。

もう一つのミニテーブルにはかがみさん、つかさ、みさおが座る。

「それではいただきます」

みんな最初に手をつけたのは鶏の唐揚げ。

さあこなたの腕前はいかに。

パクッ。

一口サイズの唐揚げを口に入れて味わう。

「……う、美味い！」

な、なんだ、この味は！？

研ぎ澄まされた衣に鍛え上げられた肉質！そして食べやすい温度！

味付け！完璧じゃないか！

みんなも気に入ったらしく食事が早々と進む。

そして最後の一個をこなたが取ろうとしたらみさおの箸とこなたの

箸がお見合い状態になる。

「おい、ちびっこ。ここは譲り合い精神に乗っ取とるべきだろ。だ

からこの唐揚げはウチのだ」

「いやいや、この唐揚げは私が作ったんだから最後の一個は普通作

った本人が食べるべきでしょ」

互いの目線の間に火花が散る。

やっтерことは小学生並なのに闘志は全くの別物だった。

「ふっ、そういえば前の決着がついてなかったな」

決着とは前のサバイバルのことである。

あの時はゆい姉さんの乱入で引き分けになったんだっけな。

「ならば今つけようではないか！」

「いくぜ！」

二人は構える。

そして同時に手を出す。

「じゃけんぽん!!」

こなた：グー。

みさお……グー。

「「あいこでしょああー!!」」

こなた：パー。

みさお……パー。

「うあいこでえしよおおあー」

こなた：グー。

みさおは……チヨキ。

「うあああああああああああああああああああああ

「あああああ！！！！！」

みさおが本気で絶叫する。

「では最後の一口、あむ。ん、美味しい」

こなたはほつぺたを押さえながら嬉しそうに言った。

「ホントやるのが小学生ね」

かがみさんはボソリと呟く。

第38話 椿のように

「じゃあおやすみ椿君」

こなたはルンルン気分で二階に上がる。

しかし山があれば谷があるわけで……。

「ブルーだ……。果てしなくブルーだよお……」

みさおは地面に沈みそうな勢いで床に倒れていた。

たかが唐揚げ一個でここまで感情表現できるなんて人生楽しんでるなあ……。

俺達はみさおを二階に行かせ、それぞれ部屋で眠りにつく。

「……夢ってなんで違和感無しでいられるんだろ……」

ソファアの上で寝ころんでいるとふとそんなことを考え始めた。

「……ま、いつか。今日は寝よ寝よ」

俺は深く掛け布団に潜り柔らかいソファアに顔をつける。

「……………」

「くっはー……今日はかなり寝不足だな……」

ソファアから起き上がる俺は体が重くなっているのに気づく。原因はおそらく夢のことだろう。

そりゃ2時までずっと夢のことを攻略しようとしたらそうなるだろうな。

だが気になりだしたらなんかイライラしてくるのは俺だけではないはずだ……。

「おっはよう椿君！」

こなたがリビングに入ってきてまたもや上にのしかかる。

「ぐえっ！ちよっ、こなたおも…」

「くないよね」

俺が言いかけた瞬間にこなたは言葉を重ねた。

「ね」

「…はい、軽いです…」

実際こなたは身長が低めだから、軽いというのは嘘ではない。だが弱りきっている俺にとったら少しのおもりも何倍にも感じてしまう。

「とりあえず早くのいてほしいんだけど…」

いつまでもうつ伏せでビタツと上からくつつくこなた。胸とか当たっててかなり気まずいんだよなあ…。

「よいではないか、よいではないか」

こなたは離れようとしないう。こうなっては仕方がないな。実力行使といこうじゃないか。

「うおりやあああ！」

俺は力を溜めて一気にこなたをはね除けようとするが、

「ちよっ、椿君！いきなりそんな…」

こなたは投げ飛ばされかけた時に俺の背中にしがみつく。

その反動で俺はソファーに足をとられてこなたと共に倒れる。

だがそんな時には必ずお約束。

プニ…。

「「あ」「」

こなたを下に倒れ込んだ俺は床に手をつこうとしたら間違っで胸についてしまった。

「わ！ごめ…！」

ガシッ！

俺が手をのけようとしたらこなたがその手を掴み自分の胸におしあてる。

つまり今俺の手はこなたの胸を完全に触っている状態である。

「こ、こなた！？」

思わぬ行動に俺はたじろぐ。

「私…椿君ならいいよ…」

こなたはそう言って目を閉じる。

こ、これは誘っているのか!?

誘惑によって頭に血が上る。

俺はどうしていいかわからずにそのまま停止していると、

ガチャリッ。

「ほえ?」

「「え?」」

みさおがリビングのドアを開けて俺達を凝視する。

「……………ごゆつくり!」

みさおは一時停止したあとに二階へあがる。

そして五秒後に何故かがみさんが勢いよく降りてきた。

さて、ここから先の展開はいつもと同じなので省くとしますか……。

俺は一応かがみさんに事情を話して誤解を解いたが、

「椿君さー、狙ってないわよね?」

かがみさんが疑い深く問いつめる。

「ね、狙ってないよ!っていうか狙ってもできないよ!」

「ふーん…、あつそ。」

まあいいけどね」

かがみさんは面白くなさそうな顔をする。

「そ、それで今日は日曜日だけどみんな何するの?」

つかさがフォローしながら言う。

「んとねー、トランプ!」

こなたが適当に思いつきを言う。しかし、それを聞いたゆたかは少しだけビクツとするのを俺は見逃さなかった。

「と、トランプはちよつとインドア的だからさ、外に行かない？」
俺は回避を試みる。

みなみちゃん俺の意図がわかったのか、頷いて賛成する。

「んー、駄目かー。ならアニメイトに行かない？」

「アニメイト？別にいいけどなんで？欲しいのとかあるの？」

「ちつちつちつ。椿君もオタク霊力が足りないなあ。なにか欲しいものがあるから行くんじゃないかと新しき発見があるかもしれないから行くってパターンもあるのだよ」

「そうなんだ…」

よくわからないオタク理論に一応納得したふりをする。

「まあ今日は思いつきり遊ぶか」

今日の予定が決まったかと思つたら、

「駄目よ」

かがみさんが反論する。

「お姉ちゃんなんで？」

「なんでってあんた何か大事なことを忘れてない？」

「大事なこと？」

みんなで考える。

しかし思い当たることが何も無い。

「はあ…その様子じゃ椿君って成績あんまりよくないみたいね」

……なんで成績の話？

「まだ気付かないの？あと一週間ちよいで中間テストがあるってこと」

「……あー！」「……」

俺とみさお、こなた、つかさは思わず声をあげる。

「そっかー、もうすぐテストだったねー」

「…すっかり忘れてた」

ゆたかとみなみちゃんは余裕を見せる。

「柊ー！どうすりゃいいんだよー！授業中何も聞いてないからわかんねえよー！」

みさおはかがみさんにしがみつく。

「知らないわよ！だいたいまだ時間があるから諦めるな！」

…そうか。確かに俺も寝ていたとはいえ時間はあと一週間あるんだ。この一週間でみつちり勉強すれば赤点は免れる。それにここにはエキスパートのかかがみさんがいることだし教えてもらえるじゃないか。「じゃあみんなで勉強かあ…」

こなたが嫌そうにする。

まあ他の人の話によればこなたは一夜漬けか勉強を全くしないと聞くしな。

「そういうことだから椿君、よろしくね」

「？」

こなたがほんわか笑顔で言う。

「ノート 貸して」

「書いてないけど」

……………。

「つかさ！ノート見せて！」

俺達は同時に言う。

「う、ごめんね。ノート教室に全部置いてきちゃった」

……………。

……………。

「高良さんだ！高良さんと呼ぶんだ！」

「つかさ！今すぐみゆきさんに生電話を！」

「う、うんわかった！」

俺達は慌てふためく。

こんなんで大丈夫なのかなあ……………。

第39話 学校に一人はいる完璧な人

「いいですか、ここに解の公式を使ってそのあとに求めるXはこのことになります。そしてYはXの三倍となってこれはこうしてさらにあおしてそういうふうになりあとは……」

「やってられつかー！」

高良さんの説明についていけない俺は鉛筆を放り投げる。
「つていうかこんな長い公式が解けるわけないだろ！」

「まあまあ落ち着きなよ。騒ぐだけ見苦しいよ」

「勉強してないこなたに言われたくない」

「だらけながら言うこなたに俺は一言。」

「なんであんたは勉強してないのよ！ちゃんとやらないと今度のテスト酷い結果になるわよ！」

かがみさんもやる気のないこなたを叱る。

「かがみ。私はこんな人生に何の役にも立たない物理や世界史の勉強よりもっとと有意義になる勉強をしてる方が世のためってものなんだよ」

「それじゃあその片手に持っている漫画は何かな？」

「へ？」

こなたは俺が指した本を見る。

「……………」

「……………」

「世間の恋愛について」

「うそつけ！明らかにタイトルがダ・カーポってなってるぞ！」

「椿君も読む？」

「読まない！」

「全種類揃ってるよ？」

「……やっぱり読む！」

俺は本に手を伸ばそうとするが、

「つ・ば・き・君？」

かがみさんが拳を作りながら怒りを見せる。

「……なーんて言ってみちゃったりして」

「もう遅いわよー!!」

このあと何故か俺とこなただけが高良さんとかがみさんにマンツーマンで勉強することに……。

他のみんなはというと

格ゲーをして盛り上がっていた。

途中まで俺勉強してたのに……。

「あーもー！だからそこは公式を使っただけだっばー！」

「す、すみません！」

春、それは……

「だから違っって言ってるでしょうが！これはこう！」

「は、はい！」

幸せをくれる季節

「何度言えばわかるの！この場合はそっちの公式じゃなくてあの公式を使うのよ！」

「…うつっ」

のはずなのに…

「だーからー！！間違いすぎなのよ！！」
「……はい」

どうして怒声が飛んでくるの…？

「あんたの脳みそは味噌汁！？」
「……………」

嗚呼…神はいずに……。

「お、終わったー」

そして死んだ…。

勉強しすぎて肩が痛くなり体がほとんど動かなくなっていた。
そして限界に近づいた俺はその場に倒れる。

するとつかさは高良さんのとこに行く。

「そういえばゆきちゃんって今日は早く帰らないといけないの?」

「あ、いえ、今日はお友達の勉強を教えるということで多少は遅れるとお母さんには伝えています」

「それじゃゆきちゃん今日一緒にご飯食べよー」

「ご飯…ですか?」

「そうね。どうせならみゆきも食べていきなよ」

かがみさんは俺と同じく倒れているこなたの側にいたがこなたを見捨ててこっちにくる。

「でも私なんかがいたら迷惑なのは…」

「そんなことないわよ。ね?椿君」

俺はあまり動けないので軽く頷く。

もう一人や二人増えても一緒だしな。

高良さんにはさつき世話になったし。

「ほら椿君もいって言うてるんだし」

「……そうですね。ではお言葉に甘えて」

「決まりね。じゃあ私達はおかず買ってくるからあんたたちは風呂済ましといて」

かがみさんは荷物持ちとしてみさおを連れて外へ出掛けた。

「ふわー、ゆきちゃんの胸ほわわわ」

「っ、つかささん。そんな触っては…あ、ん…」

「ほんとにいいものをお持ちで」

「い、泉さんまで…んあ…」

……。

風呂から何故か出てくるはずのない声が響く。

俺はみなみちゃんとゲームをするふりをしながらそれをしっかり聞

いていた。

俺はゲームよりそっちの方が気になるのは読者にもわかってくれると信じてるぞ！

「椿君、椿君」

「…へ？なに？」

ゆたかが俺を呼ぶのに気づく。

「ゲーム負けちゃってるよ」

「…あああああ！！！！」

ゆたかが画面を指して俺は声をあらげた。

結果は3 - 0。

今回のゲームはサッカーなので負けるわけがないと思っていたが完敗していた。

「いい湯だったねー」

お風呂から上がったこなたたちがリビングにきてしまった。

…試合にも負けて声もあんまり聞いてないなんて損した気分だ………。

「わー、やっぱり泉さんは料理がお上手なんですネー」

高良さんが行儀よく食べこなたの料理を絶賛する。

「でしょう？これで勉強もできたら文句ないんだけどねー」

かがみさんは少しかい気味に言ってこなたの頭をぼんぽんと叩く。

「むー、離せー」

「でも羨ましいなあ。私もお姉ちゃんみたいに料理が上手だったらいいのに」

「ゆうちゃんは他のところがずば抜けてるから問題ないよ」

こなたは気楽な顔で言う。

「ずば抜けてるってのはこなたのことだから小さいとか妹属性にはモテるとかそんなこと考えてるんだろ。っていつかそれを考えてるのは俺もだけど…」

「……………」

みなみちゃんが胸をペタペタ触りながら深く沈黙する。そこにこなたが後ろから、

「大丈夫 需要はあるさ」

「では夜も更けて来ましたので私はこれで失礼しますね」
高良さんは時計を見て帰る準備をする。

「あ、高良さん。途中まで送っていくよ」

「いえ、ですが…」

「いいからいいから。じゃあ俺は高良さんを送りに行ってくるから」

俺はリビングにいるやつらに聞こえるようになるべく大きな声で響かせる。

『ほーい』

みんなの返信がくる。

「ほら高良さん、行こ」

「あ、はい。すみません」

いや謝るところじゃないんだけど。

俺達と一緒に家を出る。

俺はついでにポストを開けて中身が空か確かめる。

その時ふと家を見ると言葉にはできない謎の色が加わっていた……。

第40話 五月雨

夜中の見慣れた道。

そこを俺と高良さんは並んで歩いていった。

その時に高良さんからいろんな話を聞いた。

誕生日、趣味、休日の過ごし方、スリーサイズ、etc…。

まあスリーサイズは嘘なんだけどね。

「それにしてもやっぱり高良さんって完璧なんだな」

過去を知ったことにより改めて思う。

頭脳明晰で容姿端麗、そしてスポーツ万能だしおまけに萌え要素まで盛り合わせてある。前に友達が高良さんに憧れてたけど近寄りがたいって言うていた気持ちは今わかった。

確かにここまで凄いと俺みたいな平凡な奴が話しかけてもいいのかというぐらいだ。

「い、いえ、お恥ずかしながら私は欠点も多くて…」

そこが他人から見たら最高なんだよ！

まさに歩く萌え要素だな。なんか街でオタクが高良さんを見たら写真とか撮りそうだ。

「でも高良さんの欠点ってあんまり目立たないからいいじゃん」

「そ、そうでしょうか？」

「うん。ていうか欠点があるから美人の高良さんが可愛く見えるしね」

「え？」

高良さんはきょとんとして俺の顔を見る。

「何？なんか顔についてる？」

「あ、いえ！すみません！つい考え事を…」

高良さんは赤くなりながら早歩きになる。

「…？」

何が起きたかわからない俺は先に行く高良さんの後ろを追った。

「凄いなら椿君も凄いなと思いますよ」

「へ？」

高良さんは微笑みながら言う。

「俺は別に至って普通だと思うけど…」

今までの自分を振り返りながら自信なさげに応答。

「だって椿君、家に女の子を泊めちゃってるんですから」

はいそのとおりです。

確かにその件については凄いと自分でも思う。

だけどこなたの場合は不可抗力だろ。

お母さんのことを聞いちゃったんだしそのあとはつかさやかがみさんまで来ちゃうしゆたか、みなみちゃん、その他もろもろと我が家に来て止めようにも無理があつたし知らないうちにこの生活を楽しんでいたし…。だからみんなを家に帰すなんて進んでしたくはなかった。

「あ、それと椿君」

「はい？」

「最初に何か困ったことがあつたら相談するって言ってらしたのにちつとも私に言ってくれませんでしたね」

高良さんはぷーっと頬を膨らます。

「あ、あれはほら。な、なんていうか言おうにも言えなかったというかそのあとに黒井先生も知っちゃったし別にもういっかな…」とか？」

「とかじゃありません。それに小早川さんのことで聞いた時はびっ

くりしました。まさか泉さんたちが一週間以上前から一緒に暮らしていたなんて気づきませんでした」

「まあ気づかれないようにしてるから気づいちゃったらダメなんだよね」

それにもしなにかあっても店長のとくに逃げるし。

「ふう……。今回は許しますが今度からはちゃんと相談してきてくださいね？」

「ああ、ちゃんとするよ。もう隠すもんもないしね」

「ではここまででけっこうです」

「あ、もう少し行くよ」

「い、いえ、お気持ちは嬉しいのですが私は大丈夫ですから。それに椿君の家をこれ以上遠くさせるわけにもいかないので……」

確かにけっこう離れたとこまで来ていたことに気づく。

「……………高良さんがそこまで言うなら仕方ないか」

俺は家から15分程度歩いたとこで見送りを止める。

「ではまた後程」

高良さんはぺこりと礼をする。この辺のところはさすがに礼儀正しいのが高良さんである。

「うん。おやすみ高良さん」

「おやすみなさい、椿君」

高良さんは優しい笑顔を見せて帰った。

俺はさつき来た道と同じ道をたどって帰る。

「こんな暗い道だったんだ……」

行くときは高良さんと話しててそれほど気にはしなかったが目の前

の足下はよく見えなくなっていた。

こんなに暗いと前にひよりの誕生日にみんなで見たとあの『着信拒否』を思い出す。

「く、暗いし早く帰った方がいいよな……」

冷や汗をかきながら早歩きで行く。

しかし途中で……

「ザザーッ……」

（びくっ！）

強い風が流れて木々の葉が音をたてる。

そしてぽつぽつと雨が降りだしてきた。

「そっぴいや今日午後から雨だって天気予報も言ってたっけ……」

俺は冷たい雨に打たれながら無事に帰宅した……

となればよかったが

帰る途中に意外な人物に会った。

「あれ〜？ 椿っちじゃん」

「……！ 由佳か！？」

中学時代の三年間ずっと同じクラスでサッカー部のマネージャーだった萩野由佳が右手には傘をさして左手にはスーパールの袋をぶら下げていた。

「久しぶりだね〜。元気してた？」

「まあなんとかね。なんか由佳ご機嫌じゃん」

「あ、わかる〜？」

由佳はえへへと笑う。

「実はね、昨日うちの学校に女子サッカー部ができてさ！それで私入部しちゃったんだー！」

「へー、女子サッカー部がある学校はあんまりないから良かったじゃねえか」

「でしょでしょー！もうニコニコが止まらなくてさ！」

やっぱり由佳は中学の時と一緒だな。

話しているとめちやくちや楽しく感じる。

「そういえばさ……」

由佳が少し落ち着きを戻す。

「？」

「椿っちって…もうサッカーしないの？」

「……………」

俺は答えなかった。

いや、答えを出すのが嫌だった。ここでしないと云ったたらなんか一生後悔する気がしたから……。

そんな俺の気持ちを理解したのか、由佳はそつと言っ。

「そつか……。やっぱまだできないよね」

「……………ごめん」

「な、なんで謝んのさ！そんなの椿っちらしくないぞ！」

そう言われても俺には力が湧いてはこなかった。

「……………私さ、サッカーやってた椿っち……………けっこう好きだったりして」

「え？」

「好きじゃなかったりして」

「どっちだよ！」

ややこしい言葉に指摘する。

「でもさ……………私的に椿っちにはサッカーしてほしいな」

由佳は背中を向けながら言った。

「由佳……」

「椿っちさ、気づいてた？」

「何を？」

「……………やっぱいいや！じゃあ私帰るね。妹がアイス食べたいってうるさくてさ。椿っちも早く帰りなよ！」

「ふう…わかってるよ」

「そんじゃバイバイ！」

由佳はスーパールの袋を持ちながらブンブンと手を振る。それに応じ

て俺も手を振る舞う。

綺麗なショートカットの少女は暗闇に消えていった。
それを確認した俺は**ずぶ濡れ**のまんま帰った。

第40話 五月雨（後書き）

オリジナルキャラを出してみたのですが読者から見てどうでしょう
か？できれば感想が欲しいです（^^）

第41話 ご奉仕します

「はつくしょん！ズズ…」

翌日になり、なんかしんどいと思ってリビングの引き出しから体温計をとろうとするとかがみさんが起きてきた。そして俺の異変に気づいたかがみさんは俺の代わりに体温計を取り出して俺の脇に挟む。ピピピと鳴りかがみさんが体温計を見て呆れながら言う。

「38度、完全に風邪ね」

「ううー…身体中がダルい」

「当たり前でしょ、風邪なんだから。だいたい昨日みゆきを送ってからまっすぐ帰ってきたの？けっこう長い時間外にいたみたいだけと」

「…まっすぐ帰ってきた……たぶん」

萩野に会ったことはなんか言わないほうがよいと感じた俺は真実を隠す。

「まあ今日はちゃんと休んでなさい。えと…わ、私が看病しとくから」

かがみさんが照れながら言う。

「えっ！？かがみさん学校休むの！？」

「そ、そうよ。なんか問題あんの？」

「いやだってかがみさんに悪いし俺一人で大丈夫なんだけど…っ」と俺は起き上がろうとすると、

「なーに言ってるの。いいからちゃんと寝る！今まで泊まらせてくれたお返しよ」

かがみさんがちよいつと簡単にベッドに押し倒す。

「でも……」

俺が言いかけたその時、

「……椿君大丈夫!?」

かがみさんから知らせを受けたこなた、つかさ、みさおの三人がドタバタとあわてて来る。

「あんたたち静かにしなさいって!」

かがみさんが注意する。

「……椿君大丈夫?」

後ろからみなみちゃんが覗く。

「なんとかね、ゴホツゴホツ」

「椿君そんな咳をしながら言っても説得力ないよ?」

みなみちゃんの更に後ろからゆたかも来てくれた。

「あはは……まあ俺はこんな状態だからみんなは学校行つてきてよ」

「ヤダ」

こなたがぼそりと呟く。

「だって椿君がこんな状態なのにほつという学校に行くなんて私出れないよ!」

んな大袈裟な……。

たかが風邪なんだしそこまでドラマチックにならなくても……。

「だから私がかがみの代わりに残るね」

「は!?!」

なんでそうなる!?!

「ちよつと待て!こなたはただ学校をサボりたいだけでしょ?」

……なるほどな。こなたの目的はそれか。かがみさんの言うことに俺は十分納得した。

「それを言うならかがみだって椿君と一緒にいたいからって学校休むなんて大胆」

「ち、違っわよ!!!わ、私はただの恩返しよ!」

「ホントに?」

こなたはニヤニヤしながらかがみさんをからかう。

「お姉ちゃんとかなちゃんだけずるいよ。だから私が椿君の看病するよ」

「な!？」

つかさまで何を!?

「だったら私も前のお返ししたいな」

ゆたかが前に出る。

こうなったら誰にも止められない。

四人は言い争う。

いつまでもそんなことをしていたらキリがないのでこなたはじゃんけんで決めようと言い出した。他のみんなもそれに賛成し、みさおとみなみちゃんも入り一勝負。

「じゃんけんぽん! あいこでしょ! あいこでしょ! あいこで……」
盛り上がる制服姿の皆さん。

ここで看病はいらなんて言ったらなにされるかわからないので黙って勝負を見届けた。

「じゃあ椿君行ってくるね」

こなたが玄関からそう言って学校に向かった。

結局看病に残ったのは……

「じゃあ私、朝ごはん作ってくるね」

つかさはお粥を作りを下へ降りる。こうなったら仕方がない。今日は素直につかさに甘えるとするか……。

しばらくしてトントントンと階段を上がってくる。

つかさがお粥を作ってきてくれたのかな。

「椿君。お粥できたよ」

やっぱりそうだ。

俺は上半身を起こす。

ガチャリとドアが開き、つかさが入ってくるのだが！

「ぶーっ！？」

俺はつかさを見て思わずふいてしまった。

なぜなら、

「っ、つかさ、なんでそんな格好を！？」

つかさはどこから持ってきたのか、白と黒の基本的なメイド服を着ていた。

「へ？どこか変？」

つかさはくりとターンする。その姿がとても可愛らしく見えた。

「いや、めっちゃめっちゃ似合ってるけどなんでメイド服を！？」

「えっとね、こなちゃんが看病するならメイド服かナースじゃないと椿君が怒っちゃうつて言ってたから」

それでメイド服を選んじゃったんだ……。

しかもかなりスカートは短く、フリフリがついているのがよけいに誘惑しているように思えた。

「もしかしてナースの方が良かった？」

つかさは上目遣いでこっちを見る。

それを直視していたらケダモノになりそうなので俺は目をそらした。

「い、いや、そっちの方がいいです……」

つい俺は本音を出してしまう。

「良かった。それじゃ椿君、冷めないうちにあーん」

スプーンを俺の口に持ってくる。

「……これは？」

「あーんだよ？」

「それはわかってるんだけどなぜあーん？」

「いいからいいから。はいあーん」

「……！」

つかさが前屈みになりながら近づいてきて胸元がチラツと見えて、ドキツとした俺はマジで暴走しかけた。

つつつかさが着るとまた新鮮で見るのが恥ずかしかった。

「もしかして…、お粥…嫌いだった？」

しゅんと落ち込むつかさ。それを見た俺は、

「…………パクツ。もぐもぐ…」

差し出されたらつかさのスプーンに乗ったお粥をパクリと食べる。

「美味しいよつかさ」

「ホントに！？じゃあ私も一口」

つかさは無邪気な笑顔でパクリ。

……………ってそれさっき俺が使ったスプーンじゃん！

しかしつかさはそれに気づかずもう一口。

「けっこう美味しいね」

……………ヤバい。このままじゃ俺、萌え死にするかも…。

第42話 続・ご奉仕します

「ごちそうさまー……」

つかさが作ってきてくれたお粥を全部食べて俺は横になる。
しかし危なかった……。

もう少しで爆発しちやいそうだったよ。

まさかメイド服を着たつかさにあーんしてもらうなんて想像もつか
なかった…。

「御粗末様でした」

「いえいえ、けっこうなお手前で」
つられて言ってしまう。

「じゃあ私はこれ置いてくるね」

「ああわかつ……た!？」つかさは空になったお粥を持って部屋を
出ようとするがその際にチラッとパンツが見えてしまった。

「え?どうしたの?」

つかさが振り返るがまたスカートがふわっとめくられる。

「い、いや、な、なんでも、ない……」

「でも鼻血出てるよ?」

「そりゃそうだろ……」

なんてったって伝説の代物を見てしまったからな…。

「変な椿君。安静にしないでと治らないよ」

そう言っつつかさは下に降りていった。

「うーん…眠れない」

先程のつかさのメイド服が原因なのか、俺は身体はダルいのだが眠たくはなく、ぱっちり視界は良好だった。

トントンッ。

ドアが軽くノックされた。

「椿君入るよ？」

つかさの声がドア越しから聞こえてきた。

「ああ、どうぞ」

「えへへ、とっておきのものを持ってきたよ」

つかさは右手を隠しながら言う。

「とっておきのもの？」

「じゃーん！」

つかさは右手を高らかに掲げる。そこには、

「……………なにそれ？」

「除菌スプレーだよ」

「……………なんで？」

「菌をいっぱい殺してこの部屋をきれいにすれば椿君もよくなるんじゃないかなーって」

「……………」

バカにつける薬はないって言うけど天然の方もつける薬はないよな……………。

とりあえず今はつかさのせっかくの優しさを無駄にしないためにも策を考えないとな。

「つかさ……………」

「どうしたの？」

「このスプレーはあとで使っていていいかな？」

「うん、いいよー」

よっしゃ。これであとは俺がスプレーを使ったフリをすれば完璧だ。
「じゃあつかさは下に降りてて」

「うん、わかった」

つかさはテンポよく下に降りていった。

足音が下までいったのを確認した俺は窓を開け、外に向かってスプレー発射！

万事解決ってわけだ。

ある程度スプレーを使い、それを机の上に置く。

するとつかさがちょうど部屋に来る。不気味な黒色をした物を片手にして……。

「椿君椿君、家にある薬全部混ぜてみたよー」

「えっ……」

「はい椿君あーん」

「パク…もぐもぐ、ごつくん。凄く美味しいよ」

「良かった。このクッキー自信作だからもし不味いって言われたらどうしよーって思ってた」

薬はさすがに混ぜたら毒なので俺はつかさが作ってきてくれたクッキーを食べさせてもらう。

味は美味しく形も上手、ただ一つ問題なのがクッキーですら自分の手で食べることは禁じられた。

「なあ、つかさ。クッキーぐらいは自分で食べたいんだけど…」

「駄目だよ、椿君風邪なんだから」

はあ……、やっぱり叶わない願いなんだな。

俺は諦めてつかさの手にあるクッキーを食べた。

「じゃあ私は下にいるから何かあったら呼んでね」

「うん、わかった」

つかさはこれから家事をするため部屋を出る。

.....。

.....。

.....。

暇だ。なにもすることがなかったらイライラしてしょうがない。

.....。

「ダメだ。やっぱりおとなしく寝よ」

考えても何も思いつかないので俺はここらで一眠りすることを決め、目を閉じた……。

ゴソゴソ……

なんかくすぐったいなあ……。静かに寝かせろよあ……。

モゾモゾ……

だからくすぐったいってばあ……。

椿君…

「え？」

「ばっ！」

ふと横を見てみるとつかさが布団に潜り込んできて俺の隣に来て顔を
を出す。

「な、つかさ！？」

「ふああい？」

つかさはなにやら頬を赤くしながら俺の体に急接近してくる。

あまりの行動に俺は反対側を向くが、

「だめだよ。ちゃんとこっち見てえ」

両手で俺の顔に触れてつかさの顔の目の前に持っていられる。

吐息のかかる距離に可愛らしいとろんとした目がすぐそこにあった。

「椿く〜ん」

「う！？」

いきなりつかさから強い酒の匂いが漂った。

まさか……、

「つかさ、お酒飲んじゃったの！？」

「えへへ、お酒なんかのんでないよぉ〜」

いや、絶対飲んでるだろ！

明らかに匂うし顔は赤いしなんかやたら接近してくるし誤魔化せると
でも思ったのか！しかも机の上にもろお酒って書いたビンが置いてあるぞ！

っていうかあれは黒井先生が前に家に来たときに置いていた強力のお酒
じゃないか！

「つかさ、とりあえず退いてくれ。少し暑い…」

「だ〜め。体を冷やさないようにくっつかないとぉ〜」

そう言っつつかさはギューッと抱きしめる。

「うぉあ！？」

あたってる！生の太もとか肌があたってるって！

む、胸もそんなに押しつけないで！いくらメイド服でも感触が……！
しかしそんなことに気づかないつかさはさらに抱き寄せる。こりや
相当酔っているな……。多分ジュースとかと間違えたんだろう。つか
さは天然だし……。

「ほらぁ……椿君もお………ガクッ」

つかさは力尽きたらしくぐっすりと眠りについた。

「……………ぶはあっ！はあっはあっ！風邪よりこっちの方がきつい
んだけど！」

ようやく静かになった部屋で俺は独り言を言う。

リアルにドキドキした……。あんな姿で迫ってこられたらホントにゾ
クってくる。

「すやすや……」

つかさの寝顔をまじまじと見つめる。

俺は初めてだった。こんな近くで女の子の顔を見たのは………。

第43話 Heart To Heart

「可愛い寝顔しちゃって…」

俺はつかさの頬をツンとつつく。

「ん、……すやすや」

……。

俺はもう一度柔らかいほっぺたに一突き。

「あう、……すー…すー」

こ、これは面白いかも…。

「ちよいちよい」

「あん…」

「ツンツン」

「くう…」

こんな反応されるともつとイジってみたくなってしまう……。しかしこれ以上はやりすぎなのでやめておいたほうがいいだろう……。

誤解はもう勘弁だし…。

そう思って手を出すのをやめようとしたがふと全身を見てみると完全な無防備状態のメイドさんが眠っている状況に気がつく。

俺はじつと見てつかさが抱きしめてきたあの感触を思い出す。

「あのふわふわした体をもう一度抱きしめたいな…」つかさに見とれて俺は目を奪われる。

「今ならあんなことやこんなことが…」

……ってこれじゃ俺は完全な変態じゃないか！

自重しろ！自重するんだ俺！！

必死に欲を抑えようと

布団を勢いよくかぶる。

「抑えろ抑えろ抑えろ抑えろ抑えろ抑えろ抑えろ抑えろ抑えろ抑えろ……」

俺は何かの呪文を唱えるかのように言い続けた……。

「う……ん？あれ？いつのまにか寝てたのか……」

大きくあくびをして体を起こす。

すると俺の手にサラッとした髪があたる。

「つかさ……まだいてくれたんだ……」

ベッドの横に病人よりもぐっすりと眠っていた。

ホント気持ち良さそうだなあ。

俺はそんなつかさを見てそつと頭を撫でる。

「ありがと、つかさ」

俺は一言つかさに言った。

ガチャリッ。
…。

「ふえ？」

ん?

しかしその時ドアが開きパティとひよりが覗き込んでいた。

⌈
⋮
⌋

⌈
⋮
⌋

「……うめっくー……」

パタンツ…。

ドアが静かに閉ざされる。それを俺は黙って見ているしかできなかった。

でも俺が悪いわけじゃないんだ、つかさが勝手に潜り込んできただけなんだ。

「……………終わった……」

つかさのメイド姿、そして隣で無防備に眠っている、とどめには俺がつかさの頭を撫でていた、

こんな状況を誰がどう説明をしようと無効化されるだろう。

ガチャリッ……

またドアが開く。

「改めてこんちわーっす椿先輩。

……もしかしてお取り込み中っすか？」

ひよりはニヤニヤと弱味を握ったかのような顔をする。

「いや別にやましいことはしてないから」

「嘘はつかない方がイッスよ。他のみんなには言わないでおくっすから。だからさあさあさあ！」

せまりくるひより。

「だから何もしてないってば！」

「……むー、そこまで頑固になるなんて素直じゃないネ！」

「パティの言う通りっすよ！だから白状するっす！」

「だーかーらー！何もないってば！」

しつこく聞いてくる二人に俺ははつきりと言う。

「じゃあこのつかさ先輩の姿はなんなんすか？」

一拍間が開く。

「……それは錯覚だ」

「それじゃあなんで隣で寝てるんです力？」

「ゲームとかでよくある『目が覚めたら横で美少女が寝ていた』の法則がパティたちが来るのを見越して論理的に発生してしまったものだ」

「ならなんで椿先輩は頭をなでなでしてたんすか？」

「目覚まし時計と間違えた」

「ムウ……！椿かなり汗だくネ」

パティとひよりはまだ疑い深く俺を見る。

「……はあ、これ以上聞いても椿先輩はきつと私たちをかやの外に

するだろうから諦めるしかないっすね…」
俺はいいわけを張り巡らしてひよりたちの追撃をギリギリ回避することができた…。

「ふわあああ……、眠た〜いい……あれ？椿君汗だくだけどうしたの？」

つかさが起床して俺に何があったか問いかける。

「春の妖精達が訪ねてきただけだよ……」

「ふーん。ところで何で私こんなところで寝てるんだろ？」

…覚えてないのかよ。

「あ、もうこんな時間なんだ。みんなもう帰ってるかな」

つかさはベッドから降りて隣の部屋に行き着替えてから下に直行。

俺もあとからリビングに行く。

「あ、おはよう椿君」

「おはようこなた、みんなも。あと…ひよりとパティも」

俺はひよりたちの顔を伺いながら言う。

すると向こうもこっちの気持ちを察知したらしくひよりが近づいてきて、

「大丈夫っすよ、誰にも言っていないっすから」

それを聞いて俺は安心した。

「どうしたの？何かあった？」

「な、なんでもないよ。いつも通りかがみさんはツインテールだなあって思ってたさ！」

「……怪しいわね」

かがみさんは目を細める。

「そんなことより椿君は風邪大丈夫なの？」

ゆたかはタイミングを計り心配そうにする。

「まだ微熱程度だけでもう大丈夫だよ」

「そっか、よかったー」

ゆたかは笑顔になる。その様子を見ると真剣に心配してくれていたのがわかる。

「というわけでピザ頼んどいたから」

「こなたマジで!？」

「うん、マジだよ」

「やったー!」

「あ、でも椿君はまだ微熱だからお粥ね」

.....。

「えっ」

第44話 憂鬱の寝室

ワイワイ、ガヤガヤ！

「……………」

一階から楽しそうな声が聞こえてくる。おそらく頼んだピザをみんなで食べているのだろう。

そんななか俺はというと何も考えずベッドに寝ころんでいた。

「くそー、俺が風邪だからってみんな美味しいもん食いやがってー

！」

一人ぶつぶつ愚痴を言う。

すると誰かが二階に上がってくる音がした。

「コンコン。椿君入るわよ」

かがみさんがドアを開ける。

「どうしたの？」

「いや、ちよつとね……。椿君ピザ食べたいかなって思ってたさ……」
気づくとかがみさんは右手にピザをのせた皿を持っていた。

「もしかして…俺のためにわざわざ持ってきてくれたの？」

「そ、そうよ、悪い！？」

「い、いや、嬉しいけどさ…なんか怒ってない？」

「べべべ別に怒ってなんかなないわよ！！」

かがみさんは顔を赤くしながら言う。そんなに照れながら言われたらこっちまで恥ずかしくなっちゃまう…。

「い、いいから早く食べなさいよ！はいあーん！」

かがみさんはやみくもにピザの一切れを取り出して俺に差し出す。

「……………え？」

「だ、だからあーん！ほら早くしなさいよ！」

……いやなんでそんなキレてるの？

俺はかがみさんの心がよくわからないままパクリとピザを一口いた
だいた。

「お、けっこう美味しい」

チーズやらベーコンやらがある普通のピザなんだけど生地がとても
美味しいから凄く食べやすい。

「そ、そう。ならよかったわ」

かがみさんは真正面には向き合わず多少傾いている。なんかご機嫌
斜め？

「かがみさん…なんかあったの？」

「えー？ な、な、な、何言ってるのよ！はい次！さっさと食べて
！」

かがみさんは横を向き、仏頂面で続きを俺の口に近づけるが、

「ふがつ！？ちよつかかがみさんそこ違う！鼻！鼻に押し付けてる！」
しかしかがみさんには全く聞こえてはいなかった。

「痛い痛い！って鼻の中入っちゃう！具が鼻に入っちゃうってば、
！！」

「へ……？ あ、ごめん椿君！」

かがみさんはあわてて手に残ったピザを皿に戻す。だが口に入らず
押し付けられた先端部分のピザは折り曲がり具は鼻と口の上、そし
て服の上に散らばってしまった。

「さっきはホントにごめんね椿君」

「いいよ別に。ピザ食べさせてくれたしかがみさんには感謝して
るよ」

「そ、そう。ならいいけど……。あ、さっきピザこぼしちゃったか
ら私布団洗ってくるね」

「わかった。じゃあ代わりにこつち使ってるよ」
俺は薄い夏用の布団をかぶる。

かがみさんが部屋を出てから少し経った頃にドアをノックする音が響き、そのあとにひよりの声が聞こえてきた。

「先輩、入っていいですか？」

「っていうか開けないト無理やり入るネ！」

「……………どうぞ」

ひよりとパティが部屋に入ってくる。

「あんまり元気がないようデスネ」

「そりゃ風邪だしみんなはピザ食ってるしで最悪続きだよ」

俺は恨めしそうに言う。

「まあまあ、さっきかがみ先輩がピザ持ってきてくれたんだからいいじゃないですか」

…鼻に入ったりして大変だったけどな。

「ところで二人は何の用？俺をいじめにでもきた？」

「やだな」。椿先輩の体調がよくなるようにみかんの缶詰を食べさせてあげようと思っただけっす」

そう言ってひよりは手に持っていたスーパーの袋の中から缶詰を取り出す。

……………わざわざ買ってきてくれたのか、意外だな。

こういうところはちゃっかりしてるよホントに。

俺は開けられたみ缶詰めの中からみかんをパクパクと食べ進める。

先程のお粥、ピザを腹に入れたばかりなのだが好物やデザートになると話は別だ。

そしてとうとう全てを一人で食べきった。

「ゲフツ、もうさすがに苦しい……」

缶詰め一個というのは見た目では案外少なそうに見えるが一人で食べるとなるとけっこう量が多いことに気づく奴はあんまりいないだろう。

「どうでしたか味の方は？」

「かなり美味しかった………痛っ」

俺は多少後悔しながらも二人に礼を言う。

「それはよかったネ。じゃあ今度はこっちのパイナップルを食べてくだサイ」

「ぶっ！……まだ食うのかよ……」

「まさか私のパイナップルが食べれないって言うんですか！？ひよりのだけ食べて私のは食べないなんて酷いネ！」

どこのセリフ使ってたんだよこの留学生は……。

しかし真剣に限界だ。もう米一粒も入らない……。

「うゝ……マジで苦しいってば……」

「さあ早ク！」

「いやだからさあ……」

「さあさあさあ……！」

「……………ったく、もういいや……………。食べばいいんだろ………ぱくり。モグモグ……」

あまりのしつこさに観念した俺は黙って差し出されたパイナップルを食べる。

「どうデスカ？」

「うっ……………！」

は、は、腹が痛い！

しかしここで弱音を吐くほど桃原家の長男は甘くない！

「ど、どつでもおいじいよ……ごふうっ」

膨れる腹を押さえながら頑張り続けた……………。

第45話 最高の立場（前書き）

過去を振り返る最初の説明で“俺の部屋にいて”というのがあるんですがそれは間違いで“俺の机の前にて”が正しいです。

あと先に言っておきますが今回の45話は過去を整理してるだけなのでつまらないと思います。

ですのでめんどくさい方は飛ばしちゃってください（笑）

第45話 最高の立場

「それじゃあ椿先輩、お大事につす！」

「お大事にネー！」

「う、ういゝす……」

やつと帰ってくれた…。

みかんの缶詰めを食べたと思ったらもう一個でてるんだもんな…。
もう勘弁してほしいぜ…。

横になるのが苦しくなり俺は上半身だけ起こす。

しかしあれだな。

同級生の友達とかはいるけど年下の友達なんて初めてできた気がする。
それにけっこうみんな可愛いしレベルは高い方なんじゃないのか？

そんな人達に囲まれて生活して一緒に料理食べて一緒に学校に登校して看病までしてもらって…。

今さらだけど俺ってけっこう羨ましいポジションにいるのかな？

「……………」

俺は過去を思い出してみる。

最初に朝起きたらこなたが俺の部屋にいて泊まるとか言い出して。

それが事の発端なんだよな。

んでもかく学校に行って昼休みにつかさと会って一緒にご飯食べて…。そこにかがみさんがこなたの父親からこなたが泊まることを聞いて屋上に呼び出されて、つかさも事情を知って泊まりたいとか言っただけがみさんもあくまでつかさの保護者として泊まりに来て…。

その日になんかモンハンやって終わっちゃったんだっけな。

次の日には一年生のゆたかとみなみちゃんも泊まりに来ることになってみなみちゃんに格ゲーで負けて、その夜にこなたが変な冗談を言って2日目終了。

三日目には黒井先生が来ちゃうし次の日は店長の兄沢命斗も来るしで大変だった。夜には俺の両親のことをみんなに伝えて親が残したアルバムを見た……。

土曜日にはそろそろみんなも帰りたい頃だと思ったらみさおとあやのさんに会い、みさおが泊まりに来てそこからみんなを名前で呼ぶことになった。

日曜日にはこなたとみさおが勝負しだしてサバイバルゲームを俺達までする羽目になった。

しかも勝敗はゆたかの姉であり警察官の成美さんが第三勢力として加わって一人で勝利しちゃったんだよね。

そのあと車で暴走しちゃうししんどかった。家に帰るとかがみさんとつかさ、みなみちゃんは一度家に帰ることを報告。

月曜日になっていつも通りに終わると思っていたがここでこなたの父親が現れたっけ。

でもこの日のことを俺はあまり覚えていない。

浮かぶのはこなたに似た女の人だったとおもっただけなんでその人が浮かぶのかはわからない。

…まさか記憶喪失とか？

次の日にはひよりとパティと知り合って1日だけ泊まりに来たよね。でも俺とこなたとゆたか、後から入ったひよりとパティでトランプ

をしていたけど俺のせいでゆたかが怒って気まずい雰囲気…。
そしてそのままこの日が終わってしまった。

朝になりゆたかは学校を休むことになって俺達はゆたか一人を置いて登校した。学校でみゆきさんに相談したらどれだけゆたかの存在が大切だったのかわかった。家にいないゆたかを俺は探しだして説得には成功したが体調が悪くなって目眩が襲い雨が降っているのにも関わらずゆたかは川へと落ちてしまった。

みんなで助け出してゆたかを救えた時はホントに安心した。ゆたかの笑顔が全ての答えだった。あの笑顔を護りたい、ただそう思った。そして家から離れていたかがみさんたちが帰ってきた。

22日には白石とアイドルの小神さんに出会った。

白石がよけいなことをしたせいで追っ手に追われているらしく家に泊まらせる。

23日ではゴットウーザ様と白石が正面衝突してなんとか解決した。

そしてついに来てしまったひよりの誕生日。朝早くから俺の家に来たのはなぜだったんだろう…。

この日はひよりがホラー映画を見たいと言ったのでみんなで映画館に行った。

上映終了後に腰を抜かしたつかさをおんぶして喫茶店に足を運ぶ。だがそれを見て羨ましいと思ったひよりが『私もいつかおんぶして』という変な約束を勝手にした。っていうか思考がまるつきり子供だな……。

日曜日、ゆったりしようとしたが中間テストが近いので高良さんと呼んで勉強会。そのあと夕食を食べて高良さんを見送った。しかし帰りに意外な人物に会った。中学の時のサッカー部マネージャーだった萩野由佳だ。いろいろと話してその日を終えた。

月曜日…つまり今日だ。

風邪をひいてしまいつかさ家が家で看病してくれた。でもメイド服は刺激が強いっす…。

つかさはやたら天然ボケするし酔っぱらうしで俺もあまりの誘惑に負けるところだったぜ。

夕方にはみんなはピザを注文したが俺は風邪ということであれべない…。いったい誰が今日に限ってピザを注文なんて言ったんだよ！二階で一人落ち込んでいたらかがみさんがなんとピザをこっそり持ってきてくれた！もう感謝感激だぜ！

しかしそのあとにはみかんの缶詰め一個とパイナップルの缶詰め一個を一人で食いきってそして……、

「今にいたるってわけだ…ゲフツ」

さっきのパイナップルがかなり効いてくる。

ホントに俺って幸せ者なのか…？

第46話 一線の壁

「暑い……」

6月に入る前のこの季節、部屋は地味に暑くなって俺の気持ちをイライラさせていた。

そしてとどめにさつきパティが持ってきたパイナップル……。

ベッドの上で横になりながらお腹をおさえていると違和感に気づく。

「あちゃー…、汗かいちゃったからシャツかなり濡れてるな」

俺は周りを見回して新しいシャツを探す。

するとタンスから白いものが出ているのを発見。

そっぴいシャツ類はあの辺に置いてたっけな。

俺はフラフラと起き上がって白いものを引っ張って取り出すが、

「ん？」

シャツならばもう少し長く引っ張るのだがスルツと簡単に手にとれた。

異変に思ってそろりと見てみると、

「パ、パ、パ…、パンツー!？」

明らかに女性のパンツが俺の右手に握られていた。

「……いや、まてよ。」

ここで焦ってはいけない。あくまで冷静に対処すれば大丈夫だ……。

いつも焦るからお約束みたいなイベントが発生するんだ。

まずは状況判断……。

「このパンツは誰のだ？」

「……。」

「……くんくん。」

椿はパンツを匂ってみた。

椿はドアを開けたみなみちゃんに見つかった。

「あ」

「……………」

静まる空気。

しまった…。匂うの選択は死亡フラグだったのか。

だがまだ諦めるには早い。

「…ち、違っんだみなみちゃん！えとこれはその、あれだよ！ショートケーキと同じ色をしてたからその色に誘われて…！！」

「……………」

みなみちゃんの顔がひきつる。

これではいかん！

「な、なーんてのは冗談でほんとはここだけなんで雪が降ってるのかなーって思ってたさ…！！」

「……………」

「……………」

「……………」

「…………ごめんなさい」

俺はなぜパンツを持っていたのかという謎の理由をみなみちゃんに話した。

「……………」

みなみちゃんは真顔で俺の顔を見ていた。

「え、えと、やっぱり信じて…ないよね…？」

まあ信じろってほうが難しいよな…。

「…あ、いえ、そうじゃなくて……………」

みなみちゃんは赤らめながら下を向く。

……………。

.....。

.....。

く、空気が重い……。

このままじゃ間が持たないので俺が口を開こうとすると、

「椿君そのシャツ……」

「え？」

みなみちゃんが俺の着ているシャツを指差す。

「濡れてる」

「ああ、これ？風邪で寝っぱなしだったから汗がシャツに染みてるだけだよ……ってさっき説明したよね？……もしかして聞いてなかった？」

「そそそんなことはないです。と、とりあえず今すぐ着替えないとまた風邪をひきます」

そう言ってみなみちゃんは急いで下に降り、少し経ってからまた俺の部屋に入ってきた。

しかし出ていったみなみちゃんとは異なり濡れたタオルと小さめの水が入ったバケツを持ってきた。

「えと、椿君……」

「な、なに？」

みなみちゃんがもじもじとしながら言うので俺は何が起こるのか警戒しながら聞く。

「……脱いでください」

.....。

「は??？」

みなみちゃんがいきなり似合わないことを言うので思わずポカンとなる。

「だ、だから脱いでください。汗で体が冷えると思って……」

あ、ああ、そういうことか。あっち系じゃなかったんだ……。

そりゃそうだよな。人生そんなにうまいことできてないよな、うんわかってるよ……。

俺は安心したのか残念だったのかいまいち分からなかった。

ぴちゃぴちゃ…。

「う…ん…みなみちゃん気持ちいいよ…あ…」

「……そ、そうですか…？じゃあこっちも…」

「うあっ！？ いきなりは勘弁し…て…」

「ご、ごめんなさい…」

「…別にいいよ……。じゃあ今度はこっちを…」

「ダメエエエエ〜〜〜〜〜〜〜〜〜！！！！！！」

かがみさんが勢いよくドアをぶち開く。

「え、どうしたのかがみさん？」

「…？」

そんなかがみさんを見て俺たちは不思議に思う。

お腹でも痛いのかな？

「あ、あれ？体拭いてるだけ？」

「……何と勘違いしたの？」

「い、いや、なんでもないわよ！」

「ホントに？」

「ほ、ホントよ！」

「ふーん…。まあいいや。みなみちゃんありがとう」

「…じゃあ椿君、また明日」

体が拭き終わりみなみちゃんはバケツを下に持っていく。

それを確認した俺はかがみさんに問う。

「さてと、んで何してたの？」

「だ、だから何にもしてないってば！」

「……………」

「……………なによ？」

「はあ…、もつと素直になつてくれたら嬉しいんだけどなー、なん

て」

「ムカツ！」

バチーン！！

いい音が響いた気がした。それと同時に俺の頬が腫れるのは関係あると考えてくれ…………。

「おーい入るぞー」

今度はみさおか…。

追いつ返す気力がないので、「…………どうぞお…」

ガチャリツ。

「椿元氣してつかー…ってなに！？その痛そうなほつぺた！まさか風邪つておたふく風邪！？」

「きつと柊ちゃんね」

「あ、あやのさんも来てくれたんだ」

みさおに続いてあやのさんが制服のままで来る。

「あやの制服ぐらい着替えてきたらいいのに」

そして一度部屋から出たはずのかがみさんがちよつとムスツとしながら言う。

「だって椿君が心配だったから。」

はいこれお見舞いのメロン」

うつ！また食べ物…。

だがせつかく来てくれたんだし要らないなんて言ったらあやのさんの彼氏にぶつとばされるだろう。

「わ、わあ！メロン凄く美味しそう！」

「でしょう？このメロンとっても甘いの 椿君食べる？」

「い、今はちよいと苦しいから明日いただくよ」

「じゃあ今私が食ってやるよ」

みさおがメロンに手をのばす。しかし、

「ダメだよみさちゃん。これは椿君のなんだから」
「きゅぅぅぅ……。柊！あやのが！」
「「あんた（みさお）みさちゃん（）が悪い！」」
「三人ともぴったりと息合っちゃってるね……」

第47話　これが狙い目

「36度8分！風邪は治った！ピザも堂々と食える！言うことなしだな！」

やっぱり健康って素晴らしい！

「あ、椿君風邪治ったんだ。じゃあ看病はもうできないねつかさが残念そうにする。」

「あはは、じゃあまた風邪ひいた時に頼むよ」

「うん　今度はこなちゃんどんな服用意してくれるか楽しみだな」
「……………」

もしかしてつかさってコスプレ好き？いや可愛いものの好きなのかな…。

「久しぶりだな桃原」

「……………」

はあ…………、朝からついてない。

登校中にまさか店長が来るとはおもわなんだ…。

実は俺ちよつとだけ店長苦手なんだよな。あの熱いノリについていけないし…。だが無視するのも悪いしなんでここに居るのか理由を聞くか…。

「どうしたんですか？店長ともあろうものが」

「よく聞いてくれたな！、お前ちょっとバイトしてみないか？」

『バイト？』

みんなが聞き返す。

「ああ、どうだ？」

「いやそんな急に言われても……」

「もちろん収入は高くする。伝説の少女A達と一緒に働いてくれたら助かるんだが贅沢は言わない。お前だけでいいんだ。頼む！」

「うーん……」

俺はどうするか悩んでいると、

「バイトね……。よし私はやるわよ。けっこう面白そうだし。椿

君も試してみても嫌な仕事だったら抜け出せばいいんじゃない？」
かがみさんが後押しするかのように言う。

「お姉ちゃんあっさり決めちゃって大丈夫なの？」

「いいのいいの。バイトってちょっとやってみたかったし」

「ふーん、そっかあ……。なら私も手伝うよ」

な、なんですと！？

つかさも賛成側にいく。

そしてみんなもなぜか頷いて結局流れるに俺もすることに。
提供源が店長っていうのが気になるんだけどなあ……。

店長は俺の耳を貸せという素振りを見せる。

「サンキュー。美味しい特典もつけといてやるぜ」
特典ねえ……。

どうせ売れ残ったキョンのカードとかじゃないだろな……。

バイトのことが気になりつつ学校を終えて俺たちは店長がいる店に向かう。

「いらっしやいま……ってお前たちか。よくきたな」

「あれ？店長一人しかいねえじゃん」

確かにみさおの言う通り店員が一人も見当たらない。

「ふむ、それなんだが実は全員アキバで行われている涼宮ハルヒイベントに参加してて今日は俺一人なんだ」

店員までもが本格的なオタクだったのか…。

「だからお前たちに頼んだのだ。さあ早く全員着替えろ！」

「着替えるってそのエプロンを着けるの？」

「ちつつちつ。甘いピンクのお姫様」

「小早川ゆたかなんですけど…」

「桃原はエプロンだが、貴女方は違う！女性陣には特別のコスチュームをご用意させてもらった！では女性陣の方々はこちらへ」

そう言って店長はみんなを連れていく。

大の大人がなにをやらかす気だ？

待つこと15分、奥の更衣室から複数の足音が聞こえてくる。

どうやら着付けは終わったらしい。

「待たせたな愚民！」

「誰もあなたを待つてはいな……」

俺は店長の後ろにいる六人の美女に見とれた。

「ふっふっふっ。素晴らしいだろ？私は」

いや華やかな花束に腐ったバナナが混じってるぐらい邪魔です。

でもホントにみんな可愛い…。

「なな、なにそんなに見てんのよ！」

「あ、ごめん…」

かがみさんに指摘されて目を反らす。

ん？でもちよつと待て。さっきの姿って…。

俺はもう一度コスチュームを見てみると、

「……………あ！」

やっぱりそうだ！かがみさんが着てるやつってつかさが着てたメイ

ド服にちよつとアレンジがかかつてるだけじゃん！

店長が言つてた特典つてこういうことだったのか。

「どうだ、全員の長所が光つてて完璧だろ？」

「たしかに……」

全員違うコスチューム、

そして髪型なども全体的に普段と変わっていた。

こなたは季節外れなのだが髭なしのサンタのコスプレ、

かがみさんの服はメイド、さらにスカートはつかさが着ていたのより短めときた。

つかさはちよいと危ないが白いスク水で猫耳、もう直視できない……。そしてゆたかは一般的な可愛い私服でリボンを外して髪をおろし、キュートなくまのぬいぐるみを抱き抱えている。

明らかに妹キヤラを演じさせているのがすぐにわかった。

みなみちゃんは……なんだろう？ 白いスーツだからカッコいい感じだ。

みさおは……どうでもいいや。

「あ、おいちよつと待てつてウゝア！ 何で私の解説がないんだよ！」
ちつ、バレてたか。

みさおはまあ戦国時代にいた鎧やら兜やら弓矢やら装備してる姿だな。

はいみさおの説明終わり。

「いや全然違うだろうよ！ どう見たつて私は巫女だつてウゝア！」
まあ今みさおが言つたことはあたつてる。

しかしこれじゃコスプレだけどいいのか？

店長は俺たちに仕事を言つていく。ゆたかとみなみちゃん、かがみさんは表で客を呼び込む。つかさは商品を並べたりしてこなた、みさおはレジをする。そして俺は全体的に手伝うことに。

みんなは了承して持ち場に行くが俺は店長にみんなに聞こえないように話す。

「ちょっと店長、こんなのでホントに客入るのか？」

「その点に関しては問題ない。なんてったって客の弱点を突いてるからな！」

「弱点……？」

『うおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！』

「な、なんだ？」

店の外で凄い地響きと声がある。

ウイイイイン。

「いらっしやいま……」

バキッ！！

『野郎に用はないナリ！！女の子はどこだ！？』

『あ！あっちのスク水の女の子萌え~~~~！！』

『店の前にもめちゃくちゃ可愛い子いたし最高ナリ！』

「……………」

「作戦は成功した」

「ああ、そうだな……」

見事にオタクたちが大量に釣れたよ…。

第48話　そういう二ーズもあるんだよ

「いらっしやいませー」

次から次へと入ってくる客に俺たちは大忙し。

なぜ今日に限ってこんなに入ってくるのかはもうわかるだろう…。

俺はチラッと入り口を覗く。そこには、

「い、いらっしやいませー」

くう！ゆたかはやっぱり可愛いな～！

恥ずかしながらも元気よく客引きをする姿に百点！

一方かがみさんはというと、

「でえーい！入るんならさっさと入りなさいよ！いちいちうろろろすんなー！！」

あ、ちよつとそのあんたも見とれてないでこの店でなんか買っていきなさいよ！ほらちやつちゃと動きなさい！」

「こ、この仕打ちも嬉しいナリ～！」

……あれはいいのか？

かがみさん普通に客に対して怒ってるし殴ってる…。客は客でちよつと喜んでるように見えるし。

まさかこれが真のツンデレ？

だが向こうでは予想を超える光景が地上で生放送されていた。

「…い、いらっしやいませー」

『ドッキーン！』

みなみちゃんが声をかけていくのと同時に男ではなく女の子が寄り添っていく。まあ理由はわかるけどね…。

そんなこんなで店の中はたくさんの人々で動きづらい。その七割

が男で残りの三割は女が占めていた。

外の状態はまあいいとして中はうまくやっているかな？品並べを
するつかさを見ると、

つるっ、こてん。

「あ痛っ」

予想通り見事な転けっぷりをお持ちで……。

けど想定内だから敢えてほっとくか。客もつかさを見てデレ〜と
したり写真撮っちゃったりしてテンション上がってるし。

さてさて、レジの方は上手くいっているのかなっつと。

「10157円になりまーす。ちょうどですね、あじゅじゅじゅし
たー」

……え？今何て言った？なんか最後が聞き取りにくかったけどもう
一回聞いてみよう。

「3642円になります。ちょうどいただきます。あじゅじゅじゅ
したー」

……なんで誰もツツコミをしないんだ！？なんで全員スルーなんだ
よ！？

あじゅじゅじゅしたーってなんだよみたいに気になるだろ普通！？
平然としている人々が真顔っていうのが逆に怖い…。

「ありがとうございますー」

バイトを始めてから二時間が経過したが相変わらず客は減らない。
むしろ増える一方だ。用を済ましたはずの客はなぜかまだいるしチ
ラチラとこなた達を見ていたりする。こんなんでは日本は大丈夫なん
だろうか…。ウイイーン。

ドアが開くと同時に聞き慣れた声が届く。

「オオー！ひよりん見てみて！今日は人がいっぱいネ！」

「たしかにこれはすごいね。でもけっこうむさ苦しい…」

「あ、パーティにひよりじゃん。今日はどうしたの？」レジ越しからこなたが訪ねる。

「先輩、もしかしてここで新しくバイトなんすか？」

「あー、ちよつと違うかなー。簡単に言えば1日お手伝いみたいなもんだよ」

「でもそんな格好でやっていいんすか？」

「これは健全な男子の心を癒すユニホームだからいいの」

健全な男子はこんなアニメばっかの危なっかしい店には来ないだろう…。

「なかなか可愛いすね。入り口にいたみなみちゃん達とは違って別の魅力を感じるっす！」

「まあ胸がないのは希少価値だからね。それで二人は何しに？」

「あ、そついえば新しく出たハルヒのゲームを買いに来てたんだっ。じゃあ私たちは売り切れになるまえに行ってくるっす！」

「マタネこなた」

二人は人をかき分けながらゲーム売り場に進んでいった。

今さらだけどバイトしてたら知り合いにも会うんだな。ま、こんな店に知り合いなんて滅多にこないだろうけど。

「あれー椿うちじゃん！！久しぶりー！何々ここでバイトしてんの？」

萩野由佳が笑顔で入店。

「……なんでお前が来るんだよ……」

「えへへ、ちよつと散歩してたらすごいカツコした人たちがいてさー。面白そうだから勢いで入っちゃった。でも、椿うちがいるなんて知らなかったよー。しかもこんな格好をした店でバイトなんて椿うちけっこうやらしいね」

「ほつとけ。だいたいこれは店長の命令だから逆らえないの」

「店長？もしかして兄沢命斗のこと？」

「なんだ知ってるの？」

「まあねー あ、バイトいつ終わるの？」

「いつって言われてもな。たぶん夜までかっちゃんかな。でもなんで？」

「だって椿っちと久しぶりにデートでもしようかなって。じゃあ終わるまで外で待ってるねー」

「は？」

「あ、短い時間のデートなんだからちゃんとにするか考えといてねー」

「え、いやちよっ…」

ウィーン。

ドアが閉まり由佳の姿が店内から消える。

え、もしかしてこのパターンはまじでデートしなきゃなんないの？

第49話 零地点

バイト開始から五時間、ようやく仕事が終わった。

「つつわけで今日は助かった。おまえらのおかげだ。」

「いえ、そんな。こちらにもお給料をいただいてしまつて」

「なーに、いいつてことよ。ところで桃原、さっき由佳様が来てなかったか？」

「由佳様？まあさっき来てたけど……」

「私がどうかしたの？」

由佳がひよつこりと現れる。

「あ、由佳様！今日も店長をやらしていただいてありがとうございます！……」

……え、なにその態度？

「いやいやそれより店の方は大丈夫？」

「ゆ、由佳様が私めの心配をしてくださるとは感激であります！」

「またまたー。んじゃ私デートがあるからまたね兄沢っち」

「はいっ！頑張ってくださいー！」

……なんかキャラが違う。

……由佳っていったい何？っていうかこいつらの繋がりはなんなんだ？

俺たちは普通なら一直線に帰るのだが、「今日は疲れたねー」

「つかさもよく頑張ってたしねー。かがみのコスプレも見れたことだし萌えまくったねー」

「うつさい！それよりもうくただだから早く帰って寝ましょ。今からデートでウハウハの椿君なんかほつといて」

「うつ…」

なんかトゲのある言い方だな…。

だいたいデートっていても今からなにすりゃいいんだよ。

「あれ、かがみもしかして妬いてるの？」

こなたがかがみさんをからかうように言う。

「ちち違うわよ！別にそんなんじゃないんだからね！椿君も早く行けば！？彼女ずっと待ってたんだから！」

いやそんな怒って言わなくても…。

「じ、じゃあちよつと俺行ってくるから。できるだけ早く帰ってくるよ」

「朝に帰ってきてもいいけどねー」

「ごめん、かなり遅くなっちゃって」

「いいってことよ。椿っちが時間にいい加減なのは昔からだしね。でも罰は受けてもらうよ」

「罰…ってまさか！」

「そのとおり！アイスクリーム伝説の五段！」

ぬう、やっぱりそれか。こいつなにかと俺にアイスばっかおごらせるんだよなあ…。しかも昔と変わらず五段を躊躇なく頼みやがって。
「ほら行くよ」

由佳は俺の手を握って先導する。

この光景も全く変わらない。こいつのこういうところも五年前と。

『ほら椿っちー、こつちこつち』

『ちよつ待てよ！健全たる男子中学生に何をさせる気だ！』

『何って別に？』

『別に？じゃないだろ！なんで下着選ぶのに俺もついてこなきゃいけないんだ！』

『いいじゃんかー。椿っちだって自分の好みのパンツやブラをこーんな可愛い女の子が身につけてたら嬉しいでしょ』

『自分で可愛い言うな！それに嬉しくない！』

『ほんとに？』

『……………』

『ぶぶっ 照れちゃって可愛い だいたい椿っち心ん中では『周りが下着ばっかで最高！』とか考えてんじゃないの？』

『……………っ！だーもー早くしろ！俺帰るぞ！』

『あ、ちよつと待ってよ！まだアイスの件があるでしょうが！』

『アイス？そんなの覚えてないな』

『むきー！しらばつくれるな！椿っち言っただじゃん！アイスおこつてくれるって！』

『たしかに言っただが五段とは言っていないぞ！』

『細かいことは気にするな！』

『アホかー！いいか四百円も差があるんだぞ！四百円！バイトしてない一般市民には意外と四百円はクセモノなんだぞ！？』

『ちっさ！椿っちってそんなにちっさい男だったっけ！？思い出してごらん！ドラクエでラスボスを倒しにいったあのときを！椿っち仲間全員わざと死んだ状態にして結局一人だけで旅立ったじゃん！あんときは椿っち輝いてたよ！十万する防具も普通に買ってたじゃん！あのでかい器量はどうしちゃったの！？』

『そりゃゲームだからいいんだよ！ともかく早く下着決めろーーー！！』

… あんときは忙しかったなあ。 いつもあいつに振り回されてたっけ。でも…楽しかった。

由佳といると安心できて普通に話して一緒に笑って…。そんな日々がずっと続けばいいと思った。でも、卒業前にあいつは…、

『どうした由佳？わざわざサッカーゴール前まで呼び出して』

『…うん、実はね…』

『？』

『…椿っちさ、彼女とかいるの？』

『彼女？こんな俺に彼女がいると思うか？』

『……そう…だよ』

『なんか嫌なことでもあったのか？随分元気ないみたいだしお前らしくないぞ』

『…そうだね、こんなの私らしくないよね』

『ああ。んで用事って？』

『うん……、』

私さ、

椿っちのこと好きなの！』

『………へ？』

『へ？じゃない！』

『いや…だってお前今何て…』

『だーからー！椿っちのことが好きなの！どうしようもなく好きなの！大好きなの！！』

『………』

『だから……私と付き合ってください』

『………』

『………』

『………』

『……椿っち？』

『……ごめん、俺はお前の彼氏にはなれない…』

『………え？』

『今の俺は両親が死んで心がボロボロなんだ……。だから今は恋愛』

とかできない……』

「……………」

あの時は両親で頭がいっぱいだっただも今はどうなんだろう…。

俺は由佳のことが好きなのか…？

「椿っちどしたの？なんか悩み事？」

「……あ、いや、なんでもない」

楽しいって気持ちはある。でもそれは好きって気持ちとはちがうんだろ…。

「変な椿っち」

「どこも変じゃねえよ。そういえば今からどこ行くんだ？」

「ふっふっふ。どうせ椿っちはなんも考えてないと思ったからさ、ちゃんと決めてきたのだー！椿っち！あれを見よ！！」

由佳が指す方向を凝視するとそこには…、

「ラ、ラブホテル！？」

そう、どこから見てもラブホテルだ。

まさかこいつ本気か！？

「ちっがーう！なにいやらしいこと考えてんのよ！あっちあっち！」

「あ、観覧車？」

ホテルの後ろ側にそびえ立つ観覧車を由佳は指していたらしい。

全くややこしいな…。こなたが別れ際に変なことを言ってたから

「まさか！？」と思っちまったじゃねえか。そんなとき、由佳はボソリと呟く。

「まあ私は椿っちだっただ行ってもいいんだけどね」

「え、今何が言った？」

「うっん、なーんにもさ、早く乗る乗ろー」

ふう、相変わらす元気いいなあ…。

でもあれからけっこう時間は経ったんだしこいつは俺のことどう想

ってるんだろう……。

ただの友達なんだろうか……。それともあいつはまだ……。

「自分に振られた相手か……、

これほど気まずい関係はないよな………」

第50話 変わらない愛色

「ひゃー！人いっぱいだねー！」

観覧車の前まで来たのはいいが並んでいる数が半端じゃなかった。こりやかなり待ちそうだな…。

「おい由佳、どうする？今日は諦めて違う日にするか？後で埋め合わせはちゃんとしとくし…」

「なーに言ってるの。ほら行くよ」

由佳は人混みの最後尾へ視線を送る。

「え、マジかよ…」

「マジだよ」

「……………」

そんな笑顔で言われたら断れないじゃん…。

「さー、行くよ椿っち！いざ行かん聖地へ！」

……それ誰かが言ってたのを聞いたことあるぞ。

「……………疲れた」

「まだ10分も経ってないぞ」

「だって全然進まないんだもん。それに椿っちがバイト終わるまでずっと待ってたんだよ？か弱い女の子だったら普通くたくだよ。

っていうかなんで椿っちはバイトしっぱなしだったのにそんな平気

なわけ？」

そんなこと言われても……。まあ適当にそれっぽいこと言っとくか。
「そりゃ女の子の前で無様な姿は見たくないからかな？」

「……なんか椿っち大人になったね……」

「そういうお前は変わってないけどな」

「なんだとー！？こう見えても胸おつきくなっただからね！ほら触ってみて！」

由佳は俺の手を自分の胸に押し当てようとする。

「うわっ！ばっかやめろ！なに人前でしてんだよ！」

「だって椿っちがばかにするんだもん」

頬を膨らませて仏頂面になる。

「いや、そういう意味で言ったんじゃないって。それに本当は由佳が昔と変わってなくてホッとしてるんだ」

「なんで？」

「……なんとなくだよ」

「椿っちアバウトすぎ」

「しょうがねえだろ、なんかこう言葉にできないつつうかなんていうか……。あ、ほら前空いたから行けよ」

「誤魔化してんのバレバレだよ？」

「……」

んなもん何て答えりゃいいんだよ……。

「ねえ椿っち」

「……」

「ねえったら」

「……どうせくだらないことだろ？俺はツッコミはしないぞ」

「周りカップルしかいないんだけど。さらに普通にキスとかしてるし」

「っー？」

バツと周りを見回してみると由佳の言うとおりだった。

「ねえダーリン」

「だれがダーリンだ」

「いいからいいから。私たちってさ、ちょっと浮いてない？」
それを言うなよ…

「でもこうしたら大丈夫」

由佳は俺の腕にしがみつき体をひつつける。

「な、ちよつ、由佳!？」

「これならカッブルって思われるでしょ？」

いや胸がもろにあたってるってば…

しかもこなたより弾力が…。

とりあえず恥ずかしいからこいつと目を合わせないように横を向く。
しかし家族連れすらいないのは珍しいな。し、しかもあっちのカッ
ブルはあんな道端でデイ、デイ、デイ…、

「ふへー、あんなところでデーパーキスしちゃってるよ。お熱いね

」

「!？」

な、なんでこいつは平然としていられるんだ!？

まさかもう見慣れてる!？いやもしかしてとづくに経験済みなのか
!？

そうなのか!？そうだったのか!？

「おい椿っちー。順番回ってきたよー」

「なんてことだ…、由佳はもうそんなことまで……」

「椿っち?……もうしょうがないなー」

由佳は俺の手を強引に引っ張って観覧車の中に入る。うつ……なん
なんだろう、この気持ち。

別に由佳が誰と何をしようが関係ないのになんで心が曇っちゃうん
だろ……。

「すごいーい！！椿っち見てみて！綺麗だねー！綺麗な犬だねー！」

「いや見るとこ間違ってるから」

「さすが椿っち、ツツコミはしないとか言っときながらやる時はやるんだね。でも本当に綺麗……」

まああたしかに綺麗な夜景だな。白い光がいろんなところで光ったり消えたりして思わず見とれてしまう。由佳さえいなければ……。

「きゃー！あの二人まだキスしてるよー！」

あ、私たちの後ろの人たち一緒に手を繋いで夜景見てるよー！なんかこっちが照れちゃうねー」

だから見るとこ違うつて。それにさっきまで疲れたとか言ってたくせに肝心なところで元気になりやがる。

「お前さー、少しは静かにして大人っぽく眺めたらどうだ？」

「なーに言ってるの！楽しむ時は楽しむ！！ほら、椿っちもこっち来なよ！」

「え？うわつと！」

由佳は強引に俺を隣に座らせる。由佳の顔はどうしようもないくらい明るくて可愛かった。

「ねえ椿っち」

「うん？」

「これってデートだよね？」

「うん」

「それに二人つきりだね」

「うん」

「ならば、普通キスとかするよね？」

「うん。………うん！？」

「す・る・よ・ね？うんって言ったもんね？」

由佳は脅すように胸ぐらを掴む。

「いやいやいや！それは違うだろ！」

「……………なんで？」

「え？」

由佳はそつと手を離して向かい側に座る。

「なんで椿っちはキスしてくれないの？」

「そりゃそうだろ。俺たち付き合ってないんだし……」

「キスって……付き合ってなかったらしちゃダメなの？」

「いやそれは……違うだろうけどなんて言うかその……、キスは簡単にはできないっていうか……」

「……椿っちさ、私のこと変わってないって言ったけど正解だよ」

「……え？」

「だって……私の想いはあのときからかわってないんだもん……………」

第51話 恋の螢火

「……………由佳？」

由佳の眼には俺の姿が映し出されていた。
夜景とは違うただ自分の姿が…。

「……………椿っち、今彼女いるの？」

「い、いないけど……………」

「……………じゃあ好きな人はいるの？」

「……………」

好きな人……………そんなの自分でもわからない。

自分の気持ちと向き合ってもそこにいるのはこなた、つかさ、かがみさん、ゆたか、みなみちゃんなど大切な人達が立っていた。そしてみんなが違う道にいる。全部に行くことは叶わない前に俺はどうしたらいいんだろう……………。

「……………私、もう椿っちがわからなくなつたよ……………。女の子の中では一番一緒に長くて中学までは椿っちのこと全部わかつてるつもりだったのに……………もうわからないよ……………」

静かに俯く由佳。

月は雲に隠れ光を失い由佳の姿が消えかかる。

今何を言ったらいいのかわからない。

何をしたらいいのかそんなのわかるわけがない。

けどやっぱり正直に言わないとダメなのだろう。

今の迷いを由佳に言わないと……………。

「由佳……………俺も自分のことがよくわからないんだ。

俺の気持ちに誰に向かって歩んでいるのか、答えが見つからない。

……………だから誰かを選ぶことなんてできない。

こなたはオタクでだらしないところあるけど明るくて一緒にいて楽しい。

かがみさんはけっこう素直じゃないけどしっかりしてて安心できる。つかさはドジばっかだけど一途で真っ直ぐなところがいい。

ゆたかは病弱だけどそのぶん純粹でいい子なんだ。

みなみちゃんはまだあまりしゃべらない。でも、本当はすごく優しい…。他のみんなにもいいところがたくさんあって…。

ごめん……………」

「なんで謝るの？」

「だってさ、情けないよな、一人に絞れないなんて…。

見損なったよな、こんな優柔不断で……………」

初めてギャルゲーをしたとき俺は優柔不断にだけはなりたくないって思った。ヒロインの女の子の間をウロウロしてる奴なんか見ててイラつくだけだから…。

「知ってたよ…」

「え？」

「やっぱり変わってないね……………椿っちの悪いところ昔から一緒だよ…

……………」

「ごめん……………」

「でもさ、今の気持ちを聞いてわかったよ…。椿っちのいいところ変わってなかった…」

「いい……………ところ？」

「うん、椿っちってみんなをよく見てるもん。みんなのいいところ知ってくれてるもん。それに私のことも見てくれたから。悪いところいいところ知ってて受けとめてくれるから私は優柔不断でだらしない椿っちを好きになったんだよ」

……………なんか馬鹿にされてる気がする。

「だから…椿っちは誰を選んでも幸せになれるよ。もちろん私を選んでもね」

ドクンッ！

「あ……」

「ん？どしたの？」

「いや……なんでも……ない」

……なんだろう？

今の言葉を聞いたことがある……。

それに顔はわからないけどこなたとは違う青髪の女の人が脳裏に浮かぶ。

「……誰だ？」

「え？椿っち記憶無くしたの？」

「違う！……いやたぶんなくしたかも」

うーん……思い出せない。

絶対会ったことはあるんだけどなあ……。

……。

……。

ま、いつか。そのうち思い出すだろ。

それより今は……。

「あ、ほら椿っち！あの犬可愛いねー！」

今は由佳と一緒に楽しむか。

観覧車から降りて俺たちは約束通りアイスを買いに散った桜並木の道を通っていた。

「桜やっぱりないね」

「そりゃあもう5月終わるころだから当たり前だろ」

「ぶー、つまんなーい！桜咲けー！」

「それは自然に喧嘩を売ってるのと同じだぞ」

「はあ……」

一息ため息をついた由佳は俺の前に立つ。

「今日はありがとう」

「な、なんだよ急に。アイスのことならまだ早いぞ」

「椿っちずれてる……」

アイスじゃなくてデート！デートに付き合ってくれたからありがとうってこと」

「デートつつても観覧車乗っただけだろ？」

「もー、乙女心がわかってないなー。好きな人と一緒にいられたらそれだけで嬉しいもんなの」

…今思っただが乙女心ってなんだ？

なにが乙女心なんだ？

別に男とそんな考えてること変わらないと思うんだけどな。

「ほら、早く行こ…ってあああああああああああああ！

！！！！！」

「うおっ！？いつたいなに！？」

立ち止まる由佳に聞くと、由佳は泣きながらぶるぶると震える指で道の先を指す。そこには、

「なにになに……『今日は閉店致しました』」

「閉店ってなんで！？なんで！？なんでなの！？」

「あ、思い出した。そういえばここって夜中にやってないんだっ」

「それを早く言えー！」

バキッ！

グ、グーですか…。

ピンタじゃなくてグーなんですか……。

「だいたいなによ！この最後の はーらき すたにもついてるこのは！」

「おいおい…そこに喧嘩を売るなよ。 にだって悪気はないんだか

ら」

バキッ！

「うがつ！！！！」

蹴りですか…。

今度はアソコに蹴りなんですか……。

「くー！なんかめっちゃめっちゃ腹が立つー！」

……やれやれ、こいつといるとかなり楽しいのだがその代償として
けっこうしんどいんだよな。殴られるし。蹴られるし。

こうして無事かどうかは理解しづらいが由佳と初めてのデートが終
わった。

第52話 ひだまり日和

「椿君椿君、今日は5月28日だけど何の日か覚えてる？」

バイトが終わって次の日、俺はいつもどおり起きて顔を洗っていた。そんななかこなたが今日を確認してくる。

「ああ大丈夫だよ、ちゃんとわかってるって。」

「それならいいんだけどねー」

こなたはやけに嬉しそうにリビングへ向かう。

「……？」

こなたってそんなに月に一回の朝礼が楽しみなんだ…。

「おはよー、椿君」

「ん、おはよかがみさん」

「ところでさーこなた。あんたたしか今日だったわよね」

「そだよー。ついにエロゲーが堂々とできる！」

こなたはガッツポーズを取る。

「いつも堂々とやってるじゃない」

ん？何の話だ？朝礼と違う気がする…。

「ねえ、今日って他に何かあんの？」

なんか閉鎖空間のようなズレがあるようなので聞いてみると、

「他につて今日は誕生日以外何も予定ないじゃない。椿君知らなかったっけ？」

……誕生日？

「誰の？」

「こなたの」

……ということは、

「……じゃあさつき洗面所でこなたが言ってたのってもしかして誕生日のこと？」

「決まってるじゃんー。ちゃんと期待してるからね」

「……………」

まずい……！

今日なんて聞いてないぞ。てつきり朝礼のことだと思ってた…。
つつか他人の誕生日知ってる方がおかしいだろ。知ってたら変態だよ。

……プレゼントってやっぱり用意しないと駄目なんだろうな…。
どうしたものかものか……。

「……………」

そういえば昨日いいもの貰っちゃったんだった。

俺は二階に上がってサイフを見る。そこには昨日のバイト＋由佳の知り合いということであんなに俺だけこっそり3倍にもらった銭があった。まあけっこう余裕はあるな。

っていつても使うのは4分の1程度なので買えるのは知れている。
まあ別に高価なものじゃなくてもいいだろう。

一階に降りて自然に話をする。

「あー、そういう俺放課後友達に用事あるから先に帰ってて」

「友達？なんか怪しいな」。ホントはプレゼント忘れてただけなんじゃねえの？」

ぐ、みさおはまた余計なことを……！

「ちち違っつてば！」

「そうよみさお。」

椿君はこなたの誕生日を忘れる“薄情者”でも嘘つきという“最悪な人”じゃないわよ。ね、椿君」

「あ、はは……、まあ……ね」
「言えない……。忘れてるなんて死んでも言えない状況だ……。」

「なぜついてくる」

『気にしない気にしない』

早々と放課後になったのはいいが同学年六人に一年生四人のいつものメンバーがなぜか商店街に来た俺にぴったりついてくる。

「いや頼むから早く帰ってて」

『いいからいいから』

よくないから言ってるんだろうが。まったく仕方がない。今の体で激しい運動は避けたかったんだかな。

ダッ！

「あ、椿君が逃げた！」

「なんですと！」

「追いかけるわよみんな！」

後ろから手がわんさか追いかけてくるのが見えて恐怖を覚えた。

「はあはあ……、まったく、妖怪に追いかけてる気分だぜ……。」

「なんですってー！」

かがみさんの怒声が聞こえた。

地獄耳とはまさにこのことだ。しかもかがみさんならなおさらピツタリかも……。

俺は人混みの中をスルスル駆けていく。

「サッカー部で鍛えたボディバランスがこんなところで役に立つとはな……」

チラッと後ろを見るとかがみさんやつかたちはすれ違う人たちに

妨害されて思うように前に進めていない。

「この勝負は俺の勝ちだな」

「それはどうかな」

「え？」

もう一度後ろを振り返るとなんと二人だけ人混みを抜けて来たのであった。

「げっ！なんでこなたとゆたかが！？」

「え、だって私たち小さいから」

それはもつともです。

しかしまいったな。

ゆたかはともかくこなたは邪魔だな。あのインドア派なのに無駄にある運動神経、格闘技で鍛えられた身体。このままでは捕まってしまう。

俺は商店街を外れ、街を適当に走り回るが、

ガシッ！

「ちよい待ち！」

「ぐえっ！？」

何者かが俺をひき止める。

「人がいつぱいおるつちゅうのに気にせず走り回るのは迷惑やなあ
桃原」

「く、黒井先生！？なんでこんなところに！？」

「ん？それは『彼氏がいないからここにおる』って言ってほしいんか？お？」

「いえ違います……」

黒井先生が拳をつくつたので慌てて身を引く。

「つつか早く離してくださいよ！じゃないとこなたたちが」

「あ、椿君見つけ！」

「来ちゃったじゃないですかー！」

じたばたともかくが黒井先生はがっちりと俺を捕まえてしまっていて身動きがとれずに小さな抵抗は儚く終わった。

「先生ごころーさまー」

「おー、泉やないか。」

なんか変な虫捕まえたけどいるか？」

自分の生徒を虫扱いですか…。

「どーもー。んじゃ先生、失礼しまーす」

俺はこなたに手を掴まれてそのままみんなの元に連行された。

……………。

……………。

（ウチの出番これだけかいな…）

こなたに連れていかれたのは喫茶店。

そこにはみんながそれぞれ好きなものを食べていた。

「椿君。ホントは泉さんの誕生日プレゼント買おうとしていたんでしよう？」

あ、高良さんいたんだ。なんか途中で忘れてた。

「えーと、まあ、んーとね」

「先輩、言つときますけど私たちきついちゃってますよ」

「……そのとおりです。…ごめんこなた」

「まあ別にいいけどねー。罰としてとびつきり凄いの買ってもらっから」

「え、マジかよ…!？」

「嘘だよー」

「……………」

「とりあえず私は返るからみんなで楽しんできてよ」

「え？こなちゃん帰っちゃうの？」

「だって私がいたら椿君買いにくいかなーって思ってたさ」

「…それがわかってるなら来なかったらよかったのに」

確かにみなみちゃんの言う通りだよな。なんでまたこなたはついてきたんだ？

「だってさ、椿君が私に嘘つくのついていやなんだもん。だからかなー」

いやそんな小さなことで走らされてこっちはかなり疲れたんですけど…。

「じゃあ椿君、楽しみにしてるからね」

こなたはそう言い残して喫茶店を出た。

「よし、じゃあ私たちも買いに行くか」

「ん？かがみさんたちも買ってたの？」

「あいつ何もらったら喜ぶかいまいちわからなくてさー。それでまだひよりとパティ以外は決まってる」

それはわかる。こなたって普通とは若干ズレがあるからな。何をあげたらいいんだろ。

「それじゃあ椿君頑張ってたね」

「え？別々でやるの？」

「だって椿は女の子にプレゼントするんだからちゃんと一人で選ばないとダメネ！」

げっ、よりによって助っ人なしかよ…。

困ったな…。

「じゃあ椿君、私たち行くから」

そう言っただけがみさんたちは店を出る。

「……しゃーない、一人で頑張るか」

俺は立ち上がって店を出ようとすると、

「お客様、勘定の方をお願いします」

「……………」

えー！？俺がするの！？

第53話 これでもなくて、あれでもなくて

「さて、何にしようかな……」

さつき喫茶店で余計な出費しちまったし最悪だよ……。

でも困ったな……。こなたって何が欲しいんだろ。こなたで思いつく
といたら……。

ゲーム……漫画……アニメ……それ以外で何かあったっけな……。

……。

「わからん……」

むむむ、こんなしかわからないんじゃないかな。どうしようもないじゃない
か……。

そもそも今の候補って女の子にあげるもんじゃないよな……。

いつそのことヘリウムガスにでもしようかな。

いろいろと使い道ありそうだし盛り上がることだ。

「……………」

はあ、なんか違う気がする……。

だいたい盛り上がればいいってもんじゃないし声を変えたからなん
だと言うのだ。やっぱり女の子と言ったら、

「……とりあえず服を見て回るか」

俺は近くの洋服屋に足を運ぶ。

「いっぱいだな…」

どうしたものか、服の種類が豊富なのはいいんだが俺ってファッションセンスはあんまり自信ない。

適当に店内を見て回る。そんななか一着可愛い服を見つける。これはなかなかいいかも。

「すみません、これっていくらですか？」

「そちらは9800円になります」

…無理だ、レベルが違う。

「あの…もつと安いのはありませんか？」

「ちっ、金無しかよ」

「え？何か言いましたか？」

「いえなにも。安いのでしたらこちらなんていかがでしょうか？」
差し出された服の値札を見ると、

「無料…」

いやいやいや、ちょい待てよ！無料ってなんだよ！

そんな服が存在して神は許すのか！？

今の時代いろんな食料や駄菓子、ガソリンが高くなるのに無料という言葉は在っていいものなのか！？

「あの…もう少し高いものを」

「ちっ、わがままな奴だ」

「はい？」

「いえなにも。ではこちらがオススメですね」

別の服を渡されて値段を注目すると、

「????円…」

なんだこれ？値段がクエスチョンマークになってるけど。

「えーと、これっていくらですか」

「さあ？」

さあってあんた店員だろうが！こんな危ないのなんか買えるか！

「お気に召さなかったらこちらはどうぞでしょう？」

「4444G…」

ドラクエかよ……。

服は諦めるか。

よく考えたらこなたが苦手なことを克服させるために計算ドリルとか買ってみようかな。難易度MAXの問題集もいいな。

『期待してるからね』

……。

こなたの言葉が俺の提案を潰す。

ま、こんなの買ってもらって喜ぶ奴とか狂ってる。

それは俺が一番わかってる。過去に経験がある俺がな。

というわけでドリルや問題集、あと英和辞典はNGだな。

なら小説はどうなんだろ。やっぱり文字ばっかだからこれもNGなのかな。

「あーあ、こなたって本当にわからないな……」

今まで一緒にいたのにわからないなんてな。いやでもこなたが異質だからしょうがないよな。

「今度はつと……、あそこなんかこなたに似合うのがあるかな」

目に入ったのはアクセサリや指輪などがある店だ。案外安いしちようにもいいかも。

俺は店に入り一通り見て回ろうとろちよろすると、

「ありやりや、もしかして椿っちだったり」

「ゆ、由佳！？なんでここに！？」

「いや別に不自然じゃないっしょ。私だって女の子なんだからこういうのにはバッチリだからね」

そうなのか……。ならばここにいるのはナイスだな。

由佳にちよいと聞いてみるか。

「一つ聞きたいんだけどこれはあくまで仮の話なんだがいいか？」

「ん？別にいいよ」

「えーと、あくまで仮だぞ。仮だからな」

「椿っち回りくどい」

「ああすまん。んで仮の話だがもしだぞ。もし男からプレゼントを貰うなら何がいい？」

「え？もしかして私に？」

「あり得ん」

「即答なんだ……。んとね、普通の女の子だったらやっぱりキスとかかな」

なるほど。こいつは異常の女の子だから役に立たないな。

「サンキュ、またな」

俺はさっさと店を出ようとする。

「ちよっ嘘だつてば、冗談だよ」。女の子にプレゼントでしょ。ならこっちこっち」

由佳は俺の手を引つ張り店の奥に行く。

「俺はお前に付き合っている暇はないぞ」

「今度は本気だよ」。ほらこれなんかどうかな」

「どうせまた」

キラリと光る物体。

緑色の小さなハート型が組み込まれた三日月のアクセサリ。

なんだろ……。言葉では表せれない魅力を感じた。

澄んだ緑色。それは俺が一番好きな色でもある。

考えていたことが一気に消えて頭が白く描かれる。

「綺麗だ……………」

ふとその場で頭にインプットされた言葉が漏れる。

周りにはもつと可愛らしい物や派手な物もあるのに眼中にはなかった。

もうこれしかない、そう思った。

「どうよ？私にぴったりでしょ」

「これって値段いくらだろ。……2500か」

「スルーですか」

「……よし、これください」

「ありがとうございます。こちらはプレゼント用に包みましょうか？」

「あ、はい。お願いします」

「かしこまりました」

店員が慣れた手つきできれいにラッピング。

ちよいと照れくさいけどなんか心が晴れた気分だった。

今まで女の子にプレゼントしたことないから不安はあるけどこれはイケる。

根拠はないのだがなぜか確信した。

「お待たせしました、2500円になります。2500円ちょうどいただきます。ありがとうございます」

よし、満足できる物も買ったしここには用はないな。俺はさっさと店を出て目的地に帰還する。

（……椿っち、スルーはひどいよ）

第54話 貧乳はレアだけど爆乳はスーパーレアである

「ただいまー…ってみんな何作ってんの？」

リビングに顔を出すとすでに全員がプレゼントを買い終わってはいたようだが、なにやらテーブルには盛んな材料が散らばっている。

「これってケーキ？」

「そ。やっぱり誕生日なんだしケーキがないとね」

かがみさんが忙しそうに準備を進めながら言う。

あ、でもかがみさん今イチゴをちよつとつまみ食いした。

あ、また。

けっこう食い意地あるんだな。でもいくら余っているからってそんなことしちゃっていいんだろうか？

「あれ？そっういや主役のこなたは？」

何か足りないと思っていたら肝心の青がないことに気づく。

「こなちゃんなら一回家に帰るって言ってたよー」

「なんで？」

「…プレゼントを貰ってくるって言ってました」

ふーん、そうなんだ。抜けてるようでちゃっかりしてるな。こういう時だけ家に帰るとは。

「ところでみなみちゃん、ほったにクリームついてるよ」

ちよつと気になっていたので指摘する。あのままでも可愛いのだが言わないでほつとくのも可哀想だしな。

「ど、どこですか？」

みなみちゃんはほったを探る。

「あ、惜しい。もうちょい下」

しかしなかなかヒットしない。しょうがないな。

「みなみちゃん、少し左向いててね」

俺は片方の手でみなみちゃんをクリームとは反対の方に向かせてもう片方の手でクリーム取ってあげる。

（わあ……みなみちゃんって肌ピチピチだ……）

触れる肌に心が揺れる。やっぱり女の子なんだ。

「あの、椿君。取れましたか？」

「へ？あ、うん。バッチリ取れたよ」

指先で採取したクリームをみなみちゃんに見せる。

するとみなみちゃんはクリームに包まれた俺の指に唇を寄せて、

ぺろっ

「!？」

! ! ! ! ?

「え、えと、お礼です」

い、何が起こった！？

「みみみみみなみちゃん、が椿君にちゅーを……」

ゆたかが顔を真っ赤にしながら言う。

いやちゅーって言うても指を舐めたただだから少し違うよ!?

「これはネタになるっす！」

「こそそこ！メモするな！恥ずかしいだろ！」

「みなみ意外と萌えキャラネ」

変なことを言い出すなパティ！

しかしこのみなみちゃんが舐めた指どうしよっか。

このまま置いてこうか、それとも洗いに行こうか、それとも……。

「そのままぺろって舐めちゃえば？」

「つ！？」

振り返るとみさおがニヤニヤしながら何かを期待しているかのよう

な雰囲気を漂わす。

こいつめ、俺の心が見えてるのか？

じーっと指を見つめて考える。

もしここで舐めたらどうなる？

回想1開始。

ぺろっ。

「うわっ！椿の奴ホントに舐めやがったぞ」

「椿君、それは不潔ですよ」

「いやいや高良さんちよつと待ってよ！今のはなんと云うか指に魔法がかけられていたというか上手く言えないけど事故なんだって！

「椿君それは私もダメだと思う」

あ、あやのさんまで！？

「いや不可抗力なんだって！えと、えと、そう！地球に優しくだよ！水を出すのはもったいないから仕方なくっていうか！もったいない精神だよ！節約だよ！」

『椿君気持ち悪い』

ぐはっ！

そんな容赦なくみんなで…。

回想1終了。

ここで指を舐めてしまったらこの物語は終わってしまうな…。

このままにしとくか？ いやそれは変態だな。

ならば洗うか？ いやでもそれはいろんな意味でもったいない気がする。

なんという分岐点なんだ…。

悩みに悩んでいる最中、つかさがタオルを指に近づけ、

「はい椿君、ちゃんと拭けたよ」

「……………」

分岐点をすべて破壊してまさかの新しい道に俺を導いてしまった。

まさか“拭かれる”とは思っていなかった……。

「ただいまー」

お、こなたが家から帰ってきたか。しかし人の家なのにただいまって表現は合っているのだろうか。

「あ、お、お姉ちゃんおかえりー。ささ、こっちこっち」

「え、ちよつゆうちゃん？」

二人の会話が聞こえてきてゆたかがせつせとこなたをリビングに入れさせまいと二階にあがらせる様子がドア越しから把握できた。

「なんで二階に？」

「んーとね、せつかくなんだしちびつこにはビックリしてほしいじゃない？」

「ふーん」

なるほどね。だからケーキを作っている作業場を見られたくないからゆたかが防衛したのか。

ただどこなたの勘は鋭いから案外気づいてると思うけどな。

さてさて、今のうちにプレゼントをどう渡すか考えとくか。

やっぱシンプルが一番って言うし普通に“こなた、誕生日おめでとう。はい、これ誕生日プレゼント”かな。

よし心の中で何度も練習して……………。

「よしケーキと料理の準備万端ね」

こっちは送信準備万端っと。

「みゆき、ちよつとこなたとゆたかちゃん呼んできて」

「わかりました」

トントントン……。

高良さんが二階にあがって二人をご指名し、
すぐに三人で降りてくる。

ふふふ、さあ来いこなた！こっちは想像に想像を働かせてシミュレ
ーションも繰り返し返して完璧なコンディションだ。

さあ来いさあ来いさあ来い！

ガチャリとドアが開いて人影が姿を見せる。

今だ！

「こなたー、誕生日おめ　」

ガッ。

「なっ！？」

マズイ……！なにもないところでつまづいた！このままでは醜態をさら
してしまう！それだけは……！

俺は一瞬でそれだけ考えとにかく何かに捕まろうと手を伸ばした。

ぽよよん。

「ふえ？」

「……………え？」

みゆきさんの抜けた声につい俺も聞き返す。

「あ、あの……………」

苦笑いするみゆきさんのちよい下を見ると体の凹凸の凸の柔らかい
部分二つに俺の手が包んでいた。

これは危険だ。

頭の中でアラート音が鳴り響く。

なんとか、なんとかしないと！

「え〜っと…、こなたより胸おつきいね……」
ドゥンッ！

上からこなたのかかと落としが脳天に討たれる。

第55話 動乱の我が家

「椿君、茶」

「はい、お嬢様……」

こなたに言われた通りカップに茶を入れていく。

なぜこんな状態になっているのかというと、さっき俺がこなたに酷いことを言ってしまったって“何でもするから許して”と言ったらこなたは『なんでも？　じゃあ今日は私の執事になってね』

と、普通に許してはくれないこなたのおかげで男のプライドの欠片もない姿をさらしていた。まあ原因は俺なんだから文句を口には出せないが……。

しかし悪夢は終わらないのが運命であった。

「椿君ー、こっちにもお茶お願いねー」

「あ、こちらにもお願いします」

こなただけに止まらずかがみさんたち全員の執事として動くことになってしまった……。

「おい椿ー、こっちもだから早くしろってヴァ」

ぐっ、みさおめ……。ゆたかとかなら許せるがあいつだと無性に逆らいたくなるな。

だがその場では愚痴を言わずに素直に食器棚に戻り新しいカップを手取る。

「くそっ、絶対このまま執事で終わってたまるか」

カップをトレイに置いてお茶をトクトクと入れていく。

その時、ふと雑巾があることに気がつく。

……………

.....
.....
ピコーンッ！

頭に一つ素晴らしい事が思いついた。

「ぶぶっ、一回やってみたかったんだよなー」

後ろを振り返って誰もいないことを確認すると雑巾をカップの上に持ってきて、それを両手で少し絞って灰色の液体を出す。

ピチャッ.....ピチャッ.....。

「ふー、これくらいにしておくか」

雑巾をそこら辺に投げ捨ててメインとなる“お茶っぽい飲み物”をみさおのどこまで運びに行く。

さてさてどうなるか.....。

「みさおお嬢様、桃原家自家製茶でございます」

ゆつくりとテーブルにセッティングした後に、俺はみさおの後ろで

“お茶っぽい飲み物”を飲むところを観察する。

「やつぱりお茶が一番だよなー、んじやいただきますか」

みさおがカップを口につけて.....よしゴール！

みさおが“お茶っぽい飲み物”を飲んだとき、小さくガツツポーズをする。

そんななかみさおはそのままカップに入っている液体を全部体内に注入。

「ぶはー、なかなかおいしいな。さすが自家製、お茶の“真心”がつたわるぜえ」

ええそりゃーもうたつぷりと“魔心”を入れさしていただきましたからねー

「ふー、もー食べらんない…」

「わ、私もダメー…」

柊姉妹がダウン。

そしてみんなも満腹になつて食事は終わった。
ちなみに俺のはあらかじめ分けられていたので最初にちゃんと食べていた。

「つつわけでもう執事は終わりだな」

「ん？何言つてんの、あと三時間だよ」

「…………へ？」

「だつて1日だもん」

こなたがニヤリと微笑む。コ、コノヤロー…………！

まだ俺を手足にするのか…………！

だいたいもうやることなんてないだろうが。

俺はオレンジジュースをコップに注いで疲れを癒す。

「じゃあ椿君、風呂一緒に入るー」

ぶ…………っ！

「あれ、どしたの？」

「ゲホッゴホッ、な、なんで風呂なんか…………！」

「ふーん、椿君約束の一つも守れないんだ」

「うつ…………！」

そうなのだ…………。

執事の立場にいるときは絶対服従を約束してしまったのだった。それを破れば…………、

ダメだ！これ以上は口では言えない！

「そんじゃ行きますかー」

「……………」

もう言葉にならない。

「というかこれはもはや現実を超えているんじゃないのか！？夢オチってのはないのか！？このまま行っちゃえばこなたの一系まとわぬ肌が！」

「ちよい待ち」

背後からかがみさんの声が届く。するとすぐに俺とこなたが突き離された。

「それはさすがにダメでしょ。あんた一人で入ってきなさい」

「ええーなんでー？」

「いいから」

「むづ…、実は椿君は私と入るからとかそついうのじゃないって約束できる？」

「あー、ハイハイわかったから早くいつてらっしゃい」

「……一人じゃ寂しいからかがみ一緒に入る？」

「なな、なんでよ！高校生のくせに甘えるな！」

「かがみだってホントは入りたいって思ってるんでしょ？」

「ち、違っわよ！そんなことより早く行けー！」

「もう、わかったよ」

こなたはブツブツ言いながら風呂場に一人で行く。

「…はあ、じゃあ私二階にいくね」

「あ、うん」

返事を返した瞬間に風呂場から複数の声が聞こえる。

「アレ？こなた、椿はどうしたんデスカ？」

「いやー、実は断られちゃって」

「ちっ、三人の女風呂に一人男子が入り込んだら良いネタになると思ったんすけどねー」

「待ち伏せしてた意味ナイネ」

「また次回に回すしかないっすね」

「そだねー」

「今度は全員で待ち伏せスルネ」

「あー、かがみとか否定しそうだね」

「そうっすねー。まあなんとかなるんじゃないですか。ツンデレですし」

「ツンデレだもんねー」

「ツンデレデスからねー」

.....。

入らなくて大正解だな。

今後は気をつけていかないと。

ちらつと時計を見るとまだ本来寝る時間帯ではないのだからかなり眠くなっていた。執事の疲れが溜まったのだろうか？

なんにせよあくびの連続で横になったら速攻で寝れるぐらい限界だった。

だが一つやり残した事がある。

「.....プレゼントどうしょ」

こなたが風呂からあがるまで時間はたつぷりある。

待っているのも辛いし渡しそびれるのはさらに辛い。

なので少々ベタだがこなたが寝るベッドの上に手紙とプレゼントを置いてそのまま倒れるようにベッドの上で眠りについた.....。

第56話 悪魔の手招き

チュンチュンッ、

「う……ん……」

小鳥のさえずりで目を覚ます。だがそこはいつもの寝にくいリビングのソファーではなく二階にある俺の部屋のベッドだった。

「……そっか。そういえば昨日プレゼント置いたまま寝ちゃったんだ」

でも久しぶりの自分のベッドでかなりゆっくり寝れたかな。ベッドから出ようとすると布団が小さく盛り上がっていた。

「……まさか……!」

布団の端を掴んでピラッ和中身を覗くと、

「すやすや……」

バッ!

やっぱりか……!

妄想ランキングで常に一位をキープしている“起きたら隣で美少女?が寝ている”シチュエーションが目の前に!

い、いや落ち着け自分……! COOLにいくんだ……!

とりあえず俺はリビングに降りようとベッドから退く。

ガシッ。

「ん?」

しかしこなたの手が俺の手を掴みとる。

そしておもいきり引っ張られて俺はまたベッドに横たわる。

「ちよつ、わぶつ！？」

こなたは倒れ込んだ俺を布団で覆い被さり二人は布団の中で零距离にいた。

「おはよ、椿君」

「お、おはよ…う」

初めてだった。こなたの顔をこんなまじまじと見つめるのは。緊張が走って心臓が速まっていき、それに堪えきれず俺は反対方向を向く。

だがこなたの甘い匂いが鼻にきて心臓が収まる様子は全くない。
ホント俺って情けない…。

「椿君、プレゼント見たよ」

「え？ああ、うん…。でもあんなのでよかったのか？こなたの場合ゲームとか欲しかったんじゃないかなって思ったんだけど…」

「大丈夫。実はあれけっこう気に入ってるんだ。まあたしかに欲しかったのじゃなかったんだけど、今までのプレゼントの中では一番嬉しかったよ」

「……そっか」

よかった。こなたこういうのって全然身に付けないイメージがあるから要らないかもって勘違いしていた。

由佳に感謝しないとな。

「ねえ椿君」

「ん？」

「あのネックス毎日付けてもいい？」

「ほ、ほんとに付けるの？」

「ダメ？」

「いやいいけどさ……。なんか自分があげたプレゼントを身に付けられてると恥ずかしいというか……。それに校内でそういうのは禁止されてるから没収されたりするんじゃない…」

「大丈夫だって。見つからなかったらいいんだから」

「……………」

よく考えたらそういうのって今さらかもしれない。

だってこなたは子供が手を出したらいけないゲームとかを堂々とやつちやってるからな。

見た目はまるつきり子供なのに。

三時間目の家庭科の実習、男子と女子は別々の食べ物を作って互いにそれを交換するという意味不明な授業となっていた。

「女子の作ったもんが食えるのは嬉しいけど俺ってあんまりお菓子とか料理って出来ないからなあ……」

さつき作ったゼリーを見ながら落胆する。

簡単だから手間はかからなかったが恐らく食った者の目には死んだ先祖が手招きをしているところが見えることだろう。このままでは俺があげる相手には申し訳ない。

やはり隠し味にワサビとかいろいろ入れとくか。

「……ニユルリと」

よし完璧。これで死神は去ったはずだ。食った奴は必ず歓喜をあげるにちがいない。

それにしてもこんなゼリーを作るなんて俺って実は料理の才能あるのかも。

「椿君」

「ん？」

つかさとこなたがこっちに近づいてくる。

「二人で作ったんだけど食べてみて」

「おおー！クッキーじゃん！ いいの？」

「どうぞ」

皿に盛られた熱々のクッキーの一部を一口で食べる。

パクッ。モグモグ、ゴツケン。

「うおっ！かなり美味いな！」

つかさの手作りのクッキーは前に風邪だった時に食べたけどあの頃より美味しくなっていた。

「でしょ？ あと熱々も美味しいけどこっちの冷えた方も美味しいよー」

今度はこなたの皿から一口。

うん、美味だ。

「どう？」

「こっちもなかなか」

「よかったー。あ、椿君のはこれ？」

こなたは俺の横に置いてあつたゼリーを取る。

「ねーねーこのゼリー食べていい？」

「ああ、いいよ」

「やったー つかさつかさ、一緒に食べよ。あと椿君も」

こなたはスプーンを三つ取り出してつかさと俺に一つずつ渡す。

「じゃあいただきますーす」

「いただきます」

パクッ、

.....

.....

「ぐふうっ！？」

「ぐふうっ！？」

「きゃいんっ！？」

ゼリーを口にしてすぐには味が出なかったが中に含まれたワサビの他にも遊び半分で入れたオクラやゆで卵、その他もろもろをすりつ

ぶして混ざった“暗黒のはーもにいー”が飛び出して俺の身体を蝕んでいく。

「ちよっ、これはさすがに食べれ　ブファッ！」

ゼリーのせいで何故かまともに喋れなかった。

「椿君：ひどい　デュハッ！？」

どうやらこなたも俺と同じ症状を起こしているようだったが一人だけ全く違う症状が出ていた。

「バブツバブツ」

「なっ！？」

「つかさ　ゲフォウツ！」

つかさはなぜか赤ちゃんのようになっていた。

「ママ、マンママンマ」

おいおい嘘だろ！？

まさか幼児化までするというのか、このゼリーは！？

「マンマー！うええええん！！」

「うおっ！？」

終いには泣き出したぞ。

普段のつかさからは想像できない光景だ…。

なんて恐ろしい物を作ってしまったんだ……………。

このあと先生達が駆けつけて俺たちは全員保健室に運ばれた。

第57話 あ三年B組、黒井せんせーい

「……………ん？」

何やら独特の匂いがする。ここって……………保健室か？

身体を起こすと頭がぐらついた。

「痛………、なんで保健室になんか……」

経緯が解らないままベッドから降りてカーテンを開けた。
そこには保健室を仕切っているの天原ふゆき先生がいた。

「あら、もう大丈夫なんですか？」

優しい声になんだか少し安心感を持った。

「あの……なんで俺保健室にいるんですか？」

「まあ、何も覚えていないの？」

「それが全く……」

口に残る苦い味、だがそれがなんなのか心当たりがなかった。

「んゝ困ったわねゝ。アレは記憶喪失にまでさせるなんて」

「アレ？」

「誰が作ったかはわからないんだけど、邪悪なゼリーがあなたたちの横に落ちてたの。多分それを食べたのが原因じゃないかしら」

「じゃ、邪悪なゼリーか…………。一体誰がそんなものを作ったというのだ。見つけたらただじゃおかねえ。」

……それにしてもゼリーを食った記憶を失うなんてどれほど強力だったんだよ。

「……………そういえば“あなたたち”って言いましたよね。他には誰が……」

「泉さんと柊つかささんなんだけど二人はもう先に起きて授業を受

けてるわよ。ちなみに記憶は失ってはなかったわね。恐らく食べた量が原因だと思いますよ」

ふーん、ってことは俺だけが記憶喪失なのか。

「でも記憶あるんだったらそのゼリーを作った奴がわかるんじゃないですか？」

「それが二人は教えたくないそうなんですよ。なんでも本人が傷つくだろうからって」

傷つく？被害者が出てるのにそんなこと言ってる場合なのか？

「たたく、作った奴の顔が見てみたいな。」

「そんじや俺授業にもどります」

「無理しなくていいんですよ？」

「いえ、もう大丈夫ですから」

俺は一礼してから自分の教室に向かった。

「……………」

（本当に椿君が作ったと言わないでよかったのかしら。また変なの作らなきゃいいんだけど。

まあ泉さんと終つかささんが決めたことだから私は口を出しませんけど。それにしても椿君って案外面白い子なのかもしれませんね）

「おー桃原、もう大丈夫なんか？」

「黒井先生が若返ったように見えますからダメだと思います」

ガッソッ

「そうかそうか、そないならいっぺん死んでハエにでも転生するか？」

「冗談なのに…」

たんこぶを抑えながら自分の席に着く。

「んじゃ授業の続きをするでー」

黒井先生が黒板にすらすら書いていく。

しかし生徒の何名かはチラチラとこつちを見ている。

なんだ？ 俺なんかしたのか？

記憶がないから全然わからない。

気にせずに黒板をノートに写していくがやはり多方面からの落ち着かない視線を感じる。

今まで漫画とかで視線を感じるなど絶対にあり得ないと思っていたが本当にわかるもんなんだな。

でも……。

（鬱陶しいな）

なんかイライラしてくる。だいたい俺に言いたいことがあるなら言えばいいのに。

居心地悪い視線を浴びながらなんとか授業を終えた。

「はあ…」

「ふう…」

俺と同じくこなたとつかさがため息をつく。

「なーにあんたら三人揃ってため息なんかしちゃって」

放課後になって陵桜生徒が帰宅する波に乗って校門に向かう途中かがみさんがあきれるように言う。

だがそれは仕方がないだろう。

授業中はチラ見ばかりさされるし休み時間ですれ違った奴らにも時々見られるしでも精神的に疲れたよ…。

「だってなんだかダルくて…。保健室でずっと寝たフリしとけばよかったかな」

「でもこなちゃん何だかんだでいっつもダルいって言ってるよね」
「……………」

あとから複数の人に聞いたんだが家庭科の授業でつかさが一番異常になってたって言ってたけど支障はないみたいだな。

こなたも相変わらずだし。

「椿君椿君」

「なに？」

「これこれ」

こなたは胸を突き出す。

「ん？あんまり大きくはなってないみたいけど」
「違うー！ほらこっちだよ」

こなたは首からさげていたネックレスを手取る。

なんだ、そっちのことが。

てつきり胸がどうかしたのかと思ったよ。

「へー、お姉ちゃんちゃんと付けてるんだ。可愛いね」

「…とても似合ってます」

「ゆうちゃん、みなみちゃんありがとう」

「たしかに意外と似合ってるわね。こなたってそういうのどうかと思っただけ」

「あはは…、お姉ちゃんそれはちょっと酷いかも…」

「まあちびっこにはもったいないってことだよな」

みさおも人のことを言えないと思うのは気のせいだろうか？
けどみんなの言う通り似合ってはいると思う。

「黒井先生とかに没収されなきゃいいけど……」

「ん？ウチがどないしたんや？」

「うわおっ！？」

突然黒井先生が校門前に出現して思わず声をあげる。

「な、そないびつくりせんでもええやないか」
だったらいきなり現れないでください！

「それでウチがどないした…って泉それはなんやねん！」
げっ、見つかった！

黒井先生は俺のそこからあなたの正面に行く。
せめて俺が絡まないようにしてくれあなた！

「あ、これですか？ これは椿君からのプレゼントなんですよ」
ああもう！口軽すぎだろ！速攻バレちゃったじゃん！

「なんやとー！？プレゼントお！？」
うう…終わった。没収確定だよ……。

「なーんや、それを早く言わんかいな」

黒井先生はこなたの肩をポンと叩きながら言う。

「…………え？ぼ、没収しないんですか？」

恐る恐る聞いてみると、

「別にそんななかまへん、校則なんて破るためにあるもんやし学生
はもっと自由に生きたらええんや」

教師が言うセリフじゃないよな…。

それに自由に生きすぎてから“若さ故の過ち”があるんじゃない
のか？

「それに桃原からのプレゼントとかウチはそういう異性のやりとり
はちゃんと理解してるつもりやから安心せえ」

おいおいおい…。

あなた真剣に教師失格なんじゃないのか？

でもそのおかげで助かったけど……。

第58話 ゆめむすび

昨日黒井先生にこなたにプレゼントをしたネックレスが見つかったが、なんとか切り抜かれた。

黒井先生がダメ人間でホント助かったよ。

しかしこのまま済むわけなかった……。

「桃原、いい加減に僕とサッカーの決着をつけろ！」

はあ……またか。昼休みぐらい平和に過ごさせてくれよ……。

現在日本最大の企業の社長から生まれた超金持ちのボンボンである“梨原俊介”はサッカー部でありキャプテンの肩書きを持っている。實力は中学の頃は夏にあった一年生大会で特に上手くもないし下手でもないという面白味のない奴というのはなぜか覚えている。

だが今は

町内一（自称らしい）の實力があるとかないとか。

まあどうでもいい説明をしちまったがこいつ三年間ちよくちよく俺を見かけるとすぐに勝負とか言ってくるんだよな！。

中学の時に圧勝しちゃったのが原因なんだけど……。

「おい桃原！ちゃんと聞いているのか！」

「ハイハイ、聞いてるってばー」

「ならさつさと勝負しろ！お前がサッカーをしていたら県内でも五本の指に入るってみんな噂しているが、その間違った評価を俺が正してやる！！」

「おう頑張れよ」

俺は昼食を持って屋上へと向かう。

「ち、ちよつ待てよ！」

梨原は肩を掴んで引き止めてきた。

「も、まだ何か用？」

うざったらしい雑草を見るかのような目で睨むと、

「なんだ、そのうざったらしい雑草を見るかのような目は!？」

俺の表現を二回も出すな。ややこしくなるだろうが。

「桃原のくせに!この桃が！」

「……………は？」

それは悪口なのか？

それとも他に言うことがないから無理矢理引つ張ったのか？

いつもの俺なら無視なんだがスルーするのも悪い気がするので一応同レベルで言い返す。

「お前だつて梨じゃねえか。

果物ならイメージ的に桃の方がいいと思うけどな」

「ぐはっ!？」

梨原はその場で倒れこむ。あれ？

もしかして傷ついちゃったか？

「な、梨の方が桃より画数が一つ多いから勝ってるんだよ！」

「……………」

画数ってガキかこいつは…。

しかも勝ってるってさすがにそれは強引だろうが、この強引男爵め。

「だけど薔薇とか憂鬱とか画数が多いのは嫌われるからどっちかっていうと負けなんじゃ……………」

話を聞いていたクラスの女子が呟く。

「はうあっ!？」

あゝあゝ、また落ち込んだじゃったよ。

俺もそれは言おうとしたんだが絶対こいつがっかりすると思って敢えて言わなかったのに、どっちみち同じ結果だったな…………。

「とにかく、名前の勝ち負けは置いて今日は風が強いし梅雨の時期も近いから雨が降ってくる、つうかももう降ってんだからパス。また今度にしてくれ」

「……………」

梨原は俯いたままだ。

でもちゃんと伝えたいっか。

そう言ってまた踵を返そうとすると、

「頼む！一回でいいんだ！俺は桃原と一対一がしたいんだよ！」
なんか今回はいつも以上に絡んでくるな…。

しかもそんな真剣な顔されても……………気持ち悪いだけだぞ。

「だから今日は無理だってば…」

「頼む！」

深々と頭を下げる。

はあ…、何でそこまでする必要があるんだよ……………。
これじゃあ俺が悪者みたいじゃねえか。

『……………私さ、サッカーやってた樁うち……………けっこう好きだったりして……………』

由佳は俺がサッカーをしているときが好きって言うてくれた……………。
でも……………、

「昔決めたんだよ。俺は絶対サッカーをやらない。だから……………」

「ぐ……………」。放課後絶対グラウンドで待ってるからな！約束だからな！」

「え？おい！」

そう言い残して教室から素早く出ていった。

約束ってなんもしてねえじゃねえか。

それに俺はもうサッカーなんてできない……………。

そして約束？の放課後になったが、俺はグラウンドには行かずに一人でさっさと帰っていた。

家の鍵を開けて静まる廊下から二階の俺の部屋にあがってベッドに横たわる。

窓から外を覗くと相変わらず雨は容赦なく降り注いでいる。

これならさすがにあいつも家に帰っているだろう。

もしいたとしてもこんな天気だ。坊っちゃんだし迎えがくるはずだ。それに深く考えるのは疲れた。

それにみんなはまだ帰宅中だろうから久しぶりの一人でいる時間だ。ゆっくり寝よう……。

………

………

………

「眠れない……」

パツチリと開く眼をもう一度閉じる。しかし妙に梨原が気になった。あいつはちゃんと帰ったのだろうか……。

ザーザーと外部からの音が前より激しく聞こえる。

それと同時に心が不安定になっていくのが嫌でもわかった。

「何であいつのことなんか気にしてんだよ……」

俺って女の子ならともかく男に対してこんなにお人好しだったっけ……。

ガチャリッ。

「ただいまー」

みんなが帰ってきた。

「あれ？椿君の靴がある。もしかして家にいるのかな？」

そろそろとたくさん足の音がリビングに向かうなか、一つだけ二階にあがってくる音を確認した。

コンコンッ、

「椿君開けるよー？」

ドアの境界の向こうにいるのはゆたかだった。

「あ、やっぱりいたんだ。えとね、ちょっと気になることがあるんだけどいいかな？」

「……なに？」

「学校でね、グラウンドに一人でサッカーボール持ってる人がいてね、ずぶ濡れだったから傘貸しましよかって言ったら、

『大丈夫だよ。それに桃原って人と勝負事があるからどっちみち濡れちゃうんだ…。だから気持ちだけ受け取っておく』って言ったけど、

もしかして桃原って椿君のことじゃないかなって思ってた

「っ！ー！」

勢いよく部屋から飛び出して一階、そして玄関に行く。

「っ、椿君！？」

ゆたかの声に耳を傾けずに靴を履いて全力でドアを開けていつも通る道を全速力で駆け抜ける。

『椿っちはさ…もうサッカーしないの？』

『でもさ……私的に椿っちはサッカーしてほしいな』

『俺は桃原と一対一がしたいんだよ！』

思い出される言葉に歯ざしりをたてる。

「　　ったくどいつもこいつも…！」

サッカーやってる俺を応援してくれていた母さんが死んだからサッカーは辞めようって思ってたのに……！」

俺は体力の落ちた身体を懸命に動かした。

俺を待っている奴がいるんだ。

ずっと突き放してきたのに信じてくれてるバカ野郎が。

もう少しだけ待っていてくれ……！」

もう少しだけ信じていてくれ……！」

俺はすぐに行くから……！」

第59話 背番号0

走っているのはただ俺がお人好しなだけじゃないだろう。

俺がサッカーをやっていた理由は母さんが活躍する俺を見て喜んでいたので。

俺は母さんの笑顔が見たかったからという単純な理由でサッカーをしていたつもりだった。だから練習もいっぱいして新しい技ができたらずに母さんに見せて笑顔になって…。

でも俺が中2の頃に母さんと父さんはいなくなった…。新しい技ができてもしそこに母さんの笑顔は無くなっていた。もう望むものは消えて去っていた。

だからサッカーを辞めたんだ…。これから先ずっと続けてもそこに母さんはいないから……。

でも今まで気づかなかった。本当はサッカーが好きで好きでたまらない自分に。母さんがいなくてもなぜか疼く身体の訳を今知った。

俺はサッカーが大好きだ。

そして同じサッカーを愛する者だから俺はそいつのために走っているのだと思う…。

走る道の先に見える学校、そしてその校門を通り抜けてグラウンドに出た。

まだ体育館には部活をしているらしく声が聞こえてきた。

だが屋外の部活は当然部活などしていない。

強豪高校なら夜の8時9時までしたり大雨でも警報が出ない限り練習はしているがウチの学校は言っちゃ悪いがそこまで強くはない。

だからグラウンドになんて一人もいないはずなんだ。

こんなコンディションの悪いグラウンドになんか……。

なのに……

なんで一人だけいるんだよ……

「馬鹿かお前は……！」

「………そんなこと……今更聞くなよ……。僕が金持ちの大馬鹿者くらい学年の奴等全員が知ってるぜ？ それに桃原だって馬鹿じゃねえか……。こんな雨が一段と激しい中で傘も持たずにずぶ濡れになって」

「お前ふざけてるのか！？ 早く帰れよ！ キャプテンマークをつける奴が風邪引いちまったら本物の馬鹿じゃねえか！」

冷たい雨が二人に向かって落ちてくる。

だがさつき走ったせい、それとも今梨原に怒鳴っているせい、体はかなり熱く感じる。

「………少しだけ昔話をしてもいいか？」

「……昔話？」

突然何を言い出すのかと思ひ聞き返す。

「ある街に金持ちの子供が生まれたんだ。好きな食べ物はいつでも

食べれて、欲しいゲームがあつたら友達よりすぐに手に入った。毎日が自分の思い通りになって不自由なんか感じた事がなかったんだ……」

「……言いたいののは自慢話か？」

「ふっ、まあ庶民にはそう聞こえるかもしれないな……。でも一つだけ思い通りにならなかった事があるんだ」

「……サッカーか？」

「……ああ、サッカーだけは金ではどうにもならないからね……。テレビがきっかけでサッカーを始めたんだが、僕は夢中になったんだ。こんなに動くことが楽しいって思ったことはないくらいな……。そしてそれは世界にまで共通しているって聞いて鳥肌がたつたよ。言葉が通じ合わないのにボール一つで通じ合っていることに。

世界には天才がたくさんいるってことに。
その時、なりたいたい自分を初めて見つけたんだ。僕は初めて夢を持つたんだ……。

でも中学１年の１１月２日……僕は試合中……ファールを受けて靱帯がブツ切れちまった……」

靱帯が切れた、そんな経験したなのにこいつはまだサッカーを続けるのかよ……

「手術は何度しましたが結局は靱帯はブツ切れたままなんだよ……。だからサッカーは諦めようとも考えた。いくら大好きでもそんなの惨めなだけだからな……」

「じゃあなんでお前はここにいる……」

「……あるサッカーの試合を見に行ったんだ。その試合には僕たちを圧勝で勝ったことで先輩達も注目してたからな……」

最初は虚しいだけと思った。できないサッカーを目の前でされるんだからな。

でも……

僕は勇気をもらっちゃった……」

「どういう……ことだ？」

「そこには……背番号0をつけたお前がいた。一年生ながらもトッブでゲームメーカーをするお前がいたんだよ……」

「……俺？」

「前に試合したときはわからなかったが、桃原の……背番号0を背負ったお前の凄さを見て感動したんだよ……。勇気をもらったんだ……。僕も……サッカーをしてお前みたいに上手くなりたかったんだ……。お前は僕の“憧れ”なんだよ……」

「……」

「だからリハビリをしてブランクがあつたその倍は練習に練習を重ねてサッカーができるまで鍛えた。痛いぐらいじゃ済まされなかったケガを我慢してな……」

だが、中三になってまたお前のチームと試合が決まったけど、お前はどこにもいなかった。」

中三…その時は俺はサッカーを辞めている時期だ。

「ショックだったよ。今まで僕は何のためにやってきたのかわからなくなった。目指すもんが無くなった気がしてよ…。やる気が失せちゃった」

……ああ、そうか。

こいつは俺に少し似ているのかもしれない。

俺は母さんの笑顔が見たいから。

こいつは俺のようになりたいからサッカーを頑張ってきた。リハビリも死ぬほどしてきたんだ。

でも互いのトモシビは消えてしまっ……。

「……でもな気付いたんだ。お前がいなくなってもサッカーをしながら……でもな騒ぐ。やっぱり僕はサッカーが好きなんだって改めて思ったよ。だから僕は高校でもサッカーを続けるんだ。無理とわかっていてやっても後悔はしないはずだ。サッカーがホントに好きだから……」

俺はあのとき夢を諦めた。

でもこいつは……今もずっと夢を見ている。

『どうせ叶わない』

『やるだけ無駄』

『もっと確実な道に行け』

恐らくこいつはこういう事を何十何百と聞かされただろう。それでも夢を追う。金なんか関係なく趣味のために。

……こういう奴を本物の馬鹿と言っただろうか、それとも覚悟ある奴と言っただろうか……。
俺にはよくわからなかった……。

第60話 幸せに抱かれて

俺は本当に“憧れ”を抱かれるほど立派な人間じゃない…。

夢を簡単に諦めるようなつまらない人間だ。

今に到るまで俺は節度ない生活を送ってきた。梨原が苦しみつかれていてもただ無駄に時間を過ごしてきただけなんだ。

なのに梨原はこんな俺にチャンスを与えてくれている。またサッカーを取り戻すチャンスを…。

なら俺はそれに応えたい！

「勝負…してやるよ」

「……っ！ 本当か!？」

「ああ…、ただしブランクがあるからその辺は勘弁しろ」

「……もちろんだ。俺は桃原とずっとサッカーをすることを夢見てきたんだ。」

全てをあんたにぶつけさせてもらっぞ」

ずぶ濡れの制服のままボールを持って少し離れる。

俺も同時に梨原から遠ざかる。

二人の間に15メートルほど距離が開いて互いに目を合わせる。

雨が降って視界が悪いはずなのに俺には梨原の姿がはっきりと見えた。

「いいか、グラウンドコンディションは最悪だけどそんな言い訳とかはなしだ。」

一対一の勝負、交互にオフェンスとディフェンスに分かれながら点を二点取った方が勝ちだ。

オフェンスの時はゴールを取ればいい。ディフェンスはゴールを守ればいいだけ。つってもちゃんとカットしないとディフェンスはオフェンスをすることができない。それでいいか？」

「ああ、文句ない。」

ならどつちが先にオフェンスをやる？

俺か？ お前か？」

「……先に桃原がオフェンスやれ。僕の現ポジションはスリーパーだからディフェンスをする」

スリーパーか……。そりゃ厄介なポジションをしてるな。

スリーパーというポジションはディフェンスの最後の砦。本来、しっかりした指示ができる奴や視野が広い奴、そして技術共に度胸が必要だ。そういう奴を置かないと意味が無い。

それにディフェンスの最後尾だから、それは信頼の証。

もしかしたらこいつ……。

「じゃあボールはそっちからだ」

梨原はボールを蹴ってピンポイントに俺のところに渡す。

「さあ……桃原、始めようか」

梨原は低い構えでディフェンスの基本姿勢、半身（横向きの状態のこと）をとる。

「……………」

母さん、墓参りの時にサッカーは二度とやんないって言ったけどアレは無かったことにしてもいいかな……。

だって俺、やっぱりサッカーが好きだ。

俺はボールをリフティングしながら感覚を思い出す。

「……………いくぞ、梨原」

刹那、俺はドリブルを始める。

細かくサイドステップを踏みながらボールを跨いで隙を見つける。しかし梨原はぴったりと足技についていている。

「ぐっ…！」

途中でボールを斜めに運び突破を望むがやはり進むことはできず競り合いの形にもつれる。

何十メートルも走りルックアップをするとゴールが目線に入る。

あと20メートルつてとこか…。

ここは勝負だ！

俺はフェイントをかけて相手を置き去りにしようとするがまだしつこく追いかけてくる。

「ちっ、マジかよ…」

「逃がさん！」

けっこうボディバランスには自信あるんだがついてこれるとはよっぽど鍛えたな。

なら！

「なっ！？」

体を素早く反転させるとバランスをとれずに濡れたグラウンドに倒れる梨原。そしてついに無人のゴールへ蹴りだす。

ボールは真っ直ぐに突き進みネットを静かに揺らした。

「まずは一点だな」

「く……！まだ勝負はついていない！」

そう言ってボールを持ちオフエンスの位置に行く。

ブランクがあるとは思えないあのボールさばきができたことに対し俺は自分でも驚いていた。

でもやっぱりこんなもんじゃない…。

「まだまだだな……」

俺はディフェンスの位置について梨原を迎え撃った。

「はあはあ……俺の勝ちだ」

結果は2 - 0。

俺は勝負がついた途端にその場に倒れた。

「……………」

梨原は何も言わずにゴール前で座り込んでいた。

緊張が解けて力が入らなくなったのだろう。

「あのさ……………」

「……………なに？」

「……………俺、桃原にこの勝負敗けたらサッカー辞めようかと思ってたんだ」

「ああ？」

唐突に出された言葉に引つ掛かる。

「最初は世界と戦いたいなんて言っちゃったけど……………実は迷ってる。1、2年の時は本気だった。でも3年になってから現実が見えてきたんだ……………」

父さんや母さんが言ってた理由が理解できた……………」

サッカーが好きだけじゃどうしようもないってわかってきたんだ……………」

それに夢を追うことがめっちゃめっちゃ……………怖く感じるんだ……………」

「……………」

俺はたぶんこいつにそんなこと言ってほしくなかったと思う。

そしてこいつがここまで弱気なのは初めて見たかもしれない。

でもこいつには夢を諦めてほしくない。

いつまでも馬鹿でいてほしい。

そう願うのは俺のワガママなのだろうか。

しかし俺は夢を諦めて後悔している。

こいつには真っ直ぐに行ってほしい。

だから俺は正直に思うことを言う。

「……確かに夢を追うのはどうしようもないくらい辛くて怖い……。足場がない真っ暗なところから自分で新しい道を創っていくんだから……。」

それにもしなりたい自分になれなかったらって思うとどうしても逃げ出したくなる……。」

目の前から背を向けたくなる……。」

心では納得しきれないのに夢を追うのを止めて楽な方へいきたがる……。」

実際は違うのにな……。」

立ち止まって諦めれば後悔に押し潰されてずっと辛い思いをする……。夢を追ってるときよりずっと……。」

だから止めたら楽になんかなれないんだ……。」

もし止めたら、夢を目指していた時がどれだけ幸せだったか……俺にはわかる」

「桃……原……。」

だからお前はゆっくりでいいから歩いていけ。

そこには苦しいこともあるけど、それ以上の幸せがあるんだから……。」

「……桃原は夢を諦めるのか……?」

梨原はゆっくり口を開く。

「……俺は……少し休憩してからいくよ……。今は厄介な奴らが家にいるからな……。」

「なんだ、ペットでも買ったのか?」

「ペットか……。いや……。それ以上に厄介な奴らだよ……」

「……わかった。ならば俺は夢を実現させてお前を待ち続けるからな……」

「ああ……」

叶ってもいい……

叶わなくなってもいい……

“夢を追うこと”こそが……

幸せだと思っから……

第61話 いたずらっ子

「おかえりデス、ご主人様」

午後5時半、ずぶ濡れ& a m p ;ぼろぼろの制服姿で学校から帰ってきたら、玄関にはパティがいた。

「ご主人様、お風呂にしますか？ ご飯にしますか？ それとも…

…私といいことでもしちやいますか…？」

「……………」

なんでいつ帰ってくるかわからない俺をパティが待っているんだ…？

「…？ どうかしたんですか？」

「……………もしかしてずっと待っていてくれた？」

「あ、違いマス。ずっとじゃなくて5時からデス」

5時から…。つまりパティは30分も俺なんかを待っていてくれたということだ。

「そっか……………ありがと」

なんだかんだでやっぱりこいつらはいいやつらだ…。

さっき梨原にこいつらのことを“厄介な奴ら”と言ってしまったことは言わないでおこう。

「ところでなんでパティがウチにいる？」

「あ、そっちにツツコミするんデスカ。」

ん〜とデスネ〜、暇だったから遊びに来たマシタ」

「へー、とりあえず俺ちよつと風呂入ってくるからパティはゆつくりしていつてよ」

「わかりました」

俺は上の制服を脱ぎながら風呂場へと行く。

パーティが密かに微笑むのも知らぬまま……。

「……“こちらパーティ、今椿君がソツチの風呂場に行きマシタ”」

「……“こちらこなた、了解した”」

「ん？ こなたいるの？ どうかした？」

「いやべつにー、かがみはそのまま風呂に入ってたらいいよー」

「くしゅんっ！ うー……」

大雨のせいですっかり冷えちまった。

また風邪をひくまえに風呂で温まろつと。

身につけている服を全部脱ぎ捨てて風呂場のドアを開ける。

「へ？」

「……………え？」

あれれ、おかしいな……。

視界にかがみさんらしき人がいるのは気のせいだろうか、瞬きをしないで目を擦りもう一度よく見る。

「な、なな、なっ……！？」

やっぱかがみさんだ。

「……………ってなんでかがみさんがいるんだ！？」

「それは……！」

こっちのセリフよ！バカアアアアアアッ！！！！」

「へぶっ！？」

かがみさんが投げた洗面器が顎に当たる。

うん、アウト。

「かがみさんのせいで傷ができるのってこれで何回目なんだろう……」
顎を抑えながら俺は落ち込む。

「さ、さつさのは仕方ないじゃない！だいたいこなた！あんたが教えてくれないから！」

「いやー、椿君が帰ってきてたなんて知らなかったよー」

「私もデス」

ホントかよ……。なんかこいつらニヤニヤしてて怪しいんだよな。

「でも椿君結局お風呂に入れなかったんだね」

ゆたかが捨て犬を見るかのように俺を眺める。

だが“お風呂”という単語を聞いて風呂場のがみさんの姿を思い出す。

「~~~~っ！」

ボンッ！

「っ、椿先輩の顔が真っ赤になって爆発した！？」

「どうせ柊の裸を思い出して興奮してるんだろー」

「ーっ！」

ボンッ！

「お、お姉ちゃんの顔も爆発しちゃった！」

頼むから俺に少しは安らぎを与えてくれよ……。

『もう二度と失さない　もう離さないように　この夏のむこうの
秋、冬、春にもー』

そんななか携帯の着うたが流れる。

「誰かの携帯鳴ってるよ」

「平和を望む俺だよ……」

ちよつと悲しそうに言う。

「椿君“こころむすび”を着うたにしてるんだ」

「ああ、そうだけどこなた知ってるんだ？」

「だってその曲はひぐらしの曲じゃん　実は私もけっこう気に入ってさ」

「まあ気持ちはわかるよ。俺が一番好きな歌だからね」

「あ、いい曲といえば“もってけ！セーラーふく”と“どんだけフアンファーレって曲もいい感じだから今度聞いてみてねー”

「聞いたことない題名だな……。わかった、誰が歌ってるか知らないけど今度聞いてみるよ」

俺は携帯を取り出してメールを見る。

するとそこには来るはずのない人からメールが届いていた。

その内容がこれだ

「貴様たちが心から愛するアニメ店長こと兄沢命斗だ！ふっふっふっ、なぜメアドを教えていないのにメールが来るんだよ！？って思っているだろう？」

それは置いといてだ！

椿！そして伝説の少女Aとその友達を含む者達！

明日ちよつときてほしいところがある！だから明日午前9時に私のところに来い！絶対だぞ！つうかも断れないからな！このメールを呼んだ時点で断ったらいけないルールが採用されたから断れんぞ！つうわけで明日楽しみにしている！ちなみに由佳様にも貴様にメールするように言っというてやったからな！フハハハハッ！！！！」

「……………」

ウ、ウザい……。果てしなくウザいと思うのは俺だけなんだろうか。

……。しかも断つたらいけないルールってこっちに選択権ぐらいよこせよ。

まあとにかくこの事をみんなに言わないと。

「~~~~」

またメールが届く。

おそらく由佳だろう。

『ヤッホー 椿っち

元気してるー？

お願いがあるんだけどいいかな？

もう店長に聞いてると思うけど明日午前9時に店長の店に来てね
言っとくけどこのメールを見た時点で断つたらいけないルールが採
用されたからよろしくねー（＾o＾）』

……だからなんなんだよ、見た時点で断つたらいけないルールってのは！

まずわかることは絶対いいことじゃないな。

俺は携帯を置いてみんなに伝えることを言う。

……これが最悪の出来事に繋がるということを、

神様は

知っていたのだろうか……

第62話 ファンタジックワールド

「やつと来たか」

「おはよ、椿っちー」

ただいま午前9時、昨日のメールで呼び出され俺は家に泊まっているメンバーだけでなくパティとひより、あやのさん、そして、
「どうもはじめまして。泉こなたの父のそうじろうです。今日はお誘いいただいてありがとうございます」

意味不明なことにそうじろうさんが来ていた…。

「あ、あなたがあの伝説の少女Aのお父様ですか!？」

俺、いや自分はアニメ店長をやっております兄沢命斗と申します！
それにしてもあれほどすばらしい素質を持った娘なんて羨ましいかぎりだ！」

羨ましがるな！

普通に場に溶け込むな！

素質ってなんだんだ！

「ふっふっふっ、

そりや自分の好みの娘に育ってくれましたんで最高ですよ！。
抱き心地も死んだかなたに似てきてドキドキしちゃいます」
ちよいまて！

なにさりげなく爆弾発言してんだよ！

いったい娘をどんな目で見ているんだ！

死んだお母さんが見たら絶対叱られるんじゃないのか!？

心の中でツツコミをいれていく時に由佳が話しかける。

「ねー椿っち、あちらにいるみんなって全員椿っちの友達？」

「……ん？ ああそうだけど、そっぴやちゃんと紹介してなかったな」

こいつが初めてあいつらと会ったのは確かバイトの時だ。

「まあね、……けど椿っちって意外とモテてる？」

「違う、友達って言っただろ」

「ふーん、友達ね」

由佳は目を細める。

なんかわからんが疑われてる気分だ。

由佳は俺のここからみんなのここに行つて自己紹介を始めた。

あいつはあいつで元氣いいし仲良くやるだろ。俺はとりあえず店長にこれからなにをするのか聞いたため反対側へ向かうとする。

が、なにか違和感が俺の背中をつつく。

いや別にあいつが自己紹介がちゃんとできるかとかそんな過保護な理由じゃなくて、なんというかともかく気になる。

というわけであいつらの話をここで聞こえていないと装いつつも耳をすまして盗み聞き。

「へー、由佳ちゃんって言うんだ。私はかがみ、よろしくね。ん

で、あの背が低い青髪がこなた」

「あ、青髪なんだ。

見た目に反してけっこう不良なんだねー」

体格は圧倒的に有利なので由佳は異色の髪をしているらしいこなたにはあまりビビってない様子。

「不良……」

こなたはなにやら落ち込んでいる。

不良ってのが相当痛かったらしい。

オタクと呼ばれた方が俺的に嫌と思うんだが……。

「それで大きいリボンをつけてるのが私の妹のつかさ」

「へえ、じゃあつかさっていいかな。

あと普通にリボンをつけて風紀を無視してるその度胸は気に入ったよ」

「あ、あはは……」

さすがにつかさも苦笑い。

「あつちのこなたより少し小さめの背をしたのがゆたかちゃんてその隣の背が高いのがみなみちゃん」

「すぐく正反对だね。小さい子は可愛らしいけどもう一人はクールな感じがする。でもなんだかとても似合ってる」
「まったく俺と同意見だな。」

俺も食堂で初めてあの二人にあつたときはそう思ったし。

「それであれがみさおでこっちがあやの」

「これまた正反対な二人だね。一人は幸が薄そうですけどもう一人は彼氏がいて幸せな雰囲気を感じるよ」

「あ、あやのー！」

由佳が柵より酷いことをー！」

「まあまあみさちゃん、悪気はないんだから」

真実だけだな。

「あの金髪が外国人留学生のパティ」

「が、外国人なんだ。えと、ハローワタシハ、ハギノユカデス。ヨロシクネ」

「私日本語喋れマス」

「えっ？あ、そうなんだ。間違えて英語で喋っちゃったよー」
英語でつてそれは全部日本語じゃねえか。

由佳は中学の時から英語が苦手だったからな……。

「眼鏡をかけたのがひより」

「一般人というかなんか地味な人だね」

「地味……」

ありや……。

こなたに続いてひよりまで落ち込んだじゃったよ。

由佳はストレートに言いすぎなんだよなー。

……しかしなんだか由佳が入ったせいで一嵐くる気がするのはなん
でだろ……。

「おい、車の用意ができたから乗ってくれ」

店長が全員に声をかける。

さすがに一台に十二人は乗れないので、

店員の一人が違う車を用意していた。

俺達は六人ずつに分かれて一時間ほど車を走らせた。

「よし、着いたぞ」

車が止まりドアを開けて次々と地面に足をつけていく。目的地、それはまだ聞いていなかったたので俺は今、目の前のありさまに絶句した。

「よく来たな、桃原」

「なっ！」

なんで梨原が眼鏡してスーツ姿でそこにいるんだよっ!?

「ふっ、なんで梨原がかけもしない眼鏡を装着してスーツ姿でそこにいるんだよって思っているだろ？」

こいつ俺の心が読めるようになってやがる……。

「まあこの普段制服姿の僕がスーツを着ているのにはさすがに桃原も驚いただろうな」

すまん、前言撤回だ。

こいつ全然読めてねえよ。

俺が気になってるのはスーツじゃなくてここにいる理由だよ。

「ああ、桃原が気になってるのはここにいる理由か。それならそう

と早く言え」

…もうこいつどっかの彗星にブツ飛ばしついいか？

「心が読めるのは我が社が開発したこの最新型眼鏡、“ジャスティス”のおかげさ。

ま、しょうがないからこの眼鏡は外しておこう」

ダッサー名前だな……。

しかも心を読める眼鏡ってプライバシーの侵害じゃねえか。

最低な正義の名を持った眼鏡を造ってる暇があったら地球をもう一個造ってるよ…。

「さて、今日は日本トップの我が梨原グループ最新開発された実験台になってくれるということだったな」

「実験台？なにそれ」

こなたは梨原に質問する。

「ん？もしかして聞いてなかった？」

「俺達は無理矢理連れてこられただけだからな」

俺はどういう経緯でここに来たのか梨原に説明する。

「まあ、とにかく来てもらったからには実験台になってもらつよ。

近未来リアルゲーム、“ジャスティス”をね」

「さっきの眼鏡と名前が一緒じゃねえか」

「えっ？……あ、たしかに…。

な、なら“近い未来人気が出るリアルなゲーム”って名前でならつてなんだよ。

しかも名前がまんまだろうが。

それに長すぎだ。

センス無すぎだし絶対こいつ適当に言ってるだろ…。

「というわけだからついてきたまえ」

梨原はバカでかいビルの奥に案内する。

「えへへ、なんか私ドキドキしちゃってたり」

由佳が脳天気になを踊らしている。

「俺は不安でしょうがねえよ……」

“実験台”

この単語が妙に気になっていた。

実験台なら俺達他にも山程いるだろうに。それにこのビルの異様な雰囲気、多方面からの視線、それらがさらに不安を膨らました。

第63話 利用規約

「ここがリアルゲームがある部屋だ。さあみんな入ってくれ」

梨原に誘導されかなり奥まで進んだ先にたどり着いたのは相当大きな部屋だった。

部屋の真ん中には見たことない、普通の人よりも三倍はあるんじゃないかと思われる大きさの機械とそれを囲むようにしてる二メートル程の大きいカプセルが五つあった。カプセルの中は椅子やら頭につけるヘルメットやらでガンダムのコックピットみたいになっていた。

おそらくあのでかい機械がゲームの本体でそれを操作するのがあのカプセルのようだ。

あのカプセルに入ってやるってのはちょっとおもしろそうだな。

ワクワク感に浸っていると知らない男の人が部屋の奥からこっちに近づいてきた。

「どうも、私はこのゲームの開発者、竹本です」

へへ、見た目は20代前半なのに凄いな。

「竹本さん、お久しぶり」

店長は一步前に出て挨拶をする。

「これはこれは兄沢さん、元気そうだなによりです」

「まあ俺はそれしか取り柄がないからな」

親しげに話す二人。

もしかして知り合いなのか？

「それで兄沢さん、そちらの方々が？」

竹本さんは顔を覗かせる。

「ああ、あの長い髪の女の子が伝説の少女Aであり、かなりレベルが高い天才ゲーマーだ。後は普通の子供たちだけだな」

「そうですか。」

なら彼女一人では寂しいのであと四人ゲームを体験していただくということでよろしいですか？」

竹本さんがそう言うのと由佳は驚く。

「えっ！？私たち体験できるんですか！？」

「ええ、しかしまだ世間には出ていないので天才ゲーマーの方を除いてあと四人になりますよ」

「わあー、やったー」

由佳は大いにはしゃぐ。

まあ由佳も俺と同じでゲーム好きだし気持ちはわからなくもない。実際俺もちよつとドキドキしてるし誰もしたことがないゲームを俺たちがするのだから嬉しくて当たり前だ。

「では残りの四人はそちらで決めておいてください。私は準備を進めておきますので」

竹本さんは大きな機械の元に行ってスイッチらしきものをつける。

ブーン…と音が聞こえ各カプセルに入りいろいろと操作をする。

「さて、じゃあ誰がゲームする？」

「ハイハイ！」

由佳が思いつき手を挙げる。他にも俺とかがみさんが挙げていた。

「ありや、俺と由佳とかがみさんだけ？ みんなはやりたくないの？」

「わ、私はそういうの下手だし見とくよ」

「…私も」

「私もゲームはやるけど下手の横好きだからなあ。今回は見る側にしとく」

「私もそういうのはちょっと…」

「外から見る方がネタになるっすからやめときます」

「せっかくデスけど私も今日は外から見てみたいデス」

「俺はゲームしてる子達を見る方が萌えるからパス」

つかさ、みなみちゃん、みさお、あやの、ひより、パティ、そうじろうさんはやらないと言っている。

しかし一人だけ手を挙げた。

「私、ちよつとどころかかなり下手だけどやってみよっかな…」

「おー、ゆたかか。別に上手いとか関係ないよ。一緒に楽しめたらいいじゃん」

「椿君……、うん、そうだね！」

これでこなた、由佳、かがみさん、ゆたか、そして俺の五人メンバーは揃った。

「やる人は決まりましたか？」

竹本さんが作業を終えて戻ってくる。

「はい、この五人です」

「わかりました。それではゲームを説明します。

少々長くなるのですがご了承ください。

まずこれはリアルアクションプレイで簡単に言っていると自分がゲームの世界に入れるゲームです。

本来は十人プレイが可能なのですが初回テストなので五人にさせていただきますました。

まず手始めに一人一人カプセルに入ってもらってシートベルトをつけてヘルメットをかぶります。

次にカプセルの電源を入れて起動させるとあの大きい機械も反応してゲームの画面が目の前に映像で出ます。

そしたらコックピットの右にあるスタートを押してください。

ミッションが大量に表示されます。

そしたら仲間同士でコックピットから通信が可能になっておりますので話し合って決めてください。

ミッションをクリアしたらその働きに応じて賞金首になります。

難易度に関してはミッションの数字が1から25が易しい、

26から65が普通、

66から90が難しい、

91からは世界レベルとなり難しいコースをして三億を超える賞金首にならないと参加資格がもらえません。それほど難しいミッションだということです。

次にミッションを決めたら職業の選択があります。

これは敵と闘うのに自分に最も適した職業を選んでください。

ちなみに職業は全部で二百以上ありますので。

この時、一回だけ使える特殊能力というのが各職業にあります。例えばナースを選べば武器は注射で特殊能力は仲間の治癒になります。

他にも様々なので見ておいください。

職業を決めたらまた画面にスタートと出るので押してください。

すると本人は睡眠状態となりヘルメットから電波がきて精神はゲームの中へと行きます。

そして参加する五人はそれぞれ別の場所に飛ばされますがそれがどこに飛ばされるかはランダムなので、

私たちにもわかりません。参加者が全員ゲーム内に入った一分後にミッション開始です。

ミッションが開始されたら左腕に腕時計が勝手に付いていますので取らないようにしてください。

ミッションによって目的は違いますが達成していただけたらゲームはクリア、目を醒まします。

目的が達成できずに負けた場合、本人が死んだ場合、もしくは途中でリタイアした場合もその時点でゲームオーバー、全員目を醒まします。

しかし本人が死んだ場合、リタイアの場合は個人だけが目を醒まします。

勝敗はまだ闘っている人達に委ねられます。

あとどうやったら私たちは死ぬのかというと私たちはダメージを負うことに痛みで代わり疲れがたまります。

これは実際に疲れが身体中にくるのでマラソンを思いっきり走った後と思ってください。

そして疲れが溜まりきって指一本も動かせない状態になると腕時計は消えますのでそれが死んだという合図となります。

あと仲間が死んだら時計が音を出してシグナルロストと表示があるのでチェックしててください。

ゲームをやらない見学者はこちらの大画面で全ての戦闘状況が見れます。

まあ簡単に説明したらこんな感じですけど全部一気に覚えなくてもいいんです。体験してもらった方が早いですから。

ではさっそく五人は各カプセルに入ってください」

長い説明が終わり未知のカプセルにそれぞれ乗り込む。

しかしこの時、俺が感じた不安の塊は隙を見て動き始めていた。

ゆっくりと手を俺たちに伸ばしながら……。

第64話 捕まえた…

「皆さん準備はよろしいですか？」

全員がカプセルに入りヘルメットとシートベルトをしたか確認する。

「大丈夫です」

「それでは起動させたあとに右のスタートを押してください」

俺は言われた通りにスイッチを入れてカプセルを起動させる。

映像が目の前に映りスタートが点滅している。

右にあるスタートを押すと竹本さんが説明したのと同じでミッションがたくさんならべられる。

これをみんなで決めるってことが。

「椿君聞こえる？」

「ああ、聞こえるよこなた」

こなたの声と同時に向こうのコックピットの様子が映像で見れた。そしてすぐに由佳とかがみさん、ゆたかにも通信が繋がる。

「じゃあどれする？」

「初めてなんだし易しすぎず難しすぎずってことで普通にいいんじゃない」

「私はなんでもいいよー」他のみんなも頷く。

「んじゃかがみさんの言う通り普通のミッションで……30のやつにしよう」

俺はちょうどいい感じのミッションがあつたのでみんなに提案を送る。

「30？……あ、これかー。別にいいんじゃない？」

こなたからはOKが出る。

「ミッション内容は……… “五人対五百、全滅させたら勝ち”。まあなんでもいって言ったからこれでいいよー」

三人からもOKの声が出る。俺はミッションを選んで次の職業にいく。

たしか二百以上って言ってたけどそんなにあつたらどれでもよくなってくる。

一個一個詳細を読んでいたら時間無駄なのでちゃっちゃと職業の名前だけ適当に見ていくと、

一つ面白いのを発見した。

「神様：世界レベルの職業で魔法に関してはゲームだけでなく現実にもまで及ぼすかも？特殊能力はなし。資格はミッション全てクリア」

……。

面白そうではあるが無理だよな。

資格なんてあるはずないし現実にもまで及ぼす魔法ってありかよ。

神様の職業をとばして次々いくとデュエリストと職業かどうか怪しいもんを発見。

これって明らかに遊戯王のことだよな…。

「デュエリスト…」十枚のカードを一枚ずつひいてそれを用いて闘う。

その十枚はランダムで選ばれる。

魔法カードをひいたなら魔法を使えるし、

モンスターをひいたらモンスターが現れて代わりに闘ってくれる。

武器をひいたら自分がその武器を使って闘う。

ひいても何も起こらないハズレカードも存在する。

特殊能力はカードを一枚増やすことができる。資格なし」

これもなかなかユニークで面白そうではないか。

それにカード自体で変幻自在に闘うなんてけっこうカッコいいじゃん

「よし、これに決定」

デュエリストを選択して
スタートがまた点滅する。

これを押せば強制で睡眠状態に入るんだよな……。

「……………」

押すのを少しためらう。

それはたぶん俺が怖いと思っっているからだろう。
でもみんなが向こうで待っているんだ。

「……………よし」

俺は強制的に眠らされないように気をつけながらスタートを押してみた。

だがそれは無力な抵抗に過ぎなかった。

ヒタヒタと近づく闇の足音…。

誰も気づくことなく

ゲームは始まる……………。

暗闇が一瞬周りを支配したがすぐにそれは解けて明るい荒野が瞳に映っていた。

「すつ…げ……………」これが本当にゲームの世界なんて思わせないほど
現実に似ていた。

「椿君大丈夫？」

空に浮かぶでっかいモニターに現実世界にいるつかさたちの姿が映っていた。

こっちからも見る事ができるなんてスゴいな…。
空もあり土もあり遙か彼方には海まで見える。

そしてそれを触ることができなんて…。

「…夢みたいだね……」

「っ！！」

不気味に低い声が聞こえてバツと振り向く。
しかしそこには誰もいなかった。

「き、気のせいかな……？」

ホッと安心してモニターに目を配ると、

「…くつく、気のせいじゃないよ……」

ドクン

心臓が大きく鼓動する。

……今、たしかに聞こえたよな……？

聞いたことのない低い声…。

ゆっくり踵を返すとそこには、

「やあ……」

「う、うわあああつ！？」

地面に伏していた俺の影が立ち上がっていた。

「……そんなに驚かないで」

な、な、なんなんだこいつは！？

これもゲームの内の一つなのか！？

だが何故かこいつにはかなりの違和感……いや、嫌悪感がある。

「くつく、ゲームの内の一つ……か。」

違うと言えば違うし……そうと言えばそうなる……。

僕はこのゲームの主体となる人工的頭脳。

僕が抑えているからこのゲームは安全になっている、いわば神の存在だ……」

じ、人工的頭脳…？

神の存在…？

な、何を言っているんだこいつは…？

こんなの竹本さんから聞いてないぞ…。

「ふふ…」

ニヤリと不気味に笑う影。寒気が一気に体を貫いた。

「お前は…なんなんだ…？」

そう質問をぶつけた刹那、

「きゃあああああああああああああああああああ
！！！！」

「こ、こなたっ！？」

こなたの悲鳴が聞こえてきた。

場所はおそらく近くだろう。

そして悲鳴の後には腕時計がピーーッと鳴る。

この時、竹本さんが言っていたことを思い出す。

『仲間が死んだ時は腕時計が鳴ってシグナルロストと表示されます』

「う、嘘だろ…」

そつと腕時計を見てみるとそこにはあつてはならない文字があつた。

“ 泉こなた……シグナルロスト ”

「……な……んで…」

「ふふ……一人が原因不明の死。これは何を意味するんだろうね…
？」

「…………お前の仕業なのか!？」

「そんなことより仲間のところへ行ってやったらどうだ?」

「く…!! こなた!!」

俺は慌てて声のするほうへ走った。

「…………ふふ、桃原椿。」

僕を退屈させないでくれよ?

せいぜいこの世界であがいて見せる…………」

そう言つて影は元にもどった。

モニターから現実のこなたを見るとまだ眠っていた。

竹本さんはやられたら起きるって言っていたのになぜだ…!?

俺は走りながら考える。

あれはゲームの設定にあるもの?

…………いや違う!

あいつが誰かは知らないがこのゲームを狂わすつもりだ!

静かに影はまた笑う。

(さあ…………マジックショーの始まりだよ…………)

俺が感じた不安の塊はついに俺たちの肩を強く掴んだ…………。

第65話 風を見送って

「こなた！こなた！！」

どれだけ叫んでも応答はない。

そしてモニターのこなたのコックピットを見ると不気味なことに現実のこなたはまだ目を醒まさない。

このゲームはホントに正常なのか…！？

「くつく、焦ってるね…」

「ま、また…！」

後ろの影がまた話しかける。

「いいね…その歪んだ顔。」

でも君にはもつと焦ってもらうよ……」

低い声で笑いながらぶつぶつと何かを呟く。

それはどこか呪文の詠唱に似ていた…。

ドーンッ！！

どこか近くで大きな爆発が起こりそれと同時に、

ピーーーーーッ…

「…………え？」

腕時計がまた鳴り慌てて見ると、

「萩野由佳、柊かがみ、小早川ゆたか、シグナルロスト」

「…………う、うわぁあっ!？」

っな、なんで!？」

どうして由佳達がいきなり!？」

どうなっているんだ!？」

「何を怖がつてるんだい…………？」

こ、殺される!

俺もみんなと同じように殺される!

俺は震える声を精一杯出して竹本さんに話しかける。

「お、おい竹本さん!聞こえてるんでしょ!

いいいったいこのゲームはどうなってるんですか!？」

なんでゲームのこなたたちがいきなり死んでそっちにいる四人は目を醒まさないんですか!？」

よ、四人に何があったんですか!？」

俺は言いたいことを言つと向こうからは信じられない答えが返ってきた。

「い、今それをチェックするために作業をしているんですが何故かコンピューターにロックがかけられているんです!

だからわからないんです!こちらからはなにも!」

「ロ、ロック…………?」

そんなバカな…。

俺たちが五人メンバーを決めるときにさっきカプセルにそのコンピューターを繋いで調整していたではないか。

ということはロックはそのあとに何者かがしたって言うのか?

それこそあり得ない。

アレは持ち主の竹本さんも他の人も調整が終わったら一度も使っていないんだ。ならなんで!?

「なんでだろうねえ……」

「……っ!!」

また影が喋り始めた。

それを見て俺はピンときた。

「……やっぱり……、お前……なのか？　こなたたちがゲームオーバーしたのもロックをしたのも……」

「……ふふ、見た目では相当鈍感だと思っていたのに案外普通みたいだね」

「……みんなを元に戻せ」

「彼女たちかい？　女の子たちにはまだ用があるし今は無理だ」

「……用だと？」

「くつく、ついでだからみんなに聞こえるようにするか」

「……なに？」

「“一部ロックを解除”。皆さん聞こえますか？」

影はゆつくりとモニター側のみんなに問いかける。

「な、なんすか？　今の低い声は？」

モニターでひよりがみなみちゃんにしがみつくのが見えた。

反応があったということは聞こえているということだ。

こいつは何をするつもりなんだ……。

「聞こえているようですね。」

ではまず手始めに自己紹介でもしときましようか。

私はあなた方が造った人工的頭脳、

そうですね……“Lord”とでも呼んでください」

Lord…日本語では神、

こいつは神の存在のようなものと言っていた。

それで頭文字を取ったと言いたいのか。

ふざけやがって……。

「まずは私を造ってくれたことを感謝いたしますよ、竹本さん。それでなんですがね、

自由になった暇潰しに少しだけ遊ぼうと思ひましてね、

そちらから何もできないようにロックをかけさせてもらいました。

少し邪魔されずに楽しみたいですからね」

「……な、何で貴様がそんなことまでできる!？」

私はそこまで細かくは造ってはいないはずだ……!」

竹本さんはできるだけ情報を出そうとする。

「くつく、そちらが知る必要はありません…。

まあでも適当に言えばあなたの予想を越えた。

ただそれだけですよ…。

とにかくあなた方は黙って見てくださればいいんです…。

これから起きるショーをね……」

「……こ、断ると言ったら？」

「くつく、それは無理です、竹本さん。なんせこちらには人質がいるんですから…」

人質、それはこなたたちのことか俺のことかはよくわからない。

それにこの会話はみんなに聞こえるようにって言っていたが消えたかがみさん達にも届いているのだろうか…。

「それでは今はやる必要がありますので……。

“一部を再ロック”」

そう言って向こうとの会話は終わった。

「ふふ、祭りは観客がいないと盛り上がりません……。モニターなどは解除はしておいてあげてるから…」

向こうからも映像は見れているらしい。

だが声は聞こえているのだろうか…。

「さて、残るは君だけだ。椿君」

「……俺も消すのか？」

「くつく、そんな思い詰めなくても大丈夫だ。

消しはしない。

今はね…」

今は…か。

つまりその時がきたら俺はみんなと同じように消されるってわけか。

「椿君に一つ聞きたい…」

「……なんだよ」

「もし、自分が死ぬ代わりに誰かが救えるのなら君はどうする？」

……。

「見捨てるかもな………」

「……くくくくく、ひやはははははははは！！」

そいつはいい。

確かに君は正しいよ。

自分以外のために死ぬなんて馬鹿げてる。

それは当たり前だ」

「……でもな、もしそいつが大切な奴だったら俺は代わりに死んでやる。

絶対にな…！」

「………へえ」

不意をつかれたように影は黙る。

おそらくこいつにとっては予想外の返答だったのだ。大切なものがないこいつには…。

「………本当に死ぬんだよ？」

「ああ、そうだな」

「…君は死を理解していないのか？ 死んだら想い出も何もかもが消えるってことだ」

「たしかにな…」

「それでいいのか？」

「……良い悪いの問題じゃねえんだ。
笑って死ぬか、泣いて死ぬかだ」

「さっきは仲間が死んだときは情けない声で助けを求めていたくせに
仲間が助けを求めていたら君は迷わずに行く……。
おかしくないか？」

「……お前はわかんねえだろうが大切な奴が救いを求めていたら俺
は、
もう自分の命なんか見えてない。
だから大切な奴だったら見捨てるなんて選択肢はないんだよ……」

「愚問だな。」

他人のために消えるなんて。
すでにお人好しを越えているよ？」

「優しいだけの俺にはそれしかないからな。
それにそういうのはゆたかが川に落ちた時に経験済みだ」

「……………くつく、なるほど。
本当に君は面白い。」

君と話すのはホントに楽しい。

くっく、そんな君にチャンスをやろうじゃないか」

「……チャンス？」

「これが見えるか？」

影は立体化して野球ボールほどの結晶を見せる。

「……それは？」

「あの元気のいい女の子、柊かがみだったかな？」

「……かがみさんに何をした……！」

「そんな恐い顔をするな。」

これはその子の記憶を結晶化しただけだ」

「き、記憶……！」

記憶が結晶化なんてあり得ない！

それにかがみさんはそんなことされて大丈夫なのかよ……？

「安心しなよ。記憶を奪っただけで意識はちゃんと戻すよ。」

約束は守ろうじゃないか」

「………それでお前は何がしたいんだ」

「暇潰し……。僕とこのゲームで勝負しようよ。」

人工的頭脳であるこの僕とね」

「勝負……だと？」

「ルールは簡単だ。一騎討ちで君が僕の体を壊せたらこの記憶の結晶は自動的に持ち主に帰る。制限時間は一時間。」

文句ないだろ？」

「………もし俺が負けたら？」

「君の意識は永遠と目覚めることはないだろう……。つまり死だ」

「………」

「さあどうする？」

「………迷っている暇はない。」

やるしかないんだ、記憶を取り戻すには。

じゃないとかがみさんは……。

「その勝負受けてやるよ…」

「くつく、さすがだ。」

アレは口先だけじゃないようだね。

なら君のために1日猶予をやるうじゃないか。

明日の午後12時に勝負、

それまでゆつくりと余命を楽しむが良しさ！

ゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラッ！！！！」

第6話 幻想

「猶予だと？」

「くつく、そうだ。君もまだ未練があるだろう？」
未練……。

たしかに焼き肉の特選類しか頼まずに腹一杯食うとか美女に囲まれて酒を飲みたいとか一兆円欲しいって欲はあるけど、今の俺は十分幸せなんだろうな。

「……お前、一つ間違ってないか？」

「……どういう意味かな？」

「まだお前が勝つとは決まってるねえだろ」

「くつく、君はおかしなことを言うな。」

僕は人工的頭脳だ。

そしてこのゲームの神とも呼べる存在。

負ける要素がどこにある？」

自信満々に答えるLord。

「さあな、だが勝負では必ず完璧な歯車でも狂うかもしれない」

「……僕はただ楽しみたいだけだ……」

なら歯車は狂った方が面白い……。

さて、じゃあそろそろ少女たちの意識を返してあげよう」

Lordは片手を上にかざす。すると手のひらから小さな光の玉が出てきた。

あれがあいつの言うかがみさんたちの意識だということか。それはスーッと消えてどこかにいってしまった。

「くつく、一つ君にはサプライズを用意した。楽しみにしてるんだよ……椿君……」

立体化した影は俺の元に戻ることもないなくなった。身体中に虚脱感が走る……。

現実離れしすぎで全部が嘘のように思える。
実は全部がゲームのストーリーなのだ……。

……そうだ。

これは何もかも悪い夢なんだ……。
空想だ……。

こなたたちも同じ夢を見てるから起きないんだ……。

そうに決まってる……。

それ以外考えられない……。

じゃなかったらおかしいだら……

「……………」

俺は一呼吸置いてリタイアをする。

俺は瞼を閉じてゲームを始める時と同じ闇に逢う。

光は一切途絶えてどこまでも続く色に包まれる。

こんなにも暗いのが怖いと感じたのは初めてだった……。

恐怖を抱え、そして気づけば俺はカプセルのコックピットの中にいた。

目の前にはゲーム前に見たボタンと同じものが並んでいた。

間違いない。

現実世界だ。

「やっぱりさっきのは夢だったんだ………」

じゃなければあんなやつが俺を普通にリタイアさせてくれるはずが

ない。

無事であるはずがない。

俺は乱れた呼吸を静めて

フラフラしながらカプセルから出る。

「椿君……！」

「つか……さ……」

つかさは心配そうにしていた。

その姿は夢とは違う。

これが現実なんだ。

カッソッ。

近くで足音が響く。

そこにいたのは紛れもなくゆたかと由佳だ。

「あ、椿君。ゲームどうなっちゃったの？なんかあんまり覚えてないんだけど……」

「私もゆたかちゃんとおんなじ。始まったと思ったらずっと暗闇にいる気がしてさー」

……無事だったんだ、みんな。

そして二人の後ろには俺の今までの思いを肯定する存在がいた。

「か、かがみさん……」

「……椿君？」

「うう……お姉ちゃんーん！」

つかさはかがみさんに抱きついた。

それをかがみさんはよろけながら受け止める。

「え？　つかさ？　な、なに、どうしたの？」

かがみさんがあわてふためいているのにも関わらず、つかさはさらに抱き寄せる。

「あ、あのさ、かがみさん、俺のこと覚えてる？
記憶、消えてない？」

「はあ？何言つてんの、当たり前じゃない」
普段通りのかがみさんだった。

ああ、やっぱりアレは夢なんだ……。
俺の妄想だったんだ……。

それは今、かがみさんが俺の目の前でちゃんとかがみさんが記憶を
なくさずにいるのが何よりの証拠だ。

…そうだよな。

実際あんなやつがいたらおかしいだろ。
なにが人工的頭脳だ。

つたく、このゲームは質が悪すぎる。
二度とやんねえからな。

「そういえばこなたは？」
かがみさんがキョロキョロと周りを見回すが外にはいない。
まだカプセルの中なのかな。

俺は反対側にあるこなたのカプセルに行くと、やっぱりこなたはそ
こにいた。

ヘルメットを外してなにやら外を覗いているようだった。
いったいなにがしたいんだあいつは、と思いながらそれを見守る。
そしてシートベルトをのけてカプセルから出た。

こなたもみんなと同じでどこにも外傷はないようだ。

まあゲームで外傷が発生する方がどうかしてる。

俺はこなたに近づき声をかける。

「こなた、お疲れー」

「あ、椿君」

いつものこなたならこう言うだろう。

しかし、目の前にいるこなたは返事を返さずに俺に怖がっているの
かのように見えた。

「……こなた？」

「……っ！」

俺が手を伸ばそうとした瞬間、ビクツと拒絶反応する。
まさか……俺に怯えているのか？
なんで？

また近づこうとすると

こなたは繋がるように後ずさる。

「なになに、どうしたの？」

かがみさんたちがこっちに来る。

だがこなたはまた後ずさり体を震わせていた。

「……こなた、お前いつたいどうした？」

そうじろうさんが不審に思いながら足を運ぶと、

「こ、来ないで……」

「え？」

「こ、こっちに……来ないでください！」

この場に居合わせた全員が驚く。

それはそうじろうさんも然りだ。

俺はふと影が言っていた言葉を思いだす。

「一つ君にはサプライズを用意した。楽しみにしてるんだよ……」

ま、まさか……サプライズとはこの事なのか……？

あの結晶は本当はかがみさんではなかったと……？

でも“アレ”は夢だったはずだ。

これほど夢であってほしいなんて思ったことはない。しかし俺のゲームでの記憶が夢じゃないほど鮮明に映し出される。
心が現実だと叫ぶ。

「ア……“アレ”は夢なんかじゃないんだ……」

ほ、本当にあつた……現実……だったんだ……」

闇はもう俺達を捕らえていたんだ。

俺はそうじろつさんより前に出る。
こなたに嘘だと言ってもらつたために。
その言葉を聞くために。
なのに……

「あ、あなたは誰ですか……」

どうして……

どうして君はそんなことを言つんだ……

第67話 変わる音色

「そうじろうさん、今日はこなたを家に連れて帰ってください。たぶんそっちの方がいいと思いますから…」

午後3時、俺達は店長の店に一度集まって話をした。

しかし俺があいつと勝負することや、

いろいろLordと会話したことはかがみさん、由佳、ゆたか、記憶を失ったこなたは意識がなかったからとして、現実側にいたつかさ達まで知らないらしい。

やはりモニターだけを解除しておいたみたいだが

あいつのことだ、

明日は“暇潰し”とか言って声も解除するのだろうか…。

「…それで私達はどうしたらいいんでしょうか？」

みなみちゃんみんなに聞く。

どうしたら…それはつまり俺達のすることを決めるということだが本当はやることは決まっている。

俺があいつと戦って勝てば万事解決だ。

だがリスクはハンパじゃない。

死と隣り合わせだからな。

もしこの事を話せばみんなは絶対違う方法を探して結局無駄な時間を過ごす。

だったら適当に誤魔化した方が効率がいいかもしれない。

俺だって命と記憶、どっちが大切かわかりきってるけど、

それでも俺はこなたの18年を取り戻したい。

俺はみんなに一騎打ちで勝てばこなたの記憶は戻り、もし負けても

俺には別ににも支障はない、とみんなに説明した。
他にもあいつがなんなのかなど必要なことだけ話した。
信じてはいないという顔をしていたがそれは仕方がない。

「……ホントにそれって椿君になにも起こらないの？」

あやのさんは疑っているのか、一回言ったことをもう一度聞く。

「……ああ」

「……ホントに？」

「……あやのさん、さすがにそれはしつこい」

「……わかった。ならそれでいきましようか……」

「よし、やることは決まったんだ。みんなはもう帰れ。明日に備えてな、特に桃原、おまえはな！」

店長、そんな暑苦しいとこ見せたらこなたがまたビビりますって……俺達は一斉に外に出て

背伸びをする。

太陽の温もりが俺の中にある恐怖心を少しだけ和らげた。

「さて、んじゃ帰るか。」

そうじろうさん、こなたを頼みます」

「……いや」

「は？」

「……こなたは君のどこにいさせてもらっていいか？」

「え、でも……こなたにとって俺の家より我が家に戻った方がいいんじゃない？」

「いや、たぶん今のこなたはみんなと過ごした家の方がいいと思うんだ。

時々電話してくるあいつの声がとても明るかったから……。

記憶はなくても体が覚えていると思うんだ。

だから……君にこなたを預かってもらいたい」

「……」

チラッとこなたを見る。

こなたはそれに気づいて店でいろいろと打ち解けたかがみさんの後ろに隠れる。

あの様子じゃ厳しいとは思うけど……。

「ふう…、わかりました。今日もこなたを我が家に歓迎します」

「ありがとう」

そのとき見せたそうじろさんの笑顔の奥にはきつと涙が流れているだろう。

自分の娘に何もできない不甲斐なさを感じて…。

こんな時、こなたのお母さんがいたらどうするんだろう……。

「私思っただけどさー、ちびっこって記憶喪失なんだろう？　ならいろいろやったら思い出せるんじゃないかねえか？」

「どうだろう…。」

でもあの結晶がこなたから抜かれている限り記憶は戻らないのが普通かも…」

「そっかー、ダメなのかー…」

みさおはがっかりする。

普段は対決したりしてるけどやっぱり友達なんだろうな…。

「でもまあ椿君が勝てばいいわけだし。ね？」

「あ、ああ。まあな…」

「だからこなたも安心しなさいよね」

「は、はい」

こなたは多少怯えはするものの返事はちゃんとできるようになった。でもこなたが引っ込み思案で敬語を使うってのはどうもギャップがありすぎる。逆にそこが可愛いって思うやつもいるんだろうけど…。

「あ、あの…桃原君」

こなたが動揺しながら俺の名字を口にする。

そっぴや名前じゃなくて名字で呼ばれるのは久しぶりな感じがする。
でもやっぱり俺としては…。

「なあこなた」

「は、は、はいいい！」

「いやそんな慌てなくてもいいから」

「はははいいっ！」

こりや言っても無駄か…。

「俺のことさ、前まで言ってたみたいに椿君って呼んでくれねえかな？」

「え、え？し、下のな、名前ですか？」

「うん」

「えと、えと、つ、つ……」

言葉に詰まるこなた。

だともうちよいだ。

頑張れ！

「桃原君…」

がくつ。

どうやったら“つ”から桃原君になるんだよ……。

こなたを見ると少しだけ顔が赤くなっていた。

そりやそうだよな…。

こなたにとったら知り合ったばかりの関係なんだ。

下の名前なんて……。

「こなちゃん、アイス食べる？」

つかさがアイスの屋台を見つけて聞く。

「は、はい、つかさん」

「……………」

なんでだ…？

なんで俺は下の名前じゃないんだ…。

呆然とする俺に由佳は、

「ほら椿うち来なよ、みんなにおごんなきゃ」

「えっ！？俺の金！？」

「大丈夫　ちゃんと安いのにしとくから。みんなはそこで待って」

ち、ちくしょう…。

……けどいつか。

まだバイト代も残ってるし今日だけはおごってやるよ…。

コイツラといると明日のことなんて忘れさせてくれた…。

安心感が心を満たす…。

「すいませーん。超特大レアビッグストロベリーアイス五段重ねを
十個くださーい」

「ふ、ふざけるなー！！！」

「なんでよー？」

当然買ってくれると由佳は思っていたらしく、
不思議そうな顔をする。

「当たり前だろ！

お前に“遠慮”の言葉はないんか！？」

「ないよ」

あっさり答える由佳。

「男ならみみっちいこと言わないで買った買った！」
「だから俺は　！」

「　　円になりまーす」

「……………」

店員は本当にアイスを用意してしまった。

「えーと、キャンセルとかは…？」

「不可能です」

第68話 エナジ―

「ここがお姉ちゃんが最近住んでいた家だよ」

「…あ、あの、ゆたかちゃん。そ、そのお姉ちゃんというのはなんか恥ずかしい気が…」

「へ？ そうかな？」

「んーと、じゃあこなたお姉ちゃん？」

「い、いえ、ですから…」

「ま、みんなは独自の呼び方に慣れちゃったから勘弁してやってよ」

「は、はい…。し、しかしな、慣れって恐ろしいですね…」

俺は慣れよりもこなたの言葉遣いが恐ろしい…。

やっぱりなんか違うんだよね…。

記憶を失うと全員がはじめましての状態になるからだろうな…。

でもこなたと距離ができた気がして少し嫌だった。

「それにしても違和感があるね！。最初の印象とは大違い」

「だよな！……って！なんでまだ由佳がいるんだ！？」

「え？ ダメ？」

「ダメ」

「泊まるのも？」

「なおさらダメだろ」

「私の胸ちよつとだけ触らしてあげるから」

「え？マジで？」

「うん ほれ」

由佳はそこそこある胸をつきだす。

「わーい じゃねえよ！！早く帰れよ！！」

そのときみさおが、

「ホントは触りたかったんじゃないのー」

「ち、違っ！」

「うわっ変態ね…」

ちよっかがみさん、そんな軽蔑な眼差しで俺を見ないで！

「…椿君がそんな人だったなんて」

みなみちゃん誤解だよ！？アレはノリツッコミだってば！

「も、桃原君、それは危ないです…」

ち、違っんだこなた〜！！

「あゝ…」

い、痛い…。

みんなしてハエ叩きとか孫の手とかハンガーを投げるなんて冗談にしては酷い…。

明日のためにゆったりしたいのに…。

「椿先輩、私ら先輩にこの家の中、案内してくるっす」

ひよりとパティ、みなみちゃんはこなたを囲んでリビングから廊下に出る。

「……あゝ…あ、ちよい待て……俺も行く」

俺は走って四人についていく。

「あ、椿君、私は買い物行ってくるね」

……さっきの鬼の顔とは思えないな。

かがみさんは財布を持って玄関に行く。

「あ、待ってかがみさん。私も手伝うよ」

意外にも由佳はかがみさんの買い物に付き合う。

ドアが開く音がして二つの足音が外に移る。

「ここが椿君の部屋でこなたが寝ていた部屋ネ」

パーティは一番乗りに部屋に入っておどおどと戸惑っているこなたを歓迎する。

「わ、私って男の子の部屋で寝てたんですか？」

こなたは動揺を隠せずにいる。

「でも一緒に寝てるのは椿先輩じゃなくてかがみ先輩とかつか先輩と寝ているから大丈夫ですよ」

「で、でもそんな私ってそんな不純なことをしてたなんて…」

不純ってただ寝ているだけなのに大袈裟だな…。

「もうお嫁にいけない…」

お、お嫁って……。

こなたって前はバカだなーって思ったけど記憶を失ってもバカは失わないんだな……。

今のこなたは前のこなたとは何か違うオーラを俺に感じさせた。

他にもみんなで風呂場や庭、着替えの位置、俺の部屋のベッドの下とかを隅々まで案内した。

けどベッドの下はやめてほしかった…。

「かがみさん、あっちのお肉安いみたい」

「え、ホントに？」

かがみと由佳は近くにあるお馴染みの店で今晚の夕食の食材を決めていく。

「よし、こんなもんかな」

かがみはかごを見て満足げにする。

「かがみさん、これってまさか“アレ”の材料？」

由佳はかがみの意図に気づく。

「そ、これで明日は椿君に勝ってこなたの大切なモノを取り返して
もらわないと……」

そう、私を含めたみんなの大切な思い出を…。

「こなつちのこと…大事に思ってるんだね」

由佳は少し羨ましそうに言う。

「……うん、

あいつってさ、いつも何考えてるのかわかんないんだけど一緒に話
してて凄く楽しくて、ボケたアイツをいつも私がツツコミいれてさ
…。

“いい加減にしなさい”とか言っちゃうときもあるけど

実際、今のこなたが大人しくなったらなんだか私たちの関係の糸が
切れた感じがしたの…。

素のままでいくのが私たちだから私は今より前のこなたの方が好き。
だからいつも通りに戻ってバカやって私が怒って…。同じことの繰
り返しだけどそんな普通のことには私は今懂れてるの…。」

かがみは買い終わった食材を袋に入れてゆっくり歩き始める。

由佳は二三歩遅れながらもかがみについていく。

早歩きをして隣まで来たらかがみのペースに合わせる。

「……一つだけ聞いてもいいかな？」

由佳は静かな口調で話す。

「なに？」

「……その……、かがみさんは椿っちのことをどう思ってるんですか
…？」

「……え？」

不意をつかれたようにかがみは目を丸くする。

「どうって言われても…。友達…かな…」

かがみは自分でも曖昧な答えにイラつく。

でもしょうがないじゃない。

私にとって椿君がどういうものか、咄嗟に言われても……。

「……なら椿つちとこなっち、どちらかを選ぶならどっちの手を掴む？」

「…そ、そんなの比べられるものじゃ」

「私だったら」

かがみが最後まで言う前に由佳はそれを遮る。

「私だったら椿つちを選ぶ…」。

もう一人がどれだけ大切な人であっても、私は迷うことなく真っ直ぐに椿つちに駆け寄る」

「由佳ちゃん…」

かがみは由佳のはっきりとした想いに多少驚く。

「だって……！」

私は椿つちのことが好きだもん！

誰よりもずっとずっと！

世界で一番好きなんだもん！

だから私は椿つちを誰にも取られたくない！

椿つちの横に他の人が肩を並べるとこなんて見たくない！」

「ちよっ、ちよっと待って、何で私にそんなこと…」

「だって……、

かがみさんを見てると椿つちのこと好きなのかなって思ったりして

…」

「……………」

そこで否定しようと思えばできた。

でもしたくないという気持ちが大きく勝る…。

自分が嘘をついているように思うから……。

“迷わずに君のところに”

明日がないかもしれない
少年の心へ伝わるように、
切ない少女の願いが木の葉を揺らす……。

第69話 空白

「ただいまー」

由佳の声が廊下に反射を繰り返して俺のどこまで届く。足音が近づいてきてリビングのドアが開かれる。

「夕食買ってきたよー」

かがみさんが先に入り由佳は後から入ってくるのだが二人の様子が少しおかしいことに俺は気づいた。

「由佳とかがみさん、どうかした？　なんかどっちも視線が下にむいちゃってるけど……」

「ふえっ！？　べ、別に普通よ」

かがみさんは否定するが由佳は相変わらず鬱な感じだ。やっぱり何かあったんじゃない？。

いや、今の俺は他人の心配なんかしている場合じゃない。もし負けたら、もう俺はここには存在できないんだから……。

「お、俺もう腹ペコで限界だからさ、早くご飯食べよ」
「できるだけ明るく振る舞う。」

こんな暗い気持ちで最後になるかもしれない時間を終わらせたくない……。

「そうね、じゃあ料理は私に任せて」

「私もー」

つかさはかがみさんを手伝おうとすると、

「あ、つかさは向こうでくつろいでて」

「え？　でも……」

「お願い、今晚の夕食は私一人で作ってみたいの」
かがみさんにしては珍しく一人で作りたいと言い、
つかさはわかったと小さく頷いて了承した。

「ご飯できたわよー」

かがみさんは人数分の皿をテーブルの上に並べた。

「ワアアッ！ コレってもしかしてワタシタチがコドモのころにニ
ホンのアニメでヤツテタ

“荒木家の幸せ” にでてくるドンカレーハンバーグじゃないデスカ
！」

「荒木家の幸せ？

そんなアニメやってたんだ」

「椿先輩知らなかったんすか？」

「全然」

「…私も知りませんでした」

どうやら知らないのは俺とみなみちゃんだけのようだった。

この特色カレーハンバーグとやはただカレーにハンバーグがつい
ているだけと思っていたがカレーの色が青っぽくなって海みたいにな
っていた。

「…なんか色がおかしくないですか？」

みなみちゃんもそれに気づいて指摘する。

「大丈夫だよみなみちゃん。

それは青色だから美味しいの」

ゆたかは笑顔でみなみちゃんに勧める。

こうなってしまうたら仕方がない。

ゆたかにも料理があまり得意ではないのに頑張って作ってくれたか

がみさんにも悪い気がする。

けどやっぱまだ抵抗が…。

「私もこれお母さんに作ってもらったことがあるんだけど凄く美味しかったの。」

だから大丈夫だよ椿君」

「そーだぞー。あやのがこう言ってるんだから早く食えってヴァッ」
「……………」

あやのさんとみさおの保障はあっても俺には一步の勇気が出せなかった。

「しょうがないな。じゃあ椿っち、あーん」

「へ？あ、ああ、あーん…ってちっがーう！」

「ちえっ、つまんなーい」

由佳はスプーンを自分の皿に戻す。

「…たく、こいつ最近やたら俺に近づいてきてる気がするけどどういいうつもりなんだ……。」

「…なら私たちが先に一口食べて椿先輩はその後食べたらいんじゃないすか？」

「……………それもそうね。」

それじゃ、みんな揃っていただきます」

『いただきます』

かがみさんに続いて俺以外はカレーを口に運ぶ。

…この反応で美味しかったら食よっかな。

『ベビィブルバツ！？』

突如、全員が悲鳴をあげた！

「っ！？」

い、いったい何が起こったんだ！？

「し、し、舌がー！！」

ひよりが舌を抑えながら叫ぶ。あまりの痛さに全く関係ない眼鏡までもが割れた。

…この時、俺は同じような光景を過去にあったような気がした。
たしか家庭科の実習で…。

「…………あ」

思い出した。

あのゼリー？を作ったのはたしか俺だったなあ…。

「ベフアアアアツ！」

みさおは走り回って洗面所へ。

なんだかデジャヴな気分がします。

「キヤアアアアツ！！」

俺は反応を見た後に食べようと思いました。

「オエエツ！！ゲホツガホツ！！」

しかしこんな……。

「ヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァヴァーッ！！」

こんな惨劇を見た後にいたい誰が食べようと思うのでしょうか？

「っ、椿ぐーん！」

「へ？ う、うわあああああああつ！？」

僕は口の中が腐ったように感じました…。

「……………」

午後10時、ようやく落ち着いてきた。

みんなも自分たちのいる部屋でゆったりしているだろう。

あやのさんとパティ、ひよりは意識が多少すっかりしてから帰ったが由佳は泊まるとのことです。部屋割りには迷った。

まあそれは後で報告しようじゃないか。

ともかく今は横になりたいのさ…。

しかし今日に限ってあんな現世では拝めないような代物を食べさせられるなんて……。

「桃原君、起きてますか？」

「……こなた、どうした？頭痛いのか？」

「い、いえ、そうじゃないんです。

ただ教えてほしくて…」

「何を？」

「つかささんに聞いたんですけど、

わ、私が最初に桃原君の家にいたんですよね」

「ああ、そういえばそうだな」

「ど、どうして私が桃原君の家にいたんでしょう？」

……………

……………

……………

「どうしてなんでしょう？」

「え、あ、わ、私に聞かれても……」

「あ、ごめん。俺にもいまいぢわかんなくて。」

確かこなたは男の子と一緒に暮らしてみたいと言った気がするんだけど……」

「お、男の子といい一緒にですか！？」

「で、でも他にちゃんとした理由があったと思うから安心して」

「はあ…そうですか」

しんみりとするこなた。

まあ実はそれしか理由がないってことは黙っておくか。そして話は続く。

「あの、私のこともっと教えてもらえないでしょうか。前までどういう風なのか気になって……」

これは教えてもいいんだろうか……？

ただどこなたがオタクでいたずらっ子っていうのは、今のこなたにはキツイかもだな。

けど潤んだ瞳が俺に向けられて断る状況ではなかった…。

「あんまり…シヨック受けないでね……？」

「？」

俺はこなたがどういう人間か知る限りを全て話した。

一応俺の話術で痛い単語を軽くしたのだからあまり効果は出なかった……。

70話 誰もが笑顔で…

「ーってというのが前のこなたなんだけど、理解できた？」

「な、なんとか理解はできました。」

……つまり簡単に言うなら私はオタクで馬鹿だったということですか……？」

「ま、まああくまで簡単に言えばそうなる…かな？」ちよいと曖昧に答える。

「……でも桃原君の話を聞いてると不思議な感じがします。」

サバイバルとかアルバイトのこととか初めて知ったのに体が覚える感覚がありますから……。

たぶん今日までずっと楽しい日々にはいたんですね」

こなたは記憶を失ったけど前向きに進んでいた。

早く思い出してほしい。

あの頃みたいになまた元気に笑いたい……。

そう思ってたこなたの顔を見たときに首からぶら下げているアクセサリーがあつた。

「こなた……そのアクセサリー……」

「あ、これですか？」

…実は私にもよくはわからないんですけど
なんだかとても懐かしい気がして……」

「……………」

それは紛れもなく俺がこなたの誕生日にプレゼントした三日前に渡したネックレスだ。

こなたはまだ身につけていてくれたんだ。

俺はそれが嬉しくて

でも逆に切ない気持ちが入り込んできた。

俺にしか知らないからか、それとまた単純にこなたが可哀想だからなのかは

俺にはわからなかった……。

「……こなた、それさ大切にしろといってくれないか……？」

「え？」

「そのネックレス、お前のことをその……、

“大切に思ってる奴”からのプレゼントだから……」

「“大切に思ってる奴”……ですか？」

「……ああ」

「……そうですか。」

私にもそう思ってくれる人がいたんですね……」

こなたはぎゅっとネックレスを握った。

「今日はありがとうございました」

こなたは深々と礼をする。

「いいよ。どうせ明日記憶が戻るんだから」

「……すみません、私のせいで桃原君が戦うことになってしまって

……」

「……こなた」

「はい？」

「やっぱり俺のことは下の名前で呼んでくれないか？」

「え、ですが……」

「……」

やっぱりまだ打ち解けてないのか……。

俺は黙ってこなたを見つめる。

もう一度名前を……。

“椿”の名をこなたに言ってほしい。

前みたいに呼んでほしい。それは今望んではいけないのだろうか……。

「じゃあ私はもう寝ますね」

「ああ、おやすみこなた」

こなたは二階の階段に行きかけるとかがみさんの声が聞こえる。

「……あ、こなた。あんたまだ起きてたの……」

「す、すみません。ちよつと気になることがありまして……。それではおやすみなさい」

階段をあがる音がある。

そのあとにこつちに近づく足音が続くように来る。

「椿君……」

かがみさんは少し哀しそうな顔をしていた。

「かがみさん、どうかした？　顔色悪いぞ」

「うん……、ちよつとね」

「？」

いったい何があつたんだろう？

「……椿君はどこにもいかないよね？」

「……えっ？」

一瞬ドキツとした。

「あ、あれ、私何言っただろ……」

椿君はどこかになんて行かないのになね」

かがみさんは笑顔になるが声が涙声になっていた。

「でも、なんだか不安が渦巻いてて……、椿君に違和感を感じるから

……」

「……………」

本当はかがみさんの勘は当たっている。

明日俺が負けたらここには存在できない。

もう俺の瞳にみんなの姿は映し出されない。

でも不思議にも俺は負ける気がしなかった。

だから俺はこんなにも冷静でいられるのだろうな……。それに明日は俺が勝てばいいだけなんだ。

わざわざみんなに負けた時の条件を言っただけで不安にさせることなんてないんだ。

「大丈夫。俺はちゃんとみんなの側にいるよ」

「……………」

かがみさんはまだ自分の勘が気になって信用できないという顔をしていた。

しょうがなく俺はかがみさんの手を握る。

「えっ、な、なに？」

かがみさんが頬を赤らめる。

俺もたぶん相当りんご状態になっているだろう。

だがそんなことを気にせずにかがみさんの手を強く握った。

「約束」

「へ？」

「約束するよ。ちゃんここにみんなが集まってわいわい騒いでもう遊ぶ」

「……………わかったわよ」

かがみさんはそれだけ言っただけで部屋に戻っていった。

「桃原、準備はいいか？」

「……ああ」

俺はカプセルの中でいろいろと調整する。

それをこなたや他のみんなが外でハラハラしながら見守る。

「じゃあゲーム内に入って泉の記憶を取り戻してこい！」

俺はスタートを押して現実から離れていく。

「……着いた」

もうあとには退けない。

負けたら死、勝ったらこなたの笑顔、

俺には何にも利益がないかもしれないが大切な人のためだったら俺は……。

「くつく、ようこそ」

この不気味な笑い方、

低い声、

姿は影で黒色のみ、

間違いなくあいつだ。

「くつく、それじゃあ早速殺り合おうか。
待ったなしだ」

モニター側にこなたの心配する姿が見える。

……待つてろよこなた。

俺が必ず思い出してやるからな！

「よし、こい！」

ドンッ！

「……………えっ？」

一瞬だった。

一瞬で勝てる自信がもろいガラスのように砕け散った。
奴の腕が俺の胸を貫いていた。

「あ……………が…っ！？」

何が起こったかわからないまま俺は体のバランスを保てなくなりゲーム世界の地面に倒れた。

「くっく……………」

俺を見下す影。

そのむこうには霞んで見えるこなたの姿があった。

……………泣いている。

こなただけじゃない。

由佳もかがみさんも全員が何かを叫んでいた。

…聞こえない。

声がゲーム内には届くはずなのに俺にはもう何も聞こえなかった…。
…。

俺のせいでみんなをあんな顔をさせている。

それがどうしようもなく辛かった…。

ごめんね、みんな……。

ごめん……。

第71話 万に一つ

「…………たぞ」

「桃…………いたぞ」

声が聞こえる…。

「桃原、着いたぞ」

バツ！

勢いよく体を起こす。

目の前には車の天井があつた。

運転席には店長がいた。

じゃあさつきまでの…。

「…………俺ってば眠っちまうたのか」

気づけば汗だくになっていた。

外にはもうみんなが降りて俺を待っていた。

俺は慌てて出た。

「あ、やっと椿っち起きた」

そこにはみんなの泣き顔じゃなくて笑顔があり、安心した。

「わ、悪い。なんかつい眠っちゃって…」

「ほら、みんな。椿君来たんだし行こ」

かがみさんは先頭を行きみんなもそれについていく。俺もその一つとなる。

さっきの夢なんか関係ないんだ。
正夢になんかなくてたまるか……！

俺は昨日と同じように

ゲームが置いてある部屋に入る。

だが部屋は薄暗く見えて恐怖を増加させる。

そして俺にとってあの楽しそうに見えたゲームはどこにもなかった……。

「じゃあ桃原君……スタンバイを」

竹本さんは最終調整を終えたカプセルに案内する。

俺は震える手でカプセルを開ける。

ビビってるなんて情けないな……。

みんなに見られたらマズイ。

俺は無理矢理手を押さえ込む。

「っ、椿君」

かがみさんがみんなのいるところから声をかける。

「……無理しないでね」

やはりまだ不安が吹っ切れていないのか、

いつもの元気が見られなかった。

「約束、しただろ？」

「……うん」

みんなの顔をみたあとにカプセルに入り、ヘルメットとシートベルトをセットする。

準備を進めていきキャラは同じく“デュエリスト”を選ぶ。

さっき竹本さんから聞いたのだがこの職業は剣士などの実力勝負ではなく

何のカードが出るかわからない運任せの勝負だという。

つまり確実にいくなら格闘家や剣士にするべきだと言われた。

だが俺はあえてコレを選んだ。

あの夢が気になっているからだ。

たぶん実力勝負だったら

夢と同様に瞬殺されるだろうと思った。

だからこそ未来の可能性があるやつを選んだんだ。

「……じゃあこなた、みんな、行ってくる」

「頑張つて、つ……、桃原君……」

こなたは一瞬下の名前と呼ばうとしたが言い換えた。やっぱりそんなに簡単にはいかないよな……。

俺はスタートを押して幻想世界に飛んだ。

「……ここは？」

前に来たのはたしか荒野だった。

だが今回は全く違った。

空は暗く空気は淀んで見える。

そこに面影なんて言葉は存在しなかった……。

「くつく、楽しみにしていたよ、桃原椿……」

振り返ると全身が黒色の人形がいた。

“奴”だ。

「……そんな形になるなんて知らなかったよ……」

「くつく、人の形の方が君も戦いやすいだろ？」

「……ありがたいな……」

「……………」
「死んじゃうのにやけに冷静だね……」

「なんだか……負ける気が全然しないからな」

「くつく、大した自信だ……」

言い忘れてたけどこのゲームに僕が造ったアレンジ魔法をかけた。
た。

約束通りこっちで死ねばそいつは意識が戻ることはない魔法をね……

……」

……もはやなんでもありだな。

変な改造魔法といいこのファンタジー的な状況といい……。

でもそれは全て目の前で起こっている現実なんだ。

そこを認めなかったら俺はそこにいるこなたたちを見捨てるってことになるんだ。

そんなの絶対嫌だ。

『いやなことがあっても支えてくれる人を見つけなさい。その人が一生に最高の宝物になるから』

母さん……

やっと見つけたんだ。

二年間高校を無意味に過ごしてきた俺なんかがやっと大切な人達を見つけることができたんだ。

支えられるばかりだったけど今度は俺が支えたい……。失敗したらマジでヤバイけどいいよね……。

「お祈りは終わった？」

「……おかげさまで」

「くつく、でもそんなことをしても意味はないよ。
真の神は存在しないのだから……」

「まあどちらにしても君は結局負けるだろうけどね」

「……こなたが待つてるんだ。
そろそろ始めようぜ……」

「ふ、お望みとあらば……」

両者はその場から一步も動かずに構える。

向こうの職業は神様、

武器は杖と魔法。

ここまで最強が相手だったら正直言つとワクワクしていた。
命のやり取りだというのに今は不安の欠片などなかった……。

「制限時間は一時間だ。」

勝ち負けに関わらず一時間経ったらこのオリジナルステージは爆発する。

つまり勝つだけでなくここからリタイアしなければお前は死んで魔法によって意識が奪われてしまう……。

「最高だろ？」

「……考えようによつたらな」

「くつく、あとは前に言ったが僕の体を壊せば記憶は戻って君の勝ちだ。しかし君が死んだら君の負け……。」
今のうちにみんなに挨拶しといたらどうだい？」

「……あいにくみんなは俺が敗けた時のことを知らない。
知る必要なんてないからな」

「……まさか…、あの少女より力は劣っているのに本気で僕を倒す
気にいるとはな……。」

力量がわかっていない証拠だ……」

「……わかっているさ。
けど俺は天才かもしれないぜ？」

「天才か……。」
いくら1つの才能と99の努力をしても君は」

「違うな……」

「……なに？」

「“本物の天才”は、
80の才能と20の努力ってことを見せてやる……」

……正直俺はそんな凄い奴ではない。
どこから見ても普通の一般人だ。
だがそんな奴でも奇跡は起こせる。
万に一つの奇跡を……。」

「……無理だよ……。」
現に君の勝率は0、4%だ。

限りなく勝敗は決まっている……」

「それを覆すのが天才だ」

「そこまで自信過剰とは……。
なら見せてもらおうよ……。
天才の実力を……。」

第72話 光

孤独な世界に衝撃が起こる。

俺はいきなりの先手を取られ身を引く。

敵の開始同時に夢と同じ素手の突きを一発。

思った通りだった。

怯まずに俺はまず最初のカードをひいた。

「……二丁拳銃か」

カードは光を放ち武器へと変化する。

なるほど、思った以上に面白い能力だな。

俺は両手に構えて矛先を敵の顔面に照準を合わせる。ドンッ！ドンッ！

二発撃つが簡単にかわされると同時に向こうは呪文詠唱をする。

「江東に集いし要、汝が煌めき疾風を喰らい尽くせ…… “マダム

”！」

「げっ！」

一直線にくる衝撃波を横っ飛びで慌てて回避する。

衝撃波はそのまま土をえぐり彼方に消えた。

「……避けたか」

な、なんなんだこれでたらめな力……！

一発でも当たったらアウトじゃないか……！

「くそっ！くそっ！」

俺はまた銃を撃っていくが軌道を読まれているのか、かすりもしない。

「ぐっ……」

「どうした？手も足も出ないのか？」

こ、このままじゃ駄目だ！

俺は二丁拳銃を捨てて次のカードをひく。

「モンスター“ペガサス”」

よし、これはなかなか期待できそうだ。

すぐにカードをその場に出して降臨させる。

その姿は神々しく、まさにペガサスそのものだった。

「ほお…」

ペガサスは敵を勢いよく突進する。

その速さは音速の領域だった。

しかし、

「…遅いな」

ズバッ！

「えっ？」

一撃で白の翼は墜とされてペガサスは消滅した。

「うそ……」

「一つ教えといてやろう。そのカード、十枚が限界だがどれもクズだ。僕に勝てるカードなんて一万分の一にすぎないだろう」

っ、強い…！

でも…格ゲーならこなたに嫌と言うほどやってきたことがあるんだ…！

落ち着くんだ。

実際こいつはこなたより弱い。

ただ能力にすがっているだけにすぎない。

だから隙は必ず出てくる！俺は三枚目のカードをひきそいつを見る。

「そのカードを使わせる前に潰す！」

杖から炎がでてくる。

詠唱なしで出せる一種の魔法だろう。

俺はすかさずカードを使う。

「ま、魔法防護壁！」

カードが光り、透明の壁が炎を遮断する。

「ちょこまかかわしやがって……！」

向こうはだいぶ頭にきているな。

だったらこっちはおくまで冷静にだ。

大丈夫、勝てる。

そう自分に言い聞かせた。

残りのカードは七枚、早めに決めないとこっちが危ない。

ここは速攻で一気に決めるしかない！

四枚目のカード。

「……これは……サッカーボール？」

俺は心底驚いた。

まさか自分の得意なもんが出るとは予想外だった。

しかしどうやって攻撃するんだ……。

「……なんだ、その武器は？」

そうか、あいつはサッカーボールを知らないのか。

だが知らないからといってそれがチャンスになるはずがない。

「どうやら貴様も使い方がわからないようだな。

悪いがもう終わりにしよう……。」

「……なっ」

やつの周りに空にあつた雲が集まってくる。

かなりでかい魔法をぶっ放つつもりだ！

ならまだ捨ててないさっきのカードで！

「ザルガサイエント！」

「魔法防護壁！」

雷の槍が魔法防護壁に激突する。

激しい火花が散り雷の槍は消えた。

「よ、よし、勝った！」

「まだだ……」

消えた雷の槍の視角からさらに最初の衝撃波がきた。
バーンッ……！！

魔法防護壁が破られ衝撃波は一気に襲いかかる。

「しまっ…！」

今からカードを出しても間に合わない！

俺の体は宙を舞い衝撃波によって吹き飛ばされた。

「椿っち！」

「椿君！」

モニター側では椿が吹っ飛ばされて由佳とつかさの声色が変わった。そしてこなたは瞼を閉じて祈っていた。

「……大丈夫だよ、こなた」

そんなこなたを見たかがみはそっと抱き寄せる。

「大丈夫、約束したんだから……」

「……はい」

「み、みんな！アレ見て！」

みさおがモニターの端を指す。

そこには血まみれの椿がいた。

「っ、椿君…！」

「ひ、ひどいケガ…！」

みなみちゃんは見るのが辛くなるくらい直視できなかった。

「な、なんで！？ ダメージをくらう代わりに疲れがでるんじゃないかったんすか！？」

なのになんで椿先輩があんな………！」

「おそらくLordの仕業だ……」

そうじろうは齒軋りをたてる。

それほど自分が無力なことに腹が立っているのだ。

（桃原君…！）

こなたは涙滲む眼をこすりまた手を合わせて祈る。
桃原君…、これ以上無茶しないで……！

「ぐ……が……」

ヤ…ヤバい。

今の攻撃まともに受けちゃった…。

左腕が上がらない……。

腹も相当イッちまった…。呼吸すら苦し…。い……。

「くつく、もう虫の息だな…」

くそっ…たれが…！

俺はよろけながらも立ち上がる。

「いい加減楽になれよ…」

“夢を諦めたら後悔で押し潰されちまう。

だから楽になんかなれないんだ…”

あるとき俺は自分の言葉に嘘はついていない…！

偽りなんかない…！

だから俺は…！

「俺の…今の夢…は、こなたの記憶を取り戻…すことだ…！

だから…ら、俺は諦めない…！自分が納得できるまで諦めない…！

…！！

「戯れ言を……」

ブツブツとなにかを詠唱している。

また強力な魔法か、それとも物質強化攻撃か、

どちらにしても俺が生き残る可能性は零に等しい…。

だ
け
ど
ま
だ
カ
ー
ド
が
あ
る
ん
だ
…
。
右
手
で
カ
ー
ド
を
ひ
く
。
も
う
力
が
入
ら
ね
え
…
。
こ
れ
が
最
後
だ
。
頼
む
ぞ
…
。

第73話 ラストエンディング

「やはりまだ子供か……。弱く儂く、そして脆い……」
「ぐっ……」

俺は痛む手にかまわず動かす。

その行く先にはまだ可能性があるんだ…。

だから…届け…！

「もう止める。お前の負けだ」

「まだ…参ったなんて…ゴホッ！……言ってねえだろうが…！」
「……ならば言わせてやる」

ズンッ！

「あがつ…！！」

杖が俺の右腕を突き破る。激痛が走り、俺は転げ回った。

「これでもまだやると言うのか…？」

杖が今度は心臓に向けられる。

「…う……ぐ……」

尖端からは圧力が発せられて俺の体が灰になっちまうぐらいだった。

動かない両手。

息も苦しい。

痛みが俺を恐怖に落としていった。
だが…。

「悪いがな…、カードを使わずに死ぬ気はない…！」「ヒュンッ。

俺はさっきまで握っていたカードを出す。

ずっと離さなかった逆転の一手を…。

「な、こいつまだ…？」

「これが……俺の最後だ」
カードは今まで以上に輝いて俺の視界を奪った。

「きゃっ！」

「な、何が起きたの!？」

「わ、わからない。」

だが桃原がカードを使った瞬間すごい光が……!

全員の視界がモニターを通して白く塞がれる。

やがて光は薄くなり眼も開けられるほどになった。

方向もだんだんわかってきてみんなは自分が今いる場所が安全かを確認する。

「あ、ああ……」

しかしかがみさんはモニターをずっと凝視しているとそこには言葉にしてはいけない光景が広がっていた。

「椿君!？」

「つ、椿先輩!!?」

「……うそ……でしょ……?」

椿の腹に杖が突き刺さっていた…。

血は吹き出してもはや見るにたえない状況に陥った…。

こなたは力が抜けたように座りこむ。

「わ、私のせいで……」

一線の涙が音を立てずに流れる。

「私のせいで桃原君が……」

「ち、違うよ!こなっちのせいじゃないよ!

それに椿っちが負けてもなんにも起こらないんでしょ!?
だったら……!」

「違うんです…！」

由佳が最後まで言いかけた時に竹本さんが重ねる。

「それは違うんです…、萩野さん」

「どういう…こと…？」

由佳は理解についていけず答えを求める。

他のみんなも同じだった。

「全員、落ち着いてよく聞いてください…。」

これはさつき桃原君がゲームをする前に僕に言ってきたんですが、実はこの戦いには負けの条件もあったんです…」

「ま、負けた時の条件…？」

ゆたかはおそろおそろ聞く。

「……はい。」

それは、未来を奪われることなんです…」

「み、未来？」

「具体的に言う意識を完全に奪われ、二度と動けなくなります…」
『なっ！？』

全員が驚きを見せる。

「そんなっ！？」

だって椿君言ってたじゃない！

負けても何も起きないって！

そうでしょ竹本さん！」

かがみさんは冷静をなくして竹本さんにすぎる。

だが竹本さんは目線を合わせなかった。

まるでかがみさんが言うことが間違っていると言っているようだった…。

「…椿君」

こなたはモニターを見上げる。

昨日見た椿君の笑顔。

あれは全部偽りだったんだ…。

私たちに知られたくないから…。

「も、桃原君…、君はそこまであなたを……」
そうじろっさんが不器用に涙を流す。

しかし重い空気の中、あやのが異変に気づく。

「ちよつと待って……」。

なんだか様子がおかしくない…？」

あやのさんに言われて冷静にモニターを覗くと……。

「な、ぐふっ…！」

杖が俺の体を抉る。

いや…、元俺の体を。

「き、さま…！ 何を…！」

さっきまで俺が使っていた体で喋るLord。

もう何も抵抗はできないくらいボロボロだった。

「……物体交換の魔法を使った。」

これは本来、体を仲間同士で交換する魔法だが敵とできるとは正直不安だった。

だが、成功しちまったみたいだな……」

俺は杖を抜いてもう一度構える。

「さて…どうする？」

俺が今使っている神様の職業は実際使うことができない。

だから俺は魔法は一切使えないが杖なら使える。

対するお前は両腕、そして腹を壊されてもう長くないだろうな」

「ぐ…！」

「お前の負けだ…、バカヤローが」

「ヤッタ！ 椿が勝つタ！」

「それじゃあこれでこなちゃんの記憶が…！」

「ああ！ 戻るんだ！」

伝説の少女Aの記憶が戻るんだよ…！」

その場にいたみんなが歓喜した。

これ以上に嬉しいことはないくらい喜んだ。

もう…辛い思いで待たないでいいんだね？

椿君…。

かがみさんは涙を拭って笑顔になる。

「やった！ やったな桃原！」

梨原から通信が来る。

「ああ、なんとか…。あとはあいつに一撃かまして終了だ…」
梨原と話しているとかさやみさおが割り込む。

「椿君やった！ やったね！」

「さすがじゃねえかー！見直したぜえ！」

「あはは…、でもちよつと疲れた…」

ふとかがみさんがモニターに映る。

その顔には涙の跡もあったが今は笑顔だった。

「椿君の…バカ。」

どうして言ってくれなかったの…？」

「……ごめん、みんなに不安を持たせたくなくて…」

「…でもそれが…椿君だからしょうがないね」

かがみさんは納得するようにため息をつく。

「ククククク……、ゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラゲラ
ッ！……！」

「っ！？」

動けない体で不気味にあざ笑うLordに俺たちはさっきまでの喜びが一瞬で消えた。

「死ぬのは君だよ……」

第74話 らきすた

「…どういう意味だ？」

「クククク、君はまだわからないのか…？
記憶が戻る条件を…」

「条件……だと？」

「僕は言ったはずだよ…。“僕の体を壊したら彼女の記憶が戻る”
とね…」

「……っ！」

店長は何かに気付いたらしく目を見開いた。
俺たちはそれを見て心がざわめいた。

「くっく、今ごろ気づいてももう遅い…。取り返しがつかないんだ
から」

不敵な笑みをこぼす。

…なんだ！？

俺は何を見逃しているんだ…！？

「まだ感づかないのか…。なら教えてやるっ…。
君は今誰の体を使っている？」

誰のだと…？

「……………っ！！」

「そうか…！」

椿っちは今敵の体を使っている！

だから今のあいつを倒しても何も起きないんだよ！」

「そんな…！！ 椿君！」

元に戻せないの！？」

俺は周りを見て役にたちそうな物を探すがここは奴が作ったゲームの世界だ。

そんなアドリブはなかった…。

「だ、だめだ……………」

打つ手がない……………！」

「そ、それってつまり…！」

『“椿君は自分の体を壊すしかない！？”』

「そ、そんなことしたら椿君が死んじゃう！」

「で、でも他に方法が……………」

くっ…、冷静になれ！

クールになるんだ！

この状況を絶対変えないと！

「無駄だよ…、君の目的は彼女の記憶を取り戻すこと…。」

しかしそれは君が死ぬ以外どうしようもないのさ！
ゲラゲラゲラッ！！！」

く…そつたれ……！

「さあ、最初に言った通り制限時間は一時間、残りは五分だ。
迷っている暇はないよ！
アハハハハッ！！」

ボンッ！！！

奴は跡形もなく消え去った。

そしてこの世界に一人俺は残された……。

考えるしかない…！

こいつの体を壊せば記憶の結晶はこなたに戻る。
だがその体は俺が使っているから壊すと俺が死んで
現実の意識が途絶えてしまう。

リタイアは奴の体、つまり俺が使っている体を壊さないとできない
ようにしてある。

俺が死なないように体を壊すなんて不可能だ。

同じく壊した瞬間にリタイアなんてできるわけがない。

……つまり俺が死ぬか死なないかでこなたの記憶の行方が決まる…。

……ちよつとまでよ。

たかが記憶だぞ…？

そんな過去のためになんでわざわざ俺が死ななきゃならないんだ…。
命より大切なものなんてないんだ。

結局人間最後は自分が可愛いんだよ…。
昔ならそう考えるだろう…。

けど俺は変わってしまった。
だから

昔の俺に……さよならだ…。

「みんな……バイバイ……」

俺はモニターで全員の顔を見て最後の挨拶をする。

「つ、椿君……？」

あやのさんはわけがわからないという顔で俺を凝視していた。
他のみんなもそれは同じだった…。
そして俺は杖を左手に向けた…。

バギツ！！！！

鈍い音がどこまでも響いていく…。

「ぐ……！」

「つ、椿君……？」

俺は自分で左腕を潰す。

「……こ、これが俺の答えだよ……」

「も、桃原……君……」

ただ呆然とするこなた。

大きい緑色の瞳…。

あの瞳を俺は今まで何回映っていたのかな…。

「……ど、どうしてですか……！」

どうして私なんかにために桃原君が傷つかなきゃならないんですか
！？

「……こ、こなた、昨日の夜……覚えてる……？」

「……はい」

「こなたはわからないけど俺ってさ、こなた以上にすっぱーバカだったかもしれない…。

それで最悪なくらいお人好しなんだ…。

泳ぎにあまり自信がないのに川に落ちた子を助けたりあんまり知らないクラスメートのために不良に頭を下げたりしててさ…、

でも“これ”が俺なんだ。だからこなたの記憶はちゃんと取り戻すよ……」

「………そ、そんなのおかしいです…！

桃原君は狂ってます…！

人間は自分が一番のはずです………！」

こなたは涙を流しながら言う。

俺を止めようと必死に…。

でも答えに変わりはない…。

「………俺って、お人好しだから…」

俺は諦めたように笑う。

もうどうすることもできないのを知っているから…。だから最後は怖い思いを隠すために笑った。

みんなを見ていくと俯く影があった。

「かがみさん…」

「……嘘つき」

かがみさんも涙を流していた。

いや二人だけではない。

みんな…泣いていた…。

「椿君の嘘つき…！！

昨日言っただじゃない…！

どこにもいかないって……。

昨日ちゃんと約束したじゃない！

なのになんでよお………！」

「……ごめん」

「……ごめんじゃないだろバカヤロー……！！
椿がいなくなることはないじゃねえかあ……！」

椿がいなくなつちまつたら私達どうしたらいいんだよお………！？」
みさおがポロポロと涙を落とす。

どうしたら……、

それはおそらく我が家のことだろう。

家主がいなくなればこなた達はもうそこに住むことはできない……。

「……最初の四月に戻るだけだよ。

俺が関わってないみんなが普通に過ごしてた日々………」

「そんなこと言わないでよお………！」

「つかさ……覚えてる？」

サバイバルの時にくれたお守り……。

今も持つてるんだけどアレさ………あんまり効き目はなかった……でも
めちやくちゃ嬉しかった……。

つかさが俺のこと心配してくれて………」

「うん………うん………！」

「みなみちゃん……、みなみちゃんはクールでカッコいいってイメージがあつたけど本当はとても優しく可愛らしくて……、俺はどっちのみなみちゃんも好きだよ………」

「………」

みなみちゃんは黙って俯く。
そして落ちる雫がみなみちゃんの気持ちを表していた……。

「みさお、あやのさん……、能天気なみさおを見るとなんだかこ
つちまでだらけてしまいそうだった。でもそういうの悪くなかった
……。
なんだか楽しくて……。

そんなみさおにあやのさんは面倒見良くしてて穏やかで、俺も一緒
にいたらホッとして……。
けど、もうちょっとあやのさんのこと知りたかったかな……。」

「そんなもんあとでお喋りしたらいいじゃねえかあ……。」

「そうだよ……、
だから帰ってきてよ……。」

「パティ……ひより……、二人が時々遊びに来てくれてこういう奴もい
るんだなあって知ることができた……。それに二人とも考えてるこ
とはよくわからないけど自分の思った道を進んでてカッコよかった
……。

羨ましく思えた……。」

「椿先輩……。」

「……ワタシはイヤデス……！」

こんなカタチでワカレルなんテ絶対いやデス…………！」

「……ゆたか、もう二度と独りだなんて思わないで……。
ゆたかの周りには最高の友達と家族がいるんだから……。」

「ひつくぐす……」

「…梨原、ごめん。」

「ここで約束は終わりだ……」

「……せつかくお前とサッカーできるとおもってたのに……！ 夢だ
ったのに……！」

梨原は壁に拳を叩きつける。

「……由佳……、せつかく会ったのにまた離れちゃうな。
ごめんな……、観覧車の時にちゃんとした返事できなくて……。
でも感謝してる。」

「お前のおかげでまたサッカーをすることになったから……言葉にで
きないくらい感謝してる……。
ありがとう……」

「……椿うち……、私、椿うちが大好きだからね……！
今も気持ちは変わってないからね……！」

「……かがみさん、ごめんね。
昨日は嘘ついて……。」

「だから俺のことなんか忘れてくれてもいいよ……。
かがみさんにはいつも迷惑ばっかだったし……」

「……ヤダよお……！
椿君いなくならないで……！」

かがみは普段見せない顔で俺を見ている。

それは俺にとつてとても苦しく感じた……。

「……こなた、こなたがいなかったら今ごろ俺は教室の片隅で一人ご飯食べて帰って寝て……。

毎日が同じことの繰り返しになってた。

今まで照れくさくて言えなかったけど今なら勇気が出てくるよ……。

来てくれてありがとう。

これが俺のすべてなんだ」

「……っ、椿君」

「あはは…… やつと名前で呼んでくれた……」

「そんなのずっと呼んであげますから……！
だから……！」

こなたは泣きじゃくって言葉が出なかった。
たった一人のために泣いてくれる。

これほど嬉しい気持ちは俺にはなかった……。

一つ一つの違う色が重なってできた我が家、
それも今日で終わってしまう……。

たった2ヶ月。

形で表せないけどそれは並ぶことのない一番の宝物なのかもしれない。
い。

制限時間は一分を過ぎた。

時間が進むことに思い出される日常……。

『椿君ー、一緒にご飯食べようー』

『お姉ちゃんが椿君のために作ってきたお弁当が楽しみ』
『ば、ばか、つかさ！』

こ、これはみんなのためよ！

つ、椿君のために頑張って作ってきたんじゃないから』

『あ、こらちびっこ！』

唐揚げ取るんじゃないってヴァツ！』

『まあまあ、みさちゃん。まだあるからケンカはダメだよ』

『…ゆたか、はい割りばし』

『ありがとうみなみちゃん』

『ぐふふ…、これはまたネタのストックになる展開…！』

『ひよりもタイヘンですネ』

『あ、あの、早く食べないと昼休みが……』

『大丈夫だって、ねー、椿君。』

『…… つてチャイム鳴っちゃったー！』

『はわわ、早く食べないと…！』

『泉さんつかささん、』

そんなに慌てて食べたら……』

『…っ！詰まつ…！』

水！水…！』

『…… 楽しかった。』

『…… ホントに楽しかった。』

もっ…その一言で十分だ。

「桃原君…最後に聞いてもいいか？」

そうじろつさんが前に出る。

「君の気持ちを聞かせてほしい…」

「気持ち…?」

「…ああ、まだ君の気持ちは言っていないと思うんだ……………」

「椿うち……………」

「椿君……………」

「椿先輩……………」

「…………たしかにそうだよ……………」。

高校生になってから俺は一人になることが多かった。

その方が気が楽で自由だったからけっこう気に入ってたんだ…。

でも本当は一人より二人…。

こなたといて少し楽しいって思えた。

そして二人より四人…。

かがみさんとつかさが来て前より楽しくなった。

……気づけばゆたかやみなみちゃんたちが来てみんなという時間が一番になってた…………。

またみんなで…学校に行って些細なことを話したり…………屋上でお弁当をつまみあいしたり…………。

晴れた休みの日はどこか近くの公園で遊んで…………日が暮れたらまた遊ぼって言って…………、

手を繋いで笑いあって嫌なことなんか全部忘れて…………！

みんなと一緒にいたかった…………！！

ずっとこの関係が続けばよかった…………！！

俺は…まだみ…んなど別れだぐない…！！！！
まだ生きたい…！！！！」

『ピピピッ、残り十秒前』

「椿うち！！」

「椿君！」

「…最後にみんなの笑顔が見たかったな……」

「…椿…君……」

俺は杖を強く握り、

心臓に突き刺した……。

「……っ」

一瞬恐怖が襲いかかったが体が崩れ始めてからそれは無くなった。

もう手遅れだってわかっていているからだろうか……。

俺はすでにこのときは痛みなんか感じなかった……。

悲しみの方が大きかったからかな……。

薄れる意識の中でみんなの顔が見えた。

…泣きじゃくっていた……。

ホントに止まらないくらいみんな泣いていた…。

由佳やかみさんは涙を流しながらも無理をして笑顔をつくらうとしていたがやはり無理だった……。

とてつもなく辛い気持ちだがすべてを支配していたから……。

俺の中ではちよつと残念だったかな……。

でも……みんな、

“ありがとう”。

これだけは譲れない言葉だよ……。

体はついに全体が崩壊した……。

もう…俺はみんなを想うことはできない……。みんなを見ることは永遠に叶わない……。

“ピーーッ、桃原椿シグナルロスト”

俺は暗闇に包まれた。

みんなが声をかけても気づくことなく眠った……。。

第75話 あなたは今何をしていますか？

あなたは今何をしていますか？

何の夢を見ていますか？

心結んだ日々を覚えていますか？

私たちはあなたを忘れたりしません。

失ってから気づいた椿という大切な存在をずっと…。

こなたたちは入学時と同じように学校に登校していた。

しかし授業は頭に入らず、昼休みになりかがみとこなたは屋上に来ていた。

「なんだか…昨日のこととは思えないね…」

「そうね…」

こなたは無事に記憶は戻り全てが終わった。

だがその代価として大事な人が目の前から姿を消した。

心に浮かぶのはあの優柔不断の性格。

フワツとした軽い声。

そして世界一のお人好し…。

もう二度と会えないと考えると心が激しく痛んだ。

こんな辛くて寂しい思いをするならいつそのこと会わない方がよかったのかもしれない。

そしたら椿君はいつも通り学校に来て、

私たちは他愛もない話で盛り上がって……。

普通の日が過ごせたはずだった。

風が通り抜けて私に前へ進めと言っているようだった。
でも椿君は私のせいで……。

つ……つと頬に涙が流れる。

雫は地面に弾けて目に見えないほど小さな水溜まりがたくさんできた……。

「……つ、こなた、あんたまた泣いてる……」

「……え？ あ、ごめん……」

また泣いてしまった。

できるだけ笑顔でいようと思っていたのに……。

「……学校で泣いたら椿君に笑われちゃうよね……」

ごしごしと目を拭いて何でもないような顔をする。

だけどもまた涙が込み上げてきた。

「あ、あれ……？ ごめんねかがみ、すぐに拭くから……」

何回もこなたは擦るが止まる気配はなかった……。

頭ではわかっていても

それは止むことなく散り落ちた。

かがみはぎゅつとこなたを抱きしめる。

とても小さくて子供みたいだった。

守ってあげたい……。

そんな気持ちが生まれてきた。

「……かがみ？」

こなたは抱きしめられて体をかがみに預けていると上から冷たい何かが落ちてきた。

「……ごめん……私まで……」

こんなにもあの人が愛しいなんて気づかなかった。

強く頭に残る男の子は彼が初めてだった……。

「もう行かなきゃ……」

授業始まっちゃう……」

かがみはこなたを放して屋上から下に降りていった。

「……………」

なくした過去を取り戻したこなたは自分の罪を感じた。

大好きな人を犠牲にして自分だけが生きることが許せなかった。

こなたはベンチでうずくまるように泣いた。

それは今までで一番辛く悲しい泣き方だった…。

ずっと楽しい時間が続けばいいのに。

昔、心の中で願った思いは儚く崩れた…。

「私だけが幸せになるなんて嫌だよお……………」

チャイムが鳴り、ざわめきが聞こえていた廊下も静かになる。

運動場では一年が体育の授業を始める。

その中にはゆたか、みなみ、ひよりがいた。

こなたはじつと三人を見つめる。

三人とも表面上笑ってはいるが心は笑っていないかった。

それが手にとるようにわかる…。

こなたはフェンスの向こうを見上げる。

青い空がどこまでも続きその下では幸福の人が何人いるのだろうか…。

…。

椿君もまだ空の下にいるのかな…。

こなたはフェンスを乗り越えて高さ十数メートルから下を見る。

死ねば私は解放されるのかな…………。

「……………あれ？」

つかさ、こなたどこいったかしらない？」

放課後になり一緒に帰るためかがみが隣のクラスまでくるが姿が見えないのでつかさに聞く。

「こなちゃんなら昼休みから見てないけど……………」

「ええっ？」

「じゃああいつまだ屋上にいるのかしら」

かがみは教室を後にして

屋上に行こうとすると

「あ、待ってお姉ちゃん。私も行く」

つかさはかがみの跡についていった。

ドアを開けて空が広がる。

「こなたー？ いるー？」

見渡してみるものの姿はどこにもなかった。

「いないわね…」

「お姉ちゃん、屋上から見渡せばどこにいるかわかるかもしれないよ」

つかさはそう言ってフェンスに近づいて下を覗いていく。

他にすることもないのでかがみはつかさとは逆の方から回る。

映るのは人、車、自転車。こなたはどこにもいなかった。

「こなちゃんどうしたんだろ…」

「……あいつのことだしちゃっちゃと帰ってるわよ。私たちも帰りましよ」

かがみは屋上から出ようとするとつかさがふとベンチの後ろ側のフェンスの前に立ち止まった。

「……つかさ？」

妹の不自然な行動にかがみは近寄る。

「お姉ちゃん……あそこのフェンスに引っ掛かっているハンカチって…」

それはまさしくこなたが使っていたハンカチだった。つかさは次に最悪の状況を想像するが恐ろしくてとても思いたくはなかった。だがあのハンカチが不安を消させてはくれなかった。

「ま、まさかこなたがそんな」

かがみは微笑しながらフェンスの下を覗く。

そんなわけあるはずがない。そうおもいながら行くとつかさはかがみの腕を掴みながら隠れるように見る。しかし、目の先にはもう二度と失いたくない大切な人が変わり果てた姿でいた……。

「う、うそ……！」

「あ……あ……あ……！！！」

「い、いやああああああああああああつ！！！」

花壇の上には血で包まれたこなたがいた……。

第76話 変わる世界

……なんで？

……なんで私の大事な人が消えちゃうの？

椿君…、こなた…、

もう私を支えてくれる人がいない……。

笑い合うあの時を描くことはもうできない……。

「こおらっ！！柊ー！なに寝とんねん！！」

「っ！！」

顔をあげると黒井先生がキリッとした目でこっちを見ていた。

あ、あれ……？

「ウチの授業で寝るなんてええ度胸……っってお前なんで泣いてるん

や」

「…え？」

気づけば私は見られたくない顔を晒していた。
慌てて隠しながら涙を拭く。

「なんや、怖い夢でも見たんかいな。しつかり頼むで！」

黒井先生は黒板に向き直り世界史の続きを説明し始める。

なんだか最近夢オチが多い気がするわね……。

かがみはポケットからハンカチを取り出した。

しかしそれがさつき見た夢に出てきたハンカチに一瞬見え、かがみは気がかりな心を残したまま放課後を迎える。

怯えながらかがみは隣のクラスに行く。

ドア越しからチラッと教室を盗み見する。

やっぱりいない…。

「っ、つかさ…、こなたは…？」

「え？ こなちゃん？」

こなちゃんなら昼休みから見えてないけど……」

「っ！」

心臓が激しく鼓動する。

かがみは慌てて屋上へ走った。

「お姉ちゃんっ！？」

つかさは不思議に思い姉の後ろを追いかける。

一歩一歩が重く息が荒くなってくる。

勢いよくドアを開けて一人の名前を叫ぶ。

「こなたっ！」

しかしそこには誰もいない。

かがみはベンチ裏のフェンスに目を向ける。

白いハンカチが一つ、

風に吹かれてパタパタと音をたてながら不気味に引っ掛かっていた。
踏み出したくない足が勝手に動く。

いやだ…！

見たくない…！

そう思っているはずなのに少しずつ花壇が視界に入ってくる。

「お姉ちゃん…？」

つかさはかがみより先にフェンスに近づいていった。

「だ、だめ！下を見たら…！」

しかし遅かった。

つかさはフェンスに手をかけて真下を覗く。

「こ、こなちゃん…」

つかさは信じられないという顔で固まる。

やっぱりアレは現実の未来だったんだ……。

かがみはつかさの元に寄り覚悟を決めて覗いた。
だがそこには予想とは裏腹の結果だった。

「おーい、かがみー」

「……なっ！？」

花壇から手を振るこなた。途中までは合っていたのだが最後だけは
状況が全く違うものだった。

かがみは誰よりも早くこなたの元に駆け寄った。

「な、なんであんなここに…！」

かがみは混乱して戸惑いを見せる。

「ん…、実は自分でもよくわかんない」

「…は？」

「いや最初は屋上にいたんだけど気付いたら花壇の上で寝てたんだよねー。」

それでさっき起きて上を見上げたらつかさとかがみがいたってわけ」

「……」

なんだかよくわからないがとにかく無事だったことにかがみは安心感を持つ。

でもこなたが今言ったことが正しいのなら

おそらく夢と同じことをしようとしたのだろう。

だがそこに誰かが邪魔に入った。

でもそれは誰？

誰がこなたを助けたの？

悩むかがみにこなたに似た影がクスツと微笑するが誰にもそれは見えていなかった……。

「やっぱり来ちゃったね……」

こなた、かがみ、つかさはある人物の家の前に立つ。

「でも今の私にとってこの家はなんだか自分の家みたいで安心できる気がする……」

表札には“桃原”という名があった。

一般より少し大きい家。

インターホンを押しても誰も出ることはない。

でも心のどこかで椿君がドアの向こうで待っていてくれると思ってしまう。

「……入ろっか」

こなたがゆっくりと鍵を開けて一歩を踏む。

かがみとつかさもそれに続く。

「ただいま」

返事が返ってくるなんて思っていない。
でも言いたかった。

声を出して言ってみたかった……。

「おかえり」

「……え？」

バツと顔をあげて男の子の姿を思い浮かべる。
だがそこには誰もいなかった……。

「こなた…、今の……」

かがみはこなたの服をちよいと引っ張る。
確かに聞こえた。

懐かしい感じの男の子の声が……。

「あれ、柊にちびっこ、つかさじゃん。

なに立ち尽くしてんだ？」

後ろからみさおが玄関に

入ってくる。

「……いや、なんでも……ない……」

気のせい……だよね？」

こなたは自分に言い聞かせた。

結局四人だけではなくゆたか、みなみ、パティ、ひより、由佳、あやの、店長、そうじろうさん、さらには椿君の容態を聞いた黒井先生、ゆい姉さん、白石、みゆき、あきらが家に来ていた。

「……桃原、大丈夫なんやろか」

「でも意識がないって相当ヤバイよね……」

「あいつ、どうしてそこまで…」

「…おそらく桃原君にとって泉さんは“大切な人”だったんでしょ
う……」

「…すごい人ですね」

みんなが心配をする。

それほど彼はみんなの中心にいたのだ。

「……………」

こなたは黙って二階にあがる。

男の子っぱい部屋に入り立ち尽くす。

この家にはたくさんの思い出が咲いている。
耳を澄ませば君の声が聞こえてくる……。

“ど、どうして泉さんがここに！？”

“それはダメ”

“ちよっ、こなた重っ…！”

“やっと名前で呼んでくれた…”

“誕生日おめでとう”

「うう……椿君……ぐすつ……」

こなたはネックスを握りしめて泣き崩れる。
できるだけ泣かないと決めたのにこの家には思い出がありすぎて我慢などできなかった。

たった一人がいなくなるだけで世界は変わったように思えた……。

触れる指、

落ち着いた声、

また君に会いたい……。

こなたは全てを捨ててでもその願いを叶えたかった……。

「こなた……」

かがみさんは陰でこなたを見守る。

あの子があんなに泣くとこなんて見たくなかった。

同じ辛さがのしかかる……。

…神様はほんとうにいるのかな……。

第77話 あの色をもう一度

椿君が意識を失ってから二日、桃原家に一本の電話がくる。

「もしもし…？」

「あー、なんといえればいいのかな…。俺、桃原の友達なんだけど

…」

この声は聞いたことがある。

確か梨原君だったつけ。

「えと…、どうしたの？」

「あ、その声はたしかB組の柊つかさか？ 桃原と同じクラスだよな？」

あ、向こうも覚えていてくれたんだ…。

それなら普通に話せる。

「それでなにな…？」

つかさは用件を聞くと、

「実は桃原の意識が元に戻るかもしれないんだ！」

「……え？」

今…何て言ったの？

私が理解していないのにも関わらず梨原君は話を進める。

「説明は今日の午後にするからみんなは学校休んでこっちに来てくれないか？」

「え、あ、あの、ちよつ…」

「それじゃ俺も今忙しいからあとでな」

そう言って一方的に電話を切られた。

よく話が見えない。

でもこれだけはわかった。

「っ、椿君が元に戻る…」

つかさは何回も呟いた。

本当に梨原がそう言ってたのか確かめるように。

そして嬉しさが込み上げてきて、

今の会話をみんなに話した。

つかさから知らせを聞いたこなたたちはすぐに他のみんなにも連絡を入れる。

そしてその日は学校を休み家にいるメンバーとみゆき、あやの、パティ、ひより、白石、そうじろうさん、店長、由佳がああのビルに集合した。

「みなさん、おはようございます」

こなたたちが部屋に入ってくるのに気づいた竹本さんはカプセルの最終チェックを終えて挨拶を交わす。

それに合わせてこなたたちもする。

「少しこちらに来ていただけますか」

竹本さんは一つのカプセルに案内する。

そこにいたのは、

「…椿君」

こなたを救った人物の名をかがみが呟く。

「彼の状態を見ていて少しわかったことがあるんです」

竹本さんは慎重に話す。

それをみんなは物音を一切たてずに黙っていた。

「彼は魔法で意識を奪われたことはみなさんご存知ですよね？」

「はい」

そうじろうさんは早々と答える。

「そこなんです、」

ゲームの魔法が原因ならばもしかしたらゲームの世界の治癒で椿君は治るかもしれないんです」

「……えっ!？」

「あくまでも仮定です。」

ですが可能性は高いと思います」

少し信じられないが

もうこれしか手はないのだろう…。

ゲームの治癒で椿君は治る…。

だがそんな治癒がゲームにあるのだろうか…。

「…それでどうしたらいいんですか？」

みなみちゃんが聞いてみる。

「実はこのゲームにミッション零があります。」

そこは全てのミッション中最悪なところなんです」

「…と言いますと？」

「つまり、難易度はMAX、わかりやすく言えばポケモンは知っていますよね？」

それでレベル5のモンスターがレベル80に挑むようなものです」

「…そ、そんなのどう足掻いたって無理じゃん」

こなたは経験があるため諦めかける。

「そ、それでそのステージがどうしたんですか？」

ゆたかはおそろおそろ聞く。

「はい、そこには大きな古時計があるんですがそれがかなり特殊なんです」

「特殊？」

「“古時計を鳴らせば願いは実現する”。

それがそのステージの奥にあるんです……が、

正直言いますとそこまでは絶対にたどり着けません。敵の強さは異常です…」

竹本さんはキツパリと言い切る。

それほど難しいというわけだ。

でもやらないと椿君は…。

「わ、私はやるわよ。」

負けたつてもうLordはいないんだしやり直しができるじゃない」

こなたが迷っているのを吹き飛ばすかのようにかがみは決めた。

「私も」

由佳もそれに続く。

他のみんなも流れに乗ったように賛成していく。

「……じゃあ私も」

最後にこなたも加わって全員が一丸となった。

「わかりました。」

ではカプセルを増やして九人でゲームをやってもらいます」

最初の説明では十人なのだが一つは椿がゲームと繋がっていないといけないためカプセル使用は全部で九個となった。

ここで重要なのはその九人を誰にするかだ。

全員が意見を出し合いながら一人一人決めていく。

「うん、いいんじゃない？」

「たしかにこれが一番最適だよな」

かがみとみさおは納得したように頷く。

メンバーはまずゲームのこなたを先頭としかがみ、由佳、みなみ、ゆたか、ひより、みさお、あやの、つかさがプレイをする。

店長やそうじろうさんはゲームの起動状態やいろいろとする竹本さんのサポートを必要とするためゲームには参加はしない。

「それでは九人はこちらに」

それぞれが各カプセルに入る。

こなたも入ろうとするが横に入っている椿をチラッとみる。
もうすぐだから…、

だからあと少し待ってて……。

こなたは深呼吸をしてカプセルでセッティングを進める。

「みなさん、準備はいいですか？」

通信から竹本さんの声がとどく。

私たちはOKをだしあい全員スタートを押す。
そして意識はゲームへと飛ばされる……。

椿君…、君の色をもう一度見せて……。

第78話 目指す場所

「みなさん……頑張ってください」

みゆきはカプセルに入った九人に祈りをする。

「……」

パーティも両手を合わせて同じようにする。

その姿はいつにもなく真剣だった。

白石や梨原はモニターに目を集中させる。

こなたはゲーム内に入りミッションに備える。

しかし、自分の体に異常があることに気づく。

「なに…このモヤモヤ…」

なにか不安が包んでいる、そんな気がした。

「……ザー…聞こえま……………泉さん……………応答…してください……………」

途切れ途切れにモニターから竹本さんの声が聞こえる。

こなたは時計についている通信を繋げる。

「竹本さん、なに？」

「や、やつと繋がった…！」

「……？」

「泉さん、今すぐリタイアしてください！」

モニターから竹本さんが慌ただしく言う。

「な、なに、どうしたの？」

こなたはあやしい空気を感じた。

椿君が消えた時のように…。

「実はこのゲームにはまだLordの意識を奪う魔法がかかっています！」

つまり負けてしまったらあなたたちは桃原君のように意識がなくなるんです！！」

「…えっ！？」

「他にも様々な妨害線があり現在泉こなたさん、柊つかささん、小早川ゆたかさん、日下部みさおさんにだけ通信が可能です！」

だからまだ魔法がかかっていること存じない人に伝えてください！

我々もやってみます！」

そう言って通信は切れた。

そんな…！

じゃあ早くみんなに知らせてリタイアしないと…！

こなたはその場から全員に通信をする。

しかしこちらからでもやはり不可能だった。

こうなってしまうたら手段は一つしかない。

みんなに直接会って言わないと…！

「……………」

けどなぜかそれは間違っている気がする。

椿君を元に戻したい気持ちと反しているからだろうか…。

ここで逃げたら二度と椿君に申し訳ない気がした。

私の記憶なんかのために頑張ってくれた椿君に…。

一分が経ちゲームが開催される。

こなたがとった行動。

それは古時計のある西に向かうことだった。

「ひ、柊、あやの、今入った通信って……」

みさおが怖怖とたまたま近くにいたあやのとかがみに尋ねる。

二人は黙ってうなずいた。

「や、やっぱりか……」

みさおは少しわかっていた。

ゲーム内に来たときになんだか嫌な気分がすぐれなかったから……。

「とりあえず竹本さんの指示に従いましょう」

かがみはみんなを探しに見晴らしのいいところまで歩こうとする。

だがみさおがピタツと足を止める。

「……私は嫌だ」

「「えっ？」」

みさおの唐突な言葉にかがみとあやのは思わず顔を見合わせる。

そしてかがみはみさおに説得するように言う。

「みさお……しょうがないじゃない。そうしないと私たちも危ないんだから」

「けどこのまま引きさがつちまったら椿のやつは絶対もどってこねえじゃんか！」

「それはLordが仕掛けた魔法を解いてから来たらいいじゃない」

「そんな魔法が解けるんだったら椿にかかっている魔法も解けるはずじゃねえか！」

「……………」

みさおの真面目な雰囲気と確信をついた答えに圧倒されて言葉を失う。

それはあやのも感じていた。

「みさちゃん……………」

そうだよね……、みさちゃんにとっても椿君は大切な友達だもんね……。

せつかくのチャンスを逃がしたくないに決まっている…。

あやのはそつとかがみの肩をポンとたたく。

「柊ちゃん、古時計まで行こ」

「なっ!？あ、あやのまで何言つてんのよ!？」

かがみはあまりのことに少しキレ気味になる。

「だつて見てよ…。」

みさちゃん、こんなにも真剣なんだよ？」

「で、でも…!」

かがみは反対する。

真剣なのは眼を見れば伝わってくる。でもだからこそ今は冷静になつて正しい判断をしてほしい。

二人とも椿君みたいになるのは嫌だから……。

「私もみさちゃんと同じ気持ちだからわかるの。」

それは柊ちゃんも理解できるでしょ？」

……わかつている。

椿君を助けないことも……。だけどやっぱり私は……。

「あゝイライラさせるな」柊は!

今自分がしたいことをすればいいんだよ!」

かがみはまだ迷っている。でもそれは仕方がないことだ。

決断には相当の勇気が必要なのだから…。

「…柊ちゃんは今、何がしたいの？」

「……………」

答えることができない。

自分と向き合えば道は見えるはずなのに…。

「みなみちゃん、私…怖くなってきた」

「大丈夫だよ、ゆたか。」

「私がちゃんと守るから」

二人はゲームのはしっこにいた。

運良くゆたかはみなみを見つけれぬまではよかったが、その後の通信で恐怖が一気に押しかわってきた。

「…ともかくみんなに会いに行かなきゃ」

「う、うん」

みなみはゆたかの手を取って森に向かって進む。

ぐしゃっ…。

「…へ？」

ゆたかは何かを踏んだことに気づいて片足をあげる。そこにはひよりの眼鏡らしきものがあつた。

「み、みなみちゃん、これ」

ゆたかは眼鏡を拾ってみなみに渡す。

「……う、うん、間違い…ないと思う」

二人は周りを伺うがどこにも姿はなかった。

まだゲームは始まったばかりなのに謎ができてしまった…。

「ゆたか、歩いていたらそのうち見つかるよ」

「そ、そうだよね」

ゆたかは不安を隠すために明るく振る舞うが、みなみにはわかっていた。

「ゆ、由佳ちゃん、どうする？」

つかさは混乱してどうしていいかわからずにいた。

「……竹本さんの言うことはたぶん正しいよ。」

でも…私は目の前に船があるなら不法侵入をしてでも乗るよ」

「だ、だけど…」

「つかさっちは無理しなくていいよ。」

これは本当に危険だから…」

由佳は寂しそうに言う。

それは覚悟を決めた顔をしていた。

「あとはさ、私に任せてつかさっちはリタイアしてて」

由佳はつかさの腕時計の横についているリタイアボタンを押す。
しかし、

“ 只今リタイアは不可能です。 目的を達成してください ”

「「えっ?」」

どういうこと?

なんでリタイアできないの?

由佳は何度も押すが結果に変わりはなかった。

「ま、まさか…」

つかさはあることを思い出した。

椿君とLordの戦いの時に椿君はリタイアはLordの魔法で
きなかった。

それがまだ続いているのだとしたら……。

「しょうがない…、つかさっちはここにいて」

由佳は走って南に向かう。それはこなたたちが目指す古時計がある
場所だ。

「ま、待って! 私も…!」

つかさは慌てて由佳の後を追う。

何もしないよりは由佳ちゃんを助けたい…。

「リ、リタイアができない…!?!」

竹本さんは嫌な汗をかく。

じゃあ泉さんたちも負けたら桃原君のようになるって言つのか…!?!?

「な、なんとかデキないんデスカ!?!」

「こつちから手は出せない…。そうなのだろう、竹本」

店長の問いにこくりと頷く。

「そんな…」

みゆきはカプセルの中を見る。

あの中にいるみんなが命をかけてるのに私は……。

「信じるんだ…!」

そうじろうさんが力強く言う。

「こうなったらこなたたちの力を信じるしかないんだ…!」

そうじろうさんはモニターをキツと睨む。

「信じる…こと……」

……… そうですね。

私達がみんなを信じないと駄目ですよね…。

そうじろうさんに続くように全員が顔をあげた。

――こなた、俺たちはここにいます。

――だから無事に帰ってこい…。

――そして桃原君…、そのときは君もいれて一緒に――

第79話 狂気

みさおとあやのは二人で古時計へと足を運ぶ。

かがみはそれを見送るように後ろから黙って見ていた。

「みさちゃん、本当にいいの？ 柊ちゃん一人だけ置いてきて…」

「いいんだってヴァ。それに私達だけでも大丈夫なんじゃねえの」

みさおは背後を振り向かずに話す。

「でも…」

かがみ一人を残すのに納得がいかないあやのは何度もかがみとみさおを見比べる。

「わ、私だって柊と一緒にいたいけどしょうがねえじゃん。

柊とは意見が合わねえんだから」

「……………」

あやのはこれ以上は言わなかった。

そしてかがみの視界から二人は消えた。

「…ゆたか、しんどくなったらいつでも言って」

「だ、大丈夫だよ、みなみちゃん。

まだ歩けるから」

しかしゆたかの足はフラフラ状態で説得力が微塵にもなかった。

どこかゆたかが休めれる場所はないのかな…。

みなみは辺りを見回すと一本の樹に注目する。

「……じゃあ私が疲れたからあそこで少し休憩しよ」

みなみは気を遣って森林の中でも特別大きい樹の下を指差す。

「みなみちゃん……」

うん、ありがとう」

ゆたかはみなみの優しさに気づいて笑顔を見せる。

やっぱりみなみちゃんは優しいなあ……」

「……………っ！

待ってゆたか」

「ほえ？」

みなみが樹の下に何かがいることに気づいてストップをかける。

「な、なにあれ……」

ゆたかは目を凝らす。

人じゃない、でもあれは生きてる……」

じゃあアレが……」

「ゲームに出てくる普通のモンスターだ……」

みなみが冷静に言う。

怖い……」

ゆたかは単純にそう思った。

「ゆたかはここにいて、私が倒してくるから」

「わ、私も一緒に……」

「ダメだよ……、そんな震えた足じゃ」

みなみはゆたかを座らせる。

「……ここに隠れてて」

「うう……」

「大丈夫、ゆたかは私が守ってあげるから」

心強い眼差しにゆたかは返す言葉がなかった。

今まで数えきれないほど助けてもらってきたのに私はまた……」

ゆたかは自分の不甲斐なさに苛立ちを覚えた……」

みなみは的に見つからないように音をたてずに近づく。

みなみの職業は弓術。

本来なら遠距離からの攻撃だが確実に仕留めるためにできるだけ寄っていく。

そして完全に射程に入ったら弓を引いて狙いを定める。

.....

.....

.....

今だ…！

みなみは当たるように願い弓を放した。

それはとてつもなく早く、的は一瞬で地に伏した。

「よし…」

みなみは小さなガッツポーズを取る。

そして周囲に敵がいなかったことを確認したあとにゆたかの元へ帰る。

「…ゆたか、待たせてごめん」

「あ、ううん、ありがとうみなみちゃん」

ゆたかは立ち上がってお尻についた汚れをポンポンとはたく。

二人は樹の下までゆっくりと歩いていき、少しだけ休憩をする。

そういうえばまだちょっとだけ水があつたかな…。

みなみは道具からペットボトルを取りだして見る。

中にはあと一人分しか残っていなかった。

「はい、ゆたか」

みなみは持っていた水をゆたかに渡す。

「み、みなみちゃんが飲まなきゃダメだよ」

「私はいいいから」

「わ、私喉渴いてないから大丈夫だよ」

「……じゃあこれはゆたかが必要な時までとっておくね」
みなみは自分の喉には通さずにペットボトルを戻す。みなみはあくまでゆたかのためにと優先させていた。
鳥の鳴き声が安らぎを奏でてくれる…。

ゆつたりとした時間。

これがゲームの世界だなんて改めて凄い……。

ゆたかは樹にもたれて遠くを見る。

綺麗な景色……。

だがそのなかに見慣れた人の姿があった。

「ねえみなみちゃん、あれってひよりじゃない？」
「え？」

みなみは眼を細める。
確かにひよりだ。

でも何をしているんだろう…？

ひよりはうるちよると何かを探すようにしていた。

ひよっとして眼鏡だろうか。

みなみはゆたかを連れてひよりに声をかける。

「ひより、どうかしたの？」

ひよりが振り返る。

だが、いつもの赤い瞳は青黒く変化していた。

さらにひよりはみなみとゆたかが視界に入った刹那、咄嗟にみなみに襲いかかる。

「うがあああつー!!」

「あ、危ないみなみちゃん！」

「うつ…！」

ひよりの職業武器である

鉛筆がみなみの右腕を貫通させる。

みなみはひよりの腹を蹴り飛ばし距離を一度とって弓を構える。

「な、なにをするの!？」

ゆたかは必死に言葉を出すが無事に聞こえてはいなかった。

これはもう知っているひよりではなかった……。

「まだ着かないのか……」

こなたはスタートラインからだいぶ歩いてきたが

ゴールは果てしなく遠い……。

しかしおかしいな……、

ちゃんと西に向かってるのに全然進んでる感じがしない……。

「ほんとにこつちって西なのかなー？」

でも“西からのぼったお日様が東に沈む”って歌があるから合ってるんだと思うんだけど……。

「……………」

よし、そのまま行こう。

こなたは歌を信じて西に向かう。

本当は東に向かっているなんて欠片にも思っていなかった。

第80話 キズナ

「つかさつち、後ろ！」

「え、あ、う……」

「く……！」

由佳はつかさに振りおろされるオノを左手のトンファーで受け止めてもう片方のトンファーでモンスターの頭を破壊する。

「ふー…、だいぶ片付いてきたねー。」

つかさつち大丈夫？」

腰が抜けて立てないでいるつかさに無事を確認すると手を貸して視界を元の高さに戻す。

「ご、ごめんね」

「ねえつかさつち、一つ聞いていい？」

「なに？」

「……なんで敵を討たないの？」

由佳はつかさに聞いたです。

「そ、それは………なんだか可哀想な気がして…」

はあ…、やっぱりか……。

由佳はこのメンバーと少し話をしたただけなのだがだいたいの性格はつかめていた。

だからつかさつちは人だけじゃなくモンスターを殺したくないってことはわかる。

「どうしょ…」

由佳はボソツと呟く。

こうなったら戦えるのは私ひとり。

しつかりしないと…。

つかさの心理を読んだ由佳は覚悟を改める。

討たなきゃ討たれる。

それは一般常識だ。

「でもこれだけは忘れちゃダメだよ。

この戦いは椿つちを取り戻すためにやるんだから出来る限りの力は出さないと」

「うん……」

つかさは頼りない返事をする。

「ヴァ……」

「……みさちゃん、あんまりヴァーヴァー言わないで。なんだかこつちまでヴァーって気分になっちゃうよ」

「だってよ……、柊のことが気になっちゃまって……」

「もー、だったら今すぐ戻って柊ちゃんを連れてこよ?」

「いや、だめだ!」

「どうして?」

「……私から柊んとこ行くなんて勝負に負けた感じがする」

「はあ……」

子供じゃないんだから素直に行けばいいのに……。

柊ちゃんもそうだけどみさちゃんも劣らないくらい頑固な時があるんだから合流は難しそうね……。

「あやの、私たちって中学んときから友達だよな」唐突にみさおが話の種をまく。

「それがどうかしたの?」

「いやさ、前から思ってたんだけど柊と私たちってどんどんへただ

りが大きくなつていく気がしてならねえんだけど」

……それは私もちよつと思つた。

高校になつてから会う機会が減つて今じゃ私たちより泉さんたちの方が仲がいいかもしれない……。

つてあれ？

私、今嫉妬してるのかな……？

「だから柊がなに考えてんのかもうわかんねえ……」

みさおは断念したように立ち止まる。

あやのもそれに合わせて足を止めた。

ザワツ……、

「？」

今、一瞬殺気に触れた？

すぐに伏せてあやのは注意深く神経を研ぎ澄ます。

雑音を消して動くなにかに集中をかける。

しかしみさおは鈍いのか気づいてはいなかった。

「おいあやの、なにやってんだ？」

一歩二歩とみさおが近寄る。

同時に影が刃を光らせみさおの上から現れた。

「みさちゃん、上！」

「へ？」

ドシュツ……。

肉をえぐる音が空気を変えた。

「あの二人……大丈夫なんだろうか……」

かがみは目の先を二人が辿つていった道の奥にまわす。

私は今までたくさんの小説を読んできた。

なかでも後悔しないように行動している主人公が大半だった。

読者側もそれが“普通”だと思ってた。

当たり前のことだと…。

けど自分がその立場にいわせると怖いのが身にしみる。

本当にそれが正解なのか全くわからない恐怖。

後悔しないことをしても結局そのせいで自分が酷い目にあって違う行動を取ればよかったと別の後悔を生むこともある。

なら私はどうしたらいいの？

椿君……。

「うわああああああっ!？」

「っ!？」

今の悲鳴はみさお!？

かがみはずくさま立ち上がって先程まで目を指していた方向に凝視する。

く…、ここからじゃ何も見えないじゃない…。

かがみは職業武器の手袋を装備して走ろうと脳に命令するがどこかが否定する。

鎖で縛られているようにその場から動くことができなかった。

友達が…、

親友が苦しんでるのになんで……。

“今自分がしたいことをすればいいんだよ!”

“… 柊ちゃんは今、何がしたいの?”

「私がしたいこと……」

椿君を助けたい……。

親友を守りたい……。

みんなとまた暮らしたい……！

鎖がちぎれてかがみは全速力で駆け回る。

私に足りなかったもの……。それは勇気と覚悟……。

でもそれが湧き出た今、怖いものなんて何もなかった。

「うう……」

「あ、あやの……なんで……」

あやのの肩にナイフが突き刺さる。

痛々しい光景とあやのの行動にみさおは呆然としていた。

「だって……みさちゃんが苦しむとこなんて見たくないから」

あやのは笑顔で言う。

肩からは血が止まらずにいた。

「よ、よくも……よくもあやのを……！」

みさおはモンスターに向き直る。

「ぜーったい許さないかなー！！」

みさおは職業武器の大剣をふりかぶる。

だがあやのはわかっていた。

あのモンスターは格が違う。

私たちが勝てない……！

「み、みさちゃん逃げて……！」

しかし怒りが冷静さを奪っておりみさおには届かない。

「うおおおおおりゃああつ!!」

パンツ!

「ぬあつ!?!」

みさおの大剣が弾かれる。そしてその隙にモンスターは素早く懐に入りナイフを突き出す。

あ、だめだ…、やられたなこりゃ…。
避けれるはずがない。

本能がそう告げた。

みさおは目を閉じて真っ暗の世界に入る。
だが、

ガシッ。

「……………あれ?」

いつまで経ってもナイフがこない…。

不審に思っ て視界を広くすると、

「みさおっ!!」

かがみが強化手袋でナイフを受け止めていた。
それは間一髪のタイミングだった。

第81話 小さな少女の大きな勇気

「こ、のおおおっ!!」

かがみはナイフを弾いて敵の腹を突く。

あまりのパワーにモンスターはぶっ飛んでいく。

「おおー！」

柊すっげー馬鹿力じゃねえか!」

「う、うっさい! そんなことより早く逃げるわよ!

あやのも立って!」

「あ、う、うん!」

かがみはみさおを先に行かせてあやのに肩をかす。

三人はモンスターが起き上がる前に一目散に撤退した。

「はあ…はあ…、もうそろそろいいかな…」

かがみたちは十分離れたところで疲労により倒れる。

「ぷはあー! な、なあ柊…」

「はあ…な、なによ…」

「お、お前、なんで来たんだよ…」

「そ、そんなのあんただけじゃ古時計に行けるわけないからに決まっているじゃない…」

少しずつ息を整える。

「ほ、ほんとにそれだけか? 実は私たちが好きだから来たんじゃないかねえのか?」

みさおはからかうように言う。

「そ、そんなじゃないわよ……！」

「ほ、ほんとかよ……。ちびっこがいたらたぶんツンデレって言うんだろうな……」

「そ、そうかもね……」

あ、そうだ。あやのの傷を治さないと」

かがみはすぐに道具から治療薬を取り出してあやのの肩に塗る。

「っ！」

傷口に染みて激痛が一瞬走る。

「こ、ごめん、痛かった？」

「だ、大丈夫だから」

その言葉を聞いてかがみは続ける。

「……………よかった、これぐらいならすぐに治るわ」

治療薬を戻してあやのの治療を終える。

「さて、じゃあ行きましょ」

「ふふ……」

「な、なによあやの」

あやのが楽しそうに笑うのでかがみは本意を聞く。

「えとね、さっきまで迷ってた柊ちゃんが先頭になって進むなんて変だなーって」

「い、いいから行くわよ！」

かがみは頬を赤くしてさっさと早歩き。

「柊のツンデレ」

「一回そこらへんに落ちてるチョコークのように踏み潰してやろうか？」

「ひ、ひより？ いったいなにが…」

ひよりの尋常じゃない瞳、そして攻撃的な体勢。あれは本当にひよりなの？

「み、みなみちゃん、ひよりの様子が…！」

「…わかつてる、ゆたかはそこから動かないで」

みなみはゆたかを固定させて守るように構える。

ひよりは右手に筆を持ち

左手でノートを開く。

そしてひよりはそこに一人の男の子の絵を描いた。

「な、なにしてるんだろう…」

ゆたかはその絵に注目した。

すると絵がノートから飛び出してきた。

「えっ！？」

みなみちゃんは一瞬隙を見せるがまた集中する。

動じるな…、

たしかアレはひよりの能力で生み出された兵士だ。

ならその人たちを倒しても仕方がない。

狙うとしたらそれを発する張本人！

「やれえ！」

ひよりの指示によって男の子は剣を振り回しながら来る。

「…邪魔しないで」

みなみは軽く避けてすれ違い様に弓を四発早撃ちする。

男の子は碎けて灰になった。

よし、この程度なら倒せる。

みなみは一気に射程距離まで近づく。

「ごめんね…」

急所を外してひよりの足に放つ。

だが新たに描かれた絵によって防がれた。

「…くっ！」

守りが堅い…！

ひよりによつて兵士たちは次々に目の前に立ち塞がりみなみの邪魔をしていく。

やはり一筋縄ではいかない…！

もつと確実に当たるところまで行かなきゃダメだ…！ここは一か八か……！！

みなみちゃんが苦しんでる。

わ、私も戦わないと…！

「み、みなみちゃん、私も…！」

ゆたかが一歩を踏み出すとそれを見たみなみは弓を射ちながら言う。

「ゆたかは来ちゃだめ！」

今ゆたかが来たら絶対にケガをしてしまう。

それだけではどうしても避けたかったのだ。

「……ここは一気に攻める…！」

みなみは描かれる絵を次々と踊るように倒していく。

次第に兵士は全滅し、

ひよりの顔が現れた。

「ま、まさかあの大量の絵を…！」

ひよりは慌てて鉛筆を走らせる。

「…遅い」

みなみは弓をひよりの腕にロックオンさせる。

勝った…。

「危ないみなみちゃん!!」

「っ!？」

ゆたかの声に反応してみなみは咄嗟に後ろを向く。

そこには生き残りの兵士が剣を持って突撃してきた。

…まだ間に合う!

みなみは弓を発射しようとした。

……だができなかった。

……その絵は…大事な友達の姿だったから……。

ズブツ。

剣がみなみの横っ腹に刺さる。

唯一の弱点だった。

まさかゆたかの絵を描いてくるとは思いもしなかった…。

「…み、みなみちゃんから離れてー!」

ゆたかは兵士を後ろから職業武器である巨人のオノを投げつけた。

真っ直ぐに飛んだオノは兵士を真っ二つにした。

「み、みなみちゃん!」

「…に…げて…」

「で、でもみなみちゃんが…!」

「…いい…から」

「…っ!」

みなみはこの状態になってもゆたかのことしか考えていなかった。

もう自分がどうなろうと一人の少女を守りぬこうとしているのがゆ

たかにはわかった。

「私、逃げないよ…」

みなみちゃんを置いたりなんかしないからね」

「…だめ…ゆたか…」

しかし、ゆたかはオノを拾って強く握る。

みなみが言うことを反対するかのように…。

「……………私ね、知ってるんだ…。どうしてみなみちゃんはいつも私のことを守ってくれてるか…。

それって友達だからって理由だけじゃなくて私が弱いって知ってるからだよね…？

何をやっても危なっかしいし普通の人より病弱だからみなみちゃんに心配ばかりさせて迷惑がかっちゃうんだよね…？

……………だったら私、強くなるよ…。

今度は私がみなみちゃんを守るくらい強くなる…。だから…もう心配しないで…。今私一人だけ逃げちゃったら…弱いって自分で認めることになるから……………」

ゆたかはオノを構えてひよりと向き合う。

手は多少震えているが大切な二人の言葉が私を勇気をくれる…。

“ ゆたかの存在に俺はずっと……………憧れてた ”

“ ゆたかが私のことを大切に思ってくれるだけで十分だから…………… ”

椿君、みなみちゃん、ありがとう…。

でもいつまでも守られる訳にはいかないの。

私にも守りたい者がいるから……………。

第82話 守るから…

「グ~~~~ッ……………」

こなたです…、

ただいまフィールドに設置された休憩所に寄ってて宿屋の人に目的の古時計はどこか聞いてみたら全く逆の方向でした…。

「このままじゃ……………」

お腹空いちやう……………。

「みなみちゃん、見ててね。必ずひよりを助け出すから」

ゆたかは細い腕でオノを大きくふりかぶる。

それは小さな体には似合わない迫力があつた。

「……………ゆたか…」

「大丈夫、そんな顔しないで…」

「……………！」

みなみはゆたかの笑顔がとても強く見えた。

安心感を抱くほどの強い心が。

……………私は初めて守られる側にいるのかもしれない。

「今度は私が助けるから！」

ゆたかはその場でオノを投げる。

音はブンブンとなり加速していく。
それは風を斬りながら進んでいくが、ひよりが狙いではなかった。
「…？ いったいどこに投げて…」
だがひよりはその意図に遅れて気付いた。
「…っ！ しまった！ あそこは…！」
オノが向かう軌道、それは…。

ドシュツ！

「ぐっ！」

木陰に隠れていた何者かの声が漏れる。

それこそがひよりを操っていた正体だった。

「やった！」

ゆたかは喜びの声をあげる。

「ガアア…ア…」

モンスターはバタリと倒れる。

ゆたかはブーメランのように戻ってきたオノを手取る。

そしてひよりの瞳に元の色が塗られた。

「…あれ？ 私なにを…ってここはどこ？」

ひよりが状況を理解できずにいるところにゆたかが懷に飛び込む。

「ひより…！」

「ごふっ！？」

ひよりの腹にゆたかの顔がめり込む。

これはちよつと違う意味で嬉しいような癒されるような…。

でもちよつぱり痛みが激しいっす…。

「よかった…！！ 無事で本当によかったよお…！！！」

「ちよつ、ゆたかとりあえず離れてほしいな…」

照れ顔になりながらもひよりは冷静さをキープする。

「あ、ご、ごめんね」

ゆたかは真っ赤になってひよりの体から距離を取る。ふー、今のは

なんだか自分でも危なかった気がするっす……。
あ、今思っただけど前までゆたかのことは小早川さんって呼んでたからなんか今ごろ違和感が……。

「ところでここは？」

「森林だよ」

それは見ればわかるっす……。

でも何で森林なんかに……。そういえばたしかゲームが始まってからいきなり後ろから襲われたような……？

「……ひよりはね、さっき悪い人に操られてたんだよ。だからあんまり憶えてないと思う……」

「ま、まじっすか……？」

ゆたかは縦に首をふる。

つてことは私は友達を自分の手で……。

「……ゆたか、ひより大丈夫？」

みなみが立ち上がるが少し苦しそうにしていた。

「み、みなみちゃん……」

まさかその傷は……」

「あ、こ、これはひよりのせいじゃないよ。

さっき敵と戦った時に受けた傷だから……」

みなみはひよりに余計な心配をかけたくなかった。

傷口の部分には傷薬が塗られていたがまだ多少足りない感じだった。

……きっと私のせいだろう。

みなみちゃんもゆたかも重荷を背負わせないために嘘をついてけている……。

ここはやっぱりちゃんとケジメはつけたい。

「……二人ともごめん！」

ひよりは深々と頭を下げる。

それは心からの謝罪だった。

びっくり…。

殺気…？

「みなみちゃんどうしたの？」

「あ、いや……なんでもないよ」
気のせいなのかな？

でもたしかにさっき。

ピッ…ピッ…ピーー。

「っ！みんな逃げて！」

「え！？ちよつ、なに……ってなんすかあれ！？」

モンスターが周囲が爆発して、円の形をしながら拡がっていた。

木々は跡形もなく消え去り破壊力は格が違っていた。それはやがてこっちにまで来る。

「…このままじゃ！」

全員全滅。

いや、ひよりは少し前にいるから助かるかもしれない。

でも私とみなみちゃんは…。

ゆたかはそれを一瞬考えてしまった。

だがもうなにをしても間に合わないのだ……。

「まだまだよ、ゆたか…」

「えっ？」

みなみがゆたかを抱き寄せる。

「み、みなみちゃん！？」

「大丈夫……。ゆたかは私が守るから……」

ビリビリ……。

「な、なに？　今は地震？」

激しい揺れが大地を蠢かしこなたのところまで伝わった。
ピー……。――

腕時計が初めて音を出す。なんだろう……？

“岩崎みなみ、シグナルロスト”

「……………え？」

みなみちゃんが……？

信じがたいことにこなたは嘘の情報だと考えるが、これに間違いな
んかあるわけがない。

つまりみなみちゃんは本当に……………。

「ひ、柊……！」

「う、うそ……………」

「みなみちゃんが……」

“岩崎みなみ、シグナルロスト”

三人にも同じ通知が来ていた……。

「これで一人……」

「み、みなみちゃんが……」

つかさは涙を流す。

……こんな簡単に人は消えていいのかな……？

由佳は震える手を止めることができなかった。それは恐怖から生まれてきているからだろうか……。

「竹本さん……、岩崎みなみが……」

「……わかつている」

現実側でもシヨックは大きかった。

「そんな……みなみちゃんが……みなみちゃんが……」

みゆきはどうしようもないくらい辛かった。

それはパーティも……。

「ミナミ……ミナミ……！」

カプセルを叩くがみなみに反応はなく目を閉じたままだった……。

爆発は消えて地上は静かになる。

焼きつくされた地にゆたかは独り残された…。

「…ぐすっ……、み……みなみちゃん…」

名前を呼ぶが返事は返ってこない……。

また守られてしまった…。

今度は守ると言ったのに…私は……。

「み…なみちゃん……どうして……ひつく…」

高校で初めてできた友達なのに……。

雫が焼けた地に堕ちる…。

それはポタポタと止まることはなかった……。

静かに響くゆたかの優しい声…。

「…帰って…きてよお……！」

でもそれは一番聞いてほしい人には伝わらなかった…。

第83話 死神

「……ゆたか、行こう…」

ひよりはない力を振り絞って言葉を出す。

辛さが重く包みこんでくるが私たちは戦わないといけないんだ…。
椿君とみなみちゃんが救うために……。

だがみなみちゃんがいなくなりゆたかはすでに戦意をなくしていた…。

「はあはあ、あやの早く！」

「ま、待って…、私……もう…」

三人はモンスター出現率が少ない草原を通っていた。

ゲームを始めたばかりの私たちじゃ勝てるはずがないからだ。

だが絶対に出ないわけではない。

一体のモンスターに見つかってしまい、逃げているうちに三十体のモンスターに追われるようになっていた。

「柊、こうなったら戦うしか…！」

みさおは踵を返そうとするがかがみが止める。

「待って！あんな化け物なんかと戦ったら無事じゃすまないわよ！」

？」

「けどこのままじゃあやのが…！」

あやのを見るともう体力が限界に近いのがわかった。

それに正直私もかなりしんどくなってきた。

動く足が次第に遅くなる。

「ひ、柊…！」

「ご、ごめん…！」

ハツ…ハツ…わ、私もさすがに体が…」

あやのも必死についてきているが胸を押さえて息も荒々しくなっている。

みさおはまだまだ体力があるが二人に合わせて走っていた。

…だがそれも時間の問題だ。

だったら柊とあやのを置いて私だけ逃げるか？

そうしたら全滅は避けられる。

けど……やつぱり私は二人のことが…。

「柊…あやの…」

みさおは足を止めて二人に向き直る。

「み、みさちゃん…？」

「ちよつ…！？なにやってんのよ！？早く逃げないと…！」

みさおが逃げる気配はない。

「私ってさ…、こんなとこで死んじゃうようなキャラじゃないよな

…」

「はあ！？ こ、こんなときになにを言ってるのよ！ 早く走っ

」

急にみさおの体が輝き始める。

それはみさおの特殊能力が発動されたことを示していた。

「み、みさちゃん…、まさか…」

あやのが最後まで言う前にみさおは笑顔を見せて敵軍に真正面からぶつかっていった。

「うりゃああああああっ！！！」

一気に五体はぶっ飛びみさおは格闘戦に出る。

「み、みさお！？ あやの、あいついったいどういづつものなの？」

かがみはわけが分からずに理由を知っていそうなあやのに聞く。
だがあやのはみさおの後ろ姿だけを見て涙を流した。みさおに視線を戻すと急激に体が崩れ始めていた。

「な、なによあれ！？」

「……み、みさちゃんの特異能力は死神の鎌……」

一定時間……死神の力を借りて本来の基礎能力より数十倍ほどはね上がるの……。

「……使った時間が長いほど使用者の体を奪ってしまう……」

「そ、そんなっ！？」

「だったら今すぐにやめさせないと……！」

かがみはみさおがいる戦場に飛び込もうとするがあやのが手を掴みこれ以上前に行かせてくれなかった。

「離してあやの！」

「アレじゃみさおが死んじゃうじゃない！」

「ダメだよ柊ちゃん……」

みさちゃんは覚悟を決めたんだから……」

「か、覚悟！？」

覚悟なんてそんなのどうでもいいじゃない！

必要なのは生きることでしょ！？」

「生きるためにみさちゃんは今一人で戦ってるんだよ……」

「だったら私たちも……！」しかしあやのは横に首をふる。

「今のみさちゃんにしかモンスターは倒せない……。それは柊ちゃんも分かっているでしょ……？」

「それでも助けるのが仲間じゃない！」

「それも一理あるよ……」

でも仲間の覚悟を見届けることも大事なの……」

「そ、そんなの……！」

「今ここで柊ちゃんが助けに行ったらみさちゃんは本気で怒る……。私がみさちゃんの立場でもそう思うから………」

「……っ」

かがみは黙って荒れ狂う戦を見る。

視界が歪んでもみさおだけははつきりと視えた…。

あやのもこの悲しい戦いを見守る。

「………」

みさちゃんは正しいよ…。このレベルで化け物じみたモンスター相手にあのまま逃げ続けれるはずないもん……。

だからみさちゃんは命を捨てて……。

あの能力を使えば必ず死ぬと竹本さんは言っていた。だけど私は…
…待つてゐるからね…。

「うあああっ！」

みさおは圧倒的な強さでモンスターを尻ぎ払っていく。

だが同時に左腕は完全に崩壊をして足も少しずつ消えていた。

私、もうそろそろ死んじゃうんだな……。

そしたら椿やみなみに逢えるのかな…。

残り三体……二体……一体。

みさおは最後まで能力を解くことなく敵を全滅させた。

だがもう両足は完全に灰になって立つことができなかった。

私の最後ってなんかかつこわりいなあ…。

かがみとあやのがこっちまでやってきた。

「みさお！みさお！！」

「みさちゃん…！」

な、なにそんな顔してんだよ…。

もっと笑ってくれよな…。そっちの方が似合ってたんだから……。だがほとんどが崩壊して喋ることができなかった…。

「みさお…！ なにやってんのよ…！ あんたこんなところで死ぬよ
うなキャラじゃないって言ってたじゃない…！」

柊…泣いてるじゃねえか…。

あやのも…。

……。

そうだよな…。
こんなんで死ぬなんて私らしくないよな…。
いつもだらけてばっかの私が死ぬなんてさ…。

みさおはギリギリ指が残るなか最後に地面に書いて想いを伝えた。

私は二人の笑顔が大好きだ…。

だから最後に……、

“ ありがとう ”

書き終える前に手から力がぬける。

…ごめん……最後までかけなかった……。

でも……想いは伝わるよな……。

そしてみさおは静かに姿を消した。

「みさお！」

「みさちゃん！！」

“ピーー、日下部みさお、シグナルロスト”

虫の鳴き声も聞こえない世界に無情の報告だけが拡がっていく。

なあ柊…あやの…。

私は…背景から卒業できたかな………？

第84話 蒼い剣士

“ 日下部みさお、シグナルロスト”
それは全員に知れ渡った。そして誰もが悲しみの色を隠すことはできなかった…。

「みさおつち……」

また一人……消えてしまった。

岩場の陰で休んでいた由佳は腕時計から目を離す。

これで残りは七人か…。

でも椿つちのためにみんな死ぬ気で戦うなんて……。

「なんだか妬けちゃうな……」

中学の時から一緒だけど一番遠い位置にいる気がする…。

由佳は小さなため息をついた後につかさの様子を見に行く。

「つかさつち、もうそろそろ……ってあれ？」

さっきまでそこで泣いていたつかさがいなくなっており由佳は辺りを見回す。

しかし人影は全くなかった。

「つかさつち……？」

由佳は急に不安に取り巻かれた。

つかさは由佳に気づかれないうちに単身で古時計を鳴らしに行った。
みなみちゃんにみさおまで死んでしまった……。

「これ以上誰も死なせたくない……！」

つかさは職業武器であるマシンガンの安全装置を外す。

そして歩いているうちに会うモンスターも隠れながら上手に倒して
いく。

もう可哀想などとは言っていられなかった。

三人を取り戻すために奥へ奥へと慎重に進んでいく。

「だいぶ近づいてるのにまだ着かないのかな……」

つかさは一度止まって地図を広げる。

ここがこうなつてだからこの道を右に曲がって行けば……。

つかさはルートを確認して進み始める。

あとちよつとだよ……みんな……。

そう思い油断を許したその時、

「いいもの見つけた……」

「っ！？」

人型のモンスター……！？

つかさはすぐに戦闘態勢をとろうとする。

だが気づいた瞬間にはすでに敵の爪がつかさの体を引き裂いていた
……。

「！」

「……どうしたの柊ちゃん？」

「あ、いや……なんか今ザワつてしたような……」

「ザワ……？」

「うん……」

うまく言えないんだけど嫌な感じがする……」

かがみは古時計の方向を見定める。

「……………」
なに、このモヤモヤ…。
まさか誰かまた……………。

「つかさつち…、どこ行っちゃったんだろ」

由佳はとりあえずつかさを探すのと同時に古時計を目指していた。
まだシグナルロストの報告は来てないから無事なんだろうけど、もしモンスターに遭遇したらつかさつちは絶対にやられてしまう。
早く見つけないと……………。

「ーズーン…。」

「……………」

これは木が倒れる音？

耳を澄ましているとそれは確実にこっちに近づいていた。

「来た！」

二つの影が超スピードで飛び出してきた。

「……………ってあれ？」

後ろの影は見たことない人型のモンスターだ。
でも前にいるリボンの影は知っていた。

「つかさつち！？」

爪傷を負っているが間違いないと探していた本人だった。

「あ！由佳ちゃん助けてー！」

つかさは方向転換して必死に由佳の所に走る。

それを追跡するようにモンスターもこっちに向かってくる。

あの様子じゃつかさつちは一発も撃っていないのだろう。

あのままじゃラチがあかないしあいつは私が倒すか。

「つかさつち、バレーのレシーブポーズしてて」

「あ、うん」

つかさは両腕を前に構える。

「いっくよー！」

由佳はつかさの腕に乗る。

「今だつかさつち！高く上げて！」

「うん！」

つかさは由佳を精一杯上へ上げる。

そして由佳は限界まできたところで反転させてそのまま落下を利用してモンスターをロックオンする。

「もらったあああっ！！」

モンスターは由佳が太陽と重なり見失っていた。

トンファーを取り出して

真っ直ぐに振りおろす。

人型のモンスターは脳天に由佳の攻撃を受けて地面にめり込んだ。

「うわー！由佳ちゃんすごーい…って痛い！」

尊敬の眼差しで見るつかさに由佳はおでこにデコピンをする。

「なんで一人で行っちゃったの？」

「あう…、それは…、もうみんなに傷ついてほしくないから…」

「…それで？」

「それで私一人で古時計を鳴らしに行こうかなくて…」

「……………」

はあ…、力はないのにどうして心は純粹なのかな…。

それにけっこうドジッ子だし椿っちも苦労したんだろっなあ…。

「とにかくこれ以上一人で突っ走っちゃダメだからね」

「はう…」

由佳はつかさを連れてここからさつさと立ち去ろうとする。

「……今のは痛かった」

「「っ!?!」」

つかさと由佳は目を疑った。

先程まで沈んでいたモンスターが無傷で起き上がっていたことに。

「よくもやってくれたね…。お仕置きだよ…」

来る!?

由佳は意識を敵に集中させる。

だが…、

「う…あん……」

な、なにこれ……。

体が…熱い……。

由佳は力が抜けて座りこむ。

「ふふふ、魔法が効いてきたな…」

体中に熱い感覚が走って動けないだろう…」

こ、これは麻痺魔法…!?

さっきの攻撃のときにかけられたの…!?

ヤバイ…!?! つかさたち一人じゃさっきと同じように逃げるしか出来なくなる…。

この状況に危機感を覚えて由佳は動こうとするが、

「……あ……や…あん…、ん…」

ビクッと何かが私を蝕み行動を拒否する。

たかが魔法ひとつでこんな…!

ってかこれってかなりエッチな魔法じゃないの…!?!?

「さて、トンファー使いは後でおいしくいただくか…。

それよ

りも…」

モンスターはギロツとつかさを睨む。

「そっちを早く捕まえないとなあ…」

ひたひたと足音をたてながらつかさに近づく。

「こ、こらー!?! つかさたちにエッチなことするな…!?!」

しかしつかさは足に力が入らずにいた。

「終いだ…」

「ーまだだよ」

モンスターとつかさの間に一閃の剣が遮る。

「ぐっ!？」

「きゃあっ!」

二人はあとずさり光る剣に目をやる。

しかし爆煙がまい視界が閉じられた。

「ぬう…、何者…?」

「あ、あれは……」

「…こ、こなたっち……」

やがて煙は晴れて、

こなたが地面に突き刺さった剣を抜いてモンスターの前に立ち塞がる。

「つかさ、由佳ちゃん。今助けるからね」

第85話 引き金

「あ、あれは伝説の少女Aではないか！」

「い、泉こなたの参戦により柊つかさ、萩野由佳の信号は健在しています！」

竹本さんは地獄で仏に会ったように喜ぶ。

「泉さんすごいです！」

「さすがコナタネ！」

みゆきとパティは互いに手を合わせるがその横では浮かない顔をしたそうじろうがいた。

「……こなた」

かなたが残したたった一人の娘なんだ……だからちゃんと戻ってこいよ……。

もう……俺を独りにしないでくれ……。

「なかなかの使い手だな……」

「そりゃオタクだからね」

「……オタク？　なんだそれは？」

あれ？もしかしくなくてもモンスターってオタクのこと知らないのかな…？

だったらなんて説明しよっかなー…。

こなたは悩みに悩む。

そして結論は、

「オタクとは無限の愛を持つ者なのだ！！！」

「……………」

「……………」

……無反応。

「あ、あれ？」

だ、黙りしちゃったけどちよつと空気を間違えちゃった……かな？
モンスターと由佳ちゃんは呆氣にとられていた。

もしかしてこなたたち…かっこよく遠回しに言ったのかな？
だがそんなの誰にもいいように聞こえはしない。

「こなちゃんかっこいいー」

前言撤回、一人だけ勘違いしちゃってる人がいる……。

「な、なんと偉大な奴なんだ…」

あんたもか！！

由佳は本来かがみが言うセリフを心の中で激しく突っ込む。

どうやらモンスターは呆れていたのではなく圧倒されていたらしい。

もうまともな人は私一人しかないのか…。

「さて、早速で悪いんだけどモンスターはモンスターらしく勇者にやられるがいい！」

こなたはそこらへんに落ちていたトンファーを投げる。

「あ、こなたたちそれ私の！」

しかしヒョイツと避けられてトンファーは彼方に消える。

「あ、もしかしてあれって由佳ちゃんの？」

「そつだよ！気づくの遅いっしょ！」

この時点で由佳は武器なしで挑まなければならない。

簡単に言えば絶対死亡…。

「いやー、ごめんごめん。いい感じのブーメランだったからつい」
「いやいや！　ブーメランじゃないよ！？」

「麻痺魔法“トール”！」

「しまっー」

こなたは戦闘中に油断を見せた隙にモンスターは由佳を行動不能にした魔法をこなたにかける。

「こなたっち！」

「あ…、な、何これ……」

こなたは剣を落としてひざまずく。
完全に魔法がかかってしまったのだ。

「か、体が…、んあ……あう……」

こなたはもじもじと体をくねる。

それは子供が変な気を起こしたように見えてしまい、ある意味危ない光景だった。

「よしよし、これで今度こそリボンの女の子だけだ…」
モンスターは目を輝かせながらつかさに迫る。

「い、いや、こないで…」

「ふふふ、そんなに怖がらなくても大丈夫…。痛いのは最初だけだから…」

い、痛いのは最初だけって…！

それはちよつとリアルに危ないような！？

こなたは気合いをいれて一瞬に力を注ぐ。

「このお……んあ……！」

だが魔法はいまだ切れず、動いた反動によってさらに体が熱ってしまふ。

つかさにじりじりと手が伸びる。

だがそれは一歩手前で止まった…。

「なっ！？こいつもう動けるのか！？」

「こ、このお……！」

由佳だった。

モンスターの後ろからしがみついて動きを鈍らせる。
だがそれもすぐに限界がきた。

うう……腕に力が……。

やっぱりまだ魔法が効いて……。

でもこなつちが動けないなら奴を倒すには今しかない。

「っ、つかさつち、早くこいつを撃って……！」

「……えっ？」

撃つ……？

「早くつかさつち……！」

私が……？

この人を……？

撃つの……？

でもそんなの……。

「つかさつち！」

「で、できないよお……！」

人を撃つなんて私には……！」

「これは人なんかじゃないんだよ……！」

「……っ」

そ、そんなことわかってるよお……。

でも私には……。

引き金を引く寸前までいくが途中で人指し指を離してしまう。

撃ちたくない……、撃たせないで……。

「早くつかさつち……！」

ードウン……。

「あ…… ああ……」

つかさは指を震わせる。

私……撃ったの？
いや違う、私じゃない……。だったら誰が……。

ードサツ。

つかさは目を見開いた。

モンスターではなく由佳が力なく倒れる姿を見て……。

「由佳……ちゃん？」

名前を口にしても動く気配がなかった……。

「クククク……ゲラゲラゲラゲラ！」

変わりにモンスターが不気味に笑い出す。

由佳ちゃんを見るとお腹の辺りから赤い液体が土を真っ赤にしている。

ま、まさか……、モンスターが由佳ちゃんを……。

つかさは重い何かのしかかるのを感じる。

それはおそらく自分が撃たなかったから由佳ちゃんが撃たれたという責任感だろう。

……そ、そうだ……。

これは私のせいなんだ……。

私が撃たないからこんな……こんな……！

「バカな奴だな……、さっさと撃てばいいのに」

モンスターはクスクスとあざ笑う。

私たちを見下すかのように……。

由佳を撃つたのと同じ魔法弾をつかさの頭に向ける。

「もう遊びを終わりにしないとこっちが危ないな……」

「……っ！　っ、つかさ、立って！　走って！」

こなたは呼び掛けるがつかさはずっと泣いていた。

っ、つかさがやられる！

私が……！　私が助けないと……！

――私が！

「で、やあああああ！！」魔法を自力で解いて真っ先に鋭い刃を振り抜く。

「ぬうつ！？」

とっさの反応でこなたの斬撃をかわす。

しかし後ろに下がる敵をそのままこなたは追い討ちをかける。

第86話 力の限りに

「ゆたか、大丈夫？」

「……………うん」

みなみがいなくなつてから少し時間が経つてようやく落ち着いた顔をするようになった。

だが全快どころか半分の元気もなく最初とは比べ物にはならない。目の焦点があつていないゆたかをひよりが肩をかしながら前へと踏み出す。

「由佳ちゃん…！」

モンスターがあなたに追われている間につかさは由佳の手当てを試みる。

だが所持している薬では手の施しようがなかった…。

「あ…はは…、私の体…もう動かないや…」

由佳は諦めるように告げる。

「そ、そんなことないよ…！ まだ………… 由佳ちゃんは生きなきゃ駄目だよ…！」

あるだけの薬を由佳に全て使う。

何度も何度も同じ場所に同じ作業を…。

「っ、つかさっち…」

でも何をやっても無理だよ…。
だつて自分の体だもん。

どういう状態かなんて…私が一番理解してる…。

血はいつこうに止まらない。

むしろ次々に流れてていた……。

「つかさっち…、私はいいから……こなたっちを追って……」

「……えっ？」

「こなたっちを……助けてあげて……」

「……でも、私が行ったら由佳ちゃんは……」

この先をつかさは言いたくなかった。

それがたとえ冗談だったとしても……。

「私は見捨てて……、

お願いだから……」

由佳は泣きながら指示する。

激痛が走り続けて由佳にはもう体力が空になっていた。

息も辛く意識は薄れる一方だった。

「見捨ててるなんて……椿君みたいにいなくなるなんてやだよ……」

つかさの涙が由佳の腕に当たる。

それはとても暖かく感じた…。

「……今こなたっちを……守れ……るのは、つかさっちだけだよ……」

「……それなら由佳ちゃんも……！」

だが由佳は首を横に振る。

それは否定を表していた。

「…わ、私が死ぬ場所は…ここだけど、つかさっちは違う……」。

だから…ね？」

「……っ」

由佳の悲しい笑顔を見たつかさはゆっくりと由佳に背を向けた。
だが覚悟が決まらずにつかさは一歩が出せなかった。

由佳は最後に一言、つかさの背中を押す。

「椿っち救出……任せたよ……」

自然に足が前に出た。

つかさは全力で走った。

思いを、雑念を捨てるように……。

「ごめんね……由佳ちゃん」

ボソッと聞こえた呟きの言葉。

つかさはそのまま振り向かずに向つ直ぐこなたを追いかけていった。

「ごめんね……か」

由佳はつかさの後ろ姿に見とれる。

つかさつち……それは私のセリフだよ……。

最後まで一緒にいらなくて……。

そういえばちよつとドジで素直なところは椿つちに似てるかもしれないなあ……。

あと優しい心とか……。

椿つちのせいでああなっちゃったのかな……。

……椿つち……私がそつちに行ったら受け入れてくれる……？

そしたらまた中学の時みたいに一緒に……。

“ピーー、萩野由佳、シグナルロスト”

「由佳ちゃん……」

かがみは寂しい目で空を見る。

“私は椿つちのことが好きなんだもん！

誰よりもずつとずつと！

世界で一番大好きなんだもん！”

“椿つちの横に他の人が肩を並べるとこなんか見たくない！”

思い出すのは積極的な想い……。

「なんでこんな……」

「柊ちゃん……」

あやのはかがみを支えるように見守った…。

「こなちゃん！」

ひたすら走り続けた先にモンスターと死闘を繰り広げるこなたを発見した。

つかさはすぐにマシンガンを構えてターゲットを絞る。

由佳ちゃん、もう大丈夫だよ…。

由佳ちゃんが私に今できることを教えてくれたから…。

震えは完全に止まっておりつかさは武器を解き放つ。

連続で空気を通る弾がモンスターの胸をめがけて発砲された。

「ちいつ、邪魔だ…！」

モンスターはつかさに魔法弾を撃つ。

「っ、つかー！」

「……………」

つかさは静かに瞳を閉じる。

「…っ！」

こなたはつかさの顔を見て漠然とする。

いつものつかさではなく戦士の雰囲気を感じていた。

そしてスツと多少無駄がある動きだが弾を綺麗にかわす。

つかさは集中力を限界まで出し、敵の動きだけを見ていた。

こなちゃん…いくよ。

アイコンタクトによってお互いに何をするか伝えあう。

理屈じゃない確かな絆で…。

「うりゃあつ！」

こなたが足元を狙って斬撃を放つ。

つかさの変わりつぶりによって反応が遅れたモンスターは慌ててジャンプで回避する。

でもそれは百も承知だよ…。

こなたは剣をモンスターに投げてそのまま走る。

モンスターは隠していたナイフで剣をはじいた。

が、それがブラインドとなっておりこなたを見失っていた。

「ガシッ。」

「なっ、いつのまに!？」

「今度こそ撃てー！」

つかさ「ー!！」

……。

「ごめんなさい……」

目に見えない速さで銃弾はモンスターの胸に当たる。

87話 死の開戦

「ゆたか、そろそろ元気出して」

「……………」

ひよりはゆたかの答えを望んだが返事はない。

いや、それ以前に聞こえているのかもわからなかった。

それだけゆたかの中ではみなみの存在が大きく左右しているのだろう…。

でもこんな調子じゃ古時計までたどり着くのは困難なのではないだろうか…。

ひよりは消える恐怖がどんなものか想像してみる。

だがいまいわからなかった。

目の前が真っ暗になって考えることもできない事をいうのだろうか…………。

そんなことを考えていると一つの丘を越えた。

そして先には一つの古い時計が装飾された壁に囲まれて置かれていた。

ひよりたちはついに終わりを迎えたのだ。

「ゆ、ゆたか！ あそこに古時計が…！ これでみなみちゃんも椿君も蘇ることができる！」

「……………古時計」

ゆたかはそつと顔を向ける。

瞳には古時計がしっかりと映されていた。

見つけたんだ…………。

やつと……。

ゆたかは徐々に歩くペースが速くなる。

「これで……これでみんなが……！」

「あ、ゆたか。ちよつ待つて」

ひよりは突然気力を取り戻したゆたかの後ろをついていく。

ようやく終わる……。

この地獄のゲームも……。

安心感に浸る二人だが、そのせいでこの瞬間周りが全く見えていなかった。

ズンッ。

「な……！？」

ドサッ……。

不気味な音の後に聞こえる何かが落ちる音……。

同時にゆたかの背中に液体がついたのが服越しにわかった。

「……ひより？」

ゆたかはふと後ろを振り向く。

そこには血塗られたひよりが倒れていた。

あれ？ 私…殺られたの？

ひよりは体を動かそうとしても足先にまで感覚が伝わらない…。

どうしちゃったんだろう。

なんでいつも通りに動かないの？

ってあれ、手は微妙に動くんだ…。

よかった…。

漫画家にとって利き手は命だからね。

う…、でもベツタリとしてる気がする……。

それになんか鉄の臭いが…。

だが一瞬で臭いは全くしなくなった。

ひよりは首を横に向けるとゆたかが泣いていた。

ゆたか？ なんで泣いてるの…？

必死に何かを叫んでる。

でも聞こえないよ……。

何を言ってるのか全然……。

ああ、そうか。

私にはゆたかの声がもう聞くことができないんだ。

じゃあこれが死ぬってことなのかぁ……。

あっけないなぁ……。

私の夢はこれで消えちゃうんだ……。

でもゆたかは消えないで……。

みなみちゃんも……意識をなくした男の子もきつとそう思ってるから……。

“ピーー、田村ひより、シグナルロスト”

「ひより……!!」

スウィーツと消えてしまった友達の体にゆたかは嘆く。また守れなかった……!

また……!

「よくここまで来たな」

「っ……!!」

背後からの声にゆたかは睨み付ける。

しかし、その目付きは怒りから恐怖へと一瞬で変わった。

「だが、ここまでだ」

巨大な槍を構えるモンスター。

そして異常なまでのプレッシャー。

私でもわかる……。

こ、このモンスターは危険だ……!

に、逃げなきゃ……。

私じゃ絶対に勝てない……。

ゆたかは足を動かそうとする。

だが体が硬直してしまい動けなかった……。

「少々暇潰しに付き合ってもらっぞ、小さな女の子」

「こなちゃん……」

「うん……」

ひよりまでやられてしまった……。

苦しさと残された責任の重さが伝わる。

残りは五人、半分となつてしまったことにあなたは焦りを感じる。
バラバラだとやっぱり危険だ…。

早くかがみたちを見つけないと…。

あなたはチラチラと腕時計を見る。

今度は誰が死ぬか不安でたまらなかった…。

「つかさ…」

あなたはぎゅつと手を握る。

「なに、こなちゃん」

「……やっぱりいいや」

「…へ？」

……言つてしまいそうだった…。

つかさは消えないで…と。

そんなのつかさが頷いても変わらないのに…。

それにつかさに余計なことを背負わせてしまう。

なら言わない方が正解だよね……。

「…あれ？ あの二つの影つてあなたと……つかさ？」

かがみは古時計の手前を指差す。

それに従つてあやのもそつちの方を目を凝らす。

確かに泉さんとつかささんだ。

よかった…。二人一緒だったんだ。

「あ、おーい、かがみー！」

向こうもこちらに気づいて手を大きく振る。

あの様子だと怪我とかはしてないわね。

つかさもシヨックで元気がなさそうと思つてたけど余計なお世話みたい…。

なにが原因かわからないけどあの子も強くなつてゐるじゃない。

「ひ、柊ちゃん…あれ…」

あやのが怯えた声で私に話しかけてくる。

「なに？あや」

かがみが隣にいる友達の名前を最後までいいかけた時に声が詰まる。遠くにいるこなたたちも“あれ”には心底驚かされていた。

古時計の側にはさつきまでいなかったはずの大きな槍を背中に背負ったモンスター。そしてもう一人は礫にされているゆたかが無惨な姿でいた。

「ゆ、ゆうちゃん！」

こなたは我を忘れて妹のような存在の元に駆け寄る。

「その青髪…、今は動くな…」

しかしこなたは止まらない。いや怒りに支配されて自分の意思では止まれないのだ。

「ゆうちゃんを返せー！！」

「動くなと言ったはずだ…」

こなたから数十メートル離れた場所から突きを放つ。それは地をえぐり、衝撃波としてこなたを襲った。

「…ぐうつ！？」

う、うそ…。ここまでとどくなんて、なんて腕力…。

これじゃあゆうちゃんに近づけない…。

「こなちゃん！大丈夫！？」

「こなた！」

「泉さん！」

でもみんながいれば絶対に勝てる！

三人が約束の場所へと集まる。

これでゲーム参加者全員が揃った。

「ククク…、この女の子よりは楽しませてくれるみたいだな」
でかい槍を片手でブンブンと軽々しく回す。

それに対してこなたは剣を構え直す。

いくら相手が強くても私は諦めない

私たちが目指す場所には大事な人が待っているから

第88話 嵐の中で

「こなた！」

「了解ー！」

かがみとこなたは左右から攻撃をしかける。
だがどちらも片手で防がれ大きく弾かれた。

「ふおおっ！？」

こなたは壁に激突。

かがみは地面にたたきつけられた。

「な、なんて強さなの…」

かがみは自分たちとモンスターの歴然とした力の差に希望を失いかける。

それは他の三人も同じことだった。

「ええい！」

あやのは背後から火の魔法をかける。

だがびくともせず火は弱々しく消えた…。

つかさもマシンガン撃つが硬い皮膚みたいなもので全て体をえぐる前に無効となる。

「こ、こんなの勝てないよお…！」

「つかさ！ 諦めないで攻撃続けて！」

集中砲火を浴びせればどこかに傷はつけれるはず。

私たちが勝つにはそこから打ち崩していくしかない。そう考えていたかがみは激励をみんなに放ったが、それぞれの攻撃は全くノーダメージ。

「ぜ、全然効かない…。いったいどうしたら…」

あまりの強さにこなたは集中力が切れて、握っていた剣を弱めてし

まう。

それをモンスターは見逃さなかった。

「隙ありだ……」

「がっ……!？」

間合いを一気に詰められて反応が遅れる。

こなたの腹に強力な拳が入り軽々とふつとぶ。

「こなちゃん！」

「貴様もふつとべ……」

こなたがやられてつかさの体が一瞬止まる。

「え？」

槍の衝撃波はこなたをひき止めた時にも増して激しくつかさを捲き込んだ。

数秒で二人がやられたことにかがみは先程まであった僅かの勝利の可能性が完全に途切れた気分だった。

「次は……お前だな」

かがみの方を見てモンスターの槍は空気を衝いた。

衝撃波が真っ直ぐと進路が変わることなく向かってきた。

「……………!」

「柊ちゃん！伏せて！」

「あ、あやの……?」

「“魔法防護壁”！」

かがみの前に現れた壁によって弾かれた魔法は光を失い分散しながら地に落ちた。

「はあはあ……、こ、これ以上みんなを傷つけないで！」

「魔法か……」

あやのの能力を確認したモンスターはギラリと睨み付ける。

「……邪魔な能力だ」

「え？」

そして次の瞬間、モンスターが視界からロストする。

敵の動きについていけずあやのは停止してしまう。

「あやの　！」

そしてかがみがあやのの後ろにモンスターがいることに気づいた時には、すでにあやのの体に槍が貫通していた。

「うう、痛っ」

こなたは土を払う際に右腕が痛む。

同時にお腹も相当こたえていて戦うには厳しかった。

今までゲームでは経験したことのない敗北感がうずく。どうしたら

あいつを倒せるの…。

その答えが全く見えない…。

“ピーー、峰岸あやの、シグナルロスト”

「…………え？」

こなたは耳を疑う。

次に戦場を伺った。

「でやあああっ！」

かがみが氷に変化したグローブを装備して闘っていた。

他にはモンスターが一人、さっきまでいたあやのの姿は現存していなかった。

「そ、そんな…」

私の剣もかがみのグローブもつかさの銃も効かない…。

これじゃあ勝てない……。

こなたはその場で力抜ける。

椿君……もうわからないよ……、どうしたらいいか……もう……。

「きゃあっ！」

かがみは槍の圧力と攻撃によって身体中に傷がつけられる。

特に足にダメージを受けすぎたかがみは崩れるように倒れた。

深く突きの構えをする。

に、逃げないと……。

かがみは頭ではそれが優先されているはずなのに体が動かない。

「お、お姉ちゃん！」

つかさは銃を捨てて体当たりをする。

しかし、

「邪魔だ……」

ギロリと殺気がほとばしりつかさの胸元に手を飾す。

「あ……やあ………」

恐怖で言葉が出ない……。

「死ね……破壊魔法“ガルガンティア”」

手のひらから黒き稲妻が光りつかさを貫いた。

「っ、つかさああ……！」

「つかさが…！」

行かなきゃ…。

まだつかさはやられてない…。

みんなを守らなきゃ…！

こなたは剣を拾い刀身についた砂を払う。

「……」

ゆつくりと足を動かす…。それは一步一步が何倍にも重く感じた。
私なんかが行っても守れるの…？

……ううん…きっと守れない。

かがみもつかさもゆうちゃんも誰一人として…。
ならなんで私は進んでいるんだろう…。

逃げちゃえばいいのに…。リタイアする方法が見つかるまで隠れて
ればいいのに……。

けどそんなの納得いかない…。

“俺ってお人好しだから”

今なら椿君がああ言った理由がわかるよ…。
だって私と同じバカだもんね……。

「お…姉ちゃん…」

「つかさ、動かないで！今薬を…！」

しかし道具を探しても治癒薬は全部使い果たしてしまった。

つかさも由佳ちゃんに使用して切らしている。

それでもかがみは何かないかと諦めないでいた。

「もう…いいよ」

「よくない！　つかさがいなくなるなんてよくないにきまつてるじゃない！」

「……………」

「私たち姉妹なんだから見捨てるようなことなんて絶対にしない……！」

「でも……私とお姉ちゃんじゃ違いすぎるよ……」。

お姉ちゃんは勉強とかスポーツとかいろいろできるのに私はドジばつかで……。皆に迷惑かけて……

私がいてもいなくても同じだよ……」

「同じじゃない……！」

かがみは強く否定する。

「私がどれだけあんたに救われたと思ってるの！？　だからいかないで！　つかか！」

「なんか……お姉ちゃんに言われると照れるな……」

あははと微笑するつかさ。

「私ね……ほんとはずっとお姉ちゃんを目指してたんだ……。けどやっぱり私なんかじゃ無理だよ……」

お姉ちゃん、凄く高みにいるんだもん……」

「そ、そんなことない！」

私はいつもつかさの横にいるから……！」

「……お姉ちゃん……今度また買い物行こ……」

「え？」

「前みたいにこなちゃんたちも連れて……あと椿君も……」

「うん……！　うん……！」

「約束……だから……ね……」

「つ、つかさ……？　つかさ……！」

呼んでももう話しかけてはくれない……

このゲームをクリアするまではずっと……。

ねえお姉ちゃん……私なんかずっとお姉ちゃんの妹でホントにいいのかな……。

“ピーー、柊つかさ、シグナルロスト”

第89話 手段と目的

「まだ…特殊能力を使う気力があるとはな…」

こなたの剣は荒々しく炎を帯びていた。

「オタクは心が折れない限り好きなものには貪欲になるからね…」

「なるほど…、つまりコイツラのため…か。」

だがいくら強くても私には勝てないのが事実だ…」

「勝つことなんて望んでない…」

「……？」

ただ私はみんなを……。

「竹本さん…残り三人です」

梨原は断腸の思いだった。

たかがゲームなのに何でこんな辛い思いをしなきゃならないんだよ…。

「兄沢さん…、今のうちに岩崎みなみ、日下部みさお、萩野由佳、田村ひより、峰岸あやの、そして…残りの三人の親にこの事態を報告してください」

「なっ…！？ それは伝説の少女A達が負けると考えているのか！？」

全員がその答えを待った。

「……………はい」

「まさか勝つことが目的じゃない…、守ることが目的であって強さはただの手段でしかないと言うのか…？」

「……………」

「下らないな…。そんな甘さがあるから結果誰も守れはしないんだ…！」

モンスターは手のひらの照準をこなたではなくゆたかに向けた。

「“ガルガンティア”」

「ゆたかちゃん…！」

雷のグローブに変化させたかがみは稲妻をゆたかにとどかせるまえに正面消滅させる。

「まだ……動けるのか…」

モンスターは槍をかがみに放つ。

風を纏い飛んでくる突きはかがみの左肩を破裂させた。

「ぐうう…うううっ！」

「なっ！？」

一度怯んだかがみだが体勢を立て直し懷に今度は焔に変化されたグローブをつきだす。

鈍い音、そして皮膚が僅かに崩れ始めた。

「こなた！」

「うん！」

特殊能力の発動によってパワーアップした剣を抜く。狙うはかがみが集中攻撃してた懷になんとか斬撃をいれることができれば…！

「喰らえー！」

「く、回避をしなければ…！」

だがかがみは後ろに回ってがっしりと逃がさないように固定する。

「は、放せ！こんな近距離にいたら貴様も…！」

「百も承知よ…」

「こ、こいつ…！」

「ふふ、これで終わりね」

かがみが粘っている間にこなたは超スピードで剣を振り抜く。

「や、やめ」

刃はモンスターの腹をぶち壊す。

そして肉体が内側から爆発した。

「やった…？」

こなたは粉々に砕けたモンスターの肉片を見る。

倒したんだ…。

あの化け物を私たちが…。

ふと横を見るとかがみがうつむけに倒れていた。

「か、かがみ…、やったよ…。私たち勝ったよ…」

しかし、かがみの体はピクリとも動かなかった…。

「かがみのおかげで勝てたんだよ……、だからもっと笑ってよ……」

話しかけても反応はない…。

「ねえ… かがみん……」

「ちょっと待て…、あんたなに人が死んだみたいな雰囲気にしてるのよ…」

かがみは体を起こすがダメージが激しくフラフラだった。

「いやー、そっちの方が最後にふさわしいかなあなんて」

「バカ…、そんなことより早くゆたかちゃんを解放させないと……」

「そだねー」

こなたはかがみに肩をかして丘に見える古時計に向かって歩く。

そうはさせん

「え？」

今何か聞こえた…。

こなたは爆発があつた地を振り返る。

そこには顔だけのモンスターがいた。

まさかまだ生きて…！？

徐々にモンスターの肉片が赤く光り出す。

「こなた…、あんたはゆたかちゃんと古時計を鳴らしに行って、そうすれば全て終わるんだから……」

かがみの目にははつきりと覚悟の意志があった。

「…何分もつの？」

「…何分で行ける？」

問いを問いで返されてこなたは少し悩む。

実際走らないとわからないがたぶん五分はかかるだろう。

「……三分」

こなたはかがみの気持ちを少しでも楽にさせようと早めの時間を言った。

「…わかったわ、なら早く行って…」

こなたはこれ以上何も言わずにこの場をかがみに任せた。

「相変わらず小さいなあ…」

かがみはいつも見てきた背中を見届ける。

あの子を守るためにも任務を果たさなきゃ…！

モンスターは再生能力によって体の破片をくつつける。

「ほんと気味悪いわね…、いったいその体は何でできてるのかしら…。」

ヨーグルト？」

「……わざわざ再生を待つとは…、よほど自信があるようだな」

「別に、硬い皮膚が再生できてないあんたなんか負けないわよ…」

「……その強気な心とツインテール……へし折ってやる…」

「……できるならね。あとツインテールは関係ないじゃない」

「……殺す！」

モンスターは怒りを見せて向かってくる。

みんなの叶わなかった夢を壊させはしない……。

こなた…あんたはそれを背負ってるんだからしっかりやりなさいよ……。

第90話 流れる自然

「はあああつ！」

「ぐううう…！」

かがみの氷の拳とモンスターの槍がぶつかり合う。

もう片方のグローブでパンチを繰り出すがギリギリでかわされる。

そのカウンター形式でモンスターも空いている腕で殴りにかかるが
かがみは一步下がり回避する。

次にグローブを雷に変化させて止めをさしてやる…。

かがみはフットワークで相手を揺さぶり隙が生まれた一瞬にストリートを放つ。

しかしモンスターの反射神経は人間よりずば抜けておりまたかわされた。

けど相手の方が身体能力、レベル、他にも基礎能力などが上回っているのはわかつている…。

だから私がすることはこなたのために少しでも多く時間を稼いでやること。

今はそれ以外考えちゃダメだ。

かがみは動きを止めずに

何度も足を狙う。

時間稼ぎに有効なのは機動力を減らすこと。

それには足を徹底的に狙ってやる…！

「……………狙いはいい…。だが……………」

モンスターはかがみからの攻撃を無効化するために距離をとる。

そして槍からの衝撃波ではなく強烈な真空波がかがみを突きにかか

った。

「しまっ」

かがみは両腕でガードするがズタズタに切り裂かれガードが解ける。かがみはそのまま素でダメージを受けてしまった。

その痛みはどうしようもないくらい痛い痛さだろう。だがそれでもかがみはグローブに雷を纏わせてモンスターの前に立つ。

「もう…やめたらどうだ…？」

「……………」

「女の子だからといって容赦はしないが……死ぬぞ？」

「別にかまわないわよ………」

かがみのグローブが激しく怒る。

「みんなが泣いてるのに………」

「なに…？」

「暗闇の中で…、つかさも…みさおも…みんなが今を泣いてるのに……………」
私が手を差しのべなかったら……みんなの笑顔が二度と見れなくなるじゃない……！」

かがみは再び接近戦にもちこむ。

右に左にと拳を奮わすがかすりもしない。

足がついに限界に達して立つことすらままならなかった。

腕も上がらなくなり意識が遠のく。

それでも……。

「椿君が……いない世界なんて……私は認めないっ……！」

「……………」

モンスターの影がかがみの視界から消える。

「……………っ！？」

何が起こったのかわからず動きを止めると気づいたら槍がかがみの腹に穴を開けていた…。

「ゴフッ……………」

流れる血はただ見ることでしかできずにかがみは倒れた……………。

「っ、着いた……………」

こなたは古時計の前に立つ。

その隣にはゆたかの姿があった。

「ゆうちゃん！」

「お…ねえちゃん？」

こなたは先に礫にされたゆたかの縄を解きにかかる。

「動かないで！　すぐにほどこから！」

こなたは剣先を縄に向ける。

ゆたかの体を傷つけないように慎重に切った。

もたれてくるゆたかを支えてゆつくりと地面に足をつけさせる。

「あ、ありがとう……」

「いやいや、ゆうちゃんが無事でよかったよ。

それにしても……」

こなたはゆたかとゆたかの職業武器の巨人の斧を見比べる。

「？」

「小さい女の子に大きい斧か……。やっぱり萌えるね……。ナイスチョ

イス」

こなたは親指をたてる。

「そ、そんなことより他のみんなは？」

「………残ったのは私とゆうちゃん、それから」

ガルガンティア！

「……！ ゆうちゃん伏せて！」

「きゃああつ！」

後ろから黒い稲妻が走る。

二人とも間一髪でかわすがさっきまでいた場所は腐ったように焦げていた。

まだあそこにいたらと思うとゆたかはゾツとした。

「……避けた……か」

「………！ あ、あの人はひよりを殺した………」

ゆたかは遠巻きでもわかった。

ひよりを貫いたあの槍、

硬い皮膚はなくなっているけどあの体つき、

そして厳つい顔……。

間違いない……！

「何でここに………じゃあかがみは………！？」

こなたは丘の上から闘っていた所を覗く。

そこには真っ赤に染められたかがみがいた。

シグナルロストの報告はないので生きてはいる。

けどあれじゃ一歩も……！

「失せろ……じゃないと闘う理由ができてしまう……」

かがみをよくも……！

よくも！ よくも！！ よくも……！！

「許さない……！！」

こなたはゆたかの斧を手にとり立ち向かう。

すでにかかるの疲労を抱えているために見た目とは逆に弱々しく斧が振り下ろされる。

やはり片手で跳ね返されたうえに槍の柄の部分で殴られる。

「うげっ！」

こなたは派手に飛ばされてしまう。

そしてそれを追うようにモンスターは飛んでこなたにトドメをさそうとする。

「終わりだ……」

「お姉ちゃん！」

「モニター……見なくていいんですか？」

みゆきは一人でしゃがみこんでいるそうじろくに話しかける。

「……こなたは……たぶん死ぬかもしれない……」

「え？」

そうじろうの言葉にみゆき耳は疑う。

「あいつは俺に似てすぐに周りが見えなくなるんだ……」

「でも……そんな泉さんだからこそみんなが守ってくれるんだと思

いますよ……」

「……………」

考え込んでいるとパーティが慌てて来る。

「タ、タイヘンね！ソウジロウさん！ イマ…コナタが…！」

「……！？」

こ、こなた…？

そうじろうはゆっくりと立ち上がるが前には進まなかった。

見るのが怖い……。

そんな弱気な心が残った。

そんなとき、みゆきの柔らかい手がそうじろうの背中を押す。

「あなたが見守らないでどうするんですか？」

どこかあなたに似た優しい笑顔…。

「……………」

そうじろうは気合いを入れてモニターの目の前まで行く。

…… そうだ…、かなたと約束したじゃないか…。

あいつは大切にするって…。

この18年間幸せだったって思ってくれるように……。

なのに俺がしっかりしないでどうするんだよ…。

心臓がぶつつぶれそうな緊張がそうじろうを襲う。

だがそんなもの今のそうじろうには関係なかった。

竹本さんたちがいるところまで来ると、全員モニターを見て信じられないという顔をしていた。

そうじろうの頭に想像されるのはこなたが死ぬ間際……。

そしてそこに映るのは……。

第91話 星の唄

「ま、まさか……まだ動くのか……!?」

かがみのグローブが槍の先を掴みとる。

血だらけになりながらもかがみの瞳は死んでいなかった…。

「早く……鳴らしに……」

「か、かがみさん……」

こんなにぼろぼろになってるのに……。

指の爪も完全に割れていて痛いじゃ済まされないくらいひどかった。きっと全力で駆けつけてくれたんだろう…。

本気の姿にゆたかは鳥肌が立つ。

私になりたい人は本当はかがみさんみたいな人なのかもしれない…。だったらわたしは……！

「……わ、私も戦います！」

ゆたかは斧を拾い上げて両手にしっかりと装備する。

あまりの威圧感にガタガタと足が震えるがゆたかはみなみを救った時の勇気を振り絞る。

「ゆうちゃんやかかがみが戦うなら私も一緒に……！」

こなたは剣をモンスターに向けるが、

「ダメ……よ……、こなたは……あつちを……」

かがみは古時計を指差す。

「決着……つけてきて……」

「で、でも……！」

「早く……！」

「……っ！」

かがみの顔が鬼のようになってこなたはビクツとする。
横ではゆたかがこなたに優しく微笑んでいた…。

こなたはかがみから追い出されるように古時計まで走っていった。

しかしモンスターはそれを見逃す訳もなく、こなたを後ろから殺そうとするが、かがみが手を大きく広げて行く手を阻む。

「どけ…」

槍をかがみに向けてくる。

「みんなの叶えたいものがあそこにあるの……。
邪魔しないで…」

「どけと言ったのが聞こえなかったか……?」

「邪魔しないでって言ったのが聞こえなかったの……?」

「ハア…ハア…!」

どこか寂しそうに置かれた古時計…。
やっと…終わる。

こなたは古時計の下に設置された鍵を拾う。
そして裏に回って鍵をさしこんだ。
すると神々しい音色が世界に響く…。

「す…ごい………」

包まれるような旋律は聴く人を魅了した。
これがアニメで流れたら私堕ちちゃうかも…。

「…って早く願い言わないと」

こなたは古時計に触れて願いを伝える。

椿君達の魔法を解除して

想いはこなたの体を伝って古時計の内部へと流れ込んでいった。
薄い碧色が古時計を飾る。

そしてこなたに女性の声が聞こえた。

『願いはわかりました』

それに対してこなたは心で話しかける。

『それじゃあ』

『しかし叶えることはできません』

えっ……！？

『な、なんで！？』

『願いが叶う対象は“一人”となっています。』

今回の場合は“複数の人々”にかけられた魔法を解くということなので願いは叶えられません』

そ、そんな……！

これじゃこのゲームをした意味が……！

こなたはあまりの展開に絶句する。

どうしたら……、どうしたらいいの……！？

かがみやゆうちゃんはゲームオーバーになっただけからゲームをクリアした時点で魔法は解ける。

でもゲームオーバーになって一度意識が奪われたみんなの魔法は解けないようになってる……！

それに意識に戻るのは誰か一人だけ……。

あの中から一人なんて私には選べないよ……！

『さあ、どうしますか？』

早くしないとかかがみやゆうちゃんもゲームオーバーになってしまう……。

何か、何かないのか……。

『……………あ』

ある……。

一つだけ……方法があるかもしれない……。

で、でもこれは失敗する可能性が高すぎる……。

そもそもこの願いに成功なんて選択肢があるとは思えない。

シヨップで15000円のギャルゲーの限定版を買い買わないか
以上に迷う……。

ただこの方法しかみんながいる世界にはないだろう。

なら一か八かで……！

『わ、私の願いは 』

「あが……！」

かがみは分厚い拳を直にくらう。

勢いよくふつとび、崖岩にぶち当たる。

ゆたかはかがみを攻撃したその隙について斧をモンスターの頭上におもいつき振り下ろすが槍によって防がれる。

そのまま力で押し返されてしまいゆたかの攻撃も無駄となってしまう。
った。

「どうしよう……。どんなに攻撃してもほとんどが効いてない……」

体力も空っぽになりかけているゆたかやかがみにとって絶望とも言える修羅場だった。

ポーンッ！……。

「うわぁっ！」

「な、なに！？」

古時計の方角から何か人が飛んでくる。

ゆたかはそれに見覚えがあった。

「お、お姉ちゃん!?」

願いを叶えに行ったはずのこなたが前より傷だらけになっていることに驚く。

しかし、さらに天地をひっくり返すほど信じられない光景を目の当たりにする。

「う、うそ……! なんてあいつがここに……!?!」

古時計と重なって立っているそれは椿が死んだ原因であるLordの姿だった。

第92話 あいつにリベンジ

「みなさん、久しぶりですね……」

Lordは紳士的に礼をする。

だがそれは不気味な空気を秘めており、紳士とは言いがたかった。

「……ふむ、椿君が死ぬ前に体を入れ換えられたせいで僕はずつこの状態になってしまったのは納得できないが……、まあいい……。これでまた暇潰しができる」

「な、なんであんたが……」かがみが怒り混じった声で問う。

「ククク、僕が生き返ったのは泉こなたのおかげだよ」

「こ、こなたが……？」

そんな……。

こなたは椿君たちを助けるはずだった。

それなのになんで……。

「……………へー。見たところみんな重症だ。早いとこ皆殺しにするか」

Lordは椿が使っていたデュエリストのカードを一枚引く。

「いきなり最上級カードか……。魔法カード“デリート”」

や、殺られる……！

かがみは両手でガード体勢に入る。

しかしカードが光った瞬間に私たちではなくモンスターが別物になっていた。

「ぎ……ああ……！？」

槍は破壊され、そしてモンスターの下半身から上が跡形もなく消えた。

「なっ……！？」

私たちを狙わずにモンスターを…!?

こいつ…、いったいどういふつもりなの…。

「警戒はしないでいい。泉こなたと約束をした。邪魔をしなれば命は奪わない」

約束…?

かがみはいまいち理解できないが今は敵ではないということを知っている。

「で、でもまた再生が…!」

ゆたかが斧を下半身のためのモンスターに向ける。

「再生能力は使えないよ…。あれは脳が生きているからこそできる。今は完全に消去した。泉こなたがこいつをバラバラにしたときは脳がまだ動いていたんだろう」

そ、そうなんだ…。

「…さて、それじゃあさっきの約束は守ってもらうよ、泉こなた」

「わかってる、約束は守るよ……」

「……?」

さっきから言っている約束ってなんなの…?

その単語にかがみは不審に思う。

ま、まさかヤバイ約束とかしたんじゃない…。

「こ、こなた…、あんたなんの約束を……」

不安がるかがみとゆたかにこなたは一通り話をする。

「つ、つまり一対一であの人に勝ってみんなを元に戻してもらってこと…?」

「うん……」

「椿君のとき同様暇潰ししてわけね……。でも負けたらあんたの意

識は……」

「消えちゃう……」

「……」

…たしかに複数の魔法を解くという願いが叶わないなら違うやり方でやるしかない。

だからこなたは魔法をかけた張本人なら解除法を知っているかもしれないと思ってあいつを蘇らせて聞こうとした。

でもあいつはただで教えてはくれずに退屈しのぎとして勝負に委ねたということか…。

でもその命運をこなた一人に背負わすことになってしまう。

命がかかった戦いがどれだけプレッシャーになるか、わかるはずはないが相当なものよね……。

「かがみたちはさ…、もうリタイアしなよ。私は一人で大丈夫だし、ゲームの目的が達成されたからリタイアできるようになってるからさ……。だから」

「うそ……」

「え？」

かがみがこなたの説得のような言葉を歪ませる。

「こんなの……一人で大丈夫なわけじゃない……！」

「か、かがみ…？」

「なんであんたといい椿君といいみさおといい…みんなそうなのよ……！ 何でもないみたいな平気な顔をして肝心なことを隠してて……！ 一人で全部背負おうとして……！ そういうのは自分の宿題の時にしてよ……！」

え、ええええええええ……。

そ、そんなこと今言わなくても……。

「どうしてみんな…普段は宿題見せてとか言ってくるくせにこういう時に限って気を遣うのよ……！」

「うつ……」

な、なんか否定できないのが辛い……。

こなたは胸あたりにグサツと何かが刺さるのを感じる。

「最後まで……一緒にいさせてよお……」

デ、デレ度MAX…。

こなたは終いに泣き出すかがみにドキツとした。

「……………わ、わかったよ……かがみ」

「こなた……」

かがみは安堵の息を漏らす。
肩の力が抜けて楽になった。

「……………」

こなたは一步近づいてかがみを抱きしめた。

「ちよっ……、こなた!？」

「……少しだけでいいから……このままでいさせて……」

「……………」

かがみは抵抗せずに逆にこなたを抱き寄せた。
静かで数秒の平和が流れているようだった。
ずっとこんな時間が続けばいいのに……。

「かがみ……ごめんね」

ピッ。

「……え？」

こなたの指がかがみの腕時計に搭載されたリタイアボタンを押す。
音を出したのと同時にかがみの体が薄くなる。

「こ、こなた!？」

「ごめん……やっぱりかがみには向こうで待ってて……」

早いペースでどんどんかがみの体が消えていく。
それをこなたは優しい顔で見ていた。

「あ、あんた何で!？」

「ここにいるより向こうの方が安全だから……安心して」

「こなた!!」

幾度となく呼んできた名を必死に叫ぶ。

しかしいつものような冗談染みた返事は返ってこなかった…。

「ねえかがみ……」。

数十分後の椿君や私は、笑えてるのかな……」

「こな　!!」

そこできかみの視界は真っ黒に染められた……。

「……………」

私が生きて帰れたらきつとこの事でかがみは怒ってたりするのかな

…。

それとも……。

第93話 微塵のサクラ

「お姉ちゃん…」

「ほら、ゆうちゃんも早くリタイアを…」

しかしゆたかはわかつてはくれなかった。

首を横に振ってこなたの言うことを拒絶する。

「ゆうちゃん…」

「わ、私はお姉ちゃんのそばにいたいだけなの…！ だから……」

「……ダメだつてば。ゆうちゃんは早くゲームから抜けなきゃ…」

「お姉ちゃんの近くで見守りたいの…！」

「……私の心配なんかなくていいから。だから早くここから」

「

「ッ！ 私がお姉ちゃんの心配をしたらいけないの…！」

「ゆ、ゆうちゃん……」

普段素直なゆうちゃんが私のことを思っていることは嬉しい…。

けどゆうちゃんが安全になるためになんとかしないと……。

「ゆうちゃん、じゃあせめて向こうの岩陰に避難してて。ここに」

いたらゆうちゃんが怪我しちゃう…」

いくら言っても聞かないこなたは先に折れたフリをする。

「う、うん」

ゆたかは言う通りにしようとかなたが示した岩に隠れようと背を向けると、こなたはゆたかの背後に素早く忍び寄り首裏を力強く手刀した。

「あっ……」

…お姉……ちゃん…？

ゆたかは衝撃に負けて

すうーっと可愛い瞳が閉じ意識を失う。

「……………」

こなたはゆっくりとゆたかの軽い体を持ち上げて例の岩陰にゆたかを運ぶ。

そして横にしてリタイアのボタンを押そうとするが少し考え止まる。

「やっぱりゆうちゃんにはここにいたほうがいいのかな……」

かがみは傷が酷かったからリタイアさせたけど、私に何かあったらゆうちゃんに後のことは頼んだほうがいいかもしれない……。もしかしたらLordも私との戦いで重症だったりしたら、ゆうちゃんでも軽く倒せるよね。

結局ゆたかをそのままにしてこなたは振り向くことなくすぐに引き返した。

「……彼女はリタイアさせないの？」

Lordは意外そうに訪ねる。

「そりゃ私がやられたらまだ可能性があるゆうちゃんに任せるためだからね」

「なるほど……、それは怖い切り札だな。ツインテールの女の子は死にかけだったから全てをあの子に託したってことか」

「まあ負ける気はしないけどねー」

「ふん…、そのボロボロの体でどこまでできるか見物だな……」

「こなたー!!」

かがみは勢いよく目を覚ます。

しかしそこはゲーム世界ではなくカプセルの中だった。

「も、もしかして私……」

か、帰ってこれた……？

……あ、そうだ……、たしか私はこなたにリタイアを……。じゃあこなたは？

他のみんなはどうなってるの？

かがみはシートベルトやヘルメットなど不要なものを取り除く。カプセルを開けて疲労を達した足で抜け出す。

足裏が下のコンクリートについてカツンと音が響く。

「か、かがみさんっ！」

それに気づいたみゆきがかがみの肩を貸す。

「大丈夫ですかっ!？」

「み、みゆき……、こなたは……？」

「……泉さんは今……」

みゆきはモニターを見上げる。

かがみも繋がるように凝視して焦点を合わせた。そこにはLordと死闘を演じるこなたがいた。

「こなた……」

死闘といっても見るからにこなたの方が圧倒的差で圧されていた。やっぱりこなた一人じゃ……。

こなた一人……？

「……あれ？」

そういえばゆたかちゃん……？

たしかまだ向こうにいるはずなのに……。

まさかゆたかちゃんまで現実に戻ってきたの……？

かがみはゆたかのカプセルを見つけ奥を見据える。

やはりまだ眠っていた。

……ということはゲームの世界のどこか安全なところに避難しているか、もしくはやられたか……。

……なにせよ今はこなたが戦っている。

私たちの全てを背負って……。

「武器カード、“マグナム”」

「あうっ！」

こなたの太ももに銃弾が貫通する。

血が吹き出し痛みに耐えれずその地に倒れた。

「う……う……！」

っ、強すぎる……！

こんなの勝てるわけないよ……！

剣を握る力もなくなり万事休すだった。

「魔法カード、“生産”」

一つしか持っていなかったマグナムが増えて二丁になる。

Lordは躊躇なくこなたの両腕を撃ち抜く。

「ああっ……！！」

「これで動けないね、泉こなた」

見下すようにこなたの真上へと立つ。

わ、私が負けたら……みんなが……！

「うぐ……ぐ……」

「……………」

こなたは一メートルもない場所にある剣を拾おうと匍匐前進する。

しかし、それを黙って見逃すほど甘くないのは椿君が戦った時にわかっていた。

「しっこいな」

やはり片方のマグナムが火を吹いた。

高速に発射された弾は肩に直撃してこなたはまた力が入らなくなる。

「み……んな……」

「死ね…、勝負は僕の勝ちだ…」

頭に銃を突きつけられる。

恐怖が一気に押し寄せてこなたは身体中を震わせた。

これが死の前と考えたら当たり前のことだ。

こなたは少しでも現実から逃げようと瞳を閉じた。

真っ暗で何もない世界。

もうすぐ私もこの世界に入ってしまう。

そしてそれは二度と光がこぼれる世界を見ることができなくなってしまうということだ。

つまりみんなともう…会えなくなる……。

「サヨナラ……かがみ……椿君……」

「お、お姉ちゃん！」

ゆたかが岩陰から姿を現した。

目が覚めるのが予想外にも早かったためこなたはこんな状況にも関わらず驚いた。

「お姉ちゃん！今助けるから」

「っ！」

ま、まずい……！今来たらダ、ダメだゆうちゃん……！
殺される……！

「ゆうちゃん、横に……！」

だが遅かった。

マグナムの銃口はゆたかに絞られてしまった。

「……言っただよ、邪魔しなければ命は取らないって……」
「え？」

「や、やめ……！」

ドンッ！

マグナムがキツい音を放ちゆたかを制した。

「あ………」

私…最後まで役にたてなかった……。
ごめんなさい、みなみちゃん……。
ごめんなさい、ひより……。
ごめんなさい、椿君……。そして……。
「ごめんなさい……お姉ちゃん……」
「ゆ、ゆうちゃあぁぁあん!!」

“ピーー”

“小早川ゆたか、シグナルロスト”

第94話 遙か彼方から

「ゆ、ゆたかちゃんか……」かがみの声波が震える。

残るはこなたただ一人……。

もし負けたりでもしたら……。

かがみは戦いにおいて最悪の結果を想像する。

だがそれはかがみだけでなくそうじろつや店長たちも……。

「よくも……！よくもゆうちゃんを……！！」

「言っただよ、邪魔をすれば殺すって……」

「こ、のおおっ……！！」

こなたは潰れた右手で殴りにかかるが楽々とかわされた。

「うっ……！！」

そしてすれ違い様にマグナムから射たれた弾が右足を壊す。

もはや動ける四肢はなく勝ち目なんか微塵もないかというくらい絶望だった。

「あのピンクの小さな女の子もいなくなっただしこれ以上切り札はないだろ……。薄紫のツインテールの子もリタイア……。真正正銘の負けだな」

「……………それでも」

「ん？」

「それで…も…、ゴホッ、ゴホッ…まだ…負けてない…」
まるで負けず嫌いの子どものように諦めることをしなかった。
最後までわからない…。
無謀と言える未来を信じたい…。
「……………なら終わらせてやる。その夢を…」

ドンッ

最後の一発がこなたの息を仕留めた。
ピクリとも動かない体は灰へと化して無へと消える……………。

……………

……………

……………

……………

“ピーー、泉こなた、シグナルロスト”

“ 岩崎みなみ… 大草原にて爆発に巻き込まれシグナルロストを確認”

“ 日下部みさお… 死神の力を使いシグナルロストを確認”

“ 萩野由佳… 上級モンスターにやられシグナルロストを確認”

“ 田村ひより… 古時計付近にてラストモンスターにやられシグナルロストを確認”

“ 峰岸あやの… 同じく古時計付近にてラストモンスターにやられシグナルロストを確認”

“ 柊つかさ… 同じく古時計付近にてラストモンスターにやられシグナルロストを確認”

“ 柊かがみ… リタイアにより放棄”

“ 小早川ゆたか… Lordに撃たれシグナルロストを確認”

“ 泉こなた… 同じくLordに撃たれシグナルロストを確認”

“ 全員全滅を確認… ゲーム敗北”

「 ま、負け… た？ 嘘でしょ…？」
こなたが… あのこなたがそんな…。

かがみは目の前に広がる現実には否定の言葉を重ねる。
だがそんなことをしても何も変わるものなんてなかった…。
「くそっ！くそっ！くそっ！くそっ！」

梨原は分厚い壁を何度も殴る。

血に染められても怒りは痛みを遥かに凌駕していた。

「こんなの…あんまりネ…！」

パティやみゆきも辛く重い圧力がかかる。

もう帰ってこない十人の子どもたち。

何気無い日々が静かに幕を閉じた。

「こなた…俺は…俺は…！」

そうじろさんの涙が冷たく落ちる。

どうして…！どうしてこなたが死なないとダメなんだ…！

もうこれ以上俺を独りにしないでくれ…！

誰も俺より先に逝かないでくれ…！

「みなさん、ゲームを終了させます…、いいですか…？」

竹本さんは呟くように問う。

だが誰も答えることなんてできなかった…。

竹本さんは諦めた目で一つのボタンを押そうとする。しかし、そこに不可解なことが起こる。

“ピーー、泉こなた、シグナルロスト解除”

『なっ！？』

全員がその報告に驚く。

いったい何があったのか、時間の先に答えがある。

だが流れは遅く疑問の空気がさ迷う。

かがみがふとモニターを見るとゆっくりと立ち上がる小さな青髪の女の子が映っていた。

「こ、こなた…？」

かがみはその少女の名を呼ぶ…。

「な、何故君はまだ…！」

Lordは荒々しく声をあげる。

確かに殺したはずだ…。

シグナルロストの合図も出た…。

なのに何故シグナルロストが解除される…。

何故まだ立ち上がれるんだ…。

「……………ない」

「な、なに…？」

「私の娘とその友達を傷つけることは許さない…！」

こなたの周りに風が纏う。

その姿は以前のこなたとは確実にどこか違った…。

「だ、誰だ…？ 誰なんだ君は……………？」

「私…？ 私は“泉かなた”。。もう存在することが許されないこの子の母親よ……………」

「泉かなた……？ こなたの母親……？ でもたしか小さい時に亡くな
ったって……」

かがみはわけがわからなかった。

ゲーム世界にいることもこなたの体を使っていることも全てが…。

「かなた……お前……どうして……」

そうじろうは涙を拭いてこなたの体を借りたかなたを見つめた。
間違いない…。

あの雰囲気……、あの言葉遣い……、

“あれ”はかなただ…！

「お前も…戦ってくれるのか…？このイカれたゲームに……」

第95話 夢の終わり

「な、何でだ…。何でゲームの世界に入れるんだ…。普通の人間は入れないはずだぞ…。い、いったい何者なんだよ……」

あまりの衝撃的なことに冷静さを失うLord。それとは対照的に落ち着いた態度でいるかなた。

「一度言っただじゃない。私はあの娘の母親……、そして存在することができないただの幽霊……」

「ゆ、幽霊だと…。」

そ、それで貴様の目的は僕を倒すことか…。自分の子供の体まで借りて……」

「……私は直接手は出さない…。あとはこの娘に任せるだけ……」

ごめんね…こなた、そう君。

こなたの体が薄く光ってからかなたの気配がぷつぷつと消えた。

「い、いない…。さっきのは幻か…?」

ぶつぶつと独り言をしているとこなたが起き上がる。

「あいたた…、あれ? 私まだ生きてる?」

足の傷もない?? 確かに後ろからバーンてやられたはずなのに。

こなたは自分の怪我していた四肢を念入りにチェックするが傷は何もなかったかのようにきれいさっぱりとなくなっていた。

「おかしいなあ…。死んじやう感覚がはつきりと残っているのに気が付いたら無傷になつてるなんて…」

こなたは自分の状態に信じられないと感じているがそれ以上にLordの方が目の前の事実を受け入れにくかった。

「き、傷が治っている…? ま、まさか、これがあの幽霊の仕業だ

「…のか？」

だがLordにとって最悪な出来事はまだ続いていた。

“ピーー、岩崎みなみ、シグナルロスト解除”

もう鳴るはずがない機械が反応する。

「なっ…！？」

Lordの顔にシワがよせた。

それはさっきの謎の報告に対してである。

シ、シグナルロスト解除…？

あ、あの幽霊まさか泉こなただけでなく全員のシグナルを……！？
報告から数秒後にみなみがこなたの前に現れる。

「…あ、あれ？ わ、私は…」

「み、みなみちゃん…？ どうして…」

みなみが突如生き返ったことにより謎がさら深まった。そして流れるように続けて報告が鳴り響く。

“全員シグナルロスト解除、柊かがみ再起動可能となりました”

するといきなりかがみ以外のみんなが地に足をつく。

「……あ、あれ？ ここは？」

「どうなってるの…？」

何で生き返ったんだろ……。

そんな魔法なんて峰岸さんも覚えてないはずだし……。

状況が難しくつかさはいまいち理解ができないでいた。

「み、みんな…」

「あ、こなっち、これっていったい……」

「わ、私もよくはわかんない……」

みんなの意識もちゃんと元に戻ってる……。

それに私と同様に傷も見当たらない。

でも何で……。

「ザー……ザー……みなさん聞こえますか!？」

みゆきの声が通信が届く。

「みゆきさん……? 今どうなってるの? 私たち消えたはずなのにまた……」

「みなさんが生き返ったのはおそらく泉さんのお母さんが関係していると思います!」

「お、お母さん……?」

じ、じゃあ私のお母さんが助けに来てくれたの……?

で、でもそんなことあるわけない……。

だってお母さんは私が小さい時に……。

「みなさん竹本です! 原因は先程高良さんが話した通りです。です。でこれからやってもらいたいことはただ一つ、そいつをぶっ飛ばしてください!」

「ぶ、ぶっ飛ばすの……?」

あやのは少し躊躇したように言う。

「そいつを死なない程度に倒せば全てが終わります! 呪文はその後と問いただせばいいです! それにこちらにも考える点がありますのでとにかく今は勝つことに専念してください! こちらからは以上です!」

そう言い終わるとモニターには真っ暗な状態になった。

「さて、言うことは言いました。あとはかがみさん……あなただけですよ」

「はいっ」

かがみはコックピットに入って再びセッティングをする。

「つまり私たちはLordを倒せばいいってことだろ？ そんなじゃちやっちゃとやっちゃまおうぜ」

みさおは大剣を抜いてLordに向ける。

「みさつちの言う通り早く終わらさないとあいつが何を仕掛けてくるかわからないしね…」

由佳も続くようにトンファーを両手に持つ。

「何故…復活したのかはわからないけど立ち向かうと言っなら僕は手加減しないよ……」

Lordも対抗してカードを引く。

「この一撃で決めてやる……最上級魔法カード“メテオ”」
いつも以上にカードは光を煌めかせる。

そしてLordの真上から太陽がゆつくりと降りてきた。

「う、嘘でしょ…!？」

あんなばかでかいのを使ったら私たちは…!

「み、みんな！あれを止めるよ!」

こなたは剣を構えて準備をする。

つかさたちもそれぞれの武器をとり、メテオを迎え撃つ。

「止められるものなら…止めてみる!」

手を振り下げるとメテオはそれに反応して徐々にスピードを上げながら地上へ放たれた。

「みんな！いつくよー！」

こなたの合図によってみなみは弓を連射し、ひよりは絵を大量に描いて向かわせる。

あやのも遠距離から大魔法を唱えて真正面から衝突させた。

ゆたかは斧を、みさおは大剣を、由佳はトンファーを、こなたは剣を握りメテオに突撃する。

しかし、力の差は見るまでもなく…。

「ふおっ！ な、なんてパワー…！」

こなたはいきなりの振りかかる力に焦りを走らせる。

「げ、激ヤバだぜえ…！」

こ、こんな強いのもとも返せないってヴァ…！

全員で堪えるが進行方向は全く変わらず押されていた。

「こ…のお…！」

椿っちを元に戻すためにも…！

負けられない…のに！

由佳はじりじりと後ろへと強制的に下がってしまふ。

「はあ…はあ…くうっ…」

ゆたかは次第に力が入らずになる。

体力が元々少ないゆたかに耐久力戦は厳しかった…。

しかし眼はまだ死んでおらず斧を盾にメテオを止めようとする。

「ゆ、ゆうちゃん…、ぐっ！」

こなたはゆたかの異変に気づくが今はそれどころではなかった。

メテオはズイズイと地上からの距離を詰めてくる。

「こ、このままじゃ…」

残り三メートル……、二メートル……、一メートル……、

か、勝てない…！

こなたは思っではいけないことを考えてしまう。

その時、長い薄紫の髪が視界の端に入った。

「な、なに諦めてんのよ、こなた…！」

「…え？」

こ、この声はたしか…。

いつも私の横から聞こえてくる澄んだ声。

「か、かがみ…」

ツインテール、蒼い瞳、

それは紛れもなくかがみだった。

グローブを装備したかがみは氷を纏わせてみんなと共にメテオへと立ち塞がる。

「ま、まだ…終わってないじゃない！」

「…でも！　こんな力…！」

「でもじゃない…！　喋る余裕があるなら全力出しなさいよ…！」

かがみの腕の筋が血を吹き出す。

そうだった…。

かがみはリタイアからの参加だから怪我は治ってなかった…。

それでもかがみは来てくれて…。

「勝たなきゃ…！　絶対に勝たなきゃ！」

こなたは剣を握り直して踏ん張る。

これで勝って椿君と…！　また一緒に…！

「…無駄だ！」

Lordの一言と同時にメテオの速度が上がってこなたたちをさらに押し潰しにかかる。

「クツク、あと一人くらいいたら返されていたかもしれんがな…」

！
もう一度地獄に戻るがいい……！」

ちょっと待てよ

「……ん？」

Lordは視線を斜め下に向ける。

「久しぶりだなあ……」

「……っ！！ な、なぜ君がまた……！！？」

「俺にもわかんねえ……が声が聞こえたんだ……」

みんなが俺を呼ぶ声が……。
だから俺は……。

「みんな……今助けるから」

「た、助けるだと……！！？ 桃原椿の分際でえ……！！！！」

「っ、椿……君……？」

こなたは何度も今映っている人が本物か偽物か見るがあのほんわかした雰囲気はやっぱり椿だった。

しかしそれほど不思議ではなかった。

なんたってみんなが意識を取り戻したのだから椿君だって例外ではないのだから……。

「Lord！ あんときのお返しをたっぷりしてやる！」

椿も加わって十人全員……いや、現実世界にいるみんなの力がメテオを止めた。

「ぬう！？ ま、まさか、こんなことがっ！？」

“ゆたかは私が守るから……”

「受けとれ……！」

“椿うち…、私がそっちに行ったら受け止めてくれる？”

「これが……！」

“私が手を差しのべなかったら……みんなの笑顔が二度と見れなくなるじゃない……！”

「俺達の……！」

“私達が目指す場所には大事な人が待っているから……”

「絆だあああああああああー！！！」

劣勢になっていた状況も椿一人が来たことによりメテオはグンと押し返された。

まっすぐに向かう球体はLord自身を包み込む。

「があああああ……！！」

「今度こそ……俺達の勝ちだ……」

Lordが完全に消滅したことを確認して俺達は全員リタイアをする……。

「終わった……のか？」

そうじろうは自分に問う。

この惨劇がやっと……やっと……！！

「全員リタイアを確認しました……。ゲームをシャットアウトします……」

竹本さんがたった一つのボタンを入力するとゲームは起動を止めた……。

……俺…生きてるんだな…。

でもさっきまでは不思議な感覚だった。
ずっと暗くて怖い暗闇にいてしばらくしてこなたに似た人が手を差し伸べてくれて……。

いったい誰だったんだ…？どこかで会ったことはあるんだが……。

「つ、椿君…！」

かがみがカプセルから出てきた俺を勢いよく抱きついてくる。

「かか、かがみさん！？」

ツンデレを通り越した行動に戸惑ってしまう。

「よかった…また会えて…本当に…！」

胸元で泣きじゃくられ俺はどうすればいいか分からなかった。
とりあえず抱いた方がいいのか…？

俺はそつと手を回そうとすると、

「椿君…！」

「ゴフツ…！」

「キャアツ…！」

こなたやつかさ、他にも多勢がさらに突撃してきてバランスを崩す。

「いっつ……なんなんだよ…ってこなた……？」

そういえば記憶ちゃんと戻ってたのか…。よかった……。

「椿…ちい…！」

「由佳…お前来てくれたんだな……」

「そりゃマネージャーだからね」

「……………ありがとう」

「えへへ」

笑ってはいるがやはり由佳も泣いてくれていた…。

それが俺にとつてめちゃくちゃ嬉しかった……。

俺は起き上がろうとするとゆたかと目が合った。

「あ、えつと…その…」

ゆたかはなにやら恥ずかしがっているようだった。

「な、なに？ゆたか？」

「わ、私も抱きついていいかな…？」

ゆたかは涙を流しながらも言う。

よっぽど辛かったんだな……。

「おいで…ゆたか」

そう言うゆたかは俺の名前を言いながらぎゅっと抱きついてきた。

「……………」

ゆたかの甘い香りが俺を和ませた…。

『ジーーーーッ』

あ、あれ？ えっと…、なにやら痛い視線を浴びている気が……。

「相変わらず椿ってそういう趣味なんだな…」

「み、みさお、違うだろこれは！」

「椿君…年下好きなの？」

「あやのさん、違うってば！」

「…ゆたかに何かしたら許さない…」

「な、何でみなみちゃんが怒るんだ…！？」

「ツバキはアブナイヒトね」

「だーかーらー違うっていつてんだろぅがー！！！」

笑いあい、泣きあう様子をそうじろうは端から見ていた。

そして一つの不可解なことを思い出す…。

「……あれは本当にかなただったんだろぅか…」

「…かなたと言いますと伝説の少女Aの母親、そしてあなたの妻の？」

「はい……、昔に亡くなったんですけどあの時のこなたはたしかにかなたでした……」

「これは“奇跡”ですかね……」

「……そうかもしれません」

こなたの憑依、シグナル解除、そして桃原君の復活……

これらがこなたの仕業だったら俺は礼を言いたい……。

俺の娘と友達……、そして娘が愛する人を救ってくれてありがとうと

今はただそれだけ伝えたい。だからもう一度だけ、姿を現しては

くれないだろうか。

天使のような君の姿を……。

第96話 平凡な1日

意識を取り戻した日の夜に俺は今まで心配してくれた黒井先生や成美さんなどに連絡をいれた。

そしたらみんな本当に優しい声で“おかえり”って言うてくれて…

…。

改めて俺は思った…。

この人達は人を想うことを知っている……と。

翌日の朝、俺は大事をとってもう1日休むことになった。

別に俺は学校に行っても大丈夫だというのがみさんは、

「絶対安静だからね。もし一歩たりともこの家から出たらどうなるかわかってるでしょうね…」

と、俺に強力な釘を打ってからみんなと登校して行った。

ベッドの横に飾ってあるアニメ版のカレンダーを見ると今日は6月4日、意識が戻ったのは3日で意識を失ったのが6月1日……。

なのであまり時間は過ぎていないが俺はこの期間がとても長く感じた。

「……しかし暇だな」

静まる空間。

時計の針が進む音だけ聞こえてくる。

「……………」

しょうがない…。

みんなが帰ってくるまでゲームでもしとくか……。

部屋のテレビをつけてゲームを……。

「……ってしまった！！ 今日には最新ゲームの発売日だった！」

買いに行かねば！

サツと着替えた俺はサイフを持って兄沢店長がいる店へ向かおうとするが、ある人の言葉を思い出す。

“この家から出たらどうなるかわかってるでしょうね……”

俺は冷や汗をかく。

この家から出る……。

それはある意味極刑に並ぶ程の重罪だろう……。

しかし、あのゲームだけは買わねばならない！

あの大人気のギャルゲーだけは絶対に！

現在時間は昼休みだ。

今ならあいつに送ることができる！

ブーッブーッブーッ。

こなたの携帯が振動してメールが届く。

それに気づいたこなたはパカッと慣れた手つきで開ける。

「ていうかあんた、携帯持ち歩くようになったんだ」

隣のクラスから来たかがみが意外そうにする。

「まあそうしないと携帯じゃないし最近になってこれの必要性がわかってきたんだよね」

さてさて、メールは……と。

お？ 椿君からだ。

ちよつとドキドキしながら内容を読んでみる。

“今日発売のギャルゲー買いにいつてくれ”

「……………」

期待外れのメールにテンションが下がるこなた。

椿君って久しぶりなんだからもうちよつとフラグが立つようなこ
と送ってきてくれてもいいのに…。

こなたは返信をするため文字を打っていく。

そしてそれを相手側に送信つと。

「あ、チャイム鳴ったわね。私教室に戻らないと」

かがみは弁当箱を持ってB組から出た。

「私たちも授業の準備をしましょうか」

「そうだねえ」

みゆきとつかさも自分の席に戻っていった。

「お、返信がきた」

俺はバイブレータを止めて中身を拝見する。

“わからずや”

「……………」へ？」

わ、わからずや？

いったいなんのことだ？

俺なんかしたのか？

「……………」

まあいいか。

俺は構わずに返信する。

「せやから月がついとる革命が7月革命、2月革命、3月革命で

」

世界史の授業中、こなたはまたしてもイラッとする。

“買う店は店長がいる店でよろしく”

うー、相変わらず鈍いなあ…。

……ん？ いや待てよ……。

今のじゃちよつとわかりにくかったのかな…。

こなたは授業そっちのけで携帯に集中する。

「えと、“椿君は乙女心がわかってない” っ」と

「あつはつはつ。せやかて泉も教師心わかってへんやろっに」

「そりやそうですよ 教師心なんてそれは誰だっってわからない…

……んじゃない…？」

ゆつくりと携帯から顔をあげると横で黒井先生がニコニコと眺めていた。

「ん？ どないしたんや？ 続きは打たんのか？」

「あゝ、ちよつとやめとこうかな…」

「そうかそうかー。そないやったらそのご褒美に」

ガッンッ！！！！

「拳骨と没収だけですましたるわ」
ぼ、没収はともかく拳骨は酷い…。

「……遅い」

返信してからだいぶ時間は経ったというのになぜこんなにも遅いんだ。

まさかこなたの身に何かあったり？

いやいやそれはない。

授業中でもお構い無しにゲームしてるこなただ。その道はプロ級だから見つかる可能性は少ない。

まあ熱中し過ぎて周りが見えてなかったらわからんが……。

「ブーッブーッ」

……お、やっときたか。

俺は待ちくたびれた手先で携帯を開くと少し違和感を感じた。

“椿君は乙女心がわかってない。せやからもうちょっと勉強しいや”

「ん、ん？」

これ……こなただよな……。でもなんか違うような気がしてならない…。

見慣れない関西弁の接続語に最後の言葉遣い。

どこかで聞いたことがある。

考えているとさらにメールがくる。

“椿君は好きな奴とかおるん？”

「なっ!？」

す、好きな奴!?

そ、そんなの…!

……ってちよい待った。

語尾についてるのも関西弁。

よくよく考えたらこなたは関西弁など一切使わない。

そしてちようど近くに関西弁をバリバリに使う教師が一人だけいる
ような…。

“黒井先生って早く退職ならないかな”

よし、送信。

これでなんて返ってくるだろ。

「ヴーッヴーッ」

「返信早っ!」

“桃原あ、一回地獄に落ちたいようやなあ、ああん?”

「やっぱりか…」

関西弁!!黒井先生だからわかりやすい。

俺は早くこなたに返してくださいねとメールして眠りについた……。

ンだよ。

「まさか桃原あつち系の趣味があるのか？」

「えー、マジかよ」

「あんな小さくて可愛い子に手を出すなんて」

野次馬の陰口と視線が妙に突き刺さってくる。

とにかくここじゃ話はできないな。

「ゆ、ゆたか、とりあえず外に」

「あ、うん」

ゆたかの手をとってひどく急いだ。

「で、どうしたの？」

「えっとね、今日みなみちゃん家に行かない？」

「みなみちゃん家に？」

確か初めて家に泊まりに来たとき話してたけど高良さんの家の隣にあるんだよな。

「どうしても来てほしいんだけど…」

「え、でも他のみんなは？」

「ううん、今日は私とパティと椿君だけ」

「ふーん…」

みなみちゃん家に行くのは初めて出し抵抗感があるな…。

でもみなみちゃん俺の家に泊まってるんだから母親とかに顔を合
わせておいたほうがいいよな…

「椿君？」

「へ？ な、なに？」

「やっぱりダメ…かな」

「~~~~っ！」

ヤ、ヤバイ…！ 今どうしようもないくらい体温が上がってしまった…。

「ベベベ別にいいぞ」

「よかった　ちよっと待ってて、二人を呼んでくるから」

そう言っただけは一年の教室に走っていった。

「こ、これがみなみちゃん家…？」

「うん、とっても大きいでしょ」

「あ、ああ」

ゆたかの言う通りでかいな…。

庭も凄いいし、ひよってしてみなみちゃんってお金持ち？

となると父親とか母親は怖いイメージが…。

あ、な、なんか俺無駄に緊張してきた…。

「どうぞ」

みなみちゃんがドアを開けて案内する。

玄関には靴が一足しかなかったところを見ると親は外出中みたいだな。

ある意味ホッとしたよ。

しかし……外見だけではなく中身も……ってわけか。俺の家とはレベルが違う…。

四人並んで歩いていると一つの部屋の前に来る。

「入ってください」

みなみちゃんはピアノがある部屋へ入った。

ってもしかしてここってみなみちゃんの部屋！？

「女の子の部屋だよな！？俺今まで女の子の部屋なんか入ったこと

ないぞ…!?

「? ツバキなんだかヨウスがオカシイデス」

「ナナ、ナニガダヨ!？」

「思いつきりカタコトになってるよ？」

「でねー、チェリーちゃんが大人しかつたからつい歌っちゃって

」

ゆたかが話しているのを寛ぎながらみんな聞いている。
だが一人を除いてというのは当たり前なのだが…。

「……………」

なんで男の俺がこんなとこにいるんだ？

他愛もない女子の世間話。

ついていけないこともないが正直気まずい…。

何か言わないと俺の精神力が…。

「あ、あのさあ」

「なに？椿君」

「なんで俺も誘ってくれたの？」

「……………」

三人は不思議そうな顔をする。

「…えと、理由なんていらんじゃないでしょうか」
「へ？」

「そうネ、イッショにいてタノシイからヨンダだけネ」
「うんうん」

「……そ、そっか、そうだよな」

な、なんか面と向かって言われたのが照れくさくなって会話を終わらせる。

けどみんなが友達で本当によかったって今思えるのは幸せなことだよな…。

「あ、そういえば椿君、みなみちゃんってピアノ弾けるんだよ!」

ゆたかが自分のことのように嬉しそうに言った。

「へー、ピアノ弾けるなんてカッコいいな」

「ねえみなみちゃん、椿君にも聴かせてあげて」

「で、でも人に聴いてもらうほどじゃない…」

引き気味のみなみちゃんに追い討ちをかける。

「あー、俺は効いてみたいな、みなみちゃんのピアノ。じゃないと今日は帰れないかも(笑)」

「……うつ…、じ、じゃあ少しだけ…」

みなみちゃんは椅子に座ってカバーを外す。

そつと指を添えて静かに深呼吸をした。

そして綺麗な一つ目の音から俺を魅力した。

「お、終わりです」

みなみちゃんは一礼をして退く。

俺は中々の上手さに圧倒され無意識に拍手をした。

「ヤッパリミナミはズコイネ!」

「ほんとだねー」

二人の言うことは間違っていなかった。

本当にみなみちゃんってなんでもできるんだな…。

俺はただ関心の感情しか出てこない。

けどみなみちゃんがぼそりと呟く。

私は誰かに尊敬されるような人間じゃない

「え？ 今なんか言った？」

俺はよく聞き取れなくてももう一度訪ねる。

「べ、別になんでもないです……」

「……そっか」

よく聞こえなかったけどみなみちゃんが最後に言った言葉が妙に気になった。

それは今のみなみちゃんの暗い顔色に関係しているのかな……。。

第98話 一步手前

みなみちゃん家に寄ってから俺は自分の住まいへと帰宅。

しかしみなみちゃんは今日は自分の家で泊まるらしく俺とゆたかだけで玄関をくぐった。

「あ、おかえりー、みなみちゃん家に行ってたんだって？」

リビングに行くとかがみさんが一人ニユースを見ていた。

「ああ。かがみさん知ってたんだ」

「帰りにこなたから聞いたの。ところでみなみちゃんは？」

かがみさんは俺の周りをキョロキョロと見回す。

「みなみちゃんなら今日は自分家に泊まるって」

「ふーん、まあそれが普通だもんね」

“普通”か…。

確かに錯覚しそうだけどみなみちゃんは自分の家にいることが普通なんだ。

だから俺の家にいるほうがおかしいのは頭では理解してる。でも慣れてきているせいか、みなみちゃんが此方にいることが不正解という答えに少しだけ抵抗感がある。

「そっちこそこなたたちは？」

一階に気配が無いのを考えると二階かどこかに出掛けているか2択だろうけど。

「あいつらなら上でゲームしてるわよ」

「ゲーム…」

ゆたかはちよつと怯えた声を出した。

「ゆたか？」

「あ、ごめんね…。ちよつとお姉ちゃんとか犯罪チックなゲームばかりやってるから心配で……」

「「あゝ」」

俺とかがみさんは納得する。確かにR指定ばかりやってるよな。けどさすがにこなたはそこまで堕ちないだろ。

「えー、昨日の午後6時30分に神奈川県で女子小学生が連れ去られそうになった事件なんです、今日捕まりました」

「「「……………」」」

ニュースキャスターがすらすらと読み上げるのを俺達は黙視していた。

「容疑者は土亜崎はな子、女性で22歳、職業は無職。容疑者の家を調査したところ恐ろしい数のPCゲーム、同人誌等が発見されました。理由を聞いたところ“ゲームでやっていたことをしてみたかった”と口実しています。神奈川県警は更に詳しく動機を調べていく予定です。これでニュースを終わります」

「……………」

開いた口が塞がらないとはまさにこういうことを言うんだろ…。異様な空気とは似合わないCMが流れる。

三人はテレビに視線を向けたまま固まっていた。

「い、今の……かなりこなたに当てはまらなかった？」

「あ、ああ、そうだよな……」

女性でPCゲームや同人誌、つまりオタク道を歩いてて、すぐに漫画やゲームに影響されたことをしてみたりして……。

無職はまだわからないとして違う意味でこなたにそっくりかもしれない……。

「な、なんかお姉ちゃんの将来が不安……」

「「同感」」

みなみは一人リビングの床に座って俯いていた。
母が使っているシャワーの音だけが多少の雑音となっているが気にはしない。

ヤッパリミナミはスゴイネ

ピアノ弾けるなんてカッコいいな

「……………私はそんなに凄くなんかない……………」
むしろ私はゆたかや他のみんなに憧れている。
明るくて一緒にいたら楽しくて……………。

それに比べて私なんか……………。

「くうん？」

飼っている犬のチェリーが鼻を擦り寄せてくる。

「……………チェリー……………」

なんだかいつもと様子が違う……………。

「……………まさか……………励ましてくれてるの？」

チェリーはみなみの頬をペロツと舐める。

そしてもう一鳴きしてから体全体を寄せてきた。

「……………ありがとう、チェリー……………」

みなみはそのままチェリーをギュッと抱いて眠りについた……………。

「こなたー、いるのかー？」

俺の部屋を開けるとやはりと言うべきなんだろうな。

こなたは俺のパソコンを使って自前のR指定のゲームをしていた。
つかさやみさおは漫画を読んでいるだけだからいいのだが…。

「ふっふっふ　よいではないか、よいではないか」

「なにやってんだ？」

「見て分らない？エロゲーだよ」

うん、見たまんまだな。

「あともうちよいで攻略できるから楽しみにしててね」

なにをどう楽しみにしていればいいんだよ。

「椿君はこの子で大丈夫？」

大丈夫も何も俺にとって全員がアウトだから。

普通の会話ではないので俺は話題を変えてみる。

「そつえば気になったんだけどさ」

「なになに」

「さつきから語尾についてる星（ ）みたいなのはなんなんだ？」

「あー、これ（ ）？　これはねー、実は星じゃないんだよねー」

「は？」

星以外のもの？　手裏剣か？

「椿君もアニメ見てたら分かると思うんだけどなー」

「????」

ますます分らない。

いつたいなんなのか聞いてみると、

「実はヒトデなんだよー！」

「……………」

え？だから？

「だからヒトデだってば」

「いや、それは分かったんだけど何でヒトデ？」

もつともらしい質問を突く。

「ずっと前に放送されてたアニメでね、私が好きなキャラクターが

ヒトデ大好きっ子でさー、真似てみようかなって」

「……それだけ？」

「それだけー」

「……………」

こ、これはマジでヤヴァインじゃないのですかこなたさん…!?

俺は先程のニュースで被疑者が言っていたことを思い出す。

“ゲームでやっていたことをしてみたかった”

うわーお。まるっきりおんなじじゃん……。

「はあ…こなたもとうとう犯罪者へと…」

「? 何の話？」

俺は犯罪を起こす前提でこなたが軽い罪になることを祈った。

第99話 アイツにめがけて

「しっかりせんかい泉！」

数日後、とある教室で黒井先生の怒声が飛び散る。

「ち、ちよつと徹夜しちゃって元気でません…」

「くったく、ええかー！ 今日待ちに待った体育祭や！ 優勝目指すためにドーンと張り切るんやでー！」

「……………はぁ」

「こおら桃原！ ため息つくな！」

そういわれても生徒よりマジになつてる先生を見てると逆にしんどい…。

それに俺は体育祭なんか大嫌いなんだよ…………。

なぜなら

「今年はウチラが優勝やー！」

俺はサッカーボールを持っていない時は半端じゃない運動オンチなのだから

開会式を終えたら俺とこなた、つかさ、みゆきさんは皆で見学しようという話になってかがみさんたちを探しに行った。

かがみさんとあやのさん、それからみさおは簡単に見つけられたのだが一年生組は気まずかったなあ…。

そのあとに適当に空いてる一番前を見つけてその場所をとっていく。
ほんと早く終わってくれよ……。

「そついえば椿先輩は何に出るんすか？」

「…へ？ 俺？ 俺は走り高跳びだけど……ひよりは？」

「私は走り幅跳びのほうっす」

あー、走り幅跳びか。俺の記憶が正しければたしかかがみさんが……。

俺はチラツとかがみさんを見るとギロリと物凄い形相で睨み返してきた。

そして“あんたまだ覚えてんの？ さつさと忘れなさいよ”的な怨念を背中へビリビリと伝わってくる。

この記憶は排除しておいたほうが安全かも……。

パン！

「うおっ！？」

突然の銃声に肩をすくめる。

「あ、そろそろサイショのキョウギがハジマルネ」
な、なんだよビビらせやがって…。

するとこなたはからかうように言う。

「ぷぷつ、“うおっ！？”だつて」

「ぐ…！」

こ、こなため…！

「走り高跳びに参加する人は入場門前に集まってください」

役員からの連絡がマイクから通される。

「とうとうきちまったのか…」

俺はげっそりと立ち上がる。

固まった筋肉を軽くストレッチして伸ばし準備を整えた。

「桃原君、頑張ってくださいね」

「椿君ならサッカーやってたし大丈夫だよな」

みゆきさんとあやのさんに見送られ返事を返す。

「あ、ああ…」

い、言えなかった…。

実は俺は運動オンチだと言えば楽になれるのに、変な意地というかプライドが邪魔をする。

ボールを持っているときは並みじゃない集中力で楽々切り抜けたけど、ボールを持っていない時はウジ虫的存在になっちまうなんて俺のバカヤロー…。

きつと皆あまりのギャップの激しさに白い目で見るところな…。

……………だったら！

ここで一発カツコいいとこ見せてやる…！

でないと恥かいただけで終わっちまう…！

さっきだって銃声にビビってしまったし…。

だから絶対翔んでやる！

翔べば全ては解決するんだから

前の人から順番に跳んでいく。

意外と早いペースで進んでいくのでデータを見直す。

高跳びの助走距離は10メートル程か…。

棒の高さは1メートル20センチ…。まだまだ比較的低い方だな。その証拠にいまだに失敗しているやつは12人中1人しかない。なら俺もできるんだ！

あんなやつらに俺が負けるはずがないんだ！
ミスって1人だけいるあいつのどこになんか行きたくない…！

あ、でもちよつと待てよ…。早めに失敗したほうがいいんじゃないのか？

それだったらすぐに終わるし……。

後は見とくだけという最上級のチケットが手に入ってしまう…。

…ってダメだダメだ！

何を考えているんだ俺は！

みゆきさんたちの期待に満ちた眼を思い出せ！

翔ぶしかないんだ…！

あのデカイ壁を俺は…！

「次、3年B組の桃原」

「お、やつと椿の番かよ。何十メートル跳ぶか見物だぜえ」

「あんたバカだろ」

「あ、あやのー！柊が冷凍食品のように冷たい！」

「ま、まあまあ…」

「な、なんだかドキドキするね」

ゆたかは嬉しそうに言う。

「そうデスカ？ ワタシはあんまりネ」

「だって椿君がどこまで跳べるかって思ったたらなんか楽しくなってきた」

「でも実は全然跳べなかつたりしてねー」

こなたの冗談にひよりが反応する。

「まっさかー、それはないっすよ先輩。だって椿先輩はサッカー部で県のエースにもなれた存在っすよ？ 椿先輩に限ってボールがないとダメだなんてそんな」

ひよりたちは椿君が跳ぶ姿に注目した。

「あ……」

全員が固まる。

ほとんどの者がクリアを予想した。

しかし、ひよりたちが見たものはとてつもないものだった……。

第100話 厄日

「次、3年B組桃原」

ついにきたな、俺の時代。

アイツラにバツチリ魅せてやる…。

心の中で大きく深呼吸をする。

そして役員からの開始の笛と同時に走り出した。

「…？」

一歩がとても重い…。

これはプレッシャーのせいかな？ いや今はそんなことどうだってい

いだろ！

雑念は棄てるんだ！

翔べ！

翔ぶんだ俺！！！！

背面飛びの体勢でジャンプをする。

そして眼を閉じて背中を反らした。

体がフワリと浮いて風を裂きながら向こうにあるふわふわのマット

へと着地した。

「っ！」

当たった感覚はない！

ということとは！

俺は起き上がって真っ先に棒を見る。

そこにはきっちり綺麗に置かれた状態、つまり倒れていない状態

として存在していた。

「……………」

会場も見ただことのないジャンプに言葉を失う。

や、やった…？

本当に翔んだのか…？

運動オンチだった俺が…？

何度も自分に聞きただす。

それが夢かどうかを知るがために。

「いいよっしゃー！！」

奇跡だ！翔べたんだ！

やったんだ！

ノルマを達成できたしこれでバレずにすむ！
すると審判が俺に近づいてくる。

ま、まさか今のがヤバすぎて優勝決定とか？

だが浮かれに浮かれている俺に審判は冷静に申告する。

「君、アウトね」

「…はい？」

え、今なんて？

「だからアウトだよ。次の人の邪魔になるから早く退いて」

「なっ！？」

わけがわからない一方的な審判に抗議をする。

「な、なんで！？俺ちゃんと棒に当たらず跳んだじゃないですか！
？」

「……確かに当たらずに跳んだ。飛び越えずに潜ったせいだね」

「……………へ？」

く、潜った？ あれ？ じゃあ……失格？

俺はやっと気づいた。

みんながさっきまで黙りこくっていたわけを。

それは素晴らしいというわけではなく、ただあまりに無様な姿に呆気をとられていただけだったのだ。

[illegible]

やがて俺の大恥によって会場が爆笑の嵐へと変化する。

俺は最悪なことにその嵐の目にいた…。

「や、厄日だ……」

「いやー、椿君最高！！絶対あれは伝説級だよ」

「ほんとだよなー！　体育祭でここまで笑ったことなかなかったぜえ！」

「……あ、いっ……！」

こなたとみさおはいまだに笑っている。

さらには全く関係ない奴等も俺を見て笑っていた。

「は、はい椿君…の、飲み物…ぷぷ…」

ゆたかも必死に笑いをこらえていた。

もうイヤだ……、
恥ずかしくてたまらない……。

「いつそのこと俺を消してくれ……。」

「…そろそろ私の出番だから行ってくるね」

「あ、私もだつた」

みなみちゃんとは百メートル走に出場するため移動する。

「頑張れよ、みなみちゃん、こなた」

$$\{ (j \vee i) \dots \}$$

「椿君が言える立場じゃないけどねー」

あ、あんにゃろー！

後で覚えてやがれよ！

だがこなたのことよりみなみちゃんのほうが気になった。前にみなみちゃん家に遊びに行つてからどこか変だ…。

なんだか笑顔が少なくなつてゐる気がする……。

ただの思い過ごしならいいんだけど…。

「ねえ、みゆきさん、みなみちゃんいつもより元氣くない？」

みゆきさんに尋ねてみるが何やらお腹を抑えて逆の方向を向いていた。

「クスクス…す、すいません…椿君の顔を見てたら、わ、わ、笑いが止まらなくて…」

いや、もういいから。

「おーい、椿君ー！」

こなたがスタートラインで手を振る。

それに対して俺は応援しているよ的な笑顔で応じた。

だが裏ではそんなこと思つていると思うか？

断じて否だっ！

あまりいい気になるなよこなた…。

何故ならさつきこなたに

「一位じゃなかったら罰ゲーム」

と約束をしたのだからな。

こなたも自分の運動能力に自惚れてOKしたが俺には切り札がいるんだ。

それこそみなみちゃん！ 彼女なら負けるわけがない。

運動神経抜群のみなみちゃんが勝つたらこなた、お前にメイド服を

着せて一日中世話をしてもらう！

誕生日の時と同時ににお返ししてやるぜ…。

「位置について、ようい…」

「……………」

パン！

いきなり八人全員が加速する。

参加しているのは基本的遅い奴はいない。むしろ速い奴等ばかりだった。

だがその中でもずば抜けていたのがみなみちゃん、そしてこなただった。

一年生の陸上部がいるのにも関わらず一歩分リードして一位を争う。二人は全く一緒のスタートダッシュにトップスピード。

まさに互角の戦いで俺は心臓が痛くなる。

「うわー、こりやどっちが勝ってもおかしくないわね…」

かがみさんのいうとおりこのままじゃ…！ みなみちゃん、もうちょい頑張れ！

しかしそれは八十メートルを過ぎても変わらない綺麗な横並びだった。

な、なんかヤバいかも！

もし負けたら俺が逆に…！

みなみちゃん頼むから勝ってくれ！

白いテープに近づいていく。

二人は真っ直ぐにテープに走り抜けていった。

「はあはあ…」

「ど、どっち…？」

二人が審査員を見つめる。しかし判定はわからず役員が録っていたビデオを巻き戻す。

そこに映る二人の姿。

少しずつ進めていくとこなたの胸が先にテープに触れていた…。
ってことは勝ったのは…。

「椿君、ちゃんと私の世話をしてよね」

「…え？ ええええええええええええつ！？」

第101話 飛べない少女

午前の競技はすべて終わり、次に待っていたのは誰もが楽しみにしている弁当だ。

みゆきさんたちは自分の家から持参してきたが俺は今朝こなたたちが作ってくれたのにすぎる。

中身を開けると鮮やかに盛りつけがいきとどいていた。

「おー！ けっこう綺麗に作ってきたんだな。これ全部こなたとかさが？」

「まあほとんどはね。でもかがみがつたやつもあるから食べてみてよ。」

こなたはそれをわざわざ皿に盛ってくれた。

「お、サンキュー、んじやいただきます」

俺は一口サイズの卵焼きを食べる。

お、けっこう甘めで好みの味付け。

「ど、どう？ 美味しくなかった？」

かがみさんは俺の感想に耳を傾ける。

「いや俺は甘めが好きだからなかなか美味しいよ」

「あ、そ、そっか、よかった…」

かがみさんはホッとして止まっていた箸を動かす。

こなたも唐揚げを取ろうとするがふとプログラム表が目に入る。

「そっうえばさー、あと残ってるのはつかさとかがみ、みゆきさんが出るリレーだっけ？」

「ええ、だから勝つためにもたくさん食べとかないとねー」

「あー、かがみ…、あのさ…」

「い、言わないで……自覚してるから……」

「……………」

「？　どうした柊妹？さつきから全然食ってねえけど具合でも悪いのか？」

みさおがつかさの顔を伺う。

「な、なんでもないよ……」

「まあ気分が良くなかったら天原先生に早めに言った方がいいですよ？」

「だ、大丈夫だよお、ありがとうみさお、ひより」

つかさは自分の皿と向き合うがやはり一口も食べなかった。

みなみちゃんといいつかさといいい何かおかしい……。

二人ともどうしちゃったんだよ……。

「あ、危ないやまと！」

「きゃあっ！」

「ん？　なんだこれ……」

転がってきたのは五百円玉。

それを拾って落とし主を見回すとキリッとした目つきの女の子がすぐ後ろに立っていた。

「な、なに？」

「……………返して」

「…あ、ああ、これ？」

五百円を彼女に渡す。

「……………ありがとう」

「あ、いえ……」

なぜか彼女からは独特の波長が流れていた。
どこか謎めいた不思議な感じの……。

「…あんたさ、さつき走り高跳びで笑いにされた人？」
う、またそれかよ……。

こっちは早く忘れたいっていうのに……。

「ああ、そうだけど……？」

「ふーん…」

謎の女の子はじろじろと見てくる。

こなたたちもそのやりとりを黙って見ていた。

「な、なんだよ？」

「みんなはさ、あんたのこと笑ってるけど…、私は好きよ。そういう面白いところ」

「は？」

「それじゃまた…」

それだけ言って彼女はそこから去っていった。

その先にはパティのような金髪の女の子が話しかけていた。

二人は少し話してから人混みの奥へと消えていった。

「な、なんだったんだ？」

「うーん…一人はわかるんだけどもう一人が見たことない人だったスね」

「ひより知ってるの？」

「金髪の人はア二研の部長でいろいろお世話になってるっす。」

「へー…」

つてことはあの人もこなたやひよりたちと同類のオタクなんだ…。

とても外見からじゃ分からないな…。

ま、まさか隣にいた謎めいた女の子も…。

うう…いよいよ始まっちゃう…。

つかさは不安で仕方がなかった。

自分が運動を苦手としていることは百も承知だ。

だからせめて前と一緒にのハードルでよかった…。

けどじゃんけんで負けてしまに残ったのはリレーのみ。

私なんか

が出てもみんなに迷惑がかかるだけだから一人でやる競技以外は避けたかったのに…。

「……どうしょ」

「つかささん、どうかしましたか？」

みゆきが心配して声をかける。

「なな、なんでもないよ。ちょっと緊張してるだけ」

「そうですか……」

みゆきは前に向き直る。

…やっぱり桃原君がおっしやっていた通りつかさんはどこか調子が悪いみたいです…。

本人は言いたくないみたいでするので言及はしませんが…。

「おーいつかさー」

次につかさの姉、かがみが近寄る。

「お、お姉ちゃん」

「あんた大丈夫？　もし気分悪かったら休憩しててもいいんだからね」

「だ、大丈夫だってばあ。お姉ちゃんも心配し過ぎだよ」

「……そ、そう？　ならいいけど……」

「いよいよリレーが始まる…。つかさは三番手でみゆきさんがアンカーか」

「あとかがみも違うクラスだけど三番手だよ」

あ、ホントだ…。

こなたに言われて初めて気付いた。

「姉妹対決っスか…、でもつかさ先輩顔色があんまりよくなかったみたいスけど大丈夫なんスカね…」

やはりひよりもつかさのことをよく見ていた。

「うーん…、普段より元気が全然なかったし何というか今日はらしくないつかさばかりだったよな…。 ドジも全くしなかったし…」
「いや椿それは関係ねえんじゃないのか？」

パン。

四百メートルリレーがついに始まりスタートダッシュに成功したB組は現在一位のまま二番手に交代する。

対するC組は現在三位だがあつという間に二位へ浮上してきた。

B組の二番手はセバスチャンなんだけど少しずつ追いつかれていく。

「わ、私が頑張らないと…私が頑張らないと…」

つかさはぶつぶつと念じるように呟く。

私もみんなの役に立ちたい…！

そしてバトンはセバスチャンからつかさの手に握られた。

振り向くとC組も三番手のかがみに渡されていた。

「つかさ！後ろ向いたらダメだ！」

だ、誰？ 椿君？

つかさは周りを見渡すが誰が言ったかはわからなかった。

だが少しの気抜けで手に握っていた物がスルツと汗で滑り落ちる。

「あつ！」

「あつ！…！」

つかさだけでなく観客も声をあげてしまう。

そしてあとから落胆した声がしたのがここからでもわかってしまった…。

バトンを落としてしまったつかさは慌てて拾うが、その隙に二位にいたクラスが追い抜き一位にランクアップされた。

そして続けて三位だったクラスにも抜かれて逆転は難しいものとなってしまう…。

「い、いそがなきゃ…！」

しかしまた追い越す力をつかさは持つておらず、そのままバトンは三位のままゆきちゃんに渡ってしまった…。

みゆきは走りながらも先頭を見つめる。

こんなに差が開いてしまつては一位は難しいところですよ…！

しかしここで私が諦めてしまつたらつかさんは必ず自分のせいで負けたと思い込んでしまいます…！ だからつかさんの気持ちを楽にさせるためにも私は…！

心を強く持ち、いつも以上に懸命に走る。

それは誰もが目を見張る速さだった。

徐々に二位を抜かしていく。そして目に映るのは一位の人だけ…。

一位をロックオンして粘りを見せる。

あと少しで追いつける…！

もうちょっと…！

……っ！

だがみゆきの願いは届かず……。

パン。

感情のない銃声が発火された。

それはC組の勝ちを決めて私たちの負けの判定したものだった。

「……ま、負けた……」

B組の連中はがっかりする。

それもそのはず……。

なんていったってこの勝負に勝たないと最後の体育祭優勝は二度と手にはすることはないので……。

競技を終えてかがみさんたちが帰ってくる。

「かがみお疲れ様」

「ウチんとこの柊はすげえなー」

「いやいや私のだってば」

「いやいやウチのだって」

また始まったか……。

この二人も飽きないよな……。

「みゆきさんすごかったねー」

「ありがとうございます、峰岸さん。ですがさすがに二人は抜けませんでしたのが残念です……」

あちらはめっちゃめっちゃ大人の空気だというのに……。

あとはつかさか。

ちよっと残念だったけどつかさだって頑張ったんだもん。

俺は出来るだけ元気づけようと明るくつかさの元に駆け寄ろうとする。

しかしみゆきさんの後ろにいるかと思われたつかさの姿がなかった。

「……………」

つかさ？

「ぐすっ…ひつく…ひつく……………」

ま…負けちゃった…。

私が転けたから…。

全部私のせいで…………。

つなさは競技が終わってすぐに体育館裏に来ていた。

それは泣き顔をみんなに見られたくないから…？

自分のせいで負けたと言われるのが怖いから…？

同情されるのが嫌だから…？

…………たぶん全部当てはまると思う…。

「なんで…なんで私だけ……………」

みんなは翼を広げて飛んでいくのに…………。

私はいつになっても飛べない…………。

第102話 足手まとい

体育祭は終わり日が暮れ始める。

普通なら俺達は帰っているのだがつかさの姿が見当たらず学校全域を探し回っていた。

「椿君ー、つかさいたー？」

こなたが向かい側から走ってくる。

「いや、こつちにはいない」

「……ほんとにあの子……、閉会式にも出ずにどこ行っちゃったのよ……」

こなたの隣にいるかがみさんは携帯を手にとって番号を押していく。それはつかさの携帯番号だが未だ繋がらずにいた。

「もしかして先に椿君家に帰っちゃったのかな……」

「……………」

確かにその可能性はあり得る。

自分のせいで負けてしまつてみんなに顔を会わせたくないんだろう

……。

「私たちも家に帰つてみる……？」

「そだね。時間も遅いし人数が多くても夜道は危ないし。それ

じゃあみゆきさんたち呼んでくるね」

こなたは自分の携帯からそれぞれの携帯に連絡を入れる。

そして五分後には全員が校門前に集まった。

「みんな、もう遅いしとりあえずつかさが俺の家に帰ってるか確か

めてみるよ」

「仕方がないですね……。分かりました。あ、居ても居なくても連絡をしていただいたら嬉しいですよ」

「わかった。何かわかったらみんなにメールするよ」

こうしてみんなバラバラに自宅へ帰る道へといく。

「柊妹どうしちまったんだろな」

「みさきちが食べちゃったんじゃない？」

「なにを……。ってかみさきちってなんだよ」

またしても二人のじゃれあいがスタート。

けど今はそんなことに構ってられない。

もしつかさが敗因を重く背負っていたらつかさはきつと泣いている……。

「つかさー、桃原君の家に泊まってたのに急にどうしたのー？」

「……………」

つかさは桃原家には戻らずに柊家に戻っていた。

こつちの方がなにかと落ち着くからだろう。

だがつかさ、かがみの姉二人である柊いのりと柊まつりがドアの前で心配の声を出す。

「ちよつとつかさー？」

いくら呼んでもやはり出てこない。

「桃原君の家で何かあったのかしら……」

「もしそうなら電話してくる」

「あ、電話するならかがみの携帯にして。あの子からも聞きたいから」

「あ、ごめんちょっと電話かかってきた」

かがみさんはかかってきた相手と話し始める。

口調からしてだいぶ親しい人のようだった。

「え、つかさが！？　それで　」

かがみさんの様子を伺っていると声色が急に慌ただしくなっていく。そして電話は終わりがみさんは俺達にさっきの内容を説明する。

「　じゃあつかさ先輩は家に帰ってるんですか？」

ゆたかは頭を整理しながら言う。

「そうみたい…。　やっぱりバトン落としたこと気にしてるのかしら…」

「……………」

本当はそれだけじゃない気がする…。

いくら負けたのがつかさのせいだったとしてもここまで落ち込まないんじゃないのか…？

何か…何か他の理由があると思うんだが考えすぎか？

「椿君、とりあえず私はつかさの元にいくから今日は家に帰るわね」

「…………え？　あ、ああ、そうだな…」

「また明日学校でね」

かがみさんは元の道を走っていく。

「ふう…、私たちも帰ろうぜえ」

みさおに続き俺達は帰るべき場所へと行く。

…つかさ…明日ちゃんと学校来るよな…。

「椿君、おはよー」

翌日になり校門を見るとかがみさん、そしてつかさが待っていてくれた。

どうやらかがみさんがうまくやってくれたらしいが…。

「おはようかがみさん。それからつかさ、おはよう」

「う、うん。おはよう…」

多少元氣は無いものの学校に来てただけで安心感があふれだした。

また前みたいにみんなと笑いあえる。

そう思いながら教室まで一緒に行くが途中で陰口が俺達を壊していく。

「おい、アイツだぜ。昨日の体育祭でハマした奴」

「B組が勝ってたら黒井先生がクラス全員にジューズ奢ってくれたのによ」

「……………」

つかさの歩くスピードが遅くなる。

顔は俯きもう泣きそうになっていた…。

「アイツラ…!」

俺は陰口を叩いた奴等のところに行こうとするがつかさが俺の服を引っ張る。

「つかさ?」

「わ、私なら大丈夫だから…」

「でも…!」

「大丈夫…ですから」

つかさはギュッと服を握りしめる。

声は震えていて辛い思いをしているのがわかった。

「…椿君、今は我慢だよ」

こなたも思いは同じだが冷静だった。

二人に流されて俺は諦めて教室に入っていた。

「来た来た…。クラスの敗因さんが」

全員がつかさを見る。

その目はいつものとは明らかに違った。

俺はつかさの肩をポンと叩き席まで送っていく。

「あいつ隣のクラスにいる柊の妹だろ。なんでなんでもできる姉がこっちのクラスじゃねえんだよ」

「お、お前等！！」

「椿君…」

あそこまで言われてもつかさは暴力に走ることを止めた。

「“柊姉”とは大違いだよな」

「ホントだな。なんであんな“トロい奴”が出演してんだか」

プツン

今の言葉に俺は我慢の糸がぶちぎれた。

「てめえー！！！！！！！！」

俺はそいつの胸ぐらを掴み殴りかかろうとした。

だが

「……………なっ…！？」

「……………」

っ、つかさ？

つかさは俺の前に立ちはだかり陰口を言った奴をかばう。

俺の振りかかる拳がつかさの頬に思いつきりあたってつかさは吹っ

飛んで机やら椅子やらに突っ込む……。

第103話　つかさ

「つ、つかさ……なんで……」

そ、そいつはさっきつかさに酷いことを言っただぞ……!?　なのになんでつかさはそんな奴をかばったりするんだ……!?　俺はつかさの意味不明な行動に混乱した。

「だ、駄目だよ椿君……」

つかさは頬を押さえながら立ち上がる。

「こ、こんなことしても……何も解決しないよ……」

「け、けどこいつらはつかさに……!」

「別にいいの……。全部私が“悪い”んだから……」

「……ぐっ!!」

よくないから言ってるんだろうが……!

今にも泣きそうなお前がいるのにほっとけるとでも思ってたのかよ……!

握りしめた拳からジンジンと痛みがくる。

けどそれはつかさの痛みなんかよりずっと易しくて……。

「ほーい、ホームルーム始めるで……って柊どないしたんや!」

黒井先生が目を見開く。

「あ、大丈夫です……。ちょっと転んじやって……」

つかさは黒井先生に嘘をつく。

それは自分のためじゃなくて俺のために……。

「こ、転んだって……そんなでこない傷がつくもんちゃうやろ」

「い、いえ、ホントに転んじやって……」

「ッ!」

どうして…言わないんだよ…！

言えはいいいじゃないか…！

あいつらと俺がしたことを言えば黒井先生がなんとかしてくれるだろうが…！

なのに…どうして心の中に閉まっちまうんだよ…！

「そう…そんなことが…」

昼休みにかがみさんはこっちの教室にやって来ていた。

おそろくつかさのことが心配だったんだろう。

「ごめん…つかさ」

「つ、椿君は悪くないよ」

「そうですよ。桃原君はただやり方を間違えただけなんですから」
つかさとみゆきさんの言葉を受けて少し俺の精神が楽になった。

「顔に湿布か」。案外萌えるもんだねー」

「またそれか、あんたは」

こんな状況でもこなたはいつものこなただったので俺はちよつと楽しかった。

かがみさんはつかさの側まで行く。

「大丈夫…あんたは絶対私を守ってあげるから」

かがみさんは優しくつかさを抱きしめた。

「……ありがとう」

「椿君、帰ろー」

「ああ、すぐ行くからもうちょい待て」

教科書や筆箱を鞆に入れてそれを手に持つ。

しばらくすればつかさの悪口も消えてなくなると思い俺は今を楽しむことにした。

あの悪夢のようなバーチャル世界から出てきたばかりの俺達を待っている幸せな時間を満喫することに…。

だがそんな願いは脆くて…とても儚くて…。

“ さつさと帰れB組の敗因！ ”

“ お前のせいで負けたって自覚あんのか！？ ”

「…な、なんだよこれ！？」

つかさの下駄箱にマジックで沢山の汚れた言葉があった。

「ひ、酷い…」

こなたもさすがに堪えていた。

「たかが体育祭に負けたくらいでここまでするなんて…」

「きつとみんな面白半分で作ってるんだ…！ 一人がやったらもう一人がやって、その一人がやったらまた次の奴が感染されたように面白おかしく楽しんでいるだけなんだ…！」

俺はもう限界だった。

つかさにこんなことをする奴等にも何もできない自分に対しても。俺達が立ち尽くしているとすぐそのトイレから二人のクラスメイトが出てくる。

「お前トイレ長えんだよ」

「仕方ねえだろ。手についたマジックがなかなか落ちなかったんだからよー」

「これであいつ学校辞めるんじゃない？」

「ふん、それならそれでいいんだよ。あんなやつさっさと“辞めてもらった方が面白い”しな」

「お、おい」

一人が下駄箱にいる俺達に気づく。

「お前等…覚悟できてんだろうな…」

静かに怒りが燃え上がっていく。

憎しみが混じった冷たい怒りが…。

「椿君！ダメだってば！」

こなたは宥めるように引き止める。

「……………」

「はっ、女の言うこと聞くなってお前ってけっこうヘタレだったんだな。それとも全員かかってこないところを見るとお前等みんなヘタレってことだな。はははははははははは！」

「おい…歯あくいしばれよ…」

「は！？…………ぐはっ！」

俺は一人の顔面をぶつとばした。

ソイツは勢いよく廊下の壁にもたれ掛かる。

俺は怒りが収まらずにそのまま殴りにかかった。

「ぐっ！がっ！で、てめえなにすんだよ！！！」

向こうも反撃してきたため俺は右パンチを喰らう。

だが怯まずに突っ込んだ。

「お前等！つかさがどんな気持ちでいるのか！わかってんのかよ！」
何度も何度も相手の顔を殴りつける。

「っ、椿君やめて！！」

つかさやかがみさんが必死に止めにかかるがその手を払い除けてた。
「こ、こいつ邪魔なんだよ！」

二人目が後ろから俺の背中を蹴り飛ばす。

俺は衝撃に弾かれて壁に激突するがすぐに二人目にカウンターを發した。

「て、てめ…！がっ…！」

「つかさは…！俺が風邪をひいた時も！意識を無くしたときも！いつもそばにいてくれる優しいやつなんだよ…！」

「っ、椿君……」

「椿君いい加減にして…！」

かがみさんは抱きついて俺を阻止しようとする。

「お前等みたいな奴等がいるから…！！」

「くっ！ウザってえんだよこのバカが…！」

「ゴフッ…！！」

「キャッ！」

俺は腹を蹴られて後ろに後退る。

かがみさんも合わせるように尻餅をついた。

「調子にのってんじゃねえぞコラァ…！」

「ゲフッ…！っ、つかさの優しいところを知らない奴等がああ…！！！！」

「うがっ…！！」

「つかさはお前等をかばったんだぞ！？だから今を泣いているんだろ…！」

それなのにお前等はつかさを…つかさを…！！」

「っ、椿君…ぐすっ……もう…いいからあ…」

微かに視界につかさの泣き顔が見える。

それによって怒りはさらに爆発した。

「よくもおおっ！……！」

懐に入って相手のみぞおちに一発強力なパンチをお見舞いしたあとに後ろから襲ってきた奴の鼻を肘でぶっ潰した。

「ハアハア！」

唾を吐くと赤色が混合されていた。

二人は倒れて俺だけがその場に立っている。

そこに騒ぎを聞きつけた生徒指導中心の先生たちがやってくる。

「お前等あ！！なにやっとなるかあ！！」

怒鳴り声が傷に響く。

ここまで騒ぎを起こしちゃったら下手すりゃ退学だな…。

けどそうなるのは俺だけでいい。

こなたたちが近くにいてただけで連帯責任をくらっちゃうかもしれない。

んねえがそうはさせないからな。

「……全部俺がやったんだ」

「ああっ！？お前だけか！？あっちの女子は知り合いじゃないのか！？」

「……ああ…、あっちにいる女子は全く知らない人だ」

「………まあいい。こうなった以上…謹慎処分は免れんから覚悟しとけよ」

俺は先生に囲まれて連れていかれる。

チラッと振り返るとつかさの涙しか見えなかった……。

第104話 心の高み

「じゃあ椿君…、私達学校に行ってくるね…」

「ああ…、いつてらっしゃい」

「……………」

つかさは玄関前で見送る椿君に心の中で何度も謝った。

登校中、つかさは昨日の出来事がまだ心配だった。

椿君と喧嘩した二人も謹慎になったみたいだけど、これが原因でまた私のことをいろいろと言ってくる人達がいるかもしれない…。

そうなった時、私は椿君がいなくても堪えられるのかな…。

涙を見せれずにいられるのかな……。

「……………」

「あ、そういえば今日私が料理する番だった。つかさ先輩は今日なにが食べたいですか？」

「……………」

しかしつかさはゆたかの声に微動だにしなかった。

「おい、つかさー？」

「ふえっ？えと、えと、ピーマン！」

今度はかがみが話しかけると反応した。

答えは間違っているけど…。

「……あんた、それ嫌いな食べ物じゃない。ちゃんと話聞いてた？」

「ご、ごめん…」

「はあ……やっぱりね…」

かがみは深いため息を地に向けた。

そのあとにつかさの肩に軽く触れる。

「いい？ あんたは別に悪いくないわよ。だから…椿君のことはあんたのせいじゃない。わかった？」

「お姉ちゃん……」

「そーそー。またなんか言われたら私が守ってあげるからさ」

こなたもいつも通りのホンワカした顔で言う。

「こなちゃん……。うん、ありがとう」

大丈夫…、私にはまだみんながいてくれるから……。

ガヤガヤと生徒が喋りながら校門を通っていく。

その中にこなたたちはいた。

校門の先に椿君の謹慎騒ぎの場となった下駄箱がいつもより淀んで見える。

こなたはかがみたちより一歩前を歩く。

あの落書きは昨日遅くまで残って消したから大丈夫なんだろうけどまた何か書かれてたらどうしよう…。

こなたの不安が歩くことに大きくなる。

そして校内の入り口である下駄箱に入り、こなたは自分のよりつかさのを先に見に行った。

「あ……」

そこには綺麗に消された普通の下駄箱だった。

「こ、こなちゃん？ どうしたの？」

「あ、ううん。 さっぱり落書きはデリートされてるなーって思っただけ」

「当たり前でしょ。 ほら、早く教室に行かないとヤバイわよ」
「ヤバイというのはチャイムのことだろう。」

確かにこのままゆっくり行ったら黒井先生がお怒りになる。
こなたたちはやや早めに足を動かして教室へ向かった。

しかし、その途中にクラスメートが階段前で戯れていた。

「……………」

ま、また何か言われるのかな…。

つかさは多少足取りを遅める。

そんなつかさの様子を察したこなたはつかさの手を握った。

「こなちゃん…？」

「大丈夫だよ、つかさ」

「う、うん……」

そっか…、私のこと心配してるんだ…。

つかさも返事をするようにこなたの手を握り返す。

ゆっくりとすれ違う時につかさは時間が長く感じた。

向こうがチラリと見てくるのがわかりつかさは顔を少し背ける。
だが細く聞こえる声がつかさを怯えさせた。

「おい昨日の騒ぎ知ってるか」

「あれだろ。下駄箱で桃原と二人が喧嘩したやつ」

「それで三人が謹慎になったんだけどよ、どうも今通った柊つかさが原因らしいぜ」

「はっ、またあいつかよ。 前から思ってたけどあいつトロいからウザってたんだよな」

「そりゃ言えてる」

「……っ」

つかさはぐつと首を締め付けられるように苦しくなる。

「つかさ……」

「大丈夫……。もう泣かないよ……」

つかさはこなたに笑顔を見せた。

心が傷ついても私には癒してくれる友達がいるのを忘れなかったら
きっと堪えられる……。

そう信じて教室のドアを開けた。

『 ザワッ 』

クラスがざわめく。

それは椿君たちが謹慎だからなのか、それとも平気な顔して学校に
来ている私に対してかはわからないけどいい方向ではない。
それだけは確信が持てた。

「つかささん、泉さん、おはようございます」

「ゆきちゃん……」

机に鞆を置くとみゆきがつかさの元へいち早く立ち入る。

普段と同じように普通に普通に接してくれるのが当たり前だったのに、今
はそれが心を落ち着かせるのに最高のビタミンだった。

そこに一人の女子生徒が挨拶する。

「おはよ、柊さん。前はゴメンね。柊さんだけのせいじゃないのに
私達……」

「……え？」

気づいたらクラスのほとんどがみゆきに続いてつかさの周りに集ま
っていた。

唐突なことにつかさは意味不明な回路が頭に映る。

「俺も競技に負けておいて柊に酷いこと言っでごめんな」

「それ言うなら俺も速攻抜かれちまったしな」

女子だけでなく男子もここに来ていた。

「わ、私もごめん。バトン落としちゃって……」

「いいのいいの。私だって二百メートル走まけちゃったし」

「だから柊さんは悪くないよ」

「……………う、うん！」

元気に返事をする。

それは今日の中で一番の返事だろう。

「俺、桃原に感謝しとかないとな…」

「ホントだよな。あいつが行動を起こしたおかげで俺達も体育祭のこと考え直せたんだもん…」

「あんときは優勝を目の前にして冷静に考えれずにいたしな……………」

そ、そうだったんだ…。

椿君のおかげでみんな私に謝ってくれてる…。

じゃあ届いてたんだ…。

椿君の行動がみんなに…。

つかさはそれがとても嬉しかった。

椿君がとった行動は間違ってたって証明になるから…。

だけどそれは全てを動かす効果などなかった…。

男子の一人が窓際から言う。

「おい、柊。お前のせいで桃原とか謹慎になったんだろ？ みんな知ってるんだぜ」

「……………」

「よく悠々と学校に来れるよな、お前って。体育祭もお前のせいだったし」

「……………っ！」

やっぱりまだ一部の人は恨んでいた。

バトンを落としたことを…。

チームの邪魔者だった私を…。

「ちよつとあんたなに言っ」

「待ってください」

一人の女子が反論しようとしたらそれをみゆきが止めた。そしてその席に座っている人と目を合わせながら行く。

「な、なんだよ高良」

「これ以上言ったら私が怒りますよ……」

みゆきが堂々と前に立つ。

「な、なんでだよ、どうせお前だってあの時柊が転けてなかったら優勝できたのにか思ってたんだろ？ みんなの前ではいい顔しやがって」

「だいたい桃原もバカだよな。 柊みたいな奴なんかにために謹慎くらってるなんてイカれてらあ」

「……言いたいことはそれだけですか……？」

「あ？まだ他にも言ってるし」

パアンツ！

「なっ……！？」

「……！？」

クラスの全員が驚いた。

それは温厚のみゆきが掌で座っていた奴の頬をはたいたからだった……。

第105話 胸の奥

「な、何すんだよ！」

はたかれた男子は声を荒げる。

「あなたは……！椿君の思いがわからないんですか！？」

「は、はあ！？ 何意味わかんねえこと言ってるんだよ！」

「あの人は……！ 自分が運動オンチなのにつかささんをクラスメイトとして助けてるんですよ！？ なのに何故あなたは運動神経が優れているのにそういう人達を引っ張ってあげないんですか！？」

「なんでそんなめんどくせえことをいちいちしなくちゃならない！」
「それが友達というものでしょ！？ それがクラスメイトというものでしょ！？」

「そんなの上っ面だけのこと言ってるだけじゃねえか！ 桃原だってドジの柊にただの同情しただけかもしれねえだろうが！」

「あの人は違います！ あの人は大事な人のためなら自分の命を捨てる人です！」

「そんなのわかんねえだろうが！」

「わかります！ 現にあなたが知らないところで椿君は二人の女の子を救いました！」

「み、みゆきさん……」

こなたは記憶を失った時を思い出す。

あの時も椿君は私のために一度死にかけて……。

そしてゆうちゃんの時もあまり泳げないのに川に飛び込んで……。

「今回もつかささんを助けるために椿君は二人を殴ったんです！」

「た、助ける！？ あれが助けるための行動かよ！？ バカじゃね

えの！」

ここでみゆきの口調が軽くなった。

もうこれ以上怒鳴りあう必要がないと悟ったからだ…。

「それでも…。椿君によって皆さんが目覚めました……」

「……ぐっ……！！　だ、だったらこいつら全員バカじゃねえのか！」

「……いい加減に……」

「そ、そうだよ！こいつらが全員イカれてるんだよ！こいつらが全員……！！」

「……いい加減認めてください…。あなたは間違っています……」

「ふ、ふざけんな！柊が悪いことに変わりはないだろうが……」

「だったら…私達がサポートするのが当たり前じゃないですか……？」

「………けっ……！どいつもこいつも………！」

うるせえんだよ！！　バカはバカで集まって授業でもやっとけ！！

おらどけ……！！

男子生徒は群がる生徒に椅子を蹴りながら命令する。そしてそいつはつかさに言った。

「お前なんか柊姉がいりや“要らない存在”なんだよ……！！」

ドクンッ

「……ッ……！！」

つかさは最後の言葉がかなり痛く感じた。

それは今までつかさが一番気にしていたことだからだ……。

男子生徒はそう言い残して乱暴に鞆を持って出ていった。

「暇だ…」

つかさも俺の家に戻ってきてくれてひとまず安心だ。でも、まだ学校では言われているんだろうか…。

ゴロゴロとしていたらいつのまにか昼になっていた。携帯を覗くと数件のメールが届いている。

こなた、かがみさん、つかさ、ひより、パティからだった。

その中でも一番気になったのがつかさからのメールだ。

向こうでまた何か言われていたらと思うとすぐに守ってやりたかった。

けど今はとても遠くにいる存在だった。

メールを開いてみるとタイトルが

「ごめんなさい」と表示される。

“昨日はごめんなさい…。私がすっかりしないせいで椿君に迷惑がかっちゃって…”。

学校ではゆきちゃんとかがいろいろしてくれたからもう大丈夫だよ。悪口もなくなっただし私も元気だから…。

だからまた一緒に学校で…。

あとテーブルにお昼ご飯作っておいたから食べてね”

「はは…」

そっか、よかった…。

俺は学校の悪口がなくなったことがなによりの報せだった。心の底からホッとする。

携帯を閉まって一階へ降りるとリビングへ。

テーブルにはつかさが作ったというハンバーグやらエビフライやらポリウムMAXのものが用意されていた。

きつと元気が出るようにとのことだろう。

これじゃどっちが心配してるのかわからないな…。
箸を使いハンバーグを一口。
「うま…」

「ただいまー」

お、こなたたちが帰ってきたか。

ベッドから体を起こした俺はイヤホンを外して音楽をかけるのを止める。

そして階段を降りようとしたらみなみちゃんが先に二階へ上がってきていた。

「椿君、ちょっといいですか…?」

「えっ? ちょっ…」

みなみちゃんは俺の了承を聞かないで手を引っ張りながら部屋に入る。

みなみちゃんにしては珍しく強引な行動に俺は戸惑った。

「み、みなみちゃんどうしたの?」

「………つかさ先輩のことです」

「…え? つ、つかさのこと? でもそれはもう解決したんじゃ…」

「…確かに噂は消えました。でもそれは表面だけで根本的な部分がまだです…」

「根本的な…部分……?」

「…はい。つかさ先輩はまだ空元気ですから」

「……………」

な、なんでみなみちゃんがそんなことわかるんだ…？

「椿君、聞いていますか？」

「あ、ああ、それで？」

「……たぶんつかさ先輩は自分を嫌っていると思います」

「……自分を？ 他人じゃなくて？」

「はい……」

な、なんで自分を嫌うんだ？

嫌うならイタズラをしたアイツラの方じゃ…。

「つかさ先輩はかがみ先輩と比べられることが多いんです…。

だからつかさ先輩は劣っていると考えてしまうんだと思います…」

「へ、へー……」

「つかさ先輩を元気づけるために椿君にしてほしいことがあります」

「俺に…？」

「つかさ先輩の笑顔を取り戻してください」

「……で、でも俺が感じる限りでは大丈夫な気が…」

「それは椿君を心配させないために誤魔化しているつかさ先輩なりの罪滅ぼしです…」

「あ……」

そ、そうだったんだ…。

俺は自分が感じているつかさが実像かと思っていたのに…。
いったいみなみちゃんって…。

「…で、どうやったらつかさを…」

「まずは理由をきいてあげてください。そうしてあげた方が向こうも話しやすいですから…」

「わ、わかった……」

「…それからできるだけ二人きりになった時にお願いします…。
誰も周りに人がいない二人きりの時に………」

「ひ、一つ質問…」

「…？」

「な、なんでみなみちゃんつかさのことそんなにわかってるんだ？」

「…………それは」

「……………」

「…つかさ先輩は……私と“似ている”もしくは“同じ”なんだと思いますから…」

…な、なんだか話がよく分からないのは気のせい？

「……………」

どないしたらええねん。

あ、ヤケ起こして関西弁になっちまった。

ゴホンッ…。

ホントどうすりゃいいんだ…。

俺が言わなきゃならないのはわかってる。

つかさを理解してるみなみちゃんが言うより俺が言ったほうが説得力があるからだろう。

でも何を言えばいいんだよ…。

ありきたりな言葉なんか言ってもしょうがないし…。そもそもみなみちゃん自分をつかさと同じって言ってたけど、それじゃあみなみちゃんも自分のことが嫌いなのかな？

ピアノとか運動とか出来てカッコいいのに……。

「椿君入るよー？」

「ん？ ああどうぞ」

つかさが一人で俺の部屋へ。

「な、なにかな？ 大事な話って…」

「へ？」

大事なお話……？ なんのことだ……？

「さっきみなみちゃんにとても重要だから早く行ったほうがいいって言われたんだけどそんなに大事なことの？」

「……な、なんだそういうことか……」

「何が？」

「い、いや、なんでもない」

俺はみなみちゃんという一言で謎は解けた。

これはうまく状況を創ってくれたな。

けどまだ俺の準備ができていない……。

ここは適当に話ながら考えるしかないな……。

「つ、つかさ、実は俺ってアニメがかなり好きでさ。それで俺が一番気に入ってるアニメが……」

「え、えつと……、アニメの話ならこなちゃんのほうが詳しいからこなちゃん呼んでくる」

「あつ！ 違うんだつか……」

俺が言い切る前につかさは忽然と消えた。

……。

「お、俺のバカヤロオオオオオオ！！！！」

第106話 猫色を宿す者

さっきの俺は何をやってた…。

せつかくみなみちゃんが機会を作ってくれたのに無駄にしちまうなんて…。

「……みなみちゃん…か」

俺はまだ彼女のことをよく知らない。

今まで黙っていたが実はそれぞれの親から食費や燃費をこなたたちに気付かれないようにこつそり会って貰っているのだが、その時みなみちゃんの母親とみなみちゃんについて話していたら

「外見はあんなだけ可愛いところも沢山あるの」

と言っていた。

みゆきさんの母親も同じことを言っていたあたりそうなんだろうけど一緒に住んでいても全くわからないのが現状だった。

「つかさにしても同じだな」

ただ一緒に住んでるだけで肝心なことは分からずにいる。

これほど情けないことはないよな…。

夕食を済ませて腹が落ち着くのを待っているとこなたが話しかけてくる。

「椿君、お風呂どうするの？」

「あー、俺今日はパス。あんまり汗かいてないし……ってなにその露骨に嫌そうな顔は」

「べ、べつに……」

かがみさんは顔をひきつつていた。

別に1日入らないくらいでそんなひかなくても……。

俺は一步かがみさんに近づくとかがみさんは連鎖反応するように――歩退く。

「か、かがみさん？」

また一步と近づけばまた一步離れる。

「……………」

「……………」

「か、かがみさん！」

俺はかがみさんに触れようと手を伸ばしたら

「い、いやああああ！！」思いつき手をビンタして俺から逃げる。俺は面白半分でその背中を追いかけた。

「そ、そんな避けなくても……！！」

「こつちこないでよバカー！」

だ、だって嫌がつてるかがみさんを見たらやめたくなくなる………
ってあれ？俺って今最悪なことしてる？

「……………」

まあいいやー

細かいことは気にせずには今は本能で動けつてことだよなー

リビングを離れたかがみさんは廊下に出て玄関に行く。それに続

くように廊下へ行くとかがみさんの姿がなかった。

「……………あれ？」

「いい加減に……しなさい！！」

「ゴフウツ！！！！！！」

よ、横から……？

か、階段に潜んでいたのか……。

み、見事な蹴りです…。

「そしてどっかいけえ!!」

……へ？

倒れながらがみさんを見ると傘ゴルフのように思いっきり構えていた。

マ、マジですか…!? え、ちよつやめ…!!

「ぐべぶっ!!」

俺はドアをぶち破ってそのまま外にゴールイン…。
ほんの冗談なのにいくらなんでもやりすぎだろ…。

「だ、大丈夫ですか？」

道路まで飛ばされた俺に民間人が声をかける。

「あ、ああ、なんとか……って…」

この二人…どこかで見覚えが…。

「ん？」

お、思い出せない…。

「体育祭のときはどうも…」

体育祭……。

「あ、思い出した!あの時の五百円の持ち主!」

「忘れていたなんてけっこう酷い人なんですな…」

「う…」

ツインテールの子がグサリとくる言葉を放つ。

すると隣にいた女の子が馴れ馴れしく話しかける。

「椿君だよな?ひよりの友達の。私は八坂こう、んでこつちが永

森やまと。よろしく!」

「あ、ああ。俺の名前知ってたんだ」

「そりゃひよりに何度も君の絵をリアルに描いてもらったし話もしたしね」

ひよりが?

……そうか。 たしかア二研の先輩って言ってたな。

「もしかして二人は高校二年生?」

「そうよ…。こうは陵桜で私は違う学校だけど…」

違う学校…。　ってことは中学からの友達かなにかか。

それにしても最初に会った時もあったけど…。

俺は永森さんを凝視する。

「…な、なによ」

なんかみなみちゃんとかがみさんを足したような人なんだよな…。
まあいいや。

俺達と一緒に暮らしていることを内密にするためにもさっさと退散するか。

また縁があつたら会うだろうし…。

「そういえば椿先輩って今は女子とハーレム状態なんだっけ？」

「ぶっ!？」

バ、バレてんのかよ!？

でもなんで!？

「ひよりがいつつも言っていましたよ？」

あ、あの狸眼鏡め…。

「まあその辺は自由でいいんじゃない？ハーレムって男の夢みたいなものですし」

「いや違…」

「椿先輩がどんな趣味を持っていたてもそれも自由ですしね」

「いやだから…」

「行こ、やまと」

いや人の話を聞いてくれよ…。

二人は並んで歩いていくが永森さんが立ち止まってこっちを見る。

「ジーーーー…」

「？」

俺の顔に傷でもついてんのか？

しかしそんな様子ではない。

なにかを見極めるかのように永森は動かずにいた。

やがて永森さんがボソリと言う。

「あんたつてやっぱり面白い人ね…」

永森さんは踵を返して八坂さんについていく。

「……………」

一人だけ状況が読めない俺は綺麗な長い髪を見つめることしかできなかった……。

家に戻った俺はかがみさんに百回謝り一応この場は許してもらえた。でもあんな嫌がるかがみさんを見たらついいじめたくなるのは俺だけか……？

「まあ気持ちにはわからないでもないけどねー」

「同感同感」

やはりいたか、同志こなた&みさおよ。

「私はちよつとやりすぎだと思っな…」

「…私も」

ゆたかとみなみちゃんも反乱軍となる。

しかしかがみさんは終戦を望んだ。

「そんなことはもうどうでもいいでしょ」

「椿君、ちゃんと入らないとダメだよ」

「あはは…、あ、じゃあつかさが一緒に入ってよ」

などと元気を出すためにまたしても冗談をかます。

しかしつかさはそれを聞いて頬をリンゴのように赤くしながら俯いた。

「……………」

さっきそれで痛い目にあっているのに懲りないなあと後で気付いた俺ってバカ……？

「あ、あのさ、つかさ。 い、今はジョークだからな……？ わか
ったか……？」

「…………… 入るよ」

「そうかわかってくれたか…… って、はい？」

俺の耳は腐ってるのかなにやら幻聴が聞こえてくるぞ？

「つつ、つかさ…… い、今なんて？」

「私も一緒に入る！」

「……………」

あ、あれ？なんか話に変な方向に……。

第107話 重み

俺はバスタオルを取りに行つてすぐに誰も入らないように戸を閉める。

なんとかつかさには説得で防げたけどやっぱりいつものつかさじゃない…。

どこか自分を無理矢理変えているような、そんな感じがした…。

「あとで…話し合わないとダメだよな…」

ゆっくりと風呂に入りながらつかさを元気づけるセリフでも考えとかないとな。

や、やばい…。

風呂がいい湯加減過ぎて何にも案が浮かんでこなかった…。

俺は風呂上がり牛乳を飲むためにリビングの冷蔵庫を開く。

牛乳も残り少なくなっていたのでコップを使わずにクイツとそのまま口にした。

「あ、椿君、お風呂上がったんだ」

つかさが二階から降りてきたのか、ソファに座る。

「けっこうお風呂気持ちよかったよ」

「そっか。よかった」

よかったというのはつかさが風呂の準備したからだろう。

俺は残った牛乳を飲み干そうと一気にいこうとする。

「椿君…私としない？」

「ぶーっ！！！！」

だがいきなり後ろからの不意打ちによって含んでいた液体を噴水のように吐き出す。

「つ、つかさ！お前なんか変だぞ！」

あ、あのおとなしいつかさが、い、いきなりしようだなんて…！

「え？ な、何で椿君そんなに慌ててるの？」

ただ私は話をしたいだけなのに…。

「あ、慌てるに決まってるだろ！そんな突然しよって言われても…！」

「椿君は私と（話を）したくないの…？」

「い、いや、したくないとかそういうことじゃなくて…」

「じ、じゃあどうして…？」

つかさの質問に俺は戸惑う。

だ、だって俺達はまだ未成年だしそういうことは…！

「わ、私は椿君と一度ちゃんとしたいの！」

ガーンッ…！

つ、つかさはそこまで俺のことを…。
なのに俺は…。

「椿君、私としてくれるかな…」

「……………わかったよ。最初だから優しくするね…」

「え？あ、うん…」

この時つかさは当然こう思う。
や、優しくってなにを…？

「じ、じゃあ早速…」

「きゃっ！ な、なにするの…！」

俺はつかさの服を掴むとつかさは完全に拒否した。

あ、あれ？ さっき“うん”って言ったよな？

なのになんで否定されるんだ…？

「はあ…、喉乾いたな …… って」

その時リビングに入ってきたのはお約束人物のかがみさん…。

「……………」

「……………」

「……………」

うん、俺に死亡届が届きそうだな。

「いって… ……、し、したいって話があったことだったのかよ…」

俺は後頭部を押さえながら言う。

「う、うん。 っていうかそれしかないんじゃない…」

「あ、はは…」

そ、そうだよな…。

俺ってなに最悪なこと考えていたんだろ…。

「つ、椿君が紛らわしいことするから！」

何故俺が怒られなきゃならない…？

そしてつかさは改めて俺と話がしたいと言っのでかがみさんは退室した。

「……………つかさ、なに言っただろ…」

かがみはつかさがいじめられた後なので心配する。

閉めたりビングのドアを見つめているとみなみちゃんが降りてきた。

「…どうかしたんですか？」

「あー、なんかつかさと椿君が気になっちゃって…」

「……………入れないんですか？」

「そうみたい…。まあ長くなるかも知れないから私は二階に行つてくわ」

かがみは少し早めに階段を駆け上がった。

残されたみなみはドアの先にいると思われる二人を廊下から見守る。

「……………」

つかさ先輩に何を言うのか、きかせてもらいます。

あなたならつかさ先輩の価値を引き出せると思うから……………。

「まず昨日はごめんなさい…」

「あ、え…？」

つかさが他人行儀のような謝り方に驚く。

頭を下げられた時にどう対処すればいいかわからずに俺も頭を下げた。

「やっぱり…、親しい中にも礼儀ありっていうからちゃんとしておきたくて…」

「そっか…。それで話つて？」

俺は本題に移し変える。

「私とお姉ちゃん…、選ぶとしたらどっちを取る？」

「……………」

予想外の質問に言葉が詰まる。

どっちをつてことは一人を選べばもう一人に笑顔はない…。

あるとしてもそれは心から笑うことのできない偽物の笑顔だろう…。

それに二人は姉妹といえど全く違う…。

活発でしっかりしてて頼れるかがみさん。

料理が上手でお人好しのつかさ。

「…たぶん椿君は今、私たちの良いところを比べあってるよね…？」

「……………」

凶星だった。

俺は何も言わずにつかさがまた話し続けるのを待つ。

「やっぱり…。でも絶対椿君は私よりお姉ちゃんを選ぶと思う」

「…な、なんで？」

あまりにもはつきりとした口調により思わず疑問をぶつける。

「だって…良いところを探してたら圧倒的にお姉ちゃんの方が上だよ……………」

だから最後まで考えたら辿り着くのはきつとお姉ちゃんの手……………」

私なんかがお姉ちゃんに敵うはずないもん」

「そ、そんなこと…」

「わかるよ…。お姉ちゃんの方が優れてるくらい…。だって私はこんな自信がない自分が嫌いだから…」

「……………つかさ」

みなみちゃんの言った通りだった…。

自分のことを嫌っている。

でもまさか本当につかさがそう思っていたなんてわかっていても信じられない……………」

第108話 泣いて笑って

二人の様子を見守っているみなみもつかさと同様自分が嫌いだった。無口で面白いことなんか何一つ言えなくて…。

でもそんな私になんでゆたかとかひよりとかは近づいてくるのか、その理由も怖くて聞けない…。

ただの同情だったと言われるのが嫌だったから…。

いつそのこと私なんかがいけないほうがもっと皆笑えるんじゃないだろうか…。

暗い私がいけない方がもっと…。

つかさ先輩を見ていたらそんなことを時々考えてしまう……。

「私はドジだから皆から鬱陶しく思われる。でもお姉ちゃんは違う。頼りがいがあるってこなちゃんとかからは信頼を受けてる。」

「じゃあ私は？ 皆から何か信頼とかされてる？ ……きつとされていない…。むしろ邪魔者って思う人が多いくらい…」

「ち、違うよつかさ」

「違うないよ…。現に私は体育祭のときにドジをしちゃったもん。」

皆が恨むのは当たり前……」

「そ、それなら俺だって……！ 走り高跳びで最悪のミスとかしちま
ったし……」

「けど皆は椿君を笑って許した……」

それに比べて私は酷い眼で見られた……」

これが違い……」。

私だけが邪魔なんだよ……」。

誰も私を必要としていない……」。

誰も私を頼ってくれない……」。

誰も私を想ってなんか……くれない……」。

私にはいいところなんか一つもない……」

「……………」

何を言えばいいのかわからない……」。

悲しみの表情をするつかさに何て声をかけたらいいかわからないで
いた……」。

今の俺につかさは救えないのかな……」。

俺は過去を振り返る。

ゆたかも同じことを言っていた……」。

“私がいらないほうがみんなが楽じゃないですか……！！”

ドッケン

…………… そうだよな。

みんな自分が怖いんだ……」。

思い通りにならない自分が……」。

みんなに迷惑かけてる自分が……」。

俺はあのときゆたかに全力で言っただじゃないか。

だからゆたかを救うことができたんだ……」。

なのに俺はまだつかさに何も言っていない……」。

曖昧な言葉じゃなくて自分の芯の気持ちを……。

俺はふとドアに目をやるとみなみちゃんの姿がチラリと見えた。
みなみちゃんはそれに気づいて隠れたけどそのまま何も気にせずに言う。

「つかさ、さっき俺に聞いたよな……。どっちの手を選ぶか……」

「……………」

「……………」

つかさとみなみちゃんは黙って注目した。

「その答えだけだよ……」

俺はつかさを取るよ」

「……………え？」

つかさは椿の解答を疑う。

それはみなみも同じだろう……。

「俺はつかさの良いところをたくさん知っているから……。だからつかさを選ぶんだ」

「で、でもお姉ちゃんの方が絶対……!」

「……俺はさ、つかさに看病してもらったことを今でも覚えてる。

風邪を引いた時、つかさはドジをしながらも頑張って世話してくれた……。

意識を失った時も命懸けで俺を助けてくれた……。

俺が困つてるときに君はいつもそこにいてくれた……。

こなたじゃなく、かがみさんじゃなく、つかさ……。君がいてくれたから楽しく過ごせたんだ……。

だから俺はつかさのためにつかさを傷つけた奴等に拳を出した。

勝てない喧嘩でも躊躇せずに思い切り顔を殴った……」

「……………けど私は……!」

「もうこれ以上! 自分を否定しないでくれ……!」

「……………ッ!」

「頼む……! これ以上否定されたら……! 俺が悲しくなる……!」

俺が手を出してまで守ったつかさが自分を許さなかったら……! 俺

はつかさを一生……許さない！」

「っ、椿君……」

「……………」

言うことは言った。

後はつかさ、お前が決める……。

それにどんな答えでも俺はいつまでも待つてるからな。

つかさが本当に笑っている顔が来ることを……。

「…………ごめんなさい……！」

「…………えっ？」

「や、やっぱり私は……自分を好きになれない……！ たとえ椿君が許さなくても……こんな自分を好きになんかなれないよ……！」

「っ、つかさ！」

「椿君に私の背負ってる重さがわかるの！？」

俺は近寄ろうとするがつかさの声に足が止まる。

「わからないでしょ！？ だったらもう……、自分を嫌いになるのか……勝手なことばかり言わないでよ……！」

「……お、俺は……………」

つかさの辛そうな顔につい眼を反らしてしまう。

もう何を言っても無理だ。つかさには聞こえない……。

結局俺につかさは救えないんだ……。

何もわかっていない俺には……………。

「私には分かります……。つかさ先輩の重さが」

「み、みなみちゃん……！？」

ドアを開けて陰に隠れていた姿を現した。

まさか出てくるとは思わなかった俺は動揺する。

だがつかさはいることにも気づかなかったので俺以上に驚いていた。「どうしようもないくらい情けない自分がそこにいました……。」

消そうと思っても逆にこっちが消されて望んでいない自分が出てしま……う……。

友達と仲良くしようと思っても上手く言えなくて結局最後は独りに

なる……。そんな自分が私は嫌いでした……」

「……………」

「……………」

堂々と語るみなみちゃんに俺達は黙って聞いていた。

それはみなみちゃんに何かを期待しているからなのかもしれない……。

「けど私は椿君の話を聞いて自分を好きになろうって初めて思えました……」。

だって……こんな私でも好きでいてくれる友達が少なくても一人いますから……。

だからその人のためにも自分を嫌いにならずに好きになる努力をしないとその人に……申し訳ないです」

その人……それは言うまでもなくゆたかだろう……。

俺は下手に何かを言うよりみなみちゃんに後を託す。

「そしてつかさ先輩にも“椿君”という存在がいる……」。

なのにこれ以上自分を否定すれば椿君はどうすればいいんですか……？」

そう言われてつかさは俺を見る。

悲しい瞳は俺の全てを映していた。

つかさは警戒を解いて俺に尋ねる。

「……………こんな私でも……、ホントに好きになってくれる人はいるのかな……？」

「……………少なくとも……一人はいるよ……」

俺はつかさに手を伸ばす。

「俺がつかさの全てを受け入れるから……。だから帰っておいで、つかさ」

「っ、つばぎくん……」

つかさが俺の手を掴んで泣き出した。

涙がポロポロと流れ落ちる。

一粒がとても寂しい色をしていてつかさは溜めていたものを全部出すかのようにだった。

俺は柔らかい手を引いてつかさを子供みたいに抱き寄せる。

今は笑顔じゃないけれど、いつかきつと見せてほしい……。

自分を好きになった君の最高の　　。

第109話 おかえり椿君

「やっと学校に行けるのか…」

一週間の謹慎のせいで体はだいぶなまっていた。

気持ちもだいぶマイナス側に傾いており、やる気は最悪だ。

しかもソファで寝るのにはさすがに限界を感じて床に寝だしたがこれもかなり精神的にくる。

いい加減自分の部屋のベッドで豪快に寝てみたいもんだ……。

カーテンを開けると入り込んでくる日差しに目を細める。

このときばかりは生きてるって実感が湧くのは俺だけなんだろうな。

みんなで朝食を済まして一緒に登校。

これも当たり前のはずなのに妙に嬉しかった。

教室に入ると真っ先に高良さんが挨拶してくれる。

「おはようございます、椿君、泉さん、つかささん」

「おは……ん？」

ごく普通の挨拶だがどこかに違和感がある…。

「どうかしましたか？」

「い、いや…、いつから高良さん俺を名前で呼ぶようになったかなあって思ってた……」

「え、えつと…いつからでしょう？」

「……ま、いつか。名前で呼ばれるのもなれてしまったしな」
チャームが鳴って俺は自分の机に座る。

鞆を横にかけて携帯をいじっていると、受信メールの表示になる。

「……？」

知らないメルアドだ…。

しかもこんな朝っぱらから誰かと思い開いてみると、

“ サッカー部に入らないか？ by 梨原 ”

「部活か……」

確かに興味はある。

サッカーだつてしたい。

でも今は子猫達が家に住み着いているから無理だな。

素早くメールの返信をしてもうすぐ始まる授業の準備をする。

「おい、桃原！！なんで入ってくれないんだよ！！」

ちつ、わざわざこつちまで来るなよメールで返せよ理由は言っただと、

つつこまなければならぬポイントは多くあるが口にはしない。

めんどくさいからな。

俺は梨原を避けるために話を変える。

「あ、なあみゆきさん、ちよつとノート見せてくれ」

「無視しないでくれる！？」

「うおっ！」

又ウツと目の前に突如現れる梨原に思わずビンタをする。

つていうか顔を近すぎだ。

「も、桃原…」

梨原は地面に伏しながら俺の名を呼ぶ。

「お前さっきノートを求めてたよな…？」

「そうだけど？」

急に梨原の目が光る。

すぐに起き上がり『桃原が僕を頼ってくるのをずっと待ってました』
みたいに言った。

「なに？ノートを貸してほしいうて？」

「誰もお前なんか頼みはしない」

「しょうがないなあ。部活に入るなら貸してあげてもいいぜ？」

「あ、つかさでいいや。ノート見せてくれ」

「部活入らなくてもいいから少しは頼ってください！」
どっちなんだよ…。

しかも部活に入らないでいいってお前の当初の目的から脱線してる
じゃねえか。

こいつ構ってほしただけなんじゃないか…？

まあいいや。こいつのノートを見せてもらうか。

「じゃあ…梨原、ノート見せ」

「おまたせ！」

準備早いな、おい。

隣のクラスまで全力で取ってきた梨原は息を切らしていた。

俺は早速ノートをパラパラと見て写すところを探す。

へー、かなり字が綺麗じゃねえか。

げっ…。やっぱり一週間休んでたからけっこうな量だな。

今日中に終わらせれるか微妙なラインだ。

「梨原、このノート明日まで借りていいか？」

「あ、すまん。そのノートは俺も借りてる側だから無理だ」

「……………」

こ、こいつ役立たね…。

「…ん？ ななっ！？」

俺は昼飯を食ったあと食後の運動もかねて散歩していると、渡り廊下にいる一人の女の子に目がいく。

あ、あれってもしかして…由佳！？

陵桜の制服を着ているが間違いない！由佳だ！

なんであいつがこの学校に！？

見つかったら大変だぞ！？と言っておきながら何故か俺が隠れてしまふ。

逆に由佳は鉛筆を片手に持ち、堂々と学校の向こうにある景色を描いていた。

その筆遣いは繊細で思わず見とれてしまふ。

「どうかなさいましたか？」

みゆきさんが後ろから声をかける。

「いや、ちよつとあいつが気になって……」

「あら、もしかして惚れたんですか？」

「それは有り得ない」

「凄く可愛い方ですし気持ちはわかりますよ」

「いやその前にあいつはこの学校の生徒じゃないから」

「へ？そ、そうなんですか？」

「気付いてなかったのかよ…」。

「前に会っただろ、萩野由佳。 あいつは違う学校に通ってるんだがどうやって侵入してきたのやら…」

とにかく由佳が他校の生徒だとバレたらややこしくなるので声をかける。

「お前、こんなとこで何やってんだ？」

「あ、椿っちじゃん。 なんでここに？」

「それはこっちのセリフだつつの。」

なんで陵桜にお前がいる。 それにその制服はどっから徴収してき

た」

「ムズカシイニホンゴワカリマセン」

こ、このやるー……！

あくまで喋らないつもりか……！

俺は怒りを燃やしていると由佳の手元を見て疑問を持った。

「お前……絵なんか描けたのか？」

「そだよ。前にここ潜入したときここから見える景色がすごく綺麗でさ。」

だから描いてみたいなって」

前につて、何回潜入してんだよ……。

しかし由佳が絵を描いてるなんて知らなかったな。

今描いてる絵を見るとレベルは相当高い。

「もしかしてお前……画家目指してんのか？」

「うん！」

「……ふーん……」

由佳の眼は真剣だった。

そんな由佳を見て俺は複雑な気持ちになる。

なんだか差をつけられたみたいで……。

「……ま、ほどほどにしとけよ。じゃないと厄介な事になっちまうぞ」

「なにになに！もしかして心配してくれんの？」

やけに嬉しそうにする由佳。

「当たり前だろ。お前が捕まった時、『椿うちが』とか言つて

俺まで道連れにされる可能性がある」

「あ、バレてた？」

由佳は筆を置いて片付けだす。

「時間が危ないからそろそろ帰るね」

「……ちよつと待て。そのイーゼルとか画材はどつから持ち出した」

俺は由佳が直そうとするものを指差すと笑顔で答える。

「美術室だつたり」

やっぱりか…。

通りでイーゼルに美術部って書いてる訳だ…。

本当なら手伝ってやりたいが余計な巻き添えは勘弁だしな。

「俺は教室に戻るけど絶対先生達にバレないでくれよ」

「了解　またね椿っち」

第110話 王道を駆ける

「みんな帰ろう……ってあれ？ 椿君は？」

隣のクラスから来たかがみは鞆を適当に置く。

「椿君ならさつき美術室に行くって言ってましたよ」
美術室に…？

なんでそんなとこになんか…。

「もしかして告白に呼び出されたとか」

「ッ」

こなたが冗談気味に言うかがみはその光景を思い浮かべてしまう。
もしこなたが言ったことが本当なら私は…。

ってなんで私が椿君なんかのこと意識してるの！？

別に好きなんかじゃないのに……。

「まあ私たちには関係ないことだし帰ろうぜえ」

「……………」

関係ない…。

確かにみさおの言う通りだ。

椿君が誰かと付き合うことになっても私には……。

「……………まいったな」

美術室ってどこにあるんだ？

俺は階段を上ったり下ったりで美術室に行くだけで体力を消費していた。

二年と三ヶ月も通ってるのにわからないなんて情けないと思うやつらもいるだろうが仕方がないだろ…。

こっちの校舎なんかあんまり来ないし美術室とかはカリキュラムに入っていないから一度も見たことがない。

俺はある程度探し回っていると一つの教室に目がいく。

「アニメーション研究部…？」

右上の表札を言葉にする。

そんな部活が存在していたことも知らない俺は“アニメーション”という単語に興味にそそられる。

ちよつと覗いて見よつかな…。

ドアに手をかけてガラスと静かに開ける。

机に座っているのは金髪のどこか馴染みのある後ろ姿だった。

その人は俺が入ってきたことに気づきながらもそのままの体制で何かを書いていた。

「ん？ ひより？ 悪いけどその紙取って」

「……………」

ふむ、俺をひよりと間違えてるのか…。

「何やってんの？ さつさと……………」

「……………ども」

俺は一応挨拶する。

「……………誰？」

まあ最もな反応だな。

「……………あ、そっぴや前にやまと話してた人ですか？」

「うん、一応話してた……………かな？」

「ってことは走り高跳び大爆笑の人？」

「あ、ああ、まあ…そうだ」

俺の忌まわしい過去はまだみんなの頭から消えていないのか…。
ちよつと落ち込むよ…。

「それで…なんでここに？」

「えつと…美術室に行こうとしていたら迷っちゃったっていうか…」

「…」

「……………つまり美術室を目指していたら三年生なのに場所が分からずさ迷っていたらここに辿り着いた？」

「お恥ずかしながら…」

少々つぎはぎに言うが理解はしてくれたみたいだ。
情けないと思っていたら奥から声がする。

「ホントに恥ずかしい人ですね…」

「ああホントに……ってお前っ！？」

これで会ったが三度目だ。

動物に例えるなら猫と誰もが言いそうなツインテールの永森とやらが出てくる。

「お久しぶりです…」

「なな、なんでお前がっ…！？ た、たしか他校の生徒だよなっ！
？ なのはどうして陵桜の制服着てるんだ！？」

「何故とあなたに言われても…。私はただ由佳先輩の付き添いの
ついでにこうに会いに來ただけですが…」

っ、付き添いつてこんなとこまで來なくても…。

「ってちよつと待て。今由佳先輩って言った？」

俺は懐かしの名前を出す。

「ええ、そうですけど…」

「……………」

由佳先輩……。

由佳…先輩。

由佳？

つまり萩野由佳？

「もしかして由佳って人の名字は……」

「萩野です……」

「やつぱり……」

あんにやろー……

制服を着て潜入という共通点があるからもしかしたらと思ったが、まさかホントに由佳のことだったとはな。

それにしてもあいつ永森と同じ学校だったのか……

しかも付き添いに永森を呼んでるあたりを見ると仲は良いみたいなんだな……

つつか付き添いを頼むなよ。

「んで、由佳はどこ行っただんだ？」

永森は廊下を指差して言う。

「帰りましたよ、さつき」

さつきか……

え、さつき！？

「じゃあ由佳はさつきまでずっとここで絵を……？」

永森と八坂はコクリと頷く。

あ、呆れた……

そこまでして絵を描きたいのか。

「……お前ら学校は？」

「創立記念日で休みです……」

なるほどな。

それでこれを機にと学校に忍び込んでずっと描きたかった絵を描きに来たのか。

なんというか大胆な奴だな……

それにこいつも……

俺は永森の方を見る。

「な、なんですか…？」

「いや、あえて言わないでよくよ」

「……………」

今度は永森がジーツとこっちを見ていた。

顔になんかついてんのか？

「あなたは由佳先輩とどういう関係なんですか？」

「唐突だな…」

俺は少し考えた後、詰まり気味に言う。

「……………ただの友達かな…？」

「ただの…ね」

永森がやたらと意味深く復唱する。

「知ってますか？ 由佳先輩ってこっちの学校じゃけっこうモテたり告られたりしてるんですよ。それも女子に人気の男に告られたりもしてます」

確かに由佳は可愛いとは思いつけど性格が少しばかり問題あるような…。

「…ってそれが俺となんの関係が？」

「黙って聞いてください」

「はい……………」

「それで由佳先輩と同じ中学校だった人たちから噂を耳にしました。“付き合わないのは中学の時にいたサッカー部のエースのことが今も好きだから”って。

それが誰か分かります？」

「わからん」

俺は間髪入れずに即答する。

永森だけでなく話を聞いていた八坂も肩をガクツと落とした。

「あなたって鈍感の最先端を極めてますね…」

「わ、悪かったな…」

「とにかく、由佳先輩は好きな人がいるんです」

「へー…」

あの由佳に好きな人が、どんな奴なんだろ。
言っちゃ悪いけどあいつあんまり見る目ないからなあ。

「だから先に言っときます。由佳先輩を泣かしたりしたら絶対に許
しませんから」

「り、了解…」

なんでこんなに由佳を心配してんだ？

もしかしてこいつも由佳のことが好きってグループの一部か？

あいつ男っぽいところも多少あるから仕方がないっちゃんあ仕方がない
のかもしれないが…。

第110話 王道を駆ける（後書き）

後書きです。

本文に書くのを忘れてましたが由佳、やまとが通っているのは聖ヒイオリナ女学院です。

なので告られたりしてるのは学校の外です。

違う学校からも人気があり実は女の子からも告られたことがあります。

まあそれだけです。失礼します（（（^^;）

第111話 由佳のとある日

椿っち…、

一緒に観覧車に乗ったとき私言っただよね…。

“私の想いは変わってない”って…。

あれ実はね、変わってないんじゃないかって変われないのほうがいい言い方だと思う…。

だって、どれだけ椿っちを忘れようとしてもそんなことできなかったから……。

「萩野。俺と付き合ってくれ」
「無理」

このような展開を私は何度繰り返しただろう。
電話やメール、手紙でどこかに呼び出されて私はそこに単身乗り込

む。

言われることはいつも同じ。

ホントいい加減にしてほしいよ。

私は“あいつ”以外の奴とは付き合う気なんかないのに…。

「ゆーか、また断っちゃったの？」

中学からの友達が後ろから抱きついてくる。

「だって…」

「まさかあんた、まだ桃原君のこと好きなの？」

「……………」

自分から“うん”と言うのはなぜか素直に無理だった。

「あんた…、そろそろ桃原君から卒業したら？」

「そんなこと…」

できたらやってる…。

でもサッカーやってるあの背中がかっこよくて今でも思い出してしま…。

「はあ…、なんか勿体無いわね」

「な、何がよ？」

「だってそうでしょ？ 自覚ないかもしれないけどあんた凄く可愛いのに全部断っちゃって。 そんなんじやいつまでたっても彼氏で
きないよ」

「……………あのさ」

「ん？」

「いつまで抱きついてんの？」

そろそろ疲れてきた私は親友に退いてもらう。

「別に私は彼氏なんかいないよ」

「あ、由佳っ」

友達は声をかけるが振り向かず、颯爽と教室から立ち去る。

「はいこっち！」

「由佳先輩、パス！」

「左右に散ってディフェンスを拡散！」

由佳の指示により敵陣の守りが手薄になる。

そこにドリブルを仕掛けて一人かわしてシュートを放った。

豪快かつ綺麗な一閃はキーパーの手に触れずゴールネットを激しく揺らす。

「ナイッシュ、由佳！」

「凄いです由佳先輩！」

「あはは、ありがと。みんな、この調子でナデシコに殴り込みいっちゃいますか！」

持ち前のノリとリーダーシップでチームメイトの士気を高める。

これが由佳の役目だ。

そして家に帰ったあと、勉強と絵を描くことが習慣となっている。

風呂で部活の汚れを落として冷蔵庫に冷やしておいたコーラを飲む。

「っぷは〜。生き返る〜」

由佳は足らなくなっていた充電を満タンにして自分の部屋へいく。

イーゼルに向き合い、今日いたア二研の風景を忘れないうちに筆を動かす。

ここにやまとつちとこうつちがいて、それでパソコンがあって二人は楽しそうにしてて……。

機械のようにスラスラと描かれる下描きはあつという間にできた。
だがなにかが足りない。

左隅に必要な大きな存在…。

由佳は過去を検索する。

だが何も思い出せずとある人物を突如登場させた……。

「ここに…椿つちをいれてそれでこつちは……」

椿の横に寄り添うような形をした自分を描く。

こうつちにやまとつち、そして私に椿つちが寄り添う。

そこに窓を開けて夏の桜を描き足していく。

風が柔らかく透き通り絵を優しく表現する。

とても仲良しで楽しそうに笑っていて……。

「でも本当の私はこんな関係を望んではない……」

私が求めてる絵は椿つちと私が

「ふう…、由佳に好きな奴ねえ……」

まず俺である可能性は無いに等しい。

やっぱ高校で知り合った奴なんだろうな。

クンクン…、なにやら甘い香りが道路まで届いてくる。

何だろ…、これはアップルパイ？

玄関ドアを開けるとブワツと匂いが向かってくる。

そして奥から騒ぎ声が聞こえてきた。

「あ、こら！　ちよつとこなた、みさお！　つまみ食いばっかして

ないで手伝いなさいよ！」

「みさきち！　かがみが襲ってくる前に退散！」

「よっしゃー！」

ドタバタと足音が聞こえてそれらは俺のいる廊下にまで丸聞こえた。
った。

リビングに入ると想像通りかがみさんに追いかけられる二人の図があった。

「なにやってんだか…」

「あ、椿君おかえりー」

「…おかえりなさい」

ゆたかとみなみちゃんは笑顔で迎えてくれたがあっちはそれどころじゃないようだ。

「あ、椿君」

「おう、つかさ。もしかしてみんなでアップルパイ作ってんのか？」

「うん、もう少ししたら期末テストだから甘いものを食べて脳を働かせようと思って」

だからアップルパイってわけか。

けっこう気がきく……ってあれ？

「……テスト？」

「うん」

「……いつだっけ？」

「一週間後」

「………」

冷や汗がダラダラと流れる。

「椿君？」

「しまった…」

俺は持っていた鞆を無意識に落とす。

「何が？」

「テストの存在忘れてたあああああっ！」

俺は急いでマイバックからノートを取り出す。

「み、見事に真っ白…」

パラパラと捲っていくが文字らしきものは一つもない。

変わりと言っているのかわからないがご飯粒が最後のページにべったりついていた…。

「き、教科書を見ればなんとか対処は…！」

適当に開いた31ページ。

そこには落書きに埋め尽くされた織田信長がいた。

横には“ 私はロリコン ”とこなたが付け足した文字も…。

マズイ…！非常にマズイ事態だ…！

前回はみゆきさんがいたから乗り越えれた。

だが今回はどうだ？

頼りになると言ったらかみさんしかいない！

こなた、つかさ、みさおは言っちゃ悪いが論外だ！

ならかがみさんに教えてもらえればいいと思っっている奴等もいるだろうがそれは無理だ！

なぜならかがみさんはおそらく自分のことで忙しいだろうし、こなた

たちの分も見ないといけないかもしれない！

あやのさんやみゆきさんに関しても同じだ！

明日勉強を頼んでも手が放せない状態に決まっている！

つまり俺に補習から逃れられる手段がない…！

と熱血にいかに関自分が愚かということを説明していると、懐かしの声。

「ハッローエブリワン…！みんな元気してるー？」

救いの手、ここに参上。

「な、成美さん！」

俺はすぐに駆け寄り頭を下げる。

「俺に勉強を教えてくださいーい…！」

第112話 脅威のアドバイザー

「わ、私が勉強を？」

「お願いします！暇そうな人が成美さんしかいないんです！」

「つ、椿君、今何気無く酷いこと言ったよね…」

「こなたが突っ込むがもうそんなの気にしない。」

「頼みます！成美さん！！」

「い、いいけどお…、私が教えるとさらに悪化するかもよ…？」

「そんなわけないじゃないですか！ だからマジで教えてください！」

「ここで退くわけにはいかないという勢いで成美さんに頼む。」

「ま、まあそこまで頼りにしてくれてるならやっちゃんおっかな」

「成美さんからの了承を得た時にこなたが同情するような顔をしていた。」

「ゆ、ゆい姉さん…」

「しーっ。 こなたは大人しくしてれば問題なし！ お姉さんにドーンと任せなさい！」

「さ、さすが大人だ…」

「知性溢れる眼鏡は伊達じゃないな。」

「成美さんがいればかがみさんにもサクッと勝っちゃうかも…」

「んじゃあ早速秘密部屋で特訓だ！」

「成美さんはノリノリで俺と二階に上がる。」

「訓練所は俺の部屋。」

「いつものフィギュアやらなんやらがある部屋だが、俺は違った。」

「やる気に満ちており、未来の俺がかがみさんに勝つ妄想に囚われて」

いた。

「じゃまずはコツだね」

成美さんは世界史の教科書を開く。

「必ずテストには選択肢があるのはわかるかい？」

選択肢、確かに絶対あるな。

「まあわかりますけど」

「そのときは絶対に二番目か三番目を選ぶこと　なぜなら大半の

人はそこに答えを置くからなのだよ！」

「な、なるほど！」

そうだったのか！

二番目か三番目を選べば点は取れるってわけだな！

さすが大人だ！

ためになるアドバイスだ！

「それで年号の問題なんだけどこれは簡単だから安心したまへ」

年号を簡単というなんてこの人はやっぱりかなりの手練れだったんだ…。

俺はこのテスト前の一週間に成美さんからいろいろとテクニックを教わってテストに挑むこととなった。

テスト結果発表

桃原椿…… 7位！！

見事に10番以内を勝ち取った！

つてことになつたらいいよなあ…。

桃原椿…… 実際は禁則事項で言わないが後ろから数えたら5秒もかからないところにいた。

成美さんを信じた俺がバカだった…。

ちなみに世界史は21点…。

成美さんが言っていた通りに選択肢の問題は2と3ばかりを選んだがほぼ全滅。

年号も人物名も特殊な覚え方により混乱してしまい悲惨な状況……。もう俺に明日はない……。

「椿君、同情するよ」

こなたはニコニコ顔で言う。

「そんな口調には聞こえないけどな…」

「まあデジャヴな光景だから私はなんとなく楽しかったけどね」

つてことは成美さんに頼ることが地雷だと分かっていたのかコノヤロー……！

しかしその時さらにショックだったのがこなたの点数が遥かに良いということだった。

本人曰く徹夜でやっただけで80点は取れるらしい……。

こんなオタクのアホ毛に圧倒的差で負けるなんて屈辱だ……。

こちら三年C組ではいつも通りのやりとり。

「おい柊」

みさおがかがみを呼びかける。

「なによ？」

かがみは近づいていくと

「これ見てくれ！」

バツと手を広げる。

掌にあるのはたった一つの大きなケシカスの塊。

かなり練り込んだのか、やたら軟らかくできていた。

でもこれがどうかしたのかしら？

「けっこう良い出来だろ？」

みさおがエツヘンと自慢気にしている。

またこの子は勉強せずにこんなことを……。

かがみはネリケシをグニユツと潰してポイツとゴミ箱に投げ捨てる。

「あー！ なにすんだよ柊〜！」

「なにつて別にあんなケシカス持ってもしょうがないじゃない」

「ケシカスじゃねえ！ 第二のカス君ってんだよ！」

「第二のカス君？」

まさかケシカスに名前なんかつけてる？

「あんだ痛いわね……」

「あやのー！ 柊が冬風のように冷たいー！」

みさおがあやのに泣きつくように身を寄せる。

あやのはよしよしと頭を撫でながら宥める。

「ところで第二がいるってことは第一もいるんでしょ？ そいつだ

けで十分じゃない」

そう言々とみさおはピタツと体を止める。

そして落ち込んだ声で

「第一は先生に没収されちまったんだってヴァ……」

「お気の毒様……」

あやのは優しく苦笑いする。

「あやのは優しすぎよ。」

だいたいケシカス作ってるなんてお子様かあんたは」

「あ、あやのー！ 柊が、柊があ〜」

「ま、まあまあ……」

「自業自得でしょ」

「あ、あやのー！あそこに鬼が…！」

「ま、まあまあ…」

「……………」

「…ゆたか、どうしたの？」

「あ、みなみちゃん…。ちょっとここの回答が何でこうなるのか分かんなくて…」

ゆたかがプリントに向き合いをしているとみなみは鉛筆をゆたかから借りて説明する。

みなみの教え方はとても上手くゆたかはすぐに答えを理解した。

「わあっ！ありがとうみなみちゃん！やっぱりみなみちゃんは凄いねー！勉強もできてスポーツもできるなんて憧れちゃうよー」

ゆたかが自分のことのように喜ぶ。

「…けどゆたかも可愛いしそれに優しいから…」

「え、そ、そうかな？」

ゆたかは多少照れ顔をする。

「…うん。だからゆたかのこと私は尊敬してる」

「あ、ありがとう」

二人はいつもどおりのペースで話している。
そして啞然としながら聞くひより…。

「……………」

あ、あれって素だよな？

別に狙ってなんかないよね？

第113話　これが一般的

「ふと思ったんだけどさ」

こなたが下校時に唐突に話を振る。

「なによ、急に」

かがみさんは素早く対応。

この辺はさすがというべきだろう。

「ギャルゲーで出てくるような二次元のヒロイン達が本当にいたらめっちゃくちゃ嬉しいって思わない？」

「あ、確かにそれは思ったことある」

俺も一応こなたに賛成。

だってそうだろ？

大抵の人が一度は思ったことがあるはずだ。

こんな子がいたらどれだけ幸せなことが
。

“ 椿お兄ちゃん、早く起きてよー ”

“ あと五分ゝ… ”

“ だめだよー、はやくしないと私のご飯冷めちゃうよー ”

“ 後で食べる… ”

“ むーっ ”

“ぐえっ！乗るな乗るな！”

“起きるまで退かないもん！”

“意味わかんねえよ！”

“だつて…”

“……？”

“お兄ちゃんはお兄ちゃんのものだもん…”

「くっはー！」

「ひゃうっ！？　ど、どうしたの椿君？」

突然変異した俺を見てゆたかはビツクリする。

「あ、いや何でもない…！」

危ない危ない…。

あまりのシチュについて興奮しちまったぜ…。

でもそんなのあったらいいなあ…。

「もしそんな子がいたら私的には萌え気分になっちゃうから最高な
んだけどねー。でもオタクの人たちはいろんな意味でもっと危なく
なりそうだけど」

「その前に今そんな想像するあんたが危ないわ！」

この状況だと俺が想像していたことは黙っていた方がよろしいな。

「あ、ちよつと飲み物買ってくるね」

つかさが自販機を見つけて飲み物を買いに行く。

「あ、なら私もなんか買うかなー」

みさおもつかさと同じ自販機へ並んで行った。

俺達はその間ちようどいい座り場所を発見し、つかさたちが戻ってくるのを待つことにした。

後ろ姿のつかさがお金を入れて炭酸ジュースを押す。

ガコンツと落ちてきたジュースを取り出して開けようとするが、

「あ、あれえ？」

動かずにいた。

もう一度力強く回そうとしてもピクリともしない。

つかさは諦めてみさおに任せた。

つかさはその間にみさおが飲むやつを聞いてボタンをポチッ。

つかさが取り出してみさおのほうを向くとフタに敗北した姿があった。

二人は多少粘ったがそれでも開かず、こっちまでしょんぼりしながら帰ってきた。

「椿ー、このフタは最終ボスだってヴァ……。ちつとも動こうとしねえ……」

やれやれ、やはりここは男の見せ場だな。

「よし、貸してみ」

俺は受け取ったジュースを左手に持ち右手でフタを包む。

大きく深呼吸したあとに一気に力を爆発させた。

「ふんつつつぬおおおおおおおっ！！！」

な、なんだこのキツさ！？

じ、冗談だろ！？ めちゃめちゃ固いじゃねえか……！

俺は踏ん張って一点に集中させる。

だがいつものプシュツという音は鳴らないでいた。

「もしかして椿君…」

みなみちゃんが細い目で見る。

「い、いや、ちよつと待て！もうすぐで開くから！」

だがどんなに力を入れても無となった。

お、おかしいな…！

こ、こんなはずじゃ…！

街中を歩く人々が俺をチラチラと見ていた。

そ、それはアレか？

こんなのも開けられないのかよという上から目線を送ってんのか！？
周りの空気もそろそろ危なくなり俺は思いつきり腕を使う。

「こつ…のやるおおおおおおおー！」

「…………ぐすんっ…」

「あー、そ、そんなときもあるよ椿君」

かがみさんは優しく接してくれる。

だが今は慰めが逆に痛い…。

結局さっきのボスは通りかかった黒井先生が苦しみながらも“大人のプライドにかけて負けるわけにはいかんのやー！！”

と言って出番少なく終わってしまった。

たぶん今ごろ怒ってるだろうなあ…。

まあ俺の屈辱に比べたら出番が少なくくらい許してくれよ……。

「何を許せやて？」

「何って黒井先生の出番が…」

目の前には金髪の見覚えのある顔。

「ってなんで黒井先生がいるんすか!？」

「なんや、脇役はどつかいけ言うんか？」

ニツコリと拳を作って脅迫のように言う。

つつか前から思っていたが黒井先生ってこなたや俺に何かと拳骨するよな…。

そんなこと先生がしても問題にはならないのだろうか…。

「どうせ桃原がまたウチのこと言うと思っただからまた来ただけのことや。」

気にすることあらへん。

出番増やすためならウチはこういう無駄な登場はいくらでもするで

」

ええホント無駄な登場ですね…。

ガツンッ

「いってえ!なんなんですか!」

「さっき心のなかで余計なこと思っただけや」

ちっ、ななこ少尉め。いの中にそんな技術を　。

ガツンッ

「ンガッ!？」

「誰がななこ少尉やねん」

な、なぜわかるんだ…?

これが教職を極めたからこそできることなのか…?

「お前ら寄り道せんと帰りやー」

そう言っただけ黒井先生は視界から遠ざかっていった。

「…け、結局黒井先生って何しに来たんだろ？」

「俺がききたいよ…」

第114話 春、光に囲まれて（前書き）

椿が入学するところを見たいと言われたことがありましたので書きました。

ですから114話は入学式の日のことですので椿がどのような初日だったかを知っていただければと思います。

第114話 春、光に囲まれて

「ホントに陵桜にいくのかい？」

パンフレットを見終わった叔母さんが問いかける。

「うん…。家から近いのがその学校だから……」

俺は申し訳なさそうに返事をした。

「そうか……」

「ごめん叔父さん、叔母さん…。けど俺の進む道だから自由に選
びたいんだ…」

「……ああ、わかってる。

そういうところは父親そっくりじゃからな…。

だが学生の一人暮らしは辛いじゃろ…。わしの家に来れば学校は
違うがすぐそこに有名な学園がある。だからそこに入学して」

「……………」

俺はその話になると必ずと言っていいほど下を向いてしまっ

それははっきりとした拒否だったことは二人はちゃんと理解してい
た。

「……やはりまだあの家が忘れられないか……」

二人の寂しそうな顔をするので俺はチクツと細い痛みが体に走った。

「……ごめん」

「いいんだよ椿。あなたはそれで」

叔母さんは優しい声で言う。

「けど今まで世話になってきた叔父さんたちの好意を俺は……」
無駄にしてしまう……と最後まで言えなかった。

「そんなことないわよ。椿は“あの事故”が起こった後もしつかりしてるし、時折見せる笑顔が私たちにどれだけ安らぎを与えたか……」

「……そうじゃな……。それにあの家は椿たちがずっと住んでいた家だから離れる訳にはいかんよなあ……」

「……………」

俺はなにを言えばいいのかわからなかった。

どんな言葉がぴったりくるのか、答えが見つからず無言となる。

すると叔父さんは青い帽子で顔を隠しながら言った。

「椿、行ってこい。それで今度……遊びにおいで」

「……うん……ありがとう」

俺は踵をかえして我が家へと帰る。

「なあ……ばあさんや」

「どうかしましたか？」

「“あの二人”は椿の成長を見ておるじやろうか……」
「そうねえ……」

「年をとるとは嫌なもんじやな……」

「私もそう思います……」

「今度わしらが泣くのは……椿が幸せになった時じゃ……」

「はい……」

四月になった。

俺は新しい制服を纏って新品の鞆を持ち、前に買った靴を履いて家を出る。

登校中には同じ制服の奴等が楽しそうに笑いながら登校していた。

「お姉ちゃん、学校楽しみだねえ」

「まあそうだけどあんた勉強ついてこれるの？ 試験のときはギリギリだったみたいだし」

「だ、大丈夫だよ。でも高校生にもなったら恋の一つや二つしたいな」

「それよりつかさ、早く行かないとクラス発表の時困るわよ」

「あ、待ってよお姉ちゃん」

何気無い普通の会話。

俺はそれを羨ましいとかは別に思わない。

正直学校なんてどこでもよかった。

陵桜を選んだ理由はのんびりと過ごすために一番そこが家から近いからだ。

だから羨ましいなんて…。

俺はつい目線をしたにやると横から急に現れた女子とぶつかる。

「グアッ!？」

「いてっ!？」

…っであれ？

ぶつかったのにも関わらず俺にはあまり強い衝撃がこなかった。

女の子ってこんなに軽いものなのか？

不思議に思いながらも俺は倒れた女の子に手を伸ばす。

「だ、大丈夫か？」

「いてて…。いやーすまねえな。ちょっと前見てなくて」

「大丈夫？みさちゃん」

「こんぐれー平気だぜえ！ んじゃあたしら先急いでるから」

八重歯の女の子はまた走り始める。

それをさつき隣にいた女の子が慌てて追いかけていった。

「なんとも元気な女の子だな…」

しかし初日からこんな目に遇うなんてツイてない……。

「いやー、君ってツイてるね」

「うおっ!？」

どこから現れたのか、青い髪にアホ毛がピーンと立っている女の子がニマニマしながら近づいてきた。

けどどうなったらこんなアホ毛が自然と立つんだ？

「今君にフラグが立ってるね」

立っているのはお前のアホ毛だ。

「初日からイベント発生する人なんかそうそういないのに君って凄いいね」

やけに馴れ馴れしい女の子だな。

おまけに背がちっちゃくて話するとき女の子は上を向かないといけない…。

なんて不憫な…。

「私、君にちょっと興味持っちゃった」

「はい？」

今なんて言った？

「また会えたら運命ってことで今度は積極的に話にいくからよろしく」

素早く走っていく女の子を俺は止めようとする。

「あ、ちよつ……！」

「どうかなさいましたか？」

すると後ろから桜色の女の子が話しかけてくる。

「あ……、いや、なんでもない……」

「そうですか。ではお先に失礼します」

礼儀正しく接されて俺は戸惑いながらもそれに合わせた。

入学式を終えて教室に入り黒板に桃原椿と書かれた座席表を見て自分の席にどかと座る。

「ふー…」

今日はやけに騒がしかった…。

俺の平和を壊す前触れか？

「……………なーんてな」

そんなわけない。

だってこのクラスの中にはさっきの奴等は一人もいない。

フラグが立っているわけがない。

俺は担任が来るまで体をたおしていたらいつの間にかそつと寝息をたてながら眠っていた……。

第115話 ホント最悪

「　　っていう入学式をちょうど今思い出した…」

夕食、俺は高校生活初日のことをみんなに話した。

すっかり忘れていたけど俺はもうこなたやみさおに会っていたんだ…。

「あー…、言われてみれば確かに男子と入学式でぶつかったような

…」

みさおが過去を頭に思い浮かべる。

「ま、なんにしてもこなたが積極的に椿君に接したおかげで今の私たちがいるのは事実ね」

かがみさんがこなたに感謝するかのように言う。

しかしこなたが家に来たのを断らなかった俺にも感謝してほしいよ……。

「今日ってつかさとかがみさんの誕生日だよな？」

放課後、俺はつかさに確認をいれる。

「え、そうだけどそれがどうかしたの？」

「はい、これ」

俺は大事に鞆の中に入れていた四角い包みをつかさに渡す。

「募金箱？」

「いや違うから」

どこまで天然なんだよこの子は…。

するとこなたが事情を説明するためにコソツとつかさにだけ聞こえるように教える。

「つかさ、それは椿君からの愛がこもった誕生日プレゼントだよ」

「え、ええ!？」

ん？なんでつかさが驚いてんだ？

二人が何を言ってるのかもよく聞き取れないし。

そしてこそこそと会話は続く。

「わわわ、私どうしたらいいの!？」

「つかさ落ち着いて　椿君は本気なんだからちゃんと真剣に考えて返事をしたらいいと思うよ」

「で、でも椿君は私なんかと…」

「じゃあつかさ、まずは“プレゼントありがとう”って言うの」

「う、うん」

「それで次は“でも私よりも相応しい人がいると思います”って言う」

「うんうん」

「あとは落ち着いた表情で“微妙かな”って言うとけば大丈夫だよ」

「う、うん。そうする」

つかさは改めて俺に向き直った。

あ、やっと会話が終わったのか。

「つ、椿君」

「ん？つかさどうした？」

「プ、プレゼントありがとう」

「あ、ああ」

なんか言葉が棒読みに聞こえてくるんだけど幻聴か？
つかさは戸惑いながら話を続ける。

「で、でも私よりも相応しい人がいると思うの…！」

「……？」

いったい何の話だ？

私よりも相応しい？

俺は全く訳がわからなかった。

「つ、つかさ？ 頭大丈夫か？」

「微妙かな」

び、微妙なのか…。

まあ表情は落ち着いているし平気だろ。

だが俺はさっき不自然に断られた包みを見ながら小さいため息をつく。

断ったってことは俺のプレゼントが気に入らないのかな…。

「なあつかさ…、俺ってそんなにプレゼントのセンスないのかな…」

「？」

「び、微妙かな」

やっぱり微妙なのか…。

そうだよな、俺なんかどうせウジ虫的なヘタレなんだ…。

ところでなんでこなたが後ろで爆笑してんだ？

「じ、じゃあつかさ、今日一緒に選びに行かない？ つかさもその方がいいだろ？」

「び、微妙かな？」

それも微妙ですか…。 ならどうしたら…。

あ、まさかつかさ…。

俺はあることに気づきそつと聞いてみる。

「つ、つかさは俺からのプレゼント…、い、いらなかった？」

「微妙かな？」

ガーンッ！！

微妙「俺からのプレゼントは特に欲しいわけでもない」俺は邪魔…。
け、けどそれは考えすぎか？

ここはちゃんと確かめないと…。

「っ、つかさは俺のことどう思ってる…？」

「び、微妙かな？」

カガーンッ！！

そ、そこまで俺のこと眼中にないのか…。

なんかいろんな意味で俺もう立ち直れない…。

「いやー、さつきは楽しかった」

「お前一回地獄に落ちろ…」

俺はこなたから事情を知り無駄な赤っ恥をかったことに気づいた。

「まあ結局プレゼントは渡せたんだしいいじゃん」

「そういう問題じゃない」

「ふっ……、けど椿君さ、かがみとつかさの誕生日は覚えてて私の誕生日は忘れていたんだね…」

「そ、その節はすいません…」

ま、まさかまだ根に持っているとは…。

「それでつかさ先輩は何貰ったんですか？」

みなみちゃんは四角の包みの中を気にする。

「えーっとね、青いリボンだよ」

するとこなたが、

「はあ…椿君も堕ちたもんだね…」

と情けないと言っているかのように呟く。

「なにがだよ」

「だって私の時は2500円のアクセサリくれたじゃん。なのにつかさには安物のリボンだなんて…。リボンだなんて…！なんて差別…！」

こなたはガシツとつかさを抱き締めた。

その光景は他人から俺が完全に悪いように見えてしまう。なので俺はつかさが持つリボンを指しながら言うことに。

「あのな、言つとくけどそのリボン1980円だからな」

「1980円！？ たかがリボンがかよ！？」

む、たかがリボンとは失礼な。

「これは店のオススメらしいからそれくらいするんだよ」

「ほえー…」

みさおはジーツとリボンを見つめる。

なんか欲しそうな目をしているがみさおがつけても似合わない気がする…。

「ありがとう椿君、大事にするね」

「おう」

つかさは笑顔で包みを鞆に入れる。

「じゃあかがみ先輩には何をあげたの？」

ちようどここにはいないかがみさんについてゆたかは聞く。

なぜいないかという委員長のおやのさんの作業を手伝っているらしい。

「ああかがみさんにはバッチリな物あげといたから」

今回かがみさんにプレゼントしたのはかなり自信がある。

なぜならかがみさんのプレゼントを選ぶとき、こなたと一緒にかなり悩んだからだ。

一体かがみさんは今どんなに喜んでいるだろう。

「柊ちゃん、桃原君からのプレゼントは見たの？」

あやのはかがみの左手に持つ袋を指す。

「あ、まだ見てなかった」

かがみは袋から小さな箱を取り出す。

大きさからして何かはわからない。

かがみは丁寧に開けると、

「……なにこれ」

かがみの口からボソツと疑問が出る。

それもそのはず。

プレゼントの中身は初音 クの衣装だからだ。

しかもネギ付き。

「あ・い・つ・はーっ!!」

「ま、まあまあ」

あやのは落ち着くようにかがみを宥める。

「今ごろかがみさんは喜んでいるだろうなあ」

「ホント最悪!!」

第116話 にゃ？

「みにまむムテンポで 歩いてー」

台所で皿洗いをしているゆたかがイヤホンを付けて音楽を聞きながらのんびりした曲を歌っていた。

「なんだか楽しそうだな」

「ふえっ!?!」

つ、椿君!?! なんでここに!?!

「ん? どうしたんだ?」

「い、いやなんでもないよ」

び、びつくりしたー!?!。

まさか見られてたなんて!?!。

恥ずかしいよー!?!。

ゆたかは顔をリングゴみたいに赤面する。

「あれ? 続きは歌わないの?」

「つ、続き!?! で、でも私下手だし恥ずかしくて!?!」

「そんなの大丈夫だよ。俺、ゆたかの声けっこう好きだし」
うう…。そんな笑顔見せられたら断れないよー!?!。

「じ、じゃあもうちょっとだけ!?!」

ゆたかは覚悟を決めてもう一度歌い始める。
しかし、

「ゆうちゃーん、これもお願いねー」

「~~~~っ!?!」

ゆたかは慌てて台所から飛び出して行った。

「ありゃ？ゆうちゃんどうしたの？」

こなたは状況が読めずにいた。
いた。

「お前タイミング悪すぎ……」

ある日の昼休み、健やかな空の下で渡り廊下を歩いていると、ここにいてはならない人物が下にいた。

「あいつはまたか……」

このまま見なかったことにするのもありなんだが放っておくと何をしでかすか分からないので下に降りてそいつのどこまで急ぎ足で行った。

「おい由佳、お前また来てたのか」

「……………」

由佳は俺の声が届いてないのか、ずっと茂みを観察していた。

「……………」

何かあんのか？

俺は首を伸ばして由佳の視線の先を覗いてみる。

そこにはまたもやいてはならないやつがいた。

「にゃーお」

「ね、猫？」

奥にいたのは黒い猫だった。

なるほど、こいつ猫好きだもんなあ。

昔はよく俺が由佳に女装を無理矢理させられたけど必ず猫耳付けさせるからなあ……。

ま、思わず見とれてたわけがようやくわかったよ。

しかしなんでこんなとこでじつとしてんだ、この猫…。

「おいで〜」

俺は猫じゃらしを左右に振りながら誘う。

だがこつちを睨んでいるだけでちつとも動かなかった。

今度は由佳が誘いをかけていった。

「ほら、大丈夫だよ。 恐いお兄ちゃんはどうかに行ったよー」

「……………」

恐いお兄ちゃんって俺のことか？

「にゃー」

「よしよし、君はいい子だねー」

猫はスリスリと由佳になついていた。

何かに負けた気がするのはなんでだろー…。

「んで椿っちはなんでここにいの？」

「オマエがそこにいるからだろ！」

「ふーん、まあいいや」

いやいやいやいや！

こんなとこにいたら流石に制服来ててもバレるぞ！

由佳は猫を抱いて俺を見つめる。

「な、なんだよ？」

「この猫どうしよつか？」

「俺が知るか！」

どうするか分からないならほつとけばいいのによ…。

「このまま手放すのも面白くないしなー」

面白い面白くないを基準にしてやるなよ。

明らかに猫が困ってんじゃねえか。

猫はにゃーおとー鳴きしてジッと俺を見つめる。

すると何処からか声が聞こえてくる。

“ どうだ、羨ましいか。猫にしかできないスキンシップだぜ ”

「な、なんだ？」

今、頭ん中に声が届いたぞ！？

“ここだつつうの。今、萩野由佳に抱かれてる猫だよ”

「ね、猫〜！？」

そんなバカなことがあるわけない！

猫が俺の心の中に話しかけてくるなどそんな並外れたことが！

“なんか信じてないみたいだが説明するのもめんどくさいから単刀直入に言わせてもらう”

猫のくせになんて偉そうなんだ…。

とにかく俺は萩野にバレないように屈伸をしながら猫に集中する。

だが萩野から見たらそれは言葉にできないくらい終わっている姿だろう。

「つ、椿っちなにしてんの？」

「な、何って屈伸だよ。最近運動不足でさあ。あっはっはっ、

屈伸って楽しいなあ！」

「へ、へえー…」

ダ、ダメだ…！

完全に引いてる…！

“いいじゃねえか、女の一人や二人くらい”

猫に言われたらかなりム力つくな…。

“んで用件なんだが、お前誰かを猫にしてみたいとは思わないか？”

「え？」

誰かを猫にする？
どういうことだ？

“…… ったく、なんで人間ってのは理解力がないんだか……”

猫は呆れたように言う。

“だから人を猫にすることができると言ってるんだよ。でも喋り方と姿が少し変わるだけだな”

「ま、まじかよ……」

だ、誰でも猫みたいになるか……。
けどそんなの信用できないしなー。

「あ、ところで一つ質問いいか？」

“なんだ雑種”

「ざ、雑種って……。まあいいや。なんで俺に話しかけるんだ？
由佳でもよかったじゃねえか」

“特に理由はない。強いて言うならお前がたまたまそこにいたからだ”

理由はないか……。

じゃあ俺じゃなくてもよかったって訳だ。
なんともアバウトな猫なこと。

“それで誰を猫にするんだ？”

うーん…。　試しというのは失礼だけど猫とえば一人しかいない…。

「じゃあ永森やまと（どうせ無理に決まってる）」

“よし、わかった（マジでするからな）”

猫は目を閉じて一鳴きする。

「にゃーお」

“できたぞ”

「え、もう？」

案外早いんだな…。

もつとややこしいことをいろいろするかと思った。

“じゃあ俺はもう行くぞ”

「あ、ちよつと待て」

俺は得体の知れない猫を引き留める。

「お前なんでそんなことしてんだ？」

猫は数秒間を開けて答える。

“暇潰しだ。　まあ人間が困った顔を見てると楽しいからな”

さ、最悪な猫だな…。

あれ？　でもこの場合って俺も共犯？

いやしかし猫になるはずがないから大丈夫か。

「じゃあもうひとつ。　お前の名前はなんて言うんだ？」

“…………名などない”

猫は目を合わせずに言う。

……なんか聞いちゃいけないことだったか？

“それではもう行くぞ。 お前の示した者がどうなってるか確認しとけよ。 俺はその時のお前らが困った顔をするのを密かに見といてやる。”

そこから突然、猫との通信は途絶える。

そして猫は由佳の腕をすり抜けてどこかへ行ってしまった。

「バイバーイ」

由佳は猫の後ろ姿を見送りながら手を振った。

「さて、やまとつちを迎えに行きますか」

やっぱりあいつも来てるのか。

確認ついでに俺もついていくかな。

「俺もついてく。 アニ研に用事あるし」

適当に理由をつけて俺は由佳と一緒に永森さんの元へ。

廊下を一步一步進むたびに妙な緊張感が湧いてきた。

そうなるというんなことを想像してしまう。

いや、深く考えすぎか…。

人間が猫になるなんてそんな非日常的なことがあるわけない。

そしていつのまにか目的地に着いて由佳がドアを開けて中に入る。

俺も続いて入室すると妙な空気が含まれていた。

そこには永森さんはおらず八坂さんだけがいた。

「は、萩野先輩にいつかの高跳びの人!？」

まだそのネタを引っ張ってくるのか…。

「俺は桃原だつてば…」

「こうつち、私らやまとつちを迎えに来たんだけど今どこにいるの？」

八坂はなにか慌てて舌を回す。

「い、いや、えと、えーつとやまとは今…、何て言うのかな、とにかく危ないというか、その…」

やたらと回りくどい言い方に俺はピンときてはいけないものがきた。

「ま、まさか…」

俺は自然に動く体に身を任せた。

「あ、ちよつと奥は…」

八坂さんは俺を止めようとするがそんなのお構い無しだ。

由佳も俺についていき、奥に行くと床に座り込む女の子がいた。

「な、永森さん？」

そつと声をかける。

すると永森さんはゆっくり振り向く。

そしてその姿に俺と由佳は仰天した。

「「なっ！！！！？」」

俺は目先にある現実が信じられなかったがさっきの名のない猫の言葉振り返る。

“人を猫にすることができると言ってたんだよ。でも喋り方と姿が少し変わるだけだな”

「う、嘘だろ…？」

俺は思ったことをそのまま口にした。

その理由は永森さんの頭に“猫耳”がついているからだ。

そして喋り方も……。

「に、にゃー…」

永森さんは上目遣いで鳴く。

「な、なんてことだ…」

まさか永森さんが本当に猫になるなんて……。

第117話 異常人

「や、やまとっちどうしたの!？」

由佳は慌てて傍に寄る。

「にやにやー、にやーにやー!? (萩野先輩、私どうしちゃったの!?)」

な、なんて言ってるのか全くわからない…。

俺は見るに耐えなかった。

あ、あのクールの永森さんがこんな……こんな……可愛らしい姿になるなんて…!

つつか似合いすぎだ…!

今の永森さんを見たら何人が萌え死にすることか…!

って俺は何を考えてるんだ!

永森さんが一大事になってるってのに!

俺はまず状況を把握する。

「あー、八坂さん。いつから永森さんはこんな風に?」

「えっと…ついさっき私が手洗いから戻ってきたらやまとがこんな状態になってて…」

じ、時間ぴったりだ…。 やっぱり俺のせいか…。

ところで猫化はしたけどどこまで猫に近づいたんだ…?

「永森さん、自我はあるのか?」

「にやー(はい)」

永森さんはコクリと頷く。か、か、可愛い………じゃないだろ俺! しかしいつの言ってた通り変わったのは喋り方、あと猫耳と尻尾がついただけか。

けど参ったな…。

永森さんがこの姿で外に出たら変に思われちゃう…。

どう行動を取るか…。

「っ、椿っち…」

「ん？」

「やけに冷静なんだね…。 やまとつちがこうなってるのに」

そりゃ俺が原因でこうなっちゃったからなあ…。

あ、そういやあいつ近くで困った顔を見てるって言ってたよな！？

じゃあもしかしたらまだ俺の近くにいるんじゃないのか！？

俺は窓際に来て外を見回す。すると窓の向こう側に一匹の黒猫が

こつちを覗いていた。

「あ、あいつだ！」

俺は勢いに任せて窓から飛び降りようとする。

「も、桃原先輩！？」

「ちよつ椿っち何してんの！？」

八坂さんと由佳は俺を制止してくる。

「あいつだよ！ あいつが永森さんを猫に…！」

「あ、あいつってアレはただの猫だよ！？」

「違う！！ あいつはただの猫じゃねえんだよ！！」

「ど、どこをどう見たらそんな見方ができるんですか！？」

「あいつ実は喋れるんだよ！！それでなんか魔法みたいなので永森さんを…！！」

ザー…！！（みんなが引く音）

えっ！？ あれ！？ みんなが遠く感じるのは気のせいか！？

「じ、重症だ…！！ 桃原先輩それは痛すぎる…！！」

「椿っちがそこまで病んでるなんて…！！」

「にゃーにゃー！！（それより早く助けなさいよ！！）」

「俺は壊れてない！！ あそこにいる喋る猫が悪いんだってばー！！！！」

俺が必死に真実を伝えようと叫んでいると、

「なんやなんや！ どないしたんや！！」

黒井先生が騒ぎに駆けつけてきた。

「あ、黒井先生！ 桃原先輩をなんとかしてください！」

八坂さんが援軍を要請する。

「な、なんや分からんけど了解や！」

黒井先生は後ろから俺の動きを封じる。

「桃原！ とりあえず落ち着かんかい！！」

「俺は万全に落ち着いてますよ！！ それよりあの猫を捕まえてください！！」

「あ、あの猫って猫関係ないやろ！！」

「あの猫喋るんですよ！！ それで永森さんに魔法をかけて猫に……！！」

「お前はアホか！！ これは保健室に直行や！！」

黒井先生は引きずる形で俺を連れていく。

「放してください！！ 猫を捕まえないといけないんすから！！」

しかしそんな抵抗も無駄になり、俺は先生たちに保健室へと無理矢理連行された。

「椿っち頭冷えた？」

「最初から冷えてるよ！」

「じゃあ桃原、猫は喋るか？」

黒井先生は常識問題を出す。

「はい！！」

俺は自信満々に真実を答えた。

「あかんわ、こないストレートに言うなんてまだおかしいんとちゃ

うか」

「そうですね。バグっちゃってますね」

「人を調子の悪いゲームみたいに言うな!!!」

「まったく！ 何で誰も信じてくれないんだ！

永森さんだつてこんなワケわかんないことになってるのに！

「とにかく今は何でやまとつちがこうなったかを探すしかありません」

「だからそれは」

「ハイハイ、わかったから椿っちは大人しく寝てなさい」

由佳は起きようとする俺をまた保健室のベッドに転がす。

「そやなー。 なんとか対処法を……… ってあんたウチの生徒か？」

「あ……」

や、やばい……。

今になって気づいたけど由佳が人前に姿を現したらバレる可能性があつたんだ……。

「それに被害にあつたその生徒もウチは見覚えがないねんけどなー

……」

先生は端にいる永森さんにも目を向ける。

ここでバレたら更にややこしいことになるのは誰もが承知だ。

由佳は苦笑いしながらもなんとか誤魔化そうとする。

「も、もちろんここの生徒ですよ……！ 何言ってるんですか先生は

……」

お前ウソつくの下手だな……。

「そうか……。まあどうでもええけど」

黒井先生はこれから先生としてやっていけるのかが心配だ……。

「しかしあれやな。 今の状況を親御さんにどない連絡したらええんやろ」

確かにそうだよな……。

両親にいきなり、

“お宅の娘さんは猫になりました”

なんて突拍子な出来事を説明しても信じられるわけがない。

「にゃーにゃー」

みんなで悩んでいると猫の声……いや、永森さんの声がする。

「やまとつちどうしたの？」

「にゃにゃーにゃにゃにゃ」

「生魚でも食べたいんか？」

「にゃーにゃー！」

な、なんか怒ったぞ…。

まあ今のは黒井先生がふざけてるから怒るのもわかるけど、何言ってるのかわかんないんだよなあ…。

「なあ永森さん、文字に書いたら分かるんだけど」

「あ、それやったらそこにあるノートを…」

「これはダメですよ先生」

天原先生が即答拒否する。

「代わりにこれを使ってください」

天原先生は引き出しから白い紙とボールペンを永森さんに渡す。そして何かを書き込んでいく。

俺たちは黙って猫耳………じゃない、動いている尻尾………じゃない、筆を見つめる。

「にゃー（できました）」

永森さんが紙を向ける。

それを黒井先生が受け取り、みんなが見る。

俺もベッドから起き上がり参加する。

「なになに：“親にはまだ言わないでほしい”」

「そないなこと言われてもなー…。これはやっぱり親御さんには言わなあかんやろ」

「にゃにゃー（お願いします）」

猫の鳴き声にしか聞こえないが永森さんは黒井先生にお願いをして

いるようだ。

黒井先生もそれを感じとる。

「はあ……わかったわかった……。報告はなしや」

永森さんは少しホッとした。

たぶん心配させたくないんだろう……。――

自分で解決する、たぶんそう思っているんじゃないだろうか……。――

第118話 悲劇の序章

「それで今日はどないするんや？」

「にやにやー（家には帰りたくないです…）」

永森さんは猫耳をピクピクさせながら紙に書いた。それを読んで永森さんの気持ちを理解した俺たちは困った表情になる。

家に帰りたくないということなら誰かの家に泊まるしかない。

「桃原」

黒井先生が目を輝かせてがっしりと俺の両を掴む。

その瞬間、黒井先生が思っていることが手にとるようにわかってしまった。

念のために聞いてみようと思える口を開く。

「な、なんですか…」

「空気読んだらわかるやろ」

もうお前しかおらへん。そう言いたそうな明るい口調だった。

「ちよつ、ちよつと待ってくださいよ！　なんで俺が！？」

「そ、そうですよ！　いくら桃原先輩でも男の子なんですし…！」

八坂さんと共に反対運動を起こす。
「そっぴやお前等知らんかったんやな。こいつん家にはすでに泉たちがおるねん」

「く、黒井先生！　それ言ったら…！！」

俺は口止めしようとしたが遅かった。

黒井先生は言つてはいけなことを最後まで言つてしまった。

「……………あ、そついや言つたらあかんのやつたな」

「……………」

なんかぶちギレそうになつてゐる自分がある…。

今さらだが俺と女子複数が同居していることは基本的には他人にバレてはいけない。

なぜならそこから噂が広がり下手したら俺たちは退学となり、最悪街から追い出されるかもしれない。

そんなことだけは避けたい道だ。

俺は今、この街が好きだしなにより両親が残した家から離れたくない。

亡くなつた両親の唯一の思い出をずっと残していきたい。

だからバレルことだけは勘弁だ。

「い、泉つてあのこなたつち!？」

「マ、マジで一緒に生活してるんですか!？」

「あー…さあ？」

「椿っち声裏返つてるよ」

「こいつ嘘つくんだ下手くそやからしゃーない」

そんなの自覚してるよ…。

つかバラしたあんたが言うな。

「せやから今さら一人や二人増えても変わらへん」

他人事みたいに適当に押し付ける。

俺はここで退いてはいかんと過去の経験を生かして食い下がる。

「俺よりも先生の方が適任でしょ!」

「わかつてへんなー。ウチみたいな先生という立場のやつより年齢が近いお前の方があいつも過ごしやすいんや」

「あー、言われてみれば確かにそうだな。俺も黒井先生なんかといるとお酒とか飲まされて危ない道に行きそうになるかも」

ガッンッ!!

振り下ろされた拳が俺の脳天にダメージを与えた。

「なんかで悪かったなー桃原。地獄でも見たいんか？」

「出すぎたこと言つてすいません…」

これ以上何も言つてはダメだと思い下手に出る。

そして俺が頭を抑えながら謝っているとき、

“にゃー”

「……………」

あの猫だ。

騒ぎの原因となつている鳴き声が外からまた聞こえてきた。

しかし今度は俺は冷静になる。

騒がずにじつとしていた。

“にゃーにゃー”

まだ鳴いている。

いったい何がしたいんだ…？

俺には意図が全く分からなかった。

“にゃにゃにゃー”

「……………これって…」

誘っているのか…？

話があるから外に来いと…。そういうことなのか…？

「ん？ どないしたんや桃原。打ち所悪かったか？」

「俺、ちよつと用事できましたんで外に行つてきます」

「えっ、っ、椿っち？」

由佳がワケを聞こうと名を呼ぶのは聞こえたが足を止めなかった。

俺は由佳が呼ぶ声よりも猫の鳴き声の方が気になったからだ。

「こんなときに椿っちどうしちゃったんだろ…」

「もしかして逃げたとか？」

「こうが冗談気分で言う。」

「んー。せやけどあいつはそんなことする奴やないねんけどな
ー」

確かに黒井先生の言う通りだ。

椿っちは無責任に事態を放り投げる男じゃない…。
考えないと…。

椿っちが何をしにいったのか…。

「にゃーにゃーにゃー（どこにいったんでしょ）」
「……………そっか」

由佳はやまとを見てピンとくる。

「猫だ…」

「えっ？」

「さっき猫の鳴き声がした。きつと椿っちはそこに行ったんだ」
「で、でもなんで猫のどこになんか？」

「椿っち、やまとっちがこうなった原因が猫って言ってた。だからその猫さんのところに行ったんだ」

由佳は一般ではあり得ないことを確信する。

当然黒井先生たちはそれを批判した。

「そんなワケあるかいな。猫が喋るなんてそんなないない」

「そうですよ由佳先輩。それよりこれからのこと考えときましょ」

二人は全く気にせずによまとと天原先生のところに寄る。

しかし、由佳は二人の言うことよりも椿が言ったことよりも

「……………私、ちょっと行ってくる」

「ゆ、由佳先輩!？」

「ハアハア……! あいつどこにいんだよ……!」

靴を履き替えずに中庭まで来たが鳴き声が途切れて猫がどこにいるのか見当がつかなかった。

辺りを真剣に見回しているとまた鳴き声が響く。

“にやにやー”

そっちか!

草木あるのにも関わらず茂みの奥を走っていく。

するとそこには毎日必ず会う奴らが猫を抱いていた。

「あ、椿君」

「ヤッホー」

「か、かがみさん……!?!? それにこなた……!?!?」

第119話 犠牲者追加

猫を追っていたはずだが、かがみさんここなたが俺の前に現れた。
しかもストライクの体操服…。

「な、なんでここに！？」

猫だけかと思っていたため焦りが出る。

「次の体育の授業が合同だから二人でグラウンドに行こうと思ったんだけど、こなたが猫を見つけたから見に来てただけよ。そっちはなにしてんの？ 体操服にも着替えなくて」

…そうか、次は体育だっけ。一大事が起こっているので授業のことなんか全く頭に入ってなかった。

「あー…、次の体育は休もうと思って」

「え？ なんで？」

やはりかがみさんは理由を聞いてくる。

「い、いやまあちよつと気分がね。そ、それより早く行かないと二人とも授業遅れるよ」

俺は不自然気味にも猫から二人を放そうとする。
早くこいつに永森さんを戻してもらわないと…。

「それもそうね。こなた、行くわよ」

「あ、うん」

こなたが猫を地面に降ろそうかと思い、ゆっくり手を下げる。
その時だった。

“ にゃーにゃー ”

「なっ!？」

い、今鳴いた!？」

ずっと静かにしていた猫はこの時を狙っていたかのように二回鳴いた。

その鳴き声はどこか普通とは違う魔法みたいなものが含まれているような感じがする。

それは俺が以前永森さんを猫にしまった時に聞いた鳴き声と全く同じであつたからだ。

「に、にゃー…? (つ、椿君…?)」

「っ!？」

ビクツと体が反射する。

今の鳴き声はどこから来た…?

こいつは何も言っていない…。

ということは…。

俺は顔を上げて二人を凝視した。

ピコピコ

人間にはないものが動いている。

あれはなんだろう。

そう聞かれれば迷わずに答えれると思う。

“猫耳だ”と……。

「にゃーにゃー!？」 (どうなってるのこれ!?)」

「にゃにゃーにゃーにゃー (私達のしゃべり方が猫になってる!?)」

「

一度現実逃避するため目を閉じる。

これは夢なんだ…!

夢だったらバルサミコ酢を一気飲みしてもかまわない…!

だから夢にしろいてくれ!

必死に誰かに願いながらも一度目を開いて世界を見る。

「にゃーにゃー（椿君どうなってるの!?!）」

「……………」

こなたが助けを求めるように見つめる。

チラッと頭を盗み見するとやはり猫耳…。

願いは脆くも崩れて灰になった……。

“さて、面白いものも見れたし帰るか”

猫が背中を向けてどこかに消えていこうとする。

俺はそれを逃さずにガシッと捕まえた。

「お前……！ なんのつもりだ！」

“なんのことだ？”

俺達は二人に聞かれないように小声で会話する。

「さっきから関係ない奴等ばっか猫にしゃがって……！ 俺達の困ってる顔がそんなに楽しいのかよ!?!」

“楽しいよ”

「……!!?」

即答だった。

なんの迷いもない普通に放たれた言葉が怒りの感情を上げていく。

…… 本当は俺はこの猫になんと答えてほしかったのだろう。

仕方なくやっている、

そうしろと命令させられたから、

そんな第三者が関わるような答えでも言っただけだったのだろうか。

けど何を言われてもたぶん怒りは収まらない。

こいつはこなた達まで巻き込んだのだから。

「お前ふざけんなよ！」

俺は猫を片手に持って右手に拳をつくる。
風を切りながら力いっぱい振り絞った右手が猫に当たろうとしたその時だった。

“にゃー”

「うおっ!？」

一鳴きしたら俺の体が微光する。
な、何が起きてんだ!？」

「おい猫……ってあいつどこに行った!？」

いつの間にか手からすり抜けて猫の影はどこにもなかった。

「くそっ、逃げやがったか……!」

あいつホントに何がしたいんだよ……。

全然わかんねえ……。

それにまた悩みが増えてしまったし……。

「に、にゃーにゃー? (つ、椿君、何がどうなってるの?)」

「……俺にもわからない……。あの猫が何をしたいのか……って

あれ? 俺、今猫の言葉を理解できた?」

気づけばこなたの問いに反応していた。

「にゃーにゃー? (ホントに?)」

「ああ、こなたの言葉がわかる」

なぜこうなったのか、考えられる原因はただ一つ。

あいつの最後の鳴き声だ。あれはこういう効果だったのか。

「とりあえず二人とも体育は休んでこっちにきて」

「に、にゃー!?(え、ちよっと!?)」

「にゃーにゃー!?(どういふことよ椿君!?)」

「訳はあとから話すからとにかく今は一緒に来て」

二人の手を強引に引っ張って俺は永森さんのもとに戻る。

「あ、あれ？椿っちどこに行っちゃったんだろ…」

由佳は猫の鳴き声を頼りにしようと思ったが鳴き声は一つもしなかった。

適当に探すにしても広すぎてわからないし、なにより私はこの生徒ではない。

黒井先生は誤魔化せたとしてもむやみに動くのは危険だ。

なにか手掛かりになるものを見つけるため由佳は陰に隠れながら猫のいそうな場所へと赴く。

「ん？」

半ばで由佳は木々の裏で猫らしき尻尾を見つける。

「あれかな…？」

由佳はそーっと近づいてその姿を捕まえる。

しかし、それは猫ではなく……………。

「にゃ？（ふえ？）」

人だった。

しかも見たことのある女の子…。

「き、君ってたしか椿っちの近くにいた……………」

第120話 金髪の猫

俺はさらなる被害者となった。こなたとかがみさんを連れて保健室に戻った。

「ただいまーっす…」

「お、なにしとったんや桃」

黒井先生がガシヤンと横にあつた身長測定を倒す。

その目線はバツチリとこなたとかがみさんの猫耳に向けられていた。

「な、なにしとんのやお前ら!？」

黒井先生の目が点になる。

「にゃーにゃー…」

「泉! 何言つとるかわからんわ!」

「えっと…」それが私達にもよく…」だそつです」

俺はこなたの言葉を解釈する。

「なんでお前が理解しとんねん!？」

「にゃにゃーにゃ」

「だから柊もちゃんと日本語喋らんかい!」

黒井先生がツツコミをいれたあとに二人がなぜこうなったかを俺が知っている範囲で説明する。

これを聞いた二人は無理矢理納得した。
それ以外考えられないからだ。

そして黒井先生や八坂さんも今回の件でようやく信じてくれた。
被害者は全員で三名となつてしまいみんなまとめたい方がいいという事で結局永森さんは俺の家に来ることが決まった。

六時間目になつた時、早退した方が帰りやすいと黒井先生が許可を出してくれて俺達はスムーズに校門からでることが可能となる。
しかしその途中で永森さんがぶつぶつと文句らしきことを呟いていた。

「にゃーにゃ…（なんで私が野球帽を…）」

「しょうがないだろ。それしか耳隠せないんだし」

猫耳を付けて帰宅するというのはいろんな意味で危ない。

おそらく速攻で街の噂トツプ3に入るだろう。

だから見つかるわけにはいけないので野球部の部室から徴収……じやなかった、借りた野球帽で三人の耳を誤魔化しているんだが、永森さんはどうやら気に入らないらしい。

「あとちよつとだから我慢してくれ」

「……にゃー（……わかつたわよ）」

そんな不機嫌面で了解されてもな…。

「にゃーにゃー（本物の猫耳は萌えるねー）」

こっちはこっちでなんか楽しんでるし…。

前向きつてそこはいいんだろうけど。

「にゃにゃー、にゃーにゃー。にゃーにゃにゃ（こなた、あんまはしゃがない。帽子が落ちちゃうでしょ）」

やっぱ一番落ち着いてて猫になつても頼りになるな…。

でも他人からしたらかがみさんですらにゃーにゃー言っただけで
るとしか言い様がないのが可哀想…。

一人は怒り気味に、一人はニマニマ気味に、一人は落ち着き気味に
となんともバラバラな感じで帰宅道を2・2の形で並んで歩いてく
そして幾度となく見慣れた家に着き鍵がかかったドアを開けようと
すると……。

「……………ん？」

開いてる…？

鍵を回さずにドアが開いた。

おかしいな……。朝は確かに鍵かけたはずなのに…。

「にゃーにゃー？（どうかしたの？）」

「あ、いや…鍵がかかってなかつた」

「おかえり椿うち」

やたら元気な声で中から由佳が迎える。

「……………お前だったか」

心の隅では泥棒かと俺はちよっぴり安心した。

鍵はおそらく予備に火鉢の裏に隠しているのを使ったのだろう。

こいつよく遊びにきてたからな！。

「にゃーにゃーにゃー？」

こなたが猫語で話しかける。

「えっ、もしかしてこなたうちとかがみうちも猫になっちゃったの
…？」

「ああ、また猫にやられちゃったんだ。あ、因みに今の訳は“ど
うして由佳ちゃんがここに？”って意味だから」

めんどくさい役割だが俺はそのまま通訳する。

「ありや？ 椿うち理解できるの？」

「なんかワケわからんことされた…」

急に俺の体から光がボンヤリと包んでそれから俺は猫の言葉がわか
るようになった。

ななが目的でそうしたかは謎だけだな……。

「それで本題に戻るけど何でここにいる？ 悪いが今日は忙しくなるから遊びに行ったりはできないぞ」

「あー…実はね…、やまとつちみたいに猫になった人がいたりして……」

「はっ！？ ま、またっ！？」

犠牲者が更に出たというのか…！？

でもいったい誰が…！？

「と、とりあえず中に入ってよ。私じゃ何言ってるか分かんないけど椿っちが理解できるなら話は早いと思うし…」

「そ、そうだな」

俺は内面ドキドキしながら靴を脱ぐ。

その時に隣にあった靴は由佳の物と見たことのある靴。

やはり猫にされたのは俺の知り合いのようだ。

リビングにいるとこのことで俺は意味無く音をたてずにドアを開けた。

「にゃあっ！？」

「うわっ！？」

突然大きな声がして俺はビビってしまう。

向こうもいきなりドアが開いたことによりびっくりして椅子ごとひっくり返っていた。

その姿は金髪にショートヘア、少し高い身長に大きな胸…。

「にゃー…（イタイ…）」

そして少しカタコトが入ったしゃべり方は…。

「パ、パティ…？」

「にゃー！にゃにゃーにゃー！にゃー！にゃーにゃー！（オー！ツバキじゃないデスカ！！ワオツ！コナタタチまでネコになって萌えパワーズンカイネ！）」

「……にゃーにゃー（……元気な人ですね）」
永森さんが呆れるように言う。

確かにこの事態とは裏腹に明るすぎる。

そこがパティのいいところもあるんだけど…。

それにしても被害にあった子ってパティのことだったのか…。

ってことはこれで四人目…。

かなりややこしいことになっちゃったな……。

バーチャル世界といい猫化といい、なんで俺ばかりこんなことが起こるんだよ……。

第121話 夏影

「なるほど、じゃあパーティは茂みでキャットを見つけて触ろうとしたらそうなったのか」

「にゃー！（そうネッ！）」

「……それってつまりパーティっちを最初から狙ってたワケじゃないんだね」

偶然……ということか。

でもせめて俺の知らない奴にしてくれればこっちの負担が減るのに……。

「にゃー……（それにしても……）」

こなたがかがみさんを品定めするかのように見る。

「にゃー？（どうかした？）」

「にゃにゃ〜（猫耳姿のかがみ萌え〜）」

「に、にゃー（う、うっさい）」

「にゃーにゃにゃ〜（永森さんも需要バツチリだね〜）」

「にゃーにゃー……（嬉しいのか嬉しくないのかよくわかりません……）」

「私ちよつと近くのスーパーで買い物してくるね」

食材を切らしていたため由佳は夕食を買いに出かけた。

本来なら俺達が行くべきなのだが三人は猫になって外出は危険、俺は唯一こいつらの言葉が理解できるため一緒にいたほうがいい。だから俺達の代わりに由佳が行ってくれることに。

「あ、卵も切らしてたからよろしくー」

「わかったー」

ボタンと閉められるドア。

一人減った空間だがややこしいことに変わりはない…。

早くあの猫を見つけないとなー…。

「にゃー（少し喉渴いたわね）」

かがみさんはソファーから立ち上がって冷蔵庫に向かう。その際に俺の目の前にかがみさんの尻尾が通った。

「……………」

「にゃー（どうかしたんですか？）」

「あ、いや…ちょっと……………」

今思えばこの四人にあるあの尻尾と耳って感覚あるのかな…？

だいたい耳って人間の耳と合わせて四つになってるけど聞くときってどこで聞き分けてんだろ？

深まる謎が気になって一番気軽に話せるこなたに聞いてみる。

「なあこなた。その猫耳って飾りなのか？」

「うーん、たぶんそうかな。聞くときは普通にもともとある耳しか活用されてないし。でも自分で動かすことできるんだよ」

こなたはピクピクと猫耳を自在に動かす。

「へえー……………」

耳があんななんだったら尻尾も動かすことができるけどあんまり意味があるものじゃないんだな。

「（にゃー、にゃにゃ）ふー、すっきりした」

「……………」

かがみさんが喉を潤した後、こっちに帰ってくる。

普通の猫と同じ質感が気になるし少し握ってみよっかな。

どうせどこかのサヤ人みたいに尻尾が弱点なんてことはないだろ。俺は一直線に手を尻尾に向けて伸ばした。すると、

「にゃんっ…！（あんっ…！）」

「……………へ？」

「に、にゃ…にゃにゃー…にゃん…！（つ、椿君…し、尻尾…はダメ……………んあ…！）」

「……………」

ま、まさかの弱点か…。

なんというお約束な設定…。

「に、にゃ…にゃー…にゃ！（ち、ちょっと…早く放して…よ…！）」

「

「あ、ごめん！」

俺は慌てて握りしめていた手を放す。

「にゃーにゃー（椿君へんたいい）」

「い、いや誤解だよっ」

「にゃーにゃー（今のは誤解も何もないと思いますが）」

「にゃにゃー（ツバキダイタンネ）」

「いやだから違っつてば！」

「だから高すぎるってば！」

「由佳ちゃん、これ以上はさすがに…」

「もう一声！　お願い！」

「……………」

由佳はスーパ－の帰りにお馴染みのお肉屋に寄っていた。

お肉を買うときはいつもここで買っているためオヤッサンとは気付かないうちに仲がよくなった。

「うん…、じゃあ380円でどうだい？」

「よし買った」

オヤッサンは景気よくお肉を袋に入れていく。

やっぱりオヤッサンが相手だったらお得してくれてラッキー。

「はいお待ち。それにしても今回の買い物は大量だなー。パーティーでもするのかい？」

オヤッサンは由佳が両手に持つどでかい袋に目が注目する。

「まあそんな感じだったり。じゃ私急ぐから」

「おう、楽しんでこいよー」

由佳は急ぎ足でお肉屋から家へとまっすぐに帰宅しようとする。

噂の黒猫は道端でノコノコと歩いていた。

「ねえあの猫見て」

「うわぁ…凄く汚いわねー」

「こら、バイ菌がつくから近づいちゃだめ」

黒猫を一般人たちは避けていく。

それもそうだろう。

何故なら黒猫は砂や泥などの汚れが目立つところにたくさんあるのだ。

「……別にいいさ。どうせ俺は生まれた時から泥臭い黒猫なんだ…。今さら人間に何を言われようが関係ない……。」

黒猫はゆっくりとその場に座り込み大きなアクビを一つ。

“お腹…減ったな……。”

しかし誰かに恵んでもらうにしてもこの容姿だ。

食べ物をくれるやつなんて誰も……。

「わあー、こんなところに猫さんがいるー」

「ホントだ……」

ふん、そんなに猫が珍しいか。

どうせお前らも俺を貶して行くん。

「可愛いねーみなみちゃん！」

“ えっ？ ”

「そうだね……。けどなんで倒れてるんだろ……？」

「お腹でも空いたのかなー？」

“ な、なんなんだこいつら…… ”

「ゆたか、近くにペットショップがあるから何か食べ物買おうか……」

「？」

「うん！」

“ なんで俺なんか…… ”

「じゃあちよつと待っててね。すぐに戻るから」

“ ……なんで小汚ない俺なんかに優しくしてくれるんだよ…… ”

二人は俺の頭を撫でたあと南の方へ走っていく。

“ …… ”

黒猫はその二人を見て人間に対しての心が柔らかくなった気がした。

第122話 始まりの光

遅いな…。

黒猫はウロウロとしだしてはやる気持ちが体に表れてくる。
やっぱりめんどくさくなって帰ったのか……。
考えたくないことを頭にちらつかせた。
太陽の熱にしばらく当てられていると、

「あーっ!!」

……………？

さっきの二人と同じ反応だが声と足音は一人のものだった。

「あの時の猫さん！」

げっ!？ こいつは桃原椿の近くにいたやつ!？

「どこに行ってたのさー」。

学校にいた時ずっと探してたんだよー?」

やれやれと言いながら由佳は買い物袋を置いてあの時のように猫を抱く。

“ え、ちよっ…”

泥だらけの自分を躊躇なく身を寄せてきた由佳に戸惑った。

「もー、こんなに汚して」

えっと…、ハンカチハンカチと…。

由佳は右ポケットからハンカチを取り出して猫の体を隅々まで拭いていく。

「はいできた」

これでさっきよりは万全にキレイだね。
達成感に満ち溢れて満面の笑みを出す。

“あ、ありがと”

たぶん気持ちは伝わっている。

言葉にはしていないが思いの底で礼を言った。

「ところでさー…」

ん？

話を変えるような接続を使うので黒猫は耳を傾ける。

「君って喋れるんでしょ？」

……っ！？ なぜいきなりそっちの方向に！？

それはあまりに唐突な質問だった。

目を点にした様子を見た由佳は話を続ける。

「だって椿っちが言ってたもん。“あの猫は喋るんです！”って」

ちっ…、あいつが原因か。 いちいち要らんことを言いやがって。

「で、どうなの？」

「に、にゃー？」

誤魔化そうと普通の猫っぽく鳴く。

「じ〜〜〜〜っ……………」

「に、にゃ…」

「じ〜〜〜〜っ……………」

「……………」

だんだん厳しい状況に流されていく。

バ、バレるか…？

よくない方向を考えた猫。 しかし由佳はいつまでたっても期待した反応をしないため諦めの表情となる。

「はぁ… やっぱり猫が喋るわけないか……………」

猫を地上にゆつくりと解放する。

「でもこんなところでホントどしたの？ 帰るところがないの？」

“……………”

確かにそうといえはそうなる。 別に特別帰る場所なんてどこにもないし家族もない。

小さい時に人間に捨てられてからずっと奇跡的に生きてきたのだ。そしてある日に“変な光”に包まれてから怪奇現象が起こった。

人語が理解できるようになり、年をとらなくなった。

その光がそうしたのだろうと思うが、なぜ人語を扱えて不老長寿を手にいれたのかは詳しくは知らない。

ただ光が奇跡を与えてくれた。

そう思うしかなかった。

だから俺は感謝すると同時にその光の謎を解明しようと探しはじめた。

俺を見下すように虐めてきた人間たちを避けながらも俺を長い長い時間をかけて何十年とやっと辿り着いたのが“桃原椿”そしてだ。

はつきりとはわからないが少し前に桃原椿が俺が浴びた光と同じ光に包まれていた。

桃原椿がバーチャル世界でのゲーム中に意識を復活させたときに放った光がまさにそれだった。

俺は鳥肌が立った。

ついに足取りを見つけて冷静さをなくしながら桃原椿に接近していったが説明する用意をしていなくて何を言えばいいのかわからなかった。

だから困った顔を見るのが楽しいとそれなりの理由をつけたのだ。しかし桃原椿はあれから光を一切表さずにいる。

やはり簡単にはでない代物なのだろう。

なら俺の願いはいつ叶うんだろう…。

長い年月をかけて探し続けた光はホントに桃原椿から発せられたの

だろうか……。

「うーん…、その様子だと帰る場所がないみたいだね…」

「にゃーお」

「そっかぁ…」

じゃあどうしようかな…。

私の家には連れて帰れないし、知り合いの誰かに頼むしか……。

由佳は友達を一人一人検索していくがほとんどがペット嫌いとか禁止とかだった。

しかしたった一人だけペットが好きで飼える人がいた……。

「椿っちだ…」

由佳は自分が好きな人物の名を口にする。

そうだ、椿っちがいるじゃん！ 椿っちだったら絶対にOKしてくれるにちがいない！

由佳は早速手荷物を持って猫に言う。

「ねえ、私の友達のとこに行かない？」

“友達…？”

猫は首を傾げる。

「その人はすっごく優しいから大丈夫だよ」

“……ふむ”

厄介になったほうがいいかもしれない。

しばらくはそこを拠点にして桃原椿に近づいていくほうが楽しな。つてか桃原椿の家以外ならどこでもいいや。

あいつやたら俺のこと恨んでそうだし。

「ほらいこ」

由佳は桃原椿の家に向かうため先立って細い道を歩いていく。

猫は桃原椿の家に行く真実を知らずに由佳についていった。

第123話 解除

「お、プリン一個残ってんじゃん」

冷蔵庫の中には焼きプリンのカップが一つ。

誰のかわからないがちょうど腹が何かを欲しがってたところなんだよな。

俺は構わずにプリンのフタを開ける。

引き出しからスプーンを取り出して大きな一口分をいただいた。

「うんまうい」

やっぱりグラン店の焼きプリンは柔らかさといい味といい最高の出来具合だな。

さてさて、もう一口と……。

「にゃーっ！！！！（ああーっ！！！！）」

俺がスプーンで掬ったプリンを食べようとするとかがみさんがみかんを持ちながら凄い形相で叫ぶ。

「にゃにゃー！！（それ私のプリン！！）」

「あ、そうなのか。すまんが一個もらっ」

ボウッ！

かがみさんの髪が金色に輝いた。

ってかこれってスーパーサイヤジンじゃないのか！？

「許さない……！！」

や、やばい！　かがみさんの目が本気で怒ってる……！！

「前に二時間行列に並んでやっと手にいれたグラン店の焼きプリン

を……！！」

かがみさんが持っているみかんがグシャツと潰れる。えっ！？そこまで怒りに狂っているのか！？

「ま、まてかがみさん！ 謝るから！」

「それをよくも……！ よくも……！！」

「さっきのはまたお金払うからひとまずは！ な！？」

「さっきのは？ 焼きプリンのことか……？」

どこから持ち出したのか、かがみさんは野球に使う金属バットを両手に一つずつ持っていた。

「ちよっ、その金属バットはリアルに危ないよ！？」

「焼きプリンのことか……っ！！」

ブンブン振り回してかがみさんは向かってくる。

「ぎゃー……っ！！！！」

「さあ着いたよ」

由佳はある家を猫に案内した。

“ここが今日から俺の本拠地となる家か……。さすがに緊張するな……”

「椿っち許してくれるかなー？」

ほうほう……、ご主人の名は椿というのか。

なかなかいい名前

“ってあれ？ 椿？”

違和感が走って前の記憶を急いで探る。

たしかあいつは桃原椿。

でもってこいつが言う椿っちっていうのはもしかして……！

いやだがそんな訳が……！

そつだ、表札だ！ 表札が違つていれば…！

【桃原】

“ぎゃーっ！！！”

完全に本物じゃねえか！！

じゃあ俺は桃原椿の家にお世話になるつてのか！？

冗談じゃない！ 今ここで会つたら何をされるか！

猫は一目散に退却しようとするが、

「こおら、どこいくの」

由佳は猫の尻尾をギュツと引つ張る。

「さあいこうね」

ぎゃーっ！！！！

「ほら早く」

ぎゃーっ！！！！

「ふふふ、逃がさないよ」

ぎゃーっ！！！！

じたばた抵抗するがそのままドアを開けられた。

すると家の中から桃原椿が吹っ飛んできた。

「うわあっ！」

「まてーっ！！！！」

激しくしりもちを着いた桃原椿の後ろからツインテールの女の子が鬼のように追いかけていた。

人間の雌はこんなにも狂暴だったのか…。

「ぎゃーっ！！！！」

「さ、あれが椿っちだから挨拶に行くよ」

“えっ！？”

ま、まじかよ！？

見つかるのはやだだつて！

「ほおら、早く」

“ぎゃーぎゃーっ!!”

体を横に縦に動かすが脱出は難しかった。

「ぎゃーっ!!!!」

向こうも必死に逃げている。

やがて二人の目が合った。

「……お前はあの時の！」

桃原椿が一瞬動きを止めた刹那…。

ブウンッ!!!

カーンッ!!

「ぐふうっ…!」

バタリ……

「……………」

後ろからのツインテールによる猛攻で桃原椿、撃退……。

ちよつと面白い光景だな…。

猫はクスッと微笑すると尻尾が血塗られた手に掴まれる。

“へ?”

「やっどみづけだぜ…」

桃原椿がゆらりと立ち上がりそして…。

「今度はにがさん!!!!」

「ぎゃーっ!!!!」

“どうぼずびませんべびだ…”

猫の身体中が傷だらけになっていた。

それはさっき俺がぼこにしたからだ。

観念した猫はみんなの猫化を解いて今は横たわっている。

多分立ち上がる元気がないのだろう。

俺もたんこぶができて痛々しい姿だけだな…。

あとは…。

「こいつをどうするかだな…」

「まさかホントにしゃべる猫がいたなんて世の中ハルヒだね」

こなたが一般人にはわかりづらいことを言う。

全員が物珍しいように見られるのが嫌になったのか、猫は声を荒げた。

「けっ、そんなに俺が珍しいかよ！」

「いや珍しいだろ」

「ふんっ、お前みたいな優柔不断野郎に言われたくないね」

「ワンダフル！ ネコがちゃんとコトバをツカッてるネ」

「……………」

そんなところよりもっと別の場所を気にしてほしい…。

「さて、まだ体が少し汚れてるし一緒にお風呂でも入ろっか」

「私も行くー」

「ワタシもイクネ」

由佳とこなた、パティは猫の残った汚れが気になったらしく風呂場へ。

「あーちよいまで」

俺はそれをすかさず止めた。

「なに？ 椿っちゃんも入りたいの？」

「そうじゃない！ 俺は猫がここに住み着くのを認めてないぞ」

「えっ、どうして？」

かがみさんが意外そうな顔をする。

「考えてもみる。こいつは人間が困った顔を見るために永森さんたちを猫にしたんだぞ。そんなやつを簡単に止めるわけにはいかない」

俺は正当な意見を繰り出した。

それに対して永森さんは歯切り悪く口を開く。

「で、でも…私はもう気にしてませんよ?」

「永森さんが良くても俺は絶対こいつを信用できない」

俺の話に猫は黙って聞いていた。

「……………」

“そうか…、まだみんなに本当の理由を教えてなかった…。俺はただ桃原椿から発せられた光を見つけたただけだ。しかし、だから人間なんかに興味はないと言っても桃原椿は信じてくれないだろう…。猫化というやつてはいけないことを俺はやってしまったのだから……………」

「つうわけだからすぐに追い出せよな」

俺はリビングから出て自分の部屋へと駆け上がった。

第124話 闇世界

「すまん」

「…え？」

猫が謝ることに由佳は驚く。

「俺が来たから変な感じ悪くなっちゃって…」

「そんなの気にすることないよ」

こなたは猫をフォローする。

「でも俺、喋れるのにみんなを騙してたし、かなり迷惑かけちまつたし……」

どんどん暗くなる雰囲気にかがみさんが口を出す。

「マイナス思考はやめた方がいいわよ。自分だけじゃなく周りにまで感染させることだってあるんだから」

「けどよ…」

そこにやまとも加わった。

「失敗を気にすることないわ。楽しく笑えっつてれば失敗はいい思い出になる」

「……………」

あんまり笑わなさそうな奴がいいこと言えるのはなぜだろう…。
そして一つ言わせてくれ。

猫は笑いません。

まったくこいつは無理難題をおっしゃる…。

「ところであんたさー」

かがみが猫に尋ねる。

「名前はないの？」

「……………ない」

別になくても大変な事態じゃない。

呼ばれる時に“猫”となるだけだ。

愛情のない呼ばれ方だがかまわない。

どうせ誰も俺の名前なんてどうでもいいだろうしな…。

「ふーん…。じゃあ私たちが名前つけちゃおっか」

かがみが勝手に話を咲かす。

「……………え？」

「じゃあクロワッサン」

「ぶっ!？」

ク、クロワッサン!？俺はパンなのか!？

「ちよつとこなた、真面目に考えなさいよ」

「だってー、この猫ってやたら黒いワツさんだしさー」

なんだよ黒いワツさんって。

わけわかんねえよ。

人か？人なのか？

「ならキューピーマヨネーズでどうデスカ？」

「……………」

言つとくけど俺は黒猫だからな？

「体に合つてませんね…。ここは黒猫やまとでどうでしょう？」

俺に宅急便でもしろというのだろうか？

「じゃあネコつちで」

なんでも“つち”を付ければいいってもんじゃねえだろ。

「ああもう！みんなふざけないで！」

「じゃあかがみが付けてよ」

こなたは最後に残ったかがみに託す。

「え、えつと…」

「ジーーーーーッ……………」

視線が集中していると、かがみが恥ずかしながら言う。

「ヤ、ヤミちゃん…」

「……………」

（うわ…かなり普通…………）

全員がそう思った。

つかヤミちゃんって俺は女の子か！

「顔を真っ赤にしながらかみ萌え…」

「うっさい！ あんたたちに比べたらまだマシな方でしょ！」

たしかにそうだな…。

他の奴らなんてもろ直感だったし。

ヤミちゃんもまだ酷いんだが…。

「まあまあ、じゃあ検証した結果かがみっち提案のヤミちゃんではないかな？」

「サンセイネー！」

「賛成です」

あ、あれ？ 俺の了承はとらないの？

「じゃあヤミちゃん」

「……………」

初めて名前と呼ばれたことにより動揺する。

由佳はもう一度名を呼んだ。

「ヤミちゃん？」

「は、はい」

「椿っち説得に行きますか」

「へ？」

由佳はガバツと勢いよく立ち上がる。

そしてヤミの体を持って二階に突撃していった。

「レッツゴー！」

「い、いや別に俺は…！」しかし由佳は聞く耳など持ってはくれなかった。

「何であいつらはあんな樂觀的なんだよ…」

人が困ってるのを楽しんでいるような奴だぞ。

それをただ可哀想だからって理由だけで…。

また猫にされたらどうするつもりなんだ。

俺はパソコンの電源を入れて今の状況を遊び半分でネットに書き込んでみる。

するとすぐにその返信が来た。

“ お前バカじゃねえの？ 猫がしゃべるわけないじゃん（笑） ”

「……やっぱりそうなるよなー」

百聞は一見にしかず。

見てくれた方が事実を伝えるのには早いよ…。

次々に似たような返信がきていると足音が一階から二階に向かって聞こえてきた。

誰だろ…。

マウスを動かしながら耳をすましていると足音は俺の部屋の前で止まった。

「樁っち、入るよ？」

由佳か…。

どうせ猫の件だろうな。

確信しつつもドアを開けることを許可する。

「なに？」

「えへへ、ちよつと話が」

「ダメだっ！」

「まだ何も言つてなかったり…」

「分かるよ、お前が考えてることぐらい」

視線をパソコンの画面に戻した。

そしてそのまま話をする。

「どうせ猫を飼いたいとかだろ」

「……うん」

バレていたことがそんなにショックだったのか、由佳は元氣のない返事だった。

「さつきも言つただろ。俺の家は無理だ」

「なんでよっ」

由佳がパンツと机を叩く。

「だから信用できないって言つただろ！」

俺もパソコンの棚を力強く叩いた。

二人が言い争っているなかヤミは部屋の前に立ち尽くしていた。

自分のせいで険悪な雰囲気になっていくのが堪えがたかった。

ここにいてはいけない存在。

一言一言が身に染みていき辛い感情でいっぱいになり顔が上がらなかった…。

瞬く間に桃原の怒声が反響する。

「あんなやつがいるから永森さんたちが大変なことになったんじゃないか！」

「けどちゃんと元にもどってきてくれたじゃん！」

「そういう問題じゃない！ あいつは人が困ってるのを嘲笑うような奴だぞ！？ 近くに置いていたら絶対同じことを繰り返すに決まってる！」

「じゃあ約束させたらいいじゃない！ “もう二度としない” って！」

「あいつが守るわけないだろ！ そんな約束しても俺はあいつは信用できない！！」

「でも　！！」

「俺は普通の生活を送りたいんだよ！　ここにいてみんなで楽しく笑って行きたいんだよ！」

桃原は今の生活が幸せ…。

「これ以上平和が崩されるのは嫌なんだ！」
俺がいると平和が乱れる…。

「これ以上変な奴が増えてたまるか！」
普通の猫とは違う気味の悪い化け物…。

「俺はあいつと“関わりたくない”んだよ！！」

「……………っ！！」

俺はここにいてはいけないんだ…！

ヤミはダツと廊下を走って階段を降りていく。

「ヤ、ヤミちゃんっ！？」

ヤミに気づいた由佳が止めようとするが振り向かず離れていく。

「あ、ヤミちゃんどうし　」

かがみが声をかけるがそこまで気が回らない。

一階で開いている窓を見つけて猫は風を切ってジャンプした。
外の太陽が体に当てられる。

そして周りを見ずにただがむしやらに走った。

「ヤミちゃんどこいくの！？」

かがみは慌てて窓から顔を出す。

しかし黒い後ろ姿はもうなかった……。

第125話 独りじゃない

「少し言い過ぎたかな…」

由佳は猫を追いかけていき再び一人になった部屋で俺は頭を悩ます。前まで周りには無関心だったのに最近はカッとなることが多くなっている。

それだけ俺は変わっているということだろうか。
こなたたちと会った時から少しずつ……。

「ヤミちゃんー!!」

いくら叫んでも期待している返答は返ってくることはなかった。

多少時間が経つと雨がポツポツと降り始めて肌に冷たく接触していく。

いったいどこにいるの…？

キヨロキヨ 口首を動かしても黒い猫どころか一般の猫すら見当たらない。

「ここじゃないのかな…」

もつと範囲を広くしないと…。

由佳は学校を目指して足を動かした。

「……………」

“これ以上変な奴が増えてたまるか！”

変な奴…。

“俺はあいつと関わりたくないんだよ！！”

関わりたくない…。

槍のように雨が突き刺す。

「じゃあ俺は今………なんのためにいるんだ…？」

誰からも避けられるこの身は自分の勝手な願いだけのために存在してもいいのか…？

しばらく歩いていくと陵桜学園、つまり桃原が通っている高校の門の前まで来ていた。
ちやうど帰宅時間らしく生徒達が傘をさして友達と仲良く帰る姿があった。

ヤミはずぶ濡れの体でヒョコヒョコと校門をくぐる。
そして雨のせいか誰もいない運動場の中心まで来る。

そこは広大な大地とでも言うのだろうか、背の小さい俺からの視点から見たら端から端がとても長い距離に見える。

「……………」

こんなに広い場所なのに俺がいていい場所は何処にもないんだろうな…。

「ほんと…なにやってんだ俺は……………」

「ホントにね」

雨とは別の音…。

後ろを振り返れば前の道中で声をかけてくれた萩野がその時と同様の優しい笑顔でいた。

「これで二度目だよ、助けるの」

「……………じゃあほつといてくれよ……………」

素直じゃない言葉が飛ぶ。

「ダメだよ、自分から一人になろうとしちゃ」

自分から…。

ヤミはその一言にイラつく。

「違う……………」

「え？」

俺は自分から一人になったんじゃない…。

みんなが俺を気味悪く避けるから一人になったんだ…。

「……………ほら帰ろ、みんな待ってるから」

そうやってうわべだけの優しさばかり…。

「ヤミちゃん」

どいつもこいつも…!!

「……………っ!! いちいちうるさいんだよっ!!」

俺は渾身の声で怒鳴る。

「ヤミちゃん……………」

「……………俺を……………!!」 その名前で呼ぶなあああああっ!!……………」

「……………！」

由佳はヤミの険しい気迫にたじろぐ。

「鬱陶しいんだよ……！ お前も……！ 他の奴等も……！ 勝手に名前とか付けやがって……！ それで優しくしたつもりか……！」

「そんな……私たちはただ……」

「同情なんかいらねえんだよ……！」

雨よりも強く、風よりも強くヤミの声は響いていく。

「俺は化け物なんだ……！ 喋れるから人からは避けられるし親からもすぐに捨てられたし……！ 俺に似合う居場所なんかないんだよ……！」

「じ、じゃあ私が居場所になってあげるから……！」

「適当なことやってんじゃねえっ……！」

……わかつている。

こいつが悪いやつじゃないことぐらい。

でも俺は……！

「その場しのぎの言葉なんか聞きあきたんだよ……！ 俺はこれからずっと“独りで生きていく”んだから、もう構うんじゃねえ……！」

ドクンッ

「あ……」

前にも聞いたこの言葉……。四年前の日に言われたのと同じ……。

そしてその人はそのセリフのせいで長い時間を無駄に過ごした……。どんなことにもあまり関心がない無気力な生活を。

そんな未来をいこうとするやつがいる。

だったら私は今度は止めたい！

「ヤミちゃんも……椿っちみたいなこと言わないでよ……！」

由佳の瞳から一筋の涙が滴る。

「なっ…!?!」

なんでこいつが泣くんだよ!?

「こんなにも心配してるのになんで拒むの!?!」

「だ、だからそれが余計なことだって言ってるんだろ! 俺は一人でいたいんだよ!」

「嘘だっ!?!」

「嘘じゃないっ!?!」

「じゃあなんでそんな悲しそうな姿を見せるの!?!」

「……っ!?!」

「一人でいるのが本望ならもっと笑ってよ!?!」

ヤミは心中を貫かれた。

「私はっ!?!」

「……どうして!?!」

「泣いている人をもう二度と放っておきたくない!?!」

「……どうしてこいつは俺の前にいる!?!」

「泣いている人を見てみぬ振りをするのはもう嫌だ!?!」

人間なんてすぐに裏切るくせに!?!

「私は!?! 絶対ヤミちゃんを“独り”にはさせない!?!」

「……なのになんでこいつなら信じてもいいって思えるんだよ!?!」

ヤミは言葉を失い沈黙した。

心は涙に浸り全身に“安心感”が宿る。

それはヤミが由佳を受け入れたからなのだろうか、ヤミは自分でもハッキリとはわからなかった。

でもこの安心感は本物だ…。

それだけはわかる…。

だから……。

「そんなに言うなら……、一つだけ約束しろ……」

「えっ？」

ヤミは由佳を睨み付けた。

グツと溢れる涙を我慢しながらも言う。

「この命尽きるまで……、ずっと一緒にいてくれ……」

自分の本音を伝える。

今まで誰にもちゃんと見えなかったことを…。

この場で…ハッキリと……。

「ヤミちゃん……」

「それだけでいい…。俺は…」

「いいよ」

由佳は迷うことなくあっさりと了解した。

ヤミは雨で遮られる由佳の顔を確かめる。

「私でよかったら一緒にいてあげる」

ヤミは由佳に抱き寄せられる。

「うつ…ひつく……」

やっと本当の願いが叶った……。

ありがとう…。

この人に会えて俺は…。

伝わる温もりは幸せの証だった…。

もう謎の光なんかどうでもいい…。

大切な人と居場所ができたんだ…。

だから神様…、ずっとこのままでいさせてくれ…。

何も起こらずにずっと…。

第126話 一瞬の幸せ

「椿つちの家には行けないから私ん家に行こっか」

「え…、でも猫なんか連れて帰ったら親が許さないんじゃない…」

それに喋る猫なんか余計に…。

しかし由佳は悪戯っぽい笑顔で、

「大丈夫、お母さんとかには内緒にしとくから」

「…あはは」

なんだか嬉しい気持ちになる。

天気はさらに悪化して雨が強くなり運動場は水浸しになった。

傘もささずにいるので風邪をひくまえに由佳たちは学校から出る…。

その時、薄い光が由佳たちを包み込んだ気がした…。

「椿君大人げない」

こなたが膨れっ面で悪口を一つ。

「ホントにね、猫一匹くらいで」

かがみさんからも一つ。

「そんなんだからドウテイネ」

パーティからも文句が。

つかその単語は危ないから二度と言わないで。

「それで迎えにも行かずギャルゲーって最悪ですね…」

永森さん、そこはツツコまないで。

こなたがソファ―に座る永森さんに指摘する。

「違うよ永森さん、椿君は今、どうやってら仲直りできるかギャルゲーで勉強中なんだよ……って椿君！ その選択肢は普通一番下を選ぶべきでしょっ」

「いやいや、ツンデレには真ん中の選択肢だって！」

ゲームで俺がこなたが考えるのと違う選択肢を選ぶとこなたが熱くなる。

「だってツンデレだよ！？ かがみだよ！？ 優しい言葉じゃなきゃデレっばいツンは見れないんだよっ！？」

「けど優しい言葉ばっかじゃ向こうは愛想尽かすって！」

ギャーギャー言い争い俺達はキリがないことを実感する。

「ハアハア…、ならここは本人に聞こうではないか」

「むむ、確かにそうですね」

俺達はかがみさんに体勢を向ける。

「「つつことでかがみ（さん）どっち！？」」

「私に聞くなっ！…！」

つかさ、みなみ、ゆたか、みさおは猫化が起こっていたことすら気付くことなく帰宅中。

「今日も眠たかったねー」

「ほんとだよなー。 いっそ睡眠記念日でも創ってくれたら世の中

平和になるのになー」

「……………」

「……………」

「……………」

一緒に歩いている三人はみさおの能天気っぷりをスルー。

……………。

……………。

……………。

いつもならここがかみが“そんなのがあつたらあんたみたいなダメな奴が増えるでしょ”

とツツコミが飛ぶの다가不在のため静かな時が刻まれた。

「なんか調子でねえなー」

みさおは頭をボリボリかく。

やつぱり柊がいねえと私が生きてこないんだよなー…。

「それじゃ大きなペットショップの横にある喫茶店に寄りませんか？」

「あ、それいいねー」

ゆたかが学校の近所にある喫茶店を提案するとつかさが一票入れる。

「さんせいーい」

みさおもだらしな顔で了解した。

「みなみちゃんもいこ」

「うん」

このメンバーだと多少言葉数は少なめだ。

二人は天然、一人はバカ、一人は無口とアンバランスなフォーメーション。

やはりチームに一人はツツコミが必要なのだとみさおは実感した…。

由佳とヤミは陵桜生徒の多くが帰宅する道でゆっくり歩きながら会話をする。

「ご飯どうしよっか？」

「別に余り物でいい。今までの食事なんて落ちてる物食べるとかでもっと酷かったし」

懐かしがるように過去を見返す。

「ダメだよ、今日は記念日なんだから」

「記念日？」

ヤミは不思議そうに聞き返した。

「そ 私とヤミちゃんが初めて一緒に暮らす記念日
なんだ、そういうことか…。」

ヤミが納得していると由佳はさらに付け足す。

「それに……約束の日」

「え？」

「約束だよ。ずっと一緒にいるって約束」

「……………」

なんか改めて言われると照れくさいな…。

でも嫌な気分じゃない。

逆に今は嬉しい…。

昔とは違う幸せ…。

それを今から築き上げていく…。

萩野由佳とずっと一緒に…。

「じゃあ喫茶店の横にある大きなペットショップにいこうよ」

あそこなら美味しいのもあるしヤミちゃんの可愛い服も買えるしピツタリかな

ウキウキ気分で足を進めてやがて大きな信号に出る。

その信号の向こうにあるのが喫茶店でその横に並ぶ可愛い看板が設置されているのがペットショップなのだが、信号は青の点滅を示していた。

いつもなら走って渡るのだがそれに由佳は立ち止まった。

「……ま、いつか」

今はヤミちゃんがいるし別に急いでる訳じゃないしね。

別方向が青となると雨のせいか、車はブンブンと途絶えることなく行き交う。

中には凄いスピードで駆け抜ける乗用車も。

「なあ、萩野」

「なに？」

“ありがとう”

そう言えればよかった…。

恥ずかしがらずに率直に…。

でも言えなかった…。

どんな顔でどういう風にしたらいいかわからない。

「あの…さ…」

似合わない言葉のせいか、歯切れが悪くなる。

しかし最後まで言わないと意味がない…！

「あ、あ、あり…が…」

「あ、青になったよ」

「へ？」

信号機は気付かぬうちに赤から青へと変わっていた。

「で、なんだっけ？」

「……もういいや」

能天気なこの性格に呆れたのか、ヤミは途中で断念する。

後で…ちゃんと言おう…。

そう、時間はいっぱいあるんだ…。

時間はいっぱい…。

しかしヤミは死神の存在に気付かなかった…。

いや…、誰も気付けるわけがなかったんだ…。

「…？」

ヤミが由佳の後ろについていくと違和感に囲まれる。そしたら横から大型のトラックがブレーキの様子もなく突っ込んできていた。

「っ！？」

や、やばい…！

本能がざわつく。

ヤミは精一杯女の子の名を叫んだ。

「萩野っ！！！！」

「ふえ？」

音が止んだ気がした……。

辺りは静かで雑音などは全部消えて……。

何もない真っ白な世界に俺がいた。

そして…大切な少女は光に奪われた……。

第127話 動き出す世界

俺は……“幸せ”を抱くことを許されていないのだろうか…。

目の前に在りそつで……。

手を伸ばせば掴めそつで……。

でも手にすることができない……。

そんなことを永遠と繰り返してきた……。

だから今回も……。

“ 幸せ ” は俺の手からすり抜けた……。

雨が降る中、俺は道路のど真ん中に萩野に抱かれるように倒れていた。

「 な、なんでだ……？ 」

確かに俺は轢かれたはずなのに……。

なんで萩野だけがこんなにも血を出しているんだ…？

「た、大変だっ！！人が轢かれたぞっ！！」

「き、救急車を呼べっ！！」

一般人の人達は突然の事態に声を荒げる。

「萩ッ…！」

ヤミは体を動かそうとするが、ズキツと足が痛む。

「お嬢ちゃん大丈夫かっ！？」

「うう…」

一般人が声をかけるが由佳はかなり重症らしく、喋ることができずにいた。

「萩野…！」

ヤミは足を引きずりながらも由佳の顔に近づく。
すると一般人がヤミに気づいた。

「猫だ！！ 猫も怪我をしているぞっ！！」

「じ、じゃあこの子は猫を助けようとしたのか！？」

助けようと…？

……そうか…。

俺は咄嗟に萩野に助けられたのか…。

だから俺は足だけで済んで萩野はこんなにも血を…。

救急車の音がだんだんと近づいてきて人混みが救急隊員のために道を開ける。

「すみませんっ！通りますっ！」

「これは…重症だな…！ すぐに病院に運ぶぞ！ 状況の連絡を頼む！」

「了解！」

隊員たちが手際よく作業をするなか俺はただ見ていた…。

そばにいれば俺は動物病院に連れていかれてしまう…。

そうなれば必ず次は預かり所に行つて萩野と離ればなれになる…。

「それだけは…嫌だ…！」

「うへえ…、人がいつぱいだぜえ」

衝突の音が近くで起こったことに気づき、喫茶店から出てきた四人組。

みさおは集まる人に圧倒された。

「やっぱり何かあったみたいですね…」

みなみが奥を見据えるかのように言う。

「トラックがあんな傾きしてるってことは誰か怪我したのかな…」

「ちょっと人に聞いてみよっか」

ゆたかが心配している横でつかさは適当に姉妹らしき人達に聞いてみる。

「あのー、ここで何かあったんですか？」

「それがね、交通事故らしいのよ」

「交通事故!？」

みさおがそれを聞いて驚く。

「私もひかげちゃんもビックリよ。 同人誌買って喫茶店でゆっくりしようと思ったたらトラックと人と…」

お姉さんらしき人が言う前に青髪の小さな女の子が代わりに言う。

「猫だよ猫! ほんと凄かったんだから! こうドカーンッて!」

「……………」

みさおとつかさ、ゆたかは言葉を失う。

みなみは背の高さを活かして先を見つめると担架で運ばれる少女に見覚えがあり口にする。

「あれは…萩野さんっ!？」

「「「えっ!?!」「」「」」

全員が救急車を注目すると確かに見慣れた横顔だ。

四人は顔を見合わせて頷く。

「椿君に知らせなきゃ！」

「あつっ……」

何で夏ってこんな蒸し暑いんだ…。

外は雨降ってるし由佳はどっかに行くし…。

“ ”

「椿君携帯鳴ってるよー」

「誰から？」

「つかさから」

こなたがテーブルの上にある携帯を俺に渡す。

「へーい……」

無気力な顔で受け取り、電話にでる。

「もしもし」

「椿君！！大変なの……！！」

つかさが慌ててなにかを伝えようとしていた。

俺は気力がない分、マイペースで事を聞く。

「なんかあつたの……？」

「由佳ちゃんがトラックに轢かれたのっ……！！」

「……………え？」

耳を疑った。

つかさの言葉を聞き間違えていないか、もう一度聞き返す。

「今…なんて……？」

「だから由佳ちゃんがトラックと“交通事故”にあってそれで
ガタンッ。」

携帯が手からスルリとすり抜ける。

「椿君！？ 椿君どうしたの！？」

何度もつかさが呼ぶ。

だがそんなことより俺は急いで家を出た。

「椿君？」

状況がわからないあなたは椿の携帯を使いつかさど連絡をとる。

「つかさ、私だけど椿君どうしちゃったの？」

「こ、こなちゃん！！ 実は由佳ちゃんが　　！！」

「つかさ先輩。椿君は…」

みなみが状況確認をする。

「途中でこなちゃんと話したんだけど、椿君飛び出したって…」

「よし、じゃあ私達も行くぜ」

みさおが傘を閉まってタクシーを呼ぶ。

「い、行くつてどこにですか？」

ゆたかはタクシーに乗りながらもみさおに目的地を教えてもらう。

「決まってるんだろ！ 近くで一番大きい陵桜病院だ！ 椿は多分そ
こに運ばれる！ つうことで運転手さん！ 陵桜病院まで！」

みさおはタクシーに目的地にまで走らせる。

しかし、そこにヤミが乗り込んでいたことに誰も気付かなかった…
…。

第128話 逆境

「ハアハアッ！ 多分ここだろ……！」

俺は陵桜病院の前にいた。

人の受け入れを可能な病院といえはここしかない。
だから由佳はきつとここに……！！

「椿君つ……！！」

後ろから俺の名を呼ぶ複数の女の子、こなたたちも病院まで走ってきた。

「ゆ、由佳ちゃんが交通事故ってホントなの！？」

かがみさんは冷や汗をかいていた。

「……………ああ」

少し戸惑いながらも答えた。

それはまだ俺も信じがたい事実だからだ。

「そんな……！」

永森さんも俺と同様のショックを受ける。

彼女にとって由佳は同じ学校を通う者として憧れの存在だ。

だからその分ショックは大きいだろう……。

それは俺も同じだ……。

「とりあえず早く行こう。由佳が心配だ」

俺達は病院の中へ飛び込んだ。

手術室まで案内してもらった俺達はそのでただ待つことになった。

「どうして由佳ちゃんが…」

かがみさんは涙を両手で隠す。

誰のせいかな…。そんなの決まっている。

あの猫だ。

あの猫は人を困らせることを目的なんだ…。

だから今回も絶対あいつの仕業だ…。

あいつさえいなかったら由佳はこんなことにはならなかったはずだ…。

うろろろとしているとつかさ達が焦りを見せながら来た。

「椿君由佳ちゃんはい!?」

「それがまだ…」

「……………」

ヤミは隠れるように椅子の下へ潜り込む。

だがそれに気付いたかがみさんとこなたは俺達に何も言わなかった…。

「あ、あの…!」

「え?」

荒々しいけどどこか優しい声だ…。

顔を上げると若々しい夫婦がいた。

「あなた、椿君よね?」

「あ、はい…。あなた方は…」

「由佳の両親ですっ!」

由佳の…。

そういえば由佳の家に行った時に一度だけ会ったことがある…。

「それで由佳の状態はどうなってるの…!?!?」

「すみません……。それがまだなんとも……」

「少し落ち着きなさい。若菜」

由佳の父親が母親を宥める。

「あいつなら大丈夫だ。だから、な？」

そつと抱き締めて母親を椅子に座らせる。

「椿君……」

こなたは不安な眼をしていた。

「今は待つしかない……。今は……」

時計の針が進む音がハッキリと聞こえてくる。

どれくらい待ったかわからないくらい自分の中では冷静さがなかった……。

すると赤いランプが消えて中から一人の病院関係の人が来る。

「萩野由佳さんの両親の方は……」

「私達です」

「……非常に申しにくいことなのですが……
気まずそうに言葉を続ける。

「由佳さんの状態はかなりの重症で……その……正直申しますと助かる見込みはあまりないと言えます……」

「えっ!？」

「そ、それはいったいどういう!？」

二人は突っかかるように質問する。

「体を強く打っただけでなく、飛ばされた時に太い鉄棒が由佳さんの胸に突き刺さって呼吸も厳しい状態にあります……。助かる確率は相当低くこの先どうなるかは分かりませんが、もし助かったとしても前のように普通の生活はできないでしょう……」

「なっ……!？」

「そんな……!？」

由佳が助からないかもしれない……!？」

「なんでだ……!？」

さっきまで元気だったじゃないか！

さっきまでケンカしてたじゃないか！

なのにそのまま別れるなんてそんなの……！！

「どうか……覚悟を決めておいてください」

「……………」

両親は静かに涙を流して目の前から逃れたく下を向く。

そんな時、俺は……。

「嫌だ……！」

「椿君……」

「由佳がいなくなるなんて……そんなの嫌だ……！」

大声が延々と響いた。

俺は手術室に乗り込もうとする。

それをこなたたちが止めた。

「ちよつ、椿君！？」

「嫌だ……！ 由佳がいなくなるなんて……！ そんなの……！」

「椿君……」

「だっておかしいだろ……！ 由佳が死ぬなんてそんなのどう考えてもおかしい……！ ニヶ月前にせつかく再会できたのに……！ またあいつと笑いあえたのに……！ なのにこんなのってありかよ……！！」

「だ、だから冷静になりなさいって……！」

「くそっ……！ 放せよ……！ くそおおおっ……！！」

がむしゃらにしているとズイツと大きな影が俺の前に現れる。

パンツ……！！

そして俺の頬に由佳の父親の掌が飛んだ。

俺はその勢いで床に尻餅をつく。

「子供か君は！」

「なっ！？」

突然ぶたれて俺は呆気にとられた。

「嫌なのは全員同じなんだ！！　どうにかなりそうなのも同じなんだ！！　けど必死に堪えて我慢している！！　だったら君も我慢しなさい！」

「くっ……！！」

「昔からの由佳の友達なんだろう！！　そんな情けない姿するんじゃない！！」

「……………くそがああっ！！」

俺は走り出した。

どこにいくとも分からずに走った。

「由佳……………」

両親は別の部屋に運ばれた由佳を見守る。

やれることはやったと聞いたが不安は一欠片も消えない。

こなたたちは邪魔になると思い、外に出た。

「椿君…どうしてるんだらうね……………」

こなたはボソリと呟く。

「……………」

今思えば椿君も由佳ちゃんのが好きなんじゃないだろうか。

ただ気持ちに気付いてないだけで…。

そんな考えをかがみは浮かばせていた。

「……とにかく椿君を探しに行きましょう。混乱して事故でも起こしたら大変です」
みなみの言う通り、全員心当たりがある場所へ向かう。

「くそっ!!!」

俺は近くの公園で叫ぶ。

「なんであいつが事故にあわなきゃならない!!!!」
本気で神を呪った。

何もしてないあいつを奪おうとする神に…。

「もう誰もいなくならないでくれ!!!!」

四年前の飛行機墜落事故…。

俺の家族は死んで独りだと思ってた…。

けどあいつはずっと近くで励ましてくれていた…!
独りじゃないって思えたんだ…!

なのに…!!

「なんで俺から大切な人達を奪うんだよ!!!!」

天に向かって声を発した。

どこまでも届くように想いを込めて…。

雨をも吹き飛ばす力で…。

第129話 我が家崩壊

「そちらにツバキはいましたか？」

「こっちはダメだったよ…。こなちゃんの方角は？」

「見つかなかった…」

どこへ消えたのか、不安でしようがなかった。

その時にやまとから電話がかかってくる。

「もしもし？」

「あ、泉先輩。桃原先輩たぶんいました」

たぶん…？

つてことはまだハッキリわからないのかな…。

「それでどこに？」

「家です。明かりが付いているので恐らくは…」

「わかった。今から行くね」

携帯を閉まってみんなにこの事を伝える。

全員は椿の家の前へと集合した。

「確かに消したはずの明かりが付いてるね」

「ホントだ…」

リビングの電気が窓から漏れていた。
かがみとこなたは顔を合わせる。

最後に家の明かりを消したのはこの二人、そしてやまとだからだ。
ということは…。

「やつぱり椿君かなあ…？」

つかさは首を傾げた。

「とりあえず入ってみましょ。 私達は他人じゃないんだし」

かがみを先頭としてドアを開ける。

靴を脱いでゆつくりとリビングに近づきソブに手をかける。

息を殺しながら入るとそこにいたのは……。

「はあ…」

なにやってんだ俺は…。

雨が止んで公園の隅でずっとボーツとしていた。

由佳は今戦ってるっていうのに…。

なにもできない…。

そばにいても恐らく邪魔になるだけだ…。

由佳にはゲーム世界の時とかいっぱい世話かけたのに…。

「くそつたれが…」

なにもできない自分に腹が立つ…。

由佳のためにといろいろ考えたが、まず由佳が今日無事に生きることができるのが心配で仕方がなかった。

「由佳……生きてくれ……」

その一言を残して俺は洪々と家へと帰ることにした……。

「ヤミちゃんがなんでここに…」

家のリビングにいたのは黒猫のヤミだった。

「すまん…、ここにいたらダメなのはわかってるんだが……」

「わっ！！！！ 猫が喋った！？」

「う、うそ……」

つかさたち四人組は目の前の非現実的な出来事に驚く。

「そういえばユタカたちはまだナニもシらなかったネ」

「信じられないかもしれないけど今までのことを教えなきゃなんないわね。 ヤミちゃん、お願い……」

「……………」

静かに頷いたヤミは知っている全てを話す。

何も隠さず自分が生まれた時から今に到るまでを…。

適当にふらつきながら我が家へ着く。

「……………ん？」

明かりが付いてる…。

こなたたちが帰ってきてるのか…。

ドアを開けて靴を見ると全員分があった。

やはりみんな帰ってきているようだ。

俺はギシギシと床の軋む音を感じつつリビングに入った。

「あ、やつと椿君帰ってきた」

「遅くて心配しました…」

ゆたか、みなみ、みんなの顔が揃っている…。

だがその奥には……。

「ほらヤミちゃんも来て」

この家を出ていったはずの小さな猫がいた…。

視界に入った直後、俺は猫に殴りかかった。

「…っ！！！！ お前えええええっ！！！！」

「なっ！？」

「椿君！？」

永森さんとかさが目を見開く。

そしてこなたとかがみ、みなみ、みさおが俺と猫を引き剥がそうと

必死に間に割って入る。

「椿君なにをするの！？」

こなたが俺に訴えかける。

「こいつが由佳をあんなめにしたんだよ！！！！」

「それは違っただってヴァッ！！」

「何が違っただよ！！ こいつは最初からこうなることを予測して

来たんだ！！ 俺達を不幸にするために！！ こいつは人が不幸に

なるのを笑ってやがるんだ！！！！」

「それは誤解なのよ！ ヤミちゃんは謎の光を探そうと」

かがみさんも何かを伝えようとするがそんなもの信じられなかった。

「そんなのに騙されるかよ！！」

「椿君！！！！」

みなみちゃんが俺の名を呼ぶがもう何も聞こえなかった。

「おいこら！ そんなに人の困った顔を見物するのが楽しいか！！

！！」

「……………」

猫は動かずにじっと下ばかり見ていた。

「なんとか言ったらどうだ!!!」

「……………」

「くそがあっ!!! 由佳を返しやがれ!!! この疫病神がああ
っ!!!」

「……っ!!」

猫は玄関に走り出す。

勢いよく体当たりをしてドアを開けた後、東に向かって姿をくらましていった…。

「ハアハア… やつとどっかに消えたか…」

俺は心底安心した。

これで不幸の原因はなくなった。

由佳は帰ってくるんだ…。

あいつがいなくなったから……。

「椿君…」

かがみさんが俺の目の前に立つ。

「なんだ…。悪いが今は疲れ」

パーンッ!!!!

「痛っ!?!」

かがみさんがいきなりはたいてきて俺は声を荒げる。

「な、なにすんだよ!!!」

「それはこっちのセリフよ!!!」

激しい口調と形相で俺は身動きがとれなくなる。

「あんた今自分が何言ったのかわかってるの!?!」

「な、なにつて…」

「一番言ったらいけないことを言ったの!!! ヤミちゃんのせいで

由佳ちゃんがああなった！？ ふざけないで！！！！」

「ふ、ふざけてなんかねえよ！ 俺は本気で……！」

「じゃあなんで私達の話の聞かないの！！！！」

「は、話ってなんだよ！」

「ヤミちゃんは困らせるのを楽しんでるんじゃない！ 別の目的があつたの……！」

「け、けど！ 所詮あの猫から教えてもらったんだろ！！ じ、じやあそれが嘘の目的かもしれないだろうが！！ お前等はあの猫に騙されてるんだよ！！！！ あいつは人間の不幸を楽しんでんだよ！！！！」

かがみさんは激しい口調から落ち着いた口調に変わる。

「……椿君……、それ……本心で言ってるの？」

「あ、ああ」

「そう……」

かがみさんは踵を反す。

そして……。

「私、椿君のこと見損なつた」

かがみさんは二階に行つて荷物を整理しだす。

準備が整い、一階に降りてきて最後に言う……。

「私、出ていく。この家にはもう泊まらないから」

「……えっ？」

「お、お姉ちゃん！？」

「椿君、あんたとは絶交よ。もう二度と話したくない」

状況についていけない俺をほつといてかがみさんは家から出ていった……。

第130話 散らばる色

「ちょっ、お姉ちゃん!!」

つかさは出ていったかがみさんを追いかけに行った。
そして他のみんなも…。

「私もこの家から出ていきます……」

「私も……」

「ゆ、ゆたか…みなみちゃん……?」

意味がわからないまま俺は二人を見る。

しかしそれを無視して二人はリビングを出る。

「椿、さすがに今の発言は私も氣にくわねえ」

「み、みさお……」

三人は荷物を持って夜の道へと出ていった。

「ワタシもイマのツバキはクライネ」

「……あなたにはガツカリしました……」

パティ、永森さんも冷たい視線で俺を睨んで帰った。

残されたのは俺とこなただけだった…。

「ど、どうして……」

どうしてみんな俺から離れていくんだよ…。

何か間違ったこと言ったか…?

言っていないだろ…?

あいつは危険な存在…。

俺はそれから守ってやったのに……。

なのにかがみさんもゆたかもみなみちゃんも……。

「なんでだよ……」

俺は舌打ちをするように呟く。

するとこなたは全てを理解しているように言う。

「椿君……みんなが出ていく理由私にはわかんと思うよ……」

「……………」

「椿君はさつき“お前等はみんな騙されてるんだよ”って言ったよね……」

こなたは俺の前の言葉をもう一度口にする。

訳がわからない俺は当然聞き返した。

「それがなんだよ……」

「……………それはつまり“私達を信じていない”って言ってるのと同じなんだよ……」

「なっ……………！俺は別にそんなつもりで言った訳じゃ……………！！」

焦りを見せる俺に対してこなたは落ち着いた口調で伝える。

「でもかがみにはそう聞こえた筈だよ……他のみんなにも……」

だから出ていったんだと思う……。これ以上椿君の情けない姿を見たくないから……」

「……………」

情けない……。

みんなは俺がそんな風に見えたのか……。

けど……………、

「で、でも俺は……みんなの危険を回避させようと……」

見苦しいのは承知だが言い訳をする。

「椿君、今の自分を認めて……」

あれは絶対に言っちゃダメな言葉……。みんなを信じられなかった自分の弱さなんだよ」

「……………っ」

言われてから気づいた……。

一心不乱になって俺はみんなを……。

あいつらは二度と戻っては来ないだろう…。

俺がどうしようとも…。

「こなたは……出ていかないのか？ 俺のこと幻滅したたる……」

「……うん」

こなたの声は細く弱々しい声質だった…。

「……」

やっぱりみんな出ていくんだな…。

そりゃそうだ…。

みんなを信じることができなかった俺なんて……。

「幻滅はしたよ……。でも私は椿君をずっと信じてる」

「……えっ？」

俺はこなたの顔を見つめる。

「な、何を言って……」

信じてる……？

誰を……？

俺の頭はフルに回転するが理解に苦しんだ。

「さっきの椿君は確かに最悪だったけど私は“あの時”から椿君のそばにいるって決めたの……」

「……あ、あの時……？」

「うん……」

こなたは俺を優しく包み込むように話し始める…。

「私が記憶をなくした時……、椿君必死にLordから取り戻そうとしてくれたよね……。自分の命と引き換えに椿君が取り戻した時、記憶を持たなかった私はなんでそこまでして他人のために頑張れるのかなって不思議に思った……。でもね……今ならわかるよ……。椿君が頑張った訳が……。それは自分の大切な人とずっと一緒にいたいからだよね……」。

私だってそうだもん……。椿君が記憶の身代わりに意識を失った時、記憶が戻った嬉しさなんか一つもなくて、あつたのは大切な人を失う辛さだけが溢れ出てた……。

だって大切な人にはずっと隣にいてほしいもん…。

だから今の椿君も一緒だと思う…。ただ冷静さが欠けてただけで友達を想う気持ちは変わってない…。だからあんなにヤミちゃんを嫌ったんだよね…。もしかしたら由佳ちゃんみたいに怪我とかしちゃうと思ったから…。」

「……………」

そうは言ってもみんなは俺から離れていった…。

じゃあ俺はこれから何をすればいいんだ…？

「なあ、こなた……………」

「なに…？」

「俺はこれからどうしたらいいんだろうな…。」

「……………」

やはりこなたも答えを持っていないらしく迷っていた…。

「みんなから見放されて独りになった俺は…、ホントにどうしたらいいんだよ……………」

椿君は悩んでる…。

だったらできれば私は椿君の背中を押してあげたい…。

でもなんて声をかけたらいいの…？

なにを言えば椿君に伝わるの……………？

“椿に春の桜が咲きますように……”

こなたは一人の言葉を思い出す。

それは前にカセットテープの中に入っていた椿君の母親の声だった。

「……………」

あの人は願ったんだ……。椿君を絶対に独りにしない友達を……。

“涙を流してもそばにいてくれる人と一緒に歩いていきなさい”

なら私が支えにならなきゃ…。

嫌なことがあつて耐えられなくなつても一緒にいて安心させることができるようにならなきゃダメだ……。

どんなことがあつても私は椿を裏切らない……。

そんな大切な存在に……。

「独りじゃないよ……」

それにこれが神様がくれたチャンスなら私の本当の“想い”を今この人に伝えよう……。

「椿君は独りじゃない……」

こなたは椿の言葉を否定する。

「さつき私言つたじゃん。大切な人には隣にいてほしいって…」

こなたは小さな体で正面から抱きしめた…。

「みんながいなくなっても私は絶対椿の隣にいる…」

「こなた……？」

「私がずっと……そばにいるよ……」

青い髪の毛から甘いシャンプーの香りが鼻にかかる。

そしてこなたは顔を近づけて軽く唇を重ねた……。

「椿君……、私ずっと前から椿君のことが……」

第131話 偽り

「こ、こなた……」

信じられなかった…。

こなたが告白することにも驚いたが何よりキスに腰を抜かした…。

「椿君、前にもこんなことあったよね」

「……あ、ああ」

確かこなたが家に泊まりに来て少し経った時に、こなたが夜、俺に冗談で告白してきた。

あの時は普通にこなたから嘘だつて言ったが今は……。

「あの時は私も本気じゃなかったけど今は違うよ。椿君のことが真面目に好きなの」

「……………」

何を言ったらいいんだろう…。

こんなとき俺はどうしたらいいんだろう…。

答えが見つからず俺は下を向いてしまう。

やっぱり断るしかないのだろうか…。

その選択肢が一番優先される場所にあった。

でもここで断ったらこなたはショックで何処かへ行ってしまうんじゃないのか…？

ずっと一緒にいるって言うてくれたけど、俺が断ってしまったら隣にいづらくなってこなたも皆みたいに離れていく可能性があるんじゃないか…？

やないのかと俺は不安を抱く。

独りになりたくない…。

こんな状態で独りになったら俺は壊れてしまいそうだ…。

なら俺は……。

「俺もこなたのことが……好きだ」

俺はこなたに嘘をついた……。

俺のホントの気持ちを知らないこなたはまたギュッと抱き締めてきた……。

こなたはおそらく幸せに満ちているのかもしれない。

だが俺に流れるのは幸せじゃなく罪悪感だった。

ただこなたと離れたくないがために嘘をついてしまった……。

「ねえ…椿君」

「…ん？」

こなたが落ち着いた口調で話しかけてくる。

「ヤミちゃんを迎えに行こ？」

「……………」

こなたの言っていることは間違っではない。

あの猫は思っているほど悪くない。

俺の返事は決まっていた。

「わかった…」

迷っていたらダメだ…。

大事なのは信じることなんだから…。

真夜中、ヤミは重い足取りでどこにいか自分でもわからずにいる。

空は雲に覆われて月や星が見えずとてもどんよりしていた。

それは今の自分をそのまま表現させたようだった。

その空の下で俺はみつともなく涙を流している……。

「なんか……、バカらしくなってきたな……………」

さっきので疲れているのか、今まで自分が謎の光を探してきたこと

をヤミは無駄に思う。

幸せが目の前から消えて上を向く気力さえ残っていなかった…。

「萩野お……………」

自分の命を守ってくれた人…。

そして俺に初めて幸せを届けてくれた……。

でも…もういない……。

俺はまた独りになってしまった……。

そう思っているとヤミの視界に風で飛ばされてくるパンの耳が入る。

「……………」

それを見たヤミは一瞬躊躇った。

しかし昨日から何も口にいれてなく腹の減りが激しかったので勢いよく食べる。

いつもはこんな感じで拾って食べているのだが、今日に限ってそれが虚しく感じた…。

それは萩野が言ってくれた言葉が原因だった…。

“私とヤミちゃんが初めて一緒に暮らす記念日”

ヤミはガツガツと食べながら泣いた…。

「今日は記念日なのに…！」

また腐敗した世界に戻ってしまった…。

楽しいことなど何も存在しない独りぼっちの世界に…。

「あの時…、萩野言っただじやんかよ…！」

“私は…！ 絶対ヤミちゃんを独りにさせない…！”

「約束したじやんかあ…！」

“約束だよ。私とヤミちゃんがずっと一緒にいるって約束”

「なのに…ぐすつ……、どうして…！」

“私でよかったら一緒にいてあげる”

「俺達の幸せは始まるうとしてたじやんかあ…！…！」

夜の世界で悲しみが一気に込み上げてくる。

こんなにも過去に戻りたいと思つたことはない…。

もし戻れたなら俺は萩野を助けてどこまでも…、終わらない幸せを手にしていたのに…。

「もう…死にたいよ……」

こんなに苦しい思いをするならいつそのこと死んで楽になりたい…。

「俺は生きてはいけないんだ……」

「それは違うわ」

「……？」

誰の声だ？

ヤミは後ろを振り向く。

そこには泉こなた……いや、どこか違う。

雰囲気は全くの別物だしいつも頭のとっぺんにあるアンテナみたいなアホ毛がない。

それに泉こなたにはホクロがあるはずだ。

ということはこの人は別人か…？

「あなたは今を生きている。それは絶対に生きなきゃならないつてことよ。むやみに命を落としたらダメ…。じゃないとあなたを想ってくれてる萩野さんが寂しがるわ」

「……でも俺は桃原椿に恨まれている。それも異常な程に……」

「人は過ちに気づいたら変わることができる…。今の椿君はきつとあなたのことを見捨てたりはしないわ」

「それは違う…。不幸なことが起きればまた人は変わる…。結

局人は信用できない生き物なんだ……」

「それは萩野さんのことも信用できないつてこと？」

「……ああ」

萩野は約束を破つた…。

ずっと一緒にいるつて約束を…。

「信じた分だけ辛さが膨らむのならもう何も信じたくない…。無
のままでいたほうが辛い思いをしなくてすむ…」

「……なら萩野さんを見捨てるの？」

「……ああ」

率直に聞いてくることに對して不快に思う……。

見捨てるとかじゃなくてもっと別の言い方にしてほしかった。

「俺はもう……」

「あの言葉は伝えないの？」

「……？」

「事故が起こる前に誓ったあの言葉はどうするの……？」

「……っ……！」

そ、そうだ……。

俺は萩野に言わなきゃならなかった……。

悲しみの淵から這い上がらさせてくれた萩野にあの言葉を……。

“ ありがとう ”

でも今となっては……。

「もう遅すぎるよ……」

「そんなことないわよ…… きっと萩野さんはあなたを待ってる。」

そしてこなたや桃原君も……」

「そんなのあり得ない……」

「あら……、そうかしら……？」

青髪の方は夜道を指差す。そこから二つの足音が聞こえてきた。

ヤミはその方向を見つめていると桃原椿、泉こなたが俺の名を叫びながら探していた……。

「な、なんで……？」

「言ったでしょ？ 人は変わるって……」

「……」

「無理かもしれないけど信じてあげて……。 萩野さんが愛してるあの人を」

「……で、でも……」

青髪の方はニツコリと微笑む。

「大丈夫。二人はあなたを否定しないから……」

その時強い風が吹いた。

砂などが飛び散り眼を閉じて再び開けると青髪の方の姿はどこにもなかった…………。

第132話 スタートライン

翌朝、俺とこなたは学校のため着替えをする。

そして朝食を俺とこなた、そして黒猫のヤミと“三人”で食べた…。昨夜、俺とこなたがヤミを見つけて家で話し合った。

ヤミは拒むかと思ったが何があったのか、由佳が帰ってくるまで一緒に住もうという提案に賛成してくれた。

それでいろいろなことをヤミから直に会話して、由佳が事故にあった原因など誤解はすべて解けた。

実際ヤミは人の不幸を喜ぶような奴じゃなかったんだ…。

なのに俺はヤミに向かって酷いことを言った…。

そしてかがみさんたちにも…。

「椿君、早く行かないと遅刻しちゃうよ」

「…ああ」

たった一人残ってくれた泉こなた…。

昨日のキスのことは覚えており、関係が深まった。

それはつまり俺とこなたは付き合っているということだ。

俺はこなたの告白を受け入れた。しかし本当の恋人と言えるかどうかはわからない…。

ホントは俺はこなたのことが好きとは思っていない…。

けど今の俺がいるのはこなたの支えがあったからだ。

だから今はこなたと一緒にいたいという気持ちがあった。

こなたを失いたくない……。だから嘘をついた…。

こなたのキスを受け入れるという嘘の行為をした……。でも何故俺はこなたのことを好きになれないんだ…？ここまで尽くしてくれる人なんかいないのに…。

「椿君、そろそろ行こ」

「あ、そうだな」

時計を見たら時間が迫っていた。

鞆を持ってヤミに言う。

「じゃあヤミ、行ってくる…」

「行ってきます」

「おう…」

やはり由佳がいなくなったことが衝撃だった…。俺達は気力のない挨拶で学校に行き、ヤミも元気がない返事だった…。

実は今日の午前五時くらいに由佳の両親から電話がきて、由佳はなんとか一命をとりとめたという吉報だった。

俺は心から安堵したがそれもつかの間だった。

鉄棒が胸に突き刺さっていたのでかなりの重症であり、いつ容態が危険な状態になってもおかしくないという生死をさ迷う状況らしい。俺は由佳を信じることでできず、ただ必死に祈った…。

「おはようございます。 泉さん、椿君」

登校中、たまたまみゆきさんと会って話をした。

「おはよう……」

みゆきさんがいつも通りにペコリと礼儀正しく挨拶をする。

俺達も普段と同じ挨拶で言おうとしたがやはり多少元気がない挨拶となってしまうた。

「昨日かがみさんから電話がきて事情を聞きました」
もう知ってるのか……

「そっか……。まああれは百パーセント俺が悪いんだ……。今も後悔してる……。由佳がいなくなって冷静な判断ができなかった自分を……」

「そうですね……。でも反省してるなら大丈夫ですよ。かがみさんたちもきつと許してくれます」

「そう……かな……」
「はい」

自信満々で答えてくれるところが俺に少しの勇気を持たせてくれる。

「それでは私は用事があるのでお先に失礼します」

みゆきさんは軽く礼をして一足先に陵桜の門をくぐった。

次いで俺達もぐり下駄箱まで一直線に行くと大勢いるなかで見慣れた二人の影を見つける。

「かがみとつかさだ……」

こなたがポツリと言う。

本人に聞こえないように小声で……

俺は足を止めて二人を見つめる。

するとつかさが気づいてかがみさんの腕を引っ張る。

かがみさんは“なに、どうしたの”って顔でこっちを見る。

だが俺と目が合った瞬間、キツイ眼で睨み付けて早足でその場から立ち去っていった。

おそらく俺と話したくないんだろう……

つかさは手を合わせながら“ごめん”とジェスチャーした後、かがみさんを追った。

やはり仲直りは厳しいかもしれない……

「かがみ…」

こなたも本気で怒っているかがみさんにどう接したらいいかわからないでいる。

「こなた、行こ…」

俺はこなたの手をグイッと寄せて先導した。

変わらない学校…。

でもどこかが違った……。

お昼休み、俺はこなたと二人で屋上に来ていた。

いつもなら教室なのだが心が落ち着く場所がよかったからだ。

「はい、椿君」

こなたが俺専用の弁当を渡す。

「サンキュ…」

「大丈夫…？ やっぱ朝のこと……気にしてる？」

こなたは俺の無気力に感じて心配の声をかける。

「うん……」

授業の合間にある休み時間にかがみさんと話そうと何度も教室に行つたが全部無視される。

すると今度はこなたが行くと言い出して話そうとしたらこなたまでシカトされて完全に手詰まりだった…。

まさかあそこまで怒っているなんて…。

「ホントどうしたらいいんだよ…」

「……………」

静まる空気、蝉の鳴き声だけが響く世界に一人の女の子が入ってくる。

「大丈夫ですか？」

「みゆきさん……」

ピンクの長いロングウェーブが風に揺られる。

みゆきさんはこっちに來て俺の横に座った。

「上手くいってないみたいですね……」

「ああ……。かがみさん、俺から避けてて話しも聞いてくれない……」

「なら諦めますか……？」

「それはダメだっ。今回の件は俺が悪いんだから途中で逃げ出すのは嫌だっ」

「そうですね……。それを聞いて安心しました。そしてあちらの方も同じ私と思いかと……」

「……え？」

みゆきさんは屋上のドアをチラリと見る。

それが合図かのようにみなみちゃんがドアの陰から出てきた……。

第133話 素直に言えない

「み、みなみちゃん……」

昨日の今日で顔が合わせづらかった。

だがみなみちゃんはまっすぐ俺を見ていた。

その揺るがない視線に俺は戸惑う。

「椿君」

みゆきさんが背中を押すように優しい目を向ける。

わかってる。ちゃんと向き合わなきゃならないことくらい。

そんなこと、今の俺は百も承知だ。

「……失礼ながら話は聞かせてもらいました」

「みなみちゃん、ごめん……」

深々と頭を下げた。

視界には青空など全くなくコンクリートだけが映る。

「……」

その行為にみなみちゃんは何も言わなかった。

何かを見定めるかのように。

「……言い訳はしない。でもわかってくれ。今の俺が昔の俺と

は全然違うことを」

迷いのない言葉を伝えた。

そして最後に願いを言う。

「……みんなにはもう一度帰ってきてほしい。前みたいにみんな
で過ごしたいんだ……」

みなみちゃんはずっと閉めていた口を開く。

「……わかりました」

「み、みなみちゃん……！」

切れた糸が繋がった。

そう思った矢先にみなみちゃんが、

「……でも、一つ解せません」

「えっ？」

「……何が椿君をそこまで変えたんですか？」

「……………」

何が俺を変えたか……、そんなの分かりきってる問いだった。

俺は後ろにいるアホ毛の女の子を見つめる。

「……………」

こなたが小首を傾げる。

あいつがいるから俺は変わることができたんだ……。

俺はみなみちゃんと向き直り目で訴える。

それを察知したみなみちゃんは優しい目をした。

勘が鋭いみなみちゃんはすぐにわかったようだ……。

予鈴が鳴って昼休みは終わりに近づく。

俺達は四人で屋上から離れていった。

みなみちゃんと話をしてからゆたか、パティ、みさおにも同じように話をしていた。

みんなまだ俺を信用していない部分がありながらもまた一緒にいることを了解してくれた。

そしてつかさも……。

「私はいつでも椿君の味方だから」

と言ってくれた。

正直その言葉は俺に大きな力をくれた…。

「だいぶ元に戻ってきたね」

こなたの言う通り確かに元に戻ろうとしている。だが、

「あとはかがみさんだけですネ」

みゆきさんがC組を見ながら言う。

「……………」

廊下側からC組を覗くとかがみさんは自分の席で机に顔を埋めていた。

元気があまりないのがよくわかる。

「…お姉ちゃん」

つかさも心配そうにする。

つかさの話だと朝も昼もは何も食べていないらしい。

そんな状態の中、まともな話ができるのだろうか。

「椿君、私ちよっとお姉ちゃんと話してくる」

つかさはいつも通りの感じでかがみさんに近づいていった。

こういうところは気が利いてホントに助かる。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

「……………」

無反応だった。

「気分悪かったら早退したほうがいいんじゃない？」

「……………」

つかさはさらに声をかけるがやはり反応は無かった。

それほど余裕がないのかな……。

「椿君、ここは一度引いてかがみさんの体調がまだマシな時にお話したほうがよろしいかと……」

「そうだな……」

俺は諦めてB組に足を戻した。

かがみは顔を上げて窓の外を眺める。

空は雲無き青空で気持ちがいいはずだった。

でも太陽の陽射しがきても今のかがみには鬱陶しいだけのものだった。

「はあ……」

何で絶交なんて言っちゃったんだろ……。

仲間に対して絶対言っちゃダメな言葉なのに……。

かがみは今ごろになって後悔する。

私は椿君に高望みしすぎたのかもしれない。

椿君だって間違いくらいする。

人間なら誰だってミスをするのが当たり前だ。

大事なものはそのあと……。

ミスをしたら精一杯そのミスを取り返す。

その姿勢が大切ということは小さいときから言われてきた。

椿君はミスをしたけど今、最善の努力をしている。

ならそれでいいじゃないか。

私とその努力を認めて仲直りしたら解決だ。

でも……。

「素直な自分を出すことができねえのか？」

聞き覚えのある声に振り返る。

八重歯が特徴的な暢気屋「みさおと前髪をヘアバンドであげているしっかり者」あやのが近づいてくる。

「柊ちゃん、話は聞いたよ」

「……………私は悪くないわよ」

そう言うにあやのはクスツと細い笑みを溢しながら、

「わかってるよ。柊ちゃんは何にも悪くないことくらい」

「ただ言葉がきつかったかもなー」

みさおが付け足すように言う。

「もう、みさちゃん」

あやのは叱るようにみさおに言葉のパンチをした。

「話を聞く限りでは椿君が悪いけど、だからって今の椿君を全く見ないって言うのはダメだよ。ちゃんと椿君がしていることを見てあげないと」

「そ、そんなことわかってるわよ。でも……」

かがみが曖昧なことを言っているとみさおが、

「あーもう！ 焦れたい奴だな！」

かがみの机をバンツと両手で叩く。

「何をそんなに迷ってんだよ！ 素直な気持ちを出すことが苦手でも今を頑張らねえと椿の想いはどうなっちゃうんだよ！」

「だ、だからわかってるって言うてるでしょ！」

「わかってねえよ！ 椿は今勇気振り絞って頑張ってたから柊も頑張れてヴァツ！ じゃねえとアイツは柊に完全に嫌われたって思っちゃまって互いの関係が完全になくなるかもしれないぞ！ そうなっちゃってもいいのかよっ！」

「……っ」

かがみは言葉を詰まらせる。

いいわけない…。椿君と他人になるなんていいわけがない…。！
拳をギュツと握りしめる。

痛いなんて気持ちを無視して強く…。

「柊ちゃん」

「……なによ」

「あんなこと言われても椿君は柊ちゃんと一緒にいたいんだよ」

「………」

第134話 またあの日々に

「ようし、今日もお疲れさん。みんな無駄な寄り道せんと気をつけて帰りやー。ほな高良、号令頼むわ」

「はい。起立、礼」

みゆきさんの号令と共に本日の学校が終わる。

みんなが帰り行く中、俺は下駄箱ではなく逆の方向へ。

「あれ、椿君どこいくの？」

「すまんこなた、校門前で待っててくれ」

「えっ…ち、ちよつと椿君!？」

こなたは理解不能な顔をしていたが俺は一方的に言い残して屋上へ向かった。

一枚の手紙を持って……。

バタバタと忙しく階段を上がっていく。

一秒でも早くそこに着きたかった。

何故なら……。

「……………」

「かがみさん……………」

俺が話したがってた人が手紙を渡して待っていたからだ。

しかし実際にかがみさんからもらったわけではなく、かがみさんの昔からの親友であるみさおとあやのさんがB組に伝えに来てくれたのだ。

そして俺は今、空の景色をバックにするかがみさんと向き合っていた。

俺達は目を合わさずに立ち尽くしているとかがみさんは震えた口調で声を振り絞る。

「て、手紙…読んでくれた？」

「う、うん…」

「そ、そう。それでさ」

「待って！」

俺は一声でかがみさんを制す。

「かがみさんが言うことはもうわかってる。だからその前に言わせてほしい」

二人だけの空間で俺は勇気を出す。

「お、俺は……！ ま、ま、前みたいにかがみさんと一緒に過ごしたい……！」

.....。

.....。

.....。

「.....へ？」

かがみさんの目が点になる。

そしてそれは俺も同じだった。

「.....」

か、噛んだ……！！

俺はすぐにその場から逃げたかった。

恥ずかしさと惨めさ、後悔が一気にのし掛かる。

史上最悪のドジを踏んだ。

最も重要な場所で見事にやってしまったのだ。

ある意味勇者……。

そしてここでHPが無くなり力尽きてゲームオーバー……。

魔王を倒すことはできなかった……。

「.....フフフ……」

「.....？」

密かな笑みが耳に伝わってきた。

「アハハハハハッ……！ アハハハハハハハハハハッ！」

「か、かがみさん……？」

「ご、ごめん！ でも……あ、あんな場面で噛むなんて……！ アハハハハハハッ……！」

「.....」

俺は呆気にとられていた。

しかしかがみさんはそれを無視して笑い続けた。

「お、お腹痛い！ アハハハハハッ！」

さつきまでの重い空気が無かったかのようにかがみさんは軽くなる。
「ふう…疲れた」

どうやらツボに入った笑いは終了したらしいがまだ顔がニヤついていた。

それでもかがみさんは切り換えるように向き直る。

「椿君」

「な、なに？」

「また宜しく」

かがみさんが手を差しのべてきた。

「……………っ!!」

つてことはかがみさんはまた家に…………。

次から次へと起こる奇跡に俺はびくびくしていた足が崩れて尻餅をつく。

「ちょっ、椿君？」

やっと元に戻る…………。

みんなが笑っていたあの頃に…………。

校門に二人で行くと複数の人影がちらついていた。

「あ、お姉ちゃーんっ」

つかさが手を大きく左右に振る。

それに応えるようにかがみさんも手を振った。

「みんな待つててくれたのか」

「そりゃあな。 何だかんだでみんな一緒にいたいんだよ」

みさおはみんなの代弁した気持ちを言う。

だが、

「みさお先輩が言うとは何か説得力ありませんね……」

「……た、たしかに……」

みなみちゃんの厳しいツツコミ、そしてそれに賛成するパティ、ひより、八坂さん。

「あやのー！ みんなが柊並みに酷いー！」

「ま、まあ……」

コントみたいなやり取りを俺は笑って見守っていた。
そんなとき女の子が隣に来た。

「椿君」

「みゆきさん……」

「やっぱりみなさんがいると楽しいですね」

「………うん」

失っていた笑顔が芽を出して地上に現れる。

ずっとこのまま時が止まればみんな幸せなのに……。

「じゃあ椿君、私たちは今日は家でゆっくり落ち着きたいから明日からまたお世話になるわ」

「ああ」

「じゃあさよなら」

かがみさんつつかさ、ゆたか、みなみちゃん、みゆきさん、みさお、

あやの、ひより、パティ、八坂さん、は俺の家とは別方向へ帰る。

「ふう…、じゃあ俺達も帰ろっか」

「そだね」

校門にポツンと残ったこなたと俺も帰るため歩き始める。

その道はとても明るい未来であると信じて……。

第135話 First Love

暇だな……。

ヤミは何もすることがなく桃原家のソファアの上で寝転んでいた。やることに特になく時間だけを数えていると、

t r r r r r

シーンと静まった中に電話が鳴り響く。

普通ならとるだろう。

しかし、

「俺って一応猫だしな……」

余計なことはしなくていいだろう……。

ヤミはそのまま放置した。

そして留守電が残される。

その声にヤミは驚いた。

「椿君！！ 由佳の母ですけど！！」

「……っ！？」

萩野由佳の母親から！？

ヤミの体がビクツと反応する。

「今すぐ病院に来てほしいのっ！！ 由佳が…！！ 由佳が」

問題はだいたい解決した。

かがみさんたちとも仲直りを済まして明日から元通りになる。

だがまだ二つの不安要素がある。

まずは由佳の状態…。

今はあいつが死ぬなんてこれっぽっちも考えていない。

だがあいつは無事に治っても元通りの生活ができるのだろうか。
あれだけ大きな事故に遭ったんだ。

どこか支障があると思う。

だからあいつの笑顔が見れるかどうか心配だ。

そしてもう一つの問題。

それはこなたにあつた。

「な、なあ…、こなた」

「ん？ なに？」

こなたの陽気な顔が俺の口を閉じさせる。

「い、いや、やっぱなんでもない……」

言い出せなかった…。

「……ふーん。 へんなの」

会話はそれだけで終わり、俺達はまた歩き出す。

「……………」

言わなきゃならないのに…。

言わなきゃ前に進めないのに…。

俺がこなたに対する思いは愛じゃない…。

それをちゃんと伝えなければならぬ。

だが、それを言えばこなたは俺から距離をとるんじゃないだろうか。
また前みたいに親しく話すことは二度とできなくなるんじゃないだ

ろうか。

みんなで過ごす生活からこなた一人が抜けてしまつかもしれない。
俺はそれが恐かった……。

「ん？ あれってヤミちゃんじゃない？」

下ばかり見ていた俺はこなたに言われて正面を向く。

その先には小さい影があり、こちらにとても速いスピードで向かってきた。

「桃原椿！！ 泉こなた！！」

ヤミは激しい口調で叫ぶ。

「ど、どしたの？」

「さ、さつき萩野由佳の両親から留守電があつてそれで萩野由佳の容態が急に変わったらしいんだっ！！」

「なっ……！！」

「う、嘘でしょ……！？」意表を突かれた俺達は何を言っているかわからずにパニックになる。

「ホントなんだっ！！ だから早く病院に行かねえと！！」

「あ、ああ……！！」

俺はヤミに言われるがままに足を動かそうとする。

だが足裏がビタツと地面に吸い付いたかのように運動が停止した。
その様子にヤミは、

「おい何やってんだ！ 早くしねえと！」

「わ、わかつてる！！ でも……！！」

こんな状況にも関わらず俺は不思議なことを考えていた。

俺は由佳のところに行ってもいいのかな ……。

「……椿君……？」

こなたが俺を見つめる。

答えとしては当然行ってもいいだろう。

いや、むしろ行かなければならないんだ。
でも……。

俺はこなたの彼氏だ。

ただその事実が俺を縛りつけた。

彼氏だから行つてはならないわけじゃない。

だが行ったらもう二度とこの場所へは戻ってこれない気がする。

こなたが隣にいるこの場所に……。

だけこのままじゃ由佳が……。

俺が行っても何も変わらないことは理解している……。

けどここで由佳の元に行かなかつたら俺は一生後悔する……。

それが手にとるようにわかつていた。

「……くそっ」

本当の俺はどっちを望んでいるんだよ……。

こなたの元か、由佳の元か。

もつと選択肢はあるはずなのに俺にはこの二つしか出てこなかった

……。

「……ねえ、椿君」

俺が悩み続けていると脳内に一人の声が届く。

「もう……嘘つかなくていいんだよ……」

「……え？」

嘘をつかなくていい……？

「私ね……最初から気づいてたよ……」。

椿君は私のこと好きじゃ

ないってことくらい……」

「こ、こなた……？」

こなたは一体何を言っているんだ……？

なんでこなたが俺が隠してるものがわかってるんだ……？

俺は疑問に感じていることをそのまま口にする。

「な、なんでこなたがそんなこと……」

「……わかるよ。椿君が思ってることくらい……。だってずっと椿君のこと好きだったんだもん……。」

どうしようもないくらい好きだったんだもん……。それで一番近くにいようと寄っていったらすぐにわかったっちゃった……。椿君は由佳ちゃんのこと気にしてること……」

「お、俺が由佳を……？」

「うん……。椿君は由佳ちゃんを見るととき私たちの時とは目の質が全然違った……」

「……………」

いつのまにか俺は由佳を好きになっていた……？

でも思えば確かにそうかもしれない……。

いや……。そうなのだ……。

俺は自分にたくさん尽くしてくれるこなたのことを好きになれなかった……。

それは俺が由佳のことを好きになっていたからだったんだ……。

俺はずっと由佳に対して抱く気持ちは“好き”とは違うものと思っていた。

親友とか女友達とか……。でもそうじゃない。

口にはしなくても本当の俺はあいつのことが……。

「だから正直悔しかったな……。私じゃ椿君の隣にいたらダメって知って……」

「ち、違うつ……！俺は本気でこなたと一緒にいたかった……！だからあんな嘘をついたんだ……！後でこなたが傷つくと分かっておきながら……！」

「一緒にいたい……。その気持ちだけで私は十分幸せだよ……」

こなたは後ろから俺の背中をグイグイ前に出した。

「ほら、早く行かないと」

「ちよつ、ちよつと待てよ……！　そ、それじゃこなたも一緒に……！」

俺はまだ離れたくない……

こなたの元から……

「私は後で行くから……」

「でも……！」

ここで行ってしまったらこなたがどこかへ行ってしまう……

だから俺は食い下がった。

けどこなたは……

「大丈夫……。私はずっと椿君から離れないよ……」

「……っ……！」

「ずっと……“友達”でいるから……」

「……友達……」

「だから……お願い……」

こなたの声は今にも泣きそうだった……

「たった一日だけの幸せだったけど嬉しかったよ……」

「……こなた……」

とてもとても悲しい声だった。

だから俺はこれ以上何も言えずにいた……

こなたはポンツと俺の背中を押す。

「行ってあげて……。それが私のためでもあり、由佳ちゃんのためでもあるから……」

「……っ……！」

俺はがむしゃらに走った。

振り向くことなく一直線に……。

「お、おい！ あいつを行かせていいのかよ！？」

ヤミはこなたに向かって叫ぶ。

だがその肝心なこなたの瞳の灯火は消えていた。

「……………うん」

もつ……………私が立ち入る隙なんてどこにもない……………。

こなたの力無い返事にヤミは疑問をぶつける。

「な、なんでだよ！ お前あいつのこと好きなんだろ！？」

「……………好きだよ」

「じゃあ早く追いかけるよ！」

「そんなのダメ……………」

そんなことしたら椿君は……………。

こなた静かに首を横に振る。

「だからなんで!? 今ならまだ間に合うだろ!」

「もう無理だよ…。椿君の気持ちは私には向いてない……。椿君は由佳ちゃんの方が好きってわかつちゃってるもん……」

椿君は最初から私のことは眼中になかったんだ……。

なら私はうるちよろしい方がいい……。

友達として一定の距離をとっている方が椿君にはいいんだ……。

「じゃあこのまま諦めるのかよ!?!」

諦める……。

こなたはその部分に心を揺らす。

「…ハハ……、そうするしかないね……」

私に残された道はそれしかない……。

さっきまで見えてた明るい未来へと続く道は消えたんだ……。

苦笑いするしながらこなたは強がる。

「……笑って誤魔化すなよ!! 素直に自分の本音を言えよ!!
! あいつが好きなら全力で止めろよ!」

「……言っても言わなくても結果なんてわかりきってるんだよ?

だつたら言わない方がいいじゃんか……」

「そ、そんなこと……！」

ヤミは口では否定するが実際そうではないかと思ってしまう。

確かに言わない方が正解かもしれない……。

何も変わらないと分かっているなら……。

けど自分を押し殺すことなんて納得できるわけがない……！

「……ヤミちゃん、覚えておいて……。素直な気持ちを伝えるなんてただの自分の“身勝手”だよ……。言ったとしても自分だけがスッキリして椿君には迷惑がかかるだけ……。」

「で、でも……！」

「私は……！」

こなたは苦しい表情で訴える。

「私は……！！自分のせいで椿君が困った顔しちゃうところなんて見たくない……！」

この時、上からポロリと何かが落ちた……。

それに気付いたヤミは思わず目を見開く。

「……お、お前……」

涙だった……。

とても綺麗で透き通ってて……でも大きな悲しみが詰まっている涙。
そしてその澄んだ滴が幾つも地面で弾けていく……。

ヤミはそれを止めることができなかった……。

こなたはペタンと尻餅をつく。

「もういいんだよ……」

心に大きな穴がぽっかり開いたようだった……。

いつかあの人の横に並ぼうと思っていたけど、私の恋は届くことはなかった。

ここで私は立ち止まるしかない……。

椿君に続く道は私には見えないから……。

でも……。

「……えつぐ……ひぐ……」

それがどうしても辛く堪えられなかった。

“ 椿君さー、私のこと覚えてる？ ”
“ わりいな、一欠片も覚えてない ”

ただあの人が恋しかった
……

“ 俺ってお人好しだから…… ”

あの人の目が好きだった
……

“ 俺のことさ、前まで言ってたみたいに椿君って呼んでくれねえか ”

な？
”

あの人の柔らかい手が好きだった
……

“そのネックレス、お前のことを……大切に思ってる奴からの
プレゼントだからさ……”

あの人の温もりが好きだった
……

“椿君椿君、今日は5月28日だけ何の日か覚えてる？”
“ああ大丈夫だよ。ちゃんとわかってるって”

あの人の声が好きだった
……

“ 椿君、二人でクッキー作ってみたんだけど食べてみて”
“ うおっ！ かなり美味しいな！”

あの人の優しさが好きだった
……

“ え、だってゆうちゃんのファーストキス奪ったじゃん”
“ あ、あれはただの人工呼吸だから！”

私は
……

“俺もあなたのことが好きだ……”

あの人の全てが好きだったんだ
……

あなたはヤミを持ち上げてギュッと抱きしめる。

そしてか弱い声で告げた……。

「私の初恋はもう終わったんだよ……」

第136話 夢の街

「由佳っ……」

こなたと別れてから俺は気持ちを前に押し出しながら全力で走る。だがここから病院に行くのに走るだけでは時間がかかりすぎてしまう。

俺は途中でタクシーを拾って一気に病院までの距離を縮めていった。運転手にできるだけ急ぐようにと伝えたがそれでもかなり遅く感じる。

時刻は午後四時半、留守電がきてからだいたい三十分は過ぎていたことに焦りを感じた……。

午後四時四十五分、病院にたどり着いた俺は真っ先に由佳の元へと向かった。

治療室の前には由佳の両親が祈るように手を合わせている。

俺は二人にゆっくりと近づいていった。

「あ、あの……」

「えっ？ ああ……椿君か」

父親が顔をあげて俺を見て呟く。

泣いていたのだろうか、目が赤くなりそしてとても悲しそうな瞳だった。

前に俺はこの人に殴られた…。

この人と会ったとまたその痛みが蘇ってくる。

別に恨んでいるわけじゃない。

むしろ感謝している。

あの頃の俺は狂っていた。

それを正そうとしてくれたのだから…。

「椿君…」

「は、はい」

由佳の父親に名を呼ばれ緊張が全身を通っていく。

「由佳は……大丈夫なんだろうか」

「な、なに弱気なこと言ってるんですか！ そんなの大丈夫に」

「医者からは非常に危険な状態と言われた……」

「……」

き、危険な状態…。

それはつまり由佳の命が…。

「現実を見れば由佳はいなくなるかもしれない……。きれいなこと

を言っている状況じゃなくなってきた……。子供の君には

まだわからないかもしれないが……」

真逆だった。

前は由佳の父親がすっかりして俺は脆く崩れそうな状態だった。

初めての印象はこんなに弱々しく感じる事など皆無だった。

なのに今は違う…。

同じ場所なのにその人は今にも潰れそうな弱さを見せていた…。

でもだからといって俺の答えは変わることなんかなかった。

「勇気をもらったから……」

「なに？」

“もう……嘘つかなくていいんだよ……”

「あいつからとても切ない勇気をもらったから……」

“ずっと友達でいるから……”

「だから俺は……」

“隣にいたい……。その気持ちだけで私は十分幸せだよ……”

「俺はきれいごとを言い続けますよ……。でないと由佳だけでなく俺の背中を押してくれたあいつにも会わせる顔がない……」

「……まるで……あの時とは別人だな……」

「こなたが……、いえ、みんなが変えてくれたんです……。情けなかったあの時の俺を……」

「そうか……」

由佳の父親は重かった身が突然軽くなったようにホッとした顔になった。

「君が由佳の友達で良かった……」

風が私に何かを訴えかけるように強く吹く。

こなたは涙を念入りに拭いて立ち上がる。

「私たちも行かなきゃね……」

「……ああ」

精神的に辛いこなただがヤミと一緒に萩野由佳の病院へ行くため近

くの駅前にあるタクシーで向かうことに。
急かすように気持ちが落ち着かない。
それは不安からきているのが実感できた。
由佳がいなくなるかもしれないという不安…。
そんなこと考えたくもないのに常に優先されるかのように頭の中に
浮かび上がってくる。

病院に着くとヤミはこなたより先にコソコソと見つからないように
中へと入っていった。

人が通らない時を見定めて階段を一気に駆け上がる。

あとは真っ直ぐ進むとその先に萩野由佳が緊急手術を受けている部
屋がありおそらく桃原椿がいる場所へとたどり着くのだが……。

「っ！！」

ヤミはトップスピードにのっていた足を止めて曲がり角に身を潜め
る。

なぜなら桃原椿のほかにも萩野由佳の両親がいるからだ。

できればヤミは自分がしゃべることを隠したい…。

でも……。

「……………もうどうでもいい……………」

由佳が……、大切な人が危ないんだ……。

私情ごときで俺は陰に隠れる訳にはいかない……。

正体がバレる……？

しゃべる猫は不気味……？

そんなの……クソくらえだ……！

「桃原椿っ……！」

ヤミは堂々と正面から突っ込んだ。

「ヤ、ヤミ!？」

「「なっ!？」」

由佳の両親は驚愕し、俺は動揺が身体を支配した。

「ね、猫が言葉を……!？」

当然のように父親は目の前を疑う。

俺はジッとヤミを見ているとその覚悟の眼からこいつの気持ちを読み取った。

「……………」

まさかこいつ…。

ヤミは今まで人前で人語を扱うことを避けてきている。

けど今はそんな状況じゃない。

自分のことを何言われても構わないと思っているはずだ…。

こいつにとってかけがえのない人のために…。

なら俺はそれをサポートしたい…。

「あの、その事は俺から話します」

俺はこなたから聞いたヤミの全てを由佳の両親に話した。

第137話 彼方からの光

「これがヤミが人語を扱うことのできる理由です」
「……………」

必要以上のことを言わず重要ことだけを伝えた。
だがそれだけを話しても信じてくれないかもしれない…。
そんなことを思っていると、

「そうか…。 “君も” か…」
「……………えっ?」

き、君も!?

由佳の父親が知っているような口振りに俺とヤミが食いつく。

「い、一体どういうことですか?」

「……………実は椿君が言う “光” は噂で聞いたことがある…」
噂…。

実際に体験していないのなら詳しいことは謎なのだろう。

だが話を聞くことに損はない。

「……………前に私の知り合いの泉という作家が言っていたんだが、その光は自分の最愛の妻が他界した後に見たらしいんだ…。 薄めの澄んだ蒼い光…。 それはとても温かくて妻を失って病んでいた心を立ち直させてくれたらしい…。 そして泉さんはこの光をこう呼んだ…。 “彼方からの光” と。 今まで私はそんな光は存在しない、幻なんじゃないかと思っていたんだが……………」

ここに体験者がいたってことか…。

ヤミを包んだ光、そしてその泉って作家の人が感じた光は同等のものだろう。

でもその光ってのはいったいどこからきているんだ……。

「とにかく何もわかっていない状態で憶測で言うのはやめておこう

……」

「そうですね……」

今はそんなことより大事なことがある。

俺は目の前で固く閉じられた先を思い浮かべた。

「由佳……」

ここはどこだろう

ふと気づくと由佳は空を飛んでいた。

自分の街の上を自由に見渡す。

だが不自然なことにこの街に人の姿がなかった。

あるのはただ街の原型だけで由佳が通っている聖フィオリナ女学院
の中を覗いても授業はやっていなかった。

「……………」

まだ太陽の位置高いから今はお昼くらいのはずなのになんで授業や
つてないんだろ……？

別の場所へ行くが公園や商店街にも人はおらず由佳ただ一人がここ
にいた。

「……ここってホントに私が住んでる街だよね……………」
それなのになんで誰もいないの……？

由佳は人を探すため空を駆ける。
だが椿の家にも誰もいない。

由佳の顔に笑顔はなく、焦りと恐怖が映し出されていた。
そしてだんだんと街が薄暗くなっていく。

「えっ、な、なに？」

目の前で闇に包まれていく光景にオロオロと右往左往する。
闇はそのうち街だけでなく空や太陽までも包み込んだ。

由佳の視界は完全に闇と化して他色は全てシャットアウトした。

「まだかよ……」

俺は時計の長い針を何度も睨む。

午後八時。 とても長い時間経ったはずなのにまだ由佳は出てこない……。

それほど危険なのだろうか……。

無意識に貧乏揺すりをしていると遂に閉じていたドアが開いた。

そして一人の医師が出てくる。

それと同時に俺たち全員は椅子から腰を浮かせてその人の元へ駆け
た。

「あ、あの……！ ゆ、由佳はだ、大丈夫なんですか……！？」

「……………落ち着いて聞いてください」

由佳の父親の質問に対して医師は静かに答える。

「由佳さんは脳死しました……………」

「……………え？」

の、脳死？ 由佳が？ そ、そんなわけないじゃないか。 まったく何を言ってるんだこの人は。

「トラックに轢かれた際に頭を強く打ったことが原因かと……………。心臓はまだ動いてますがじきに止まります……………」
ホントに……………」

「残念ですが……………」

何を……………言って……………！

唇が震えてまともに言葉にできなかった。
するとヤミが、

「……………つ！！！！ 由佳あああつ！！！！」

勢いよく室内に飛び込んだ。

「うわああああーっ！！！！」

医師はヤミが喋りだしたことに驚く。

だがヤミはそんなことお構い無しに真っ先に由佳が横たわっているベッドへ走った。

「おい由佳っ！！ なに寝てるんだよっ！！ 早く目を開けろよ！

！ 聞いてんのかよおい！！」

「……………」

正面からのヤミの怒声に由佳は何も答えなかった。

俺はよろめきながら静かに由佳に話しかける。

「……………由……佳……？」

返事はない……。

いや、なくて当たり前だ……。

それくらいわかってる……。

返事がかえってこないことくらい……。

けど……。

「由佳あ……………！」

突然のことだった。

少し前までは笑っていた。

だがそれは完全な過去形となっていた。

今の由佳には笑顔どころか怒った顔や泣いた顔すら描かれていない。いつたいいつからだ……。

いつから俺の未来はこんなにも儚くなっていたんだ……。

できることなら過去に戻りたい……。

戻って違う道を辿って由佳と一緒に歩いていきたい……。

そんな夢みたいないなことを俺は頭に浮かべていた……。

「う……………由佳あ……………、由佳あ……………！」

涙が止まらない……。

こんなにも辛いことがあっていいのか……。

俺の周りはいつも悲しいことばかりが起きている……。

もう……………たくさんだ……。

「由佳……………？」

ふと二つの影が由佳に近寄る。

「……………由佳あああつ……！」

「いやあああつ……！」

そして由佳の顔を見た瞬間に流れていた涙がさらに溢れ二人の顔は歪んだ。

二人は由佳の手を握り泣き崩れる……。それを見て俺は思った。

奇跡はどうやってたらしめるのだろうか

俺が必死に由佳の名を叫び続けたら奇跡は起きるんだろうか。

それとも俺が死んだら奇跡は起きるんだろうか。

そもそも奇跡とは何だ？

誰が起こすんだ？

努力をした者か？

だが努力についてくるのは相応の結果であってそれは奇跡とは呼ばない……。

じゃあ奇跡はどうやってたらしめるんだよ……。

「嫌だっ……」

声が聞こえた。

まだ現実を受け止めていない声……。

振り向くとヤミはフラフラとしっかりしない足取りで後ずさっていた。

「こんなの……！！　こんなの嫌だああーっ……！！」

「なっ！？」

ヤミが激しい光に包まれた。

その様子に全員身を引くが、俺は何か違和感を感じた。

「こ、この光……」

薄い蒼色の澄んだ光……。

ま、まさかこれってヤミがずっと探していた……。

「……か、彼方からの光……」

由佳の父親と俺は呟く。

でも……それだけじゃない。

この違和感は…。

「もしかして俺は知っている……？」

この蒼い光を……、前にもどこかで……。

見たのじゃなく感じた気が……。

それがなんでヤミを包んでいるんだ……。

「……ヤ、ヤミ……」

「うあああああああーっ……！」

「うわっ」

光が更に輝きを増して触れることができなかった。

「……っ」

なんだこれは…。

嫌な予感がする…。

とてつもない不安が俺の頭の中に渦巻いていた…。

「ヤミっ……！」

「まだありがとうって言っていないのに……！」

“よしよし、君はいい子だねー”

「一緒にいるはずだったのに……！！　なんでいなくなるんだよう

……！」

“ほらいこ”

「頼むからっ……！！！」

“……帰ろ、みんな待ってるから”

「俺の幸せなんかいらないから！！ だから由佳を助けてください
！！」

ヤミの体から光が弾け飛ぶ。

同時にヤミは姿を消した。

この時奇跡は起こったのかもしれない……。

誰もが認めたくない悲しい奇跡が

第138話 ココにいるよ

光と同化したこの体……

元の体にはもう戻れない……。

なら俺は残魂となっても君のそばにいる……

約束を果たすために……

私……どうなっちゃうの？ 由佳は黒色に染められた夢に抗うこともできず、ただじっとしていた。

「お父さん……お母さん……」

今ごろ私のこと探してたりするのかな…？

でも誰にも見つけることなんてできないよ…。

どんな色が来ても変わることのない闇の世界。

そんなところに椿っちが来てもこなたっちが来ても私がここにいるなんてわかるはずがない。

じゃあこのまま私は真っ暗な世界に閉じ込められちゃうの？

椿っちと言い合いになったまま…？

まだ仲直りしてないのに……？

「…そんなの…ヤダよお……」

身体を丸めて必死に願う。

誰か助けに来て…！

お願いだから……！

「……………」

やはり暗闇のままだった。

変わることもないこの闇の中でいくら想いを奏でも聴いてくれる

人はいない…。

誰一人として……願いを叶えてくれはしない……。

ずっとずっとひとりぼっちなんだ…。

「…めん」

「…………えっ？」

今の声……。

発生源を探そうとするが全てが暗闇となっており方向すらわからない状態だった。

「誰……？」

「いったい誰の声なの……？」

何も見えないことにより精神的に限界に近づいていた由佳だったがどこか懐かしい声に微小の安堵が生まれる…。

「ごめん、迎えに来るのが遅れて」

「っ！？」

あ、蒼い光…？

太陽のように君臨した綺麗な薄い蒼色の輝きが街を包んでいた闇から解放した。

「な、なんなの…？」

確かに声は私の耳に届いた。

ならどこかに人がいるはず。

けどあるのは相変わらず誰もいない街。そしてこの謎の光…。突如現れた今まで光は見たことがない蒼色を放っていた。

「で、でも……」

不気味に思う由佳だったが触れてみてわかる。

「こ、これってもしかして……」

私はこの光がなにかわかる……。

この光は……。

「ヤミ…ちゃん……？」

「……」

光に向かって問うが何も反応はない。

しかしなぜか“わかる”。

この光は絶対にヤミちゃんだ……！

「ねえ…！ ヤミちゃんなんでしょ！？ ねえってば！」

「……ああ」

ヤミは前と変わらない外見で空から舞い降りてくるように蒼光の中から出てきて由佳に寄っていく。

「なんだか久しぶりな気がする…。　こうやって由佳と二人でいることが」

「……うん」

確かにヤミちゃんとうなるのは久しぶりかもしれない…。

ほんの少し前も二人でいた時があったが、その時からだいぶ長い年月が経ったように感じた。

「安心しろ…。　俺がちゃんと助けるから」

そうでもない俺がここに來た意味がない…。

命を懸けてまで來た意味が…。

ヤミはそう言っで由佳を出口へと案内する。

ふう、やっと着いた…。

「ほら、この先が出口だ…」

ヤミは湖の中を示す。

どうやらこの中に飛び込むと本当の街、つまり元の場所に帰れるらしいんだがなぜヤミがその事を知っていたのかは自分でもわかっていなかった。

「ホントに！？　よかった！。　これで一緒にいるって約束果たせるね」

由佳は先程の悲しみなど一切表面には出さなかった。
明るく雰囲気を作っていたが逆に暗い面影のヤミはそれを粉々に壊した…。

甘い幻想だと嘲笑うかのように……。

「……………それは無理だ」

「え？　キャツ！？」

後ろからヤミは背中を押す。

それによつて由佳は勢いよく水に囲まれた。

だが息ができないわけじゃなく普通の空間となっていた。

「な、なにをするの！？」

「……………ごめん。　俺、約束果たせそうにない……………」

「な、何言つて……………」

由佳は訳が分からないと言いたげな顔になる。

しかしヤミは見守るように由佳を眺めていた。

「そのまま水中にいたらきつと由佳は目が覚める。　椿とかがいる

光の世界に……………」

「ま、待ってヤミちゃん……………！　それならヤミも一緒に……………！」

由佳は湖から脱出しようとするが水中と空中の境界面に硬いガラス

が張られたようになっており出ることができないでいた。

「俺はそちには行けないんだ……」

「な、なんで……!?!」

そんなのわけわかんないよ……!

ドンドンとガラスのようなものを叩き割ろうとする。

そこからヤミを助け出す作戦だったのだが、

「……な、なにこれ!?!」

狭間に入っていたガラスは強度に硬くなっており、何度叩いても由佳が傷つくだけで無駄な行動となる。

「ど、どうして!?! どうして割れないの!?!」

痛む手を我慢しながらも必死に砕こうとするが割れる音が響くことはなかった。

「俺の体はもうどこにもない……。現実の体は散らばったんだ……。だから帰る場所がないんだよ」

「……でも!」

「由佳のおかげで俺は初めて幸せになれた……。喋ることができて気味悪い俺なのに隣にいるって言うてくれたよな……」

「当たり前じゃんか!! 私はヤミちゃんのこと大好きなんだから!?!」

「幸せを願うことが許されないと思ってた俺に由佳は幸せを与えてくれて嬉しかった……」

ヤミの瞳が涙で滲む。

悲しみに染まったその姿に由佳は訴えた。

「ホントは……! ホントはヤミちゃんだって帰りたいんじゃないの!?!」

「……」

「私たちとまだ別れたくないんじゃないの」

「……っ!?!」

そんなの……!!

ヤミは歯ぎしりをたてた。

そして激しい形相で言う。

「一緒にいたい！に決まってるだろ！！」

ヤミの変わりように由佳は驚いた。

「俺だつてまだ生きたい！！　どんなに罵られてもあの世界で生きたいんだよ！！」

「な、なら……！」

「でももう無理なんだよ……！　俺が生きることが許されないんだよ……！」

光と同化したこの体……

由佳を生かすことはできるが自分は既に死んだ身……

それはもう変わることはない……

「そんなこと言わないでよ！！　もっと……！　もっと一緒にいようよ……！！」

しかしヤミは首を縦には振らなかった。

「ヤダよ……！　ヤミちゃんがなくなる理由なんてないよ……！！」

「……まだスタートしてないじゃんか！！　幸せの時間まだ来てないじゃんかあ……！」

泣き顔を気にせずに由佳はヤミと目を合わせる。

だがだんだんヤミの体は由佳の想いに反するように薄れていった。

「……大丈夫だ……」

ヤミはたった一言を由佳に捧げた。

「俺はずっとココにいる」

ヤミの姿を目にしたのはそれが最後だった。
ヤミが最後の言葉を言い終わった瞬間に由佳の視界は途絶えてしま
った……。

第139話 キセキ

「ヤ、ヤミは！？ ヤミはどこに行った！？」

ヤミが蒼い光に包まれたかと思っただけならそれは一瞬で途切れてしまった。

そして光とともにヤミの姿までもがなかった。

蒼い光……。

それは言い伝えの通りだった。

あれは彼方からの光。

おそらくこの解答は間違っていないだろう。

だがなぜ今現れたんだ？

俺は非現実なことが起こったことによって混乱していた。

そしてさらに、あつてはならないことが目の前で起きた。

「……う……」

ピクツと由佳の指が瞬間的に動く。

「……えっ？」

い、今動いた……？

俺は自分自身を疑った。

「……う……ん……」

今度は瞬間的じゃなかった。

指だけじゃなく口や足も弱く動いた。

ま、間違いない！ 由佳は生きてる！

そして極めつけに由佳の瞼が細くも開いた。

「ゆ、由佳!!」

脳死と判断されたはずの由佳が小さく動きを見せたことにより一同は驚いた。

「由佳!?! 私がわかる!?! お母さんよ!?! 由佳!?!」

意識がハッキリしているかどうかを確認するため、由佳の母親は名前を呼ぶ。

「お、お母…さん。なんで泣いて……」

「由佳あ……!!」

母親はギュツと抱きしめる。

「わ、私なんでここに……。そ、そうだ! ヤ、ヤミちゃんは!?!」

「……え?」

俺は疑問に思った。

由佳は眠っていたからヤミが消えたことは知らないはずだ。なのになんで由佳は起きてすぐにちよいとなくなったヤミを気にするんだ…?

「や、やっぱりあれは夢じゃなかったんだ……」

由佳はヤミがどうなったか知っているかのような表情だった。

「おい由佳……、お前ヤミがどうなったか知って」

俺が聞こうとした刹那、

「い、生き返った!? そんなバカな!?!」

さっきまで別室にいた医師はバタバタと再度由佳の状態がどうなっているか助手に問う。

すると耳を疑う結果が報告された。

「た、高橋さん…、萩野さんの状態は全て正常です…」

「せ、正常だと……!?! そんなことあるわけないだろ! 出血だつて激しく体力も失っていたのにそんな…!」

医師は助手の言葉が信じられず計測データを自ら覗く。

だがそこに偽りはなかった。

誰がどう見ても正常と判断するしかなかった。

医師はまだ機械だけでは信用できず由佳が負っていた傷を探す。

「な、ない…！？　ここにあった傷が消えているだ…！？」

「……………」

俺もそれを見て由佳が助かった嬉しさよりも不思議に思う気持ちが強かった。

いったい何が起こっているんだ…。

蒼い光、ヤミの失踪、由佳の意識回復……。

あり得ないことばかりが俺の身近で発生している。

これは奇跡と言えるのか…？

それとも誰かが神様みたいな力を持っていて意図的に俺達を救っているのか…？

そして何より……。

「俺はたぶんあの蒼い光を知っている」

いつ…？　どこで…？　俺も由佳みたいに死んだときか？

だがいくら考えても答えは出なかった。

「ただいまー…」

深夜十一時帰宅。

由佳はもう大丈夫そうな顔をしていたが念のため一週間の入院となった。

俺はヤミのことを知ろうとしたら今夜はゆっくりさせてと言われ明日見舞いついでに話を聞くことに。

「……………」

ヤミはいつたいどこにいつちまったんだ…。

深く考えるがわかるわけがなかった。

諦めて俺はいつもどおり玄関を開ける。

中は当然灯りは点いておらず暗い闇が漂っていた。

そいえばこなたはどうしているんだろう…。

ヤミが病院に来たからあいつもてつきり来てるかと思ったのに……。

“行つてあげて。それが私のためでもあつて、由佳ちゃんのためでもあるから……………」

「……………」

もうこなたは家に帰つては来ないのだろう。

だからヤミを送った後に病院には入らずそのまま……。

靴を脱いでリビングの電気を付ける。

冷蔵庫を開けるとかがみさんが買いだめしておいたプリンとつかさが作ったクッキーが残っていた。

俺は無心でそれを取つて食べる。

その時の味は何も分からずただパクパクと食べ進めた。

そして疲れが溜まった足でフラフラと風呂場へ向かう。

服をポイツと適当に投げ捨てタオルを用意……………してあった。

「……………」

俺タオルなんか用意してたっけ…。

過去を振り返るがそんな記憶はこれっぽっちもなかった。

「まあいつかあ……………」

考えるのも面倒だ。さつさと風呂に入つて寝よ…。

俺は素っ裸になって出陣する。

風呂場の電気が最初から点いていることに疑問を抱かずに……。

「ふえ？」

「え？」

.....。

.....。

.....。

暫し沈黙。

そして女の子の悲鳴。

「キヤアアアッ!!」

「うわあっ!!」

声に反応して慌ててドアを閉めた。

「.....ッ!？」

な、なんだ!？ 一人しかいないはずの家に誰かいたぞ!？
湯気のせいで顔は見えなかった。

だがわかる。

あれは女の子だ。

胸はつるべったんだったけど長い青髪が見えた。

「.....って青髪？」

も、もしかして…。

俺は予想が当たっているかどうかドア越しで確かめる。

「こ、こなたか？」

「.....うん」

少し遅れて返事がきた。

や、やっぱりこなただったか。でも.....。

「お前…、帰ってきてたのか…」

「だから言ったじゃん…。ずっと友達でいるって…」

「ホントに……」

「え？」

「ホントにそれでいいのか？」

「……椿君？」

「俺さ……たしかにこなたには近くにいてほしいけど結局こなたの気持ちに応えてやれない……。だったらいつそのこと俺から距離をとった方がこなたが楽なんじゃ……」

「……」

「自分は何を言っているんだろうと思う。けどこのままじゃこなたが可哀想なんじゃ」

「いいよ」

即答かつ落ち着いた口調だった。

「私はただ椿君の近くにいたい。ただそれだけで嬉しいよ」

「こなた…」

「だって好きって気持ちは変わらないんだもん」

「……ッ」

前向きなこなたに対して俺は罪悪感を覚える。

こんな真っ直ぐな強い想いを持つてるこなたを俺はフツてしまった……。

「こなた……」

「なに？」

「ごめん……」

「椿君は自分がしたこと間違ってるって思ってる？」

「……いや、間違ってるない」

「じゃあ謝らないでよ。椿君は正しいんだから」

明るい声だった。

でも少し震えた声質に聞こえたのは俺だけなのだろうか…。

「そうだな……。謝ったらダメだよな……」

言うことは他にもあるんだ…。

こいつには謝罪じゃなくて……。

「こなた、ありがとう…。」

感謝の言葉を……。

「うん」

こなたは一言で受け取った。

一滴、また一滴と涙が床に落ちる。

もうたくさん泣いたのに…。

枯れることを知らないくらい泣いたのにまだ出続けた。

俺は何を恐れていたんだ…。

こいつは言ってくれたじゃないか…。

ずっとそばにいるって…。

だったら何も心配することなんかない。

信じていれば怖いものなんか一つもないんだ……。

「なあ…こなた……」

「どしたの？」

「お前今幸せか…？」

「そついう椿君は…？」

「俺か？ 俺は……そうだな……」

「……？」

「これから始まるんだと思う。 本当の幸せは……」

この時、月は蒼い光を放った。

いろいろな悲劇を乗り越えた俺達を祝福するかのように……。

第140話 君の幸せは俺の幸せ

コンコンッ。

「由佳、入るぞー？」

「いいよー」

横型ドアとなつて入る入り口をゆっくり開ける。

その時、中から病院などによくある独特の匂いが香ってきた。

病室の中は由佳一人の個室となっており外の景色は良好で、さらに誰にも気遣いしなくていいという見るからに快適そうな場所でベッドに寝転がっているのだが、

「元気が……って聞いても無駄みたいだな」

「まーね……」

「なんか不満でもあるのか？ こんな快適で景色がいい個室部屋という素晴らしい環境に入院してるってのに」

「それがダメなの！ そもそも個室ってなによ！？ ふざけてんじゃないの！？ 朝から晩まで基本一人なんて暇で暇でしようがないったらありゃしない！ それ言ったらお医者さんなんて言い返したと思う！？ “じつと大人しくしてなさい” よ！？ そんなの私にできると思ってるの！？ 無理に決まってるじゃないのよー！ しかもこんなのが一週間も続くって冗談でも言えないよ！？ あの医者頭おかしいんじゃないの！！」

「はいはい……」

けど由佳の場合誰とでも仲良くなれる性格だから日頃はずっといろんな友達と話してたんだろうな。

今も誰かと喋りたくてストレスが溜まってるんだろ。

だからイライラオーラも今回は激しいとあらかじめ踏んでいたから
由佳の言動には驚きもしない。

俺は持ってきた花と花瓶をベッドの横にある棚に置く。

「あ、すぐ退院するんだからお花なんかいいのに」

「いいんだよ。これは別の意味も含めて持ってきたんだから」

「別の意味？」

「ヤミが帰ってくるようにってことだ」

「……………」

それを聞いた由佳はだんまりしてしまった。

やっぱりヤミに何かあったのか…。

そしてそれを話したがない由佳……。

きつと辛い事実なんだろう…。

それでも俺は知りたいんだ…。

「なあ由佳」

「……………なに？」

「ヤミのことなんだけどさ……………」

「……………うん」

由佳の表情がさらに曇る。

だが今の返答は俺が聞くことをわかっているかのようだった。
多少の罪悪感を感じながらも俺は訪う。

「教えてくれないか。ヤミがどうなったかを…」

あの時、光になってどこへ行ったのか……。

由佳はボソリと囁く。

「……………信じてくれる？」

「え？」

「……………私が今から言うこと、信じてくれる？」

「ああ、絶対に信じる」

「……………じゃあ全部話すね……………。私が見た夢の全てを……………」

由佳は表現に躓きながらも一生懸命教えてくれた。

「じゃああの時ヤミが消えたのは……」

「たぶん光と同化して私の中に入ってきて、それで私を助けにきた……」

「でもあいつは肉体を捨ててきたから帰れなくなった……」

「まあそんな感じかな……」

「……なるほどな」

俺は簡単に納得する。

しかしそれに対して由佳は意外そうに言う。

「あれ、もしかしてホントに信じてくれるの？」

「……ああ、そりゃあな」

非現実的だが今までだってそういうことを体験してきたからな。あり得ないなんて今さらだろ……。

「……実は私ね、ヤミちゃんと約束してたんだ……」

「……ああ」

最後にヤミは言っていた……。

“ずっと一緒にいるって約束したじゃんか!!”

それを俺は今でも鮮明に覚えている。

「……でも破っちゃった……」

「……」

「生きてて嬉しいはずなのに……、なんでこんなに悲しくなるんだろ……」

由佳の気持ちは痛いほどわかる……。

俺も生きてるのが悲しいって思った時があったからだ。

きつと由佳は今、ヤミのことで頭がいつぱいなのだろう…。

でもそれじゃ前に進めない。

割りきらない限り由佳は立ち止まったままだ。

だから俺は……。

「なあ由佳……」

由佳の背中を後押ししてやりたい…。

「……ヤミは消えちゃったけどさ…、ヤミの魂はまだお前の身体の中に残ってるよ……」

「え？」

「魂はいつもそこにある。だからお前は約束をちゃんと果たしてる」

「つ、椿っち……」

「お前は笑ってる。ヤミにも伝わるくらい笑顔でいたらあいつもお前と同じように笑顔になると思うから」

今の俺は言葉しかかけられない。

でもそれが由佳の力になるなら俺はそれだけで嬉しい。

「椿っち……」

「なんだよ」

「セリフ臭すぎ」

そう言つて由佳は笑いを堪えていた。

「て、てめー笑うなっ!!」

「ぷぷぷ…ごめんごめん。あまりに臭すぎてつい…」

「こ、このやろ…!!」

いい雰囲気か台無しじゃねえか…!

俺はこんなやつのためにこなたを裏切ったっていうのかよ…!

「……椿っち」

由佳は切り替えるように真面目な口調だったが俺は怒りに任せて返事は

「ああ!？」

と、少々怒り気味となる。

しかし由佳はそれに関係なく感謝を込めて言った……。
「ありがとう」

トクンツ

「……！」

不意打ちだった。

あまりに可愛い笑顔を前に俺は我を一瞬見失った。
次に気づいたのは由佳に抱きついていた時だった……。

「っ、椿っち？」

「礼を言うのは俺の方だよ……」

観覧車に乗った日に改めてわかった……。

由佳はまだ俺のことを好きでいてくれてたことを……。
それなのに俺は自分の気持ちもわからなくて本当に情けなかった……。
だから今こそ言うべきだ……。

気づけなかった恋の終止符を打つために……。

「由佳が好きだ……」

「え？」

一番伝えたいことを始めに言った……。

ずっと胸を苦しめていた鎖を外して身が軽くなる。

俺は状況が理解していない由佳にもう一度言った……。

「由佳……俺はお前が好きだ」

今なら何度でも言える。

十回でも百回でも……。

「え、な、なんで……」

「答えはすぐそばにあったんだ……。 お前とまた再開して話したり
してたらいつのまにか由佳が“友達”から“好きな人”になってた
……。 お前といえると楽しい、一緒にいると俺も元気になれた」

「で、でもこなたたちやかがみつちは……」

「……………」

俺は一呼吸置いてから言う。

「お前じゃなきゃダメなんだ」

後戻りできないように断言する。

ここまできたら俺は想いを全て吐き出すしかない。

「こなたよりもかがみさんよりもつかさよりも……………お前じゃなきゃダメなんだよ。そういう気持ちをお前は知ってるだろ。由佳が

過去にモテていたことは永森さんから聞いたことがある。

でもそれをお前は全部断ってきた。

それは今の俺みたいに“特定の人物”が好きだからだろ？」

「……………ホントに私なんかでいいの？」

「前に誰かさんが言ったよな。“椿たちなら誰を選んでも幸せになれる”って。俺はお前と幸せになりたいんだ……………」

「でも…、今になって言うけど私椿たちを幸せにする自信ないよ……？ 今以上に椿たちを幸せにする自信なんかこれっぽっちもないんだよ……？」

「大丈夫……………。俺がお前を幸せにする。そしたらお前は笑ってくれる。その笑ってる由佳を見るだけで俺は幸せになれるんだ」

「椿たち……………」

「由佳、俺と付き合ってくれ」

「……………」

由佳はわかっていると思う。この質問は由佳に対する返事だつてことを。ずっと俺に伝えてきた想いの返事だつてことを。

昔の卒業の日に告られた時は両親のことで頭がいっぱいだった。でも今は違う。

ちゃんと考えた結果、俺は由佳のことが好きって答えを出したんだ。

「……………よかった」

「由佳……？」

由佳から一筋のナミダがこぼれた。

だがそれは嬉し泣きとなって綺麗に弾けた。

「ずっと待ってた……。椿っちゃんが言ってくれるのをずっと……」

「じ、じゃあ……！」

「うん」

「……っ!!」

由佳の体をギュッと抱きしめた。

もう手放さないように……。

幸せが逃げないように力強く……。

俺達は自分の想いを証明するかのようにキスをした……。

第141話 我家に大集合！？

由佳の見舞いが終わってブラブラと街中を適当に散歩しながら家に向かう。

片手には由佳が描いた絵。

何故そんなものを持っているかというところ。

「あ、そうだ。 椿っちにプレゼントがあるの」

「プレゼント？」

最近忙しかったのにプレゼントなんか用意してたのか。

「今朝お母さんに無理言って持ってきたんだけどね」

由佳はベッドの横に置いてあるイーゼルに向かう。

今回は美術部から借りたのではなく、ちゃんと自分専用のイーゼルを持ってきたようだ。

しかしそれは布に被さっており中の絵はわからない状態だった。

「途中まで出来てて昼前に完成させたの。 私の会心の絵だよ」

「え、でもそんな大事な絵なのにもらっていいのかな…」

「いいのいいの。 元々椿っちにあげるつもりで描いたからね」

「そっか…、サンキューな。 あ、この絵見ていいの？」

俺はモザイクとなっているものを外そうとすると、

「あーダメダメ！！ まだ見ちゃダメだってば！」

由佳が俺から絵を必死に守る。

「え、なんで？」

「これは家に帰ってから見てほしいな」

「だからなんで？」

「いいから」

「……………」

とまあ少々訳のわからない部分もあったんだが、俺は由佳会心の出来らしい絵を貰った。

早く見たいという気持ちは強いんだが、ここで見たら約束破ることになっちまうから我慢するしかない…。

だがとにかく楽しみで足を動かすスピードが徐々に早くなる。

やがて見慣れた通りもすぐに通過してあつという間に我が家に着いた。

「……………」

だが玄関のドアをあけようとすると無数の笑い声が中から聞こえてきた。

「……………」

不思議に思いながらもドアノブを引いて我が家に入る。

「みんなー、ただいまー……………」

な、なんじゃこりゃ！？

病院から帰った俺は家の内装の変わりように驚いた。

「い、いったい何があったんだ…？」

いつのまにか俺の家の家がパーティーでもするかのように賑やかに飾り付けられていたのだった。

「椿君、おかえりなさい」

「帰るの遅えぞ。 あやのが心配してたじゃねえか」

「もうみさちゃん、余計なこと言わないでいいの」

「おう戻ったか桃原」

呆然とする俺を迎えたのはみゆきさん、みさお、あやのさん、梨原だった。

しかも全員パーティーグッズを手に持ってニコニコ顔だ。

「な、なんで梨原とかがここに……？」

「そんなこといいからいいから」

「ほら、中に入った入った」

梨原とみさおが気持ち悪いくらい協力して俺の背中をグイグイ押す。そして強引に連れてこられたのはリビング。

勿論そのドアも派手に改造されていた。

「一名様ご案内」 「二人がもはや正式なドアと呼んでもいいかわからないほど進化した扉を開ける。

その中を見て俺の顔には驚愕以外なにもなかった。

「……なになっ！」

見るからに人、人、人！

普段泊まっているメンバーの倍はいた。

俺は思わず叫んだ。

「なんじゃこりやああー！！！！！！？」

なんでこんな人があるんだよ！？

ここ俺の家だよな！？

お隣の佐藤さん家じゃないよな！？

「やーやー、椿君久しぶりだね」

「成美さ……って酒くさ！ なに昼間っから飲んでるんスか！？」

「細かいことは気にしない気にしない ヒック……」

「そっやぞ桃原あ」

「く、黒井先生まで……！？」

やっと出番もらえたのか……。

存在感が最近薄くなってきたから気づかなかった。

「ええかあ桃原あ。人生はなたった一度きりなんやから勉強なんかしらんと遊ばんかい。ウチが若い頃は（以下略）」
な、なんかいきなり語り出したぞ…。

こりや相当酔ってるな…。

「こら聞いとんかい田中あ！！」

「桃原です」

「んでえどこまで言うたかいな…ってビールなくなってもたやないかあー、店長おかわりい」

「……………」

やつぱり前と同じで黒井先生お酒飲むと酷い顔になるなあ……。

まあそこは個性だからそのうち彼氏はできると思うんだけど……。

「酒ゝ酒えゝヒック。店長おはよーせんかー」

でもこんなじゃ彼氏できても長くはもたないんじゃないだろうか……。

俺はコーラでも飲んで落ち着こうと覚束無い足で台所に行く。

すると居てはならない人物がBIGに存在していた。

「まかせろ！俺が誠意を込めて先生殿にビールを捧げようではないか！！」

「なんであんたがいるんだよ！」

ビシッとツツコミを入れるが軽く流される。

そういえばさつき黒井先生が言ってた店長と兄沢命斗のことだったのか。

「奴を倒したいならこのDVDにヒントが隠されている！それが知りたいのなら買え！！買ってしまえ！！」

「いや、倒す必要ないから！あと営業はココでしないで！」

「落ち着け少年！！他にもDVDが欲しいならココに……うぶっ！オオエッ！！くそさつき飲んだウォッカが効いて……オエオオエエッ！！」

「うわああバカー！！こんなとこで吐かないでくださいよー！」

「くそ…無念だ…！　だが俺はここで死に花を咲かすのも悪くない
と思っっている…！」

「もう帰れええー！！」

こんなところで倒れられても俺が困る！

俺は空いているソファ―に店長を文字通りポイツと捨てる。

よし、あとは自分で生きていくだろう。

それよりもコーラだ、コーラ。

俺は冷蔵庫の飲み物が置いてあるゾーンを覗くが、

「……あれ？」

いつもここに買いだめしておいたコーラがない？

どこか別の場所に置いたか念入りに探すが見当たらない。

「おかしいな…。確かにここに……」

探索していると後ろからかがみさんとかさが声をかけてくる。

「はい、椿君」

かがみさんの両手にはコーラが。

「おー、サンキュー。でもなんでかがみさんが？」

「あんたが私のプリン勝手に食べたからでしょうが…！」

「ご、ごめんなさい……」

一応謝っておくが実際のところ記憶が曖昧で微かにしか覚えてない。
頭の中では“あー…、そういえば食ったような気がしないでもない
な…”っというくらい忘れていた。

「まあいいじゃんかがみ。　椿君はかがみのダイエットに協力しよ
うとしてくれたんだしさ」

プニプニ。

こなたがかがみさんのお腹をつつきながら言った。

「う、うるさいこなた…！」

「うおおっ」

二人は狭くなったりリビングで鬼ごっこをやりだした。
それを黙って見ていた俺につかさが伝える。

「椿君、ああ見えてお姉ちゃんも椿君といれて嬉しいんだよ」

「……………」

そうなのかな…。

かがみさんが素直じゃないのは知ってるけどいまいちわからない…。

「それに私もみんなといられて楽しい」

「………そっか、そうだよな」

つかさの無邪気な笑顔が難しく考えていた俺の頭を消してくれた。
かがみさんから受け取ったコーラを満喫していると、

「椿君ー、ちよつと来てー」

「ん？」

一年生組に呼ばれたのでテーブルに向かう。

「なに？」

「みんなで作ったから食べてみて」

「こう見えて苦労したんスよ」

「ホントにタイヘンだったんデスカラ。 ミナミがファインプレーしなかったらアブなかったネ」

「………いえ、そんな………」

なんだかよくわからんが大変だったらしい。

ゆたかの皿にはホクホクアップルパイの一口サイズがあり、それを素手でパクツといただく。

「ど、どうかな？」

サクサクに甘いリンゴの香り、そしてイイ感じの熱さ加減。

これは……。

「うん、美味い！」

そう言うのと嬉しそうに高らかにガッツポーズ。

「「「~~~~っ！！ やったああー！！」」」

「………や、やったー……」

ガッツポーズはいいけどみなみちゃんは無理矢理させられて顔真っ赤になってる。

まあそこが可愛い……。

「おはらつきー　今日は桃原家のパーティーに突撃してまーす！

！」

「ん？」

マイクを持って頭をツインドリルにしている変態らしき格好をした女の子に目がいく。

「あれ、確かあの子って……」

白石と一緒にいた小神あきらじゃなかったっけ…。

「スッゴい料理の数々ですねあきら様！　ちよっと一口……うまい
！！」

「ちよつとあんた！！　なに私を差し置いて先に食ってるのよ！！」

「ヒイイッ！！」

相変わらずの主従関係だな……。

小神さんが白石を蹴ったりしていると、

「おいてめえら……。　なに人様の家で暴れてんだ？」

いつかの番長登場。

この人の迫力も変わってないなあ……。

「ゴ、ゴットウーザ様！？」

白石と小神さんは化け物を見たような顔になる。

二人のハモった声と同時にゴットウーザ様は手に持っている自前の竹刀を叩きつけそして……。

「仲良くやりやがれこらあ！！」

「は、はいいいいっ！！」

三人は台風のように過ぎ去っていく。

いったい何しに来たんだか……。

「やれやれですね」

「え？」

後ろを振り返ると由佳と同じ聖フィオリナ学院に通っている永森さんがいた。

いつもの仏頂面にツインテール、そして普通の私服を着こなしているてなかなかの可愛らしさだ。

「お久しぶりです」

「え？ 久しぶりって言っても前に俺と会ったんじゃ……」

「あなたには言ってます。読者に言っているんです」

「ああそう……」

「だったらこっち向いて言うなよ……」

「無駄に恥かいたじゃないか……」

「私、初めてクッキー焼いてきたんですけど一ついかがですか？」

「お、ありがとう」

星形の形をしたチョコクッキーを一口でいただく。

「どうですか？」

「これめっちゃめっちゃ美味しいよ！」

「あれ？ ホントですか？」

「ああ！ 初めて作ったとは思えない！」

「血の味とかしないんですか？」

「ぶーっ……！！！」

「ゲホッゲホッ！！」

「い、今なんて言った！？」

「いえ冗談です」

「じ、冗談って……」

永森さんの冗談は本気にしか聞こえてこないよ……。

「それでは私はこれで。あ、一つ言い忘れてました」

「……？」

俺は曖昧な気分でいると永森さんは悪戯な笑みで、

「どうか由佳先輩とお幸せに」

「ななっ！？」

「よ、余計なお世話だっ！」

「クス……。それでは失礼」

そう言い残して永森さんは八坂さんの元に行った。

このあとも謎のパーティーは長く続き、身がもたない俺は自分の部屋に脱出した。

「ふ……」

なんか疲れた…。

重いドアを前に押して一番最初に向かったのはこなたやかがみさんが寝たことがある俺のベッド。

俺はそれに勢いよくダイブした。

かなり体力的にも精神的にも辛かったので服も着替えずベッドに横たわる。

つまりだらしなさMAXである。

「……………」

一階はまだ騒いでいるらしくみんなの笑い声等が聞こえてくる。

今までこんな賑やかになったことなんてなかった。

中二になって母さんと父さんが死んでからいつも一人でいて無関心に物事を見てきた。

変わらない日常に満足して無駄に時間を過ごしてきた。

高校もただ近いから……。それだけを理由に一年、二年を終えてしまつて……。

三年もまた同じことの繰り返しかと思つていた。だけど……。

「こなたに出逢つた…」

別に後悔なんかしてない。

むしろ今となつては感謝している。

あいつがいなかったら今の俺は存在していない。
あいつらと出逢う前の自分と今の自分。

どっちがいいかなんて考えなくてもわかる……。

「……どうせなら……、もっと早くあいつらに逢いたかった……」
でも過ぎてしまったものはしょうがない。

しんみりするのもなんだし由佳からもらった絵でも見るか。

俺は由佳から貰った一枚の絵を取り出した。

だがその絵を見た瞬間、心がざわついた。

「……………」

思わず見入ってしまう……。

あまりの美しさに……。

そして繊細かつ豪快なタッチ……。

それはプロが描いたんじゃないかと思わせるほどのレベルだった。

「あいつ……こんなに上手かったのか……」

素人でもわかる。

この絵がどれほどのものか。

驚愕していた俺は絵を綺麗な額縁に入れて自分の部屋に飾った。

ピタリと部屋のイメージにベストマッチする。

俺はジッと絵を見つめた……。

「……………みんなが笑ってるんだな」

俺もこなたもかがみさんもつかさもみゆきさんも他のみんなも……。

そしてヤミも……。

今を全力で楽しんで心から笑ってる……。

これが由佳の夢か……。

「凄すぎるよお前は……………」

目の前の絵はまさに今の俺達を描いていた……。

最終話　ありがとな

チュンチュン…。

「……………ん、朝…？」

窓の外は明るく小鳥がパタパタと飛んでいた。
俺は大きなあくびを一つしたあとに頭をかく。

「……………いつのまにか寝ちまつたのか」

参ったな…。　昨日はせつかくのパーティーだったのに家主が寝てたなんて…………。

てかそもそもなんのパーティーだったんだろ…。

「まあいいや、とりあえず飯だな」

パーティーでもコーラや一口サイズのアップルパイ以外何も口にしていなかったので腹ペコだった。

階段を早々に下りてリビングに行く。

そこにはいつもみたいみんなが座って待っているかと思っていた…………。

でも目の前にある光景はその“いつも”を一瞬で裏切った…………。

「……………え？」

な、なんでだ…？

なんで揃いも揃っていないんだよ…。

まだ起きてないのか…？

時計は七時二十分を表していた。普通ならかがみさんやみなみちゃん、ゆたかがこの椅子に座って食事をしているはずだ。

普段はつかさも眠い目を擦りながら歯を磨いていて、こなたやみさおはパジャマ姿で、

「「だる〜……」」

とたった今起きてくるのが日常だ。
だがそんなほのぼのとした空気はなく、今の俺には焦りしかなかった。

「こ、こなた…！？ みんな…！？」

慌てて家中探すがやはりどこにもいない。

アホ毛の少女もツインテールも他のみんなも誰一人として影すら残していなかった。

みんなどこに行っちまったんだよ……。

部屋に戻ってベッドに寝転がる。

もう訳がわかんねえ…。

家の周りは隈無く探した…。

だがそこには過去の想い出しか映ってはいなかった……。

「……………」

みんなで食事したりビング……。

“今日はカレーか”

“うん。お姉ちゃんが作ったんだけど椿君カレー大丈夫？”

“ああ、カレーは好きだぞ”

“よかったあ。お姉ちゃん張り切ってたもんねー”

“ちよっつかさ！ 余計なこと言わない！”

“素直じゃないかがみ萌え〜”

“う、うるさい！ い、いいから早く食べるわよ！”

ゆたかやみなみちゃんと一緒に皿洗いした台所……。

“みにまむテンポで歩いてー”

“なんだか楽しそうだな” “ふえっ!?”

“…ごめんなさい”

“何が?”

“…あのゲーム。初心者の方が桃原君に……”

“別にいいよ。俺が弱かったただだから気にしないで”

「くそっ……」

この家は想い出が積みもりすぎてる……。

だからこそ逆に辛い……。

苛立ちが増して体を反転させる。

するとふと窓から蒼い光が見えた。

「ん……?」

今のつてまさか……。

バタバタと玄関を出て道端に顔を出す。

しかしそこにあつたのは蒼い光ではなく……。

「み、みんな……」

「つ、椿君、起きてたんだ……」

こなたがひんやりした空気をつなぎ止めるようにサツと言葉を出す。

「みんな……、どうして……」

「え」と……、実はもう一度椿の寝顔見ようかなって思ってたさ」

みさおが笑いながら言う。

だがその笑顔の奥は笑っていなかった……。

「そうじゃない！　俺が聞きたいのはそんなことじゃない……！」

「つ、椿君……」

つかさは普段とは違い真面目な顔をしている。

そしてそれはみんなも同じだった。

「なんでみんなこの家を出てくんだよ！？　また一緒に生活するっ

てかがみさん言ったじゃんか……！」

「……うん」

微弱な反応に俺はさらに重ねていく。

「意味わかんねえよ！！　みんな楽しくなかったのかよ！？　俺達

が一緒に過ごした時間をもう味わいたくねえのかよ！？」

俺の質問にみなみちゃんが答える。

「……確かに楽しかったです。毎日が充実してて手放したくない

くらいに……」

「だったらなんで！？　ちゃんと説明してくれよ……！」

するとこなたは言いたくないはずの事を言う。

「だって椿君は……、由佳ちゃんの彼氏じゃなか……」

そうだ……。俺は昨日から由佳の彼氏だ……。

でも……！

「それとこれとはなんも関係がないじゃないか……！」

今度はゆたかが口を開いた。

「……あるよ。だって椿君彼女いるのに私たちと一緒にいたら由

佳ちゃんきつと怒るよ……？」

「う……」

言われてみればそうだ…。

彼女がいるのに他の女の子と寝泊まりなんて最悪だ…。

けど俺はそう簡単に諦められるほど器用じゃない…！

「じ、じゃあ由佳に頼んでみるから！ それならいいだろ！？」

しかしみんなは首を縦には振らなかった。

こ、ここまで言ってもやっぱり無駄なのか…。

つかさがリボンを風に揺らしながら言った。

「椿君も分かっているはずだよ…。 私たちの気持ちを変わること
はないって…」

「……………」

つかさの言う通りだ。

そんなことしたってみんなは俺の家には戻らないってことぐらいわ
かってるよ…。

けど納得できなかった…。

なんとかしたかったんだ…。

楽しかった時間をこれからも続いていられるようにしたかった…。

「椿君の気持ちは分かります…。 でも仕方ないんです。 みんな
別々になることが本来のありべき状態なんですから……………」

「みゆきさん……………」

あるべき形…。

そうさせたのは俺が由佳を選んできましたから…。

みんなという幸せより由佳という幸せを選んできましたから…………。

「椿、後悔だけはすんなよ！ 自分が選んだ道なんだから最後まで
で突っ走れよ！」

「みさお……………」

「そうツスよ。 悩んでる姿なんて椿先輩には似合わないツス」

「ここにいないミンナもきつとツバキのいくミチをオウエンしてる
ネ！」

「ひより………… パティ……………」

「今さら迷うなんて私が許しませんよ」

「永森さん……」

「桃園あ！！ 不純異性交遊は禁止されとるけどウチがそんな規則から守ったるから安心せー！」

「私も得意の銃で守ってあげるよー」

「黒井先生…… 成美さん……！」

みんなが俺に勇気をくれて、そして背中を押してくれる…。

俺の信じた道を光で照らしてくれる…。

それは心強い光だった…。

「椿君」

「かがみさん……」

「二ヶ月間の幸せをありがとう」

「……え？」

「今までホントに楽しかった。 だからその……お礼よ」

かがみさんは照れながらも言う。

だが俺はかがみさんの目から反らして小さく呟く。

「……それはこっちの台詞だよ」

“ありがとう”って感謝の言葉は俺が言わなきゃダメだろうが…。

なのになんてかがみさんが言うんだよ…。

たくさんの幸せをもらったのは俺の方じゃねえか…。

情けなかった俺が変わったのもみんながいてくれたからじゃないか…。

何もない暗い日々を明るくしてくれたのもみんなが俺の手を繋いでくれたからじゃないかよ…！

我慢できずに涙が流れる。

ポツポツと透明の滴が落ちていった。

その時こなたが一步前に出てくる。

「私さ、正直椿君のこと地上最強のヘタレだと思ってた…」

「…え？」

「みんなが泊まりに来ることになって反論してたけど結局流されて止めきれなかったから“あ、椿君ってギャルゲーに出てくる主人公だ”って思った…」

「……………」

「でもゆうちゃんを助けたり…、私の記憶を取り戻すために命捨てたり…、つかさのために停学になったり……。自分のことなんかいつも後回しにして行動する……。そんな優しさに私は恋した…」

「こ、こなた………」

「椿君に逢えてよかった……。こんな私でも本当の恋ができたから……………」

「……………っ」

「私、絶対に忘れないよ……！　椿君と一緒にいた時間、絶対に忘れないよ……！………」

……………辛い。

「椿君と一緒に食べたご飯忘れない……！！………」

……………寂しい。

「椿君と一緒に話したことも忘れない……！！………」

……切ない。

「椿君からの誕生日プレゼントのことも忘れない……!!」

……悲しい。

「私たちは……ずっとずっと一緒だよ……!!」

でも俺の心はそれを凌駕する幸せがある……!

我慢できずに涙が流れる。

ポツポツと透明の滴が落ちていった。

「なんだよ……」

お前等だけ言いたいこと言いやがって……。

感謝してるのは俺だってのに……。

「みんな……」

余計な言葉は必要ない……。

ただ一言をみんなに伝える……。

「今まで……ありがとう……!!!!」

俺達の夢の時間はここで終わった……。

みんながそれぞれ家に帰った後、俺は一人で家に入った。
いつもと全く同じ家なのにどこか違う。

静かで無駄に広くてなんか寂しい。

でもこれがみゆきさんが言っていた本来のあるべき形なんだな…。
二階にあがってもやはり階段が軋む音しか響かない。辛い気持ちが
俺を押し潰しにかかる。

「みんな……」

会いたい……。

話したい……。

またみんなで暮らしたい……。

でも前に進まなくちゃいけない……。

いつまでも女々しい気持ちでいたらみんなが覚悟して決めた想いを
無駄にしてしまう……。

“私たちは……ずっとずっと一緒だよ……!!”

「……わかってるよ」

俺達に別れなんてない……。

俺達が築いた時間は思い出と共にココにある……。

俺は由佳が描いた絵に向き合った。

ありがとう……。

俺はみんなと出逢えて本当によかった……。

「こなた……」

“私の初恋はもう終わったんだよ……”

「かがみさん……」

“椿君がいない世界なんて私は認めないっ”

「つかさ……」

“大丈夫……もう泣かないよ……”

「みゆきさん……」

“それ以上言ったら私が怒りますよ……”

「ゆたか……」

“私はみんなにとっていない存在なんです……”

「みなみちゃん……」

“つかさ先輩の笑顔を取り戻してください”

「みさお……」

“背景から卒業できたかな……”

「あやのさん……」

“椿君優しいから……”

「パティ……」

“イマのツバキはクライネ”

「ひより……」

“私の夢はこれで消えちゃうんだ……”

「黒井先生……」

“ 本当のお前が楽しんどるやろな……、友達と過ごす今の時間を…… ”

「 成美さん…… 」

“ お姉さんにドーンと任せなさい！ ”

「 店長…… 」

“ あ、あれは伝説の少女Aではないか！ ”

「 梨原…… 」

“ 俺は夢を実現させてお前を待ち続けるからな ”

「白石……」

“あきら様はどうかクビにしないでください”

「小神さん……」

“白石をもし許さないのなら私はアイドルを辞めます！”

「ゴットウーザ様……」

“あんたはバカみたいにお人好しだな”

「そうじろつさん……」

“世界で一番かなたを愛してる……”

「永森さん……」

“みんなはさ、あんたのこと笑ってるけど私は好きよ。そういう面白いところ……”

「ヤミ……」

“俺はずっとココにいる”

「由佳……」

“椿っち、ありがとう……”

無色だった我が家にみんなの想いが集まる……。

みんなと過ごした僅かな時間……。

それは神様がくれた最高の幸せだった……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9069d/>

らき すた 我が家に大集合!?

2011年4月22日19時49分発行